

東方穿孔羊

ほりごたつ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

勘違いから贄に捧げられた可哀想な一匹の黒い羊アイギスIIシーカー

彼女が幻想郷に辿り着き、その後幻想郷に慣れ暮らしていくだけのお話

出典元：『上海アリス幻楽団』

原作：『東方Project』

上記作品の二次創作となります

二次創作ですので原作とは異なる独自の設定・解釈がございませう、  
ご注意を

# 目次

くプロローグく

序章 羊な店主 | 1

第一話 元気すぎた赤子 | 9

第二話 吸血鬼の親子 | 21

第三話 悪魔な妹 | 29

第四話 商い中の黒羊 | 44

第五話 来訪者 | 54

第六話 別件依頼 | 67

第七話 認める時 | 78

く東へく

第八話 西方の悪魔と東方の妖かし | 89

第九話 訪れた先で | 100

第十話 新たな依頼 | 109

第十一話 新たな出会い | 119

第十二話 それぞれの一幕 | 133

く招かれざる客の来訪く | 吸血鬼異変 |

第十三話 始まり | 149

第十四話 守護する者、墮とす者 | 158

第十五話 断つ者、守る者 | 171

第十六話 三者三様 | 182

第十七話 前門の狐、後門の羊、鬼門の蝙蝠 | 191

第十八話 歪な妹 | 201

第十九話 争う者、企む者、そして穿つ者 | 211

第二十話 告げる者、聞く者、そして笑む者 | 228

く中休み 休暇先は地の底でく

第二十一話 染まる色

第二十二話 観光旅行

第二十三話 恐るべき穴の怪、暗い洞窟の明るい糸

第二十四話 騒ぎの理由はその匂い

第二十五話 魅せる怪力乱神

第二十六話 語り合う怪力乱神

第二十七話 怪力乱神を語らず、水滴りて石を穿つ

第二十八話 渡りを付けるは川渡し

幕間 書物に記される悪魔く幻想郷縁起く

く出会いを交わすく

第二十九話 研ぐ庭師

第三十話 増える月夜

第三十一話 気分新たに

第三十二話 始動前

く広がる赤い霧く — 紅霧異変 —

第三十三話 動き始める者達

第三十四話 動きたい蝙蝠と動かない大図書館

第三十五話 籠から外れる

第三十六話 稼ぐ者達

第三十七話 見られたい者達

第三十八話 見る者達

第三十九話 解決する者達

第四十話 騒ぎの後で

第四十一話 出る姉、待つ妹

463 454 447 437 430 419 412 404 396 385 372 354 345 337 326 313 299 289 278 265 256 242

く春を想うく

第四十二話 春を詠う

第四十三話 開花を惟う

第四十四話 座して待ち侘び、立ち奪う

第四十五話 終わらない冬、続く宴

第四十六話 少女起動中

第四十七話 風が抜ければ、桶屋が売りつける

第四十八話 地底の売りを捌く商人

第四十九話 燃ゆる地に訪れるは

第五十話 火中に敷く境界線

第五十一話 優美に散らせ、冥惜しみ月

閑話 付き従う者の集い

第五十二話 隠者舞う月夜

く営業活動に逸るく

第五十三話 茶を楽しむ

第五十四話 ご鼻屑先へのご機嫌伺い

第五十五話 立場を現す

第五十六話 幻視する月夜

第五十七話 蠢々蹴月

第五十八話 もう歌は聞かない

第五十九話 奇想曲に惹かれ

第六十話 吠える孤独な獣、忌避すべき相手と出会う

第六十一話 囚われた兎

第六十二話 狂気の瞳に宿すもの

第六十三話 求め彷徨う旅人 く上く

710 700 688 676 661 650 639 629 618 600 587 576 568 552 540 531 523 513 505 495 487 480 472

第六十四話	求め彷徨う旅人	く中く	723
第六十五話	求め彷徨う旅人	く下く	736
	出張する桶屋	く	
第六十六話	悪魔、召喚される	――	749
第六十七話	悪魔が見る少女の現風景	――	759
第六十八話	神、錆びた戦場にて	――	770
第六十九話	あゝ古い神よ、新古の地にて	――	782
第七十話	顕現するオカルティズム	――	792
第七十一話	神は悩みの風を吹かす	――	814
第七十二話	明け始める神秘	――	827
第七十三話	妖羊跋扈	――	850
第七十四話	ポジティブフェイス	――	863

## くプロローグく

### 序章 羊な店主

深い霧かかる宵の口に、コツコツ。足音を立てて鳴らす者が一人。綺麗に敷き詰められた石畳の道を黒いハイヒールで歩く者。

固い偶蹄目の蹄で歩いているような、乾いた音をハイヒールと石畳から鳴らして、夜を迎え始めた町の外れを歩いている一人の女がいた。

細身の黒いパンツスーツを身に纏い、赤地に黒のタツタソールチエック柄の長袖Yシャツを着こなして、細めのネクタイまでも黒を指し、全身真っ黒と言える女。夜の闇に紛れるような格好で軽快に歩いているが時たま立ち止まり、後方を気にしているような仕草を見せている。

立ち止まる際には右手で握った、持ち手の部分が捻れた象の牙のような誂えになっている愛用のスコップを石畳に穿ち、地に突き立てて、霧の奥深くにある真っ赤なお屋敷を焦点の定まらないような赤い瞳で見返していた。

「視線を感じますが、女の夜歩きを見つめるなど……種族としての性分でしょうね、致し方ないのでしよう」

立ち止まり振り向いては、クルクルと癖の強い肩にかからなくらいの長さの黒髪を掻きあげてみたり、頭の両サイドから生やした大きな巻角を撫でてみたりしている黒い女。

象牙色でエスカルゴの殻のような巻きのある、彼女の象徴である羊の巻角を撫でて独り言を呟く。遠くから感じるような彼女の周囲で烟る霧そのものから感じられるような、曖昧だが慣れ親しんだ妖かしの視線を感じながら少しずつ目的地へと歩みを進めていた。

コツコツ鳴らしていた足を止めたのは一軒の店舗前。

普通の人間でも訪れる事が出来る、町の中心部からそれほど遠くない辺りに構えているここは彼女の店だ。細身の彼女には重たく感じられそうな厚い一枚板の正面扉の取っ手に手をかける。その扉のド

アノブに掛けられた分厚い木の板、描かれた『シーカーズ・コフィン』という文字から看板だろうか、ソレをCLOSEDからOPENへとひっくり返して、無人の店舗内へと歩んでいった。

店内は暗く、昼間でも灯りを灯さないと奥まで見えないような造りで、彼女のように慣れた者や夜目の利くような者でないと灯りなしには過ごせないような店だった。

灯りがなくとも彼女は慣れきっていて支障はないが、開店した事を外に知らせるように天上から下がった取り外し可能な小さいランタンに火を入れると、揺れる灯りが店内を薄暗く照らし始める。

ランタンの淡い光に照らされて少しだけ明るく見える彼女の褐色の肌、髪も肌も身に着ける衣服も黒ばかりだが致し方がない。彼女は黒羊から成り果てた妖かし、住まう地域の伝承に宛てがうなら悪魔と呼べる種族なのだから。

少し話すと彼女は元々唯の黒羊。野生の個体ではなく人に家畜として飼われていた唯の羊だったのだが、大昔にある儀式に捧げられてから悪魔として身を成してそのまま長く過ごしているらしい。人が文化を持ち、発展し始めた今では『黒ミサ』や『サバト』と呼ばれようになった人間の儀式、その儀式に使われる贄として選ばれ、悪魔に捧げられて以来今のような姿となっているようだ。

今の儀式なら山羊を贄とするのが常だが、彼女が生まれ羊として生きていた時代には確立された儀式の様相が決まっておらず、グルグルと巻いた角と体毛の黒が禍々しい、悪魔らしく見えるという些細な理由だけで彼女が選ばれた。よくわからないままに儀式で捧げられて首を落とされ棺に収められた彼女、羊の悪魔が商売などしているのもそんな儀式の流れがあった事が関係しているらしい。開店準備をし始め、スーツの上着を脱いで入り口横のコートハンガーに掛けて、三つ揃えのベスト姿となった羊の女性、今でこそ穏やかに暮らしているが大昔は人を襲い荒れていた頃もあったと少しだけ過去を話した事があった。

開店した目印であるランタンに火を入れてすぐ、重たい扉がギイッと鳴る、開店したての彼女の店を訪れた夜のお客様がいるようだ。店



主が扉に目を向けると、先ほど霧に成り視線を寄越していた者と同一の魔力の流れを感じさせる男が一人入り口を抜け姿を見せる。

今夜一人目のお客様、そして顔つきや雰囲気から今宵一人目で今晚最後の商談を語る事になるだろうそのお客様をもてなそうと、カウンターに備えられた椅子を引いて促す店主。

訪れた背の高いお客様が身につけていたハットをコートハンガーに掛けて優雅に腰掛けた。それから慣れた仕草で腰を据えると軽く足を組み、両手も合わせて、纏う物を変える。

訪れた男が話す姿勢を見せると、迎えた彼女もカウンター越しに座り見合う。妙齢の女性にしては背の高い彼女よりも頭一つ大きな容姿淡麗な青年と目が合うと、丁寧な挨拶の後に商談が始まった。

「これはこれは坊ちやま、こんな早い時間からご来店とは。何かお急ぎですか？」

「いい加減坊ちやまはやめてくれ、今は私が当主なのだ。そろそろ覚えてもらいたいものだが」

店舗の奥、裏庭の材木置場と繋がる辺りを見ながら坊ちやまはやめてくれと口にする背の高い男。人間であれば一瞬で魅了される美貌と強大な魔力を見に宿す美丈夫が、羽織るマントが床に触れても気にせず椅子に腰掛けて、女に対し今は私が当主だと語る。

この男こそ遠くに見える紅いお屋敷の現当主であった、彼がわざわざこの店に来るのは稀だ。普段であれば店主である彼女を呼び出して屋敷で話すのだが訪れる場合もあるにはあった、それは大事な案件を抱えている時、自ら姿を見せる際には必ず理由があり、店主に正式な仕事の依頼をしようとする日は当主自ら来訪していた。今晚もそういう理由で訪れたのだろう。

「そのように仰られましたも、ヨチヨチ歩きの際にはおしめを替えた事もあるのですよ？ 私や先代の後についてヨタヨタと歩いていたイメージが強くて、中々」

「父上は既に亡くなったのだ、それに私も直に親となる。いつまでも幼子扱いは控えていただきたいのだよ、アイギスⅡシーカー」

苦笑する美丈夫がアイギスⅡシーカーと呼んだ者。

羊の悪魔がこのお話の主人公であり、この店舗の女主人である。

穏やかに語りつつ、開店準備のために棚や引き出しから鋏やナイフに裁縫用の針、先の曲がった鉤棒や天然炭酸ナトリウム等趣味の一貫も含めた仕事道具を店舗のカウンターに並べ始めたアイギスだが、子が生まれると聞きカウンターから坊ちやまと呼んだ者へと視線を移した。僅かな困り顔を見せて話す美丈夫の口元で目立つ牙を眺め、淑やかに笑みながら、子の生誕を祝福し始めた。

「左様ですか、それはそれはおめでたい。いつ頃に？」

「後一月もすれば臨月となるだろう」

「……なるほど、それで私の元へ早い時間から訪れたと。生まれる前から子煩悩なのは先代に似られましたね、良い事です。親になるというのならもう坊ちやまとはお呼び出来ませんな、スカーレット卿」

スカーレット卿と呼ばれると背筋を伸ばす美男子。彼こそが亡くなられた先代から家督を継いだ男、遠くに見える紅いお屋敷『紅魔館』を収めるこの地の夜を統べる王、吸血鬼の長とも呼べる程の大妖怪である。

そんな彼を気安く坊ちやまなどと呼ぶ厚顔無礼なアイギスだがこれにも理由があった。彼、スカーレット卿が幼い頃より身を預けている棺桶を逃えたのは他ならぬアイギスだからである。先代が全盛期を迎える前から付き合ひのある棺桶職人で羊の悪魔アイギスⅡシーカー、スカーレット卿が物心がつく前より存在し、齢数千年だと本人は言っているが、詳しい所は話さないのが彼女という悪魔であった。「言うまでもないのだろうが、一つ逃えては戴けないだろうか？」

「スカーレット卿、お客様が一商人に媚びへつらつてはなりません。紅魔館の主として不遜にお話しくさいます」

青みがかったヴァンパイアの銀髪がランタンの灯りで輝き美しさを増している。

そうして穏やかな表情のままアイギスに仕事の依頼をするが、頼むのではなく申し付けると言い返された。『紅魔館』というその名前だけでもこの周辺一帯を畏怖させる化け物の巣窟、その屋敷の主として、誰が相手でもそれらしい姿勢を示せというアイギスからの小さな

お節介である。

「……私から言い出したのにこれではかたなしか。ではアイギス、子の為の棺、全霊を持って誂えよ」

「畏まりましたでございます、サイズは貴方様の幼き頃と変わらずで宜しいですね？ 貴方様のお子なら育つまで千年はかかるのでしようし」

組んだ手に少し力を込めて尊大に命を下す夜の王。大袈裟な態度で注文した彼に対して淑やかな笑みを変えず承るアイギス。

羊の浮かべる笑みの裏には過去の事、スカートレット卿の棺を誂えよと申してきた先代の姿を思い描いているようで、思い出を懐かしみながら優しく笑んでいた。

そんなアイギスの笑みを見ても不遜な態度を変えないスカートレット卿だったがしばらくすると、余計な事は早く忘れてくれと、聞き取れないくらいの声で漏らしてしまう。

「たどたどしい足取りで私の後を追ってくる愛らしいお姿を忘れる事など出来ませぬ。それに、椅子を引かれ促されて素直に座ってしまうようではまだまだ」

「もてなしを無碍にするのは——」

「マントを引きずったまま座るなど紳士とは言えませぬよ？ コートハンガーもあるのですから……身形よりも御子の事で頭がいつぱいだというのは素晴らしい事だとは思いますが、今後は身形や態度も気になされた方が宜しいかと」

普段であれば礼節を重んじる吸血鬼で、椅子を引かれたとしてもマントを羽織ったまま腰掛けてしまうような事のないスカートレット卿だったが、今回は余程嬉しいらしく身形などは後回しになってしまったようだ。

幼い頃から互いに知っていて、何かの祝い事や棺の新調の際には館に姿を見せていたアイギス。彼女に対し、この地の夜を治める偉大な吸血鬼といえども、ただの商人としてよりも縁遠く年の離れた身内といった雰囲気を感じているのだろう。

嫌味な注意をされて訝しげな表情でアイギスを見つめるご当主様

だったが言い返しはしないようだ、ここで言い返したところで他の事、幼少時代にアイギスに対して行った可愛い悪戯を掘り返される運命でも見えたのか、それが嫌なのか、わからないが強くは出ない。

「うゝむう、アイギスの前だといつまでも幼子だろうか？ これでは妻にも子にも示しがつきそうにない」

「これから示せるようになれば宜しいのですよ、先代も貴方様が生まれるとわかった時には慌てておりました。それこそマントもハットも外さぬほどに」

淑女のような笑みを絶やさずに紅魔館の当主からコートハンガーへと赤い瞳を揺らしていくアイギス、父よりは冷静なようだと言いつつアイギスの視線にあるハットを見つめて呟くスカーレット卿。

先代は先代、貴方様は貴方様なのだから、貴方様として子や妻に誇れる主におなりなさいと、弱気なことを呟くスカーレット卿に老婆心を見せるアイギスだった。

く少女製作中く

時は流れて、紅魔館の主がアイギスの店を訪れてから暫しの夜を超えた頃、その真夜中。

ばたばたと騒がしい紅魔館にアイギスの姿があった。吸血鬼に仕える従者が走る以上の早さで歩き回る屋敷の中で一人テーブルについて、優雅にブランデーを楽しみ賑やかな産声はまだかと楽しみに待っているようだ。

命という名の依頼で作り上げた棺は十日ほど前に納品していて既に屋敷の中にある。ヨーロッパパイチイという固めの木材を厚く贅沢に使い周囲を紅く染め光沢が出るまで磨きあげた小さな棺、依頼をしてきた当主が幼い頃に使っていたように似せて作ったが、中は少し違っていた。現当主は安眠できるように落ち着いた黒のベルベットで仕立て上げたのだが、今回仕立てあげたのは紅いベルベットで仕立て上げた、内も外も真っ赤な物だった。

納品時にはさすがに派手だとクレームを付けられたようだが、名を表す赤、スカーレットを気に入らない事はないだろうと申し開きを述べると、娘なら赤でも良いかと納得していた。

そんなお屋敷の主様も数時間前まではアイギスの視界の先、スカレット卿の奥方様が詰めている寝所の前を行ったり来たりしていたが、少し前からその当主も寝所に入ったまま出てこなくなっていた。真祖のノスフェラトウが出産に立ち会うなどあまりない事だったが、先代はもつと慌てていて生まれた子供以上に騒いで喜んでいたなと昔を思い出していると、赤子の泣く声が紅いお屋敷全体に響く。寝所の奥からよくやったという男性の声と穏やかだが少し疲労感のある女性の声、出産を受け持っていた従者達が忙しそうに動く音が聞こえる。

「無事に生まれたのならなにより。おめでとうございます、坊ちやま」騒ぎが聞こえると誰にも聞こえない声量で、手にするブランデーグラスに祝辞を述べてグラスを小さく掲げた。赤みがかつた琥珀色のアルコールを緩く回して少し含み、慌ただしい屋敷の中で一人落ち着き払うアイギス。しばらくそのまま過ごして慌ただしさが落ち着いた頃、寝所から薄いピンクのお包みに包まれた何かを大事そうに、愛おしそうに抱いた夜の王がゆつくりと歩んでくるのが見えた。

先代の表情を思い出す現当主のご尊顔を見ながら、祝辞を述べようと立ち上がり穏やかに笑むアイギス、無事生まれましたという嬉しさを隠さずに、顔をほころばせて話す当主にお疲れ様と労をねぎらった。「辛いなど、妻の努力なければ元気に生まれてくれなかったのだ。私は何も……」

「男親などそのようなものです。男はこれからが大変ですから折れぬよう先に労いを……御息女様の御生誕、誠におめでたき事と存じます、主殿」

「ありがとう。名は既に考えていたのだ、聞いていってくれるか？」「勿論です、主殿に似た紅い瞳と美貌を持つ御息女様、御名はなんと付けられたのですか？」

レミリア、レミリア・スカレットというのが紅魔館の長女の名前だそうだ。

うつすらと生える髪も父上に似た青みがかつた銀色の髪で、紅魔館の明かりに照らされて顔は眩しそうだが髪が輝いてなんとも美しい。

夜の王である両親の寵愛を受けてこれからどのようなように育っていくのか、期待に胸踊らせてレミアお嬢様と呼ぶと盛大にぐずり始めてしまった。出会いからこれでは幸先が不安だと感じるアイギスだが、抱いている父もこうだった事を考えると、悪い出会いではないはずだと感じられた。

## 第一話 元氣すぎた赤子

御息女が生まれて4年が経った頃、再度紅魔館でアイギスの姿が見られた。

出産を経験した紅魔の奥方様も万全になった今、覚束ない足取りで動いていた御息女も元気に走り翼を広げて飛び始めた事を記念して、眷属や旧知の者を招待し紅魔館主催で盛大なパーティーが催されているようで、当然アイギスも招待され、それなり楽しんでいるようだ。パーティーの喧騒を眺めながら薄く笑み、一人静かにグラスを傾けている。

程良い広さのダンスホールを埋め尽くすのは吸血鬼やその配下の者達。

中には異国の服を身に纏う者、誰か他の屋敷の警護役として来ている武闘家らしい女性や、主と親交のある種族魔法使いの夫婦など、いて、幅広い種族が姿を見せている辺りにスカーレット卿の交友関係の広さが見られた。

尊大で偉大な夜の王である紅魔の主殿、不遜ではあるが同族との繋がりや大事にし、時には同族以外でも拾い上げ屋敷で使う懐の深さを見せる事もあり、そういった部分に、器の大きさは先代以上かもしれないとアイギスは感じているようだ。

ある程度の余興が流れパーティーが更なる盛り上がりを見せ始めた頃、アイギスは静かにグラスを置いて席を立ち、消えた。生誕祭の続くパーティー会場から離れて何処に向かうのか、その姿は紅魔館から少し離れた、屋敷へ向かう道を逸れた藪の中にあつた。

目当てはパーティー用の食事に使われた数時間前までは泣きわめいていたモノ達の山、雑に血が抜かれ打ち捨てられた亡骸を眺め、心から楽しそうに嗤うアイギス。用済みになったモノ達を吊り埋葬し、気に入るモノが残っているようなら持ち帰り、エンバールミングしては近くで栄える人の町に放置する事を彼女は小さな楽しみとしていた。

「さて、よき気なものは……」

アイギスが右肩に担いでいるスコップを地に刺してほんの少し穿

つ。

ガボンという大きな音を立ててスコップのサイズ以上に穴が穿たれていく。山のように積まれた、少し前まで人だったモノを投げ入れても余るくらいに広い大穴が忽然と掘られた。

魔力を使って何かをしたわけではなくこれが彼女の能力。

「なんでも穿つ程度の能力」である。言葉の通り何にでも、それこそ時間だろうが空間だろうが綺麗に穴を穿つこと叶うのが彼女の持ち得る能力だ。

今はスコップを刺して発現させたが、指先で触れたり足先で触れたりしてもその場を穿つことが出来るし、指を鳴らして見つめる先を穿つことも可能な能力である。万能な能力に思えるが、実際はそこまで使い勝手の良いものでもなく、ただ言葉通り穿つだけ、その辺りに穴を開けるだけで何かを直接的に壊したりは出来ないらしい。

例えば、馬などに行使用すると腹や胸に風穴を開けたままで、死に体だが元気な姿で馬が走るといふ、気持ちの悪い状態になるだけのようにだ。それでも勿論殺傷能力がないわけではない、行使した相手全体を穿ち存在を掘り返す事ができるのなら相手は生きたまま何処か別の所に落ちていったり、生命活動に関わる器官を穿たれ、臓器がないと能力を受けた相手が気が付くと物理的な穴として機能し、死に至るとの事だ。と、能力の説明はこのくらいでいいだろう、先程から穴に遺体を放つていくアイギスが楽しそうだ。

掘った穴に遺体を投げ捨てては、綺麗に見える遺体をお持ち帰り用として取り分けていくアイギス、死体愛好家というわけではなくて彼女は平らに慣らすという行為、掘ってから埋めるといふ手段が大好きなだけであった。

エンバークミングを始めたのは今生業としている棺桶職人としての好奇心から、中に収まる者達の中身がどうなっているのか知りたいという小さな好奇心で始めたものだったが、今では開いてみては開く前の状態に戻し、自分の業を確認するようなものとなっていた。

もうひとつの穴掘りだが、これもアイギスの趣味嗜好の一つで無駄な行為が好きという事から来る暇潰しの一つだ。人間の刑罰で行わ



れる物に穴を掘っては埋めての繰り返し返すという罰があるが、そういった何一つ実のない行為が、長く生きて未だ終わりの見えないアイギスには無駄に時間を浪費するのに丁度よい事だったらしい。

退屈を埋めるには何をするか、そこで棺桶職人として掘り慣れていた墓穴掘りを趣味としてみたのだがこれが性格にうまくハマリ、何も無い所を掘り返しては、遺体でもなんでも埋めて元々以上に平坦に慣らしていくようになった。スコップ一本を使って土を掛けていくだけの、何も考えないですむ時間がアイギスには心地よかった。

「当たり前ナシ、もう少し丁寧に血抜きされていればそれなりのものもあつたのでしょくに」

悪魔としての膂力を存分に発揮して遺体を投げては埋めていったアイギス、満足顔で先の尖つたスコップを地に刺して両手を払っている。

お持ち帰り用に仮置きしていたものも最終的に気に入ったモノはなかったようだ、全ての遺体が地に還るように埋められて、地面が平坦に慣らされるまでそれほどの時間はかからなかった。

「動いて小腹も空きましたし、お屋敷に戻りましょう」

土で汚れたスコップを蹴り上げて、肩で抱えながら自身の魔力へと戻していく。アイギスの力を顕現させたスコップは出すも消すも自在で常に彼女と共にあつた。

余談だがアイギスのスコップから発想を得て、幼く育つた屋敷のお嬢様が槍を振り回すようになるのはもうしばらく先のお話である。

屋敷のパーティ会場であるダンスホールに戻ったアイギス、ホールの中で始まった催し物を眺めながら少し鉄の味がするブランドーを傾けていると、遠くではしゃぐ幼子の姿を見つけた。

白い皮膜の小さな翼を広げ、両親の近くから離れずにクルクルと舞うお屋敷のお嬢様、レミア・スカーレットと目が合う。軽く会釈するアイギスだったが、挨拶をされた幼子は偉大なるお父上の背に隠れてしまった。

嫌われてはいないはずなのだがと苦笑するアイギス、小さく声を漏

らして壁の花となつていると、ホールの中心で息巻いている狼から成った魔物に呼ばれた。

「ふん！ 何処に逃げたのかと思えばそこにおったのか、羊の娘っ子」  
「娘っ子と呼んで頂けるとは私もまだまだ。して、怖い怖い狼さんが私のような弱い羊に何用でしょうか？」

娘っ子と呼んできたのは紅魔館と停戦してはいるものの上辺だけの付き合いが続いている何処かの誰か、その従者。今夜はスカーレット卿主催のパーティではあるが、彼の者は招待される度に今のように勝手に仕切る者である。何処にでもこのような手合はいるもので、何かがある度に目立とうするものだ。

ちなみにアイギスよりは大分年若い、見た目老狼に見える逞しさが宿つたの大男で、姿からそれなりに長く生きていようではあるが、この場合比較するアイギスがただ若々しく見えるだけである。日々ふんぞり返って弱者を弄ぶだけの狼より、日々汗をかいて体を動かしているアイギスの方が若く見えるのは、当然といえば当然なのかもしれない。

「なに、ちよつとした催しに付き合いってもらおうと思つてな」

「余興ですか？ 生憎披露できるような芸事に覚えがございません」

「なればこそよ、そもそも吸血鬼の眷属やその従者しか入れぬはずなのだ。ここは選ばれた者しかおれぬ場所よ、故もわからぬような者が過ごす場所ではないわ」

パーティで顔を合わすと今のように毎回絡まれているアイギスだが、本人は全く気にしないでいた。依頼を受ければ造り納めるが好きで始めた事ではなく、やる事がないから作り続けているだけで、偶々鼻眞にしてくれる吸血鬼の一族が近くにいた、それだけの事だった。職人としてのプライドも然程なく、あるのは有り余る時間を使って作り上げたモノの出来具合に対する自己満足だけだった、飽きずに作つたからだ。過去アイギスは語っていた。

「私はなんと言われようと構いませんが……鼻眞のお客様から招待を受けているのですよ？ 顔を見せるだけで喜んで頂けるのならばお

呼ばれも致しましょう」

「ハン！ スカーレット一族の腰巾着が招待などとよく抜かすわ。聞けば棺など作っているそうじゃないか、作るほど好きなら儂が入れてやろう」

ホールの中心でいつの間にか始まっていた従者同士の軽い手合わせ場。

演舞をする者や剣技を披露する者、美しい魔法を放ちパーティを彩る者達が色々と見せていたダンスホールの中心でこちらに來いと騒ぐ狼男。

腰巾着と言われるほどスカーレットの名を使つてはいない、使う必要性もない。そう反論し今回も皆に笑われてお終いにしようと考えていたアイギスだったが、遠くで見つめてくる御息女様と再度目が合い気が変わったらしい。

「お手合わせ……報酬なしでお仕事はしない主義なのですが、貴方様から頂いても宜しいのでしょうか？」

普段は笑われて蔑まれているばかりのアイギスが初めて狼男の挑発に乗った。

狼男に手招きされてホールの中央へと歩み観衆に対して頭を垂れるアイギス、優雅に頭を垂れて身を晒したアイギスを見て狼男の挑発を笑つていた貴族である吸血鬼連中の顔色が変わった。

知らない者も多いが中にはアイギスの詭えた棺桶に身を預ける者もいて、その者達のほぼ全てが自身が幼い頃より姿を変えないアイギスを見ていた、ついでに言えば仕事の中のアイギスを見た者はいなかった。

仕事の中の姿を見た事があるのは幼き頃のスカーレット卿とこの狼の主くらいだろうか、互いに別の仕事姿を見ていてその評価も間逆だった。

幼きスカーレット卿が見たものは紅魔館を狩り立てんとする異能者、力あるヴァンパイア・ハンターが攻め入ってきた時に運悪くアイギスと交戦してしまった時の事。

およそ戦いと呼べるものではなく、パチンという乾いた音が一瞬響

ただけで足の先と頭の鼻から上だけになったヴァンパイア・ハンターがポロポロと残る光景を見ただけであった。

棺を眺えて持ってきただけの一商人としか見ていなかったスカーレット卿だったが、頭だけにして残しておけばよかったと淑やかに笑むアイギスを初めて怖いと感じ、もう胸を触ったり尻を触ったりするのはよそうと誓った日になった。

方や狼男の主は真夏の夜に楽しそうに掘った穴に遺体を投げている姿を見ただけで、棺桶職人では生活が成り立たず残飯処理までやっている哀れな羊としか見ておらず、それを配下の者にも伝えていたようだ。実際棺桶職人だけでは生活出来ておらず、偶に舞い込む掃除の仕事もしているが、その場を見てもスコップで相手を穿つか指を鳴らしているだけにしか見えないので結果は同じだったかもしれない。

そういえば年齢を知っているのも紅魔館に住まう者達くらいで、他の者からはぽつと出の半端な小悪魔程度にしか思われていない……彼女が羊ではなく山羊だったなら見られ方も変わったのかもしれないが。

「棺桶作るか墓穴掘るくらいしか能のない羊っ娘が、狼相手に見栄を張りおつて！ お伽話のように喰らってくれるわ」

「それでは最後にお腹を破られてしまいますね、ああ、それは山羊さんのお仕事でしたか。羊の私には当てはまりませんし、私の慣れた処理の仕方ですり上げてあげますのでご心配なく」

抜かせと吠えて構えてすらいないアイギスに鋭い爪を奔らせる狼男、真つ直ぐにアイギスの腹に向かい拳が振り抜かれるが、鋭い豪腕が腹に届く前に忽然と姿を消した。

狼男の拳に向かい構えもしなかったアイギスが指を小さく鳴らしただけで、肩から先の拳が穿たれて何処かへと飛ばされたのだ。

アイギスの能力を知るものは少ないが知っているものからすれば、正面からただ殴るだけなど自分から拳を掘ってくれと差し出しているだけにしか見えないだろう。

再度鳴る指の音、両手の親指と人差し指を擦り合わせてパチンという音が鳴ると、狼男の両足が穿たれて空間毎掘り返されて消えた。

「筋骨隆々な貴方様と違って私はか弱い羊です、柔肌を殴られては困ってしまふ」

「貴さ……」

「煩い殿方は好みではありませんし、下賤な狼の血で屋敷を汚すのも好ましくない……のですが、教育には良いでしょう、我慢なさってくださいな」

淑やかに耐えろと述べながら愛用のスコップを顕現するアイギス、持ち手の象牙のような部分、三本目の角と言える色合いのそこを小さく擦るとスコップの持ち手以外が真っ赤に燃え上がる。

腕や足を穿たれて失くしたと気が付いた狼男がのたうち回りホルの床を汚していく中、血を吹き出す四肢があつた辺りに燃え盛るスコップを宛てがい焼きを入れていくアイギス。

肉の焦げる音と匂いがホールに広がる中穏やかな顔色を変えずに狼男を焼いていく黒羊、顔は変えず目の色だけを輝かせてキャンインと喚く狼の悲鳴を聞いていると、一人の従者に腕を取られた。

緑色のドレス、両腿の辺りにまでスリットが入っており露わにした腿から女性の色香と逞しさを強調した姿でアイギスの手を取る武人、後に紅魔館で身内と呼ばれるようになる彼女であつた。

「そこまでにされては？ スカーレット卿主催のパーティーで下品な行いはいかがかと……バフォメット殿？」

「そう呼ばれるのは山羊さんですね、よく言われますが私は勘違いされて捧げられた羊の悪魔というだけですよ？」

「ですが、燃え盛る三本目の角を見る限り……」

「角は頭の二つだけです、燃えているこれはただのスコップですよ。それに血の匂いや焼ける肉の匂いには早くから慣れておいた方が良く、これは私からお嬢様への少々過激な誕生日プレゼントなのです。邪魔をしないで頂きたいですね、異国の妖かし殿」

武人の左手に強く取られている右手、そんな武人の左手に優しく左手を添えて武人の手の甲に小さく穴を穿つアイギス。離して頂けないのなら離れるようにするだけだと伝えるとゆつくりと手を離されて数歩下がっていく東方の武闘家、声にはせず会釈だけして礼を伝え

るアイギスが遠くで見ているだけのお屋敷の嬢様を見つめる。

お腹が少し大きくなつた母の背に隠れながらも、しっかりと見て鼻を鳴らし荒事の匂いを嗅いだのを確認した後、煩く喚く口を止めるように首にスコップを押し当ててそのまま床に刃先を突き立てた。頭側と体側を少し焼いて血が垂れなくなったのを見てからスコップを消して再度観衆に頭を垂れるアイギス。血が広がり汚れた床の血の部分、指を鳴らして床の表面だけを薄く削ぐように穿ってから、二つに分かれた狼男の両方を持って紅魔館を後にした。

数日後完全に血が抜かれた、左腕しかない獣の体がヨーロッパの何処かの町で転がっていたという話があるが、これが誰の体なのかかわからない住人の手ですぐに処理され噂になることはなかった。誰が放置したのか町の者はわかつているから誰も口にはせず、ただこうならないようにと恐れ怯えるだけであった。

口にしたのはバフオメットとアイギスを崇めて信仰する異端者達だけ。

けれど、祈られ崇められるバフオメットと呼ばれている女性は人の心になど興味はなかったようだ。どれだけ信仰されようが自身は山羊ではないのだからと姿を見せる事もなく、ただただ遊び終えた何かを町に放置してエンバーミングの業を人に見せつけられればそれでよかつたらしい。

ちなみに頭はうまく出来たと気に入ったようで、綺麗に残せた瞳が輝くようにと中を繰り抜いてランタンのカバー代わりにしたようだ。

暗い店内が更に暗くなつたが、光量を気にせず今日も材木を穿つては依頼を受けた誰かの棺を掘り組んでいた。

く少女作業中く

また少し時が流れた。

奥方様が臨月となり、もうすぐレミリア御嬢様の妹君が生まれると知ったアイギスが三度紅魔館を訪れている。先日行われたパーティ会場で粗相をした事への謝罪と、依頼されていた付き合の棺を納品しに来ているようだ。

追加の棺は先に生まれたレミリアお嬢様の弟君か妹君の分、どうや

ら女兒であるというお話を伺ってそれなら揃いでという依頼を受け姉になるレミリアと揃いの棺を逃して納品に訪れていた。

無事に納品を済ませてお屋敷でもてなしのお茶を楽しんでいるアイギス、大きな円卓に二人でついて静かに茶を含み味わっているともう一人卓についている将来の淑女からお声を掛けられていた。

「アイギス、お祖父様のお話をして頂戴」

「お父様とお母様からお聞きください、私よりも詳しくお話してくださいませよ。お嬢様」

「お父様の生まれる前の事が知りたいの！ アイギスは知ってるんですよー！」

「よく存じ上げておりますが、これといって楽しいお話はないのですよ」

お嬢様が生まれた時以上に慌てていたなど色々面白い話があり一晩では尽きないくらいに話題はあるが、未だ幼いお嬢様に話してもいかに大事に思われているか理解されないだろう、ならば理解出来るくらい育つまでは内緒にしておこう。そう考えるアイギスだったが、あまりにしつこく迫られるので一つ諭すことにした。

「もうすぐお姉様になられるのです、あまり我儘を申しては妹君に笑われてしまいますよ？」

「アイギスまでお母様と同じことを言うのね！ 皆妹の事ばかり！」

「目上の者になるといふのは我慢も覚えるという事です、今のままでは妹君を守るお姉様になれませんね」

「わたしがまもるの？ お父様もお母様もいらっしやるわよ？」

幼く紅い瞳でアイギスを見上げるレミリア、パーティ会場で粗相をして嫌われたと感じていたアイギスだったがその逆で、淑やかに自身以上の体躯を持つ狼男をあしらった姿が格好いいものとして映ったらしい。

あの日以来当主や奥方様の側を離れて歩み寄ってくるようになってしまったレミリア、幼いながら話した事はきちんと覚えてそれを応用する聡明さを見せるレミリアをアイギスは愛でる事が多かった。

今の話も深く理解しようと対面する椅子から隣の椅子に座り直し

て近くでアイギスの顔を見上げるレミリア、我儘な物言いだがその実は理解しようという姿勢が見て取れて、そんなレミリアにアイギスも心を許していた。

「お父様もお母様も偉大なノスフェラトウですが、お嬢様よりも先にこの世を去ります。これは仕方のない事です」

「アイギスはお父様よりも長生きだと聞いたわ、アイギスもお父様も私より先にいなくなるの？」

「私はよくわかりませんがいずれはそうなるのでしょね、それよりも妹君の事です。お父様もお母様もいなくなったら妹君を守るのはお嬢様だけになるのです、そうなった時に今のお嬢様のままでは困ってしまいますね」

「こまる？ お父様もアイギスもこまる？」

「困ると言うよりも悲しい、といったものでしょうか」

「かなしいの？」

「親というものは自分の御身よりも子の事を大事に思うものなので、お父様もお母様も自分よりも偉大になって欲しいと毎日願っているはずです。偉大な吸血鬼が妹君一人守れないようでは困りますし、悲しく思ってしまうですね」

レミリアの赤い瞳を同じく赤い瞳で見つめ返し言葉を選ぶアイギス。

いなくなると言った時には瞳を揺らした幼い吸血鬼だったが、悲しくなると言葉を追加すると少し悩んだ後に強い瞳でアイギスを見返していた。

アイギスの伝えたものが理解されたのかわからないが、レミリアの瞳には強い決意のような物が感じられてアイギスは一人安心していった。

「妹君が無事に生まれて守れるようになった時には御名でお呼びして差し上げます、楽しみにしていますよ？」 レミリア御嬢様」

「？ まだ妹が生まれてないのにお名前でお呼んでくれるのは何故？」

「先に呼んでおけばそうならざるを得ません、それにレミリア御嬢様が生まれた時にお父様にも同じように申し上げました。お父様は立



派な主になられましたし、レミリア御嬢様にもそうなっていたか  
いとアイギスからのお願いでございます」

お父様と一緒に、小さな口でそう呟くレミリアを見てアイギスが淑女  
のような笑みを見せた時。

お屋敷の一室から轟音が轟いて従者の全てが慌て始めた、音と揺れ  
に驚いたのか、アイギスのスーツの袖を強く掴み不安げな瞳で見上げ  
ているレミリア。

アイギスがすぐに抱き寄せて片手で抱き上げると少しだけ落ち着  
いたようだ、抱き上げたままテーブルを離れて音の発信源の方へと向  
かうと悲惨な光景が広がっていた。

豪華な装飾のあしらわれた部屋の扉は何者かに破壊されたような  
姿で捻れ飛んでおり、部屋の中で大きな血袋でも割いたように廊下の  
壁までを紅く染め上げている光景。

さすがに見せられないと感じたアイギスが後ろ歩きでその場を離  
れようとした時、全身を真っ赤に染め上げた屋敷の当主と、同じく全  
身を真っ赤に染めた小さな赤子がアイギスの視界に入った。

「…一瞬だった、一言妻が呻いたと思えば目の前で爆ぜたのだ…跡に  
はこの子しか…」

「左様ですか、残念な事です」

「…それだけなのか？ アイギスも妻を気に入ってくれていたのでは  
なかったのか！ 他に言う事が…」

「私まで取り乱してどうなりましょう、嘆き悲しむのはご家族の仕事  
ですが…貴方様は今嘆いていい立場にありますまい？ 当主である  
ならば今とこれからを考えるべきでしょう？ 奥方様は…残念でし  
たが…守るべき相手は他にもいるのです、私は二度と坊ちやまと呼  
びたくはありません」

レミリアの目を片手で隠しながら血塗れの親子に物を申すアイギ  
ス、妻を失い現実を直視できない当主に変わり成すべきことを当主の  
手元を見ながら伝えていた。

全身血濡れながら穏やかに眠り赤子、背には枯れ枝のような物が生  
えており、枝の先からは宝石のように輝くナニカがぶら下がる赤子。

長く生きているアイギスだがこれを吸血鬼だとは断定できず一瞬悩んでいたようだったが、抱いていたレミリアがアイギスの手をのけて赤子を見て小さく二人に叫んだ。

「いつまでもそのままじゃ妹が可愛そう、お父様。綺麗にして差し上げて」

「レミリア：…そうだな、このままではフランドールが可愛そうだ：妻の弔い、任せて良いだろうか？ アイギス」

「畏まりました、スカーレット卿：レミリア御嬢様もお父様とご一緒に行かれるのが宜しいかと、妹君、フランドール御嬢様を守って差し上げてくださいませ」

抱き上げていたレミリアの背を叩き自ら行けと促すアイギス、一瞬目を合わせて直ぐに手元から飛び立ち父と並ぶレミリアを見送ってから真っ赤に染まる部屋へと歩んだ。

少し粘性のある血液の海の中をコツコツとヒールの音を立てて歩く、部屋の中央で一人佇み、足元以外の血液を指を鳴らして床毎穿つて削いでいくアイギス。

少し残る血液を両手で掬い上げて自身の詠えた奥方様の棺の中央へと垂らす、夜の王でありながら白を好んだ奥方様の棺。

上等な白で仕立てた内張りを棺の主で紅く染みを作ると、元気過ぎたお子様でしたねと、無事に赤子が生まれた事を一人棺に報告した。

## 第二話 吸血鬼の親子

出産とともに亡くなられた奥方様の墓の前、静かに佇み瞳を瞑る夜の王達を、少し離れた位置から見つめている羊がいた。

何処から見ても紅く見える吸血鬼の住まうお屋敷、紅魔館から少し離れた小高い丘の上、立ち並ぶ巨木のお陰で日中も日陰になるこの丘が白い墓石の下で眠る者が好んだ場所だった。

丘の上から望む星々や、遠くに望める中世の城を好みここから良く眺めていた吸血鬼姉妹の母。金の長い髪を風に靡かせて夜の美女が遠くを眺む姿。

そんな立ち姿にひと目で惚れて、どうにか妻として迎えたいと思いついた。悩む姿を見せてくれた主。夜を統べる王でありながら、愛情といったモノを強く持つ主の命により、紅魔館御用達の墓守がお屋敷の中ではなくこの地に墓穴を穿ったようだ。

言葉なく墓標と向き合い佇む二人の背を見つめているアイギス。父である当主の手を握り、白い墓石越しに遠くを眺めている吸血鬼の長女の中に、亡くなられた奥方の姿を見つけていた。

夜の闇の中でも目に留まる白い皮膜を持った翼が亡くなられた奥方様に似ていて、白い帽子を被り遠くを見つめている背中も幼い頃のこの子の母に似ていると感じていようだ。

二人が静かに佇む姿を暫く見ていたアイギスだが、お嬢様の翼が風に揺れ、2度ほど羽ばたかれたのを機に、一人闇の中へと姿を消していった。墓石も棺も丁寧に埋めたが棺の中には母の遺灰もない、そんな事は知らない幼い娘の背を見ているのが少し辛くなり、一人静かに墓所を離れた。

一人戻ったのは吸血鬼家族が住まうお屋敷。

いなくなつた母の代わりを務める為に店ではなくこちらに戻つた。などと、だいそれた事をするつもりではなく、ただ遺品の整理を再度試みて何か遺つていればと考えただけであつた。

奥方様が亡くなつてから4年ほど経つた今、新たな遺品が見つかる事等ないように思えたが、母の名残を目にした事で一つ宛てがあつた

のを思い出す。主と奥方様の結婚式で使われた紅いドレス、その時にブーケを纏めていた紅い紐が捨てられず遺っているはずだなど、奥方様の物が多く遺された衣装箆笥の中を探すアイギス。

ゴソゴソと数段を開けては奥まで探していくと、引き出しの奥まった辺りに、大事そうに箱に仕舞われた真つ赤なドレスと紅い紐が見つけられた。白が好きだった奥方様だったが、スカーレットの名になるのだからと用意されたこの紅いドレスだけは大事そうにしていたなと、ドレスを撫でて、紐を手に取り、一人笑んでいた。

物探しに随分と時間が掛かったようで、紅魔館の正面ホールから幼子の楽しそうな声がアイギスの耳に届く。強い癖毛と大きな巻角に隠れてほとんど見えないが、頭の上に生えた羊らしい細めの尖り耳が楽しげな妹の声とそれに返答する姉の声を聞いていた。

「おとう様、おねえ様おかえりなさい。 アイギスはいっしょじゃやないの?」

「先に戻っているはずだけど、あ、こら。 待ちなさいフラン」

母の墓前から戻った姉と父に挨拶だけは済ませた妹。

アイギスがいない事が気になるという妹の声色には、亡き母を思う感情は感じられない。顔を知らぬ母の墓参りなど、妹からすればつまらぬ物以外の何物でもないのだろう。そんなつまらぬ事よりも、月に一度程度来ては、仕事を終えた後に構つてくれるアイギスの方が楽しみで気になる事だと声色が物語っていた。

奥方様を知る屋敷の者からすれば冷酷だと感じられるが、アイギスには我儘というよりも無邪気だと捉えられる声、何も知らずにはしゃぐ楽しそうな声がアイギスのいる部屋にまで聞こえてきていた。

そんな無邪気さであふれる妹を窘めたのは5才年上の姉。

本来であれば父親が叱り窘めるのだろうが、数年経った今も妻を殺した事を咎める当主は次女に心を開ききれず、事務的な対応をしては妹が悲しい顔になるだけで、その度に暗い顔になるフランドールをアイギスは何度も見ている。

親となる前であれば『坊ちやま、紳士として女性を悲しませるのは……』などと窘めても良かったのだが、子を守る側になった、偉大で

おらねばならぬ父に対して唯の商人が何かを言うなど出来ないと感じているようだ。

他者の尊厳を尊重し死後を弔い続けてきたアイギスらしい考えの元に黙り続け、スカーレット卿自らが次女も守るべき者だと気が付く事に期待していた……のだが、最近の接し方は特に酷く見えてまつていて、機会があれば一言くらい、アイギスはそう考えていた。

「アイギスみつけた！ かえってきたのになんておしえてくれないの！」

夜に輝く宝石のような羽を使い、軽快に飛びながら近寄る妹様。

アイギスを囲み周るように飛ぶフランドールだったが、アイギスが片手を差し出して正面へと降りるように促すと、示された通りに正面に回り、楽しそうな瞳で巻角を見上げた。

それからアイギスが中腰になり、フランドールの帽子へと赤い紐を宛てがってから、よくよく見られる前にスーツの内ポケットへと隠す。

仕草から何かを隠したというのはわかるが何を隠したのかまではわからないフランドール。中腰でいるアイギスの内ポケットに手を突っ込もうと頑張るが、何度か手を払われて諦めたようだ。

そういつた姿に、性別こそ違えど血は争えないなど、大昔に悪戯してきた現当主の姿をフランドールの仕草の内に見たアイギスが、ペシオンと悪戯っ子の尻を叩いた。

「いたっ！…なんでたたくの!?!」

「悪さをなさったからですよ、他人の胸元に手を伸ばすなど淑女のなさる事ではございません」

指先三本でフランドールの尻を叩いたアイギスが、フランドールと視線を合わせるように膝をつく。膝立ちになってもまだアイギスのほうが視点が高いが、フランドールは生まれてからまだ五年ほどしか経っていない本当の幼子だ、ある程度は致し方無いだろう。

膝立ちの姿勢からかかたと尻を付けて、更に小さくなりフランドールと並ぶ視点になったアイギスが、フランドールの両手を取り優しく諭し始めた。

「見た目や仕草はお母様そっくりですのに、なされる事はお父様そっくりです」

「どっちの方が似てる？ おとう様？」

「髪色や立ち姿はお母様の幼い頃に良く似ておいでです、髪を長く伸ばせばお母様と瓜二つと言ってもいいくらいですネ」

「おかあ様ばかりなの？ おとう様に似ているところはすくないの？」

機械的な対応しかされなくとも、絵の中にしかない母よりは毎日顔を合わせられる父の方が大事らしい、自身の中に父はいないのかと切ない表情でアイギスに問いかけるフランドール。

そのような事はごさいませんと反論するアイギスだったが、泣き出しそうな今の顔も先ほど周囲を飛び回っていた時の楽しそうな表情も奥方様の面影ばかりが見えてしまい少しだけ困った。

けれど、似ている部分が少しでもあるのなら喜んでくれるかもしれない、合わせて宥められれば良いと一つ思いついたアイギス。

「活発さはお父様と似ていらつしやいますよ、お父様も幼い頃はアイギスの胸や尻を撫でる悪戯小僧で困りました……お転婆なものも元気で良いとは思いますが、度が過ぎるとお父様と同じ様にアイギスに泣かされるやもしれません」

「おとう様もさつきみたいにペシンでされたの？」

忘れられないくらいに何度も、とワクワク顔のフランドールに述べるアイギス。

スカレット卿がフランドールと同じくらいの年齢だった頃の話をしては、その度に尻を叩き泣かしたと話すと、フランドールの顔に少しの驚きが浮かんだ。

そのまま、驚く顔も幼かった頃の父に似ているとアイギスが伝えると、更に驚くような顔を見せてはしやぐ。お屋敷に戻ってきたアイギスを見つけた時以上に、全身で喜びを表すように、アイギスの周囲を飛んで、踊るように回る吸血鬼のお姫様。

「フランドール御嬢様はお元気でいらつしやいますね。生まれ時からお元気過ぎて、アイギスは気の休まる時がごさいません」

長く生き過ぎているアイギスから見ても、あまりに衝撃的な生まれ方をした妹様。母の腹から出るのではなく母を文字通り失くして、随分と派手にこの世に生を受けた……酷く歪な誕生の仕方をした吸血鬼の末妹。

あの時は少々驚いて碌に祝福も出来なかったが、今はこうして愛くるしい姿を見せてくれている。アイギスがフランドールと一緒に過ごす時間は月に一度あるかないか程度だが、訪れる度に今のようにくつついて離れず、アイギスが帰るかフランドールが眠りに着くまで一緒にいることが多くなっていた。妹を過保護過ぎる程に心配し寵愛する姉や、血が凍るくらいに事務的な接し方しか出来ないでいる父よりもアイギスに懐いている、そう言えそうなくらいであった。

「おとう様のおはなしもつと聞きたい、もつとお話して?」

「お父様からお聞きになれば宜しいかと、私がお話するよりも——」

「おねえ様とはお話するのにわたしには何も話してくれないの、なん回聞いてもおとう様はお話してくれないの」

俯くフランドールを下から望むアイギスが紅い瞳が潤んでいる事に気づく。

主の愛した奥方の名残を強く見せる幼い娘が、全くと言っていいほど構ってくれない父を思い、瞳を潤ませ涙はこぼさずに泣くのを我慢している姿。生まれた時のように力を現し我儘に暴れる事なく、ただただ我慢強く耐える妹の姿がアイギスの老婆心に火を着けたようだ。

堪えるフランドールを軽く宥め、少しだけ時間を貰い、途中通り過ぎる従者に引かれ道を譲られるくらいの勢いでコツコツと歩み、紅魔館で唯一白が目立つ部屋を出た。

主の居る謁見室に向かう途中、呼び止められて立ち止まるハイヒール。廊下の壁に掛かる蝋燭の灯りが映るほどに磨かれた床の上で立ち止まったアイギス。不意に呼び止めてきた、まだまだ幼いがほんの少しだけ目上の者らしい落ち着きさが感じられる声の主と少し話をするようだ。

「アイギス、フランを見なかった?」

「お母様のお部屋にいらっしやいます。向かわれるのでしたら、アイ

ギスは急用で帰ったとお伝え願えませんか？」

小さな体にアンバランスに乗った幼子の頭を傾けるレミリア。フランドールが寝付くまでは一緒にいることが多いアイギスから、妹と一緒に夜を過ごせと言われるとは思っておらず、何かあったのかと心配する表情で首を傾げていた。

子育てを放棄している父に比べて強い妹への愛を見せる姉。

まだまだ守るとまでは呼べないが、常に気にかけて自身よりも妹の身を案じて見せる姉に、アイギスは今の当主よりも長女の方が上に立つ素養があると確信めいたモノを感じていた。

「何事ありませんよ、別件の依頼があつたのを忘れていたと今頃思ひ出しまして、今晚はこのまま帰るつもりにございます」

「帰るの？ フランにお別れは伝えた？」

「それが泣き出しそうなお顔を見てしまいどうにも言い出せず、出来ればレミリア御嬢様からお伝え願えませんか？ 泣き出してしまいそうな妹君を慰めあやすのも姉の勤めにございますよ」

「私だと泣き止まない事が多いけど、アイギスはお仕事だものね。わかったわ、頑張ってみる」

「ご期待しております。上手くあやすことが出来ましたなら後日、アイギスから何かお贈り致しますので」

母の遺品を収めた内ポケットに掌を当てて、瀟洒な笑みを浮かべたまま頭を垂れるアイギス。

父や母、祖父の昔話などはわがままを言つて何度か聞いているレミリアだったが、アイギスから何か物を贈られた事はなく、何が貰えるのかと問いかけていた。

頭を垂れたまま内緒だと伝える従者のような従者でない黒羊。

執事が礼をするような姿勢のまま再度妹君をよろしくお願い致しますと話す、期待されていると感じたレミリアが自信を感じられる声で頑張ると返答すると少しだけ贈り物のヒントを話し始めたアイギス。

「妹君とお揃いとなるようアイギスも精進致します、数日ほどお待ち下さいませ」



妹とお揃いという餌に釣られて張り切り始めた姉。

これ以上はお見せするまでは秘密ですと、優優たる態度でレミリアの両肩に両手を当てて体を回すアイギス。

背で畳まれた翼のちようど真ん中の辺りを優しく押して、妹の元へと向かうように促すと一度二度と振り返りながら妹のいる部屋へと飛び進んでいったレミリア。

愛くるしい姉の姿を見られて穏やかさを取り戻したアイギスだったが、強く窘める気持ちは失くしていたが老婆心までは失っており、真つ直ぐに主の部屋の前へと迫った。

ノックをして返事を待つと直ぐに入室の許可が降りる、静かに扉を開き奥へと進むと、大きな椅子に足を組んで腰掛けて、きれいなワイングラスを傾けている主。

主に向かつて仰々しく頭を垂れているアイギス、良いと言われるまで待っていると、良いという声はかけられずにそのままの姿勢で話が進み始めた。

「毎月アレの面倒を見させてすまない」

「愛しい御息女に向かつてあれなど何を仰られますやら、寂しがつておいですよ。御身に似ているレミリア御嬢様ばかりを愛でたくなる気持ちもわからなくもないですが、もう少しフランドール御嬢様も見て差し上げては？」

「アレから何か聞いたか？」

「奥方様のような泣き顔を私に見せて、お父様は何も話してくれないと、そう仰つておいででした」

主の座る椅子の隣に置かれた白のサイドテーブルからコトリと音がして、その音を聞いて返事を待たずに面を上げたアイギス。軽い微笑を褐色の頬に乗せて主に見せると、大きな背を更に大きく見せるように胸を張り気を張るスカーレット卿。

当主が物心つく前から屋敷に出入りしているアイギスに対して見栄を張っても無意味だと知っているが、面と向かつて言い返すには奥方様という言葉が重かったようだ、態度だけは大きく見せたが態度に見合う言葉は出てこなかった。

けれど何かを言った所で無駄だっただろう、何を言っても無駄だとアイギスが表情で語っていたのだから。

「少しずつですが奥方様の面影が強く見えるようになってまいりましたね、今にも泣き出してしまいそうな顔など、奥方様の幼き頃そのままにございます」

「アレは似過ぎているのだよ、無邪気に笑う仕草も輝く金の髪も似過ぎていて…その度に思い出すのだ、アレに殺される瞬間の妻の顔を」「痛ましい事でございました、良い生まれ方をされたとは申せませぬ、ですが…」

「アレの顔を見る度に爆ぜる妻の姿が思い出される…アレが私の娘だとは思えないのだよ…アレはなんだ？ 歪で翼とも呼べないモノを背に生やし、妻の顔で私を見てくるアレはなんだというのだ？ 知っているなら教えておくれ、アイギス」

アイギスと名を呼んだ時の顔は凜とした父や偉大なる主の顔ではなく、幼い頃に見ていた悪戯してから叱られる前の少年の顔であった。

本来愛すべき娘、それに対して妻の面影を見ては脳裏に浮かぶ娘に殺された母。

殺された者が殺した者の中にいる状態に耐えられないという、偉大で強大であるはずの、そうあらなばならぬはずの屋敷の主。

『守るべき娘に対し今の坊ちやまは』などと窘めるつもりで主に謁見したアイギスだったが、それを言ってしまうばそのまま当主が壊れてしまいそうで何も言えなかった。

慰めようにも叱責しようにも良い言葉が見つからず、少年の顔で怯えを見せている主を真つ赤な瞳で見つめているだけのアイギス。

その晩はそれ以上何も言えず、無言のまま主の部屋を出るしかなかった。

### 第三話 悪魔な妹

数日後、深夜の紅いお屋敷。

その中央に向かい、ヒールを鳴らすどころか床を抜く勢いで強く歩むアイギスがいた。

緩い螺旋状の階段を上った奥。

普段であれば当主が座しているはずの部屋を目指して、口を横に結び虚ろな紅い瞳も強いモノにして歩んでいた。

つい先程一度は離れた紅魔館。

吸血鬼の姉妹に母の形見から誂えた揃いの紅いリボンを結び渡して、姉妹揃って父に見せるとはしやく姿を見送り、お屋敷の門を出てすぐに大きな音が聞こえ戻ってきていた。

親子喧嘩というには些か喧しすぎる音が数度響く、音とともに屋敷の中央から放たれる成長し浴び慣れた夜の王者の魔力。何がどうなっているのか全くわからないこの状況、それでも焦りを見せないアイギスが魔力を垂れ流す夜の王者の元へと進んでいた。

主に嘆願し姉妹を守ろうとしたであろう従者達の亡骸を足元に見て階段を登っていく、あと数段も登れば部屋の様子が見える辺りに来て以前の嫌な記憶が蘇る。

真っ赤な鮮血に染まってこそいないが豪華な装飾が施された扉がねじ曲がり、ひしゃげている光景を視界に捉えたアイギス。

見知った者が見知った力を垂れ流す部屋の中へとアイギスが歩を進めると、そこには見たくない景色が広がっていた。白い皮膜の翼が振り切られて地を這う姉と、華奢な体の妹の首を左手に捕らえて掲げている紅魔館の現当主の姿がそこにはあった。

乱心したらしい主の右手には、姉は右、妹は左にと、鏡に映らない二人でも合わせ鏡になるように結んだはずの二つの紅いリボンが握られている。コツコツと音をたて入室してきたアイギスの事に気づいてはいるが、紅魔の主が視界の正面に捉える事はなかった。

「スカーレット卿、貴方様は今何をされておいでですか？」

「アイギスか、妻が戻ってきたのだ：幼子の姿ではあるがこうして甦

り私の元に帰ってきてくれたのだ！」

当主の左手で掴み上げられ天上から下がる灯りに照らされるフランドール。

灯りを透かして輝く金の御髪を見ながら妻が蘇ったという言葉が吐くスカーレット卿、娘を捕らえて離さない左の力は強くなる一方なのだが：手に掛けようとする娘を見る目は穏やかなもので、愛おしい誰かを見る眼となっている。

「主殿、奥方様は亡くなられたのです。今貴方様が…」

「亡くなられた？　ちがうな、妻は殺されたのだよ…この悪魔に」

愛すべき娘に見せる顔をしながら娘に対して悪魔と言いつつ、乱心した紅魔館の主。

似過ぎている末妹の中に妻の姿を見つけたようだが、顔つきと言動は真逆となっていた。行動と言葉がつかず支離滅裂を体現しているスカーレット卿：数日前に危惧した通り、壊れてしまったと確信めいた物を感じるアイギスが、頭を垂れて背で指を合わせた。後は指を弾けば全て済む、済むはずだったのだがアイギスよりも先に動いた者がいた。

『妻の帰還を共に喜んで欲しい』

そんな言葉をアイギスに吐きながら、左手に力を込めていく夜の王。

両手で首にかかる父の腕を取り、渾身の力を込めるフランドールだったが：幼い体の膂力ではなんの抗いにもならず、幼い吸血鬼の爪が些かばかり食い込むのみで引き剥がすには至らない。少しずつ抗う力を失っていくフランドールの手が父の腕から離れかけた時に、強い魔力が込められた赤い槍が、フランドールを掴むスカーレット卿の左腕に投げ入れられて綺麗に断ち切った。

「レミリア！　貴様、父に向かつて二度も手を挙げるなど！」

「妹を守ると約束したのです、お父様。今のお父様は気が昂ぶり冷静ではありません、一度棺にお戻りくださいば…」

折れた羽は一度目の反抗で折られたのだろうか？

躰にしては荒々しいと感じるアイギスが数歩当主に近づくが、そん

な黒羊を無視してレミリアに黙れと叫び、娘の言葉を跳ね除ける乱心した偉大なる主。

切り飛ばされた腕を一瞬で再生し、床に落ちたフランドールは見えないといった動きで、そのまま左手に魔力を込めレミリアの体躯以上の魔力光を垂れ流し始める。

夜間の吸血鬼の力。

暴威としか呼びぶようなない魔力の奔流がレミリアに迫る前に、アイギスの指が小さく鳴った。

魔力の音にかき消された指を鳴らす音が響き切ると同時に、レミリアに向かい迸っていた紅い魔力の渦が横合いから何かで決り穿たれたように瞬時に消えた。

「レミリア御嬢様もお転婆が過ぎますが、それは子の戯れと済ませられましょう：ですが、先ほどの御力は親が子に向けて放つには少々お痛が過ぎるように見受けられます」

「親が子を好きにして何が悪い？ 死んだ妻が戻ってきたのだ、子どもどこからいくらでも増やせよう。私から妻を奪ったソレなどいらぬのだ、邪魔をするというのならお前であろうと…」

喉を抑えて床にへたり込む妹を見下して、いらぬ子だと言い切る父。

再度魔力を高めアイギスに向けて溢れんばかりの力を滾らせる父親、いらぬと言い切った時の顔は以前と同じ、幼い頃に見ていた子供が我儘を言う時の顔で：その評定のままアイギスに向かい力を行使した。

紅い二本のリボンを鼻に近づけて亡き妻の残り香を嗅いでいる暗君と成り果てた者、いつも通りのアイギスであれば既に力を行使していて愚かな父は消え失せていただろう。

すぐに力を行使出来なかったのは主が壊れたきつかけを作ったのは自分なのかもしれないと感じられたからだ、姉妹の為に良かれと思いい詠えた揃いのリボンが、綻びかけていた主の精神を穿ったのではないか？

私が余計な事をしなければ：このまま討たれたならば、坊ちやまと

御嬢様方が家族としてやり直すきっかけくらいにはなるだろうか？

迫る紅い魔力光に対して、構えるでもなくただ立ち尽くし終わりを迎えようと考えるアイギスだったが、その終わりはアイギスに届くことはなかった。

紅い魔力の波がアイギスに届く前に紅魔館の屋根を突き抜ける形で天へと軌道が逸れていったのだ、放たれる魔力の源を睨むアイギス。

睨む先には、肘に燃え盛る杖のような剣のような何か突き刺さり肘から先をかち上げられた紅魔の当主の姿と、父に刃を突き立てる吸血鬼の妹の姿があった。

「妻の顔で、妻の姿を見せて私に刃を突き立てるのか：フラン！ フランドール！」

「わるいことなんてしてないのになんで怒るの!? 私もおねえ様も：アイギスもわルイコとなンテしてナイノに！」

亡くした奥方様と幼い次女を混同しながらも、次女の名を呼んでは怯み怯えを見せる当主。

真つ直ぐに見つめることが出来ない愛娘から真つ直ぐに見据えられて、竦むようでは：子も妻も、屋敷も守る為に坊ちやまと呼ぶのをやめろと言ってきたのではなかったのかと、言葉にせず嘆くアイギス。

「フランドール御嬢様、良かれと思いき勝手をしたアイギスが悪いのです。そのお力、放つのであれば私に向けられるのが筋かと」

虚ろな赤い瞳を細くしているアイギスが力の矛先を逸そうと言葉を放つが、父の狂気を浴びて感化されたのか、全く聞き入れられず、寧ろフランドールを追い立てただけとなってしまった。

調子の外れた口調で畏怖の象徴である父に対して、顔を背けずに物を言い放つフランドール。

「アイギスはわるいコトシテないもん！ わタシもわるくない！」

少しずつ感情が昂ぶり始めて言葉も乱れ始めた悪魔と呼ばれた妹。

明らかに様子がおかしいと感じられるが、何をどうすればいいのか

などこの場の誰にもわからなかった。歪な吸血鬼へと変じてしまったように見えるフランドール、雰囲気までも変わり甘えたな幼子という姿から、気が高ぶりすぎて我を忘れたように成り始めていた。

フランドールが炎の剣を抱えていた両手を離すと、怯んだままでいる父に向けてゆつくりと右掌を向けていく。

「フランドール御嬢様、お控え下さい。それ以上痲癩を起こされるのならばアイギスがお叱りせねばなりません」

あの小さな右手が握りこまれればどうなるのか。

5年前、生まれた時に小さな手を強く握りこんでいた赤子姿の妹君を思い出すアイギス。

強く窘めても言う事を聞かず、右掌に瞳のような方陣を浮かべゆつくりと握りこんでいくフランドール。

潰されかけた喉では上手く話すことが出来ず、辿々しい発音で父への思いを言い放った、その後にくつろくおとう様なんて大ききら……という言葉葉を遮るように小さくアイギスの指が鳴る。

穿たれたのは瞳柄の方陣を浮かべていた幼子の掌。

小さな掌の中央を綺麗に穿たれて方陣は消え、フランドールがグツと握り込んでも全てを破壊する力は現れなかった。

フランドールの力に怯えをみせていた、偉大であるはずの夜の王が握りこんだ拳を少しずつ開いていく娘に迫っていく、後2歩くらい進めばフランドールの首に手が届く、それくらいの距離になった頃再度アイギスの指が鳴った。

パチンと鳴るとぐらりと片膝を着く紅魔館の現当主、娘に向かい踏み出した足を穿たれてバランス悪く前のめりに倒れこんだ。

「フランドール御嬢様も坊ちやまも我儘が過ぎますね、レミリア御嬢様を見習い我を抑え他者を守るという心も覚えるべきかと」

両膝を折り内腿を床にペタンと付けて座るフランドールと、無様に伏せる、坊ちやまと呼びたくなかった主の間にスコップを突き立て持ち手に両手をかけるアイギス。

態度こそ怒りを見せる姿で二人の間に立ち、悪戯し過ぎた幼子を叱るような肅々とした声色で二人に対して姉を習えとお説教を垂れ始

めた。

「坊ちやま、奥方様は亡くなられま…」

フランドールの名を呼んだ事でまだ間に合う、当主は壊れきつてはいないと考えたアイギスがまずは親から叱り始める。

親になったのだからなどと甘かった、そう考えていた自分の事も窘めつつ、怯え顔の子に戻ってしまった当主を諭していくアイギスだったが、途中で言葉を止めてしまった。

アイギス越しに末妹を見る当主の瞳に今まで以上に強い怯えが映ったからだ、当主の逆側にいるフランドールの方へと視線を流し睨むアイギスの紅い瞳、見つめる先はフランドールの穿たれていない左掌だった。

片手を穿ち一度止めた事でフランドールを後に回しても大丈夫、残った手も一瞬で穿つ事が出来ると確信していたアイギスだったが、その考えは愚策以外の何物でもなかった。

両者の間に立ち仲裁すると姿勢で示したアイギスだったが、気が触れてしまったように感じる二人に対してそれは無意味な姿となっていた。

ほんの数秒。

スカーレット卿の臥せる側である右側に右目だけを流して、妻は死んだと説き始めた瞬間、アイギスの左の視界の端でキュツと幼子の左拳が握り潰された瞬間――

アイギスの隣で這い蹲っていたスカーレット卿の体が、一瞬膨れればじけ飛んだ。

大きな血袋となり直ぐに爆ぜた夜の王者、部屋の全域と室内にいる三人を真っ赤に染め上げて大きな体は飛び散った。

真っ赤な返り血を肩の辺りに浴びるフランドール。

その左手も右手と同じく穿たれていたが、目線をフランドールからスカーレット卿へと移していたせいで、アイギスの能力はフランドールを止めるには至らなかつたようだ。

消えた父と左手に空いた真円の風穴。

アイギスのスコップにかけられた両手の上側、指を鳴らした後にそ



のまま緩く握っている、真つ赤に染まったアイギスの右手を見比べているフランドール。

父の返り血をアイギス越しに程々浴びて少し濡れたフランドールが、視線を泳がせて口をパクパクとさせながら、何が起こったのか、私は何をしてしまったのか、幼い頭で理解しようと必死に瞳を惑わせて情報を取り入れようとしていた。

「申し訳ございませんフランドール御嬢様、先約がございましてアイギスめが横取りを致しました」

フランドールと同じく父の返り血で染まるアイギスが、答えが欲しいというフランドールに向かい偽りの答えを述べる。

彼女が何かをして主を滅ぼしたわけではない、視界に広がる血の海からアイギスの仕業ではないと、彼女の能力や力の扱い方を知っている者なら理解出来る。

当主を殺めたのはアイギスではない、そう理解出来る者が部屋に一人いた。

愛する妹の破壊の力で爆ぜた父がいた辺りと。それを自身がやつたと述べるアイギス、二人の立ち位置を見つめて顔を動かしているレミリアがそうであった。

けれど表情は理解や納得といった理知的なものではなく、困惑しているというものだった。

フランドールよりは成長し物事を判断する思考力も身に付き始めていたが、それが余計に働いて正しい答えから離そうとしているようである。

レミリアの赤い瞳に映る光景はアイギスのやり口ではない。

ではないが、口を開いても何も発さない妹の両手はアイギスの手により穿たれている。

破壊の力を行使する両の掌を失った妹がいる今の状況から、本当にアイギスに父が殺されたのかもしれないと惑い、その可能性も考えてしまっていた。

レミリアの瞳に映る光景から得られるのはアイギスが妹に述べた物とは違っている、そう考えたいがそう理解するにはレミリアには疑

問ばかり浮かんでしまっていた。

先約とはなんだ？

幼い頃から見知った父を迷いなく殺せるのか？

殺した相手の娘に対して横取りなどと、態々怒りを買うような事を言うのは何故なのか？

アイギスを否定したい部分と肯定したい部分が鬩ぎ合い、疑問しか浮かばせられないままで困惑の表情を浮かべるレミリア。

困惑の表情を浮かべるレミリアとは対照的に、アイギスを真っ直ぐに見据えるフランドール。

「ヨコドリ？ おとう様はドコ？ ドコへやったの？」

「フランドール御嬢様に成り代わりアイギスがお父様を葬りました。横取りなどという粗相、大変失礼致しました」

両手を大袈裟に振るい雄弁と語るアイギス。

フランドールが父を殺めた事実を歪め、私が奪ったと嘘をつく。

父殺したという事実を横から搔っ攫ったアイギスに対して、言葉とは呼べない声で叫び、穿たれた両手でアイギスに向けて炎の剣を突きつけるフランドール。

両手で振り上げられる燃え盛る剣を、同じく燃え盛るスコップで受けると甲高い金属音が鳴り響く。全力で振られた剣を全力で、真正面から打ち返したアイギス。淑やかに笑んだままスコップを振りぬいてフランドールの両手を肘から曲げる、関節の曲がる方向とは真逆に曲げられたフランドールの両手。両の腕が逆に曲げられて動かなくなった事でやつと怪我をしたと認識したフランドールが泣き叫ぶ、喚くフランドールに向かい平手をかざしてアイギスが指を鳴らすと、糸の切れた操り人形のようにフランドールが床に臥した。

「な!! フラ…」

「意識を穿ちほんの少し眠って頂いただけですよ、レミリアお嬢様。明日にはお目覚めになられますのでご安心を」

「でも起きたらアイギスと…」

「少々強引に穿ちましたので、目覚められた時には今の事を覚えていないかもしれませんね」

床に臥せる妹の元へ折れた翼で瞬動し、フランドールを抱えてアイギスを見上げるレミリア。

抱える妹は力なく、だらりと腕を垂らしてはいるが息遣いは穏やかな物で、アイギスの言う通りただ穏やかに眠りにについているだけに思えた。

それでもアイギスが何故こんな真似をしたのかわからないレミリア、考える事も忘れて真っ直ぐにアイギスに問掛けた。

「覚えていない？ それにフランの代わりなんて言ったのは…」

「生まれて数年程度で親殺しなど背負う必要はないのですよ。ですが、妹君が成長し背負えるようになったと感じられた時には必ずお返し致します、それまでは棺を背負う事に慣れた私のような者が背負えば宜しいのです」

「それではアイギスだけが…」

「私が余計な事をしなければお父様が乱心されるような事はなかったかもしれませんし、アイギスは一つ過ちを犯してしまいました…悪魔でありながら約束を反故にしたお父様を見逃したのです」

レミリアの腕の中で穏やかに眠るフランドールを見つめて小さく呟くアイギス。

子や孫というにはかけ離れすぎた年齢差があるが、見た目だけでいえば年の離れた姉妹に近い晩成した黒羊と吸血鬼の雛達。

不器用過ぎるが妹を守り、父がこうなったのは私のせいだと言うアイギスにどう接していいのかわからないレミリアだったが、悲痛さを望ませる目つきで妹を見るアイギスを、この場では責められず言われた事を鸚鵡返しするしか出来なかった。

「お父様とのお約束？ 見逃したって…」

「レミリア御嬢様がお生まれになる前に仰っておりました、いつまでも幼子のままでいるのはやめると。お父様は『悪魔』である私とそういった『約束』を交わしたのです」

本来であれば契約の儀式を済ませて執り行う悪魔の契約であるが、成り立ちから代わりとして捧げられたアイギスにはそれは必要ないらしい。口約束でも文章での約束事でも、形式通りの契約でもアイギ

スが交わしたと感じられればそれは悪魔の契約としてアイギスの中では処理されるようだ。

随分と乱暴な契約であるがお陰で良い面もある、乱暴で雑な契約の取り交わし方のせいか、約束の内容次第では破つても命を奪われずに叱られたり窘められたりする程度で済むこともあるようだ。そうでなければフランドールに潰される前にスカーレット卿は死んでいただろう、それくらいやんちゃでそれくらい我儘で…フランドールの持つ無邪気さを持つていたスカーレット卿であった。

「幼子のままでいるのはやめる?」

「はい、親となり紅魔の主として偉大と成る。私という悪魔とそんなお約束をしたのです。本来であれば先日幼子の顔を見せた時に葬り弔うべきだったのですよ…だというのに、私は一度見逃しました」  
血で染め上げられた二本のリボンを摘み上げて、あの日に手を下しておけばと後悔する黒羊。

レミリアの前で初めて悲痛さを露わにし、肅々と言葉を垂れ流す。  
つまみ上げられて血を滴らせ始めたリボンを強く握り締め、数日前に訪れた際に見せた幼い少年だった頃の顔、当主のあの表情を思い出しながら静々と語るアイギス。

ゆつくりと言葉を紡ぎながらレミリアに話していく。

話しながら悲痛さをしまい込み、最後には淑やかに笑って見せた羊の悪魔。

レミリアの生まれる前の話で本当に約束を交わしたのかはアイギスにしかわからない事だが、アイギスとの小さな口約束を破って尻を叩かれた経験のあるレミリアには、悪魔として約束を重んじるアイギスの心情が少しだけ伝わったようだ。

「偉大になられた主様を見逃すなど…お父様の親でもないのに甘えを見せてしまいました。判断を誤った結果が先ほどの…私が成すべき時に成さなかった結果、フランドール御嬢様の手を汚してしまう事になりました」

床に突き立てたスコップでアイギス自身から漏らした魔力を掬い、フランドールの両の手へとかけるような仕草を取るアイギス。

逆に曲げられた肘は戻らないが、能力で穿たれた掌の穴は埋め立てられて綺麗に元へと戻っていく。

荒事や残飯処理といった仕事姿を見せないようにしていたアイギスがレミリアに隠していた『何でも穿つ程度の能力』の応用を見せた、穿った穴はスコップを用いてアイギスの魔力で直接埋めれば平らにならせるらしい。

いずれ記憶も埋め立ててきっちりとお返し致しますと言い切り立ち去ろうとする動きを見せた。

「何処へ行くの？」

「穿ち封じたとはいっても記憶を失ったわけではありません、アイギスの姿を見て記憶が戻る場合もあるやもしれませんので：妹君が立派に育つまでこの地を離れようと考えております」

「そう：でも、今離れられては困るわ、お父様は召されフランを守るのは私だけになってしまった、お父様がいないと知った者がここを落とそうとしてくるわ」

「そうですね、心弱い妹君を守れるのは貴女様だけとなりました。今後の事も仰る通りになるかと思いません、正しい見解だと思われませんが……」

レミリアの言葉から思い浮かぶのはアイギスに狼男をけしかけてきた、嫌味に笑う吸血鬼の貴族。

停戦し互いに争わない姿勢を見せていたのは、先代であるレミリアの父が強大な力を誇っていたからだ、そんな主がいなくなったと知れば、遺された娘毎この地を奪い領土を広げるだろう。

レミリアもアイギスもそう考えており、今のままでは抗うことも出来ずに終わると二人とも理解していた。

だが打開策はある。

今レミリアの近くにはアイギスがいる、スカーレット卿を幼子程度に扱い一蹴出来るアイギスが近くにいて頼れる状態にある、レミリアにとって喜ばしい事ではあるが、諸手を上げて頼るわけにもいかなかった。

アイギスの言う通りならば、フランの近くに身を寄せたままでは記

憶が戻り妹までも壊れる恐れがある、万一妹とアイギスが争うことになればアイギスは躊躇せずに葬るだろう。

一度父に対して甘えを見せ後悔したアイギスが、二度も同じ事をすると考えられない…だがそれでもレミリアがアイギスを引き止めた、二人が争う事はないという確信を唐突に得られたのだ。

「アイギスの課した封は失われないうわ、だから私達の側にいて欲しい」  
「先程から何か雰囲気…レミリア御嬢様、御力にお目覚めになられたのですか？」

「わからないけど、フランとアイギスが手をつないでいる姿が見えたの。怪我はしているけど二人とも無事なの、だから大丈夫」

「左様ですか、どういった流れでそういった運命になるのかわかりませんが、レミリア御嬢様がそう仰るのであれば心配する事もないのでしようね」

他者からすれば意味のわからない会話だが、自身の能力に目覚めたレミリアと先々代からスカーレット一族と関わるアイギスには会話の意味が理解できた。

スカーレットの血を引く者はある能力に目覚める事が多い、先々代からは『運命』というものに関わる力を得るのがスカーレットの一族なのだ。アイギスは聞いていた。

レミリアの祖父は『運命を視る程度の能力』

父は『運命を知る程度の能力』

という、他者の運命を覗き見、知れるといった物でその力を行使し紅魔館を盛り立て続けて来たからこそ、今の紅魔館があった。

「ご開眼おめでとうございます、その御力があれば安々と命奪われる事はないでしょう。後は研鑽し力を確かな物へと昇華させていかれるのが宜しいかと」

「力を磨けて事よね、妹を守り私も力を得るために頑張る…主つて大変なのね」

「まだ主とは呼べませんな。失礼を承知で申し上げますが力も知識もない、幼い吸血鬼でしかないのです…ですが主たる者として持ち合わせるべきものは持っている、それを磨く準備を今から始めてはいかが

でしょうか?」

「もっているモノ?」

「妹君を守りたいという意思、そのお心を確固たるモノにするために必要なのは研鑽するための時間。時間を得るには身を守る壁や盾がいる、私の名はなんと言うのでしょうか?」

引き止められ直ぐに姿を消さなかったアイギス、そんなアイギスに対して主として一人でどうにかしようという尊大な姿勢を見せるレミリア。

妹が出来たのだから目上の者になり守るべき立場になれ、というアイギスのお願いを覚えていてそれを成そうとする小さな主、その場で諭すだけのつもりで言った事を覚えていたという聡明さに関心を示したアイギス。

腕を組み腰を曲げて、妹を抱き座ったままにいるレミリアに近づき微笑みを見せる黒羊。

運命が見えるというのならアイギスが動かずに待っている理由も見えるはず、フランドールと手を繋ぐ運命が見えるというのなら今は離れるべきではないと考えたアイギス。

レミリアから聞きたい言葉を待っているという態度で、少しだけ挑発するような笑みを見せる羊の悪魔。

暫く待ってもレミリアからの言葉は得られず、もう少し追加しようかとアイギスが口を開きかけた頃、幼いながらも尊厳さを宿す表情になったレミリアが返答を始めた。

「…アイギス、お願いがあるわ。妹を守り通す、そう言い切れる様になるまで屋敷を守ってはくれない?」

「レミリア御嬢様からのお願いですし、このまま素直に頷きたく思いますが…折角ですので少し練習をしてみましよう、今は形だけでも構いませんので不遜に言い放つ練習を致しましょう」

以前は自身の店舗内で先代に向けて放った言葉を、次代の当主に噛み砕いて言い放つアイギス。

父譲りの青みがかった銀髪が紅い屋敷の灯りで輝いて、幼稚ながらも美しさを魅せようとしているヴァンパイアの小娘、挑発する笑みを

浮かべたままにしているアイギスに対して座ったまま、妹を抱いたまま翼を大きく開いてみせた。

父譲りの髪と母譲りの翼を翻して、精一杯自身を大きな者へとしようとする小さな吸血鬼、後は先代と同じように頼むのではなく申し付けてくれれば。

言葉にせず内で願うアイギスに対して、紅魔館という畏怖の象徴を受け継いだ幼きノスフェラトウが、アイギスの細いネクタイを掴み顔を近づけた。

タイを引いても悩み言葉を発さない次代の主。

数分そのままの体制で過ごしてから、一度強く瞼を閉じてみせたレミリア。

固く閉じられた赤い瞳が開かれるのを全く動かずに待ちつつづけている古い時代の悪魔、レミリアよりも黒みが強い、アイギスの赤黒い瞳に見られていては言い出しにくいのかもしれない。

練習なのだから強張ることもないなど、緊張をほぐす用にタイを引いている小さな白い手に褐色の手を添えて頭を垂れた黒い羊。

レミリアの眼前に二本の巻角が収まると、小さな咳払いの後、促された不遜さを身に付けて文言を吐いた。

「レミリア・スカーレット個人として依頼する。私が主として成るまで、我が願いが叶う時まで盾となりその力を振るえ。アイギスⅡシーカー」

「中々良い文言です、そうして少しずつ慣れていきましょう…そのご依頼、承りましてございます。終生の従者とは相成れませんが、御身が単身で畏怖と成れるその時まで…アイギスの名の通り、貴方様の盾となりましょう」

気丈に振る舞えど未だ幼気いたいけな幼女である小さな主。

不遜であれとアイギスに促されネクタイを強く掴んではいるが、紅い瞳には今後を憂い不安で堪らないという思考が漏れている。

タイを引かれ近づけられた幼子の顔を見て、何から始めるべきかと悩むアイギスだったが、まずはこの場を収めようと考えたようだ。

母に続き父も失い、妹までも傷つく姿を見たレミリア。



小さな肩に家督まで押し付けられてしまい、幼い体躯で受け止めるには酷な事が頻発しすぎている。長く続いた緊張に耐え切れず俯いてしまったレミリアの体を抱き、片手でも余る体躯の背を撫でるアイギス。

右手と左手に姉妹をそれぞれ抱いてそのまま立ち上がるアイギス、姉に掴まれたままの黒いネクタイにはポツポツと染みが出来始めた。先々に叱られて泣きついてきた先代と同じように、泣き顔は見せずに静かに泣く後の当主。

主となられるまでは泣きついてきてもいいかと、血の海の中で思いに耽っていた。

## 第四話 商い中の黒羊

夜を統べる王者が住まう、いや、住んでいた血のような赤のお屋敷紅魔館。

そのお屋敷の一階。

中央にあるダンスホールの中心で、踊るように槍を振るう小さな次期当主がいた。

幼い体の倍はありそうな朱色の槍を振るっては、真つ黒な、闇夜のような色合いをしたスコップに弾かれて体毎飛ばされている。

雑に捌かれて飛ばされているのがこの屋敷の主になるであろう吸血鬼レミリア・スカーレット。

未だ幼い身でありながら、この屋敷と愛する妹を守るという大役を、乱心し死んでいった父から押し付けられてしまったこのお屋敷の長女である。

そんな吸血鬼の長女が何故吹き飛ばされているのか？

答えを言ってしまうえば簡単な事で、屋敷を守るように依頼した相手と手合わせをしては毎回手酷くあしらわれているからであった。

父が死んでから十数年程が過ぎた今、一日置きにお屋敷の盾役に挑んでは毎度床を舐めさせられていた。

額に汗を浮かべて床に這い蹲る次代の主。

そんな吸血鬼を見下ろしているのは、スーツの上着を脱いでベスト姿の女。

黒いスコップを柄の中央で携えて、左手を背に回したままで余裕を浮かばせている。

普段よりも緩められたネクタイをヒラヒラとさせながら、淑女のような笑みを浮かべたままで全力のレミリアをあしらう羊の悪魔。その振り方ではなりませんねと、レミリアの槍捌きに対して苦言を呈し続けているアイギスⅡシーカー。レミリアが主として成長し一人でも畏怖と成るまでの間、屋敷の盾を務めている長命な悪魔である。

そんなアイギスに手酷くあしらわれては牙を見せて吠えるレミリア。

パカアンという軽快な金属音と共に弾き飛ばされた紅い槍を再度顕現させて、屋敷の壁や床を縦横無尽に奔り飛んで少しずつアイギスへと狙いを定めていく。

身に纏う薄いピンク色のドレスがブレて、一本の斜線と見えるような速度で動くレミリア。

360°を飛び回りながらアイギスの背中側に回り、アイギスの巻角のある角度、視界の外でちょうど死角となる角度から渾身の力を込めて槍を上段から振るうが、アイギスが片手で持っているスコップで軽々と受けられてしまった。

楽々と受けられてしまいレミリアの奇襲は失敗したかのように見えたが、それでも笑みを浮かべる幼い吸血鬼、その笑みはギリギリと押している手応えを感じた事から生じた笑みであった。

レミリアがアイギスの手ほどきを受け始めてから今日まで、互いに獲物を向けて力と力のぶつけ合いになる事などはなかった。

先ほどアイギスが述べた助言の前もそうだったが、挑み始めてから今の今までは何を振るっても一撃で槍を弾き飛ばされて、そのまま地を這い翼を踏まれてばかりだったレミリア。

アイギスが片手しか使っていないとはいえず、私でも少しはせめぎ合えるようになったのかもしれないと感じていた。

笑みを浮かべてアイギスを睨むレミリア。

血を吸うのに適した鋭い歯を見せながら全体重と腕力を以ってアイギスに槍を向け続け、少しの間続けられたつばぜり合いに高揚感と緊張感を覚えていた。

口を開いて吠えながら振るっている槍が、少しだけアイギス側に傾いた事で笑みを強くしたせいかわ、覚えていた高揚と緊張が高まり乾き始めていた下唇を小さく舐めてしまった。

「笑む余裕などありませんのに、舌舐りまで見せてはよろしくありませんね」

嬉々とした笑みを浮かべるレミリアに対して一言苦言を呈するアイギス。

レミリアの勢いと全体重、全ての膂力を片手で持ったスコップで受

けながら小さく窘めてゆつくりと片足を引いてスコップを斜めに傾けた。

固められたスコップの上を耳が痛い金属音をかき鳴らして滑る紅い槍、スコップの足をかける部分まで滑り落とされてそのままアイギスに槍を捻られた。

強く握ったままの槍を離さずに体毎回転させられたレミリア。

手ほどき時には必ず見られる、無様に地に伏せる格好になったレミリアの片翼に向かい勢い良くスコップを突き立てて、チヨロチヨロと飛べないようにと床に貼り付けにするアイギス。

両手で上半身だけ起こしてアイギスを見上げ歯を食いしばっているレミリアに、今日の手合わせのお終いを態度で告げる容赦の無い黒羊。

「良い勢いと牽制でした、死角から飛び込んで来たのも悪くないかと」「もう！ おつきい角で見えないはずのになんでわかるのよ！」

「仰る通り角の辺りは見えませんが、魔力を垂れ流したままでは死角に入ろうとも無意味ですね」

黒く強い癖のある髪の毛の横、人間であれば耳がある辺りより少し上から生やす大きな巻角を片手で撫でてから、レミリアの翼に突き立てていたスコップを自身の魔力へと戻すアイギス。

そのまま地に伏すレミリアを抱き起こしてパンパンとドレスを払う。

二、三度ほど優しく払い、忘れないうちに今日の復習を致しませうとレミリアに問いかけるが、手応えを感じたという嬉しそうな吸血鬼の返答を聞いてそれも駄目だと窘め始めた。

「先ほどの俊敏さと迷いのない槍捌きは良い攻めでした」

「でも…」

「でも、ではありません、本日はこれにて終い。この後はいつもの様に、私を討つ為の術を練るのが宜しいかと」

嬉しそうな顔でアイギスを見上げていたレミリアに向かい、次回の手合わせまでに対抗策を講じるように宿題を課すアイギス。

宿題を課せられたレミリアが嬉々としていた顔から答えが欲しい

という表情が変わるが、アイギスは甘えを見せず、これ以上言う事はないというようにレミリアの肩を掴み、くるりと体を反転させた。少々強引に回されて口を尖らせたレミリアだったが、反転させられた体を自身で回してアイギスへと再度向き直る。

「また内緒なの？ 教えてくれれば早いのに」

「盾役という仕事を受けていなければ少しくらいお教えしてもよろしかったのですが、今のアイギスはレミリア御嬢様の盾なのですよ？

盾の仕事は守る事と存じます」

振り向いてアイギスに歩み寄るレミリア。

アイギスの手の届く距離まで足早に近寄り、巻角を見上げながら何故教えてくれないのかという疑問を投げ掛けている。

それに対して凜とした態度で返答してみせるアイギス。

未だ幼い未来の主が己の力で妹を守るようになるまでの間、屋敷や吸血鬼の姉妹を守る盾としての役割を依頼として受けた商売人。

仕事として受けた以上それはきっちりこなすつもりでいるが、それ以外の部分は依頼の範疇外と捉えているようだ。

「そもそも鍛錬は依頼内容に含まれておりません、これは互いに暇を潰す為のアイギスからのサービスなのです。此度の依頼内容はお屋敷も御嬢様方もお守りするというもので、それ以上でも以下でもないのですよ」

先ほどレミリアをあしらっていた時から笑みを変えないアイギス。

問いかけてきたレミリアに依頼の内容とその仕事に対する姿勢を言い切ってから、脱いでいたスーツの上着に袖を通して緩めていたネクタイを締めた。

仕事外の時間は終わり、これからは依頼された仕事をしてくると引き締めた態度でレミリアに伝えて頭を垂れた。レミリアからの返答も待たずに踵を返して、コツコツと床を鳴らしながらダンスホールを後にするアイギス。

もうすぐ朝日が昇り始める頃合い、吸血鬼の時間が終わり人間や他の生物のほとんどが目覚め活動を開始する時間となり始めていた。

コロコと小さくお腹を鳴らしながら紅魔館の入り口近くに置いた

ソファアに腰掛けるアイギス。

吸血鬼であれば血を食事としてそれで満ちる事も出来たのだが彼女は純粋な悪魔である、眠りにつく屋根は同じだが食事まで吸血鬼とは行かず、最近アイギスの食料となる者達も訪れなくなってきていた。

アイギスが好んで食すのは畏怖や恐怖といったモノ、モノというよりも感情と言った方が正しいだろうか。先代当主が亡くなられてから数年間は、毎日毎晩と言っていいほど、他の地域を治める吸血鬼連中が刺客を放ち幼い吸血鬼姉妹を狙いに来ている、その度にアイギスに食料を届けてくれていたのだが…紅魔館を落とすために用意した駒。

その尽くが穿たれて、遺された遺体の一部だけが放った貴族の屋敷に届けられた。

綺麗に中身を練り抜かれて、中身がなくなるとも動き出しそうな、剥製以上の素晴らしい出来栄えになっては、放った屋敷に届けられるという異様な事が続いたせいで、十数年経った今は静かになってしまっていた。

「レミリア御嬢様に聞かれずに済んだのは良いのですが…さすがにひだる餓いですね」

スーツ越しに自身の腹を撫でて誤魔化そうとするアイギスだが、本人の言う通り、数年間まともな食事を取らておらず、さすがに堪えているようだ。

サービス等と言って言葉を濁し、次代の当主から少しの畏怖の念を頂いてはいるが、最近恐れや恐怖よりも高みを目指す向上心が強くなってきてしまい、長女から向けられる感情程度では間食にもならないようになっていた。

このお屋敷にいるもう一人の吸血鬼からも畏怖や恐怖を頂ける事もあるにはあるが、次女からは畏怖というよりも親しみというか情愛というかそういう感情ばかりが伝わってきてしまい、こちらも食事とは呼べなかった。

再度グルルと鳴るアイギスの腹。

一度店に戻り町の住人でも襲って喰えば多少は楽になるかもしれない、そんな事も考えてしまおうアイギスだが、元々が羊で草食だった彼女である。

捧げられた恨みから人を襲い物理的に喰らっていた時代もあったが、喰つても喰つても減らないどころか増える一方の口に合わない餌には飽いていて、今更喰つたところで足しにならないと考えていた。

「選ぶ余裕は…あるかもしれませんがね、久方ぶりの食事の機会…3人？ いや、4人でしょうか？」

ソファアに腰掛けたまま、瞳を瞑り外の音を捉え始めたアイギス。

このお屋敷に向かつてくる足音と歩く者達の布の擦れる音を捉えていた、背の高い者が3人、小柄で背の低い者が1人ほどの小さな集団。

日の登っている日中にこのお屋敷に向かつてくるお客人は限られている。

来るとするならば、肝試しに来ては帰れなくなる町の子供かそれを探しに来た町の大人、もしくは町人の依頼を受けて吸血鬼を狩りに来たハンターくらいしかおらず、今回のお客様は動き方から前者だと感じられた。

「味に期待は出来そうもないですが、腹の足しにはなるでしょう」

変わらずソファアから動かないアイギス。

視線を天井から正面の大きな扉に動かして、久々に食事の機会が来たと静かに胸踊らせていた。

ギイッと扉の蝶番が鳴り外からの来訪者がお屋敷に足を踏み入れたとわかると、深く腰掛けた姿勢から浅く座る体制に座り直して扉を望む黒羊。

二枚の扉の内右側が開くと、二人の男が屋敷に足を踏み入れてきた。

「女性の頭に羊の角？ いや、この穢れは…悪魔!? 落ちぶれた吸血鬼の屋敷のはずだ!? 誰もいないはずではなかったのか!？」

「吸血鬼の屋敷にいる有角の悪魔、バフオメット…貴様『弄ぶ墓守』アイギスか!？」

言葉を最後まで聞き終えた後にパチンと指の鳴る音が屋敷の玄関ホールに響く。

音が響いてから直ぐに正面の扉を開いた男達の胸から上が失くなった、血も流れずに丸く失くなった男の体がもう一人の男、同じ様に穿たれた男の腹に当たると、扉を支えにするように中途半端に引つかかってしまう。

体を傾けた男達の穿たれた胸元からは、体と同じ形に挟れた書物のような、何かの力で祝福されていると感じられる本が落ちて、紅魔館の正面玄関を紙で埋め尽くした。

「弄ぶとは心外ですね、墓守として弔う際には心からお悔やみ申し上げておりますのに」

言葉を聞くための耳は頭毎穿たれてすでない男達、唯の独り言として誰にでもなく訂正する言葉を紡ぐアイギス。

パサッと床に広がり散らばる聖なる紙片、足元まで広がるゴミを眺める紅い瞳。

どうやら本日のお客様は唯の町人ではなく聖職者連中のようだと理解し、それならばありがたい、美味しい部類の人間たちだと、久々の食事がよいモノになりそうだと感じ始めていた。

「な!?! 何が!?!」

追加で入ってきた三人目、低い声の人間が穿たれた仲間の遺骸を見て何かを発しかけるが、その言葉の途中で再度アイギスの指が鳴った。

指の鳴った反響音と共に男の下半身、足首から下が穿たれる。

その場から逃げるには不便な足の形になった男。

全力で逃げ出す事も出来なくなった男の方は一旦放置するアイギス。

「楽しみは先に楽しむ事にはしているのですが、お一人足りませんし、そちらの方を見つけてから戴くことにしましょうか」

もう一人は何処へ行ったのか？

外見からは見えにくい耳と、正面玄関から差し込む昼間の太陽光のせいで瞳孔が縦方向に閉じている、虚ろな横長の紅い瞳で探し始め



た。

「あ、悪魔め！ 我々が討たれようとも神はお前を許しはしない！」  
「貴方様方とは違いました誰かに許しを請う事などありません、私は寧ろ請われる側ですのぞ」

放置しようとした男がアイギスに向かい言葉を吐く。

述べている文言と着込んでいた白の法衣、首から下げた十字架から今日のお客人は聖職者だったのかと気づいたアイギス。

もう一人が見つかるまで放っておくつもりだったが、この男を餌にして姿の見えない最後の一人を釣り出そうと決めたようだ。

「しかし神ですか、身形と持ち物からすれば普通の神父でしょうか？ てつきり悪魔狩り専門の聖職者連中かと思っております」

「我々は神の御心を伝え歩く宣教師、あんな奴らと神の御使いであるわれらを一緒にするなどと…」

「そのように仰られても、私から見ればそれほど差がないように見えますね。手段が違っているだけで、神に届ける信仰心の現し方が少し違うだけでしょう？」

悪魔風情が我らの神を語るな！ という強い言葉をアイギスに向けて放つ神父。

両足首から下を失いまともに歩けないが、そこ以外の部分はまだまだ達者のようだが、何を言われても神に対して何の感情も抱かないアイギス。

彼らが崇め敬う神など悪魔であるアイギスから見れば成り上がっただけの人間で、他の人間と然程違いが感じられない者であった。「少々煩いですね、御嬢様方の眠りを妨げてしまいそうです。やはり放置はよろしくない、油の強そうな殿方は好まないのですが…久しぶりの食事ですし、贅沢は言っていられませんね」

しよ、と二つ程語句を言い返してきた神父様の横に一足飛びで向かい、身構えた両手を優しくヒールで踏んでいくアイギス。

少しずつ体重を乗せて片方ずつめり込ませていく、大の男が小さく呻く中グリグリと蹄代わりのヒールを捻り穿っていく。

床とハイヒールの底が当たりカッンという乾いた音が小さく鳴る

と、音と共に男の掌分ほど背の高くなっていたアイギスの背がいつもの高さに戻った、両手を貼り付けられても声を荒らげない神父様の頭を鷲掴み頭を持ち上げる褐色の悪魔。

久々のまともな食事を味わい、幸福感を覚えているアイギス。

今の心情と外見に似合った内君らしい笑みを浮かべたまま持ち上げた頭で光る瞳を指で抉り出す、さすがに声を我慢できず黄色い声で叫ぶ神父様、聞こえる声と垂れ流される感情のお陰で少しだけアイギスの腹も満ち始めたようだ。

男一人が発する死の恐怖で程々に腹も膨れたアイギス。

年経た男から感じられる油の強い食事はもういらないと掴んだままの神父の頭蓋を軽々握り潰す、骨の碎ける音と肉の弾ける音を聞いて笑みを強くした黒いスーツの悪魔がそこにはいた。

「死への恐怖、中々に美味でした。さあ、そこにいる貴方様も私の糧となつて下さいまし」

まだ締まったままの扉。

男達に開けられなかった方の扉の外で神父様の断末魔を聞いて動けなくなっていた残り、最後の背の低い者に向けて願いを伝えるアイギス。

姿は見られていない、まだ気付かれていないと考えていた最後の人間が、断末魔から何かに恐怖した瞬間にアイギスへと察知されていた。

お願いをしても動かない人間の足元を指を鳴らし穿つアイギス。

不意に失くなった足元に綺麗に落ちていった人間、キャアという高い声から最後の一人の性別が知れた。

「これはこれは、シスターだったのですね。てっきり年若い、お付きの少年かと感じておりました」

アイギスの問掛けに無言を貫く修道女。

二次性徴を迎えるか迎えないかという頃合いのシスターを、落としたり穴の上から見下ろして穏やかな笑みを浮かべているアイギス。

匂いを嗅ぐ限りでは雌の匂いがしない、だからこそ年若い少年だと錯覚していたが：こういった女の匂いがしない人間は決まって生娘

で、シスターだというのなら確実に処女だろうと確信するアイギス。それならば都合がいいと、シスターの頭に向かい雑に腕を伸ばしていく。

もうすぐ髪に手が掛かるといふ頃に逃げ場のないシスターが、アイギスの手に向かつて胸から下げた十字架を押し付けるが、手にもアイギスの顔色にも何の変化も見られなかった。

「最近の教会では悪魔に十字架が効くと教えているのでしょいか？」

それとも教会で語られる悪魔には十字架が効くのでしょうか？ …

どちらであろうと構いませんね、教会に戻る事はないわけですし」

押し付けられる十字架を気にせずシスターの頭を掴み、そのまま持ち上げてお屋敷の地下へと歩を進めるアイギス。

姉との暇潰しに興じた日は妹の機嫌が悪い、楽しげに争う二人の魔力にアテられて気が昂つてしまう事もあり、それを諫める為には腹を満たすか少し構って機嫌を直してもらおうくらいしかなかった。今日は静かにしているようだが、寝られないとぐずり始めてもおかしくない頃合いが近づいていて、構うのも良いが腹ごなし代わりに妹君の相手をするには些か食し足りないと考えているアイギス。頬に手を添えて考える素振りを見せてすぐ、フランドールに処女の生き血を味わってもらいながら、私もシスターの恐怖にありつこう。

男という油の強い食事の締めには甘酸っぱそうな少女でデザートとしよう、久々に味わう食事にしては贅沢だと、アイギスは一人笑みを見せながら、落とされて少々の打撲をしただけの、無傷に近い修道女を掴みあげて地下へと歩み消えていった。

## 第五話 来訪者

篠を突く雨が降る初冬の夜。

住人たちが好む血のような色をしたお屋敷から少し離れ、更に少し上った小高い丘にある二つの墓標、その墓標の前に一人瞳を瞑り佇んでいる者がいた。

欧州の短い時間だけ降る冷たい雨から身を守るよう、寒の時期にはレインコート代わりに偶に着ている、着丈が長くケープとコートを合わせたようなデザインの黒いコートに袖を通し墓前で黙する黒羊。

吸血鬼の弱点である流水、その一種である雨の中。

姿を晒す事叶わない今の雇い主達に代わり、一人で墓標に向かい静かに黙禱を捧げていた。

先代の主達が亡くなられてから百余年ほどが過ぎて、遺された姉妹達も以前より随分と成長し、アイギスが長女から引き受けた依頼ももうすぐ完遂できそうになってきた頃合い。

無事に成長されていますと、アイギス自身が埋めた、誰もいないとわかっていている墓標に向かい小さく会釈をして姉妹の成長の報告をしていた。

墓標の回りに並び立っている巨木が雨を遮ってくれてはいるが、時偶にアイギスの着ている黒のインバネスコートにも雨が落ちて、黒い生地を更に濃い黒へと濡らし始めていた。

ポツポツと巨木の葉をぬって落ちてくる雨粒、誰かが泣いているような雰囲気を見せる雨の夜だったが、墓標に向かっているアイギスの褐色の頬には濡れた筋のような物は浮かばない。

スカーレット一族という上客。

唯の付き合いのある客と呼ぶには少しばかり近づき過ぎていた、いもしない身内のような変な居心地の良さが感じられていた吸血鬼の家族。

その家族に対して見せたアイギスの甘さから、親殺しという取り返しの付かない結果になった過去を忘れられず…涙も見せず悲しむような事もしないようにならしていた。

「そろそろ戻りませんか、妹君が騒いでしまいそうですね」

雨の中一人で亡くなった者達の元を訪れて、次には今現在の雇い主の事を懸念するアイギス。

特別な思いを持つていた者達の墓参りをした後だというのに、どこか事務的な空気を纏う佇まいと態度で、偲ぶ者達に後ろ髪引かれるような事もなく直ぐに墓標に背を向けた。

情け深い人が見れば切り替えが早すぎてあまりに冷たい態度だと思われるが、成り立ちや種族、職業柄といった物を鑑みれば仕方がないと思えるだろう。

何もわからぬまま勘違いで捧げられ、悪魔として成り果てたアイギス。

知らぬ場所で首を落とされ死する瞬間まで自身に何があったのか、理解も出来ぬままに死んだ黒い羊が彼女の本質なのだ。

儀式の最中、首に刃を入れられて最後を迎えるまでに彼女が覚えた感情は、何故私かという疑問と儀式を執り行った者達への強い怨恨。

そんな黒い感情を持ったまま死んだアイギスが、誰か、特定の他者に対して情愛や慈愛といった感情を持つ事も見せる事も、本来であれば少なかった。

かった、などと過去形なのは、今は商売人として長く過ごしたお陰で、他者に対しての気遣いや心象をよく見せる方法も心得ているアイギス。

仕事を通し温情や臍貞というモノも多少は覚え、今現在のように上客の忘れ形見に対して、少しだけ仕事内容以上をする事も気紛れであるようだ。

月命日に肉親の代理で墓参りを済ませた墓守。

アイギス本人は生前臍貞にくれた主達に対するアフターケアだと言葉を濁すが、今日の代理墓参りは吸血鬼の姉妹から頼まれた事ではなく、自発的に墓を訪れているようだ。

あくまでもビジネスライクなお付き合いだと今の雇い主達には主張しているアイギスだが、先代に見せた老婆心や幼い姉妹に見せる優しい笑みは、ビジネスパートナーに見せる以上の何かを感じられる笑

みであった。

「お屋敷の方が少し騒がしいような、また狩人が狩られに来ているのでしょうか？」

遠くに見える紅いお屋敷の方へと耳を傾けるアイギス。

回りの木々や水溜りに落ちる雨音に邪魔をされて音は聞こえず、垂れ流される吸血鬼姉妹の魔力が騒がしくなった事だけを肌で感じているようだ。

普段の手ほどきでアイギスが身に受ける魔力が二つ、屋敷の中で奔っている。

その二つが追い掛け回しているのは、矮小な力で態度だけがデカイ吸血鬼貴族の誰かだろうか？

感じられる魔力が小さく、急ぎ戻らずとも姉妹達だけで十分に相手取ることが出来る手合だと感じているアイギス。

いつもの笑みよりも口角を尖らせて笑みを浮かべ、畏怖され続ける悪魔らしい顔つきで、もうすぐ子守も終わりかと、嬉しそうな少しだけ寂しそうな雰囲気纏い雨降る夜の山道を一人下っていった。

く少女移動中く

亡き主達の墓参りから数日した頃、屋敷のダンスホールの端にアイギスの姿があった。

上着を脱いだシャツにベストの姿で、両手を背に回して腰の辺りで組んで、ダンスホール全体が見渡せるように端に寄り壁に背を預けてホール内のあちこちへと視線を流していた。

アイギスの見つめる先には真っ赤な槍を振るう者と、炎を纏う杖のような歪な剣を力尽くで振り回す者が映っている。

槍と剣がぶつかり合い綺麗びやかな火花を発し散らしていく姉妹、互いに全力とまではいかないが相手の四肢を飛ばす勢いで携える獲物を振るい争っていた。

一見派手な殺し合いに見えてしまい、唯眺めているだけでいいのかと問いたくなる光景だが、ぶつかり合う度に話している内容がアイギスには駄々を捏ねる妹が姉に我儘を言っている程度にしか聞こえず、わざわざ止める必要もなさそうだと見守るだけとなっていた。

「なんで駄目なの！」

「どうしてもよ！ まだ早いって言っているの！」

一撃振るっては互いに受けて、その度に一言交わしては窘めている吸血鬼姉妹の姉、レミリア・スカーレット。

愛する妹の我儘をその身と槍で受けながら、貴方にはまだ早いと窘めてはほんの少しぐらついている。フランドールの剣戟を受けてぐらつくレミリアの姿から、純粹な膂力や腕力といったモノは妹君の方が上かもしれないと感じているアイギス。

魔力の扱い方や頭を使った戦法はレミリアに軍配が上がるが、身に宿す特殊な能力も加味すれば物理的な破壊では後々アイギス以上になるかもしれないと、姉を小さく弾く力を見せ始めたフランドールに期待の眼差しを向けていた。

「お姉様のおバカ！ 分からず屋！」

「わからず屋って…私はフランの為を思ってる！」

剣戟ごっこに飽き始めたフランドールが炎の魔剣を投げ捨ててレミリアに向けて手の平を見せる、手の平の中に瞳の方陣を成していき、その悪魔の瞳の瞼が少しずつ開き始めた。一方フランドールの手の平を向けられているレミリアも、妹と同じ様に手の平を開き大袈裟にフランドールに向かって開き腕を伸ばした。

レミリアの手の平に浮かぶのは妹の掌に浮かぶ瞳の方陣と同じ色をした真っ赤なナニカ、複数の大きさの違う輪が掌の上でゆっくりと回っている。

物として例えるならば天球儀、その台座のない球体部分だけがレミリアの手に収まっているように見える。丸い大小の輪が幾重にも折り重なり、中央にある一つの球体を囲っている、先代や先々代は脳裏に映像として浮かばせた運命を見ていたがレミリアの場合は少し違うようだ。

複雑に絡まり動いている運命の輪を顕現させて、それらを自身の思い通りに動かし始めるレミリア。

「間に合えば宜しいのですか、はてさて」

最悪の場合はすぐに止められるようにと、指と指を合わせて姉妹の

掌を注視するアイギス。

赤黒い瞳で見つめる先の片方、天球儀、その多重の輪とそれを支える何本ものスポークのようなモノがレミリアの掌の上でグルグルと回る。

大外の輪は右回り、内の輪は左回りに回転しギユリギユリと回った後、中央の球体に向けてスポークの先端がピタリと止まりするりと刺さる。

レミリアの掌の上で一つの指針を示した天球儀が動きを止めると、フランドールの掌の上で開きかけていた瞳が閉じ方陣が霧散していった。

「お見事、上手に操るようになりました」

合わせていた指を離し両手を胸の前で組見なおしたアイギス。

フランドールの身に宿る『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』から発現し握り潰そうとしていた瞳が、レミリアの発現させた『運命を操る程度の能力』によって無に帰されて、何もない掌を数度握っては悔しがってみせるフランドール。

暴力という意味ではフランドールに分があるが、身に授かった能力を操る事は数年だけ長く生きているレミリアが勝ったようだ。

未だ能力に振り回されて、ただの姉妹喧嘩であっても気が昂ぶると直ぐに我を忘れかけるフランドールでは、レミリアの操る力に抗えないらしい…今は。

「本日レミリア御嬢様の勝ち、フランドール御嬢様お一人での狩りはまた後日、レミリア御嬢様のお許しが出てからという事で宜しいですね？」

「うゝ…アイギスが指パツチンしようとするから気が散ったの！ なんでいっつも私だけパツチンされなきゃならないの!？」

アイギスに向かい素早く飛んで、勢い良く抱きつくフランドール。アイギスが先ほどまで合わせていた親指と中指を見つめながら、強くアイギスを抱きしめて負けた鬱憤を体全体で露わにしている。年齢100歳を過ぎた今でも、人間で言えば6才児程度しかない小さな体の吸血鬼を両手で抱き上げるアイギス。



不機嫌そうに頬を膨らませるフランンドールと抱き上げたアイギスの視線が同じくらいの高さになると、隣に喧嘩の勝者が舞い降りてきた。

「フランンドール御嬢様は壊すのが下手ですので、もっと上手に、好きに壊せるようにならないるまでは、アイギスの指パツチンが止まる事はありません」

「下手ってひどい！ なんでも壊せるのに！」

アイギスに抱かれ頬が触れ合う距離でプリプリと怒るフランンドール。

自身に宿る能力の扱い方が下手だと言い切られて、なんでも壊せるとアイギスのお説教を壊そうと返答をし始める。

けれどその程度では壊れることなく、更に叱り言葉を追加していくアイギス。

「なんでも壊せるのは当たり前なのです、そういった御力なのですから。壊れないように壊すなど、応用出来るようになりませんか」

「おうよう？」

フランンドールを窘めながら指を鳴らして壁から伸びる燭台の付け根を穿つアイギス。

付け根だけが穿たれて蝋燭が乗る台座部分が空中だけに残るといふ異様な光景がフランンドールの視界に収まる、おおと小さく呟くフランンドール。

何故台座が落ちないのか不思議そうだが、アイギスが自身の『なんでも穿つ程度の能力』を応用し台座の付け根が『見える』という常識だけを穿ち見えなくなっただけらしい。

「後で触れて確認されると宜しいかと、多分見えない台座の付け根に触れられるはずですよ」

「後でなの？」

「そうやって甘やかすから我儘が治らないの！」

「仕方がないので、喧嘩をして負けてしまった時にはお小言から私を守って、そういう狡い言われ方をされておりまして…それよりも、お客様がいらしたようですよ」

淑やかな笑みでレミリアとフランドールを見比べてそう述べるアイギス。

アイギスの笑みに笑みで返してから、レミリアに向かい口を横に伸ばして葉を噛み合わせ不機嫌さをアピールするフランドール。

フランドールの表情を見上げていたレミリアの眉間が狭くなつた時、閉じられていたはずの紅魔館のダンスホールから外へと続く扉が開かれた。

久方ぶりに訪れた招かれざる夜のお客様、昼間に偶に来る吸血鬼退治の専門業者とは少し様子が違う誰かが扉の奥から歩んでくる。

「不用心ですね、正面から入ってみればダンスホールで楽しく歓談とは」

ホールの扉の方へと目を細めて見やるアイギスへと声を発するお客人。

正面から不法侵入し声をかけてきたのは腰まである長い赤髪を濡らし、側頭部は編みこんでリボンを付けて垂らしている誰か。

夜に目立つ髪といい絞まった声色といい、いつだったか聞いた声のような、以前にもここで同じ様に間違われたようなと、思い出そうとしている素振りを見せるアイギス。

赤い髪の者と同じく、しつとりと濡れた黒髪を額から掻きあげて、邪魔な前髪を後ろへと流した右手が視線に入るとどうやら思い出したようだ。

「貴女様は…レミリア御嬢様のお披露目会で私の手を取ってくださいった方、でしょうか？」

「覚えられていたとは光栄ですね」

特に身構える事もなく自然体で佇む異国の妖かし。

お披露目会で見た両足の見えるドレスよりも、動きやすさを重視しているような、緑色の異国の服を身に纏う武人。

本来なら屋敷の盾として会話などせずに排除し、ホールの中で先ほどまで楽しくはしゃいでいた、アイギスが守るべき二人から侵入者を遠ざけるのが正しい仕事の姿勢だと考えたが、少しだけこの武人に興味を示したらしい。

彼女が荒事の最中に腕を取られる事などあまりなく、いくら本気でなかつたとはいえ安々と手を取って一言進言してきた武人。

色々と聞きたいことがある武人に対して、フランドールを優しく下ろし、下がっている瞳と雰囲気だけで促している。

手ほどきでも容赦しないアイギスが問答無用の姿勢を示したとわかると、静かに下がっていく吸血鬼の姉妹。

二人が武人の纏う気の制空権内から離れた事を確認すると、執事のように右腕を胸元に上げて小さく会釈をするアイギス。

「あの場では申し訳ございませんでした、良いところを見せようと張り切っておりますので…して、何故今頃？ 御嬢様方を狙うのであればもっとお急ぎになられた方が楽に済んだのでは？」

「貴女が雇われていると聞きました、仕事を終えていなくなる時期を見ていたんですが無駄だったようですね」

あのお披露目会にいたのだから、御嬢様方の命を狙う誰かしらが放ってきた刺客という事はわかりきっていた。

刺客に対して会話を求めるなど盾として無駄な行為ではあるが、それでも少しだけの会話を続けるアイギス。

「時期が過ぎれば私は去りますが代わりに御嬢様方が力を得る、力を増した御嬢様方を仕留めるには貴方様では力不足。最初から様子見する意味が無いと思われませんが」

「貴女と争うよりは、成長し始めた御息女二人を相手取る方が先が明るい、そう考えたのですがどうやらまだ仕事中的のようで…今、困っています」

「早いとわかりながら引きもせず請いもしない、武人としての誇りでしょうか？」

「そう捉えて頂けると気が楽になりますね」

話を聞くべきではなかったと苦笑するアイギス。

仕える先の主すら凌駕するかもしれない雰囲気、覚悟を身に纏い矜持を見せる古強者といったこの手合、こういった手合はしつこくて最後まで折れないから面倒だと、小さく溜息をつくアイギスであった。

立場は違えども仕事に対する姿勢を見せる時がどんな時なのか、商

売人として依頼を完遂する事を心がけそれに少しのプライドを見せるアイギスにも、武人の見せた誇りが何を意味しているのか理解できなかった。

自身の思考を殺して主の望む動きをする、確実に折れないだろうこの武人を面倒事だと認識したアイギスであった。

「そういったプライドを見せるのですし、それに対する私の返答もわかりなのでしょう?」

「ええ……このままでは帰る先もない、お手合わせ願います」

「お付き合いするつもりはなかったのですが、フランドールお嬢様にはまだあの時のような教育をしておりますね……お手合わせ、了承致します」

淑やかさを薄めて外法者らしい底意地悪い顔になるアイギス。

表情が変わったことで武人に少しの緊張が走るが、顔色を変えただけで何かをするという動きは見えない。

けれどこのまま対峙し続けていてもどうなるという事でもない、どちらにも折れる気配がないと察した武人が先に動きを見せた。

小さく息を吐いて瞬時に姿を消した武人、音もなく動いて瞬時にアイギスの正面に迫る。

少し低く構えて疾つと言葉を吐きながらアイギスの顎に向かい、空間を裂くほどの勢いで鋭い掌底を放つ。

赤い髪を振り乱して放たれた右の掌底がアイギスの顎先へと届きかける瞬間——アイギスの顎先が遠くなる感覚を覚える武を誇る者。

両者並び立つと高いハイヒールの分だけアイギスの方が背が高いが、それでも相手との距離を見誤るような、生半な拳を放つような者ではないと感じられる、そういった気迫があった……のだが掌底は届かずに空を切った。

端から見ていた者にはよくわかる事をアイギスは何の動作もせずに行っただけであった、単純な話、アイギスの顎に掌底が迫る瞬間に、ヒールのつま先から前方向へと武人の足元を穿ち床の高さを狂わせただけであった。

アイギスの眼前で空気を割いて天を突いた掌底、避けられずに避け

られるなど武人の想定外で完全に伸ばし切った武人の左腕。

ほんの一瞬だが完全に動きを止めた武人、その隙を見逃すアイギスではなく小さく指を鳴らした。

けれど音が響いた時には武人が動きを見せ始めており、狙い通りの体の中心、心の臓を穿つ事はかなわず、武人が体を右に逃した事で左腕から脇腹の部分までを穿つだけに留まり、この場から削る取るまでには至らなかつたようだ。

再度両手の指を鳴らすアイギスだが、武人が避けるであろう先、武人の傾いた体の先を穿つが何もない空間と天井から下がった灯りの端を穿ち削りとるだけで、逃げずに屈んだ武人を穿つことはなかつた。

一度屈んで足に力を蓄えた武人の足がアイギスの足を払うように横に一閃と奔るが、勢い良く飛び上がるだけで難なく回避するアイギス。

飛んだ事で一瞬だけ無防備になるが、勢いを殺さずに天井に向かいそのまま体を反転させるアイギス、そのまま気にせずに天井にハイヒールを打ち込んで体を支える楔となし、武人と一旦距離を取る形となった。

「避けずに居直るとは、少々侮っておりました」

「引かずに攻めた結果避けられたというだけです、不可視の攻撃がこうもやりにくいとは…音が鳴らずともこう出来るとは思ってませんでしたね」

通常の床よりも階段二段分ほど下がっている位置からアイギスを見上げる武人。

上下逆さまな状態でも気にせずにいるアイギスに向かい、穿たれて低くなった床を足裏で擦り素直に感心する姿勢を示す、命のやり取りをしている二人にしては悠長な会話に思えるが、互いに何度も死線を潜っているような手練である。

多少の会話も互いの情報を引き出す事として使える、だからこそ相手の言葉をよく聞いて己の中で噛み砕いているのだろう。

過去、一度武人に見せた発動方法以外にもあると知らしめたアイギ

ス。

それに対して感心してしまい、腕を失い片腹と肺までを穿たれてヒューヒューという呼吸音で身構える武人。

どちらが上でどちらが下なのか、立ち位置通りに見てわかる状況となっていた。

「御身体がそうなくてもお元気なものには何かタネがありそうですが、まあいいですね…お名前を伺っても？ 名無しでは後々で困りますので」

「紅美鈴と彫って頂けるとありがたいです」

「フォン・メイリン？ ファーストネームはないのでしょうか？」

「失礼、ホン、ですね。この辺りに習って言うのならメイリン＝ホンとといった感じです」

天井から下がったまま畏まりましたと瀟洒に返答するアイギス。

その場から動かずに愛用のスコップを顕現させて、頭の巻角と同じ色合いの持ち手を擦り刃の先に炎を宿していく。

アイギスの隣から下がる灯り以上に明るく、けたたましい音を立てながら燃え盛る黒いスコップを軽く振りかぶり美鈴に投げつける。

空気を焼きながら飛んでいくスコップを怒号のような大きな『発』という言葉を発して弾く美鈴、動くよりも何か魔力のような物を発して弾く事で回避してみせた。

けれど直ぐに逃げ回る羽目になったようだ、一本目のスコップを弾いた後、すぐに二本目三本目という燃え盛る切れない刃が美鈴の視界に飛び込んできた。

美鈴の逃げるだろう先や足を下ろす予定の場所に先んじて刺さっていく何本もの黒い刃、体を翻したり急制動を掛けてみたり緩急をつけて逃げる美鈴。

そんな逃げ一辺倒な美鈴に対して天井から動かぬままで自身の周囲にスコップを顕現させてはそれを燃やし、美鈴に向かい投げ込んだり蹴りこんだりしていくアイギス。

ドカドカと刺さっては刃先が刺さる床が穿たれて高低差の酷い、ともに踊れる事は無理だと思える姿になっていくダンスホールの床。

片足のヒールだけを天井に穿ち、両手と片足だけで踊るように自身の獲物を放つていくアイギスが、逃げるために急制動を掛けた美鈴の足に向けて小さく指を鳴らした。

フランドールの言う指パツチンの音がホールに響き渡ると、制動するために出した足が失くなり勢いを殺せなくなつた美鈴がホールの赤い壁に向かい大きな音を立てて突っ込んだ。

ガラガラと音を立てて埋まっていく緑色の武人、赤い瓦礫で埋まる辺りに向けて笑みを浮かべて指を向けるアイギスだったが、今まで静観していた幼い吸血鬼の声で動きを止められた。

「そこまでにして頂戴、アイギス」

「構いませんが宜しいので？」

「手合わせなんでしょう？ それなら決着はついたわ」

言葉の綾だとは思うが雇い主が止めるなら、と天井から床へと降り立つアイギス。

ボコボコの床の上をカツカツと音を立てて歩み、瓦礫の前へと近寄っていく、大きな瓦礫を雑に掴んで数個ほど取り除いていった。

取り除いた先で壁にめり込む形で止まっている美鈴、見る限り方は動いていてまだ生きていると感じられた、思った通りしつこい手合だと珍しくクスリと声を出して笑むアイギス。

アイギスの声で気が付いたメイリンが半身を埋めたままで、手合わせの終いを告げたレミリアに向かい吠えた。

「邪魔を……」

「お前は使えそうだが、このままでは帰る先がないらしいな……帰らなくていい、私が使つてやる」

埋まりながらも乞うような素振りの見られない美鈴。

瓦礫に埋まる腕を引き抜いて、片足で器用に立ちながら使つてやると言い放つたレミリアに対して片腕で構えるような仕草をしてみせた。

対面するレミリアに対して言葉ではなく拳で抗う姿勢を示すが、レミアの掌に赤々と輝く槍が顕現し、いつでも美鈴を刺し貫く事が出来るというような余裕のある態度、傲慢さの見える態度で翼を翻し再

度紅魔館の主らしい姿勢を示すレミリア。

「敗者が語るな、聞かれた事だけを答えろ」

「お披露目会で見ていた時はもつと弱気な…いえ、なんでもありません、選択肢はないようですし今日より貴方様にお仕え致します」

「それでいい…では美鈴、先ほどの、声だけでスコップを弾いたアレ：どうやったの？ 教えなさいよ」

不遜な態度で敗者を拾い上げたレミリアに一瞬関心を示したアイギスだったが、その後目を輝かせて教えなさいと言った長女の顔を見て感心した事を忘れることにしたようだ。

輝く赤い瞳で緑色の敗者に向かい何かの言葉を発しているレミリア、仕事が終わったのならもういいと踵を返すともう一人の輝く赤い瞳を持つ妹がアイギスを見つめながら飛びついていた。

「お終い？ あの人生きてるよ？」

「お姉様が終わりだと仰られたので終いです、後はお任せしましょう」

何かを話し始めた美鈴とレミリアに対して背を向けるアイギス。

正面からアイギスに飛びついたフランドールにはアイギスの背中側の景色が見えていて、フランドールの瞳には姉が敵対者に向けて手を差し伸べている姿が見えていた。

「あの人、メイリンだっけ？ うちに住むんだって」

抱きつきながら後ろの光景を実況してくれるフランドール。

フランドールの視界の先にいる姉を真似たように、色とりどりの寶石がぶら下がる翼を大きく開いて姉の態度を真似ている。

アイギスの片腕で抱き上げるには少し大きな体となった妹と、妹が真似るような大きな態度を言われずとも取れるようになった姉。

二人とも立派に育ち力も得た、頼りになりそうな従者も得て、後は生涯の友でも得られれば主としては十分だろう、そうなればもう盾は必要ない、そんな事を考えるアイギス。

先日姉妹の親の墓前で報告した通り、吸血鬼姉妹の確かな成長を感じている。

後々でホールの床と美鈴をゆつくりと埋め立てて元に戻し、心残りを失くして今回の依頼の完遂と成そうと決めたのだった。



## 第六話 別件依頼

美しく青い川と北方に白い雪の被る山脈を望む地、その地の何処かに建つ血の屋敷。

その屋敷の昼間の間を全て預かり掃除から警護までをこなす異国の者が、今日も忙しなく屋敷の中を動いている。

派手な調度品を丁寧に磨き上げたり、佇めば顔が写り込むほどに磨かれた床を更に輝かせたりと、雇われの使用人らしく毎日を忙しく過ごしているようだ。

唯のモップや掃除用具などでよくやると、本来ならばいなくなったはずの黒い悪魔が驚くほどの手入れのされようである。

「これほど手入れが行き届いているのなら、御身体に障る事もないのでは？」

ピカピカに磨き上げられた床や窓、同じく輝く調度品を見ながら、黒い悪魔が横に立っている二人に向かって何かの確認をしていた。

促されて回りを見ている二人組の男女。

寄り添い立つ姿からは、長く連れ添っているという雰囲気が見て取れる。

薄く紫がかったピンクのローブを着込んでいる女性と、濃いグレーのローブを身に纏う男。

華奢な女性の体に対して少しばかり大きめな、悪く言えばだぶついで見えるような、ローブラしき何かの裾を見ながら、埃一つないことを確認させていた黒羊。

主が消えた屋敷のはずなのにこれほどとは、と驚いてみせるのは、黒羊の悪魔アイギスよりも幾分背の低い男の方。

男も女もどちらも見た目は人間だが、その身形や体に宿し巡らせているモノが唯の人間ではないと物語っていた。

この二人が身に宿すものは魔力。

本来人間が持ち得る事など叶わないはずの、膨大な魔力を身に宿した種族魔法使いのご夫婦が、旧知であるアイギスに屋敷までの護衛を依頼をして今晚三人で紅魔館を訪れていた。

「優秀な使用人がいるのです、警護役も兼ねたその者が手入れもしているのです」

「スカーレット卿が亡くなられた後、随分荒れたと聞いていましたが…その話が嘘のようです」

床や灯りに向かい掌をかざす黒いスーツの袖、その腕に促されて回りを見渡して、昔と今を悲痛な面持ちで比べている種族魔法使いの男性、ノーレッツジ氏。

悲痛な表情でいる旦那様を見て、そう言った物言いは非礼が過ぎます、と窘めているのは紫がかつた髪を紅魔館の灯りの中で揺らす種族魔法使いの女性、ノーレッツジ婦人。

共にレミアアのお披露目会で姿を見せて跡取り娘の誕生を祝福してくれた、先代であるスカーレット卿の古い友人である。

アイギスからすれば上客のご友人という顔見知り程度の間柄ではあったが、夫婦から見ればそうでもないらしく、特に奥方様から友人とは違った目線で見られていた。

「確認は取れたようですよ、大丈夫だと思われるのでしたら早いほうが宜しいかと」

「そうですね、アイギパーン様がご健在で助かりましたわ。護衛などと恐れ多い事をお願いしてしまって…」

ただの羊の悪魔であるアイギスを別の名で呼ぶ婦人。

こう言われる度に訂正し続けているアイギスだったが、何度訂正しても直されず、ましてや今は雇い主として見ているため、訂正するのにも失礼だと感じて何も言わずにいるようだ。

彼女達種族魔法使いの女性陣。

俗に言う魔女と呼ばれる者達が昔から好んで信仰し崇拝するのが、先ほど呼んだアイギパーンという悪魔。

正しく言うならば、アイギス達バフオメットと呼ばれる悪魔の原型は古代ギリシャの自然神であり、その名がアイギパーンなのである。

この神の名がアイギスの名の大元のようなのだ。

勘違いから生まれた名無しの、唯の羊の悪魔が呼び名もないまま過ごしていた過去、神の名をもじりアイギスと悪魔崇拝を始めた者達が

いたのが名の始まりのようだ。

「後はご夫妻次第。体の弱い御息女様の為にも、誠意ある姿勢で交渉事に望まれるのが宜しいかと」

本当にありがとうございましたと頭を垂れるご夫婦。

夫婦に対していつもの姿勢、執事のような仕草で頭を垂れてまたどうぞと、完遂したそばから次回の利用を願うアイギス。

赤いお屋敷の緩いアールのついた階段を並んで上っていく夫婦の足音を、大きな巻角から感じる振動と見えにくい耳で感じ取っていた。

「先程のは…御嬢様のお披露目会にいらしたご夫婦でしょうか、随分とやつれているように見えましたか」

「ええ、貴女様と同じくいらつしやいましたよ」

吸血鬼の長女がいるだろう謁見室へと上っていく夫婦を見送っている背中。

アイギスのその背中へと声をかけたのは屋敷の奥に続く長い通路の方から現れた、新しく従者として引き込まれた紅美鈴。

従者となっても東方の何処かの国、美鈴の生まれた地の衣服を身に纏ったままで紅魔館の中では随分と浮いて見えている。

美しく赤いロングヘアのお陰でどうか赤い屋敷に似合うように釣り合っている、と美鈴本人は言うがアイギスから見ればそれでも浮いて見えていた。

「スカーレット卿の古いご友人です、本日はお二人からの依頼を受けて護衛として伺いました」

「護衛…少し前から盛んになってきた魔女狩り、ですか」  
亡くなられた先代の友人。

その友人から、魔女狩りという蛮行から御息女を守るような先を探して欲しいという、ノーレッツ夫妻からの此度の依頼、その隠蔽先としてアイギスを選んだのはかつて過ぎた紅魔館であった。

今言葉を交わしている美鈴を従者として引き入れた当主の器の大きさを思い出し、同時に良き友が出来ればと考えた事も思い出して、多少の年齢差はあるが親世代が友人同士であるのなら子世代でも良

い関係になれるかもしれない。

そういった思惑の下にこのお屋敷を御息女の秘匿場所として選んだようだ。

「ノーレッジ夫妻の住まう辺りにも手が回り始めたようで、御嬢様次第ですがこのお屋敷で匿う事になるかもしれないですね。その際にはどうぞよしなに願います、紅様」

美鈴に向かい深々と頭を垂れる、同じく雇われの従者兼墓守。

なるかもなどと可能性の一つとして話してはいるが、その態度は確定事項だと伝えているように見える。

言われたお屋敷の従者も、そうなるとわかっているような表情で言葉聞いていた。

自身が引き入れられた事から鑑みて、小さな主の懐の深さを理解しているらしい。

「御嬢様が許可されるならその時は快く…そのお話合い、アイギス様は参加されなくても宜しいので？」

「私にはそう言った役割はありませんし、余計な口出しは致しません」  
参加しないのかと問われ、下げていた頭を上げて営業スマイルで参加しないと切り切るアイギス。

態度は商売人らしく人受けの良いやわらかな物であるが、言葉だけ聞けば突き放すような冷たさが感じられる。

「余計、ですか…御嬢様方も最近アイギス様が構ってくれないとご機嫌斜めですよ、同席された方が話が早いのでは？」

「宜しいのです、わたしがいない事にも慣れていただかないと先々困ります」

会いたくないとは言わない、けれど会えばまた甘えを見せてしまうかもしれない。

レミリアが単身で畏怖となるその時まで、という依頼だったはずが、いつの間にか御嬢様方と屋敷を守るといふ形が当たり前になり、それを良しとしていたアイギス。

個人として考えるならば悪くない過ごし方ではあったが、商売人として、悪魔として契約以上の事をしてしまったような自分を少し恥じ

ていた。

姉妹や美鈴からすれば然程差の感じられない感覚だろうが、純粹な悪魔であるアイギスとしては一度甘えを見せた相手の忘れ形見に對して、再度甘えを見せまた約束や契約を見逃す事になるのが酷く嫌だった。

「側にいないというだけで消えるわけではありませんし、またご鼻屑として頂きますよ」

そうはいつでも吸血鬼姉妹の事をビジネスパートナー以上に見ているという自覚はある、だからこそ余計に距離を取っているように思えた。

二百年以上前の事を未だ引きずる齡数千年の古い時代の悪魔、一度体感した事を長く覚え忘れられずにいるとわかっているから、自衛の為に距離をとっているのかもしれない。

「なるほど、差し出がましい事を言ってしまいました…話しついでに、一つお願いがあるんですが」

「お気遣い感謝致します。して、お願いとは？」

「紅様というのはどうにもむず痒くて、せめて美鈴と…」

「お断り致します、場合によっては貴方様から仕事を得る事にもなりかねませんし、その際に言い直すのも手間です」

他者には聞こえない声で何かを呟く使用人。

アイギスにも聞こえないくらいに聞き取りにくい、何処か別の国の言葉を小さく述べて交渉に失敗したと苦笑する美鈴。

そんな美鈴に對して、言われた事は一切気にせずに、商売人らしい文言を吐いて距離を置くような仕草を見せるアイギス。

呼び名程度で何が変わるといってもないが、物事に対する名称というのは大事だと感じていて、その辺りから気安い呼び方を嫌っているように見えた。

美鈴に對してもそうであり、レミリアやフランドールに對しても必ず御嬢様と付けて距離を取り続けるアイギス。

雇われではなくなった今、吸血鬼の姉妹や美鈴からすれば年の離れた友人という感覚で見られているようだが、あくまでも商売相手とし

か見ないように務めている棺桶職人。

頑な過ぎて頑固だと思われそうだが、スカーレット卿を殺めた時の『おとう様をドコへやったの』と言った時のフランドールの顔や声がいっままでたつても忘れられず、近くになる事を拒んでいた。

レミアアが言った、アイギスとフランドールが怪我をしながらも手を繋いでいる未来。その怪我が、アイギスがつけた傷かもしれない、そう考えることもあり、手の掛からなくなった今は距離を取って離れるように心がけていた。

く少女帰宅中く

紅魔館で立ち話をしてから数日。

何処かの町の外れ、日中であれば人間でも訪れる事が出来る距離に、人間とは違う種族が営む店がある。

丁寧に削られて合わせ目のピタリと揃う、風の通るスキマもないような木材がふんだんに使われた、石造りの家や店舗ばかりのこの辺りでは珍しい木造で組まれた外観。

暖炉用の煙突以外はほとんどが木造だが、外観のドコを見ても丁寧な仕事成されており夏は湿気を吸って冬は石よりも冷ええず、定期的なメンテナンスさえすれば快適に過ごせる造りの建物。

正面で目立っている重たい一枚板の扉にはこの建物が何なのかわかるように、店舗の名前が彫られた板が掛けられている。

両面にOPENとCLOSEDと書かれている開店と閉店をついでに告げるこの店の看板、店舗内の薄暗い灯りこそ灯っているが作業する音等は聞こえず、今の時間は看板のCLOSEDが物語る通り閉店しているようだ。

店の中には、綺麗に練り抜かれた狼の頭がカバー代わりにされたラントンを灯して、人間が過ごすにはだいたい暗い店内でカウンターの奥で、足を組み椅子に腰掛け、鋏など仕事道具を磨いているこの店舗の女主人がいた。

「魔女狩りなど、飽きもせずよくやるものです」

盾役という依頼をすませ店舗に戻り、一人窓から望む遠くの空を見つめている、この店の主人アイギスIIシーカー。

受けていた依頼を途中で投げ出したというわけではなく、レミリアからの仕事の他にもう一つ受けていた魔法使いの夫婦から受けた仕事の為に一旦自身の営む店へと戻り、立ち昇る黒煙を窓越しに眺めていた。

少し大きめに作られた窓から見える空、午後の青空の中をモクモクと立ち上っている黒い煙を眺めては、誰もいない店舗の中で一人言を呟いている。

上っている煙は一番近い街の中心部辺りから発生しているようで、今日は午前中と今の二回ほど煙が立ち上っているように見られた。

一度目は野太い男の断末魔と共に煙が立ち上り、二回目の今は少し前には耳に痛い女の悲鳴が町外れにあるアイギスの店まで聞こえ、焼け焦げていく肉の匂いまでもがすすかに鼻に届いていた。

「迎えに出ればよかったですでしょうか？ ですがそれでは契約外となる、我ながら悩ましいですね」

窓から見える黒い煙に語りかけているアイギス、彼女が今考えているのは先日紅魔館を訪れた魔法使い達の事。

レミリアと夫妻の交渉は上手く纏まり、魔法使いの家族全員が紅魔館で匿われる事になっていた、なっていたはずであった。

本来であればアイギスの店で家族と落ち合い、そのまま赤いお屋敷に向って、今頃は家族三人お世話になっているはずだったのだが、アイギスの店で会うと約束した期日より二日が過ぎても未だ姿を見せていないようだ。

「ごうも悩むようになったのは、妹君にいらぬ世話などしたせいなのか：それは兎も角として、ご来店のようですね」

天へと登っていき遠くの空で消えていく、誰かを生きたまま焼いた黒い煙。

その軌跡と匂いを眼と鼻で感じながら別のモノにも気が付いたアイギス、自身の店舗に向かい息を荒らげて走ってくる者がいる、大勢に追われ追い立てられている、知る魔力を持つ者が向かってくる気が付いた。

気がついてから時を待たずにドンドンと鳴る重たい扉、力ない腕で

店舗の扉を叩く音がして、その手や体がある辺りには最近感じた魔力に似た力が感じられた。

「開けて！・お願い！・お願いします！」

仕事の最中以外での荒事には関わらない。

多少残酷だと言われたしても取り合わないアイギスだったが、今は依頼として受けて人待ちをしている最中。

待人達の持つ魔力とはほんの少し違うように感じられるが、姿を見た事がない御息女もいたはずだと、悲鳴に近い声を上げる者を迎えるために扉を開いた。

ギイっと重たい音を立てて扉を開くと、アイギスの胸に勢い良く飛び込んでくる華奢な少女。

アイギパーンと呼んできた婦人に似た見た目に、同じく似た召し物を纏う少女が焦燥した顔つきで飛び込んでくる。

焦りしか見えない少女の背後には店舗を取り囲む程の数の人間達、清められた白のローブを身に纏い大きな十字架を胸から下げている、何処かの大きな教会に属するだろう聖職者の集団。

頭に大きな巻角を生やし赤黒い瞳と褐色の肌を持つアイギスに対して、悪魔だとか異端者だとか色々と言っては騒がしくなり始めた。

「営業妨害されては困ります、騒ぐのであれば他所で」

一言だけ集団に言い切つて乱暴に扉を締めるアイギス。

ギイっと音を立てて扉が閉まると、更に外が煩くなり始めてしまった。

怯えを見せる少女を椅子に座らせて落ち着かせるように小さく指を鳴らすアイギス。

指から生じたパチンという音が店舗の中で、響くと外の喧騒が引いて途端に外が静かになってしまった。

突如訪れた静寂に驚き、外の様子を伺おうとする少女に対して、何かをしたはずのアイギスは何事もなかったような顔でいる。

驚いたままの少女と対面するように、椅子を並べ腰掛けた。

「外が気になりますか？ ノーレッジの御息女」

扉の外を気にして落ち着かない、対面している少女に向かいはつき



りと言いつ切るアイギス。

はつきりとした名前ではないが、話していない相手に出生がバレているとわかり少しだけ驚き、直ぐに畏敬の念を瞳に称える少女。

母に似た色合いのゆったりとしたローブと、同じ色合いの少し大きな帽子を被り、下を見る度に帽子の月が床に向かって沈むように見える魔法使いの少女。

「いきなり訪れてしまいました…ありがとうございました、アイギパーン様」

「大した事はまだ何も、それと、呼ぶのであればアイギスとお呼びください…ご両親はご一緒ではないのですか？」

母のように別の名で呼ばれるが、アイギスはそれを訂正し話を別の方向へと運び始めた。

本来であればこの少女と両親の三人が伴って訪れるはずが、強い怯えと焦燥感を漂わせる少女しか店に訪れなかった。

聞かずともどうなっているのか、昨今の時勢から理解できるがただの思い違いという事もある、出来ればそうであつて欲しいと感じて覚える少女に問いかけていた。

「吸血鬼のお屋敷から戻つてすぐ…」

途中で言葉を失う魔の少女。

そこから先は言わずともしつかりと伝わったようだ、アイギスの表情から営業用の薄笑みが消えて冷ややかな顔が浮かんだ。

座つたままではあるが組んでいた足を揃え直して、少女に向かい丁寧な礼をしてみせるこの店舗の主。

「ご冥福をお祈り致します、もし亡骸が残っているのなら昔のよしみで丁寧に弔わせて頂きますが…まずは貴女様をお送り致しますよう、少々煩くなりそうですがそこはご勘弁を」

言葉を発しながら外へと続く正面扉と裏口を気にする仕草。

営業用ではない冷酷さが宿る瞳で正面を、角と髪で隠れた耳で裏手を感知し指を鳴らすこの場での絶対者。

裏口の方に向けて音が鳴り店舗の中で反響し、その音が消え入る前に動き出すアイギス。

魔法使いの少女の手を取りカツカツと正面から打って出る。  
重たい扉を開く。

何か書物のような物を開いて大声で戯言を話す年経た人間と、回りには枷のついた鎖や、何か洋なしのような形をしている物体を持った人間達。

「二度も同じ事を言わせないでほしいですね」

感情の感じられない冷えた口調でアイギスがそう言い切った時には、書物毎二つに、縦に割れた人間が地に倒れていた。

一番前にいた白い髭を生やした男と、その後ろの者達を断ち貫いたのはアイギスのスコップ。

軽くスナツプを利かせて放り、安々と数人を断ち切っていた。

断たれた者達から数秒遅れて吹き出す血飛沫に驚く、残されてしまった者達。

気が付かない内に死んでいたほうがきつと楽だった、血飛沫に顔を歪める者達を見て穏やかに微笑むアイギスを見て、助けを求めて来たはずの少女は安堵しながら畏怖もしていた。

それから数分もかからずに再び静かになるアイギスの店舗前。

ある者は下半身だけを穿たれて、何故半身がなくなったのか理解できずに死んでいき、ある者は首に足首や手首用の枷をはめられて周囲の木々へと鎖で釣り上げられていった。

一番ひどかったのは洋なしのような物『苦悩の梨』と呼ばれる拷問器具を、使われるのなら使用感も気になるでしょうとアイギスにはめられていった者達だろうか。

口や肛門、女性の審問官であれば膣へと挿入されてそのままキリキリと用途通りにネジを巻かれ、洋なしの果实部分が体内で開かれていく。

たった一人の魔法使いの少女を追いかけていたはずの、運の悪かった異端審問官の一団。

そのほとんど全てが、ギリギリで死ぬだろう範囲で放置されていた。

「露払いは済みましたし、お屋敷へと向かいましょうか」

誰かの呻き声や血だまりの中に佇み、さあと手を差し出すアイギス。

流れ作業のように人を散らし血を飛ばしていながら、ほとんど汚れていない手が差し出される。

少し戸惑いながらも差し出された手を取る魔法使いの少女、父や母から話を聞いていなければこの手を取ることは出来なかっただろう。

依頼人の娘として見られている間は安心できるがその後は…？

そんな事を考えながらも他に縫れる手もなく、選択肢のない病弱な少女は悪魔の手を取り、吸血鬼の住まうお屋敷へと歩み始めた。

## 第七話 認める時

夜であれば梟など、夜の住人が鳴いて少しだけ賑やかさを見せる森。

その森の中、先にある建物へと近づぐにかけて太く大きくなる木々が並び立つ森の中、昼間は静かなお屋敷が建っている。

今現在住まう者達の上背を考えれば随分と大きな門扉を、褐色の肌をした女と日焼けなどしたことがない様な白い肌の少女が、固く手を結び離れないようにしながら潜り抜けていった。

昼に見ると朱色に近い壁の色をしたお屋敷。

屋敷の主の名を冠した外観を持つ紅魔館へと、褐色の肌をした女アイギスに連れられて無事に辿り着いた少女。

種族柄あまり体の強い方ではないため、来る途中何度か息を切らし、休ませたい、休み休み動いたために紅魔館へと足を踏み入れたのはもうすぐ日が暮れ始めるかという時間であった。

「さ、この扉を開けて中へと歩めば、貴方様も屋敷の住人となります」正面の玄関扉前で立ち止まり、屋敷の内にはお一人で。

そんな事を態度で示すように固く繋いでいた手を離すアイギスだったが、解いた指は再度魔法使いの少女に取られてしまった。

既に話は通っていて、屋敷の主も使用人にもこの少女の事は伝わっている、であればお連れするという仕事はここまでのはず、そう考え、手を離れたように見えたが魔法使いの少女からすれば少し違うようだ。

「屋敷の主様とお目通り叶うまで一緒にいてもらえませんか？」

浅黒い手を取りながら、帽子に付けた月の飾りを斜め上に向けて懇願するあどけない魔女。

屋敷までの道中ではアイギスに向けて怯えや畏怖といった感情を向けていた魔法使いのこの少女、追いかけてきていた者達の最後を見て、あの惨状を垣間見て怯えや畏怖といったモノを持たない方がおかしいと思う。

けれど手を取られながら一緒に歩む中で少しずつ心境に変化が

あつたらしい、父と母が何度も少女に話をしては崇拝していた者、両親の話の通りに商売人としては気安いアイギス。

そんな商売人に依頼の延長を願う始めている。

「構いませんが、ご当主への謁見やその後のお話し合いはノーレッジ様で一人で、という条件を出させて頂きますが宜しいですか？」

この少女、パチュリー・ノーレッジの窮地を耳元で騒がしくなった羽虫を払う程度の感覚で払った商売人。

生まれて二桁程度の箱入り娘が見るには少し、いや、随分と刺激的な光景だったはずだがそれが功を奏して、かつて母が向けていた畏敬の念というモノをこの少女からも感じているアイギス。

悪魔らしく真つ正直に崇拝されるならそれを報酬として少しだけの依頼延長としたようだ。

「そこまで甘えられませんし大丈夫です、ありがとうございます」

「礼は結構です、あくまでもお仕事ですので。それよりもお屋敷新居へと入られては？ このまま冷やしているのでは御身体に触ります」

パチュリーに取り残されている手でそのまま屋敷の扉を開く。

二人で開けたというよりもアイギスがパチュリーを促して開けさせたという方が正しいだろう、未だ顔を合わせていない吸血鬼の姉妹に屋敷の使用人。

その者達が本当に受け入れてくれるのだろうか？

立ち入ったこともない屋敷の見知らぬ相手達に対してそう考えても当然ではある、が一度受け入れると約束したのだからその約束が反故にされる事はないだろう。

約束を反故に、見逃したり甘えを見せた結果どうなったのか、屋敷に住む吸血鬼達は知っているはずだから。

少女入館中

近くの立ち木に止まる梟が静かに鳴く夜になった頃。

鮮血に染まる屋敷の中では、誰かが誰かに剣を向けて激しく争う音がしていた。

この世に生まれ落ちて200年は経とうかという屋敷の主に見守られ、黒いネクタイを揺らしながら主の妹君と激しく争うアモン角を

生やす女。

赤々と燃える妹君の捻くれた剣を、同じく火の穂<sup>ひ</sup>を灯したスコップで受けて、交差する火の粉と高音の金属を周囲へと散らしている。

強大な力を持つ人外の者同士。

夜の闇を味方にしこの一帯を統べる吸血鬼と、それらが生まれる以前にこの地へと渡り長く生きている羊の悪魔。

そんな、人からすれば恐れとしか言えない者同士がぶつかると火の粉を散らして、時には床や壁のような高さはある本棚を焦がしながら一方的な力のぶつけ合いが始まっていた。

「ヤダって言うてるでしょー!」

羊の悪魔アイギスが盾役という仕事を終えてから、日中に紅魔館に来る事はあっても吸血鬼の活動時間に訪れることは本当に少なくなっていた。

今晩は昼間に交わした約束の通り、久しぶりにお屋敷で夜を明かすつもりだったのだが、ある事を妹君に伝えてからは今のよう荒々しい状況になってしまっているようだ。

「アイギスのおバカ! わからず屋!」

紅魔館の地下部分に広がる一室。

数百数千では留まらない蔵書量を誇る書庫内で炎の魔剣を振るう妹君、以前の姉妹喧嘩で姉に向かい言っていた事と同じような言葉をアイギスに向けて放つ、紅魔館の問題児フランドール・スカーレット。姉であるレミリアからの許しを得て初めて一人での狩りに出た今宵、初日から上手く狩れて腹も気分も満ちている、そんな嬉しい晩にアイギスの姿を見たものだから、高揚したままアイギスに飛びついていたのだが…

「また我儘を申されて、出来れば笑って送り出して頂きたいのですが」ほんの少しだけ眉尻を下げて笑み返答を述べるのは、フランドールからおバカ! わからず屋! と言い切られたアイギス。

狩りの成功と姉との喧嘩<sup>許しを得る</sup>に勝つという、フランドールの確かな成長を日中館内で美鈴から聞き、そこまで成長したのなら過去に預かったモノを返してもいいだろうと考えて今晚伝えるつもりの方だった。

「これ、本当に放っておいていいの？」

レミリアと共に二人の争いを見上げている屋敷の魔女、パチュリー・ノーレッジ。

魔女と並び座る屋敷の主レミリア・スカーレットに向かって気安い口を吐いているが、これがこの屋敷に住む条件の一つらしい。

客人扱いはしない、住むのなら身内として扱ってやるから態度も言葉遣いもそれらしくしてみせると、昼間のお話し合いの中で二人話していたようだ。

「いいのよ、唯の喧嘩だもの。それにフランでは、いや、私ですら未だ勝てた事がないもの」

年若い魔女が腰掛ける椅子の手すりに腰掛けて、魔力満ちる大図書館の宙を見上げるレミリア。

二日ほど前に自身との喧嘩に勝ち、約束として今晚獲物を狩り出して見事に得てきた妹を見上げながら、少しだけハラハラとしている。

今はまだ腕力に任せて炎の魔剣を振るっているだけだが、いつ気が触れて掌に瞳を浮かばせるか、それが気掛かりとなり言葉では余裕を見せながら瞳には真剣さが浮かんでいた。

「久しぶりに会えたのに！　なんでまた出てくとか言うの！」

魔剣で燃え盛る炎の勢いが増す、熱量と温度がグンとあがり炎というよりも赤い筋、光線のように細く纏まりフランドールの回りの空気を焼いていく。

赤々と灯る魔剣が宙にいるフランドールを映し出す。

剣を確かめるように、二度三度とフランドールが軽く振るう度に赤い線が視野に残る程の光量を持つ炎の魔剣『レーヴァテイン』姉の携える槍『スピア・ザ・グングニル』を真似てフランドールが名づけた自身の剣。

「またも何も、私は最初から…」

それでも駄目！　と叫びつつ北欧神話の神器を冠した獲物を振るうフランドール。

名の通り地を焼くほどの熱量がアイギスへと迫るが、特に焦ることもなく同じく燃え盛るスコップで受け切っていく。

チリチリと空気を焼いて、そこにあるだけで周囲の温度を高めていく、炎の化身と化したレーヴァテインを受けるなどアイギスのスコップでも長時間は耐えられない…はずなのだが、特に形も変わらずに平然と受けている。

「遅しくなられましたが、無駄遣いが多い。長丁場には向きませんね」変形も溶けもしないアイギスのスコップに向かい何度も剣を振るうフランドールだが、振るう度に刀身の炎が小さく弱くなっていく。さすがにおかしいと気が付いたフランドールがスコップに向けて渾身の力で剣を振った時、アイギスの獲物が大きく歪み直ぐに元に戻る瞬間がある事に気が付いた。

アイギスは一本で耐えていたわけではなく、何度も壊されてはその都度同じ様に顕現していただけで、フランドールの剣戟は確実にアイギスを消費させてはいた。

だが、打ち続けているフランドールのように汗を見せたり疲労しているとは感じられない、浅黒い頬は緩み眉尻はほんの少しだけ下がったままで変わらない顔色のアイギス。

単純な話で年齢差がこうさせているようだ、たかが数百年生きただけの魔の者とその十倍ではきかない時間を生きている魔の者、蓄えたモノが違うらしい。

「駄目って言ったらダメなの！ おとう様の事なンテどうデモイいに！」

言葉遣いこそ変わらないが語句に乱れが生じるフランドール。

レミアアが掌を妹に向けてかざすが、その掌はアイギスの指から鳴った音で穿たれて運命を操る力の発動は成されなかった。

代わりに発現したのはフランドールの掌の中の瞳。

世を恨むような恐ろしい瞳、アイギスの瞳に近い瞳孔が横方向に伸びる瞳が掌に現れて、かつて悪魔と呼ばれた妹の手によって躊躇なく握りつぶされた。

「当たった？ アイギスがコワレた？」

掌の瞳を握り潰し、宙から床方面を見つめるフランドールの赤い瞳。



見つめる先には半身以上を破壊された黒い悪魔、左の鎖骨から右の脇腹までを残し、上半身だけが床の上に残る、アイギスだったモノ。いつかの父のように、全てを血飛沫に変えるまでには至らなかったが、それでもフランドールの破壊の力がアイギスに届いた……初めて  
の事で実感がなく、嬉しいよりも何故当たったのか？

何故掌の瞳が穿たれなかったのかと、次第に冷静さを取り戻していくフランドールであった。

「見えるモノを壊すだけでは駄目だと、そうお教えしたはずですが、練習不足ですね」

レミアアやパチュリーの声色でも口調でもない声、今まさにフランドールに討たれたはずの、アイギスの少し低い声が書庫内で響く。

破壊が免れた上半身が伏せる下辺り、その床面の部分に逆五芒星の方陣が現れる。方陣の中で浮かび上がる死に体の上半身、黒い魔力のような、瘴気のようなモノが方陣内で蠢いて、残ったアイギスの身体を包んでいく。しばらくすると吸収され消えていく瘴気、黒い濃霧となっていたソレが晴れると、上半身は自身の血に濡れているが、見慣れた姿を取り戻している黒羊が立っていた。

満月の夜の吸血鬼であれば失った部位の復元など簡単な事だが、彼女は種族悪魔でありそういった事まで出来るとは、書庫内の誰も聞かされていなかった。

「私を滅するのであれば私を、バフォメットを崇拜する者達全てを討ってからでないという意味がないのですよ。今は海の外、アメリカという遠き地にもいるようですし些か手間ですね」

「あめりカ？ 海？ なあにそれ？」

父と同じ様に壊したはずのアイギスが再度現れて、今まで通りの口調で穏やかに話し始めると、少しずつ昂ぶる感情が戻っていくフランドール。

驚いたままで止まり、滞空しているフランドールに向かい両手の指を鳴らすアイギス。

輝く宝石の翼、その根本を穿ち宙から地へと妹蝙蝠を落とす黒羊、そのまま一瞬で落ちた妹蝙蝠の元へと奔り両の手首をスコップで断

ち切った

「海は大きな水溜りと言えば伝わるでしょうか、フランドールお嬢様が吸血鬼である限り渡れない所、そう記憶されるのが宜しいかと」

体を地に落として手首も落とし、今日の喧嘩もフランドールの負けだと言葉以外で示すアイギス。

能力で穿ったわけではなくフランドールの力のみでも直ぐに復元できるはずだが、困り顔から見慣れていた瀟洒な笑みへと変わっていたアイギスの顔を見て痲癩を治めたようだ。

フランドールがペタンと床に座りゆつくりと手首を復元させる中、穿たれた翼の根本へとスコップで自身の魔力を掬い穴を埋めていくアイギス。

少々熱く、少々派手だった年の離れた少女たちの喧嘩は終いを迎えたのであった。

この喧嘩で一番の驚きを見せたのは、初めてアイギスの能力を見たパチュリー。

昼間の騒ぎ、下手をすれば死ぬかもしれないと考えていた追手達に見せたアイギスの力。

あれは本当になんでもない、この屋敷の者達にとっては戯れにもならない事で、店の外が静かになったのは指を鳴らしたアレで審問官の姿毎消したのかと、椅子に腰掛けたまま小さく頷いていた。

「それよりもお父様の事ですが…思い出されていたのですか、いつから?」

「少し前、アイギスの掘った燭台を見えるようにしようと思つて…出来るようになったのよ? アイギスの掘った穴だけ壊してまた見えるようになったの」

冷静さも取り戻し、床に無理やり降ろされてから、以前のようにアイギスに抱きついてきたフランドールがそう述べる。

屋敷で使用人として働いている美鈴が訪れた夜、その夜にアイギスがフランドールに見せた力の応用方法、壊さぬように壊せるようになるいなさいといった言葉を覚え、知らぬ所で練習していたようだ。

「壊れていない狩りの獲物を見てお姉様が言ったのよ、おとう様やお

かあ様が見れば喜んだだろうって。おとう様って何だったのか、考えていたら頭が痛くて」

姉と魔女の二人に見守られながら穿たれた記憶の事を話し始めるフランドール。

いつか必ず返すという約束から数百年、力も知識も自己を抑える理性も見せ始めたフランドールに対して、そろそろ返しても大丈夫かもしれないと考えていたアイギスだったが、これには驚いたようだ。

穿った記憶を埋めて返すという形を想定していたが、まさか自身で記憶を取り戻すとは考えてもいなかったようだ。

「頭が痛いから痛みを壊そうと思ったの、燭台には成功したから出来ると思ったのよ：そうしたら全部思い出しちゃった」

「全て思い出されたのですね、記憶を取り戻しながらも今のようによやかに話されるとは：アイギス、いえ、私は余計な事をしていましたよね」

自身の事を言い直し、フランドールを幼子から一人の吸血鬼として扱う事にしたアイギス。

笑んだ表情はそのままだがほんの少しだけフランドールを抱く力が強くなる、ギョツと抱きしめている間にフランドールが小さく、二人にしか聞こえない声でありがとうと呟いた。

言葉を受けてまた少しだけ抱く力が強くなるが、腕の中の妹がちよっと痛いとまた呟くと抱いていた体を下ろして手を繋ぎ姉達の元へと向かい歩み始めた。

いつかレミリアの言っていた運命。

互いに血を流し衣服を汚してはいるが仲良く手を取る姿。

今日の事であればどれほど良いか、右手の先にいる妹を見つめてそんな事を考えていた。

「フラン、もう我儘はいいの？」

「負けちゃったもん、言う事聞いわ。でも今晚は一緒に寝るの！」

「じゃなきや駄目！」

喧嘩に負けた妹を慰めながら諫めるレミリア。

腰掛けていたはずの手すりからは降りていて、パチュリーの向かう

机から乗り出すような姿勢のまま目上の者らしい言葉を吐くが、パチユリーから見てもアイギスから見ても不遜さなどは見られない。

アイギスを妹が殺めたと感じた瞬間は両者の事を泣きそうな顔で見ているのに、と考えながらも口には出さないパチユリー。

屋敷に来てからまだ数時間程だが、それなりに濃い時間を過ごすことが出来てこの屋敷の内情もなんとなくだが理解できたようだ：知を求める種族らしい洞察眼だと感心できる程であった。

「致し方無いですね、今晚だけですよ。明日の朝には出立致しますので」

「出立？ 帰るではないの？」

レミリアやフランドールが思っていた返答とは違ったモノが聞こえてきて、二人とも瀟洒な笑みをたたえたままのアイギスに向かい少し詰め寄る。

詰め寄る二人に向い態度を変化させる事なく、出立ですと言い切るアイギス。

フランドールとの喧嘩の原因となった『明日にはまたいなくなる』という言葉から、一旦帰るだけで店に行くなり、依頼を出すなりすればいつでも逢えると考えていた姉妹に少しだけ動揺が見られた。

「すぐ帰ってくるでしょ？」

「帰ってくるつもりではありませんが、フランドールお嬢様への心残りもなくなりましたし、すぐにとはい切り切れませんね」

生まれた地を出立してから数千年。

欧州のあちこちを転々としていた為、何処が故郷というような強い郷愁を覚える事などないが、この屋敷の居心地の良さは気に入っているようだ。

その居心地の良さを与えてくれる、上客以上に見てしまう者達へアイギスはしばしの別れを告げ始めた。

「行き先を聞いてもいい？」

「東方の地へ、紅様の名にもあるカンジというものを覚えようと思ひまして。ちよつとした語学留学ですよ、いずれ戻って参ります」

フランドールの問掛けに答えた後すぐにレミリアからも質問を受

けているが、矢継ぎ早に問われた事に対して焦る事もなく答えるアイギス。

名を間違えるという失礼をした為に、今後はそういった事にならぬようにと珍しく遠出をしようと考えているらしい。

美鈴が屋敷内で仕事をしないで済む時間帯、主達が目覚めた夜間の休憩時間に少しだけ教わったようだが、そう何度も休憩を潰してしまふのは同じ仕事人としては気が引ける。

それならば直接赴いて現地で言葉や文字を知り、弔う際には正しく名を掘り刻めるようにしたいという、墓守としての少しの矜持から考えられた、勉強旅行のようだ。

「紅様より『素晴らしき穿孔者』『穿孔の黒羊』というカンジでの名前で頂戴しまして、カンジというものに少し興味が湧きました」

「また急な…：急ぐ理由なんてないでしょう？」

態度で反論するようにアイギスの体にくつついて離れないフランドール。

文言に対して反論してきたのはレミリア。

机に開かれた本の余白に、自身を表す漢字を辿々しく書いていくアイギスに向って明日だなんて急だと素直に言葉を述べる。

パチュリーの為に用意された羽ペンをインク瓶の横、羽ペンが本来戻るべき位置へと戻しながら、お屋敷の幼さ残る主に向かい表を上げる黒羊、その表情はレミリアのよく見ていた、叱る時も褒める時もよく見せてくれていた淑やかな笑みであった。

「研鑽し御力は強大な物と成りました。今や貴女様を落とそうと考える者を探す方が手間、妹君も成長され従者も友も得たのです。最早私は必要な…」

言葉の途中で机を叩き、全てを言い切らせる前にアイギスの口を止めたレミリア。

吸血鬼の腕力で叩いても壊れない机。

この書庫を任されるだろうノーレッツジ家の一人娘、パチュリー・ノーレッツジの両親からの依頼でアイギスが逃えていた、辞書以上の厚みはある一枚板の天板が少しだけ揺れた。

それほど大きな音は鳴らなかったが、静寂に包まれたこの書庫内ではレミリアの小さな手で鳴らした音でもよく響いた。

「紅魔の主として依頼するわ、帰ってきたら顔を見せて…その時には手厚く迎えるから」

「畏まりました、後の再開の為に色々学び私も研鑽致しましょう」

「二人でお決まりの所申し訳ないけれど、燃やしたり本に落書きはしない事。それも学んで下さると嬉しいわ」

フランドールを背に乗せて笑むアイギスと対面する紅魔の主、レミリアに向かい一人だけ視線を交えず淡々と言葉を述べたのは書庫の主となったパチュリー。

畏敬の念はあれど書物に対する扱いは誰が相手でも変わらないようだ、昼間は怯えを見せていたアイギスに対してピシヤリと言いつつ魔女。

力こそ酷い物だが会話の通じる相手ではあると認識し、書庫の主としての文言を述べると申し訳ありませんでしたと頭を垂れる黒羊。

そのアイギスの背にいるフランドールだけが一人、心中で考えていることがあった。

私が出掛けて狩りをして、お姉様に認めてもらって、力を上手く扱ってアイギスに認められたから心残りがなくなった…だから遠くに行ってしまうなどと言うのだと。

だったらもう出かけたりはしない。

外に出ない事にしよう。

力の扱い方も練習しないようにしよう。

そう強く誓っていた。

明日には外へと出る者の背で、明日からは外に出ず引きこもろうと誓うフランドールであった。

く東へく

## 第八話 西方の悪魔と東方の妖かし

照りつける太陽を浴びながら、ほんの少しの草と大量の砂とが入り交じる大地に、蹄代わりのハイヒールを埋めて歩く者が一人。

砂漠という覚束ない足場を細いピンヒールで歩くなど自殺行為以外の何物でもないが、彼女にとっては体の一部に近く、脱いでしまう事はなかった。

上着もベストも脱いで肩から下げたショルダーバッグに畳入れ、それでも暑くてタイを緩め、シャツのボタンも上から二つほど外している今の姿。

乱れたり着崩したりする事がない彼女にしては随分と乱れた格好となっているが、彼女の種族から考えれば色香の漂う今の見た目も多少は理解できるかもしれない。

タロットカードという絵札の15番目にいる彼女。

羊の悪魔アイギスに充てがわれているのは欲望と呪縛・誘惑・肉欲・暴力といった意味合いだ。

職人としての態度こそ穏やかなモノを見せる彼女だが、掃除や排除、以前の吸血鬼や魔女からの依頼等荒事となると、含まれた意味合いのような姿も見せる。

そうあれかしと長く崇拝されていれば、気が付かぬ内に本人の方からそうあるうとするのかもしれない。

「さすがに暑い…失敗ですね、素直に海シーロードの道から渡航してしまえば良かった」

指を鳴らし、砂地を穿って日影を作る黒羊。

影に入り、休憩しながら珍しく悪態をついているアイギス。

額には大粒の汗が浮かび、良く日光を吸収する黒髪の前からも掻いた汗が滴っている。

袖まで捲った赤いタツタソールチェック柄のYシャツも、背中や脇辺りの色がワントーン濃い色合いとなっていて、誰が見ても暑さに負

けているといった状況だ。

けれど、倒れてしまったり、暑さにやられるとまではならないようだ。

時折すれ違う交易商の一団。

キャラバン隊と言われる者達から頂戴した水もまだ十分にあり、水と同時に食事も済ませている為それほど焦ってはいないらしい。

「エジプトのミイラは良いものでした、ああいった者がこの先にもあると聞いて草原ステップロードの道も、などと思いつかなければ汗だくにならずに済んだのですが、今更言っても仕方がないですね」

右腰のベルト部分に通したベルトポーチから、キャラバン隊の誰かが持っていた水筒を取り外し口をつけながら独り言を呟く。

本来はエンババーミング用の薬品等が収まる部分なのだが、今は死者の腐敗を止める薬よりも自身の乾きを潤す物の方が重要で、薬品の方はキャラバン隊の皆に掛けて回って空にしたらしい。

今頃は干物と腐敗物の間くらいになった亡骸が、アイギスの歩く交易商の進む道、後にシルクロードと呼ばれる道の何処かで転がっているはずだ。

普段なら気にも掛けない相手達だが、アイギスを恐れず話しかけてきた気概を爪の先ほどだけ気に入っただけで、手向け代わりと水の礼という形で誰かに見つけてもらえるように遺したようだ。

キャラバン隊の者達からすれば、褐色の肌をして頭に羊の角飾りを被った地元民、それが欧州仕立ての衣服を着込んでいたというのが気になっただけらしいが、それはどうでもいい事だろう。

この後も独り言を呟いては歩き、水が切れれば襲い奪ってという一人旅が暫く続く。

美鈴の生まれた地。

その地に向かう途中で、話だけは聞いていたミイラを見てみたいと考えていたアイギスが、一旦はインド洋の方へと南下しそのまま諸外国を歩いていったのだが、歩いた先で別の地でも遺体を操る者がいるという伝承を聞いてそのまま北上。

今歩いている内陸部の先の地、かつて遺体をより集めて呪術で動か



していたジャセンという者がいたと聞いて、墓守として少しだけ興味が湧いたアイギスがその地に立ち寄ったようだ：

そのジャセンの姿は既になく、言葉も通じなかったため食事だけ済ませて渋々と過ぎていったり、古い時代に繁栄を極めたこの地の王朝を傾け、滅亡させる原因となった九尾の魔物の話を聞いてそちらへと向ったりしていたようだが、その者もすでおらず、全てが無駄足となったようだ。

期待しては裏切られて、少しだけ気を落としながらも、美鈴の言った『大陸の端の方に見えます』というテキストウな説明だけを頼りにまた東へと歩み始めたアイギス。

大陸の端へと辿り着き、海の先に見える小さな島国が見えると、端の方に見えるというのだからあの地がそうなのだろうという、言葉の綾から生まれた勘違いをして東方の端の地へと渡っていった。

く少女渡航中く

扇形に整えられた小さな半島。

狭い土地に押し込められたように木造の商店や住まいが立ち並ぶ小さな町並み。

異国でありながら欧州人のような者も見れば、美鈴のような衣服を着る者達もいて、なんというか少しだけ懐かしいような雰囲気を見せる町並み。

形だけ真似られた造りの店舗内、一部分だけレンガ造りの店内を見ればビリヤード台が置いてあったり、その回りではビールやコーヒーを楽しむ欧州の人種達が楽しそうに過ごす町。

小さな島国の端、海に向かってせり出た島のような土地に、特に姿も変えずに降り立ったアイギスであった。

「人前に姿を見せても騒がれないというのは違和感を覚えますね、角が見えないのでしょうか？」

大きなアモン角を撫でながら振り返ってみたり、周囲を見回したりしている異国の黒羊。

積み荷に紛れ船から降りた際には、役人のような者達から何かを言われたが、言葉が通じないとわかり通訳を呼びに行くために監視者が

滅った瞬間、残っていた者達を穿ち綺麗に消したアイギス。

身形だけは三つ揃えのスーツ姿にインバネス・コートという、欧州の上流階級にいるような立ち姿の為、商船を利用し渡航してきた男装の麗人としか見られず、角も何か冠くらいにしか見られなかったようだ。

随分と苦しい見られ方だが、国が変われば身形も常識も変わる。

諸外国の情報を制限しているこの国では頭から直接生えているとは見られない、何か、面妖な頭飾り程度にしか見られなくなったのかもしれない。

「さて、着いたはいいのですがいかがでしょうか？　まずは言葉からでしょうか？　両方の言語が載った辞典でもあれば助かりますが」

欧州であればある程度共通で通じる言語が、この国では通じないらしい。

酒場にいた訛りの強い欧州人達の会話はどうにか聞き取れて、ここがヒノモトノクニ、もしくはジパングという国だとは知れたがそれ以外は貿易だとか儲けだとか、今必要な情報は得られず、バドミントンに興じる者達を眺めて一人佇むアイギスであった。

しばらく佇み景色を眺めていたのだが、ただ立っているだけではなんの前進もない。

致し方なしと酒場に戻り、あまり旨くない香りの悪いコーヒーを頼み、カウンターでくつろぐような素振りを見せ始めたアイギス。

注文したコーヒーが手元に届いた頃、魔力とは違った力：感じ慣れない妖かしの気配を店舗の入り口辺りから感じ取っていた。

「お隣宜しいかしら？　お一人で待ち合わせでも？」

宜しいかと聞いておきながらアイギスの返答を待たずに隣の椅子へと腰掛ける者。

紫色のロングドレスを身に纏い、長く輝いている金髪を耳にかけるようにかきあげながらアイギスを見つめる誰か。

昼間から人間の集まる店舗内にいる悪魔と、それに似た雰囲気を持ち言葉も解する事が出来る相手：髪色や様相から大陸、同じ地域の出の者かと考えるアイギスだったが、悪名轟く自分を見ても慌てず寧ろ

近づいてくる魔の者に少しだけ興味が惹かれたようだ。

「待つような方はおりません、今し方上陸したばかりですので」

「上陸、やはり異国の方ですね。どちらの方が存じませんが言葉も通じないままでは何かと不便でしょう？ 宜しければ教えて差し上げますわ」

同じくコーヒーを注文し、待つ間に指をカウンターのうえで滑らせて遊ぶ女性。

淑やかな態度で親切心の感じられる物言いをするが、顔に浮かばせている笑みは絵画から切り取り貼り付けたような、気味の悪い、胡散臭いと言ってもいいほどの美しい笑みを見せている。

こういった手合は信用ならない、過去にこなしてきた膨大な依頼の中にもこういった顔をするものがいた、そういった者達は得てして腹に企み事のある相手が多いと体感し理解していたアイギスだった。

「ありがたい申し出ですがお断り致します、名も知らぬ初対面の方のご厄介になるつもりはございません」

「あらあら、好意は素直に受け取るものですわ…それに、断られるとは思いませんでしたので、すでに少しだけお教えしてしまいました」

アイギスの方を見ながら白魚のような指先だけを動かしていた女。

確実に人外ではあるが正体の見えない女の言葉を受けて、横目で見ている女の顔を初めて正面に見るアイギス。

正面から見てみると更に気味が悪い笑みだと再認識するが、得体のしれない者相手に下手な事も言わず成さず、言われた言葉だけを考えるようにしていた。

だが、考えなくとも言葉の意味がすぐに理解できた…通りを歩く者達の会話が分かり理解できるようになっていたのだ。

何をされた？

瀟洒な態度は崩さず内面だけで訝しがると、紫色のドレスを纏う者が扇子で口元を隠して紫がかかる金色の瞳だけで笑んでいた。

「言語以外は弄っておりませんわ、コレは良き出会いを記念した私からのプレゼントですので…気に入って頂けたのなら嬉しいのですが、異国の悪魔殿？」

「記念品、というには些か怪しいモノですがお陰様で捗りそうです。今は出会いと貴女様に感謝致しましょう、異国の妖かし殿」

プレゼントと言いながら抉じ開けられた言語の壁。

アイギス自身が壁を穿つても問題ないように思えるが、今回は語学留学として訪れているし商売人としては結果に繋がる過程も説明できるようにしておきたい。

そう考えて壁は残したままだったのだが、その壁は他者に抉じ開けられてしまった。

少しだけ気に入らないがこれも過程の一つかと理解を示すアイギス、本来であれば長い時間がかかる過程を飛ばしてすぐに納得出来ないと思うのだが、時間など今更どうでもいいようだ。

「私からも出会いの記念品を、と考えますが何分着いたばかり。手持ちも仕事道具くらいしかありませんので差し上げられるものがない、お恥ずかしい限りです」

「仕事道具とは？ 働かなければならないような方だとは思えないのですが」

腰のベルトに通した右側の革製のベルトポーチの逆側。

左側にもう一つ通した少し大きめの、同じく革製のシザーバッグから磨き上げられたノミ等、普段から使っている愛用品を取り出して少しだけ見せるアイギス。

パチクリーを連れて紅魔館に向かう前から磨いていたのは、仕事道具を少し持ち出し、訪れた先でも多少の事が出来るようにと考えて持ち出す物を吟味していたようだ。

「Arbejde er det bedste tidsfordriv、この国の言葉で言えば『仕事が一番良い暇つぶし』となるのでしょうか、言葉通り楽しんでるだけですよ」

「悪魔殿の出の言葉？ 諺でしょうか？」

今現在店舗を構えている地の諺ではないが、以前に訪れただけのごしていた土地の諺。

襲っては食らう事に飽いて、他に何か暇つぶしはないかと考え始めていた頃に聞いた人間達の諺である。

短い一生を送る者達がない知恵を働かせて考えた言葉など気にも留めていなかったアイギスだったが、不意に思い立ち成り立ちから続く趣味を仕事としてみたところ意外と好評で、良い暇つぶしとなっていた。

「過ごしていた事があるというだけで出自は別ですよ、何かご入用ならその時には記念品代わりにお一つ依頼を受けましょう。仕事ぶりを気に入って頂けたなら、その後も鼻肩として頂きたいですね」

腰掛けるカウンター席、その横に置いたシヨルダーバッグから一枚、小さな紙を取り出して気味の悪い女に手渡すアイギス。

100年くらい前から欧州の人間達の間で流行りだした、今で言う名刺のような物を手渡してどうぞ宜しくと商いをしてしていると姿勢で見せるアモン角の悪魔。

棺桶から家具まで誂えマス、場合によっては棺桶の中身までご用意致しますという文言とシーカース・コフィンという店舗名が書かれた、仕事の内容が書かれた名刺を受け取り目を通す女性。

「シーカース・コフィン。棺桶の中身までとは、荒事もお願い出来ると考えて宜しいので？」

「荒事でもなんでも、場合によってはお引き受け致しますよ、そういったご予定が？」

アイギスの名刺を見ながら仕事内容の確認をする美女。

美しい見た目からは荒事とは縁遠い雰囲気が見て取れるが、逆に考えれば大概の事は荒事にもならないのだろう。

悪魔と理解した上で席を離れることもなく、アイギスの赤黒い瞳を真っ直ぐに見ても怯えや畏怖といったモノを覚えない手合。

小さな島国の妖かしの割には大物の気配を見せる女に対して、この者からであればそれなりに楽しめる仕事がもらえるかもしれない、出来ればなにかあると良いみやげ話と暇つぶしが出来る。

そんな事を考えているアイギス、荒事という好ましい言葉に対して予定があるならばと少しだけ自分を売り込み始めた。

「予定とまでは申しませんが、私の庭を訪れては荒らして、散らかったまま地に還る者が多くなってきました…今はまだ困る程ではないの

ですが、いずれ目に余る事になりそうで」

「なるほど、いつまでこの地にいるかわかりませんが、縁があればお申し付け下さい：暫くはカンジのお勉強をする為にこの地に留まっております故」

この地に留まるという言葉を聞いて、少しだけ瞳に何か宿る金髪  
の美女。

アイギスとしては語学のために訪れただけで、自分からこの地に住まう者達に対して何かをしようという気は毛頭ない。

依頼でも受けければ話は別になるのだろうが、食事以外で自ら荒事を起こすつもりなどはなかったのだが、この女からは何か一物あるように見られているようで、女は出会いから笑んだままで他の顔色を見せないままで。

威嚇とまではいかないが手の内を晒すことはしない異国の妖かし、先ほどのプレゼントの時にも何かをしてはいるが何をしたかは悟らせない手合。

真正面から話しかけてきて手の内はあると見せつけてくれた妖艶な美女に対して、自身の出自や手の内も晒さずあくまでも訪れた理由だけを話していくアイギスだった。

「一つ聞いても？」

「何でしょう？　お答えできる事であればお答えしますわ」

一瞬だけ警戒するような瞳になる扇子の女。

そんな事は気にせず回答られる事であれば答えてもらおうと、穏やかに笑みを浮かべたままで女に問いかけるアイギス。

「この国では名前はどの様に表記されるのでしょうか？　知人の故郷かと考えておりましたが少し違うようで、私の住まう地では名が先に姓が後にくるのですか」

問掛けを聞いて警戒の色は完全に消え去ったようだ、代わりに少し惑うような困ったようなモノを目に宿す女性。

それもそうだ、この地に留まるといった異国の悪魔。

漢字を勉強するなどどうでもいいような事を言った悪魔に対して、何を聞かれどう濁そうかと考えを巡らせた頭に、そのどうでもい

いような事の追加の言葉が入ってきたのだ。

内心では拍子抜けした紫色の妖かしだったが、声色には出さず素直に答えを述べ始めた。

「姓が先、名が後に来ますわね。ついでにお答えしますと隣の国でもそういった表記をしますわ」

「ふむ、それでは彼女の生まれた国がこの国なのか隣の国だったのか判断しかねますね、ですが形が一緒ならば良しとしましょう。お答えいただきありがとうございます」

「いえ、このくらい。宜しければ悪魔殿の名も知りたく思いますわ、シーカーさん？」

「それはお仕事をする機会があればその時に、悪魔に対して真名を尋ねるなど些か失礼ですよ…尤も、私の場合は操られたりはしないのですが」

アイギスの住まう西洋において、真名を悪魔に知られると魂を支配され操られる。

逆に悪魔の真名を知る事が出来ればその悪魔を自在に操る事が可能となる。

と、数百年前から民間伝承として広まり始めたが、アイギスが生まれたのはそれよりも随分と前で、この概念が固定化される前から存在している彼女には当て嵌まらない。

正確に言えば穿たれていて当て嵌まるものがないらしい、無いものは穿つこと叶わないが在るというのなら何でも掘り返す、美鈴から同じ問掛けをされてそう言切ったのは他ならぬアイギス自身である。

「悪魔でありながら概念に当て嵌まらないのですか？」

「そういった枠組みが出来上がる前から生きておりますので。誘惑程度なら出来ましようが逆に他者の全てを操る事も出来ません、ですが、お陰様で随分と気楽に過ごしておりますね」

「気楽などと、あまり油断されると足元を掬われて墓穴を掘る事になるかもしれませんわ」

「慣れておりますので問題ないかと、ジョークまで嗜まれるとは良い御方と出会えました」

コーヒーを口に含みながらジョークも交えて、穏やかに会話を進める二人。

時代から照らし合わせれば金髪をリボンで結った妙齡の美女と、それに付従うだけの、本来ならボロ布一枚を纏うべき褐色の肌を持つ女が席を並べてティータイムを過ごす光景。

新大陸の話を知っている文明の進んだ国の者達から見れば、奴隷と雇い主という立場であるはずの肌の色をした二人が席に着き話するなど、欧州人からは違和感しか覚えられず少しだけ店内が騒がしくなり始めていた。

「少し煩くなり始めましたし、本日はこの辺りで。機会あればまたお会い致しましょう」

先に席を立ったのはアイギス。

感じられる視線が隣の妖かしよりも自分に向いていると気がついて、軽く会釈し自然な仕草で席を離れようとしたのだが…

カウンターに二人分の銀貨を置いてから、隣の席に置いてあったシオルダーバツグを肩に掛けた頃、数人の大柄な欧州人に囲まれる。ビールグラスを片手に持って赤ら顔、ひと目で酔っているとわかる男が三人。

体をカウンター側に傾けて背中側を男達に向ける格好の黒羊、その尻を強く触り揉んだ男が下品に笑い奴隷なら着飾るなどのたまい始めた。

言葉を聞いているのかいないのか、触れてきた男の手に触れてそのまま体を引いて倒す。

騒ぎながら倒れた男の頭から背、足先までを数歩ハイヒールで踏み抜きながら歩きゆつくりと店を去っていった。

下卑た笑い声から悲鳴へと変わり、別の意味で騒がしくなる店内で一人優雅にコーヒーを味わう女、境界の妖怪が去っていったアイギスの事を周囲の騒ぎを気にも留めずに考え始めた。

声も上げず羽虫のように人を潰し去った悪魔。

言語の境界を弄り、力の片鱗を見せつけても焦りすらしないあれはなんだったのか？



不意に現れた、感じた事がない魔力を肌に感じて会いに向いてみたが、敵意も感じず媚びるような気配も見せない異国の悪魔。

去っていった背を思い出し暫く様子を見てみようと考えていたのは、初めてアイギスが会った日の本の国の妖怪。

八雲紫であった。

## 第九話 訪れた先で

日本という国の中央辺り。

周囲を山々に囲まれた盆地、チェス盤のような区画に分かれた人間の里。

その里から少し山間部に入った、人間が訪れるとは思えない場所に建つ、忘れられ廃墟になりかけている寺にアイギスの姿があった。

異国の衣服を身に纏い、異国の靴でコツコツと歩き、この地を回り始めて数ヶ月程が経った今、どうにか仮の住まいを見つけたようだ。初めて足を踏み入れた出島からは随分前に離れていて、今はこの国のほぼ中央、とある山中の寺で屋根や壁の修繕をしながら居候として厄介になり、修繕の報酬として何かを教わり文字に起こしては首を傾げているらしい。

朽ちかけた縁側に腰を下ろして墨を磨っては筆を執り、ノタノタとぎこちない手つきで漢字を書いていく異邦人。教わった簡単な漢字を書き認めながら少し掠れている書物に目を通しているようだ、右腕で形の崩れた漢字を書いて左手で書物を開くアイギス。

寺らしく写経でもすれば上達も早いのだろうが、経典や経文、神や仏の教えといった生前から死後の事を考えたりする物には興味の無い棺桶職人。

真剣な眼差しで目にする書物の中を覗いてみると、どうやら過去にこの寺で弔われていった者達の戒名が書かれているように見える。

「精が出ますね、少し休憩されてはいかがでしょう?」

アイギスの背後、本堂の奥から聞こえてきた柔らかな物腰だと感じられる声。

影が差す本堂の奥から日の当たる縁側へと歩みながら、真剣に書物を覗み、簡単な文字を起こしている異国の悪魔に向かい声をかける寺の御本尊様 寅丸星。

背負っている円を描いた衣とゆったりとした袖口をヒラヒラとさせながら歩み寄り、アイギスの隣で静かに立ち止まった。

書物から星へと視線を流すと丁度腰の辺り、虎柄の腰巻き部分が視

界に入ってなんとなくだが親しい気分を覚えてしまう、捕食される側の黒羊。

羊も虎もこの国には本来いないはず、それなのに感じる親近感は一瞬に名を連ねている者同士だからだろうか？

アイギスが干支を知っているとは思えないが、星の方は知っているだろうし、以外とこんなどうでもいい理由で親近感が湧くのかもかもしれない。

「短期間で覚えようと頑張りたいのはわかりますが、根を詰め過ぎては身に付きませんか？」

虎の妖獣から成り上がり、お付の物である鼠の妖かしとともにこの寺を二人で守り続けている元人食いの御本尊様。

背後からアイギスの手元を覗くくらい、ほんの少しの体重移動だけでもギィギィと床が鳴り、星以上の体躯の者であれば踏み抜いてしまいそうな床から、修繕された縁側の上へとソロソロと歩き近づいてきた。

「お気遣いなく。新しい楽しみを知ったせい、疲労感というものがあまりないので」

隣に立ち、両手を下腹の辺りで緩く組む姿勢でアイギスの手元を覗いている、この国の読み書きの先生。

書物の先生から教わった簡単な漢字を書いてみては、少し首を傾げて、どこか納得出来ないような顔で己の書いた漢字を見つめているアイギス。

東西南北や右左、上や下という、説明などでよく使いそうだけれど何処かへ行った場合に役立ちそうな漢字から教わっているようだ。

方角や方向、場所や地名なども同時に教えてもらいながら、自身の興味を惹いて離さない戒名の読み方や意味合いも聞いていて、珍しく真剣な表情をしているように思える。

大概是笑み、もしくは無表情というのが彼女の普段なのだが、聞く度に詳しく話して説明してくれる星の事は気に入ったらしく、真剣に話を聞いていた。

「今の書き方、筆順を間違えましたよ、先に『口』から書くのは違いま

す」

「そのヒツジュンというのがどうにも、先に困つてはいけない理由があるのでしょうか？」

『国』という簡単な漢字を教わり『口』を書いてから中に『玉』を書いたアイギスに対して、違うと述べる星。

アイギスの住まう地域ではあまり聞かない筆順・書き順という物、あちらの国では書いた人によって順序もバラつき、筆下手な者が書き留めるとミミズがのたくったような文字になる事も多い。商売柄文字を彫ることが多いアイギスはまだ綺麗な文字をかける方ではあるが、あちらの住人、例えばとして出すと紅魔館の新しい住人となったパチュリーはあまり綺麗な文字を書くとは言えない。

汚い、雑、といった意味合いではなく、単純に彼女の文字は癖が強くて他者には読めないというだけだ：お陰で書き認めた魔導書も彼女以外では読み取れず、今までに一度も盗まれたりせずに済んでいるらしい。

「順序よりもそれに伴うモノ、美しさや書きやすさが大事なんですよ」  
ふむ、と小さな声がアイギスの唇から発せられる。

言われた通りの筆順で『国』と書いてみると確かに少しだけ綺麗に見えるような、筆を走らせやすいような気がして、真剣な表情が少し綻ぶ。

「なるほど、確かに書きやすい気がします」

「因みに同じ棒線でも少し変わります、ハネや払いといいましたですね」

同じ縦三本の線を書いてこれだけでも漢字になりますと述べる星。  
左だけを払いながら書いて『川』と読み、左右の線を短く真ん中の線を長く最後にハネさせて『小』と書いて読み上げている。

星の筆使いを目を細めて見つめては、それを真似るように動かしていくアイギスだが、綺麗に払ったりハネたり出来ず気に入らないと訝しんでいるようだ。

怪訝そうに眉根を寄せているアイギスを小さく笑って眺める星、寂れている寺にしては穏やかな空気が流れていた：が、使いに出していた

者が戻るとその空気が少し重くなる。

「ご主人、今戻ったよ。シーカー殿も毎回留守を預かってもらって済まないね、お陰で助かったよ」

胸元からペンデュラムを下げて大きなダウジングロットを携える者。

そんな者から声を掛けられた星が、おかえりなさいナズーリンと返答を返している。

同じく声を掛けられたアイギスもおかえりなさいませと声を返していた。

「探しものは見つかりましたか？ ダウザー殿」

「目的のモノ達は見つからなかったよ、それでも手がかりは見つかったんだ」

アイギスがこの寺に住みだしてから頻繁に失せ物探しに出て行く、ダウザーの小さな大将。

今回も数日ほど前から失せ物探しに出ていて、その度に星のうっかりに気をつけてくれと言い含めていくナズーリン。

2, 3日ほど留守にしては、帰ってくる度に今日も見つからなかったと嘆いていた…のだが、今日はちよつとだけ明るい表情を見せて、手がかりとなるものは見つけたと主人である星に述べていた。

ナズーリンからの吉報を聞いて星も笑みを明るくものにさせていく。

二人とも何を見つけて嬉しそうな表情をするのか、少し気になり、筆を置いたアイギスがナズーリンに問掛けた。

「手がかりだけでも嬉しいとは、余程の事なのでしょうね」

「今まで何処を探しても見つからなかったのですが、今になって手がかりが見つかったのですよ、今日は良い日ですね」

アイギスの言葉を受けて答えてくれたのは、ナズーリンではなく明るい笑みでいる星。

星の返答を受けて、何か、長く探し求めていた物。

その手がかりとなる何かをやつと見つけ出して、嬉しさを隠し切れないという表情を見せる星と。そんな嬉しそうな主を少し疲労感

の見える顔で眺めているナズーリン。

嬉しそうな二人を見比べて、なんとなく話の流れを理解しその場の雰囲気に合わせてアイギスも幾分類を緩ませる、小さく笑む口から宝の地図が見つかりなによりですと、それらしい例えを交えた言葉を二人に述べるアイギス。

星とナズーリン、二人の持つ力の名称だけを聞いていたアイギスからすれば間違えた祝辞でもなかったのだが、はっきりと物だろうと言いつつその言いつぶりが星のナニカに触れたようだ。

財宝が集まる力を持つ星が宝の地図という言葉に引つかかるとは思えず、少しだけ困り顔になるアイギス。

「気に障ったなら大変失礼致しました。お二方のお力とこの国の別称から、てつきり金脈の地図でもお探しだったのかと」

「宝の地図とは少し違います、言うなればモノ違いですね。宝物ではなく、大事な者達の手がかりが見つかりました」

アイギスの住まう欧州では黄金の国などと呼ばれているこの国。

多大な金鉱山や鉱脈に恵まれて、貴族の住まう宮殿から果ては一農民の住まう農家まで、その全てが黄金で出来ていると言われていたはずの国。

小さな島国でありながら他国との関わりを絶ち文化を隠匿する国。

訪れてすぐに思い出した、以前に紅魔館で読んだ書物『東方見聞録』に記述されていたこの国に対する説明文。

その記述のほとんどが嘘まみれで、農家どころか宮殿すら黄金で造られてはいない、それどころか宮殿も農家も同じく木造で、貴族も平民も住まいのサイズが違うだけで然程変わらない。

この寺を訪れる以前に見てきた家々や町並みから、アイギスもその辺りの事はそれなりに理解し、少しのジョークのつもりで言ってみたが上手く噛み合わなかったらしい：

慣れない事を言うものではないかと、浅黒い頬を再度緩めて小さく苦笑していた。

「そう熱くなるなご主人、シーカー殿も謝らないでいいんだ」

大事な者達を物扱いされほんの少し熱くなった星を諫めて、アイギ

スにも謝る必要はないと、二人をとりなすナズーリン。

アイギスとは心安い間柄、とまではいかないが、少しの冗談を交えた世間話を言い合うくらいの中にはなっており、今の会話も皮肉も嫌味も含まないアイギスらしい物言いだっただけとわかっているようだ。

逆に言えば、そんな感情が全く乗らない言葉が星からすれば嫌味っぽく聞こえたようだ。

「それに宝というのもあながち間違いじゃない、良縁は何よりの宝だよ、ご主人。この寺の皆に言うならそう悪くないじゃないか」

すっかり寂れた寺の本堂内を携えたロッドで指しているナズーリン。

指される先にはなにもなく、その周囲を見渡してみても、穴開きの屋根を修繕した跡や柱につく古い刀傷くらいしか見つけられないアイギス。

屋根の方はアイギスが少し手直した物で、特に気になるような事はない。

気になるのは、時偶に星が振るっている槍の傷にしてはらしくない、斜めに奔るような、まるで誰かを袈裟斬りにするように奔る刀傷を見ていると、その傷を見ているアイギスに向かい星が少しだけ説明し始めた。

「その刀傷は昔の物です、以前に荒れた事がありました：探している皆もその時に」

「ご主人、それは…」

「いいのですよ、変に誤解されるよりはずっといい。この寺には妖怪を匿う住職がいたのです、私も含めて皆慕っていたのですがある時にですね…」

途中まで話して言葉を詰まらせる星。

先ほどまでの明るい表情は沈んでしまい、浮かばない顔を見せる星に対して、話したくないのであれば、と中断し忘れてもいいという態度を見せるアイギス。

一気に沈んだ表情と、言い難い事を口にはしているとわかる声色。

その大事な者達と何かがあつて今は別れる事になった、そして悔やんでいる、なんてものがアリアリと分かりそうな態度を見せる星。

余程の鈍さでなければ容易に察する事が出来て、聞き出す気もないアイギスが話を逸そうと自分の方へと話題をずらした。

「穢れる者を嫌い憎み、力尽くで排除する、こういつた事は何処にでもあるのですね」

「なにか思うところでもあるのかい？」

「私の国にも魔女狩りなるものがありまして、悪魔を崇拝する異端者が狩られては裁かれておりました。国が変わつても人間がやる事は変わらない、呆れる事しか出来ませんね」

会話していた星とナズーリンの二人から視線を逸らして、空を見上げるアイギス。

同じ様に少し見上げ、住まい兼店舗の窓から見上げていた黒煙、それと共に追われてきた、あどけない魔女を思い出し、感慨深いといった物言いをする崇拝される側の者。

そういえば木に吊るした者達や拷問器具を使った彼らはどうしただろうか、今頃は店舗の前に鎖に繋がれた白骨が下がっているのだろうかと、地元と呼びたい国の事を思い出していた。

「シーカー殿の親しい方も？」

「顧客が狙われ、夫婦で焼かれたようです。幸いにも御息女は保護出来たのですが、ご両親の亡骸は灰となり消えてしまっておりまして：旧知でありながら最後に弔う事も出来ず、少し申し訳なかった気がします」

問いかけてきた星に返答し、空を拝むアイギス。

立ち入った事を聞いている、といった少し遠慮の伺える表情の星に對して淡々と話し空を眺めている。

アイギスの営む店舗内でパチュリーに言った、亡骸があるのなら弔うという言葉。

それを思い出して、弔う事も出来ずに申し訳なかったと伝えたようだが、星とナズーリンには別の意味合いとして伝わったようだ。

仕事柄他者を弔うというだけで、パチュリーの両親に対して何かの



思いがあるわけではなかったのだが、両親や娘を思つての言葉だと捉えられたようだ。

「私の事は兎も角として、見つかるの良いですね。人手が欲しいと仰るのなら私もお手伝い致しますので、その際にはいつでもお誘い下さいまし」

「客人に頼む事じゃないさ、気持ちだけ受け取っておくよ。それに仕入れた情報通りなら、今のシーカー殿では行けないような所のはずさ」

流水を渡れない吸血鬼でもなし、特に行動制限といった物が無い悪魔に向けて、今のアイギスでは行けない所にいるのだと話す天部の使い。

毘沙門天代理、言うなれば神代理の星に使えるナズーリンが行けないという所などと言うのだから、天界や死んだ先の地といった事だろうか？

そうであるなら確かに行けない、というよりも行きたくはないと考えるアイギス。

「私では行けないとは？ 天国や、この国で言うあの世といった所でしょうか？」

「忘れられた者達だけが行ける楽園、そんな呼ばれ方をされている地があるらしくてね。未だ崇められる君では行けそうにないだろう？」なるほど、淑やかに笑んで頷くアイギス。

出身地から遠く離れた日本にいなながらも、アイギスに向けて発せられる畏怖や恐怖といったモノが、未だ忘れられてはいないと示していた。

入国したその日に多数の目撃者の前で人を殺め顔色一つ変えなかつた黒羊。

止めようとしてきた役人もスコップで断ち、出島から外へと向かい赤い水溜りを転々と残していった畏怖される者。

悪魔からすれば人を殺める等よくある事で気にしておらず、自身の行いから『忘れられる』とは真逆に向かう事になっている、そう考えではないようだ。

「ですが、寅丸様もダウザー殿も忘れさられるのは難しいのでは？代理とはいえ神とその御使いなのでしょう？」

「この寺の惨状を見てもそう言ってくれるのですね、ありがたい事ですが現状を考えればそう遠くないうちに行けるようになる…：そう思っています」

「貴女方が忘れられるという事は…いえ、今は神でしたね、であれば完全に消える事もないでしょう。そういったお話を聞いては厄介になっっているのも気が引ける、今晚には出立するとします」

腰掛けていた縁側から立ち上がり、星とナズーリンにお世話になりましたと、生やすアモン角を深々と下げるアイギス。

会いたい者達の居所がわかったのだから早く行きたいと考えて当たり前前、行くには忘却の彼方へと向かわねばならず、そうするには自分は邪魔だと結論づけたアイギス。

面を上げて内君的な笑みを浮かべると、お気遣い感謝と二人から謝辞を述べられていた。

短い間ではあったが、この国の事や語学を教えてくれて寝床まで用意してくれた二人。

その二人に対して返せる事が足早に去る事だけというのが歯痒いようだが、恩人が進みたい先へ行くには致し方なしと、この場での親切心の売り買いは諦めたようだ。

儲け心のある者らしく引き際はいい黒羊。

もしも後々で再会することがあり、その時に出来る事があるのなら、その時には誠心誠意返そうと、己と約束したアイギス。

忘却の楽園へと向かう者達に向けた約束など簡単に違えてしまいうのだが、折角結ばれた良縁という宝、富や名声といったものには関心を持たない黒羊が、誼を結んだ二人。

異国で出会った毘沙門天から縁という宝を授かりながら、無事に探し人と会えて仲も修繕出来れば良い。

修繕した縁側から離れたアイギスはそんな事を考えていた。

## 第十話 新たな依頼

黒いスコップ携えてザクザクと土をかける女性。

自身で殺めた者達を弔うような感覚で埋めているわけではなく、ただ己が自己満足するために土を掘り遺体を埋めている。

埋まっているのは名もないような半端者の妖怪達。

異国から不意に訪れた、種族も力も知られていない黒い羊の妖怪を狙って、返り討ちにあつた者達が土の下へと埋められていった。

埋められていく者たちの中にはまだ息のある者もいて、朗らかに笑んでスコップを動かすアイギスもそれに気がついてはいるが、他者からの恐怖心を糧にしているアイギスからすれば、四肢を飛ばされて生きたまま埋められる恐怖というのも中々に美味のようだ。

漢字やこの国の事を教えてくれた寺から出た彼女。

今は日本のやや東寄り、江戸という、この国の中心からほんの少し離れた辺りの山中にテントのようなものを組んでそこで暮らしているらしい。

他者の心を糧として生きるため人間の住まう地域からは離れられず、それでも町の中心にはいられないアイギス。

喧騒や他者が苦手というわけではなく、この国では褐色の肌も赤黒い瞳も珍しく見られるため、無駄に絡まれる事が多く、あまり食べ過ぎては体型が気になると少し距離を取っているらしい。

体型など大昔から変わっておらず、どれほど喰っても肥えてみたり顎が二の腕の振り袖がつくような事がないのは、汗を掻いて掘り返しては埋めているからかもしれない。

「知られていないというのは良いものですね、お陰で食事に困らない」  
地面の下から聞こえていた呻き声が聞こえなくなった頃に独り言を呟く彼女。

うっすらと汗を掻いた額を手の甲で拭い、やりきったという達成感に満ちた顔をしている。

目の前は綺麗に、まっ平らにならされてしまった本来傾斜のついている山の地面、広さで言えば3×3×3メートルくらいでそれほど広

い面積ではないが、途中から山が切り取られて地層が見えている部分もある。

他者から見れば整地されたような風合いを見せる山肌に向かい、スコップを地に突き刺して己の整えた平らかな山を見ているアイギス。

フウと一息ついて、着ていた上着とベストを脱ぐと、Yシャツの肌が触れていた部分や背中、脇といった辺りの色合いが変わっていることに気がついて、少しさっぱりするかとおもむろに脱ぎ始めていた。

仮住まいの近くにある川でとりあえず汗を流し始める彼女。

年齢の割には肌も水を弾くほどで、パツと見ただけなら健康的に日焼けした二十歳前後の女性といった感じに見えるのだろうか。

そんな女性があられもない姿で川遊びをしていると、アイギスの仮住まいの少し奥辺り、着ていた衣服を脱いだ簡易のハンガーに掛けた奥から、いつか感じた紫の妖気を感じ取っていた。

「覗きとは趣味が悪いですね、それともそういった妖怪さんだったのでしょうか？」

趣味が悪いと言いながらも特に体を隠したりせず、毛量が多いが柔らかい黒い髪や象牙色の角、浅黒い肌の中で先端だけが薄いピンクの胸辺りから雫を垂らして、覗いている誰かに言葉を述べるアイギス。

言葉を受けて現れたのは、以前に出島で出会い、軽い世間話をしながらなにかあれば申し付けろと言っていた相手。

何も無い空間にピンク色のリボンが浮いており、その間に開いたナニカから上半身だけを出している妖怪の賢者、八雲紫であった。

「覗きだなんて心外です、偶々探しに来てみたら水浴びの最中だったのですわ」

右手に携えた扇子を開いて瞳から下を隠しそう述べる紫。

不意に訪れたのならそういう事もあるだろうと、返答をそのまま受けて川から上がりタオルで水気を取っていくアイギス。

季節は梅雨の終わりが近い頃合いで寒いという時期ではないが、それでも川遊びには少し早い季節。

けれどあまり気にはしないようだ、元々が北国の生まれで慣れているというのもあるが、それ以前に生き物というのは少し歪な在り

方の悪魔なのである。

寒い暑いとは感じて着込んでみたり汗を掻いたりはするが、それが原因で体調を崩すような事はないらしい。

「裸のままでは失礼ですし、とりあえず着替えますので、しばしお待ちを」

全身を綺麗に拭きあげて、出立時に持ちだした替えの下着やYシャツに袖を通していく。

Yシャツのボタンをとめて次はスーツの下をと手を伸ばすと、妖怪の賢者の左腕だけが、その体と同じように瞳の多くある空間から伸ばされてアイギスに手渡された。

「お気遣い感謝致します、八雲様」

伸ばされた左腕に向けて謝辞を述べそのままパンツに足を通し、ベルトをシルバーのバックルへと通していく。

とりあえず服は着たアイギスが、八雲と呼んだ者と向かい合い立ち話をし始めた。

「私の名をどちらで？」

「私を喰らおうとしてきた者達から少し、神隠しの妖怪なんて言い遣して逝かれましたね」

先ほどまで整地していた辺りを眺めるように、少し遠くを見つめる黒ずんだ紅の瞳。

言葉から返り討ちにあったのだとわかる物言いだ、紫もアイギスもそれについてはさほど気にしていないようだ。

糧を得ようとすれば逆に襲われることもある、ただそれだけの事で互いに気にしておらず、この場では何処で八雲紫の名を知ったのか、それだけが重要であった。

「神隠しも嗜みますが、それだけではないですわ」

「でしようね、貴女様からは強い御力が感じられる。言い残しているた者も、消え入る寸前に不意に漏らしただけのようですし、広く知られている方のようで些か緊張致します」

瀟洒な笑みを浮かべたまま紫に緊張感を覚えると言っているアイギスだが、空気や雰囲気からはピリピリとしたものは感じられない。

上半身だけを異空間から出してみたり、また別の異空間から左腕だけを出すなど、自然豊かな山間の中では浮いてしまうほどの不自然な光景を目にしているが、それでも焦りの色は見せなかった。

目にはしている事象は兎も角、不自然と呼べる力を自然に操り好きに扱えるくらいの妖怪、この国での大物なのだろうなと考えるだけのアイギスだった。

「さて、本日はどのような？」

「先日の名刺に書かれていた文言、あれをお願いしに伺いましたわ。アイギスⅡシーカー殿」

名乗っていない真名を呼ばれ、一瞬だけ目を細めるアイギス。

細められた目を同じく笑むために細めた瞳で見つめ返す紫、紫の能力を持ってすればアイギスの記憶の境界を弄び名を知り彼女の事を知る事も出来る…のだが、全てを覗き見て知る事はやめたようだ。

仮にアイギスを自身の手元に置く、もしくは目障りだと葬るような事があれば全てを覗き見て知ったほうが手が出しやすい。

けれど、紫の力を垣間見ても表情も態度も変えない異国の者。

それなりに力があるとわかるアイギスと敵対するつもりはなく、紫の考える後の事の為に出来れば縁を繋いでおきたい、だからこそ名前程度で留めておいたようだ。

「お仕事でしょうか？ 聞き入れる前に少し内容を伺っても？」

「場合によっては、そう書き記してありますものね。単純な事ですわ、私の庭を荒らす者達をどうにかして頂きたい、それだけの事です」

紫からの説明を受けて、薄めの唇を僅かに歪ませて見せるアイギス。

瀟洒な笑みから外法者らしい邪な笑みを浮かべると、そのまま扇子越しに嗤う者へと、真意の読みにくい横の瞳孔が見える瞳で紫を見つめた。

「物言いから荒事、と受け取って宜しいのですね？ 何か決め事などはございますか？」

「引き受けて下さるのなら特には…いえ、一つだけ」

扇子は下げずに空いた左手の人差し指を立てる紫。

仕事をする上で後々からこうしてほしい、この場合にはこういった対応を頼むと言われる事もあり、後出しで追加される事は面倒な事が多いと体感しているアイギス。

今回もいつもの様に先んじて条件を聞き出していった。

「人間達が住まう地域があるのですが、その地域内では荒事は避けて頂きたいのです」

「襲われた場合も手を出してはいけないのでしょうか？」

「相手が人間であるなら、出来れば引いて頂きたい、そう考えております」

穢れを纏う者が人間を気にするなど、少しだけ訝しがるアイギスだったがその部分を考えることはやめたようだ。

依頼とあれば引き受けるつもりであるし、引き受ける以上の事をするつもりも考えるつもりもない。今回の話であれば八雲紫の庭を荒らす者達をどうにかすればいいだけで、その手段までは縛られていない。

人を襲う制限は課されたが地域限定のモノだというし、この地の妖怪から得られる恐怖心も中々に珍味だと感じているアイギス。

「畏まりました。そのお話、お引き受け致しましょう」

「ありがとうございます、報酬は何を ご用意すればよろしいので？」

「大概の物であればご用意出来ますが」

パタンと扇子を閉じて、軽く会釈する紫。

少ない情報で依頼を引き受けたアイギスに対して、話が早くて楽だと感じる反面、内容を詳しく聞かずに荒事を引き受けるアイギスをほんの少し警戒し始めていた。

その警戒から考えて依頼に対する報酬も大きく、大概のものであれば用意すると述べていた。

「特には、私の場合報酬は仕事にお会いした方から頂く事が多いのですよ。言うなれば手段が目的になっておりますので、鉄火場さえあればそれ以上は望みません」

アイギスが荒事に向かう理由は単純で、己の腹を満たす為の糧を得る為だ。

棺桶職人という仕事はあくまでも暇つぶしであり、そういった仕事で知り合えた魔の者達から頼まれる荒事で生計、もとい食事を済ませていた。

食い足りなかったりした場合には趣味であるエンバードミングを施して他者に見せつけ、こうはなるまいという恐怖や畏怖をデザート代わりとしていた。

その為今回もこれといった報酬は必要としていなかった：目的の為に手段を選ばない相手は多いが、手段を目的とする者はあまりないかもしれない。

「手段が目的とは、難儀な事ですわ：ですが私としては依頼人としての形をきちんと成したいのです、宜しければ何かご用意させて頂きますわ」

望みはないというアイギスに向けて、押し付けるように何かを用意するという紫。

話を聞く姿勢を見る限り仕事に対する真摯さは伺える、けれどアイギスのような真摯に仕事をする者は依頼者が誰であれ同じ様に仕事をこなすだろう：場合によっては庭を荒らす側にされる、そう考える紫。

まともに殺しあいしてやられるとは微塵も考えていないが、手の内がわからない、ましてや紫の知る悪魔とは違い、異国の文献から得られた悪魔の概念からは少しズレた位置にいるアイギス。

万一殺しあうのであれば情報を引き出してから、その為にはなんでもいい、仕事面以外のアイギスの姿を見ておきたいと考えていた。

「見れば仮住まいのご様子、宜しければ仕事中は私の元で過ごされませんか？ 手狭ですが不便はない別荘がありますの」

アイギスの返答を待たずに異空間が口を開く。

異空間の中には全身を現した紫が佇んでおり、以前に見た紫のロングドレスを優雅に纏って一人大量の瞳に見られていた。

ギョロギョロと不規則に動いては時偶紫とアイギスを見比べている瞳の群れの中、社交界にそのまま現れても不思議ではない悠然さを見せる妖怪の賢者。



振り返り2歩ほど歩みを進めてアイギスを待つように首だけを横に向ける、右半分だけ見えるその顔は怪しく笑んでいて挑発しているようにも見て取れた。

だが、そんな挑発は気にせず、仮住まいとしていたテントの中から荷物を取り出して、迷い無く異空間、スキマの中へとヒールの踵を差し入れるアイギス。

地面とは呼べず聞き慣れた音もしないヒールが少し気味悪いが、庭を守るのであれば紫の近くにるのが手っ取り早いと、引き受けた仕事の為に躊躇なく紫の後に続いたアイギスであった。

く少女移動中く

先を進む紫の後を追いスキマを抜けると、アイギスの目の前には雄大な自然が広がっていた。

スキマを抜けた先は空。

先に出たはずの紫は先程まで歩んでいた入り口を薄く、横方向に平らに伸ばしてそれに腰掛け足を組んでいた。

繋がる鎖のないブランコのような姿勢で中に浮かぶ紫だったが、怪しく笑んでいたのは最初だけで、すぐに動きを見せることになった。

「出た先が空だったとは、困りましたね」

アイギスは飛べない。

正確に言えば今までは飛ばなかった、種族悪魔だとはいつても紅魔館の姉妹のように翼があるわけでもなく、魔法使いのように空を駆ける魔法を覚えているわけではない。

無論扱えるだけの魔力は十分にあるが、アイギスの場合は少し違う。

飛ばないのは魔力云々よりも、元が羊で空を飛ばなくとも地を歩くか奔る事に慣れていてそれを当たり前と考えていたためで、飛ぶという事を考えた事がなかっただけである。

歩を進めたままの形で落下し始めて、そのまま足元の地図のように見える大地へと自由落下していく古い悪魔：激突しても死にはしないが汚れるだろうなど、心配する先を間違えた心配事を考えていると不意に浮遊感に囚われていた。

「失礼しました、まさか飛べないとは思わず…迂闊でしたわ、私の庭をご紹介しようとよく見える場所に出たのですが」

アイギスの細い腰に両手が回されて、紫に抱きかかえられる体制でいる飛べない、いや、飛べない悪魔。

珍しく他者に身を委ねる黒羊に、足元に広がる大自然を見ながら、これが私の庭だと述べる紫。

広いのだろうと予想していたアイギスであったが、ここまで広いとは思っておらず、この地の端から端まで見るのならば飛べないままでは少し手間だと、直ぐに自身で浮き始めた。

「あら、本当は飛べましたの？ 内緒にされるなんてつれない御方ですわ」

「お仕事で必要、そう感じましたので飛んだだけですよ。出来れば地に足ついた状態が好ましいですね」

飛翔する魔法を唐突に覚えた、そんな都合のいいものではないが実情はもつと都合がいいのかもしれない。

魔法使い達は自身の魔力を呪文に乗せて形と成す、その為にはそれを司る神や悪魔等から力を引き出して利用する、いわば魔力を使用料として払いそれを借りて行使する形が多い。

黒ミサやサバト等で力を授けてくれと願う者が破滅するのは、身に余る力を授けられて内から身を滅ぼすからだ、契約とまではいかないが引き出して借り扱う程度のほうが使い勝手がいいはずであった。

話が逸れたので戻すが、アイギスは魔法使いに授ける側の悪魔である。

貸し与える者達は呪文等を利用し飛ぶが、貸す側からすれば、貸すほどに余り溢れて仕方がない魔力を飛ぶという行動に回すだけ、言うなれば歩くなどの日常行動に宛てがうだけだ。歩いたり走ったりする事と何ら変わらず呪文等は必要としないらしい。

「浮足立った事でわかったのですが、期間を訪ねておりませんでしたね。言語のように弄られたのでしょうか？」

地面から足を離し、文字通り浮足立った事で仕事の期間を聞いていないと思ひ出すアイギス。

落ち着きはそのままでが飛行することに慣れず、気持ちの整理をしようと考えた事で何かがすっぽりと抜け落ちている事に気がついたようだ。

抜け落ちているなら埋めればいいと考えて素直に紫に問掛けた。

「弄られたと理解した上で聞かれるのですね、騙されたとはお考えにならないのかしら？」

「依頼は既に受けましたので、今のやり口にも文句はございません：ですが一つ、報酬代わりに私と約束して頂きたいですね」

空中で対峙する二人。

片方は足を組みスキマに腰掛けて、もう一人は両の腕を緩く組んで真っ直ぐに背を伸ばしている。

悪魔と取り交わす約束、言うなれば契約に近いそれに対して一瞬真面目な顔を見せた紫だったが、既に依頼を持ちかけて雇用の契約を結んでいると気が付く。

特に理由も聞かず、笑んだままあっさり依頼を受けたのは、逃げられない、破れない悪魔の契約だったのかと今更に気がつくが既に遅かった。

「お約束？ どのような？」

「裏切らない、これだけで宜しいかと」

「依頼主としてお約束いたしますわ：それで、期間の方ですがまずは300年ほどお願い致します、その間に成すべきことを成したく思っておりますので」

悪魔との約束に即答し違えることが出来なくなっても、特に焦りの色を見せない紫。

何を？ 誰を？ どれを？

という色々な言葉を省き、その全ての意味合いに宛てがう事が可能な、アイギスの真正面からの悪魔らしい物言い少しだけ感心するだけであった。

面倒になれば境界を弄り、なかった事にすればいい。

そのように考えての即答であったが、アイギスを長く生きただけ

の、商売をしている力ある悪魔として捉えるならそれで良かったのだが…

いじった境界が穿たれる、そんな事があるかもしれないとは考えつかなかったようだ。

「まずは、などと申されなくとも、場合によつては延長も対応いたしますよ?。」

「悪魔との契約なのです、『まずは』と付け加えておけば後々の完遂時でも違える事なく延長せざるを得ない…貴女、アイギス殿はそういった者なのでしょう?。」

はい、と淑やかに笑って述べるアイギス。

それに対して美しく怪しい、胡散臭い笑みで応える紫。

互いに言葉を交わしただけで両者の事を縛っていく、長く生きる妖怪と悪魔。

どちらも癖の強い者だと感じ、同時に面白い相手だとも感じた空の一幕であった。

## 第十一話 新たな出会い

依頼を受けてはみたものの、特に荒事らしい荒事に関わられる事はなさそうな羊。

誰かを仕留めたり追いかけてりするよりも、住まいとして充てがわれた八雲紫の別荘地、頂きが望めないほど高くそびえる山のどこかにあるという、道に迷った者だけがたどり着ける建物で過ごす事が多くなっていた。

今日も今日とて、他者に向けるべきスコップの刃先を、庭先の花壇や後々生け垣として立派になりそうな木々達の根本に向かって突き刺しては、首から下げたタオルで汗を拭っていた。

草花を食む側である羊が植物を育てるなど、矛盾しているように思われてしまいそうだが、全てを穿つ力を持ちながら絶対の盾の名を冠する彼女からすれば、矛盾した在り方というのも案外似合うのかもしれない。

「こう、なにもないと手入れが捗り悪くないのですが、暇ですね」

うつすらと腹筋の見える白い服、褐色の肌に映える白いタンクトップ姿で、植えた生け垣を眺み見るアイギス。

八雲紫の御庭の番をするという依頼を受けたはずが、荒事は予想以上に少なく、すっかりと別荘地であるココ、マヨヒガの手入れをする事が多くなっていた。

紫がくれた作業着代わりのタンクトップ、その内側、縦に伸びた臍辺りから音がしてしまうようなことはないようだが、それでも期待していたような荒々しい事は少なく、暇を埋める為に依頼内容にはなかった庭の手入れをする墓守。

「契約期間中ずっとこれでは、そのうち退屈にやられてしまいそうです」

生け垣の内側、マヨヒガの縁側に腰掛けると丁度眺められる辺りに、八雲紫の式だという妖獣から預かった花の球根を植え付けていく元草食動物。

左右の縁が切られて、テンガロン・ハットのような形にされた麦わ

ら帽子を地面に傾けながら、いそいそと指先で土をならしては球根を植え付けていた。

来年の5月頃には紫色の花を咲かせるという、ナントカといった花らしいが花の名前は忘れたようだ、ただ此度の依頼人が好む色合いの花で、それを式から預けられて手入れついでに植えているだけらしい。

「花壇の手入れまでなさるとは、仕事熱心なのですね」

花壇の前で膝を折り、慣れない庭仕事に精を出すアイギスの横に大きな影が差した。

大きいといっても本体はアイギスよりも頭半分くらい背が低くて、真っ直ぐに立てば見下ろす形になるのだが、この者は本体よりも付属品のほうが大きく見える。

夏場の陽の光を浴びて燦爛と輝く金色の毛色、キラキラと光る毛を生やした尾が九本もあり、時にはその尾を自在に操って見せる、金毛九尾の狐と呼ばれる妖獣達の最頂点。

「本来の御庭番としては意味合いが違う気がしますが、荒れた庭先を整えるのも良いものです…血ではなく土で手を汚すのも悪くないと感じておりますよ、藍様」

植え付けている球根を眺めつつ影の本体、八雲紫の式である八雲藍に向けて返答するアイギス。

依頼人の従者から話しかけられたというのに顔も見ず、隣に映る影を見ながら話していて失礼な態度のように思えるが、今は着慣れたスーツもシャツも脱いだ状態で仕事をする姿勢ではないアイギス。

むしろ余計な庭仕事に精を出すという、仕事外の仕事の中でそちらに集中しているため、藍を相手にするよりも仕事に集中したいという雰囲気醸し出していた。

「手が空きましたら少し出かけませぬか？　主がアイギス様にお話したい事がある、そう申しております」

花壇に向かうへんてこな麦わら帽子に向かい話しかける九尾。

白と青の二色を配した道士服を纏い、ゆつたりとした袖口に両手を隠すように入れて組んでいる。

手の内を晒さないといった意味合いがある姿勢、ではなくこれが彼女の立ち姿であり特に意味を含んだりはいないようだ。

アイギスがこの地、後に幻想郷と呼ばれるようになる八雲紫の箱庭に訪れた際には、姿勢の通りの意味を持たせていたが、訪れて30年近く経った今では警戒も何もないように見える。

「紫様が私に話ですか？　藍様に言伝を申し付けなくとも、直接いらっしゃるか私を呼びつけなければいいものを」

「何分お忙しい方ですので、それに、こういった事の為に私がいます」  
八雲紫の事を紫様、八雲藍の事を藍様とそれぞれ敬い呼んでいるアイギス。

召し抱えられたり式として使われたりしているわけではなく、ただ依頼人である八雲の者を呼ぶのに呼び分けているだけである。

八雲の性が二人いて、二人とも一緒にいる事が多いから、間違いないように名前で呼んでいるだけのようだ。

吸血鬼の姉妹に対しては別の感情もあり名で呼んでいたが、八雲の二人に対しては力ある依頼人とその従者としてしか捉えておらず、仮に藍が八雲の性でなければ紫様ではなく八雲様と呼んでいただろう。

「これを植え付ければ終いです、着替えますのでしばしお待ちを」  
最後の球根を植え付けて軽く土をかける庭師見習い。

全て終えてスツと立ち上がると、見下ろしていた藍の視線が上がりに、少し見上げるような形になる。

今は愛用のハイヒールではなく、白のタンクトップに紺色のもんぺ、頭には歪な麦わらで足元は長靴姿と、まるで片田舎のお年寄りのようなスタイルだが、郷に入っては郷に従えという言葉を教わり、そう過ごすのがこの国だと依頼人から言われた為特に気にせず着ていたアイギス。

「何年経っても似合わない格好ですね、背が高いからでしょうか？  
私もこの国の者達よりは高めですが」

「さあ？　私としては似合うに合わないよりも過ぎやすいので気に入っております、この国は湿度が高いのでいつもの服では暑い日も多いのですよ」

会話しながら縁側へと向かい上がり込んで、建屋中でタンクトップも下のもんぺも脱ぎ始めた、見た目だけは若い女。

藍に見られているが気にすることなく脱いで下着姿で汗を拭いていると、時間があるので汗を流してからのほうが良いのでは？ と提案されていた。

呼びに来た従者にそう言われ、依頼人に呼ばれているのに汗臭いままでは失礼かと考えついたアイギスが藍に少しの時間を貰い、その場で脱いだ衣服を携えて奥の風呂場へと歩み消えていった。

気軽に脱ぐくせに着ていた服は脱ぎ散らかさない、他者の前で下着姿になるなど羞恥心が抜け落ちているように見えるが、服は畳んで忘れずに持ち消えていった彼女を見ていた藍が、相変わらずよくわからない方だと考えていた。

く少女入浴中く

頭から足先までさっぱりと汗を流し、急ぎ目に水分をとった水風呂上がりの黒羊。

着替えて藍と二人、庭先で待っていると二人の視線の先にピンク色のリボンが二つほど浮かび上がる。

藍と並んで開かれたスキマの中へと歩みを進めるアイギスだったが、スキマを抜けた先で思わず足を止めてしまっていた。

スキマの中からも見えていた、細かな砂利を利用して描かれた絵のようなモノ。

とある屋敷の庭園を色なく彩る枯山水に目を奪われているわけではなく、この屋敷のある地から感じられる、現世とは違う空気感が気になり歩みを止めていた。

「ここは…また別の国でしょうか？」

「冥界の白玉楼、貴女の国で言うところのハデスの治める冥府に近い所かしらね」

歩みを止めている間に藍の姿は消えていて、代わりに隣に現れてたのは藍の主である八雲紫。

結界の構築作業に忙しいはずの彼女が何故冥界という場所、白玉楼と言った屋敷の中でまったりとしているのか？



生きながら冥府に来るなど考えられず、スキマ内で気付かぬ内に殺されたのか？

それにしても何も変化がない、と手や髪、角などを不思議そうに撫でているアイギスだったが、紫に手を取られて他者の感触も変わらないうと認識した頃、紫以外の者から声をかけられていた。

「八雲殿、そちらの麗人は？」

落ち着きの感じられる暖れた声色がアイギスの耳に届く。

紫に手を取られ屋敷の中へと進もうとした矢先、不意に声をかけてきた者。

明るい<sup>もえぎ</sup>が落ち着いた緑に見える萌黄色の着物に袖を通し、枯れ葉のような色合いの鶉色<sup>ひわ</sup>をした袴を履いた男、隣に半透明な魂を漂わせている男から声をかけられていた。

「お初にお目にかかります、紫様の下で少し働かせて頂いております、一介の墓守でございます。麗人などと、ありがたいお言葉です」

いかにも年経た風合いの白髪、それと同じ色合いの撫で付け髭を立派に生やした御仁へと、少しの紹介を述べてから静々と頭を垂れるアイギス。

紫に仕えるバトラーかのように右手を胸に当てて頭を垂れる羊に對して、シャンと伸ばしている背を綺麗に曲げて礼をする御仁。

立ち振る舞いや綺麗に伸びた背中からは厳格さが見て取れた。

「ご謙遜召されるな、凜とした姿勢といい言葉遣いといい出来た御仁のようで…八雲殿が幽々子様<sup>ひわ</sup>に話されていた通りの御仁ですな」

「私などただの雇われ者にございますよ」

厳格さを残しながらも緩く破顔して、顔の皺を増やしていくご老体。

紫がここで何を話していたのかまでは把握できないが、この厳格な男がユユコ様という誰かに仕える者だとわかり、やはり屋敷の者かと丁寧な態度を崩さずに会話を続ける雇われ悪魔。

下手に出るといふ雰囲気ではなく、悪魔らしく嘘のない言い様で立場を述べただけだったのだが、この男には謙遜したままだと捉えられたようだ。

「そう己を下げる事もありますまいよ、覚えのある御方が続けると鼻につきますれば」

「下げたつもりはございません、何処であろうと私は変わらず、私のままで不変にございますれば」

厳格な剣客の売り言葉に、買い言葉らしい文言を返すアイギス。

口振りや表情は互いに穏やかな様子で、冗談の延長といった風合いだが、ココ暫く荒事に関われないアイギスは少しだけ乾いているようだ。

雇い主に呼びつけられて訪れた先、そんな所で事を構えるつもりなどなかったのだが、自身が思ってもいなかった事を気に留められて売り言葉を放たれたのだ：相手の名前も宿す力もわからないが、腰に挿した二刀と佇まいから手練だと認識した墓守。

両者ともに目を合わせてから逸らさずにいて、放っておけば荒事へと流れそうな空気が周囲に広がっていく。

「なあに？ 妖忌はもう仲良くなったの？ 私より先に仲良くなるなんて狡いわあ」

チリチリと緊張感が走り始めた場の空気、それを殺すようなゆつたりとした雰囲気少女がフワリと現れる。

着ている召し物も少女の話す雰囲気と同じくゆつたりとしたもので、太く柔らかそうな帯をリボンのように結び前で重ねただけの、すりと解けば開いてしまうようなゆつたり具合に見える。

だがアイギスの気になるものは彼女の見た目よりも、その在り方のようだ。

「お屋敷の御嬢様でしょうか？ 回りのそれは魂？ ご本人も生きておられるようには見えませんか？」

「あらあら、紫ったら：連れてくるだけで何もお話していないのねえ」  
死人が笑い会話をする、アイギスの生まれた地でもよくある事でそれほど不思議なことではない。

ゴースト、フアントム、レブナントにスペクターといった種族の魔の者達も暮らしていたしそういった顧客も少なかったが、いるにはいた：霊体が棺桶を求めるなど冗談にしかならないが、彼らが依頼して

きたのは墓荒しの討伐などだ。

職人としての仕事ではなく掃除やさんとして仕事の依頼をしてくる事が多かった。

「この国では確か、ユウレイと言うのでしたか？」

「正確には亡霊ね、私は西行寺幽々子、この冥界の管理人といった事をしているの、どうぞよしなに、ね。アイギスⅡシーカーさん」

「これは、大変失礼致しました。紫様より聞かれています通りの者、アイギスにごぞいます。いきなりの訪問なれど主様自ら迎えて下さり、感謝の極み」

明るい言い回しをする亡霊の姫に対して、妖忌に見せたように肅々と頭を垂れていくアイギス。

幽々子の漂わせる雰囲気がつっかりと場を満たしていて、もはや荒事といった空気ではなくなった白玉楼の庭先。

妖忌が枯山水を気にせず歩いていることからアイギスも気にせず地に降りるが、ヒールが砂利を抜けてしまい、真っ直ぐには立てなかった。

両足の踵を地に下ろすと両方のヒールが沈み背中側へと傾いていく男装の麗人、飛べばいいと浮き始める前に両肩を誰かに支えられていた。

「その靴はココを歩くのには不向きのような」

「助かりました、ミスター」

両肩を支えているゴツゴツとした手に自身の手を重ねるアイギス。

人間にしては白く冷たい肌をした妖忌の手に触れながら、素直に感謝を述べると、失礼、とすぐに肩から手を離されていた。

少し冷たい手が気になり触れてみたのだが、体に触れられた事を気にしたとでも思われたようだ、先程から考えの外の対応をされてばかりでほんの少し表情がイタズラな物になるアイギス。

飛べばいいものをそうはず、わざと踵に重心を置いて歩きはじめ、妖忌の前で砂利に足を取られる仕草を見せていた。

「宜しければお手を」

バランス悪く歩くアイギスに向かい、先ほどのゴツゴツとした手が

伸ばされる。

老紳士のような対応を見せてくれる妖忌の手を迷い無く取り、少しだけ体重を預けて白玉楼の庭先から屋敷の中へと歩んでいった。

よく手入れされた日本屋敷の一部屋。

広く磨かれた床板が光り、開け広げられた障子の先の庭を写している、壁に鞆に収まった刀や達筆の書がかけられている部屋でアイギスと妖忌は再度対峙していた。

アイギスは見慣れた黒いスコップを肩に担いで、妖忌は腰に挿した二刀ではなく何処からか出してきた、鈍く輝く刀を一振り携えて静かに見つめ合っていた。

屋敷に上がってすぐ、張り替えられたばかりの、新しい畳の匂いが広がる和室でお茶を啜りながら会話をした後でこうなる流れになっってしまったようだ。

幽々子が紫から聞いていた、庭荒らし対策に雇ったという異国の悪魔。

アイギスに母国では何をしていたのかと幽々子が問掛けた事で、吸血鬼の住まう屋敷の盾になったり、偶に人間を殺めて食事していたと正直に話した事で、我が家の剣術指南役と手合わせ願えないかという話になったようだ。

同席していた、アイギスを呼びつけたはずの紫からも妖忌相手にどこまでやれるのか見てみたいという言葉もあり、主と依頼人の二人に見られながら少し手合わせをする事になった。

「獲物は鋤すきなのですか、刀剣は苦手でしたかな？」

手合わせ前の少しの会話、アイギスに使ってくだされと渡そうと断られた刀を見ながら話す妖忌。

ナマクラではなく妖忌が今握る刀と対になるような、美しい刀身の刀ではあったが自前がありませんと言いながらスコップを顕現させたアイギス。

「使い慣れているだけで得手不得手を考えた事はあまり：強いて述べるのならば、切れないコレで切られた時の相手の顔が好きでコレを使っている、とでも言っておきましょー」

右肩に担いだスコップを左手で撫でて返答するアイギス。

愛用している三本目の角だから、というのもあるが、アイギスが刀剣よりもスコップを好むのには述べた通りの理由からだ。

刀や剣が切れるのは当たり前前で、それで切られてもそれ以上の痛みや恐怖はない。

本来切ったり突いたりするのに使わない、農機具であるスコップで切ったり突いたり叩いたりすると、意外性とそれ以上のモノがアイギスに向けられてそれが心地良いようだ。

「手合わせ前に冗談とは、その余裕崩してみせましょう…いざ」

言葉を吐いて息も吐く妖忌。

吐いた息と共に一瞬だけ瞳を瞑り気を入れ替えるが、瞳を開いた時には正面にいたはずのアイギスが消えていた。

素早く左右と下を一度ずつ見る妖忌だが何処にもアイギスの姿はなく、残った部分、妖忌の頭上にある天井部分にアイギスの姿があった。

剣道場の天井を走る格子状の梁を左手で掴み、片手の指だけで自身の全体重を支えているアイギスの姿が妖忌の視界に入ると、アイギスが天井を蹴り勢いを付けて迫ってくる。

右手だけで握りしめたスコップが振り下ろされるが、同じく妖忌が右手だけで振るう刀で受け、力の方向を軽く流された。

流されて少し体制が崩れるアイギスだったが、二手目の剣閃が奔る前に両者ともその場で動きを止める…手合わせだというのに隙を突かない妖忌を訝しむアイギス、見られている妖忌の方は少しだけ眉尻を下げていた。

「不思議そうな顔をされて、どうかされましたか？ 魂魄様？」

「いやいや、流暢に日本語を話されるので、異国の方だという事を忘れておりました」

「？ なにか思う所が？」

「いざ、と言って尋常に、と返ってこないと道場内での手合わせらしくないと感じただけです、お気になさらず」

小さく苦笑して見せる妖忌手。

手合わせの相手からなにかこの国での決まり事、手合わせのマナーのような物が聞けたことでアイギスの表情が少し緩む。

本番であれば言葉などどうでも良く気にも留めないが、今は命のやりとりではなく互いの実力を凶る手合わせ、いわば遊びに近いもの。それならばと、スコップを肩に担ぎ直したアイギスが最初に対峙していた場所まで戻る。

一手目が奔る前まで戻るとアイギスからいぎ、と聞こえ、妖忌の方から、尋常に、と互いに言葉をかわして再度の手合わせとなった。次なる一手目は妖忌から。

片手で刀身を少し下げて一瞬でアイギスに迫り、そのまま刀を振り上げる、空気どころか空間も断つような鋭い切り上げを難なくスコップで受けるアイギス。

軽快で耳に痛い金属音が道場内に響いて、眺めていた幽々子が思わず耳に手を当てていた。

そんな衝突音を気にせずに二人の攻防は続く。

二手目も妖忌から始まり、受けられた刀をスコップの柄に宛てがいそのまま滑らせる、アイギスの握る辺りまで剣先が走ると不意にスコップから手を離すアイギス。

妖忌の刀の勢いから豪快に回り始めるスコップを蹴り妖忌目掛けて飛ばすが、一手目と同様に刀で受け流されて剣道場の壁目掛けて飛んでいった…このままでは壁に突き刺さるか、突き抜ける、だれもがそう考えるだろうがそうなる前に開いたスキマに回収されるのでご安心を。

獲物を自ら蹴り飛ばしたアイギス目掛けて、妖忌の三手目が振るわれるが再度金属音を響かせて受けられた。

蹴り飛ばしながらも本日三本目のスコップを顕現させていたアイギスが、力任せに妖忌の剣戟を受けただけであった。

余談だが、一本目はマヨヒガの庭先に刺さったままだ、何処へ行っても帰りに迷わず辿れるようにと一本は必ずマヨヒガの何処かに残されていた。

「自由自在とは、際限くらいはお在りかな？」

「私の終わりが際限ででしょうか？ 未だ感じた事はございませんが」  
互いに押し合いながら少しの軽口を叩き合う。

会話の終わりに四手目を振ったのはアイギス。  
スコップの柄を少しずつつ持ち上げていきだんだんと刃先、足のかけられる辺りへと促し流していく。以前レミアアの槍を取り回したように足掛けの部分を使い刀を捻ろうとするが、捻られる前に鏢競り合う形は崩れ、妖忌が一步下がりを刀も下げられた。

「小手先は通じませぬ、伊達に爺ではないのです、レディアイギス」  
「レディと呼んでもらえるほど私も若くはないのですが、紳士に呼ばれる分には悪い気はしませんね」

小手先の技は通じない老獪さを見せる妖忌。

レディなどと言ってきたのはお茶を啜りながらの会話中に、妖忌のような老紳士をミスター等と言って敬う事、幽々子のような聡明さも明るさもある淑女の事をレディなどと称すると話したからだろうか。

私は？ と紫も聞いてきたが今の立場からするとマスターだと述べたアイギスが気に喰わないらしく、レディと呼ばれなかった事で少しばかり腹を立てて、今回の手合わせでは妖忌の事を応援していた。「では少しばかりやる気でいきましょう、後で戻しますのでご心配なく、ミスター妖忌」

一步引いた事で間合いが開いている両者。

お陰でアイギスが指を鳴らす時間的余裕がある、肩にスコップを担ぎ直して空いている左手を妖忌に向けてかざし始めた。

魔力や妖気といったモノが漂うわけではなく、ただ親指と中指がくつつけられて妖忌に向けられているだけで、アイギスの能力を知らない三人が一瞬眉間を潜めるが…潜めた眉を笑うかのように口角を上げたアイギスが、小さく指を鳴らした。

音に気が付いた妖忌が刀の切っ先をアイギスに向けて放たれる何かを断つ姿勢を見せるが、妖忌の考える魔力の力は発現しなかった。

音が響くとポトリと落ちる携えていた刀と肩から先の妖忌の右腕、常識の範囲内で考えれば断たれたと認識し穿たれた部分から血が吹き出すのだが、剣道場の床は綺麗なままで穿たれた妖忌も静かなまま

だ。

痛みもなく唐突に落ちた右腕を見ても、妖忌は冷静で荒れる事などはなかった。

「これは驚きました、落ちた腕を見ても痛みを連想しないとは、半分ユウレイだからでしょうか？」

「後で戻していただけるのでしょうか？ 貴女の力を知るのに片腕で済むなら安い」

なるほど、と小さく呟いているアイギス。

妖忌の気概を知り、久しく会えなかった豪の者だと知ると、肩に担いでいたスコップを自身の魔力へと戻し、両手を空けた。

そのまま右腕は背に隠し、左手だけを妖忌に見せつけるアイギス。そんなアイギスに対して力を知る為と言った妖忌だったが、実際のところは掴み切れないでいた。

指が鳴ったら腕が落ちて気にしなければ痛みもない、問答無用で断つというのにそれに伴う痛みがないとはどんな業だ？

長く血溜まりの中に身を沈めていた事もあるはずの妖忌の経験内にもこういったモノはなく、対抗策と呼べるものがすぐには思いつかないようだ。

勝敗の見えない手合わせに心躍り始めた妖忌。

冷たい笑みを見せ思考を研いでいる中、数度なるアイギスの指。

道場内を奔り、留まらずに動く妖忌がいた辺り、妖忌が足を離す側から足元が穿たれて、その度に床板が薄く削れたり、段差二段分くらい下がったりしている。

それでも動きを止めず、アイギスに向けて左で握った刀を振るい剣閃を走らせるが、アイギスの体に触れても切った感触が伝わらず、更におかしいと感じ始める妖忌。

確実に獲物がおかしいと気づいている妖忌を見て、楽しそうに笑み小さく低めの笑い声を漏らすアイギス。

切れ味を穿ちナマクラにしたわけではなく、アイギスに振るわれた斬撃の勢いだけを穿ったようだ、持つ妖忌からすれば勢いも切れ味もあるけれど、切った感触も何もない感覚が手に届くはず。



受けるアイギスからすれば刀で撫でられているような物：歪な穿ち方ではあるが、在る物は何でも穿てるというのだからこういった小手先の事も可能なのだろう。

2度切りつけて感触がおかしいと確信を得た妖忌が、腰に携えた刀の長い方へと手を伸ばす。

刀身が少しだけ見えて、先ほどまでの緩い手合わせの空気が消えていく、殺伐とした緊張感が場を支配する中、まだまだ楽しめる、殺り甲斐のある相手と出会えたと、アイギスが笑みを強くし始めていた。そんなアイギスの笑みを、冷ややかな視線で見つめている者がいた、八雲紫である。

雇い入れて数十年、何度も仕事風景を見ていたが指を鳴らしてナニかをする事はなく、ただただスコップを振るい相手を葬り埋めていく姿しか見た事がなかったようだ。

妖忌と同じく、アイギスの力はこのようなものなのか？

境界を弄られても焦る素振りを見せないのは、自身の持ち得る力故なのか、幽々子と妖忌に少し願いたいこの場で見定めるつもりだったらしいが：理解は出来たのだろうか？

「二人とも、楽しそうな顔になった所で申し訳ないけど、そこまでしてくれない？ 屋敷がボコボコになってしまうわ」

「む」

「良い所ですが、西行寺様がそう仰るのなら従いましょう」

主の声を聞き入れて刀を鞘へと戻す妖忌と、合わせていた指を解きスコップを顕現させるアイギス。

スコップを担ぎあげて妖忌へと歩み寄ると一瞬警戒されていたが、左手で持った妖忌の腕を本来ある辺りで支えて持つように伝え手渡ししていた。

腕が生える辺りで妖忌が支え、穿たれ断たれた際に出来た穴を埋めるようにアイギスの魔力がスコップでかけられていく。

三度ほど掬いかけると完全に元に戻る妖忌のゴツゴツした右手、数度握り確認していた妖忌だったが、確かに元通りだと確信すると言葉通りだと好々爺のような笑みを見せた。

腕を千切られた相手に見せるような顔ではないはずだが何故か笑む妖忌。

「どうやら妖忌の方も良い相手が見つかったとそれなりに気を良くしたようだ、戻された右手をアイギスに差し出して、また後日に次回は思惑なしで、と主の友人から頼まれていた事をバラしていた。」

「そうですねと、差し出された右手を受け取り握り返すアイギス。」

互いに気に入り手を取り合う二人を変わらない冷やかな目で見つめていた紫だったが、思惑をバラされた事で少しだけご立腹のようだ。

「そんなご立腹の紫に歩み寄り、問われてもいないのに自身の力のヒントを話し始めたアイギス。」

「仕事柄掘ることには慣れておりまして、身に宿すモノもそれらしいものですよ、紫様」

「掘る…そう、そんな事を話されても良いのかしら？ 手の内を見せるなんてアイギスらしくないわ」

「良い縁を結んでくれたお礼といったところですが、それに、バレたところで困る事ありませんので」

言葉を発しながら紫に向けて手を差し出し指を弾くアイギス。

音が鳴るだけで紫が穿たれるようなことはない、ただ単に指を鳴らしただけで能力の行使はしなかったようだ。

音だけに気をつければいいとアタリをつけた妖忌も、指を鳴らす行為自体に行使するための何かがあると踏んだ紫も少しだけ悩ましい顔色を見せる。

足先や指先で触れた部分も穿つ事が出来るが、それは見せずに能力のヒントを話したアイギス。

「言わないほうが思い込まれて対策されそうだが、選択肢を増やした事で、荒事に対峙する相手の思考時間を伸ばす事も出来ると示し、悪戯に笑んでいた。」

「胡散臭い友人と、口煩い従者がアイギスの動作に悩む姿を見て、幽々子も似たように悪戯に笑んでいた。」

## 第十二話 それぞれ的一幕

すっかりと切り揃えられた生け垣が並ぶ庭。

整えられた緑の壁とも言えるその生け垣の下では紫色の花が咲き誇り、目に優しい緑と目に留まる紫が良い具合のコントラストとなっている。

そんなコントラストを縁側に腰掛けて眺めるアイギス、その隣には同じような、背筋を伸ばした姿勢で座る見慣れない者がいた。

アイギスが八雲紫から依頼を受けて180年程が過ぎて、慣れなかった庭仕事も随分と慣れたようで、生け垣を切り揃える事も球根を植え付ける事にも手間取るような事はなくなっていた。

生け垣の方は八雲の箱庭。

今は二重の結界に覆われて幻想郷という名に変わっているが、その幻想郷で知り合い互いに気に入った一人の庭師、魂魄妖忌に師事して剪定鋏等で剪定するようになったようだ。

師事する前はスコップで雑に切り揃えたり能力で穿ってみたりしていたようだが、刀を置いて剪定鋏で庭木を弄る庭師の師匠が、手間と時間を掛けて切り揃え育てれば愛着も湧くものだ、などと伝えたらしく、事実そのように手入れをしてみれば意外と愛着も湧いたようだ。

「次回はもう少し減らしても大丈夫よ、この花は繁殖力旺盛だから」

アイギスの隣で姿勢よく座る者が、花を眺めながら来年の植え付けの話をし始めた。

こちらの者は妖忌と知り合った翌年の夏場、始めて植えた球根が花をつけた頃に唐突にマヨヒガへと現れた者だ。

新緑のような緑の髪と黒いチェック柄の入ったロングスカートを夏風に揺らし、薄いピンク色の日傘を差して現れた花の妖怪 風見幽香。

いきなりアイギスの目の前に現れて、深く埋めすぎだとか、密集して植え過ぎだとか、土いじりに慣れていないアイギスに向かいあれもダメこれもダメと、激しくダメ出しをしていたのが二人の出会いであ

る。

「もう少し、と仰られますが実際どれくらいがいいのか、判断しかねますね」

曖昧な物言いをする花の妖怪に返答をする黒羊。

出会いの時から主語のない物言いをする幽香、付き合い始めて長くなった今でもあやふやな物言いが多く、そういった物言いに対してはつきりと言うようにと言い返すようになっていた。

幻想郷で悪名轟く花の大妖に向けて曖昧にせずはつきり言えと言い返すなど、幽香の事を知る者からすれば自殺行為に近い気もするが、彼女たちの場合はこれが日常での一幕である。

「新しい球根はいらないわ、株分けして植えるだけでいい」

「なるほど、理解しました。そういえば、幽香のひまわりはいつ頃頂けるのでしょうか、先に話して頂けないと耕すことも出来ませぬ」

珍しく他者の事を呼び捨てにするアイギス。

依頼人や懇意の者が相手でも大概は苗字呼び、ついでに様や殿など敬称が何かしら付くのだが、今のところ幽香だけは何の敬称も付けずに性ではなく名で呼ぶようになっていた。

これには少し理由があるが、その理由も数個ほどある。

一つは花の扱いを師事し始める条件にそれがあつたという単純なもの。

二つ目はどこことなく共通点が多い事、自分は自分他者は他者という考え方も似ているし、瞳の色も同系色、身に纏う衣服もアイギスのYシャツと幽香のベストは、チエツクの柄こそ違うが同系色で似ていた為、その辺りから少しだけ親近感が湧いたらしい。

そうして3つ目だが、何度か争い、互いに血塗れになりながらも生存しているというのが気に入った大きな理由である。

「いつでもいいじゃない、気が向いたら分けてあげるわ。掘るのが得意なのだからそれほど手間もないでしょう?」

「私が穿つたのでは残土が出ませんので、耕すのであれば能力ではなくスコップで…その方が愛着も湧きます」

事象でも概念でも、何でも穿つ事が出来るアイギスの能力を知る幽

香。

60年周期で訪れる花の異変が始まると互いに動き始め、誰も住まないような幻想郷の端へと移動し、その度に花見をしては手合わせをする中でアイギスの能力を知ったようだ。

地でも花でも気にせずには穿つ彼女を最初は気に入らなかつたようだが、傘とスコップを打合せていく内に両者とも互いを認め気に入り、偶に会っては花やら草木やらを眺め語り合う事が増えていった。

掘り返しては地ならしする事が好きな羊と、耕して花を植え愛でる花の大妖、意味合いの違う土いじりではあつたが行為自体は似ているため、なんとなく通ずるモノがあつたのかもしれない。

ちなみに花の異変と名が付いているが風見幽香が起こす異変ではなく、単に外の世界で忘れられた霊達が幻想郷で溢れてしまい、集まりすぎた霊達の力に寄つて自然が乱れるといった異変なのだそうだ。

放っておけば霊の管理者、地獄の閻魔や配下の死神達がどうにかして収めるため、幻想郷住まいの者達は咲き乱れる花達を愛で楽しむだけとする事が多いようだ。

少し話が逸れたので本題へと戻る。

「かける土がないのではあの子達が困るわ、不便な力ね」

そんな花の化身である風見幽香からすれば花が一番で、その花に対して役に立たないのであれば、どれほど力があるかがどれほど万能であろうが、不便で利便性のないモノとしか感じられないようだ。

そんな幽香からの軽口もいつもの事ですっかり慣れたアイギス、特に気にせず、気安い友人に向けるような笑みを浮かべて二人並んで庭を見ていた。

二人とも態度も顔つきも穏やかで笑んでいて、後の、とある九代目が書く幻想郷に住まう妖怪を纏めた辞典に載る予定の文言通りだと感じられた。

「使い勝手は良いのですが、幽香から見ればそう見えますか。隣の芝生は気にならないのですね」

この地に二百年近く住み着いて、八雲の二人や白玉楼の主従、風見幽香等、知恵も力も備えた者達と関わり過ぎてきた事でこの国の諺

も理解し、それを使った軽口も叩けるようになった欧州人。花の大妖である風見幽香に向かって植物を取り入れたジョークを言えるまでになり、上手く言えたかもしれないと少しだけ機嫌が良いような、頬を緩ませている顔をしている。

「芝生の穂が咲くのは春と秋よ、今時期ではないから気にならないわね」

上手く言えたかもと笑んでいる異国人に対して、ジョークは取り合わないとも言おうように芝生の穂について話す幽香。

冗談が嫌いな堅物というわけではなく、ただ単にアイギスのジョークよりも芝生そのものへの関心の方が強いだけである。

「上手に言えるようになったってきたと思うのですが、自身がそう思っても相手には認めてもらえない、思うようにならず少し歯痒いですね」

苦笑し花壇や生け垣から視線を上げるアイギス。

見つめる先は幻想郷の囲われた青い空、結界で閉ざされた空を見つめながら謙遜もせず自身の冗談を思い返している。

「あら？ 自画自賛するの？ そういうのを、問うに落ちず語るに落ちる、と言うのよ」

アイギスとしては自画自賛というよりも素直に述べただけ、妖忌との初顔合わせの際にもそうだったが、アイギスはあくまでも異国の者だ。

謙遜や己を下げる事を美德に感じるこの国の者達とは感覚が少し違う、日本生まれだという幽香からすれば言った冗談に対して反応がない事が不満だと、上手く言えたのに面白くないと駄々をこねているように見えたらしい。

自画自賛などと言い、語るに落ちると貶したのも口悪く窘めただけのようだ。

「口を滑らせたわけではなく本心なのですが…あれですね、こういった上手くいかない時に使える言葉を幽香から教わった気がします、何と言いましたかね？」

「月に叢雲花に風、と言いたいのか？ 少し違うけれど、天気も陰ってき

たし及第点にしてあげるわ」

アイギスの見つめる先、幻想郷の青々とした空にどんよりとした雲が集まり始めた。

群れるようにまとまり始める雲。

この分であればもうすぐに雨も降り出して、夏場の強い日差しに照らされ輝いていた生け垣の緑や紫の花も濡れ、雨の勢い次第では花弁が散る事になるだろう。

風見幽香に褒められた花壇の花が散ってしまう、上手に咲かせる事が出来た花なのにすぐに散ってしまったては面白くない、出来れば八雲の二人にも見てもらいたかったが中々上手くいかないものだ。

ポツポツと降り始めた雨空を見上げ、そんな事を考えるアイギスであつた。

メメメ

場所は変わって、同じく雨空の中に建つお屋敷。

いつもの雨ならばすぐに止み、雲がかかる空が見えるようになるのだが、このお屋敷の周囲だけ長く降り続けているように見られた。

血のような色合いのお屋敷を洗い流すように、轟々と降り続く強い雨。

屋敷の門を守る門番が頭の先まで水に浸かり、すぐに出てきたような状態と見えてしまうような、外に出ることが馬鹿らしいと思えるほどの豪雨。

少しだけ魔力の影響が感じられる雨が、紅魔館の周囲だけに降り続いていていた。

この雨の原因は二つ。

一つは雨の中に感じられる魔力の元である屋敷の魔女パチュリー・ノーレッジ。

紅魔館の主であり良き友人である吸血鬼レミリア・スカーレットの頼みを受けて、4大元素の内の一つ、水を操り屋敷の周囲だけを激しい雨模様としていた。

「三日間、昼夜通して降らせ続けるとは、私の友はやはり偉大なようだな」

紅魔館の地下、どこまで続いているように見える、広大で暗い書庫の中心部で会話をする者達の姿があった。

言葉を受けている者は前述した屋敷の魔女であり、この書庫『大図書館』の主を、お屋敷の主から任されているパチュリー・ノーレッジ。頑丈な机に向かい魔導書を開いている。

三日もの間魔法を操り続けている割には、表情や態度には疲労といったモノが見えない、体が弱はずである魔女殿。

「雨雲を作り、水分を集め続け降らせ続けているだけよ、難しい事ではないわ、レミイ」

魔導書から視線を移さずに声をかけてきた者、レミイと呼んだ相手に返答をするパチュリー。

レミイと呼ばれたのはパチュリーの座る椅子の手すりに腰を下ろす屋敷の主、レミア・スカーレット。

魔女が屋敷に住み始めた当初は少し固苦しい間柄だったが、住み始めた翌日から今回のように主の我儘に付き合うようになり、正しく友人として付き合い始めてから、レミアの事をレミイ、パチュリーの事はパチエと、いつからか愛称で呼び合うようになっていた。

「簡単な事でもなんでも構わないわ、パチエのお陰であの子が諦めてくれているもの」

大図書館から通じる地下への階段。

その一番奥にある、レミアがあの子と呼んだ者がいるだろう部屋の方を見ながら、パチュリーに感謝を伝えていく姉。

見つめる先の部屋にいるのはレミアの妹であるフランドール・スカーレット。

アイギスが出立してからつい最近までは引きこもり、レミアやパチュリーの前に姿を見せることが殆ど無くなっていた：アイギスの背にいたあの時、背で立てた誓いは存外堅いものだったらしい。

「教えるのではなかったわね、話せば出てくるかと思っていたけど、まさか私も日本に行くと言い出すとは」

とあるコーヒークップを手に取り見つめながら話すレミア。

見つめているものはアイギスが出島で頼んだコーヒーが注がれた



カップのようだ、何故コレが紅魔館にあるのか、単純に渡来品として帰ってきた物をレミリアが知り奪っただけであった。

マズイコーヒートを味わった後に店内から外へと血の川を作った殺人者、顔色を変えずに人を殺め歩む、悪魔のような褐色肌の女が使ったコーヒーカップ。

そんな日く付きの物を店内に置いておきたくないあの店の主が、一旦の帰国時に持ち帰り、母国の教会にて清め祝福してもらおうと持ち帰った物だったのだが：その時の話が最近の新聞記事に載り、美鈴が犯人の見た目とやり口からもしかしたらと言い出してしまった。

そんな美鈴の思いつきに乗っかりレミリアが話半分で奪い、フランドールに見せ話したのが、妹が日本に行くと騒ぎ出す発端となり、結果雨を降らさなければならぬ原因のもう一つとなっていた。

「戻る気配も使いもないけれど、相変わらず周囲を気にしない御方なのね」

レミリアの持つカップを見ながら、机の端に置かれた英字新聞へと視線を映すパチュリー。

アイギスとの出会いで見た惨状を思い出し、他の国へ行ってもあんな風に過ごしているのかと考えているようだ、その考えは正しいが今はもう少し穏やかに過ごしている。

アイギスの願う過ごし方ではないが、幻想郷が結界に閉ざされてから外からの信仰も届かなくなり、それと共に心境にも変化があったようだ：が、その辺りの事は後々彼女の暮らしを眺める時にでもまた。

「出立前に残した言葉通り、アイギスも異国で元気に研鑽していると知れば私も頑張る、なんて事にならないかと考えたが、少し元氣になり過ぎたわ」

カップを机に置くとコトリという音がなる。

その音を消すようにレミリアが、鋭い爪の生えそろった指を合わせパチンと鳴らした。

広い広い大図書館の中を指の音が響くと、何も起こらずに反響し消えていった。

「元氣の一言で済まさないでほしいわ、今はまだ自室で抑えてくれて

いるけれど、その気になれば私を殺して出て行く事も出来るのでしよう?」

自身の死を他人事のように話しながら、魔導書を閉じて軽く指を動かすパチュリー。

指の動きの通りに魔導書が宙で踊り、収まるべき棚へと一人でに戻っていった。

彼女が棚の場所を記憶し、読み解いた後の魔導書であればこのように魔法で戻せるようだが、膨大な蔵書量を誇るこの大図書館。

全てを今のよう管理出来るわけではないため、出来ればパチュリー以外にもここを管理する、パチュリーの言う事をなんでも聞くような小間使いが欲しいと考え始めていた。

「それはしないさ、フランは父を殺めた記憶を取り戻した。気が昂ぶり力を振るったとしても怪我程度で済むはず…身内を殺める事はないわ、傷付く痛みと失う怖さを思い出したはずだからね」

「身内ね、確かに外部の者と私達を見る目が違うとは感じるわ。それでも今のままでは姉妹揃って叱られるわよ? 主とは、淑女とは、なんてね」

「わかったような口ぶりだけど、そうね、確かに言われそうだわ。では、何か知恵はないかしら? あの子を内に留めつつ、興味も得られてあの子が研鑽出来そうな事でも思いつかない?」

まるで当然の事のようにパチュリーに我儘を言い始めるレミリア。話す内容は無理難題といったもので、見た目通りの子供が考えるような都合の良い事としか思えない言葉ではあるが、態度だけは屋敷の主としてあり、翼を大きく開き不遜に友に願っていた。

レミリアからの言葉を受けて少し考える仕草を見せるパチュリー。鼻先に右手の人差し指を掛け口元は手の平で隠している仕草、深く悩むような素振りを見せるがこうして口元を隠している時には、レミリアへ分かりやすい説明をしようと言葉を考えている時に見せるだけで、手段は思いついた後に見せる仕草であった。

「レミィの翼を少し貰える?」先の欠片程度でいいわ、千切るのが済んだら妹様を呼んできて。アイギス彼女と同じ種族と会える、とでも言えば

きつと出てくるわよ」

何も言わずに言葉通り、翼の先を爪で切り落としてパチュリーの机に置いたレミリア。

先の欠片程度で良かったはずだが、片翼の半分近くを切り落として、そのままバランスの悪くなった翼を修復しながら地下の部屋へと向かい移動していった。

魔女が蝙蝠の翼を求め、アイギスと同じ種族と会える事をするというのだから、これ以上は何も聞く必要はないだろう、そんな表情をレミリアもパチュリーも浮かべていた。

「さて、すぐに来るのだろうか。手早く準備をしましょうか。レミイの翼が媒介ならそれなりの者が呼べるだろうし、妹様の遊び相手には丁度いいわ」

魔導書を戻した時のように指を動かすパチュリー。

指の動きに促されて一冊の魔導書がパチュリーの手元に届く、本の表紙には誰かの血で描かれた六芒星が見えていて、書の内容を表紙だけで表していた。

そんな禍々しい雰囲気纏う書を、幼子が絵本を開くかのように開いてペラペラと捲り始める屋敷の魔女。

未熟な者であれば本を手にとった時点で飲まれ、そのまま生命を吸われてしまいそうなものだが、この図書館の魔導書を読み続けて100年以上も経つ魔女からすれば、然程危険な物ではなくなっていた。

「早かったわね、もう少しかかるから待っていなさい」

背から感じる二つの赤い魔力に向かい言葉を吐くパチュリー。

左手で魔導書を開き、そのページに書いてある方陣を大図書館の床に魔法で描いていく。

床部分に書いては文字が指一つ分ほど浮かび上がり、ほんの少しだけ揺らめくような、生き物のように蠢いているように見えた。

もう少しと言いながらも吸血鬼の姉妹がパチュリーの元へとついた時には、ほぼ完成されていた悪魔召喚の為の魔法陣。

陣の中心にレミリアから譲り受けた翼を丁寧に置いて、そのすぐ近くにパチュリーが静かに佇んだ。

「準備は整った、後は呼び出すだけなのだけれど、私がいいと言うまでは二人とも静かにしていなさいよ」

パチュリーの背中に向けてコクンと頷いてみせる、見た目10才前後の、実質380才くらいの姉妹。

二人とも両手を胸の前にして、瞳は期待に満ちているように輝かせている。

これで本当に畏怖される吸血鬼の姉妹なのか、と背に感じる期待とワクワクから小さくため息をつく当主の友人。

息を吐きながら指先を少しだけ傷つけて、床に置かれたレミリアの翼に数滴ほど少し赤みの薄い血液を垂らした。

「我が囁きに耳を傾けよ、我が祈りに応えよ、我が詠唱を聞き入れよ、我念ずる、ここに彼の者を呼び姿を顕現させよ」

両の目を瞑り、血を垂らす右手を高々と上げながら召喚の呪を紡ぐパチュリー。

呪を唱え切ると赤黒い光と瘴気を放ちながら、少しの音を立てて魔法陣が回り始め、レミリアの翼だったモノが少しずつ形を変化させていった。

黒い少しだけヒールのついたパンプスから形を成し、人間に近い色合いの肌の色がスラリと生えていく。その足を隠すように膝丈まである黒いスカートと、それと揃いになるような黒のベストに白の長袖ブラウスが形取られた。

胸元で結ばれた赤いネクタイが形となると、それを見ていた三人がそのまま視線を上げていく。

浮きながら顕現する悪魔を見上げてみると、うつすらと茶色がかつた赤の瞳と、明るめの、肩くらいまでの長さの赤い髪が伸び、最後に頭と腰の辺りから蝙蝠のような翼が生え揃い、バサリと音を立てて広がった。

全身が現れて表情までもわかるくらい完全に顕現すると、魔法陣が消え、現れた悪魔が床に降りコトンと低いヒールから音を立てた。

「我を呼び、願い求めるのは誰ぞ?」

「とりあえず成功よ」

「なんか違う、これじゃないわ、小さいもの」

「背も低いしおっぱいもペツタンコだよ？ 本当に成功なの？ パチュリー？」

仰々しい物言いで現れた悪魔を他所に会話を進める三人。

呼び出した張本人であるパチュリーも、イメージしていた者よりも随分と小さい、パチュリーより頭半分背が高いだけの悪魔に違和感を覚えていた。

だが召喚したのは紛れも無く悪魔で、宿す力自体はそれなりにありそうな者だと感じられた。

だというのに、期待に胸弾ませていた吸血鬼の姉妹はお気に召さないううだ。

それもそのはず、姉妹の見知った悪魔であるアイギスに比べれば背も低く、体も華奢で力も弱く感じられるのだ、期待はずれとは言わないがもう少し見知った者に近ければと考える姉妹であった。

「確実に成功してはいるわ、体の凹凸が少ないのは媒介が幼いからでしょうね」

「お姉様の羽を使ったからちっちゃくてペツタンコなのか、アイギスの角でも削れば似たのかな？」

「ちよつと、私が悪いの？ 寄越せというからくれてやったのに」

身長は兎も角、胸や尻等、魔導書には女性らしいラインがある姿で描かれているのだが、顕現したのは出ているはずの部分が出していない体躯の悪魔。

レミリアの体を依代に呼び出したためか、見た目も依代に沿った形で顕現したようだ、仮にアイギスか美鈴の何処かを依代としていたなら、書物に在るような艶かしい体つきで現れたのかもしれない。

「アイギス：アイギスというのはあのアモン角の悪魔の事だろうか？」

「なんだ、お前も知っているのか、その羊の悪魔の事だが何か？」

不遜な態度のままではあるが、ほんの少しだけ焦るような姿勢を見せる悪魔。

頭と腰から生やした翼を小さく折りたたみ、畳んだ頭の翼の横を指

でグルグルとしている。その仕草と畳んでしまった翼のせいで更に小さく見える体軀、低めのヒールを脱げば下手をするとパチュリーと同じくらいに見える背しかないだろう。

そんな悪魔の発したアイギスの名に反応したのはレミリア。

だからなんだという態度で悪魔に詰め寄っていた。

「いや、同族の名を聞いたのが久しぶりでな、少しばかり驚いただけだ。この場の者は皆知り合い、か…『なによ、あいつのお手つきじゃ手が出せないじゃない』」

不遜さに困惑を混ぜた表情の悪魔。

同族の名に驚いただけというが、後半部分は声にはせず小さく唇を動かしただけのようだ。

吸血鬼の姉妹にも召喚した魔女にも聞き取れる物ではなかった声、その部分をわかりやすく述べるならば、この悪魔の言う物は悪魔の契約についてであって、レミリアは既に戻ってきたら手厚くもてなすという契約をアイギスと結んでいた。

フランドールとパチュリーは今現在は約束などしていなかったが、過去に記憶を返すという約束と、屋敷までの護衛という約束を一度交わしアイギスのお手つきとなっていた。

今現在は未契約の状態であるから何の問題もないが、同族で格上の相手が一度手を付けた獲物を横から取るなど、無駄な争い以外の何物でもないと考えているこの悪魔からすれば、この場の三人は手出しの出来ない相手としか見れなかったようだ。

「まあいいわ、折角来てもらったのだし、とりあえず契約しましょう。契約内容は私の小間使いとなる事と妹様のお相手となる事、妹様に消されても書がある限り死にはしないのでしょうか?」

「魔女の述べる通り、呼び出された手前断れんが、お相手とは? 壊してしまっても構わんのか?」

急に悪魔らしい表情を見せる有翼の悪魔。

実際に壊せるのかはわからないが、純粋な悪魔らしい力強さは感じられて、本気で力を表せば気の触れていないフランドールなら殺めることも可能かもしれない。

そのような事を思わせる悪魔の笑顔であった、それに対して一つの策を弄するパチュリー。

「壊せるのならどうぞ、逆に壊されないといいわね、小悪魔」

「こあ：なんですか、それ？」

「貴女の名よ、力はあれど文献に名を残せていない悪魔、それが貴女なのでしょう？　だから私が真名をつけてあげたのよ、名無しのままで不便だし、見た目に似合っつて悪くないと思うんだけど」

小悪魔を呼び出すのに用いた魔導書を手にそう述べるパチュリー。携えているのは小悪魔の事が書かれている魔導書ではあるのだが、この本には彼女を個として括るための、決まった呼び名は記されていない。なかつた。

「ふえ、せめてもう少しマシな名を頂けないでしょうか？」

古い悪魔であるアイギスの事をあいつと呼べるくらいには彼女も古い悪魔だったようだが、パチュリーが彼女の真名をつけた今、この小悪魔の運命は決まってしまったようなものだろう。

悪魔の真名を知れば操れる、そこを逆手に取り名無しだった状態から小悪魔という真名をつけられた彼女：名は体を表すという東洋の言葉に習えば、彼女は今まさに小悪魔として生まれたようなものだ。名がついた瞬間から態度も小さな物に代わり、不遜さは何処かへと消え去っていた、まさに生まれたてホヤホヤの小さな悪魔といった態度を取るようになっていた。

「小悪魔も壊れないの？　やっぱりアイギスみたいに壊れにくいのですか？」

「アレと同じだと思われると困りますが確かに壊れはしませんね、ですが、小悪魔などと付けられた今となっては大した力も出せず：それでも知識はありますよ！　異性を虜にしたりとか魅了したりだとか！　後はそう、死霊術なんかでも得意ですよ！」

凹凸のない体で科を作り、夜の処世術なら豊富だと述べる小悪魔。実際彼女の得意としていた物はそういった物が多いようで、種族悪魔だとはいつても淫魔であるサキュバスに近い事ばかりをしていたようだ。

だからこそ文献に残ってこなかったのだろう、悪魔のくせに淫魔のまね事ばかりをしていては残る物も残らない。

「パチエ、私は内に箆つても興味の惹けるモノって言わなかった？あの子の何を磨かせたいのよ」

「他者を墮とし死者を弄ぶ悪魔と記されていたから荒事も、と思っただけで快楽に墮とす感じだったのね、こいつは」

腰に手を当て体をくねらせてみたり、互いに首に腕を回して吐息を浴びせてみたりしているフランドールと小悪魔。

そんな二人を見つめるパチュリーとレミリアの瞳は細く、宿す後悔の念を隠すような風合いとなっていた。

小悪魔からすればまじめに誘惑する術を仕込んでいるようだが、そういうた事の予備知識がないフランドールには面白い動きをしながら遊んでいるようにしか見えていない。

色気のある体つきであったならまた別の見方も出来たのだろうが、今となってはそれも無理な話だ。

「今日は兎も角、飽きたらまた外に出ると言い出すんでしようね…：それならいいわ、フランドールの求める相手が海の向こうで帰ってこないというのなら、こちらから行ってあげようじゃない」

細められている瞳の赤い方、このお屋敷の主がまず行けない国名を言葉として述べる。

もう一人目を細めている魔女、パチュリーが目を細めたままレミリアを見つめると、小悪魔を呼び出す前に見せていた期待の表情を浮かべ、パチュリーを見つめていた。

行ってあげると言い切ったのだが、その実はパチュリーにほとんどを任せて向かうつもりのようなだ…：この友人からの我儘等今に始まった事ではないが、さすがにそれはと言い返すパチュリーであった。

「行けない、とは言わないけれど、帰れる、とは言いきらないわよ…」  
「片道切符で構わないさ、この辺りも周辺にも夜に生きる者達は私達しか残っていない、先に消えていった者達のようにいずれ消えるというのなら、妹を想い人の元へと連れて行ってやりたい」

薄目でレミリアを見つめるパチュリーに向かい、先ほどまでとは別



の意味で目を細めたレミリア。

レミリア達を襲い返り討ちにあつた者達が収めていた地、その地を足がかりにして人間たちの数が爆発的に増え始めて、同時に生活の様相も一気に変わってしまったようだ。

深夜でも明かりが灯る町、以前であれば寝静まった人間達しかいなかったはずが、いつからか人間達は夜にも眠らなくなり、事件も起こすようになった。

夜の殺人や人攫いは同じ人間達の仕業だと思われるようになり、夜を続べ徘徊していたレミリア達の存在は人間達の記憶から薄れ、力ない者達から順に消え始めていた。

「はあ、付き合わされる方の身にもなつてよね」

「不満なの？ そんな風には見えないけれど」

「不満、とは言わないわ。東洋の魔法には興味があるし、現地であればそれも容易く得られそう」

「なら決まりね、どれくらいかかりそう？」

「場所の手がかりもない、地名もわからない場所へ飛ぶのよ？ 50年は必要…と並の者なら言うのでしようけど、私ならその半分で貴女達を飛ばしてみせるわ」

パチュリーのため息から始まった仲の良い友人同士の話。

レミアアの我儘に振り回されて、というスタンスから始まったガールズトークだったが、パチュリーの方にもそれなりに思惑と呼べるものがあるようだ。

パチュリーが得意とするのは今日も操っているような、世界を構成する精霊魔法と呼ばれるもの、西洋では『火』『水』『風』『地』の四大元素が主流で今のパチュリーもこの4種が得意であった。

けれど、数十年前から新たな研究をしているようで、その研究内容が丁度東洋魔法の5大元素、西洋のモノに『金』が増えたものと新たな元素である『日』と『月』を足した七種のようだ。

「そう、頼りになる友人がいて私は幸せ者だわ…期待しているよ？」

七曜の魔女殿」

未だ四種しか操れない魔女に向かい七曜と、未来への期待を込めて

言い切るレミリア。

先に言っておけばそうならざるを得ない、フランドールが生まれた日にレミリアがアイギスに言われたように、そうやってほしいという願いを込めて言い放った。

「期待するのは構わないけれど、見知らぬ地へと赴くのは？ 荒事や面倒事となった時にはお任せするわよ、偉大なる主様」

言葉を受けた七曜の魔女から帰ってきたのは、同じ様にレミリアの先を期待する言葉。

アイギスの言い草など知る由もないパチュリーだったが、今の返答はレミリアの言い様を真似てそれらしく返しただけであろう。

それでもレミリアは気に入り、言われた通りにそうであろうと、翼を開いて書庫の宙へと浮き、魔の者らしい笑みを浮かべ始めた。

「それも面白い、行くついでだ、彼の地を新しい領地としよう…どんな者達がいるのか、今から楽しみでならないな」

浮いた宙で一人呟いたレミリア。

小悪魔とフランドールがいる床面を視界の端に捉えながらポツリと呟き、そのままの位置で右手を高々と掲げて、掌に運命の輪が回る天球儀を顕現させる。

少し前までは強大な力を宿したまま消えいく運命が見えていたが、今のレミリアの手にある天球儀は新たな運命を導き出すようにグルグルと回り始めていた。

少し回っては止まりかけ、また動き出しては回転が緩む天球儀。

レミリアの能力を行使しても、この先がどうなるのかわからないという暗示かのように止まらない天球儀を、小さな手の平で握りつぶすレミリア。

先が見えないのなら切り開く。

例え邪魔が入っても今のように全て握り潰す。

新たな領地を得ようと動き出した主が決心した、紅魔館での一幕であった。

く招かれざる客の来訪く ― 吸血鬼異変 ―  
第十三話 始まり

人間が人間同士で争う事ばかりになってきた時代。

鉄の弾と鉄の馬が地上を蹂躪し、鉄の鳥が空を支配し始めた昨今。数百年まではこの地で恐れられ畏怖されていたのは、エンジン音がこだまする鉄の馬でも鉄の鳥でもなかった。

夜を纏い人々を攫っては血液を奪っていた吸血鬼は創作上の種族だと断定され、そのほとんど全てが力を失い消えていった。同じく魔を操り畏怖され、本当に少し前までは狩られ裁かれていた魔法使いと呼ばれる者達も、吸血鬼と同じく力を失い消えるか唯の人間として暮らしていくしかなかった。

そんな時代の流れを完全に無視している者が、忘れられつつある赤いお屋敷の屋上で、この地で味わう最後の血を味わっていた。見た目年齢10才前後の幼女が、妙齢の女性の首筋に牙を突き立て血を貪る光景は、まるで物語にある吸血鬼のままだ。

クチュリと生々しい音を立てて首筋から鋭い歯を抜く吸血鬼。

幼い吸血鬼の腕の中、恍惚とした表情で力なく四肢を投げ出す女性、食事を済ませたレミリアが女を雑に投げると頭から屋敷の庭へと落ちていった。グシャリという音を立てて庭先で潰れた女だったが、ひしゃげた頭を傾けたままで起き上がり、心臓の鼓動を止めたまま屋敷の庭から正面玄関へと歩み始め、屋敷内へと消えていった。

操り人形のようにになった動く死体を気にせず、着ているドレスを飲みきれなかった血で真っ赤に染め上げて、今宵の空に浮かんでいる赤銅色の月のように赤々と染まる屋敷の主、レミリア・スカーレット。未だ力を宿しながらも幻想の果てへと進む運命にあったレミリアが、鮮血に染まりながら月を見上げていた。

「まだこんな所にいたの？ もうすぐに発動するわ、取り残されたくないのなら中に戻りなさい」

生まれ故郷での最後の食事を楽しんだレミリア。

その背中に声をかけるのはパチュリー。

数冊の魔導書を自身の周囲に展開し、今まさに魔法を操り行使している様相で現れた。浮かぶ魔導書は開かれていて、そのページには紅魔館の周囲を取り囲む魔法陣と同じ模様の方陣が描かれている。座標指定や方向修正といった術式が浮かぶ魔導書を開き、血腥い友人に向かって声をかけていた。

「いいじゃない、少しくらい。食べ納めとなるのだし」

「わからないわよ、忘れられたこっちの人間もいるかもしれないわ」

欧州の一部地域を制覇し支配していた吸血鬼の主とその友人が、赤銅色の月に照らされて会話を進めていく。屋敷の主レミリアが見つめる先には、この屋敷を飛ばすための力を込められた、屋敷の周囲の土地ごと展開されている魔法陣。四大元素と赤い魔力が混ざり練りこまれた、外周が白つぼく屋敷のある中央へと向けて赤い筋が走る魔法陣が形成されていた。紅魔館の周囲に鬱蒼と茂る森、その手前辺りまでの一部の土地も巻き込んだ、大きな規模の魔方阵。

「こんな大きな魔法陣が必要だったの？ もう少しコンパクトに纏めればもっと早く出来たんじゃない？」

白くか細い両腕を前で組み景色を眺むレミリアが、もうすぐに発動される転移方陣についてパチュリーに問う。レミリアの考えでは住まうお屋敷だけ、ついでに屋敷を囲う門とその壁ぐらいを移転させればいいと考えていたようだが、パチュリーはそうせず周囲の土地を巻き込んで移動させるという手段を取っていた。

「それでも良かったのだけれど、レミイの為でもあるのよ。領地の主として動くのなら治める地が少しでもあつたほうがいいわ」

腕組みしている主レミリアの問に応えるパチュリー。

レミリアの為だと言っではいるが、『為でも』と言っている辺り、パチュリー自身にも何かしらの恩恵が在るのだろう。紅魔館の周囲には研究材料や実験材料などで使う野草も少しだが生えていて、それらを少しでも持ちだそうとしたのかもしれない。

お陰で魔法陣の形は円形ではなく、屋敷の正面にある門の先の方だけが伸びた、形を例えるなら涙型のような魔法陣が紅魔館を取り囲む

形となっていた。

「土地毎なんて余計な事するから認識阻害なんて必要になるのよ、屋敷だけならもつと早く済んだでしょうに。それで、後どれくらいで飛べるの?」

「もうすぐで月食も本番、そうなれば陣に組み込んだ魔力も働きを増し始めるわ、そうなると少し揺れるだろうし中へと戻りましょう」

「唯でさえ煩いのに、揺れたりしたら我が屋敷が更に騒がしくなりそうだわ」

「もう少しの辛抱よ、妹様の為だというのなら我慢なさい」

レミリアに今後の流れと苦言を伝えて先に屋敷内へと歩み消えていったパチュリー。

パチュリーの背を見送った後、唸るだけの死体やぶつかりあつてパーツがバラバラになる白骨死体など、死霊達で溢れかえっている紅魔館の中へと歩み始めるレミリア。

小悪魔の死霊術のお陰で手駒は増えたがやたら煩くなった紅魔館。喧しい我が家へと入り、言われた通りに我慢しようと自身も歩み始めたレミリアだったが、屋敷内へとあと一歩というところで振り向き、夜空を照らすお月様を見上げた。吸血鬼に恩恵を授け続けてくれた満月、生まれた地から望むのはこれが最後なのかもしれないと、赤く暗いお月様を少しだけ惜しむように見つめて屋敷の中へと消えていった。

〜屋敷転送中〜

がやがやと騒がしい人間達が過ぎす小さな里。

町の周囲を低めの壁や生け垣などで取り囲み、里の内と外の境界線がはっきりと見られるような造りとなっている町並み。忘れられた妖怪や魔の者達の楽園である幻想郷だというのに、囲いの中では人間達が大手を振って歩き、笑い、暮らしている。妖かしの為の楽園の中にある意味では歪だと思える平和な人の里、その里の中心部を流れ、東西に分けるように流れる川。その川に架かる木組みの橋の上をカツカツと歩く者がいた。

シワのないパンツから伸びる足先、その足元に履いた高いヒールを

鳴らし、スーツの上着を脱ぎ左肩に掛けて揃いのベストとシャツ姿の女。左手には花の種や葉物野菜の種袋が入った買い物カゴを提げて歩く、日焼けした肌のように見える彼女。

「親切な店主殿でしたが、商売気を感じられない方でした」

霧雨とデカデカ書かれた看板を中心に広がる人里の商店街。

前述した霧雨の本店以外は普通の民家の軒先を改造しただけの、専門店とはいえない質素な作りの店ばかりではある。それでも蕎麦屋や甘味処といった食事のできる店、魚屋に八百屋といった食材を扱う店もあり、この里の中だけでも生活するのに不便はないように思える。

「おまけの方が多い、儲けは気にしない方なんですかね」

籠の中の数個のおまけ、押し付けられた種袋を眺め、先ほどの商談を思い出すように顎に人差し指を宛てがい首を傾けている。彼女が本日訪れたのは霧雨の本店、あの店ならば大概のモノは揃うという事を聞いたアイギスが、何でもあるのなら種もあるだろうと訪れていた。

初めて訪れた彼女を迎えてくれたのは、眼鏡を掛けて目を細めて見えてきた店の男。

見た目若く、優男という風体ではあったが、落ち着いた物腰と声色、一言種が欲しいと述べただけでこの時期ならこれがいいと、花と野菜の種袋を数点出してくれた男だ。接客態度は雑であったが、何が何処にあるかという店内を知り尽くした動きと、正しい商品知識を持つ男を店主と判断したアイギス。

「幽香の名を出した途端に冷たい態度になりましたが、なにかあったんですかね？」 幽香の昔のお相手？ いや、そのようには……」

考える方に集中し歩くことを止めたアイギスが、先ほど出会った霧雨の店主と幽香の関係を悩んでいた。正確には店主ではなく商い修行というか手伝いをしている男なのだが、今の本題からすればどうでもいい事だ、割愛しよう。

幽香と男の関係性も男女といったものではなく、唯の厄介な客と商売気のない店員という間柄のようだが、幽香の傘をあの子の男が作っ

たという話も聞いていたようだ。

物を贈るくらいには仲がよく、名を出すと早く帰ってくれと商品を押し付けてでも追い返すあの男の事がよくわからないでいるアイギスであった。

そのまま橋の上で立ち止まり、買った種一袋とおまけでもらった数種の袋を軽くつまんで籠の中で持ち上げたりしていると、橋の向こう岸で立つ者がいると気が付く。

アイギスの視界に映ってはいるようだが、その者よりも今は店主と幽香の事が気になっていよう、動く素振りの見えない黒羊。少しの間互いに動かなかつたが、しびれを切らした対岸の者がアイギスに向かい歩み始め、すぐに立ち止まる黒羊と対面するような形となった。

歩んできた者は半分人間と呼べる者、腕を組み強い瞳で羊を睨む里住まいの半人半獣。

強い瞳で睨む先は特に身構えることもなく、買い物かごを片手の肘に掛けた、人里に初めて姿を表わした悪魔。アイギスが幻想郷に来て結構な月日が流れたが、初めて人里を訪れこうして顔を合わせるの、今日が初の二人。

初対面同士の会話、その第一声は半人半獣からのものであった。

「見慣れない妖怪がこの里に何用だ？」

胸を張って腕を組み氣勢を張る半人半獣、アイギスと同時期かそれよりも少し前くらいからこの里に住んでいる女性。ふわりとした衣服を身に纏い、上下が一体となった膝丈のワンピースのような服の裾には細かなレースが施されている。

胸元も大きく開いていて少し屈めば中が露わになりそうな程だが、対面するアイギスに向けてそういった色気は放たれてはおらず、放たれているのは警戒の色だけだ。

「ただのお買い物ですよ、里にいる間は何もいたしませんのでお構いなく。ハクタク殿」

豊かで女性らしい体つきをしながらも力強さを感じられる瞳、それを真っ直ぐに見返して淑やかに笑み返答するアイギス。わざわざ訪

れた理由を述べて、通せんぼするような姿勢でいるハクタクの横を歩き抜けようとしたが、籠を下げていない方の手を取られ引き止められていた。

「霧雨の店から出てきた所は見ている、買い物疑ってはいない……その、匂いの方だ」

先ほどの店主と同じく目を細めるハクタク。

匂いと言われて鼻を鳴らすアイギスだが、橋の下を流れる水の匂いと人間達から発せられる匂いくらいしかわからない。体臭がキツイと言われた事はないが、この国の者に比べれば異国人である自分は臭うのかもしれないと、変な所で少しだけ落ち込んでいた。

「血の匂い、貴女からは人間の血の匂いがする」

「そうですか？ 幻想郷に来てからは静かに過ごしているつもりですが……半分人間だと言う割に鼻が利くのですね」

血の匂いがすると言われてもさして気にしない素振り。

それどころか、慣れ親しんだ匂いで香つても当然だと言えるモノだから気が付かなかつたのかと、言葉に納得し軽く頷いてみせるアイギス。

頷く彼女に向けて更に瞳を強くするハクタク。

初対面だというのに敵対している者でも見るような、刺すような視線でアイギスを睨んでいる。

「真っ直ぐな方ですね、そう睨まないで下さいまし。私のやる気に火がついてもこの場では手出し出来ず、悶々としてしまいそうで困ります」

「……では、今はその気はないと？」

「ないというよりも出来ないのですよ、そういった契約を結んでおります故」

人間達が住まう地では荒事は控えてもらいたい、例え襲われても相手が人間であるなら引いてもらいたい。此度の依頼条件にそういった取り決めがあり、それを契約内容の一部として見ているアイギスは、この取り決めに破れない。仮に逃げられず、なすがままにされてもこの里の中では手を出すことはない……正確には手を出すことが出



来ない、悪魔の契約とはそれくらい拘束力の強い物だ。

「契約？」

「ある方と契約しまして、庭の番をするようにと仰せつかっておりま  
す、アイギスと申します」

クライアントと仕事内容の触りだけを濁して話し、勤め人のように  
潇洒な振る舞いで頭を垂れる商売人。なるべく嘘のないように述べ  
たつもりのアイギスだったが、全身を舐めるように睨まれた際に、籠  
の中の種袋は見られている。庭の番を言葉通りに捉えられたら勘違  
いされそうだが、意図した意味合いで伝わったようだ。

「庭の番、か：なるほど、八雲が雇った御庭番とは貴女か。私は上白沢  
慧音、初対面から無礼な物言いで済まなかった」

「いえ、人からすれば鼻につく匂いなのでしようね。身に沁みている  
ので流す事は出来ませんが、この里の中で私から襲う事はないとお約  
束致しますよ、上白沢様」

よくわからない仏舎利塔のような帽子を脱いで、深々と頭を下げる  
慧音。

下げられた頭を上げるように慧音の両肩に手を伸ばそうとするア  
イギスだったが、今し方血腥いと言われたばかりの手で触れているの  
か悩み、肩までもう少しという辺りで両手を止めた。中途半端に伸ば  
した腕を買い物カゴの取っ手が滑り、慧音の肩を強かに叩く。

それがキツカケとなり面を上げた慧音が、植物の種ががさりと入っ  
ている買い物カゴを見て苦笑し始めた。

「血の匂いが染み付くほどと言うが今は土の匂いが強い気がする、  
言った私がこう言うのもどうかと思うが、なんとなくそののが似合う  
気がするな。その角からすると羊の妖怪か？」

慧音が見上げる先は大きなアモン角。

角を見て言われるのは大概が山羊、もしくは鬼としか言われなかつ  
た黒羊が少しだけ関心していた。日本にはいない動物である羊を知  
る半人半獣。警戒を解いた慧音の態度や先ほどの謝罪する仕草から、  
聡明な者だという雰囲気は見られたが、いない動物から成った者を元  
の名残から断定出来る知識量はあるようだと感じていた。

地元であれば誰が見ても羊だとわかるが、羊のいないこの国で、初対面の者から正しく言われ少しだけ機嫌を良くしていた。勘違いから生まれたアイギスとしては、勘違いされるよりは本質を見られた方が嬉しいようだ……が、嬉しく思う心はすぐに別のモノへと向けられる。

「アイギス、少しいいかしら？　ハクタクも一緒なら都合がいいわ：ココに変わりはないかしら？」

アイギスと慧音が会話していた橋の欄干にパクリと開く異空間。

その中から声だけが知った声が聞こえてきて、人里に変わりはないかと問いかけてきた。

「私は初めて訪れましたので、上白沢様なら気が付かれる事があるのでは？」

「特には、貴様が自ら動くなど何かあったのか？」

パクリと口を開けたスキマに向かいそれぞれ里の事を述べる二人。

片方は里の普段を知らず変化を問われても答えられないが、里に住まうもう片方は特に変わりなしと返事をしていた。

「そう、何か変化があればすぐに教えて頂戴：アイギスも、もしかすると望ましい事になるかもしれないわ」

二人からの返答を聞いて直ぐに閉じたスキマ。

八雲紫が直接動き、情報収集している事に驚きを隠し切れない慧音だったが、隣のアイギスを見て隠す事をやめて素直に驚いていた。先ほどまでは瀟洒な態度に内君的な笑みを浮かべていたアイギスが、口角を釣り上げるように笑んでいるのが視界に収まったからだ。慧音が見ているというのに何も気にせず嗤うアイギス。

依頼人直々に言ってきた望ましい事とはなにか、言われずとも理解出来て、嗤わずにはいられなかったようだ。

「久々の本業、気合が入りますね。楽しいお仕事となると嬉しいのですが、お相手はどういった方でしょうか？　期待に胸踊ります」

自身でも酷い顔をしているとわかっているようだが、それでも収まらないアイギスの笑み。幻想郷の管理人がわざわざ動く事だというのに、そんな事はどうでもいいと本当に楽しそうに嗤う黒羊を見て、

この手の輩とは関わらないのが無難…そう認識し、今夜満月が見られる予定の夕空を見上げる、後の人里の守護者であった。

## 第十四話 守護する者、墮とす者

日が落ちて妖かしの時間となった幻想郷。

夕日の明るさが沈み闇が主役となった幻想郷の中央に広がる瘴気漂う森から、更に東の方にある人の里。普段の人里であればこの時間は静かなもので、家族の語らいと夜警の者が歩く音くらいしか聞こえないはず……。だが、今晩はそのような静かな里の姿は見られない。

今宵の人里は非常に騒がしくなっていた。

騒ぎの原因は里の出入口を古い刀や農機具を手にした男と、姿を変えた半人半獣。

皆が皆必死な形相で、普段の静かな里人だとは思えない姿となっていた。

「皆は纏まり北側以外の三方を、私は一人で北側にあたる。どんな相手かわからないが無理はせず、怪我を負ったら迷わず逃げろ」

弱々しい武装をした里の男衆に指令を飛ばす、頭から立派な角を二本生やし、尾先が緑がかかるこれまた立派な毛並みの尻尾を生やした半人半獣の麗人。武装した彼らも、指示を出している彼女、上白沢慧音も不慣れた指令と動きを見せている。

「慧音さん、今日は隠してもらえないのかい？ 武器を取っても私らじゃ…」

中年の男二人が揃って慧音に向かい乞うように言葉を吐く。

普段は稗田の大邸に住み、田畑を耕すだけの小作人だが今夜はその鍬を手に持ち武装としている……。が、とてもじゃないが刃として振るえるような雰囲気には見えない弱々しい里の男達。隠してもらえないのか、という問掛けに試しはしたが効果がないと、互いに会話の意味を理解し話していた。

半人半獣である慧音はとある能力を有している。

人の姿で過ごしている間は『歴史を食べる（隠す）程度の能力』を有していて、今夜のような荒事となる場合には、里が巻き込まれぬよう人里の歴史を食べ、なかったことにして隠していた。

「すまない、今の姿ではなかった事には出来ないんだ。最悪は私一人

となっても構わない、皆生きるとして頑張ってくれ！」

変身前に気がついていればと、内心で後悔する慧音。

謝りながら里の者達を叱咤激励し、不吉な音が響く北側へと走り始めた。

今のような獣の姿。

月に一度満月の夜にだけ変身する慧音の能力は、その姿と共に変じてしまう。

ハクタクとして姿を変えた今の能力は『歴史を創る程度の能力』となり、歴史を食べなかつたことにする事も出来ない。せめて里が滅ぶ事がないようにと、里に敵対者が侵入する事はない、という歴史を自身の住まいで記し、創る事しか出来なかつた。

人里の中を走りながら周囲を眺め、異常がないか確認しつつ走るハクタク。

住まいの明かりが消され、なるべく音も立てないようにと触れ回つたからか、里内は静まり返っているが、その静かさが今の所での安全を語ってくれていた。ほんの少しだけ安心する慧音だったが、里の北門へと到達し確認するように少し飛び上がると、その安心は消し飛んだ。

里に向かってくるナニカがいるのが慧音の瞳に映つたのだ。守るといふ強い決意が宿る瞳に写つたのは、慧音の瞳を揺るがせるほどの動く死体の軍団であつた。

「あれは……どこから？ いや、それよりこの匂いは……」

視界に映る死霊の軍団。列の先頭を歩く、綺麗に白骨化した者達はまだいい。酷いのは足を動かす度に腐りかけた肉を落としていくような者達だ。

知識を司る神獣としての力を身に宿す慧音。他国にはキョンシーやグール、ゾンビといった死にながら肉体を持つ者達がいる事も知っているが、今視界に入っている者達はそういった種族的な者達ではない。一度終わり地に還るはずだった、普通の人間が誰かの手によって強引に呼び起こされて動かされているように見えてしまった。

唯の見知らぬ死体の列、人里を脅かす敵対者としてか捉えずに、相手

の事など考えず薙ぎ払えばよかつたものを、ほんの少しだけ死霊達に哀れみを覚えてしまう慧音。人の一生という、小さな歴史を閉じたはずの者達を、歴史の編纂者として見てしまい、酷く哀しい顔をしながら死体の軍団に突っ込んでいった。

肩を揺らし、骨を鳴らし、歩く死者の列の先頭が土煙とともにほじけ飛ぶ。

舞い上がった土煙と共に粉々に粉碎されていく、西洋の刀を携えたスケルトン。

腐敗した百鬼夜行の一番前、真正面から突っ込んで蠢く骨達を吹き飛ばしたワーハクタク。

死者の軍団の中に、彼女を討てるような者はおらず、慧音が渾身の一撃を振るう度に列が乱れはじけ飛んでいく。

「恨むなら術者を恨め」

返答などない、それでも再度の死を迎える者達へ追悼の意を込めて言葉を吐く慧音。

一言吐いて先頭の者達から豪快に吹き飛ばしていく、可愛らしい赤リボンの結ばれた角で地面ごと突き上げて粉碎し、固く握った拳で可哀な死者達を吊っていく。

揺れ動きほんの少しだけ赤く灯る瞳と目が合う度に、歯を噛み締め豪快に散らしていく慧音だったが、ある程度暴れた後に守り続ける後方が騒がしくなってきた事に気が付いた。

「里が!? 妖怪相手であればまだ良かったが……相手がコレでは彼らには無理か」

正体のわからない妖怪を想定し、怪我をしたら下がってくれと伝えていたが、痛みも感じない、心もない死者が相手になるとは思っていなかった。心ある妖怪相手であればすぐに殺されるか、誰かが犠牲になっっている間に逃げられる者が出る。冷たい考えだが里の全てが滅ぶよりは良い。

今の姿、妖怪らしい冷えた思考でそう考えたがそれが逆に働いてしまったようだ……意思なく動かされる者が蹂躪することを樂しむ事などはしない。唯列を成す死体を増やそうと里の者を殺めるだけ、体力

の尽きない意思なき者相手に、里に籠もり専守防衛するという手は悪手であった。

「一度引いて体勢を整えるべきか？」

言った通りに一度動きを止める慧音だったが、次は別の理由で動きが止まった。

列の先頭をあらかた吹き飛ばした慧音だが、第二陣が目には止まると引くに引けなくなってしまう。先陣を務めてきた、肉体はとうの昔に滅んだスケルトン達は粉碎し土へと還らせたが、後に続く者達はドロドロとした腐肉を持ったままに見えた。

見慣れない衣服の切れ端を纏ったままに、腐敗臭と死臭を漂わせ、歩く度に地に腐肉を遺して向かってくる。

「コレと皆を遭わせるわけには！」

人間でも鼻につくほどの腐敗臭。

それを漂わせる軍団の列が慧音に迫る。

眉間に皺を寄せきって匂いに耐え地を掘り返して死者を埋葬していく慧音だが、次第に掘り返す度に埋めた相手が掘り起こされるといくらいに、埋めるスペースがなくなってきた。

致し方なしと古い様相の剣と同じく古い見た目の円盾を顕現させて、両手で携え切り込んでいった。一太刀振るゝ薙ぐ度に手に感じる崩れる肉の感触、同時に飛び散る腐りかけた肉を避けるように盾を構え避ける。先ほどの地を掘るような面での攻撃ではなく、まとめられなくても数体程度という効率の悪くなってしまった。

それでも力の差は変わらない。慧音が死者に飲まれる事などは実力差から考えてありえないが、率の悪い慧音が払う勢いよりも列の進む勢いの方が増し始めてきていた。

少女奮闘中

北側の出入口を一人守り続ける慧音、なぎ払う剣や相手を叩き潰す盾の動きに迷いはないが、その瞳には若干の疲労が見えていた。

里が騒がしくなった事を気にして、少しずつ後退しながら腐敗者達を切り飛ばしていたが、終わりの見えない終わった者達の列を払う度に、その臭う血肉を僅かずつだが浴びていた。匂いには麻痺し既に気

にならないようになっていたが、着ている衣服や膝裏、よほくほ膕窪の辺りにまで届く長さの、緑のメッシュが入った長髪に腐肉が飛び着く度に、嫌な顔をして死体達から目を背ける。

半分は獣で、普通の人間よりは荒事や死体に慣れている慧音でも、今のような状況には慣れていなかった。それでも腐り落ちる列の先頭を食い止め払い続けるが、次第に少しおかしいと気がつき始めた。一度断ち切ったはずの者が切られた部分以外、腕や足、下半身を何処かに捨て置きながらもズルズルと列に戻り慧音に向かい這ってくる姿が見えてしまった。

「完全に消すか、焼き払うかでもしない限りダメか…妹紅でもいれば」慧音が互いに慕う友人の名をポツリと呟く。

妹紅と呼んだ友人は炎の化身と言っても過言ではない者、彼女がいればこの者達も…と、他の手を考えられるくらいに死者達の動きが鈍くなり始めた。

列を成していた者達のほとんどが慧音に切り払われて、這ったり転げて移動するようになり、ほんの少し行進速度が緩くなったようだ。少しの間なら離れても、そう考え踵を返し全力で里へと戻る慧音だったが、戻った先の、別の出入り口では地獄絵図が広がっていた。

「そんな……」

慧音の視界の先には里人が里人を襲い始めるといふ異様な光景が映る。

数人ではあるが、死者に喰われ食られた後が見える里人が、他の者達に手を伸ばし追い立てる姿がそこにはあった。今まさに襲われている男、慧音に乞うような物言いをしてきた稗田の使用者が、今日の昼間には一緒に働いていた男に襲われている。

歩く死人と成り果てた元里人を盾で殴りつけ、魔物となった男を飛ばし使用人を逃がすがトドメを刺すことは出来なかった。

「何故こんな事に……」

盾で殴られ上半身と下半身が分かれた男が、上半身だけで慧音に迫る。

ズリズリと音を立て、まだ赤い血を垂れ流し、ナメクジのように



這った軌跡を地面に描きながら半獣の足元へとたどり着くが、それでも慧音は動けない。つい先程、里の中で慧音に弱々しい顔を見せていた男が今無表情で、見えていない瞳で慧音の顔を見つめながらネジ曲がった両手を伸ばした——その瞬間に男の姿が綺麗に消え失せた。

目の前で何が起きたのかわからない叡智の神獣。先ほどまで男がいた足元、綺麗に半円を描いて削り取られたような地面を見て、そのまま地面の続く先を見ると誰かの姿が視界に収まった。

「あの洋装はアイギス殿：何故里に、いや、理由はいい。あの数を一人で相手取るのはいくら妖怪といえども：」

そう考え、今見ている東側へと動き出そうとしたが、足を止める慧音。

慧音自身が体感した不死者を蹴散らすための面倒臭さ、蹴散らす際の心境。

その辺りを鑑みてアイギスに手を貸そうと半歩ほど足を出したが、慧音の心配はいらぬものとなってしまった。

慧音の視線の先には、不死者の群れに向かい悠然と歩くアイギスが映る。

獲物も無く無手で歩むアイギスが、おもむろに両手を死者の列へと掲げ指先を鳴らし始めた。

此処から先は唯の処理と呼べるものだった。

アイギスが悠然と歩き死者へ向けて指を鳴らす、それだけで列が穿たれて消えていく。

ゆつくりとしたリズムで足を動かして、歩く度にパチンと響く指の音。

時には両手を揃えて、時には両手を左右に開いて。

不死者がいる位置へと指先を向けて対象と指先が合うと鳴らされて。

ゆるい足運びだが、慧音にはアイギスが踊っているように見えて目を離せないでいた：

アイギスの指が鳴らされる度に夜の人里に少しずつ静寂が戻っていく。

東側の不死者達の殿が慧音の視界に収まると同時に、最後の指鳴りが響いて北側以外の三方全てが静まり返った。静寂が訪れたのを確認すると何事もなかったかのように歩き、慧音のいる里の中央へと向かってくる無手の踊り手。

見られていた事に気がつくのと、右手を胸に当てて綺麗に頭を垂れた。

「あんな風にパチンパチンって聞こえたら、死体共が消えたんですわ」足を止めアイギスを見つめていた慧音に数人の男達が歩み寄り説明していた。

アイギスから里の男衆へと視線を移し説明を受ける慧音。

声をかけてきた男達の方を見るとその背後には、南と西へ走っていった者達が集まり周囲を警戒するような姿勢を見せていた。

入り口を守らずに里の中央へ集まる皆。よく見れば住まいに隠れていると伝えた者、女子供の姿もその一団の輪に集まっている。

何故出てきたのか？

守り手のいない入り口から攻められないのは何故か？

考えても答えの出ない慧音が、里の者達へと歩み寄り、安否の確認をしながら話を聞いていた。

「そうか、他の二箇所もアイギス殿が…私のいる北側以外全てを守ってくれたというのか」

骨の軍勢は鍬や鋤で叩けばどうにかなったと述べる男達。

だがそれに続くゾンビなど、肉を残しながら動く者達相手は吐き気が勝り抗うことなど考えられず、吐きながら少しずつ下がったらしい。怯える彼らが里の出入口まで下がり、引き下がれなくなった頃、里人の集団に不死者の列がなだれ込もうとした頃合いに、突如空間が裂けそこからアイギスが現れた。里人とゾンビの列、死の川と呼べる勢いがある者達の間而降り立ち、里人を襲おうとしていた者達を指を鳴らし死者を穿ち、下がるようにと穏やかに伝え逃してくれたのだそう。

「指を鳴らすだけで死体共が消えるんです。よくわかんねえけどすげえや、あの姉ちゃん」

鋤を肩に担ぐ若い男が空いている手で指を鳴らす。

この場にそぐわない明るい音が周囲に響く。

明るい表情で指を鳴らすその男が何故か可笑しくて、慧音も小さく笑みを見せる。

濁った色合いの腐った血肉で服も髪も汚れ綺麗とは形容しがたい見た目となっているが、その笑い方はいつも里の者へと見せている穏やかな笑顔だった。

「これは上白沢様、こちらにいらっしやるという事は北側は既に終わりを迎えたという事でしようか？ 三箇所とも本命がいませんでしたので北が本命かと考えましたが、そうでもないようですね」

村人に笑顔を見せる慧音の背にアイギスの声がかけられる。

歓談するような状況なら既に終わったのだろう、そのように感じたアイギスが慧音に話しかけた事で、未だ落ち着いている場合ではないと思い出したようだ。

笑みを飛ばし焦るような、真剣さを取り戻した表情で北側の入り口へと向かう。その横にはまだ終わっていないなかった事に感謝し、少しだけ楽しそうなアイギスの姿が見られた。

「いない……あれほどいた不死者が綺麗に消えている……ここもアイギス殿が？」

「いえ、こちら側は上白沢様が向かったと聞きましたので最後でいいと判断しました。私は何もしておりませんが？」

慧音とアイギス、二人で顔を見合わせて互いに問掛け合っている。

けれどどちらも手を下していない、慧音は途中で離れ、アイギスは他の三方を回っていたため、ここ北側には回っていない。

ならば誰がアレらを片付けたのか？

二人で少し話していると、誰かの気配を察知するハクタクとバフォメット。

互いの角に振動を感じて同時に飛び、遠くを眺むと夜空に浮かぶ小さなシルエットと、血や肉、泥や土をベタベタと落とす大きなシルエットが夜の道に浮かんでいた。

一歩足を動かす度に地を揺らし、地を汚す肉をまき散らす大きな死

体の集合体。

「がしやどくろだと!? ならあの横にいる女は滝夜叉姫だとも言うのか?」

「ガシヤドクロ? タキヤシヤヒメ? どちらも存じ上げませんが、あの飛んでいる女、あれは良く存じておりますよ」

日本の妖怪にあてがえば確かにがしやどくろと呼べる者が二人の視線の先にいる。

慧音はそれに習い、がしやどくろの隣の女性を滝夜叉姫と呼んだが、アイギスには女の正体はわかっていた：何故幻想郷にいるのかはわからないが、何度も顔を合わせている同族だ、間違えようがないだろう。

「思わぬ邪魔が入ったようだけどこれで：ってアイギス!? なんてあなたがここにいるのよ!」

女の方もアイギスに気が付く。

腰の辺りと頭から生やした翼を羽ばたかせて、がしやどくろよりも先んじて動き、アイギスと慧音の顔が見える辺りまで近寄ると何故お前がここにいるのかと騒ぎ始めた。

「まさか幻想郷で貴女と見えるとは、名無しでは留まらずついには忘れられたのですか?」

騒がしい女、小悪魔に名を呼ばれたアイギスが返答する。何百年ぶりに顔を合わせるのか覚えていないが、互いに忘れない程度には顔も中身も知っているようだ。

喚く小悪魔に対して笑んだまま嫌味を述べるもう一人の悪魔。

「うっさい! 今は名前だってあるんだから!」

「ほう、どのような? 私もそう呼んで差し上げます、光栄に思いなさいな」

絶対に教えない!

更に騒いで体を翻す、そのままランダムに飛んで操るがしやどくろの影へと隠れた。

真っ直ぐに飛び戻らないのはアイギスの能力を知っているから故か：：冷静に考えればがしやどくろも意味がないが、そっちには気が

付かなかったのだろうか？

「知り合いか、話だけで引いては……」

「くれないでしょうね。アレはいたずら好きで後先を考えない、隙あらば心を墮とそうとする淫魔です、甘い顔はしないほうが良いですよ」

誰が淫魔か、とがしやどくろの後ろから騒がしい声がする。

だが、大きな骨の軋む音にかき消されて良く聞こえず、会話の邪魔だともいうようにアイギスが指を鳴らした。音が響くとがしやどくろの髑髏から下が地面ごと穿たれる。

一瞬で消えたように見えるがしやどくろと、音を鳴らしたアイギスの指を交互に見比べる慧音だったが、成された事に対して説明される事はない。

「丁度残ったようですし、少し伺うとしましょうか」

死体の集合体が穿たれた跡地。

丸く窪んだ大地にドサリと音を立てて落ちた何かに向けて歩むアイギス。

ふわりと浮いてそのまま一足飛びで落ちた何かを元へと降りると、地に降りる勢いを乗せてそのままヒールが刺さるように踵で踏みつける。

げふう！ と下品な言葉が聞こえるが、痛みからというよりも踏み抜かれて単純に重いという事に対する文句といった雰囲気乗る声色。

「ちよつと！ 何踏んでんのよ！ これが久々にあつた同族にする態度なの？」

右の脇の下から左の腰骨辺りまで、綺麗に弧を描いて穿たれて、残った上半身だけで文句を言ってくる死霊術師。アイギスに踏み抜かれて残っているのは残っている右の肩辺り、人であれば心臓を穿たれ右肩が踏み抜かれている状態だが、文句を言うほどに元気だ。

力が制限されてしまったとはいえ、小悪魔も種族悪魔ではある。人間とは多少作りが違うのか、それとも穿たれる事に慣れていて傷として認識しないようになったのか、そのあたりはよくわからない。

「同族？ 私を知る名無しはもつと艶めかしい体つきでした、格好ももつと派手で今のようになちんちくりん……もとい慎ましやかな体ではなかったはずです」

全くと言っているほど凹凸のない胸や腰を眺め、鼻で笑うアイギス。

以前の姿であればアイギスに劣らないどころか勝る姿をしていた。

透き通る絹のような肌に大きな胸、ハリのある尻や綺麗にくびれた腰などまさしく淫魔といった体軀をしていた。

それが今や……

「余計なお世話！ 依代が小娘だったのが悪いのよ！ 格好だってあなたに似せて形取られただけだったの！ いいからさっさと殺りなさいよ！ こんな体もあの屋敷にも未練なんてないんだから！」

残った右肩を踏み抜かれ腕も動かせず、口と頭くらいしかまともに機能していない小悪魔。

さっさと殺せと言うがそれはこの場の形だけの話だ。

この悪魔は宿る魔導書が全て消えない限り死にはしない、仮に紅魔館にある魔導書が燃え尽きても死なず、何処か別の場所、例えば別の世界、外の世界の薄い書物でも残っていれば滅する事などはない。アイギスが崇拜され続ける限り終わらないのと同じ様に、小悪魔も同じくそういうモノだった。

「お望みとあらば、次は昔のような体で顕現出来るといいですね…虚無の淫魔さん」

虚無って、何処見て言ってるのよ！

それが小悪魔の残した遺言となった。

小悪魔の胸を眺めながら踏み抜いている右肩を中心に穿ち、その体を言った通り虚無へと還したアイギス。久々に顔を合わせた同族の言葉を噛み締め、少し考えていると、訝しい顔で二人のやりとりを見ている慧音から問掛けられた。

「随分あっさりよ、同族で顔見知りではなかったのか？」

半人半獣の慧音に同族らしい者はいないが、里の人は慧音の事を頼り慕ってくれている。

そんな人間達を自分と同族だと捉えている慧音、だからこそ一度死んで操られている死体達にも少しの哀れみを覚えた。自分であれば確実に躊躇する同族殺しをあつさりとなすアイギスが理解できなかった。

「あれは殺しても死にません、私達を葬るのなら私達を知る全てを消さねば意味が無いのです」

「それはどういふ…同族というのは同じ種族の妖怪という意味ではないのか？」

「この国風に言うのならばそれで宜しいですが、正確には違いますね。それより里に戻らなくとも宜しいのですか？」

騒ぎの原因は一旦葬った。

だが召喚者がまた呼び出せば何度殺しても何度でも現れるだろう、得意だという誘惑の手法と同じく生き方もねちっこいのがあの小悪魔だ。何度なく殺し合いその度にどちらか、ほとんど小悪魔が一旦落ちるといふ形になっているが、それを繰り返してきた悪魔二人。

アイギスに堕とされると、呼び出されるまで書の中で過ごすという退屈地獄に落とされる。一方小悪魔に堕とされると快樂の海に沈められ、満足するまで他者を求め彷徨うハメになる…過去何度か小悪魔に破れ堕とされた事があるアイギスも類に漏れず、柄にもないような姿になった事があるがそれは割愛する。

一言だけ言うならば、偶にならない、という事だそうだ…話が始めたので本題に戻る。

「そうだな、今日は助かった。皆も貴方に感謝していた、アイギス殿も良ければ一緒に…」

「折角のお誘いですがお断りいたします、それに感謝は私をココに届けた者になさって下さいまし。私は命を受けたに過ぎません、それでは縁あればまた」

一緒にと手を差し出す慧音。

一時の共同戦線を張った半人半獣ともう少し話してもいいと感じていたが、そうはせずに胸に手を当てるいつもの仕草で頭を垂れた。

そのまま面を上げる事なく、パクリと開かれたスキマに飲まれてい

くアイギス。

この場での仕事を終えて届けた者が回収に来ただけなのだが、八雲の操るスキマに何の畏怖も抱かずに飲まれていくアイギスを慧音は捉えきれずにいた。何も言わずに里の危機を救ってくれて信用は出来る、が、昼間に見た笑みを思い出すと全てを信じるのは危険だと思える。

契約という言葉に課せられた縛りを知らない慧音は、複雑な気持ちで里へと急ぎ戻っていった。



## 第十五話 断つ者、守る者

空に浮かぶは満月。

ある者は力を得られると讃え、ある者は姿を変えなければならぬと嘆く月夜。

その後者に当たる者。

月光を浴びて姿を変えざるを得ない半人半獣が、己が疎んじていた力を振るい里を守る為、剣を振るい腐肉を切り飛ばしていた頃合い。別の地では違う物が染み入り濡れ姿となる者がいた。

人里の北部に位置するちいさな湖。

昼間は霧が立ち込めていて全域が見えない水源地。

その湖の外周をグルグルと飛ぶ誰か。

水平よりもやや上体が起きた、傾いた姿勢で地表近くを飛ぶ妖かし。

偶に見える湖面には、ヒラヒラとした道衣兼前垂れが揺れ靡く姿が映る。

「やはりおかしい」

速度は維持したまま、偶に首だけで振り返り、訝しい顔をして縦に伸びる瞳孔を開く。

カツと見開かれた瞳で進んできた道程を見直している者。

昼間は霧深い湖だが、夜になれば霧が晴れて、さほど広くない湖畔全てが見渡せるようになるのだが、今宵は夜を迎えても霧が晴れず、寧ろ昼間よりも霧深いように感じられる。

何かを隠すかのように立ち込める霧。

外の世界では唯の自然現象と言われて興味も持たれないような現象だが、長く幻想郷を管理するこの者はそうは思わなかった。

「進んだ、というよりも戻されている？ いや、回っているのか？」

霧の中を飛び空を駆ける誰かの愚痴が聞こえる。

生やす九尾を横に靡かせて、ただただ真つ直ぐに飛んでいるとわかる姿の者。

八雲紫の式であり、妖獣という種族の最頂点にいる者、八雲藍が眩

いた愚痴だ。

里に送られた臨時の従者とは違い八雲紫の正式な従者である藍、雇われの羊とは別の命を下されて、それを実行している最中に一人愚痴を吐いている。

「竹林でもないというに、私が惑わされるなど」

飛行姿勢のように、かつては国を傾けて弄んでいた藍。

そんな欺き惑わす側の者が、今夜は何者かに手玉に取られている。愚痴を吐きながら緩く広がった袖口に両腕を隠す仕草、よく見られる姿勢そのままの状態、尾をはためかせて真っ直ぐに飛んでいるが、命ぜられた目的地に辿りつけないでいた。

式として与えられた力以前に、自身が金毛九尾の狐という大妖である藍が惑わされるなど、本来であればあり得ないことである。

けれど、そんな藍が愚痴を吐いてしまうくらいに惑わされ、目的地とされた水源地、霧の湖へと辿りつけないでいた。

正確に言えば湖自体には到着しているのだが、誰かに何かを操られ、弄ばれているかのように湖畔をグルグルと回っている状態であった。

「これでは埒が明かない、私とした事が斥候にもならんとは…里へ向かったアイギス殿も同じく迷われているのだろうか？」

自身のプライドを傷つけられた事よりも、主の命を守れずにいる自分を恥じる藍。

本来動くべきである、幻想郷『はこにわ』の管理人。

藍の主、八雲紫は昼間の内はまだ動いていた、が、人里で慧音とアイギスに忠告を少ししてから異変を察知し、それに向かわざるを得なかった。

紫の敷いた結界『幻と実体の境界』に何かに触れたと感じてから直ぐにその結界が乱れたと感じ取り、その修繕や維持管理に動かざるを得なくなっていたのだ。

幻と実体の境界について少し説明するならば、紫が考えた計画の一つ「妖怪拡張計画」の中のプランの一つとして考案され実際に張られた結界である。

外を实体、幻想郷を幻と定める事によって、力を衰えさせた、先々忘れられる予定の妖怪達を自動的に幻想郷へと呼び寄せる効果がある結界であり、その効果は日本だけには留まらず、異国に住む怪異まで引き寄せる力を持っていた。

レミリア達は自分達の力で転移出来たと考えているが、実際はこの結界の効果に寄るところが多い。

「紫様、申し訳ありません。私では行くも戻るも出来ず…腑甲斐ない」  
空中で急制動をかけて、一瞬だけ全身を己の尾で隠す藍。

他者から見られなくなったその一瞬だけ金色の瞳に怒りを灯し輝かせた、が制動の勢いが死に尾が下がると普段通りの冷静な瞳へと戻していく。

一瞬だけ見せた怒りの表情。

腑甲斐ない己を叱責するものか、紫の手間を増やした他者へと向けられたものなのか、すぐには判断できないが、藍の心情を鑑みれば後者の可能性が高い。

彼女は主を慕い敬い心から仕えている、敬愛してやまない主の庭を荒らす者、そんな失礼極まりない者達に苦湯を飲まされるなど、彼女の忠義心では耐えられないものだ。

「紫様、一度引きます」

言葉とともに開かれるスキマ。

式として常に紫と繋がっている藍が言葉を発すれば、例えどのような状況でも紫には伝わりその力が発現させられる。

それ故迷いの霧が立ち込める中でも藍の姿を見失うことなく、九尾の正面に移動のためのスキマは開かれた。

「一面真っ白、無明の丘にでも吐き出されたのかしら？」

「鈴蘭の白にしては湿っぽいですな、夜霧に濡れる九尾のランは美しく見えますが」

藍の正面に開かれたスキマ。

それは藍を回収するための物ではなく移動のためのスキマであった。

開かれた、瞳の蠢く空間から出てきたのは、霧深く一面が真っ白に

見える景色を、同じく一面を白に染める鈴蘭畑『無明の丘』に例えた花の妖怪。

それに続いて出てきたのは、夜霧の中を飛び続けしつとりとしている金毛九尾を、無明の丘という言葉に肖り冗談を言ってみせた白玉楼の半人半霊。

「風見幽香に妖忌殿？ 二人が何故ここに？」

スキマから出てきた二人、特に風見幽香に向けて言葉を発する藍。

驚いている素振りは見せないが、風見幽香が八雲紫の下につくなど考えられることはない。

だが主の操るスキマの中から現れ出た事は自身の瞳で確認している。

腑に落ちないと幽香に伝えるように、少しだけ目に疑心を宿らせる藍。

「あら、紫のペットじゃない？ なんだかしつとり濡れて妖艶ね、昔の貴女みたいだわ：何故と言われても私にもわからないのよ、紫に呼ばれてマヨヒガに向かっていたはずなのだけれど」

顎先に人差し指をあてて、小さく首を傾げる幽香。

濡れて、と言われるほど濡れてはいない、少し湿った衣服が体に張り付いている藍に返答をして、自身が吐き出された先が何処なのか、少し傾けた頭を緩く振り答えを得ようとしている。

けれど、幽香の見つめる先は何処を見ても一面真っ白な景色。

「まずはこの霧をどうにかしましょう」

前後左右を見回す幽香が日傘を持つ右手を伸ばし一度クルリと縦に回す。

そのまま日傘を水平に伸ばし、力を込め始めたが、それは嗄れ声の老人に止められた。

幽香と藍のやりとりを聞き、髭を撫でながら小さく笑んでいた妖忌が幽香の日傘を下げるように左手で促し、そのまま腰に手を伸ばす。

表情は穏やかなままに身に纏う雰囲気だけを変えていく剣客。

腰に携えた二刀のうちの一振り、飾り気のない、脇差しくらいの長さに見える刀に手を掛ける。

音も立てずにスラリと抜かれた刃を左手だけで構えると、小さく息を吸い一瞬呼吸を止めて振り抜いた。

立つはずの風切り音も切り裂いて奔る剣閃。

魂魄の名を冠する者にしか扱えない家宝、迷いを断つという「白楼剣」が空を切り音を切り、藍の迷いの原因であった立ち込める霧を切り裂いた。

「年寄りの冷や水なのかと思ったけど、お上手ね」

妖忌の手腕を知る藍よりも早く妖忌を褒めたのは幽香。

見た目だけは日傘を携えた可憐な、暖かな日当たりが似合うお嬢さんといった幽香がニコリと笑って言葉を述べた。

飾り言葉は兎も角として、素直に他者を褒めたりはしない幽香が褒めた事で普段ではしないような事、わざとらしく白楼剣をくるりと回してから腰に戻す妖忌。

態度や仕草は厳格だが剣客である前に彼も男だ、見目麗しい女性二人に見つめられその内の花の香り漂う者から褒められれば嬉しく思うのかもしれない。

「太陽の花と彼岸花、両手に花とはこの事か。長く生きた甲斐があり申した」

ほんの少しだけ気を良くした程度、その程度だったはずの妖忌だが、珍しく冗談などを言うのは知識としか知らなかった花の大妖に褒められたからだろうか？

それとも、これから向かう先で待つ者達が手練だと感づいたからなのだろうか？

霧を晴らして感じられる強大な魔力と血の匂い。

認識障害の魔法が施されていた為、いつも通りにいた屋敷の者達から発せられる力を、この場にいる三人共が感じていた。

「紫に呼ばれた理由はこれだったのね。芽吹いたばかりの力を見せつけてくれて、期待してもいいのかしらね？」

魔力の放たれてくる方向、霧の湖の北側を望み呟く幽香。

可憐な瞳が見つめる先には赤々とした洋館が建っている。

今よりも少し前から建っていたプリズムリバー邸の更に奥に見え

る、血のような色合いの見慣れぬ屋敷。

どのような手合が幻想郷に訪れたのか、それを知る者はこの場にはいなかった。

「行けばわかる、だがトドメは差してくれるなよ？　紫様からは来訪理由を伺うようにと命を受けている」

「それが済めばいいのね？　なら早く行きましょう。ゆっくりしていたら余計アイギスなのが来そうだよ」

幽香に対して侵入者を殺すなど窘める藍。

同時に妖忌にも言ったようだが、妖忌の方は幽々子から既に聞いていたようで主の命故藍殿の仰せのままに、と理解ある言葉を述べていた。

けれど、幽香の方はそうではないようだ。

表情は可憐な笑みのままだが、纏う雰囲気は変わっていて、芳しい花の香りに混ざり荒々しくも嬉々としたモノ、幽香が争いの場へと向けるモノとなっている。

余計な者が来る前に、自身の暇を潰す相手が取られる前に早く行こうと、一人屋敷へと向けて優雅に飛び進む風見幽香。

花の匂いと殺気を周囲に振り撒いて移動する背中を、藍と妖忌がやれやれといった表情で追いかけていた。

く少女達移動中く

すつかりと霧が晴れた湖。

その湖畔に突如として現れた赤いお屋敷。

屋敷の外壁も内部もほとんど全てが紅い建物の正面に降り立つ三人。

見慣れない赤い色合いの屋敷を眺めながら警戒の色合いを強めて進む藍、右手を顎鬚に左手を腰に当てて背を伸ばし歩む妖忌、日傘をクルクルと回してお散歩気分な幽香。

それぞれがそれぞれらしく屋敷の門から庭へと歩み入ると、屋敷の正面扉前に誰かがいるのが目に留まる。

屋敷の扉に背を預けた女が一人、静けさの中に力強さを湛えた、武を誇る女性が赤い髪を夜風に揺らし待っている姿が見えた。

「この屋敷の者が、引けば追わん、抗うのであれば容赦はしない」  
扉に体を預け、少し俯く女に向けて言葉を吐く傾国の美女。

突如として現れた屋敷の扉を守るようにいる女に向かい、淡々と、  
なんの感情も感じられない声色で言葉を吐いた。

が、女からの返答はなく、代わりに扉から背を離して体を起こし、そ  
のまま斜に構えると、前方に軽く出した右手だけを小さく握り、左手  
は平手で構える武人。

無言で姿勢を変えた女を見て眉間を狭める藍だったが、夏場の葉の  
ような緑の華人服を纏う女と藍の間に、萌黄色の着物が割入った。

「語る口は非ず、といったご様子。見れば格闘家のようなですな、妖怪が  
拳法など修めきれるものですか？」

撫で付け髭を文字通り撫で付るように、親指と人差し指を使って顎  
を撫でる妖忌。

構えて見せる屋敷の者と、睨みを利かせる式の者の間に立ち、引き  
もせず媚びもしない姿勢でいる屋敷の守衛と呼べる者へと話し始め  
た。

藍に対しては無言を貫いた守衛だったが、同じく武芸者である妖忌  
には何か思うところがあるのだあろう、構えたままに返答を述べた。

「未だ修行中の身、ですが少しは身についたと自負しております」

「色のある返答有り難い、では」

斜に構え右拳を敵対者へと向ける屋敷の警護役、紅美鈴と対峙する  
妖忌が言葉と共に構えてみせる。

浅く屈んで両足を広げ、左手を帯に挿された刀の鞘へ、右手はその  
柄へと伸ばし軽く添える仕草をするが、その仕草は直ぐに崩された。

妖忌の構えから剣閃が光る前に美鈴が動いたのだ。

剣術を少し知る者が見ればそれが居合だとわかる構え、間合いに入  
れば振るわれるとわかる状況の中、敢えて間合いに踏み入った美鈴が  
2歩進んだ後瞬時に飛び、突き出した右腕から鋭い突きを放つ。

妖忌から見れば溜めもなく、ただ突き出されたままの拳に見えるが  
その拳には確実な殺傷力が込められていた。

美鈴の故郷である地で人が編み出した歩法の一つ『箭疾歩』と呼ば

れる歩法を応用し、上半身は動きを見せず、下半身だけで力を宿し唯の拳を突きへと昇華させていた。

疾つと言葉を発しながら妖忌へと向けて拳を奔らせる美鈴だったが、その突きは下から突き上げられて妖忌の頭上を貫くだけとなった。

体の芯、正中線のと真ん中へと奔った拳だったが、妖忌が刀を抜かず、柄頭で下から小突き上げて打ち上げたのだ。

自ら宙を駆けた美鈴。下から突き上げられては体制も整えられずそのまま体を回転させるが、その勢いも利用し足を振るい妖忌の顎目掛けて蹴りあげる。

後の巫女が昇天蹴と名付けるスペルに似た動きで渾身の蹴りも放つが、左手で携えた鞘で受けられて二度の攻め手は失敗に終わった。

「縮地、とは少し違いますな。お若いながら良く鍛錬されている、修行中とは謙遜でしたか」

鞘を足場にして離れた美鈴を讃える妖忌。

最近出会う女性は強く、謙虚な者が多いと感じている。

この場にはいないあの女も己を下げる謙虚な姿勢を見せた後に、少しばかりのやる気を見せてくれた。

あの麗人に比べればまだ若い、似たような物言いのこの者ももしかしたら、と少しだけ期待し、受けて見極めず攻めて見定めようという考えを持ち始めていた。

「恐縮ですが、届かぬのでは意味がない」

雰囲気が変わったと、『気』を引き締める美鈴が妖忌に返答すると同時に己を叱責する。

お屋敷を守る者として引けもせず、相手に下るような媚びる事も出来ない状況で尚届かない相手との対峙。

選択肢なく、そうならざるを得なかった従者という生き方であったが、主も妹もよく懐き、今では正面を任せてくれるほどに信頼されている。

以前の主のように顎で使われるのではなく、名を呼び住まう屋根を共にする紅魔館の者達：身内と呼ばれ、自身もそう呼びたい相手を



思い、ここを死地と定めた。

「過程は無意味、結果にこそ意味がある。斬った後にしかわからない事もある、と某も考えております」

両者ともにこれ以上の会話は無い、これ以降は語る術が変わる、そう伝えるように抜刀する仕草を見せた妖忌が右手を少しだけ握りこむ。

妖忌の右手の動きに合わせて美鈴もつま先を少し動かす、互いにほんの少しの動作をした瞬間、両者がブレて見えるほどの動きで交差し、一度だけの打ち合いの後に、互いの立ち位置を変えていた。

立ち位置を変えた二人、妖忌の方は左手に鍛え上げられた右腕を携え、刀へと掛けていた右手を数度握っては開いていて、軽くしびれているといった仕草を見せていた。

それに対して美鈴は言葉なく腕も落とした姿で佇んでいる。

落とされた右腕は今妖忌の左手の中にあるが、それでも無言で佇んでいる、どうやら腕と共に意識も断ち切られていたようだ。

右の二の腕に刃を走らされて、利き手を美しく切り落とされた美鈴。

切られた感覚すらわからないくらいの太刀筋、血も流れないのは組織を傷つける事なく断ち切ったからだろうか？

輪切りにされた美鈴の腕、それが地に落ちる前に拾い上げた妖忌がこの場での勝者となり、その足で敗者に歩み寄り、地には落ちなかった切り落とした腕を大事そうに見つめていた。

並の者では見えないだろう、両者の動きを見つめていた大妖怪二人。

その金と赤の瞳には、交差した瞬間の情景が捉えられていた。

先に動いたのは美鈴だったようだ。

先程と同じく抜かれる前に出鼻をくじく、対応はされたが刀は抜かれなかった為、まだ見切られてはいないと考えて疾と吐いて妖忌に詰め寄る。

瞬時に肉薄し右の突きを全く同じ軌道、同じ角度で奔らせる…が二度目は柄で突き上げられることはなく、抜かれていない白楼剣で下か

ら切り上げられ、断られた。

正しくは抜かれていないわけではない。

ただ早すぎて美鈴には見えていなかったただけだ。

藍には剣閃だけが見え、幽香には剣筋と握り手が動くのが見えた。それほどの疾さで刀を抜き収めた妖忌。

一瞬だけ本気を出した、千年以上研鑽し続ける白玉楼の庭師の業が、命を賭してでも屋敷を守るという者の強い心を断ち切ったのだ。「気を失いながらも尚倒れぬとは、見事」

自身が切り結んだ相手を賞賛する妖忌。

力の差は歴然、そう見える死合ではあったが、美鈴の気概と断ち切れなかった部分、守護するという誓いを断ち切れなかった事に対して褒め称え、斬った右腕を美しい傷口へと宛てがった。

スツと充てがわれると、たった今切られ落とされたとは思えないくらいキレイにくつつく拳法家の腕。

一流の刀とそれを操る一流の腕が成せる業、組織は殺さずにその繋がりだけを断つという神業を見せた妖忌が、賞賛する相手に獲物を返していた。

「終わったなら早く行くわよ」

二人の死合を見届けた幽香が急かす。

急かすくらいなら一人で進めば、と考えられるがそうはせずにしつかりと見届け見定めていた。

一振りで霧を晴らした妖忌の実力と、屋敷の者達の実力。

両方を見て、まだまだ知らない、楽しそうな者達がいたと、花開いたような笑顔で屋敷の扉に手をかけ先へ歩んで行ったが、妖忌は後には続かずに美鈴と対峙するようにして立ち止まっていた。

「お二人は先へ、某は今しばらくこの者を見ておきます故」

「勝敗は決したようですが？」

「手負いの獣は手強い、藍殿は体感されてお分かりでは？」

「一度断ち切ったその者がそうだとでも？ いえ、妖忌殿がおっしゃるのならばそうなのでしょうね……ここはお任せします」

過去、殷王朝を傾けて、君主の成り代わりと共に討たれた藍。

傷を癒して二本でも朝廷を傾けさせて再度討たれかけた金毛九尾として、手負いの獣の手強さ、執念深さは身に沁みてわかつている。

三人で進み、前後から襲われるよりは背は安心だと確信できたほうが進むに安い：妖忌と交わした二言でそう確信し、先に邸内へと進んだ幽香の後を追いつ、紅い内装の中へと消えていった。

薄暗い灯りの灯る洋館へと消えていった九尾を眺め、直ぐに賞賛した敵対者へと視線を戻す妖忌。

少し本気で刀を振るえば手にしびれが感じられる年齢、そんな晩年と言える今になってから後に期待できる者と会うとは、と小さくため息をついて、白玉楼のある空を見上げた。

見上げて考えているのは数日前に子より知らされた孫の事。

年明けすぐには生まれませすという吉報を届けられ、本格的に自身の老いを感じてきた妖忌が見つめるのは、夜風に赤髪を揺らしながらも倒れずに佇む女性。

月明かりに浮かぶ寝顔は妖しくも美しい、どの様な夢を見ているのかと顔を覗きこむ妖忌の表情は、殺し合いをした者というよりも、年配のそれとしか見えない。

年配者らしい顔、好々爺のような顔つきとなり再度家族を思い浮かべる。

出来るならばこの者のように心の強い子となって欲しいと、まだ生まれてすらいない孫を思い研鑽する拳法家を見つめていた。

## 第十六話 三者三様

屋敷に踏み入った少女二人。

片方は屋敷に似合う赤いベストに赤いスカート姿。

右手に持った日傘を振り子のように揺らし、ご機嫌なお散歩といった風合いで、ルンルンと廊下を歩いている。

もう一人も豪華絢爛な装飾ばかりの屋敷に似合う姿。

体よりも大きな尾を揺らして、綺羅びやかな金毛と同じ色合いの瞳を持つ者。

赤い屋敷に踏み入ってからすぐ、二手に分かれた風見幽香と八雲藍。

常人が考えれば、敵地の真っ直中で分かれるなど悪手以外の何物でもないが、この二名からすれば悪手には成り得なかった。

方や花の大妖として恐れられ、この幻想郷の管理人すらも呼び捨てで呼べるような手合。

もう一方も管理人直属の式であり、身に宿す大妖怪の力とともに式としての力も保持している。

そんな二人が二手に分かれたのだ、悪手と呼ぶよりも殲滅が早まるだけであろう。

それぞれが向かう先は屋敷の地下と中央。

地下には藍が、中央には幽香がそれぞれ向かい、認識出来るようになった魔力を頼りに互いに無言のまま分かれた。

少女達移動中

地下へと向かう最中現れる懐柔された半端者や、動く死骸などの雑魚と言いつける相手。

それらを被る帽子に描かれるような、梵字の描かれた数枚の札を人差し指と中指に挟み被って行く藍。

被っては足首を捻り、ザツと音を立てて歩き、階段を降りていく。

暫く降り続け、階段の終着点へとたどり着くと、他者の侵入を拒むように張られた様式の陣へと数枚の札を飛ばし奔らせた。

手元を離れて一瞬だけ宙を漂った札が、藍の人差し指が向いた方向

へと張り付き轟々と燃え扉を焼き切っていく。

札一枚分の面積に収束された青い炎、狐火に焼かれた扉が焼け崩れ、その先へと藍が踏み入った。

侵入した静寂に包まれた空間。

古い魔導書から最近発行された絵本のような物までが揃う本棚が金の瞳に写り込む。

いくつも並ぶ本棚の間を、輝かしい尾を揺らして歩む。

ポツポツと灯るランタンのような明かり。

青い魔力を湛えた、藍が放った狐火のような青暗い灯りを金色の瞳に映している八雲の式。

腕を隠すいつもの姿勢で歩き進むと、広大な地下の書庫の中央へとたどり着いた。

「二人？ お友達は一緒ではないの？」

大図書館の中心部。

大きな本棚が並び立つ中にポツンと置かれた大きな机。

それに向かう椅子に腰を下ろす者、同じように装丁された魔導書を四冊、六芒星の描かれた魔導書を一冊周囲に浮かばせ、展開する者から声がかけられる。

「貴様が此度の主犯…ではないな、主犯というよりも手段といった手合か」

ここ紅魔館の地下に広がる大図書館の主、パチュリー・ノーレッジから問われた文言に対して返答はせず、自身の質問のみを言い返す藍。

頑丈そうな机の間に挟んで対峙する、4大元素を操る魔女と得手を語らぬ傾国の妖かし。

そんな二人のうちの、冷たい氷のような目でパチュリーを見つめる側、藍が地下へと向かったのは先程述べた言葉が理由である。

屋敷の周囲、霧の湖毎隠すような大規模な魔法を操る者であれば、隠れるように来訪してきた理由を知っているはず。

外に垂れ流された赤い魔力を相手取るよりも、赤いそれよりは消耗しているはずの範囲魔法の行使者を狙い、上は幽香に任せ地下へと訪

れていた。

「手段で正解よ、言い草からこの地の管理者と見受けるけれど、聞いている見た目とは違うのね：随分迷って疲れたでしょう？」

紅魔館が転移前から行使していた認識阻害の魔法、それを霧の湖に作用するように術式を書き換えていたパチュリー。

行使する魔法の効果範囲内の事であれば多少は知れるらしい。

パチュリーの術に惑わされて夜霧の中を飛び続け、纏う道士服をしつとりとさせている藍に向かい、少しの軽口を叩く魔女。

余裕のある口ぶりに思えるが、話す声色は普段よりも弱々しく少しだけ掠れていて、何処か衰弱しているように見える。

「心配には及ばない、お陰様で肌の調子がいい、もてなしの礼を伝えねばならんな」

魔女の軽口に同じく、色のある軽口を混ぜて返す藍。

こちらの式も肌の調子がいいと冗談交じりに話しているが、その体は濡れていて、式としては少し弱体化している。

式神が剥がれるというほど濡れてはいないが、濡れたおかげで式としての今の姿よりも以前の姿、傾国の美女と言われていた頃のような雰囲気強い。

表情も冷静さは変わらないが、冷やかな瞳には妖艶さが混ざっており、言葉もそれらしい物言いとなっている。

「礼なら言葉ではなく物で頂きたいわね、その尻尾でいいわ…」  
多くの文献に残る伝説の妖怪九尾の狐。

その力を象徴する尻尾を求める魔女、研究者としては喉から手が出るほどに欲しい材料だろう。

九尾を見つめてから、展開する魔導書の中の六芒星の描かれた魔導書を正面に移動させる魔女。

「倒すよりも虜にしたほうが都合がいい、小悪魔と契約して良かったと感じる日が来るとは思わなかったわ」

会話を済ませた後に再度使役する悪魔を呼び起こす。

真名を与えた彼女であれば、仰々しい儀式はもはや必要ない。

空中で開いた魔導書の中、小悪魔の姿が描かれたページが開かれる

と、その姿絵から瘴気を放ち、それを纏って再度この世に顕現した。出てきた瞬間またここか、とう表情を浮かべるが、呼び出した魔女から藍へと視線を移すと、下卑た笑みを浮かべる小悪魔。

獲物を見る顔で藍を舐めるように見ているが：小悪魔の獲物とするには相手が悪い。

人数差が出来たがそれでも余裕のある、怪しさのある笑みのままでふわりと欲された尾を揺らして見せる藍。

「私を墮とす？ そのちんちくりんが？ この私を？」

墮とす気マンマンといった表情の小悪魔。

下品な笑みを見せたままにいる悪魔、改め淫魔の足先から頭の先までを見て、鼻で笑い瞳を輝かせて笑む藍。

一晩に人間数人を墮として満足していた小悪魔と、蛇や毒虫などの穴へと人間を落とし、国その物を傾け墮としていた藍では役者が違う。

酷い冗談だとクスリと小さく笑うと、破顔したままに魔女を見つめた。

藍の視線を浴びて生唾を飲むパチュリー、吸血鬼とは違った魅了、色を見せる藍に見つめられて何か言い返そうとするが、言葉は吐かれず、代わりに赤い痰を吐いた。

藍にそれを悟られぬように喉を押さえ、強く咳き込むようになった魔女と、見知った悪魔であるアイギスの姿に似た者二人を妖しく見つめる藍。両の袖口から多量の札を吐き出して周囲に展開し、力の象徴である尾を揺らし始めた。

く???  
く

緩い弧を描く螺旋階段を優雅に昇る。

腰で組まれた両の手で日傘を横に携えて、昇る螺旋の階段状に芳しい花の香りを振り撒いて動く可憐な少女。

表情にも可憐さが伺えるが、纏う雰囲気は表情とは真逆のもので、赤い瞳には苛立ちが見える。

豪華な装飾の施された手摺を見つめてはため息をつく、風見幽香。見ている手摺には、先ほど幽香がつけた傷らしいものが見え、この

少女は先程から数度その傷を見てはため息をついていた。

「もういいわ、面倒」

一言だけ呟いて、苛立ちが見えるその瞳に力を込める幽香。

風もない屋内だというのに髪は揺れスカートもはためく。

なんて事はない、携えていた日傘を構え、その先端から力を迸らせただけ。

面倒という言葉通り、進む事を諦め、道を探すというよりも屋敷そのものを破壊するという行為に移った矢先。

轟音と閃光を放ち進む魔力の奔流が正面の壁を突き抜け、粉塵と瓦礫を生むと、その先に誰かの姿が浮かんで見えた。

「屋敷を壊されては敵わん、大人しく運命に翻弄されていればいいものを」

満月の光を背に受ける誰か。

小さな体に似合わない大きめの翼を広げる者が幽香にそう述べる。

本来であれば謁見の間に居り、部屋の最奥にある主が座る専用の椅子に座り、足を組んでいるはずだったが：幽香の放った一撃が思いの外激しい物だった為、外へと視線を向けさせようとしているらしい。

「今晚は、お嬢ちゃん、この家の子かしら？」

翼を広げ自身の偉大さをアピールする幼女に尋ねる幽香。

今日の前にいるのがこの屋敷の主レミリア・スカーレットその人なのだが、幽香にはそうは感じられなかった。

霧が晴れて垂れ流されている魔力、それとほぼ同質ではあるが、レミリアからはあの時感じた魔力に乗るモノが感じ取れなかったからだ。

「お嬢ちゃん、か。これでも400年以上生きている、見た目に騙されるようではまだまだだな、娘…」

腕や体を眺めながら幽香の言葉に不遜な物言いで返すレミリア。

レミリア本人から見ても幼子のような容姿だという自覚はある、が、過ごしてきた年月は決して短くはなく、定命の者に比べれば十分に化け物ではあった。



しかし、今対面するものは先ほど発せられた魔力光から鑑みて、それなりの力は宿す者で、アレを自然に放つ力の流れや佇まい、その雰囲気から、レミリアよりも軍事に長けた者だということも気がついていた。

それでも主として、新たな領地を求めて現れた侵略者として大物であると感じていたのだが：不遜な態度は再度放たれた魔力光に照らされて掻き消えた。

「答える気がない者に用はないわ」

元より破壊するつもりは屋敷、そこに住まう者の事など全く気にしていない幽香が、レミリアの事を気にかける事などはない。

雄弁に物を申すだけで、問掛けには答えなかつた小娘を傘から放つた魔力で焼き落とし、そのまま視線を屋敷の内へと戻した幽香だったが、外した視線の方から再度幼子の声が聞こえてきた。

声と共に幽香に放たれる血の色をした槍。

振り返った幽香の肩より少し上を走り、床へと突き刺さると赤い霧と化し霧散した。

「気が短いな、あまり急ぐとすぐに散ってしまうぞ？」

声を聞いて振り返る幽香の眺む先。

そこには確かに焼き落としたはずのレミリアがいた。

横に割れたように上半身だけという姿のレミリア。

左手の平にはグルグルと回る天球儀が浮かんでおり、その回転軌道がピタリと止まると、半身を失いながらも口元を釣り上げて笑む。

「少しは遊べそうな玩具ね、遊んであげるわ、お嬢ちゃん」

レミリアの携える天球儀でも、再度顕現された血の槍でもなく、レミリア本人の口元を見つめながら朗らかに笑い言葉を吐く幽香。

幽香の放つ死の光をまともに浴びたように見えたが、運命を操り身に受ける事なく赤い霧と成り体を霧散させて回避した吸血鬼。

「私の癩癩、楽しんで見せてくれ。お代はそうだな：貴様の血でいいな、花の風味漂う血など初めてで、楽しみだ」

むせ返るほどの血の匂いが感じられる赤い魔力を持つ者と、纏う花の香りが強すぎてその匂いを寄せ付けない者。

互いの事を見た目と匂いだけで呼び合う者同士。

その見た目や香りにそぐわない力を、今まさに発揮させようとする二人であった。

◇◇◇◇

「あらあら、アイギスに似たのが本から生えてきたわ」

枯山水庭園の中、開かれたスキマを見つめる者が二人。

一人は、淹れたての茶を啜りつつ、隣に並ぶ悪魔に似た者が本から出てきたと、楽しげな見世物を見るように話す少女。

此度の討伐に際し従者を貸し与えた八雲紫の心友、西行寺幽々子。

「アレほど下品ではないと考えておりますが、否定しきれないのが哀しいところですね」

スキマの繋がる先は八雲藍の瞳。

聡明さや冷静さを湛える事が多い藍の瞳に、会話の途中から妖しさが宿ったのは主である八雲紫が視界とスキマを繋げたから宿ったようだ。

そんな九尾の見つめる先で再度顕現した小悪魔。

アレと自身を比べられたもう一人、スキマの中の住人を懐かしそうに見つめるアイギスが、小さく苦笑しながら幽々子と会話をした。

「でも良かったんじゃない？ これで疑いは晴れたわよ」

疑惑は晴れたと、アイギスの角を撫でつつ笑む幽々子。

荒事専門の御庭番として雇われていながら、アイギスが現在進行形で荒れている最前線に送り込まれていないのは疑いがかけられていたからだ。

里に放たれた死者の軍団、それを操っていたものを同族と呼び、その者との会話から何かを察していたアイギス。

八雲紫はそこにある疑惑を持ち、人里での仕事を終えた御庭番を信頼の置ける友、幽々子の下へと届け監視させていた。

「最初から関わりないとお話しておりましたが、しつこい雇い主で困ります」

角を撫でる幽々子の手、それを一切気にせずに、スキマに映り込む

魔女の姿を見つめるアイギス。

ここに送られるよりも前に紫と少し話し、問われた内容全てに答えていた。

里での一件、関わりはないのか？

此度の侵入者、知り合いではないのか？

呼び込んだわけではないのか？

命を下せばあれらと殺り合う事が出来るのか？

その全てにイエスだと答えたアイギス。

仕事として受けた以上、契約として交わした以上それを覆すことはないと言いつついた。

そんな規律を守る仕事人が今考えている事は、雇い主である紫の事ではなく、別の相手から聞いた言葉と、スキマの中に見える景色であった。

小悪魔が消える前に遺していった言葉。

依代とされた小娘、アイギスを真似て形取られたという物言い。

そしてあの屋敷には未練がないという3つのヒント。

そこから連想できた通りの情景が見られて、自身の読みは正しかったと確信し、スキマを見つめながら小さく頷いている。

「マツチ・ポンプ容疑は晴れましたし、そろそろ私も混ざりたいのですが？」

「私からは引き止める理由がないのだけれど、紫はこれ隙間だけ置いて何処かへ行っちゃったし、どうしましょうねえ」

里の危機を救った雇われ人が監視されていた理由。

それは、人里で暮らす人間達に向かい同族を差し向けて恐怖を届け、糧としようとしたのではないか？

という安易な理由からであった。

依頼の条件から考えればそれはないと思えるのだが、浮かんでしまった小さな疑惑と、仮染めながら従者として仕えてくれるアイギスの事を少しは考えざるを得なかったようだ。

この白玉楼でアイギスが以前話した事、吸血鬼の屋敷で盾となっていたという言葉。

それと小悪魔との会話、そういった繋がりのある者達を相手に依頼通り御庭番としての役割をこなすのか？

仕事に対しては真摯なアイギスだったが、思い出話の一つとして話す者達相手では…と紫なりに考え、気を使いアイギスを送り込まず、幽々子に監視という名の暇つぶし相手をさせていたようだ。

「見なければ我慢も出来たのですが、こう見せられては…差し向けて頂けないのなら、自ら向かうだけですな」

人差し指と親指を合わせ小さく鳴らすアイギス。

穿つモノは見えているスキマの端の方、誰かの瞳のように真横に開いたスキマの端を穿つ。

穿たれた瞳は誰かの目のような形からワインボトルのような、片側が凹み片側が細まるような形へと成った

紫の操るスキマを穿ち、境界でも結界でも、そこにあるというのなら何にでも穴を穿つと示したアイギスが、画面が小さくなったと幽々に文句を言われた瞬間に、別のスキマに飲まれて消えた。

「もう、やり逃げなんてズルいわ」

小さくなった画面の先に現れた、隣にいたはずの黒羊の背を見てそう呟く亡霊の姫。

画面に映るのは慌てふためく小悪魔と、久々に会えたという喜びの表情を見せる魔女の顔。

見知らぬ二人は兎も角として、後頭部しか見えないアイギスが今どんな表情で屋敷の者達と対峙したのか？

スキマの周囲をユラユラと周回しながら、角度を変えればどうにか見えないかと、茶目つ気を見せる西行寺のお姫様であった。

## 第十七話 前門の狐、後門の羊、鬼門の蝙蝠

掃除がしきれないほどの広さが見られる薄暗い地下。

普段から清掃作業をマメに行っている警護役がいる屋敷にしては、まるで掃除がされていないように見える空間。

紅魔館の敷地内ではあるが、主は別とされている為にこちらは管理されていない…というわけではなく、普段のこの書庫では掃除をする必要性が感じられなかった。

この大図書館を任されている者は魔女であり、記憶している書物であれば探しに出向かずとも魔法でたぐり寄せることが出来る。

その為主は机から動く機会が少なく、多少埃や塵が積もっていたとしてもそれが舞い立つという事がなかった。

主である者もそれを当然としていて、全く気にかけていなかったのだが、今更になりもう少し手入れをしておけばと後悔するようになっていた。

私の書庫内で暴れる者が出る。

そういった事も想定はしていたが、荒れる前に仕留められる。

そのように考えていたこの書庫の主だったが…

現状は見るも無残に荒らされて、視界のほとんどが粉塵で埋め尽くされていた。

原因は書庫を訪れた者。

魔女の魔法を容易く避け縦横無尽に書庫内を駆けて、力の込められた札や恐ろしい鋭さを秘めた尾を振るい棚を倒しては、視界を潰す者が現れたのだ。

魔女の想定以上に力を宿す者。

そういった手合がいるとは…忘れられるような、力ない者しかいないはずの楽園でこうなるとは、と追いついてながら自身の甘さに後悔し口を強く結んでいた。

屋敷の魔女が操る魔法。

今は地水火風、四冊の魔導書を媒介に発現させた四つのクリスタルを操っている。

自身の周囲には水と風、藍を追い立てるのは地と火のクリスタルで、各々に込められた魔力を発動させながら、広い広い書庫を駆ける獣を追い立てていたが捉えきれないでいた。

「失策だったわ、ただ悪戯に消費しただけ」

右腕で口元を隠し、少し掠れた声で愚痴る魔女パチュリー・ノーレッジ。

二度目の召喚をした小悪魔は既に討たれた。

一度目は数時間前。

イメージし形として成した本人、アイギスによって人里近くで討たれ二度目はい先程、尾を揺らし駆けまわる藍によって容易く葬られていた。

待ち人が来るまでの多少の時間稼ぎにでもなれば、そう考え再召喚したパチュリーだったが、小悪魔は期待していた動きを見せず：瞬く間に墮とされ手籠めとされた。

小悪魔が墮とそうとしていた敵対者、傾国の九尾八雲藍に逆に墮とされて、今はその姿をかき消され大図書館の床に伏し消えてしまっていた。

消える寸前までは数本の尻尾に弄ばれ、淫靡らしい乱れ姿を見せていたのだが、墮とされた者は肢体に絡みつく金色の尾に軽々と振じ切られ、またも退屈地獄へと戻されていた。

「フウ…あの女狐は何処に？」

袖で口を抑え小さく呟く魔女。

沸き立つ埃や塵を吸わぬようにそうしているが、視界の先は誰がどう見ても吸わざるを得ない状況。

多少は軽減できるだろうが、袖で抑えたところで焼け石に水だろう。

種族柄体は強くないが、今までは病気という病気はなかった魔女。彼女の喉がこうなったのは書物の悪魔を呼び起こした後から、正確に述べるのであれば小悪魔を呼び出し契約を済ませてからである。パチュリーが召喚時に唱えた呪文。

『我が囁きに耳を傾けよ、我が祈りに応えよ、我が詠唱を聞き入れよ、

我念ずる』という呪文の内の2つ、『囁き』『詠唱』の文言からも、小悪魔が言葉巧みに他者を惑わし堕とす、囁く者だと捉えられる。

囁く者である小悪魔を象徴する部分が声を発する器官、それが人間であれば喉に当たる。

召喚した囁く者が二度討たれた事で、召喚者であり真名を与えた主と呼べるパチュリーの喉にも、僅かな呪詛返しとなってダメージが返ってきていた。

「調子が悪そうだな、貴様も私に身を委ねた方が楽なのではないか？」  
喉を気にする魔女の前に姿を現し、瞳を輝かせて声発する藍。

悪魔の囁きを得意とする小悪魔を堕とした後、姿を見せずに偶に今のような囁きをパチュリーに向けて言い放っていたが、喉の痛みに気を取られたパチュリーが追撃の手を緩めた事で、地と火のクリスタルは尾に絡め取られ破壊されたようだ。

パキンと音を立てながら4尾の中で割れ消える二色のクリスタル。消したクリスタルの色を嘲るように、口調は地のように穏やかな物言いで包容力のある雰囲気を見せる藍。

だが、声色は酷く冷たく、火をかき消すような冷酷な声だ。

そんな声色で身を委ねろというが、一度堕とされれば二度と戻れないあちら側へと誘っているようにしか見えぬ、小悪魔の姿を見たパチュリーはああはなるまいとゆっくりと首を横に振った。

「余計なお世話…よ」

藍からの色香の混ざる脅しに言葉を吐き捨て、尚抗う姿勢を見せるパチュリー。

目では藍の姿を追い切れず、少し前までは惑わしていた相手に遊ばれて、立場を逆にされ惑わされるといふ状況となった今、これを打破するために再度小悪魔の魔導書を手に取る。

周囲に浮かぶ2色のクリスタル。

その内の風を司る緑のクリスタルで、藍の立てた埃や塵など、索敵の邪魔になる目潰しをかき集め視界を取り戻しながら、水を司る青のクリスタルからは激流を垂れ流し始めた。

吸血鬼程ではないが水を苦手とする式、八雲藍の足を少しでも止め倒せずとも封じるか捕縛するような動きを見せる水の魔法。

その激流が図書館の本棚を揺らし、藍の動きを阻害し始めた頃合  
い。

パチュリーが本日二度目の召喚を終えると、コトンという低いヒールの鳴る音と、カツンというハイヒールから鳴る音が、魔女と九尾の間から鳴り両者の耳に届いた。

「またここ…つてまたお前か！」  
アイギス

「アイギス様!? 本人を呼び出せたとしてもいうの…だというのなら都合がいい、妹様が…」

呼び出す予定の者とは違った、予想外の悪魔が現れて困惑するパチュリーだったが、かつて頼り救われた相手が視界に入り少しだけ緊張が緩む。

これで妹を想い人に合わせたいという親友の願いを叶えられ、同時に今現在の状況どうにかなる。

そう感じて気が緩むと同時に頬も僅かに緩むが、その表情は見つめるアイギスの顔を見て一瞬で凍りつく。

いつかのように目に怯えを見せるパチュリーと同じく、小悪魔の表情も暗いモノとなった、二人が見ているアイギスの顔は嬉々とした表情だが…その笑みは親しい友人に向けるモノではなく、これから手に掛ける獲物へ向けた視線であった。

「旧知の者から色々とお聞きしたい事もございますが、今はお仕事が優先…藍様、この場でのオーダーを」

妖艶に笑み色香漂わせる藍を背に、そのまま指示を待つアイギス。現れた瞬間から書庫の床にスコップを突き立てて柄に両手をかける姿で佇み、この場での指揮者に問いかける。

送り届けられる途中八雲紫から聞いていた、藍の指示を守ってほしいという言葉。

パチュリーが言いかけた妹という言葉、それも気にはなるが今は仕事  
事中。

だからこそ、魔女の言い分は後回しにして、正しい雇い主からの命



令を忠実にこなそうという真摯な仕事人らしい姿勢を見せた。

「殺さず、以上です」

もはや聞き慣れた低めの声、誰が相手でも姿を変えないアイギスの声を聞き藍もいつもの調子で話す。

漂わせている色香は変わらないが、魔女と小悪魔二人の表情から私の出番はなくなったと確信し顔色に冷静さを戻し始めた藍が、アイギスに向かい言い放った。

「畏まりました、ではお覚悟を」

背から受けたオーダーを聞き入れ、言葉と共に動くアイギス。

殺さなければ何をしても構わないと判断し、まずは目障りな同族。

自身が疑われた原因である小悪魔に向かい地を蹴って疾走した、書庫の床にスコップの刃先を引きずって、火の粉を散らして小悪魔に迫る。

真っ直ぐに突き進むアイギスに向けて、小悪魔からも反撃が放たれる。

中心が白く見えるほどの熱量が込められた赤い魔力球が多量に現れて、アイギスの視界を奪っていくが、空いている左手の指を鳴らし、穿ち消し飛ばし、偶に直接接触して手の甲で弾き確認しながら進む黒羊。

二つの結界で遮られ外からの崇拜が届かなくなった今、アイギスの不死性は衰えていたが：真正面からアイギスを崇拜し畏怖してくれる魔女が現れた事でその衰えは見えなくなった。

焼け焦げ煙を立てる手の甲から瘴気を漏らしては、直ぐに元の褐色肌へと戻し笑む悪魔。

見つめる藍と小悪魔の訝しい顔など気にせず、唯真っ直ぐに突き進み、小悪魔の裏で身構えるパチュリーを無視してそのまま本棚の群へと突っ込んだ。

「なんとも豪快なやり口、餓えていらっしやっただからか…」  
猛進する黒羊の立てる音が響く。

本棚へと小悪魔を押し付け破壊音を立てながら力尽くで押しつけていくアイギスが、煙る埃の中へ消えていくのを眺め眩く藍が、パチュ

リーへ向けて札を放ち奔らせていく。

ランダムに飛ぶ札がパチュリーへと襲いかかるが轟々と音を立てる水でパチュリーがそれを制する、そのまま流れるように指を滑らせ藍へと水撃を飛ばすが、藍が身を翻して浮かび上がりそれを回避した。

「待ち人は来た、であれば余力を残す必要もない：まずは貴女を止めて時間を創る」

待ち人が敵対者として増えた事で余力を残す余裕も消えた、そう感じられる程に集められた大気中の水分。

先程は濁流となり流れていた水が空中で纏め、大粒や小粒の水弾や水の槍へと姿を変えてパチュリーが藍に放つ：が、焦る事なく札を展開した藍がそれを相殺した。

書庫の奥では粉塵が舞い上がり、中心の上空では水々しい魔法が現れては消されていく。

一つの部屋の二箇所を展開されるそれぞれの争い、その一方。争いというよりも蹂躪と呼べる側が騒がしくなり始めた。

「んっもう！ やる事成す事デタラメなのよバカ羊！」

「お褒めに預かり光栄…：と言いたいのですが、貴女から褒められても嬉しくもない」

粉塵の中、周囲に飛び散る魔導書の切れ端や本棚の破片。

そんな中歯を向いて怒りを露わにし吐く小悪魔と、聞き流して掴む左手をそのまま小悪魔の右肩へとめり込ませていくアイギス。

唯でさえ埃っぽかった大図書館内が更に煙つていく中、小悪魔の体の内を左手で雑に掴み、走る勢いそのままに並ぶ本棚へと突き進んだアイギスが、数列の本棚を押し続け、棚の位置をずらしていく光景が、相殺しあう藍とパチュリーの瞳に写った。

「殺るならさっさと殺つてよ！ こちとら敵うなんて思っていないんだから！」

パラパラと飛んだ本棚の破片と、破り散らされた魔導書のページが床に落ち広がると、体の中心へとスコップを突き刺され、本棚に貼り付けられた小悪魔と、それを見つめるアイギスが見える。

磔られ腹を抜かれて血を吐く小悪魔。

言葉を喚き散らしながら血反吐も撒いているが、前回の通り元気な物言いできつさと殺れと述べている。

力はあるが名で縛られて、思うように力が出せず気に入らない今の体。

以前述べた通りに未練も何もないようだ。

「本当につまらない女になりましたね、先程は尾で突き立てられて喘いでいたというのに：再召喚されリセットされてしまったのでしょうか？」

小悪魔の頬に空いている右手を添える、白い肌と赤い髪に映える褐色の手が頬から首元へと下がっていく。

スコップの刃先を縦に突き立てた事でキレイに割れた小悪魔のブラウス、その首で止まる手がネクタイへと伸ばされた。

シウルシウルと解かれて後は第一ボタンでも外せば全て露わになるといった姿で、小悪魔の顔に自身の顔を近づけるアイギスがそのボタンに手を伸ばし外すと凹凸のない体が晒された。

さすがに抗った小悪魔だが、アイギスの邪魔をしようとした左手は握り潰され、右手は力業で肩から捻じり切られて、アイギスにより雑にその辺に放り捨てられた。

「何してくれてんのよ！ 女しかいないのに晒さないでよ！」

「やはりつまらない、女相手であろうと漂わせた色香は何処にいつてしまったのでしょうか？ 藍様を見習われてはいかがでしょうか？」

ギアアギアと喚く小悪魔の頬に再度手を添えるアイギス。

優しく触れると途端に静かになり、磔にされたまま頭を下げた気が失った、アイギスが意識を穿ち騒がしい者を鎮めたようだ。

何をしたのかと分析するように見つめる藍に同じく、自身の使役する小悪魔が意識を断られた事で何かされたと感じく。パチュリーだったが、次は私の番かと戦慄し感じいた事を考える事は出来なかった。操る魔法は全て藍にあしらわれ、時間稼ぎ役の小悪魔も恐れる悪魔に打ち倒された。

思考を巡らせる余裕などなく、前と後ろから羊と狐に挟まれる形と

なったが、後門の狼代わりとなった羊はパチュリーよりも別の者が気になるようだ。

「魔女殿は藍様にお任せするとして、私は…」

図書館の上部、天井の先を見るように手を仰ぐアイギス。

パチュリーのいる空中の先を見ているが、見られる側のパチュリーはそうは捉えない。

虚ろな紅い瞳で何を考えているのか？

妹様と言った声は届いただろうか？

そして、死なない程度にこれから何をされるのか？

悩む魔女ではあったが、悩む間に手数を減らしてしまい、対峙する藍に力負けして捕縛されるだけに留まった。

魔女を捕らえた藍が、見上げるアイギスの元へと降り立つ。

「想定外だけどこれで伝えられる、このままでは妹様が…」

藍の尾に四肢と首を締められるパチュリーが、締め付けられるのも気にせずに言葉を述べる。

アイギスが現れた時と同じ文言、妹様が、と言った辺りで首に絡む尾だけが幾分強く締められた。

「余計な事を話さないでもらおうか、問掛けに頷くだけでいい。主は上の者か？ それとも下の者か？」

尾の主、藍が捕らえた魔女の拘束を強め呼吸出来るギリギリまで首を締める。

が、パチュリーが頷くよりも早くアイギスから答えが述べられ、尾を掴まれて緩められた。

「上でしょうね、下から感じるのは妹君の御力ですのぞ」

強引に尾を解かれた藍が強めにアイギスを睨む、が、強く輝く金の瞳は気にされず、アイギスは藍ではなく別の場所を見つめていた。

大図書館よりも更に下、地下へと続く長い階段。

アイギスが屋敷にいた頃にはなかった階段、その先から流れてくるのは安定しない複数の見知った魔力。

感じ取れる力は慣れ親しんだ吸血鬼の妹のモノではある。

「さて、フランドール御嬢様が何か？ いや、この感覚はそういう事な

ののでしょうか？」

「明察、この地に着いた途端です。閉じ込める為の霧も、入り口の封もそいつらが破ってしまった：後はレミイが敗れば、いつでも外に出ている状態です」

目を瞑り、角を撫でるアイギス。

彼女の象徴であるアモン角に感じる魔力はフランドールよりも別の者：いつか乱心した姉妹の父、スカーレット卿の放っていた感覚に近い。

父を殺めた記憶を思い出し、それを気にする素振りのなかったフランドールが今更になって何故？

気が昂ぶる事はあったが、気が触れる事はなくなっていたはずだが？

悩んでも答えは出ず、わからないのなら見れば早いと、瞑っていた瞳を開き、藍もパチュリーも頭から切り離してコツコツと階段を下っていく。

漂う血の匂いも死臭も意に介さず、地下から流れてくる乱れた魔力だけを感じし降っていく黒スーツの女。

降りきった先の最奥にある、頑丈に強化され、幾重にも封印の魔法陣が施された扉を迷い無く穿ち、中へと歩んでいくアイギス。

進んだ部屋の中は更に血の匂いが強く、その部屋に住まう者達も真っ赤な姿と成っていた。

「アイギス？…アイギスが来ター！」

「置いていっタノに今度はジャマしニキタ!？」

「帰っテキてクレたの!?! 今度ハ離さナインだカラ!!」

アイギスの見つめる先には三人の妹。

嬉々とした表情で来たと喜びを隠さないフランドール、次には目を見開いて口角を上げて邪魔だと荒く口走るフランドール、最後に玩具兼愛しい者でも見るかのように楽しげに、鋭い歯を覗かせるフランドール。

三者三様の表情と感情でアイギスに問いかける同じ顔、同じ姿、違う表情のフランドール・スカーレット。

「知らぬ間に三つ子に？ それぞれ個性的な表情ですが、どれも歪です  
すね」

それぞれのフランドールに別々の事を言われても、どれも気にせず  
冷めた瞳で見つめ返すアイギス。

キヤハハと笑いあう三人の吸血鬼を眺み、三つ子というには歪だと  
言い切るが、部屋の端でボロボロの姿、血塗れにされて横たわるもう  
一人を見つけると、視線が更に冷ややかなものへと変わった。

その冷たさが三人のフランドールに届いた瞬間、聞き取れない音波  
のような声と共に翼を開き、三人が同時にアイギスに向けて飛び立っ  
た。

それぞれがそれぞれに狂い、思考の読みにくい三人を相手に、幻想  
郷の御庭番として正面から挑むアイギス。

かつては盾として守り通した相手に向けて、表情のないままに動き  
始めていた。

## 第十八話 歪な妹

暗く血の匂いと死の香りしかしない地下室。

明かりすらない一室が、眩いばかりの赤と橙に照らされて部屋の全容を見せている。

床は綺麗な赤。

部屋の奥で伏せる一人の周囲だけは赤黒いが、他の部分は屋敷の内装と変わらない赤色。

壁も赤。

部分部分にひび割れなどが見えるが、これは転移する際に入ったひび割れで、部屋の主が暴れたせいではない。

そして部屋の奥には豪華な天蓋の付いた、またもや紅いベッドが備え付けられている。

ベッドのマット下に置かれた部屋の主へと送られた棺、あの配色に近い赤のベルベッドで仕立て上げられて上掛けと、純白なシーツ。

その白の部分汚すような争いが今まさに始まっていた。

部屋に踏み入ったアイギスに飛びかかってきた三人の妹フラン  
ドール・スカーレット達。

三人まとめて、バラバラに振るわれた爪や剣戟は全てアイギスにいなされ弾かれた。

不意打ちを弾かれて喜びを見せるフランドールと、楽しい殺し合いだとはしゃぐフランドールは弾かれた位置で噛み始め、今は残りの一人がアイギスと争い、頭を鷲掴みにされている。

掴まれる頭の下では、歯を向いて鋭い牙をガチガチと噛み合わせる、瞳には怒りの色を灯したフランドール。

その輝く金の髪を左手で乱暴に掴み上げ、右手に携えたスコップで肩から腰骨に向かい一太刀で薙ぎ断つアイギス。

薙いで二つに分けた体の上半身はまだ息があり、目を見開いて声にならない怒り声を叫んでいる。

そんな喚き散らすフランドールを床に叩きつけ、首元目掛けてスコップを突き立てようとするが、噛っていたフランドール二人が右手

に現した瞳を握りこみ、スコップとアイギスの右腕をそれぞれ破壊した。

破壊が成功しキャツキヤと喜ぶフランドールと、朗らかな笑みを見せるフランドール。

騒ぐ二人を他所にして、血に倒れたフランを蹴り上げて、三人と距離を取るアイギス。

「練習不足は変わりませぬ、窘める所ですが今はそれが有り難い」  
破壊された右腕を復元し両手の指を鳴らすアイギス。

声を上げて跳ね回り喜ぶフランドール達の右掌を穿ち、これ以降の能力発動を制限しようとするが：笑みを見せるフランドール達がそれぞれその右手を断ち切り、アイギスと同じくそれぞれが右手を復元させた。

「この回復力、光は届かなくとも満月である事には変わりない、という事でしょうか。繋がりを穿てば：吸血鬼ではなくなってしまうでしょうし、敵に回すと中々に厄介ですね」

右手を復元させたフランドール達を見ながら、振るわれる憤怒の込められたレーヴァテインをスコップで受ける。

こちらの怒りを見せるフランドールも他の者達と同じく、直ぐに再生し体が戻った瞬間から炎の魔剣を力いっぱい振り始めた。

カオンという甲高い金属音と共に火の粉が舞い、暗い部屋内を明るくしていく。

その明るくなった一瞬にアイギスの瞳に映るモノがあった。

「これ以上増えては手間なのですが：まあいいでしょう、殺さずというよりも殺せずで、暴れても問題なしと都合良く考えましょう」

藍から伝えられたオーダーを守るのには都合がいい、そう考えを改めるアイギスの赤黒い瞳に写ったのは、部屋の隅で倒れ伏している四人目の妹。

体を動かしたというモノではなく、ピクリと背から生やす宝石のよくな羽を動かしただけで、荒事の振動で揺れただけと取れなくもないが、満月という状況を鑑みれば復活してもおかしくはなかった。

「マタ余所見シテ！ 私ダケヲ見テイレバイイノヨ！」



「二人占メシナイデ！ アイギスハ私ト遊ブノ！」

「ダメレ！ お前ヲモアイギスモ、お姉様モ全部消エテシマエ！ 勝手ニイナクナツテ勝手に連レテキテ：今ダツテ何モ話シテクレナイノニ！」

各々が我儘を述べては各々で否定し、それぞれがアイギスに向けてレーヴァテインを振るい、掌に瞳を宿らせていく。

表情から『憤怒』と『歓喜』と呼ぶが、その二人がそれぞれ炎の魔剣を握りしめ、炎の勢いを高める。

周囲の景色が熱で揺らめくほどに魔力が込められた二刀が交差しながらアイギスへと振るわれるが、連携して動かず各々がバラバラに振るうだけの暴力など当たるはずがない。

踵のヒールで床に穴が空くほどの踏切でアイギス前へ飛び、後方で瞳を握り込む寸前だった、楽しげに笑む『享楽』的なフランドールへ向けて右手の指を鳴らした。

床とその先の壁を焼き払う『憤怒』と『歓喜』の二人を置き去りにし、奥の『享楽』を狙い奔る黒羊だったが、レーヴァテインを投げ捨てた『歓喜』が瞳を掌に浮かべて握りこむ。

穿たれる『享楽』の両腕、それとともに弾け飛ぶアイギスの左腕。

「当タツタ！ マタアイギスヲ壊セター！」

「私ガ壊スノ！ 邪魔シナイデ！」

「余計ナ事シナイデ」

「単体では御しやすいですが全体で相手取ると読みにくいですね、まずは数を減らしましょうか」

はじけ飛んだ左手に魔力を流し数秒掛けて復元するアイギス。

戻した左手の指を一本ずつ折って握り、数を数えるように調子を確認している。

「マタ戻ツタ！ マダマダ壊レナイ！」

「マダ遊ベル？ アイギスガマダ遊ンデクレル？」

「ナンデ壊レナイノ!? 邪魔ナノ！ 早く壊レテヨ！」

それを見ていた三人が、まだまだ壊れないと嬉しそうに、楽しそうに、怒り狂ってそれぞれ述べる。

だが文言は全て同じというわけではない。全てがアイギスに向けられて言われているように聞こえるが、一人言い分が違うように聞こえた。

一番激しい感情に見える『憤怒』だけがアイギスではなく、その先、大図書館へと続く階段を見ながら叫んでいるように見える。

それを踏まえて少し悩むアイギスだったが、足を止めて思考出来る程、三人のフランドールの攻勢は緩くはなかった。

対峙するアイギスと妹達。

まず動いたのは燃え盛る『憤怒』を宿すフランドール。

三人それぞれを見比べるように視線を流したアイギスに向けて、邪魔をするなどギリギリで聞き取れる言葉を吠えて、レーヴァティンを振り上げ迫る。

満月という条件下にあり、絞らずとも常にフルパワーでいられる吸血鬼が振るう炎の魔剣。

床と天井を焼き払いながら強引に縦に振るわれるが、勢いだけしか感じられない雑な剣戟はアイギスに届かず、先ほどと同じく壁を焼き払うだけであった。

避けながら指を鳴らし、レーヴァティンを振るって来た憤怒へ向けて音を鳴らす、響くとともに憤怒の上半身が穿たれて、下半身だけが床を滑り壁にぶつかって止まった。

「まずは一人、満月の夜といえど頭がなければ時間もかかるでしょう」  
下半身だけとなった『憤怒』が動かないのを確認しているアイギスだったが、その口からは鮮血を吐いている。

一番動きのわかりやすい、怒りに囚われたフランドールを注視していた為か、余所見をするなど言っては騒いでいた歓喜のフランドールが、いつの間にか体を霧と化し近づいていて、アイギスの両脇腹へと両腕を突き刺し顕現していた。

「捕マエターア！」

「ズルイ！ 私ダツテアイギスデ遊ビタイ！」

「…これは、私とした事が油断を…霧に成れて当たり前だというのに…私が歪に見ていただけでしたか」

血を吐きながらも冷静さを見せる黒羊。

吸血鬼らしく体を霧と化した妹。

両の脇腹に腕を突き刺して、抱きつく形でいる『歓喜』の頭を一撫でしてそのまま掴み、片腕で捻じり切り軽く放って蹴り破裂させた。頭部を失い、噴水のように首から血を吹き始める歓喜の体。

その体に触れて刺さる腕ごと全身を穿ち掻き消すと、残るは楽しそうに、私だけになったと狂おしいほどに啜うフランドールだけとなった。

「楽しそうで何よりですがこれ以上はやらせません、油断してしまい少々手間取りましたが…そう何度も壊されてやるわけには参りませんので」

何が楽しいのか、理解する事は難しいが一人になった事を喜び、声を上げて啜うフランドールの胸から上が穿たれる。

ドサリと落ちた両腕に続いて膝から崩れ落ちる幼子の体。

「今晚の内に戻るのであれば『殺さず』に触れる事はないはず…ですが、こうなった原因がわからないうちは対処も出来ませんね」

両脇腹から血と瘴気を漏らして一人佇む。

さすがに魔女一人から届けられる信仰心では瞬時の復元は何度も行えず、両手を宛てがい魔力を流して血肉を戻していく。

怪我らしい怪我を負うことなど何年ぶりなのか、思い出せないほどに遠い記憶のようだ。

こうして痛みを得るのも懐かしいと感慨深い事を考えるが、思考を自身の傷に向けているアイギスの背では、討ち倒したはずのフランドール達の体が静かに血となり流れていく。

流れる先はまだ体のほとんどを残す者達…最後に肩から上を穿たれた『享楽』なフランと、下半身だけとなった『憤怒』へ向けて流れ集まり纏まっていく。

傷を戻したアイギスが再度現れた二人のフランドールへと振り向くと、楽しいに笑む『享楽』と激しく心を燃やす『憤怒』の姿が目にと留まる。

一人減ったが未だ終わらない妹達。

その内の一人『憤怒』が感情を体全体で表すように振るえ吠える。そのままアイギスに向けて懲りずに炎の魔剣を振るうが、代わり映えない動きで振るわれる魔剣は安々と躲され、交差した背に向けてスコップを放り投げられた。

だが『憤怒』は止まらず、背に突き刺さるスコップを気にせず、そのまま飛び抜け上に続く階段へと消えていった。

「逃がすわけには…」

「何処二行クノ？ 私ハココニイルヨ？」

追いかける動きを見せるアイギスだったが、体を動かす前にスコップを放った右腕が、残った『享楽』により破壊される。

まずはこいつを沈めてから、そう考えたアイギスの瞳に今まで横たわっていただけの四人目が動き、起き上がる姿が写り込む。

また増えた、と思考した瞬間——楽しいに嗤うフランドールが、血に濡れ横たわり、何かに哀しんだように涙を流した後が見えるフランに半身を破壊された。

半身を失いグラリと傾きながら、残った右腕に瞳を現し握ろうとするが、それはアイギスに穿たれて発現せずに終わる。

腕を穿たれた半身のフランに飛びついて、首筋に歯を突き立てる、頬には泣き跡の残るフランドール。

同じ容姿の者が吸血し合う異様な光景にアイギスが訝しむが、吸われる側の『享楽』は楽しそうな笑みを浮かべ、『悲哀』と呼べる者に吸収されていった。

「ごめんなさい」

涙の跡を残したままのフランがアイギスに歩み寄り見上げる。

少しだけ身構えていたアイギスだったが、見上げてくるフランの瞳が出立前に見ていた瞳と変わらない事に気付き、情愛の念が宿るものに見えた。

この御嬢様が本体、と呼べるものだろうか？

警戒しながらも左腕を差し出すアイギス。

差し出されたその左腕に飛びつく姿も見慣れた物であった為、そのまま左腕一本で抱き上げた。

「何か私に謝るような事をされましたか？ 私にわかるように話してくださいますか？」

腕も腹も破壊されその度に復元し、姿だけは血塗れのアイギス。今も右腕は修復中でフランドールを片腕で抱き上げている。

暴れて傷つけてごめんさい、ともとれる言葉ではあるが以前より手合わせという名の遊びに興じ、その度に互いに体の部品を失くしては戻している二人である、今更そこについての謝罪は必要ない。

ましてや今回は里を襲った侵入者側と、それを排除しに来た御庭番という立場で再開している為、謝罪など殊更に必要ないはずである。「ずうっと会いたいって思ってたのよ？ でも帰ってくるまでは我慢しようとも思ってたの、約束は破らないって知ってるから」

アイギスに抱き上げられると目は合わせず、俯いて謝る理由を述べるフラン。

自身の考えが我儘だと理解し、それを我慢していたと述べる、アイギスが帰ってくると話した事を約束だと捉え、それを守るだろうと我慢を続けていたと話した。

「でもお姉様<sup>アイツ</sup>が一人で決めちゃったわ、アイギスに会いに行くって：最初に会いに行くって言い出したのは私だけど：それでも行くって言っただけなのに、部屋に来たアイツにちよつと我儘言っただけだったのに」

俯いたままで思いの丈を吐き続けるフラン。

引きこもり続ける理由も聞かず、ただ部屋に会いに来てくれた姉のレミリア。

実際は妹の為だけではなく、消えいく紅魔館の運命を変えるために幻想郷への引越しを考えた部分もあるが、それは話さずに動いたよ  
うだ。

実情を知らずに引きこもる妹からすれば、我慢している自分の事は見られていない、勝手に決めた我儘な姉としか見られないのかもしれない。

そんな妹思いの姉をアイツなどと言ってご立腹だと言葉で示すが、言う割には表情は泣き出しそうな顔から変わらない妹様。

「二人で勝手に決めて、ってイライラしたけどそれも忘れようと、うん、忘れたのよ、我儘ばかりでちよつと辛くなつたから：でも、揺られて音がした後から忘れてた事が思い出されて：我慢出来なくなつちやつた：そしたら分かれちやつたの」

俯いたまま話し、アイギスのスーツの襟口を握りしめるフランドール。

長く我慢を続けるのは辛い、それを語るように握りしめられる襟口に深い皺が寄っていく。

数日や数ヶ月の我慢なら誰しも経験があるだろう、それくらいの我慢であれば誰でも出来るはずだ。

だがこの吸血鬼の妹はその数倍以上、アイギスが出立してからずっと引きこもり我慢を続けていたようだ：辛いと感じるのなら忘れる、自衛の手段としてこれも誰もがする事だろう。

「分かれてしまった、つまり逃げていったフランドール御嬢様も、今いらっしやる御嬢様もご本人だと？」

「会えるとわかつて喜んだ私と勝手に始めたお姉様に怒る私、その二人が混ざつたのが飛び出していった私よ。さつき取り込んだのは、帰ってきたら何を話してくれるのか楽しみに待っていた私…」

抱き上げる幼子に向けて問いかける年配者。

聞こえた返答を受けて考えこむように首を傾げる、話された事を反芻し噛み砕いているようだ。

我慢を続け耐え切れず忘れた事、戻らない待ち人への期待や楽しみ、我儘に見えた姉への怒り、そういつた感情を忘れた：忘れたつもりになつていた。

そうして記憶に封をした状態で幻想郷を訪れた途端に思い出し、わけもわからない間に自分が分かれて増えたというフラン。

「紫様でもいらっしやればわかりそうなのですが、私では都合のいいようにしか考えられませんね」

修復を終えた右腕で自身の角を撫で、思考するアイギス。

咀嚼した言葉から考えられるのは、忘れられた者達の楽園へと足を踏み入れたから、忘れていた事を思い出した、というくらい。

だがこれでは増えた理由の説明がつかず、それぞれ発狂してしまつた理由もわからない：が、わからないのなら聞けば早いと、角を撫でる右腕をフランの頭に置いて問いかける黒羊。

「忘れていた全てを思い出した、という事でよいのでしょうか？」

「うん：おとう様の事も：おかあ様の事も、私が：」

「そこままで結構ですよ、それ以上は言われずともわかりますので：大丈夫」

フランの頭頂部に当てていた右腕を後頭部へと動かし撫でて、抱きしめるアイギス。

物心付いてから自身が殺めた父の記憶、アイギスにより封じられたその記憶は、フランドル自身が能力を使い思い出して受け入れた。

だが母の記憶は物心付く前、母の胎内にいる頃の記憶で、アイギスもレミリアもそれについて話した事はない。

が、全てというのならそれまで思い出したという事なのだろう：

宿る胎内から産み落とそうとしてくれる母を破壊し爆ぜさせる、赤子であれば何もわからないで済むが、分別のつけられる今になってそれを思い出しては：多少狂つたとしても致し方ないだろう。

泣いていた理由も自覚なく殺めた母を想つてだろう、殺めた事を思い出し泣く姿。

そんな母の面影を見てこの子の父も乱心したのだつたと、少し昔を思い出すアイギスだったが、すぐに思考を切り替えた。

「とりあえずは理解出来ましたし、成すべきことを成すと致しましうか」

抱きしめるフランを下ろし、飛び去っていった一部が消えた先。

大図書館、そこから続く外へと視線を動かすアイギス。

降ろされて見上げるフランの姿はボロボロで血塗れ、アイギス自身もフランに破壊されスーツの袖などが血塗れの姿だ。以前のレミリアより言われた姿通りだと感じられてクスリと笑つてから、今回はアイギスからフランドルの手を取った。

そのまま手を繋ぐ先、何をするの、という疑問を浮かべた幼子に何を成すのか話し始める。

「出て行かれた御嬢様もフランドル御嬢様の一部なのでしょう？  
であれば取り戻さねばなりませんまい、あるモノがないのでは人格が死  
んでいると言える。それでは困ってしまいますので」

言い切つて階段からフランへと視線を移すアイギス。

人格が死んでいては此度のオーダー通りとはならず、殺さずという  
依頼は失敗となる。

そうなつてしまつては信用も得られず後の受注に響く。

手を繋ぐ吸血鬼が愛おしい、そう自覚しながらも、素直にそれを伝  
える気も見せる気にもならない年経た偏屈な悪魔らしく、自身の仕事  
に対する矜持へとすり替えて言葉を述べる。

「うん、お姉様には私が自分で文句を言うの、怒つてばつかりのあつち  
じゃ：また壊して終わりになるもん、それは嫌！」

良い返事だと笑みを浮かべるアイギス。

今の言葉と先ほど話していた言葉から考えれば、分かれたのは体と  
いうよりも感情なのだろう。

身が分かれた理由は未だわからないが、血を吸えば戻るといふ事  
は見て理解している。

ならばそつちの理由は今でなくとも良い、取り戻した後にでもゆつ  
くりと聞けば良いと判断し、感情を取り戻すため追跡を始める二人。  
哀しそうな泣き顔よりも、姉に文句を言う事を楽しみとして笑みを  
見せ始めたフランドルが見つめる先、上へと伸びる階段を一瞬見て  
から何も無い天井へと視線を上げると、空いている左手を高く掲げ  
た。

瀟洒に笑んだまま左手の指先を鳴らす。

先に出て行つた、怒りと喜びしか知らない妹に追いつく為には、同  
じ道で追いかけるよりも真っ直ぐ向つたほうが早い。

言葉にせずに行動だけでそれを示すように、天井を穿ち、一直線に  
地上へと伸びる孔を掘り抜いた。

遠くに見えるは月明かり。

その明るい地上を指して手を取り飛び上がる引きこもりと黒羊。  
閉じこもる理由を作つた者が、今、外へと連れ出した。



## 第十九話 争う者、企む者、そして穿つ者

場所は変わり、屋敷の外。

夜霧に濡れた花壇の葉、その一つ一つに反射する月明かり。

美しい満月を雫に宿す花々。

静かな場で見れば風情のある景色が見られるが、現状は静寂とは間逆であった。

時折揺れて溢れる葉の雫。

この振動は花達が植わる屋敷の主が、華々しい誰かに地に伏せられる事から発せられていた。

争う場所を紅魔館の螺旋階段から外へと変えて、門番が庭木を植え花壇として詠えた庭園の地と、満月の昇る空に互いが立ち、睨み合っている二人。

月光を浴び無類の回復能力を有しながらも、少しずつ削られ消耗させられていく屋敷の主レミリア・スカーレット。

月明かりという最高の舞台にしながら何故こうも、と小さく舌打ちしては敵対する者に槍を振るい、払われては何度となく地に打ち据えられていた。

「癩癩という割に泣き事一つ言わないなんて、つまらないわよ」

吸血鬼の尋常ではない膂力を込めて右手一本で振るう血の槍。

当たれば死に直面するそれを、同じく片手だけで持つ、見た目にはただの日傘としか見えない物で軽々と受け払われる。フランドール以上の怪力、散々あしらわれ床を舐めさせてくれた妹の想い人と同じような力を持つ女。槍から漂う血の匂いよりも強く感じられる、華やかな香りを身に纏い余裕のいろを崩さない大妖怪、風見幽香。

その者と激しく争い、先ほどから屋敷の外壁に打ち付けられたり、夜霧で湿った庭に落とされ泥を舐める事になっている屋敷の主。

「貴様、本当にただの花なのか!? 常識外れにも程があるぞ!」

夜の吸血鬼。

まさしく夜の覇者といってもいい悪魔がその全力を持って振るう槍、それが軽々と受けられて払われる。長く生きる大妖怪だとはいっ

ても、争い事に向かないだろう花の妖怪という彼女が、満月の夜に踊る吸血鬼と争い、見方によっては優っているように見える謎。

野に裂く一輪の花というにはすこしばかり激しく、無理がある存在に思える風見幽香だが、この地では彼女の存在は非常識でもなんでもなかった。

「何処の常識と比べているの？　ここには外の常識なんてないわ」  
槍を弾いて、それを強く握るレミリアの体すらも弾き飛ばす可憐な花。

外の常識とは切り離された妖怪達の楽園。

そこに古くから住まう彼女、幻想郷の花達全てから慕われ愛される彼女なのだ。

四季を通して何かしら咲いている幻想郷。

常に愛され慕われているのだから、満月の夜だけ恩恵を受ける吸血鬼よりも、時間も季節も関係なく恩恵を受け続けている幽香。

言ってしまうえば彼女もアイギスや小悪魔と同種の存在、多数から想いを向けられて生き続ける歪な生き物だといえるのかもしれない。

「…舐めていたな、忘れられた者しかいないと考えていたが…泣き言など吐けば窘められるが、今は泣きつきたい気分だ」

出会ってから魔砲を放ち、身に宿る力を見せつけた風見幽香。

一地方の花妖怪がこれほどとは、と関心し悪態と小さな声で弱音を同時に吐くレミリア。

忘れられ困われなければ消える程度の者しかいない、そう考えていたようだが、見たくない、存在してほしいと思われて、敢えて忘れられるような怖い相手もいるとは考えていなかった。

藍と対峙するレミリアの親友も似た考えを持っていたが、この地にはそういった者達が掃いて捨てるほどいるという事を、数時間前に侵入したレミリア達紅魔館の住人は知らなかった。

「だが引けん！　今引いては守れる者も守れなくなる！」

飲みこぼした血ではなく、無様に落とされた地でドレスを汚すレミリア。

血のような色合いの紅い瞳に少しの弱音と守る決意を宿しながら

槍を振るい薙ぐと、同じく紅い花、紅魔館の花壇に植えられたダリアの赤に似た色合いの瞳に楽しそうな雰囲気映る。

にらみ合う両者だがその瞳の奥には別のモノが映っていた。

花の瞳にはレミリアをお嬢ちゃんと呼んで楽しく遊び蹂躪したいという、我儘と言うには酷すぎる思考が、方や血の瞳には屋敷の者達、我儘を通してくれた友人や紅魔館の正面を守り続けてくれる者、気が触れたように思えてしまう愛する妹を守ると誓う者。

想いだけであればレミリアが勝っているように感じられるが、殺し合いの場で他者の心情など気にも掛けない幽香にソレが届くわけがない。

刃を重ねながらも見る相手や考える内容が違う二人、幽香を見てはいるが幽香よりも他者を考えるレミリアの槍では、花卉を散らすことなどは出来そうになかった。

「小さな形して格好良いわね、その台詞、本当は私以外の相手に向けたかったのよね？」

槍を払った傘をレミリアに向けて掲げる幽香。

幽香も自身が見られていないと理解している、そしてレミリアが見ている相手は屋敷の者達と、先ほどスキマで送られてきた追加分の余計な奴だという事にも気がついていた。

だからこそ幽香は会話を続け本気で攻めず、レミリアが向かいたい方へと動けないよう阻害し続けるだけで遊び、抑えていた：仮にレミリアが幽香を見ていたとしても、力ある者が表情を歪める瞬間を好む花の妖怪は変わらなかつたかもしれないが。

それほどに『いい』性格をしている幽香が、格好つけたように見える小娘の嫌悪の表情が見たいと、レミリアの顔めがけて閃光を放ち轟音を響かせる。

名もない魔力の奔流だが、後に誰かが名をつけて真似るようになる魔砲が夜の王へと向かい轟いた：が、砲撃は左手に天球儀を携えるレミリアへは向かわず、天へと上り収束し消えていった。

「さっきからどうにもおかしいのよね、傘なら当たるけれどこちらは明後日の方向へ行くばかり、どんな悪戯かしら？」

槍を受けた後の反撃で振るう日傘はレミリアに当たり、何度もその身を傷つけている。

だが、幽香の魔砲はレミリアに当たらない、笑んだままにそう述べる花の大妖。

レミリアの能力を知る者ならば、左手の平で回る天球儀が幽香の運命を操っているか、レミリアの運命を操っていると気がつけるが：操っている割には中途半端にダメージをもらっている運命の操者。

振るわれる日傘よりも魔砲が危険だと察したレミリアが、それだけは直撃せぬよう常に幽香の運命に干渉している結果から当たらない、そう操っているようだ。

実際は幽香が本気で行動すれば今のレミリアでは運命を操れない、それくらいに実力も年季も違う幽香なのだが最初から今までずっと遊んでいるだけの彼女。

満月の吸血鬼ともなればさすがに遊びの範疇には収まらない、大地に根を下ろしたように悠然と構える幽香の運命の一部だけはどうか操れている：ように今は見えた。

「運が悪いただけだろう、そうなるような巡り合わせになっているのさ」「屋敷の中でもそんな事を言っていたわね、そこに何かありそうだし：別の方法で遊んであげるわ」

ギリギリの状況だと悟らせぬよう、余裕ある文言を吐くレミリア。それを受けて、日傘の先端を地にトンと付ける幽香。

幽香の立ち姿を見てレミリアの脳裏にある者が浮かぶ、華やかな花妖怪とは違って地味な、チエツク柄のシャツだけが赤い誰かの立ち姿が思い浮かんでしまう。

立ち姿も余裕な態度も似通っているし、携える獲物も、武器とは言えないものを使うの事も類似しているように感じられてしまう。

それ以外にも持ちうる、酷いといえる力も赤い瞳の色も、ついでに言えば纏う衣服の模様も誰かに少しだけ似ていて、勝てないかもしれないと考える自分が気に入らないレミリア。

それを打ち消し、抗おうと歯を噛みしめるが、すぐに別の理由で噛みしめる事になる。

花妖怪の新芽のような緑髪と、返り血で少し汚れたスカートやブラウスの襟がヒラヒラと靡く。

彼女が魔砲を放った時と同じように、力を何かに向けているとわかるように：花そのものではなく花が植わる地へと力を流し行使する幽香。

遊ぶと言いながらも少しだけ本気を出したように見える姿がレミアの視界に収まると、風見幽香の佇む庭先の一部、紅魔館の赤い外壁から赤々とした炎が垂れ流された。

「お姉様！ ヤット見つけた！ 邪魔サレタけどやつと見ツケタわ！」

「フラン、多重の封印は：意味がなかったわね、想い人に会えたようだけど、まだなにかおかしい：私の考えは間違っていたのか!？」

「よくわからないけれど妹さん？ こんばんは、途中で感じた力は貴女だったのね：お姉さんよりも壊し甲斐がありそうでいいわ」

幽香の瞳に嬉々とした感情が宿る、それとともにレミアの背に緊張が走った。

唯でさえ厄介な太刀打ち出来るかわからない大妖怪、風見幽香が雰囲気を変えて守るべき妹を見つめている。

かつての父のように狂う妹を、この花の大妖相手に守り通せるのか：想い人に会えれば落ち着くだろうと考えていたレミアだったが、その考えは前提から間違いだった事に気がついてはいない。現れた妹の怒りは、会いたいと願っていたアイギスではなく、一人で全てを決めたレミアに向けられていた事を、当人は知らなかった。

「マタ一人で！ 私ニハ何も話さないのに！ おとう様とおんなじ！話してくレナイのに！」

並みの者であれば触れるだけで失禁出来る程の殺気、幽香から放たれるソレも、誘うような声も無視してレミアに突貫していくフランドール。

幽香の放つ魔砲を受けその体を一度消されながらも、満月の恩恵を受け復元しながら炎の魔剣をレミアに向けて振るう。

姉に向けた怒りを刀身に宿し炎を振るう怒り狂う妹と、ソレを血の

槍で受ける焦り顔の姉。

空中で殺し合う姉妹を見上げる幽香だが、話しかけても無視された事にほんの少しだけイラつく素振りを見せる。

空中で剣戟を重ねる二人を追うように少し飛び、屋敷の屋根に佇む幽香。

その位置から二人に狙いを定め日傘の切っ先を向けると、またも髪やスカートを靡かせるが、幽香の佇む少し先、屋敷内の深い位置に余計な奴の魔力と気配を感じると、傘の先をそちらへ向けた、が、幽香が傘を向けた数秒後にはその部屋の屋根がガボンと穿たれる。

綺麗に空いた真円の奥には豪華な椅子と調度品が見えて、そこが主に頭を垂れる為の部屋だと見た目で語っている。

赤ばかりで趣味が悪い、幽香がそう考えていると穴の中央から、真っ黒な奴ともう一人が姿を見せた。血に濡れた黒スーツ姿で頭にアモン角を生やす、好ましい喧嘩友達兼花いじりの弟子が、今空中で争う吸血鬼と同じ姿をした者を連れて姿を現した。

「双子ちゃんだったの？ どちらも同じに感じられるけれど…アイギスが大事そうに連れているこっちが本物、ならあっちは偽物かしら？」

現れた者の一人、先ほど言葉を無視した者と同じ容姿のフランドールが視界に入ると、向けていた傘の先端を下げる幽香、今にも放たれる寸前に見えた魔力は終息していく。

穴から現れたもう一人のフランドールを見つめ、その横、手を繋ぎ現れたアイギスへと視線を流すとフフと小さく笑っていた。

「偽物ではないようです、あっちも本体のようですが私にも確証はない…ですが、すべき事は決めました。もし仕事の邪魔をするのであれば…」

フランドールと繋ぐ手を離し、レミリアと争う自身の怒りをどうにかするようにと伝え背を押すアイギス。

飛び去るフランドールの背を見て笑みを覗かせている幽香と正面から対峙すると、仕事という単語を聞いた幽香が右手に持ち纏めていた日傘を開いて見せた。

振るう獲物を振るえないようにして見せ、今この場で争うつもりはないと立ち振舞いで示すが、纏う雰囲気は争いの場に向ける殺気を放ったままの花妖怪。

何度か殺り合い互いに認め合う相手であるアイギスと、血の匂い漂う鉄火場で出会ったのだ、余計な奴と評しただけあり、このまま獲物を取られてはつまらないと感じているらしい。

仕事の邪魔となるのであれば幽香と一戦交えても已む無し、そう考えるアイギスも面と向って幽香を睨む。

「お嬢ちゃんといい貴女といい、私以外を見る者ばかりで興が冷める：手早く済ませてあげるから気晴らしに付き合いなさい」

差した傘をクルクルと回して、視線を日傘へと向ける幽香。

折角現れた、気が狂った壊し甲斐のある相手、その者よりも楽しめる相手が向こうから現れてくれたと一気に思考を書き換える。

それでも獲物を開いたままなのは、言う通り少しの気晴らしが出来れば良いからだろう。

遊びとはいえ楽しめた夜。

理由なくスキマに拉致された形でこの戦場に立った幽香だったが、遊んでも壊れない、壊れにくい新しい玩具を知りそれが育つまで待つてもいい。

そういつた考えで荒事から手を引く気持ち半分、残り半分は良いところで現れて横から奪っていいこうとする友人が気に入らないという我儘だろうか？

仕事と呼ぶソレをやり切るまで他は眼中にない状態になるアイギス、それを知るくらいには二人の仲は良いが、互いに楽しみを奪われる事を嫌う性格だというのも知っていた。

幽香もこうなると止まらない、ならば付き合ったほうが早いと無言で正面を切る黒羊。

レミアアが似ていると感じた雰囲気を持つ二人、羊と花がじゃれ合いを始めた頃。

戦いの場を屋敷の屋根より少し上、紅魔館で一番高い時計塔を挟むように争う吸血鬼達の動きにも激しさが見えてきた。

炎の魔剣を右手で振るい、左手には赤い球体、天球儀のような物の中心に破壊の瞳が宿って見える、立体的な方陣を映し込んで度々握り込もうとする悪魔の妹。

ソレを阻止するように、右手に構えた槍を投擲し、左の肩毎撃ち貫く姉。

戦法も何も無い、妹の姿をした『憤怒』から考えなく振るわれるだけの暴力に向けて槍を放ち、夜に輝く宝石羽毎撃ち貫いては顔を顰めるレミリアであった。

「フラン！ 部屋に戻りなさい！ このままでは…」

「ウルさああアアイ！ いつモソうだ！ 勝手ニ決メて、ナンニも話しテクレない！」

紅魔館が転移してきて数時間。

最初に騒ぎを見せた人里の争いから結構な時間が立ち、高い山の望める東の景色がうつすらと明るくなり始めてきている。

日の出が近いと誰が見てもわかる時間帯。

短時間であれば浴びても問題はない姉妹だが、気が触れた妹が素直に影に身を潜めるとは考えられない姉。言う事を聞かないのであれば力尽くで影に落とす強攻策を続けているが、未だ続く満月の恩恵から落としきるには至らなかった。

「言う事を聞きなさい！ 私は貴女の為を思つて…」

「そうやって勝手に決めるから怒つてるって、なんで気がつかないの！ お姉様のおバカ！ わからず屋！」

レミリアの見つめるフランは言葉を発していない。

届いた声はレミリアの後方から、地上へと連れ出され行つて来いと背を押された、本体と呼べる理知的さが伺える顔をしたフランドルが姉に声を届けた。

声に振り向くレミリアに向けて吠える狂える妹、携える右手にまで炎が広がることを気にせず、自身の身すら焦がしながら体ごと魔剣を振るう。

が、魔剣が切り結んだのは姉ではなく、姉を庇うように同じ魔剣で受けた、涙の乾いたフランドルであった。



「私が私ノ邪魔をスルなアアアああ〇?◇※」

後半は聞き取れない程の叫び。

言葉にならない程の怒りとなつて発せられた声に少し怯むレミリアと、同じ容姿のフランドール。狂える自分を眼前に見て冷静でいられる者などそうはいない、それを示すようにギリギリとタガの外れた『憤怒』に押され、肩口に刃を埋めていく本体。

「お前の方が邪魔！ 私の気持ちを勝手に話さないで！ 早く返して！」

押される体を奮い立たせるように言い返す、泣き跡の見えるフランドール。

けれど、全く同じ力を持つ物同士をつばぜり合いはリミッターのな分だけ気が触れている者が有利。全力を持って押し返すが、ズブズブと体に刺さる刃が本体の肢体を焼いていく。

にらみ合い、互いに傷つけあう妹達を見て動けずにいる姉、背から声をかけてきた妹が愛する妹だと考えているが、その妹も私の気持ちを勝手に伝えるなど叫んだ。

見た目も文言も同じに感じられる妹達、どちらかに手を差し出せばどちらかを失うかもしれない…また愛する家族が眼前で…それに気が付いた時、考えるよりもすぐに動いた。

「オオオオオオ！」

レミリアが吠え右手を振りかぶる、全身をバネにしながら引かれた腕には瞬時に槍が形成された。

母を壊して世に生まれ、否定する父をも壊した愛する妹。

持つて生まれた力に振り舞わされるように家族を破壊していく妹が、今、レミリアの前で妹自身を壊そうとしている。

それをただ見ているだけ、以前の父の時のように見ているだけしか出来ない自分など許せない。

失うかも、と弱気を見せた自分を恥じ、それを吹き飛ばすように吠えて、妹が妹に向ける刃に向けて渾身の力を込めて投擲した。

赤い軌跡を夜空に残し翔ぶスピア・ザ・グングニル。

絶対に狙いを外さない神鎗の名を冠する槍が、妹の体を断とうとす

る魔剣を貫き、握る両手ごと打ち砕いた。

「お姉様マでなンデ邪魔をスルのオオオおお※◇※◇※◇!!!」

断たれかけた理性を見せる妹が身を焼きながら屋敷の屋根へと落ち、そのまま体を滑らせて出てきた屋根の穴へと消えていく。

それを追う為に翼を広げたレミリアだったが、魔剣を砕かれた狂気の妹がこちらを見ると言わんばかりにナニカを吠えた。耳に痛い、甲高い雄叫びに近い声で吠える気狂いの吸血鬼。

もう少して邪魔な自分を断ち切れたのに、邪魔者を討てて喜べたのにとレミリアにしらしめるように声とは呼べない音を喉から絞り出した。ただ怒っているだけであればこうはならないだろうが、今の彼女は喜びという感情も取り込んでいる。

邪魔な自分が消せる喜び、それを奪われた事で怒りという油に火が注がれ本格的に気が触れたように感じられるフランドール。

ここまで怒るフランを見たことがないレミリア。

我慢を重ね忘れようとまでした妹の怒りを知り、一瞬怯みたじろぐと、ゲラゲラと嗤いながら怒りを表すフランが姉に砕かれた歪な手の平に歪んだ瞳を浮かばせて、ギョツと握り潰す。

指は欠け、手の甲からは折れた白い骨がむき出しとなっているフランの手。欠損した手の平ではレミリア全体を破壊する力は発揮出来ないが、それでも彼女の翼と左鎖骨から臍までを破壊し弾き飛ばした。

「グウツッ！」

怯み、細めていた瞳を苦痛に歪ませて落下していくレミリア。

少し前までは体内を流れていた血液と共に落ちながらも、気概は衰えず、フランに破壊された左の翼や鎖骨から臍があつた辺りを霧へと変化させ復元を試みる…が、翼も体も思うように戻らない。

月明かりの中であれば瞬時に再生する体、それが戻らないという事は…

「フアアアアン!!」

妹の名を叫び、残る右腕を伸ばすレミリア。

自由落下し、背から屋敷の屋根に落ちてを突き抜けようとする瞬間

まで妹に向けて腕を伸ばし指先までも伸ばすが、その手は届かず遠く  
なっていく。

落下していくレミリアを照らし出す、登り始めた朝日。

一瞬全身を日光に晒したレミリアだったが少し焦げただけで済む、  
屋根を抜き埃を立てて帰宅出来た為、結果的には屋根の下、日陰部分  
に身を隠す事が出来たようだ。

だが、レミリアに安堵の色は見えない。

日が昇ってしまった吸血鬼の時間は終わってしまった、だというのに  
妹は未だ屋外にいる。

あの子がどうなったのか？

耐えて何処かへ身を隠したのか、それとも…と、思考を巡らせ始め  
ると落ちた部屋の奥に動く影がいる事に気が付く。日光に焼かれた  
瞳を修復し見つめる姉、直したばかりの美しい瞳には愛してやまない  
妹が映った。

「フラン!？」

万全であれば多少は耐えられる日光だが傷ついた今の体では長く  
持たない、それは妹も同じ。

フラつきながら自身が開けた屋根の穴からフランの身を逃し、強く  
抱きしめるレミリア。

手を伸ばしても届かなかった妹その手にだけた事で緊張が緩んだ  
のか、訪れた朝と共に一気に体にも疲労感が訪れる、幽香と争い妹と  
争い、休む事なく消耗し続けたせいで体が休息を求めていると感じる  
吸血鬼。

だが今意識を落とすわけには、もう一人の妹をどうにかするまでま  
だ眠れないと歯を剥いて、自身の腕に強く噛み付き睡魔を噛み千切る  
素振りを見せると、屋敷の天井が崩壊した。

「な、なに!？」

天井が崩壊し部屋の半分に日光が差し込む、その光から逃れる為部  
屋の奥、主の座る椅子の辺りにまで後退するレミリア。

主以外いない、誰もいないはずの謁見の間で何事が起きたのかと眩  
くと、声に振り向くようになるカツンという足音。豪快な崩壊音と共

に屋根を突き抜けて来た誰かの足音…崩れた天井が立てた粉塵の中から歩み出てくる、髪も服も血塗れでボロボロの悪魔がレミリアの瞳に映る。

真つ赤に染まる右手には先ほどまで叫び吠えていた妹も見える。

いつかのように意識を穿たれ、歯を剥いて目を見開いていたのが嘘のような妹が、両方の翼を握られている姿がアイギスの手中に見えた。

「アイギス!? フラン!」

「ご無沙汰しております、お元気そうでなにより。積もる話もござい  
ますが…まずはこちらの妹君を『どうにか』せねばなりません」

数百年ぶりに長女から呼ばれたアイギスの名前。

変わりない声色などに心地よさを感じるがそれは表に出さず、汚れた身形で瀟洒に笑みフレンドール両手で抱いて床に寝かせる。

抱きしめるフランと寝かされたフランを見比べていると、腕に抱いたフランが目を覚ました。

「気が付いたの?」

「お姉様…? あっちの私は…」

寝起きの妹に教えるように寝かされたフランを見るレミリア。

姉の視線を追う妹が横たわる、分かたれた自身の感情に気がつくと同時にアイギスにも気がつく。

「フレンドール御嬢様、今のうちにお早く」

黒髪は血で赤く、象徴である角の一本が折れた姿のアイギスが促す。

互いに気晴らしのじやれ合いだと認識しているが、パツと見では結構な死闘を繰り広げた後にしか見えない。

体の修復も間に合わないくらいに怪我姿など初めて見る二人が、何があつたのかと見つめてくるが、それに対しては無言を貫く黒羊。

幽香とやり合うとよくある事で気にする事ではないらしい。

答えを得られずモヤモヤとする姉と、話してくれないならいいと気にしなくなった妹。

姉の手を離れ、横たわる自分、鎮められた怒りの感情に歯を突き立

てて首筋から吸収していく。

残さず全てを回収したフランが立ち上がり、レミリアに向って何かを言おうと振り向くとゆらりと倒れ意識を失った。

穿たれた意識まで吸収したのだから致し方ない。

「どうにかなり一安心、ですがまだ終わりではないのです…さて、続いては私を『どうにか』して頂きませんか」

「え？」

「お覚悟を」

傷だらけの体でスコップを形成し床に突き立てる御庭番。

満身創痍に見えるレミリアに対して、まだ終わらないと無茶を告げる。

殺すなどというオーダーからそこまで酷い事にはならない、が、それは伝えずに敢えて隠して話すアイギス。わざわざ会いに来てくれたらしいレミリアやフランドールと再開を喜ぶ、個人の心情としてはそうしても良いが、今の立場からすればそれは出来ない。あくまでも敵としてこの場に現れ送られている、そういう依頼も受けているし問に対しては本心からそう答えている。

全て済んだ後であれば抱擁し喜んで良いのだが…終わった後でこの姉妹が残っている確証はない。どう対応すべきか思考を巡らせるために、敢えての時間稼ぎとしてレミリアを煽っているが…

「私は立場を見せました、であれば侵略者らしく抗ってみせるのが宜しいかと。動かぬのなら屋敷の者全てがこのように…」

アイギスが言い切る前にドサリと前のめりに崩れるレミリア。

失いたくない妹の為ギリギリで繋いでいた意識が途切れたように見える、一度途切れた緊張感の先にいたのだから仕方がないだろう。

前のめりに伏せる姉と、同じく膝から落ちてうつ伏せで倒れる妹。

そんな所まで似なくともよいのに、と瀟洒な笑みから穏やかな表情へと顔色を変えたアイギス。

両手で二人を抱きかかえ、コツコツと数歩進むと、目の前にスキマが開かれた。

侵入者を抱いたままスキマを見つめっていると、開かれた空間からふ

わりと現れた者。

乱れた結界の修復を終えた八雲紫が屋敷へと踏み入った。

どう対応すべきか悩んだ相手、雇い主と正面で見つめ合う雇われ人。

「ご苦労様でした、その二人が首謀者ね…渡して頂けるかしら？」

いつもの様に扇で顔を隠す姿ではなく、淑やかな表情を浮かばせて  
苦労紫。

以前に疑い問いかけた質問、命を下せば殺し会えるのかという問い  
掛けに答えた姿そのままが見られて安心し、同じく信用も得られたよ  
うだ。

労いの言葉と同時に開かれた二つのスキマ、姉妹それぞれをそこに  
放り込めと異空間が無言で示されるが、労いもスキマへの誘導もどち  
らも断るように紫を見るだけのアイギス。

「労いは不必要、命の通りの仕事を成したまでです…そして後半  
の部分は聞き入れられませんね、引き渡す事は致しません」

姉妹を抱いたまま両手の指を鳴らしスキマを穿つアイギス。

穏やかな表情のまま雇い主に齒向かうような姿勢を見せるが、齒向  
かわれた側も表情は変わらない。

まるでこうなる事がわかっていた、そういうように顔色を変えない  
紫…このまま争う事になりそうな空気が流れるが、そうなる前に紫が  
話し始めた。

「渡さない理由があるのかしら？…それほどにその者達が大事？」

「大事かそうでないか、問われれば大事だとお答えします…ですが、渡  
さない理由はそれではございません」

「他に何か？」

殺伐とした空気の中穏やかなに話す者達がいる気味の悪い空間。

スキマの中のような気色悪い空気が場を包む中、渡さない理由を述  
べ始めるアイギス。

「この者達ともあるお約束をしております、帰国しましたら手厚く  
歓迎してもらおうというお約束を取り交わしております」

「では、それが済めば身柄を渡してくれる、そういうお話かしら？」

「左様です『帰国して』歓迎された後であればお渡し致しましょう、この地から安々と出られるのか、それはわかりかねますが」

ほんの少しだけ紫の表情が変わる。

淑やかさよりも暗い、怪しさに近い妖怪らしい色が紫の瞳に宿るのがわかる。

紫がその気になれば外へ放り出すなど簡単な事だが、そうしてしまえばこの屋敷の者達は消えていくだろう…自身が敷いた結界に導かれ訪れた異国の妖かし達、消えいく運命を変えようと訪れた者が再度消えいくだけになる。

それでも構わない、紫からすれば気に留めるような相手ではない：なかったのだが、運命を操り結界を乱す手腕と認識を阻害する魔法を行使し力を示した事で気が変わったようだ。

紫の力にほんの少しでも抗える者達をただ消すのは惜しい、今後の為に考えている事もあり、出来ればその為に使いたい。

そう考えて渡せと述べた紫だった。

「命じた通り殺しはしない、そう言っても渡してはもらえないと？」

アイギスの懸念を話す箱庭の主。

この場の雰囲気から考えられる事は当然そこだ、幻想郷を荒らした侵略者をどうするのか？

難しく考えなくとも分かる事だがそうはしないと話す紫。

「申し訳ありませんが渡せませぬ、もう一つの理由が邪魔をして渡すわけにはいかぬのです…紫様、私への報酬は覚えておいででしょうか？」

依頼を受けた際の報酬代わりに二人が交わした約束。

それが邪魔をして姉妹の身柄を引き渡せないと、追加の拒否理由を吐く悪魔。

妖怪の賢者と交わした口約束、紫からすれば境界を弄ればいくらでも無かった事に出来ると考え交わした契約だったが、アイギスの能力を知ってからそれは出来ないかと判断されていた。

弄った境界を穿たれて、弄んだ事自体をなかった事にされれば…そう考え滅多な事は出来ない…今の紫は結論づけていた。

「裏切らない…そう、そうでしたわね。私は裏切れないのでした」  
「ええ、裏切つて頂いても構わないのですがその際は…何度殺されようとお命奪わせて頂きます、そうならぬよう『期待』しておりますよ」

それなりに力も知恵もある吸血鬼を利用しようと考えた狡い妖怪、八雲紫。

その頭脳すら武器にする妖怪の賢者に対して、何に向けての期待かは話さず裏切った時の対応だけを口角を上げて話す狡い悪魔、アイギスIIシーカー。

最初から殺すなど命じられていた事で、今後この姉妹を何かに使う、そうして使い終え用済みになれば切り捨てるかもしれない。そういった懸念を浮かべていたアイギスが、含む言い回しをした事でそうなる可能性は低くなった。

後はその可能性を穿ち0と成すだけ、そう考える吸血鬼の盾だった者。

「依頼は完遂致しました、労い代わりに紫様のお立場も見せて頂きましたと考えております。その器の大きさ、私に魅せつけて頂けると今後も敬い慕う事が出来ると考えております」

抱く姉妹二人を見てから紫を見つめる黒羊。

紅魔館の者達を使って紫が何をするのか、そんな事は分からないし知ろうともしないが興味は湧いたようだ。

我儘で癖の強い姉妹とその友人、それに振り舞わされる門番をどう使い、何を仕掛けるのか…今後が少しだけ楽しみになったアイギスが、自分にも力を魅せつけて使役してみせろと煽る。

煽り言葉に近い文言を吐かれ、扇を取り出して笑む紫。

瓦礫が目立つようになった赤い屋敷で佇む紫色と黒。

赤を取り込める色と塗りつぶすだけの色をした者二人が見つめ合う中、赤い姉妹は静かに寝息を立てていた。

寝息を聞いて姉妹の顔見る二人、無垢な寝顔を見て二人とも穏やかな笑みを取り戻したが、浮かぶ笑みとは違って心境は別のモノ。

自身の思惑の為に笑む紫と、それに期待し同時に契約破棄も楽しみ



に待つアイギス。  
互いに思惑はあれど、今は互いに笑むだけで済ませた。

## 第二十話 告げる者、聞く者、そして笑む者

霧の湖に突如現れた屋敷。

そこを中心として騒がしくなった昨晚。

屋敷の地下から屋根までを使い皆が暴れた酷い夜。

そんな夜から数時間が過ぎた今、喧騒が去ったはずの時間帯なのだが、静寂を取り戻してもいいはずの屋敷では静寂を感じられなかった。

騒がしい理由は屋敷の中で忙しく働く自然の権化達のせい。

送り込まれた理由や、着込んでいるメイド服姿から便宜上働くと伝えたが、一度でも働いた事がある者から見ればとても働いているとは思えない状態に見えるだろう。

モップを持ち水分を含ませて床を撫でつけるだけの妖精や、びしよびしよなままの雑巾で窓の真ん中辺りを濡らすだけのメイドはまだマシだ。彼女達は埃を濡らして飛ばさないようにしている、そう考えればまだ掃除をしていると考えられなくもない。

酷いのは調度品に手を伸ばし場合によっては投げて遊び始める者達だ、彼女達は掃除をしているとは考えられず唯煩いだけにしか見えない。

穿ったものの見方をすれば不要品を処分しているとも取れなくはないが…

「煩いですね」

ガシャンパリンという楽しい音が響く屋敷、紅魔館の主をベッドに寝かしつけた者がポツリと呟く。

時間は正午を少し過ぎた頃。

吸血鬼という種族柄昼間は行動出来ない幼子、レミリア・スカレットを寝かせて、もう一人の吸血鬼は片手で抱き上げたままの女が音のする謁見室の方向を見る。

「これでも目覚めないとは…お疲れ様でございました、御嬢様方」

薄く赤みがかかった色合いのベッド。

レミリアが着こむドレスの色に似た白いベッドの端に腰掛け、眠り

姫となった姉と抱いている妹を見比べてまた独り言を呟いているアイギス。

眠り姫を横たえた際にかけてた朱色の上掛けはベッドの端の方で丸くなっている、寝相が悪く感じられるが疲労困憊の割には元気だと、それを直し笑んでいるだけの黒羊。

枕もベッドから離れ、先ほどアイギスが睨んでいた方向の壁に当たり落ちたが、これは眠り姫ではなくもう一人が投げた物だ。

枕を投げた者は腕の中で半覚醒してはいるが、うつらうつらと船を漕ぐ妹の方。

「煩いよお、寝られないよお……」

ブツブツと文句を言いながら眠たげな瞳を擦るフランドール・スカーレット。

姉よりも先に寝た、正確には意識を断たれたからか、姉よりはほんの少し長く睡眠時間が取れていて中途半端に目覚めている。

けれど、吸血鬼からすれば真夜中過ぎともいえる時間帯の今では、睡眠欲に抗う事が出来ず……騒ぎに対して愚痴を吐きながら、顔をアイギスの肩へと押し付け静かになった。

「自室にお連れするよりも、一緒に眠って頂いた方が……」

言いながらフランドールをベッドへ降ろそうとするが、ネクタイとスーツの襟を強く握られ離せない。

フランドールからすれば長く会いたいと想っていた相手、そう呼びはしないが母や姉に近い感覚を覚えているアイギスと会えたのはつい昨晚の事。

その出会いから先ほどまで我慢し続け、自分から飛びつく事はしなかったフランドールが、眠る中我慢を忘れ想い人を逃さないような態度を示していた。

タイを握りしめる幼子の手を見て苦笑し、致し方無いと呟いて抱き上げたまま主の部屋を出る黒羊……向かう先は妹に充てがわれた部屋のある地下、そこへと続く大図書館。

姉妹を寝かせる為に一度分かれた八雲紫と、書庫内で会う手筈となっていた。

向かう途中モップ掛けや窓ふきに懸命に勤しむ妖精メイドを見てしまい、ため息をついていたが、紫が修繕の為に送り込んだのだから癖は強くて当然と、何も言わず息だけ吐いて廊下を歩んでいく。歩きながら時折壁沿いに蟹歩きをしたり、少し飛んで天井すれすれを移動するアイギス。

「我ながらやり過ぎたのかもしれませんが、相手が幽香だった割には形があるだけマシでしょうか」

先程から独り言を吐く悪魔な羊。

壁添いや天井近くを移動したのは抱く妹に陽の光が当たらないようにと、どうにか残った日陰部分を選んで移動していたからである。

屋根の修繕は一番最初に行われ、次は外壁という順番で補修工事が始まった為、雨漏りや上からの日光はどうか遮られるようになったが：外壁の修繕は中々進まないでいた。

外壁の被害状況が一番酷いことから致し方無いとは思えるのだが、日が昇り屋敷の全容がわかりやすくなった今、改めて見直すとたった二人でじゃれ合った割には酷いと、残る部分が少ない壁やガラスのない窓枠を眺め考える屋敷の破壊者であった。

喧嘩を売ってきた幽香が悪い、と買った側のアイギスが自己完結しながら足を動かす。

屋敷がこうなった原因の一人が真面目に考え込んでいた為か、気が付かぬ内に地下へと降りる階段前へと着いたのだが、此処から先も荒れていたなと一人苦笑する荒れた原因。

「ふむ、藍様も楽しんだご様子、叱られていた理由はこれらが原因でしょうか？」

見慣れた図書館の扉が焼け落ちて、綺麗な穴が空いている。

その跡を指でなぞっていく中で一つ思い出す。

そういえばあの晩、あれから魔女はどうなったのだろうか？

淫夢へと誘う小悪魔を尾で墮とし、甘美な悲鳴を上げさせていた傾国の九尾八雲藍。

はしたないと紫に窘められて、小悪魔を激しく突き立てたり揉みしだいていた九尾を下げてシユンとする姿は、中々に滑稽で面白く見え

た。

話を戻して、藍に場を預けてその後は地下から地上に出てしまったため、その後がわからないアイギス。墮とされた魔女というのもそれらしく見えるし淫靡でいいかもしれない、とクスリと笑みつつ扉に空いた穴を潜っていく。

大きく切り取られて空いた穴を潜ると入り口でカツカツという足音が止める。

黒く濁った赤目に写り込むのは、本来なら理路整然と並んでいた本棚が、誰かに強く押されて大きくずれ込み、酷い場合は横倒しとなっている景色。

床面も茶色の水で濡れた形跡があり、所々に埃が纏まり溜まって濡れていた。

「妹様が静かに…：どうにかなったのですね」

アイギスの見つめる視界の外、頭上から安堵しきった声が聞こえそちらを見上げる。

見上げる先にはフワフワとロープを揺らして降りてくる者がいた、顔には疲労感が見える魔女、首周りに何かの跡が残るレミアアの親友パチュリー・ノーレッジ。

スツとアイギスの横に降り立つと、抱かれているフランドールの顔を見上げてからアイギスの顔に視線を動かした。

「紫様との会合が済みましたら書庫内の整理をお手伝い致しますので、まずは終わらせてしましましょう」

見上げてくるパチュリーに笑みを見せ、後の整理を約束する悪魔。敵対者として訪れたのだから手伝いなど、と思われるがアイギス自身が派手にやり過ぎたと感じている上に、魔女からも書庫に対する叱責がなかった為手伝う気になったようだ。

感情のない、糧の得られない死体という獲物から、恐怖や畏怖を得られる魔女へと獲物が変わった事で珍しくやる気を見せ、ここではつちやけたアイギス。

出てきた瞬間から疑いの理由とされた小悪魔を地形毎攻め落とし、それを見たパチュリーから発した畏怖や恐怖の念を腹に収めた今は

ほぼ満腹に近い：幽香と楽しくじゃれ合った後、寝落ちする寸前のレミアからもデザート代わりに恐怖が届けられた事で、今の彼女の肌はツヤツヤで機嫌がいい。

「屋敷の主であるレミイではなく、私が席についてよろしいんでしょうか？」

「宜しいですよ、貴女様も書庫の主なのでですから：屋敷の主とは疲労が癒えた頃に再度お話されるようですので」

不安げな顔でいるパチュリーの肩に空いた手を置くアイギス。

その表情には笑みが張り付いている。

紫と会話をした際にある種の保険といえる手は打った、そこから鑑みれば此度の侵略を咎められる可能性は低いだろう。そう理解しているアイギスが肩に手を置いた事で、パチュリーの表情に若干の明るさが灯る。考えが伝わるなんて便利な事はないが、畏敬の念を覚える者に主と呼ばれ、肩を支えられた事で多少の自信を取り戻したようだ。

笑みも自信を取り戻す理由にあるのかもしれないが、この笑みが会合の中身に向けたモノ、紫が屋敷の者に何を話すのか、そちらに期待しての笑みだとは気が付かれなかった。

肩に触れた手を引いて先に歩き出すアイギス。

所々に水溜りが残る床からコツコツ、偶にパシヤリという音を立てながら書庫の中心へと歩む。背後を追うように少し浮いて、ほんの少し咳き込む素振りを見せては隠すパチュリーを連れて大きな机に向かうと、机を挟む形でスキマが開く。

見ていたかのような丁度のタイミングで現れる雇い主とその式、二人に仰々しく頭を垂れてから地下へと進む階段につま先を向けると、雇い主から同席しろとの命が下された。

「御嬢様を寝かせた後では遅いのでしょうか？」

「剥がせない妹をどう寝かしつけるのかしら？　一緒に添い寝してくるから、起きてくるまで待てとでも？」

今の主八雲紫と、書庫の主パチュリー。

二人の会話には然程興味が無いアイギス、話し合い決めた後の事に

しか興味が惹かれない為、どちらかといえば幼子の寝顔を見ていたほうが面白い。そういった考えの元席に着かず立ち去ろうとしたが、少し不安げなパチュリーの表情と、魅了するように笑む紫の表情を見た事で、命ぜられた通り席に着き静かに二人を見る姿勢を取った。

「幻想郷へようこそ、歓迎致します。紅い屋敷の住人さん、私は八雲紫と申します、この地の管理人を務める内の一人ですわ」

「貴女の事は調べたから知っている、それ以上は必要ないわ：パチュリー・ノーレッジ、この大図書館を屋敷の主から任されている者よ」

「そう、では藍ともう一人も紹介する必要はありませんわね」

「ええ、見知っているし体感したから必要ないわ：盛大な歓迎感謝、八雲紫」

扇で表情を隠す紫から始まった会話、その内のパチュリーの一言で藍の九尾がピクリと揺れる。敬愛する主を呼び捨てにした侵略者である魔女、式である藍にすら届かない、この場での弱者と呼べるものが主を呼び捨てにした事が気になったらしい：が、何も言わず姿勢も変えない藍。例えば気に入らなくとも会合の席に着いた主の邪魔はしない、そういった姿勢を崩さずに無言で佇む事の出来る良い従者であった。

「では単刀直入に申し上げます、此度の侵略、本当に成せると考えて訪れたのでしょうか？」

扇で一二度仰ぎ、一瞬だけ表情を見せた妖怪の賢者。

その口元は歪みも振るえもなく、ただただ表情のないように感じられる唇が見えただけ。侵略者に対して何の感情も抱かない、といった態度ではなく『普段よりも少しだけ騒がしい夜があっただけで、侵略者などいたかしら？』

一時は結界を乱され気も乱されたが、今の紫には冷静さと妖艶さしか見られない。

そんな冷酷な顔の紫の口調を借りれば、そういった事を言いそうな口元が見られた。

「イエス・ノー、はつきり言えというなら私はノーと考えるわ」

「移動する手段を全て任された貴女がノーと言う、どういった意味合

いで仰るのでしよう？」

質問された事にはつきりとノーと答えたパチュリー。

アイギスがいなくなつた後、藍から質問攻めにされその全てが紫に伝わっていた。

領き少しの呼吸が出来るだけのスキマを残し、尾で締めあげられて転移の方法や此度の来訪理由など色々と話したようだ、首の跡は締めあげられたその名残だろう。

ローブを脱げば四肢にも跡がありそうではあるが、こうして冷静に会話出来て藍を見ても同様しないのだから、小悪魔のようにはされなかつたようだ。

そんな冷静さを見せる魔女が問に答える。

「そもそも侵略はレミイ、主が考えたついでの思いつきだったのよ：本命はそつち、アイギス様と妹様を会わせるに事あつたの」

既に伝えた来訪理由を再度話す魔女。

再確認というよりも直接聞かせたい者がいると考えた紫が、それを話しやすいように促した。パチュリーが文言を述べ訪れる理由となつた二人を見る、紫も僅かに顔を動かして侵略される原因となつた者を見つめている。

が、両者に見られても表情も態度も変えない本命で原因となつたアイギス、何か言う事はないかという空気の中、素知らぬ顔で眠るフランを見つめ淑やかに笑んでいるだけ。

同席しろという命を守り足を組んで座っているが、何か話せとは命じられていない為余計な事は口にしない。

「幼稚な思いつきで襲われ、数を減らした者達がおりますが：そちらについてはどのように考えているのかしら？」

少しは動揺するか？

そんな淡い期待は消えた紫が、別の方向から魔女とアイギスを揺らす為の話を述べる。

侵略が主題ではなかつたという割に、数を揃え人間の里を襲い被害者を出した事実は変わらない、それに対してはどうするのか？

ついでと思いつきで襲われ、数を減らしてしまった大事な『食料』を



どうしてくれるのか、そんな事を聞き出す腹積もりのようだ。

「それについては心から謝罪するわ、アレはレミイの考えではあったけれど…アレらは本来攻める手段ではなく屋敷を守る為の駒だったのよ、攻め手となってしまった原因はコイツ」

スツと伸ばされる魔女の右腕。

何かを掴むような中途半端に開かれた右手に一冊の本が収まる。

書の表紙には六芒星が描かれていて、これが原因だと言ってはペー  
ジを開き、誰かを呼び寄せた。

「お呼びでしょうか、パチュリーさ…またアイギスがいるの…つて藍様もいらっしやるの!? なんてこうなってるのよ!」

「原因はコイツ、到着時の揺れで開いた正面扉からそのまま飛び出していったあの死体達、その回収を任せただけれど…あのまま打つて出るとは思いもしなかったわ」

「使役する者を操れないとでもいうのかしら？ それほどの者には見えないのだけれど？」

大図書館の何処かで何かをしていたような姿、山積みとなった十数冊の本を両手で抱えた小悪魔が、パチュリーの側に呼び出されギャアギャアと喚き始めた。

そんな煩く騒ぐ小悪魔を親指で指して、コイツが勝手にやってしまったと述べるパチュリーだが、その言い分は紫には通らない。

使役し従者とする者が主の命以外で動くはずがない、事実紫の式である藍は紫の命であれば何事でも行うし、命があれば本人が成したくともしない…小悪魔を堕とした際には式が剥がれかけ昔の姿を見せていただけで、あれを紫が命じたわけではないとここで少し訂正しておく。

「操りきれない、というのが正しい見解でしょうか」

ここまで無言を貫いてきたアイギスが不意に話す。

藍に睨まれ振るえて、同時に何かに期待し話せないような状態の小悪魔に代わり、種族としての在り方を述べるもう一人の悪魔。

「八雲様方のように縦の主従ではなく、あくまでも契約の上で成る主従関係なのですよ…私が紫様と交わした契約と同じく、この者もノー

レヅジ様と対等な契約を結び、そう願われて仕えているのです」

「このような、いくなれば小者のような力しか表せない者がアイギスと同じだと?」

酷く冷たい目で小悪魔を見る紫。

身形こそアイギスに似ているが感じられる力のはか細いモノで、とても何かを成せるようには感じられない。こんな小者が紫の認識を阻害する魔法を操る主、パチュリーの思惑の外で動いたところで何も出来はしない、そう確信する紫だったが、アイギスからの物言いはもう少し続くようだ。

「私と同じ古い悪魔ですが、今は真名に縛られ宿す力を発揮できない状態：大きな地下水を有していますが、汲み上げられるのは小さなポンプ一つ、そのような状態だと思つて頂けると伝わりやすいでしょうか?」

日ノ本の妖怪とは違う西洋の悪魔の在り方。

その形から現状こうなっているのだと、誰よりも古い付き合いがある悪魔が小悪魔の説明を話す。それを受けて少し考え、何かに納得するように瞳を瞑り長い睫毛をゆっくりと上下させた紫。

「力を発揮できないのであれば制御する事も可能、そう考えられるのだけれど」

アイギスの言う通りであれば操れない理由にはなり得る。

力を有しながら発揮できない、ある種の封が課された状態にあるから力は感じられないが、本来であれば魔女を超える力を宿す古い悪魔、だからこそ操り切れないと話すアイギス。

だが、紫は納得はしきれず追加の疑問を問掛けた。

「縛るのは力のみで性格までは縛れませぬ、こいつの性格は以前に里で述べた通り：里の騒ぎはこいつの思惑だと私からも断言出来ます、罰せられるなら如何様にも：殺しても、操られても死にはしません」

パチュリーの言う事を聞かないのは、彼女のイタズラ好きで後先を考えない性格からであり、その部分は力ではなく在り方なのだから縛れない。

追加の情報を話しながら、好きにしていると、境界を操ったところで滅びはしないと自信を持って話すアイギス。

本に封じられ、その本が世界に散らばりあるだけ存在する小悪魔と、一度首を落とされ生を終えた羊から成り果てたアイギス。

どちらも生死の内にはいない者達で、操る生死の境目などがない者達：本との繋がりが信仰という繋がりを操り断てば今この場の二人は消せるが、別の場所で同じく開かれ崇拜されれば再度現れるだろう。人が生きて考える限り、生きもせず死にもしない悪魔二人が互いに目を合わせながら頷いていた。

「アイギスの話、全面的に信用は致しません。納得は出来ませぬ：その悪魔は以後屋敷から出さない、それを条件に里での事は目を瞑りましょう」

目を瞑るといふよりも瞑らざるを得ない、そのような状況だが敢えて瞑ると述べる管理人。

滅ぼせないのでは討つ意味がない、討つ度にこの魔女が傷つき使い物にならなくなる事も藍から聞き知っていた紫、後々利用するため、里での犠牲は見なかつた事にすると決めた。

放っておけばそれなりに増える人間よりも、利用価値のある魔女に恩を押し付けたほうが良い、企む者ならだれでも思いつく事だろう。

「小悪魔はそれでいいとして、私やレミイ達の処罰は？」

「二人ずつお話しします、まず守衛さんですが、友人の従者が気に入ってしまったしまして：私から何かをする気はなくなりました、仕える者です。し彼女に責任はない為不問と致しましょう」

まず美鈴の無事が確約される。

話を聞いているだけのアイギスが小さく笑み、あの老紳士に気に入られるほど研鑽し武に磨きをかけたのかと、少しだけ感心していた。「次はそちらのお嬢さん、気が触れて暴れておりましたが私の従者が抑えたようですし、アイギスに会いたいと考えただけでこの地を狙ったわけではない、ですので特にありません」

アイギスの肩で静かに眠るフランも特に処罰はない、そう言い切る紫。

むしろ面白い相手と見ているようだ、忘れられた地へと訪れて忘れていた記憶を取り戻した妹様。紫が言うには単純に我慢を続けて溜まった鬱憤が爆発し、幻想郷で溢れる魔素を使い、溜り爆ぜた感情が形取られただけの事だそうだ。

この地を囲う二つの結界には存在を歪めてしまうような効果はない。

管理人がそう断言した為、アイギスも納得しそれを信じているが：「この地に慣れるまでは外に出さないほうが無難、と忠告もしておきましょう」

物言いを静かに聞いているパチュリーともう一人、アイギスに向けて忠告するスキマ妖怪。

この地の魔素に触れ気が触れたフラン、魔の者であるフランも慣れば心地よい物と感じるはずだが、慣れない新天地の空気に慣れるまで外に出さないほうが良いと管理人からの言葉を受けて二人とも納得していた。

一度は静まった狂気ではあるが静まっただけで消えたわけではない、此度のように書庫が滅茶苦茶なるのは簡便だと感じるパチュリーも、自身の手で傷つけ場合によっては消さなければならぬ：そうなるのは嫌だと考えるアイギスも、互いに頷いていた。

「続いて主犯と手段のお二人ですが、貴女方には条件を付けたいと考えておりますわ」

不問とされた従者の二人、敵対しながらも忠告までされた妹と、屋敷の者達にとっては悪くない話が続いたがここで風向きが少し変わる。

纏う雰囲気を幻想郷の管理人からこの地で名高い大妖怪八雲紫へと変えて、パチュリーに禍々しい気を放つ紫。気を変えて述べた言葉は条件、荒事を届けたパチュリーと企んだレミリアには条件を課すと言葉を吐いた。

「条件？ 処断されるといいうわけではない、と？」

放たれる殺気から責任を取らされて処断される、殺されても仕方がない、そう覚悟したパチュリーだったが条件と聞いて訝しむ。

「ええ、外に戻せば消えいくだけの哀れな者達、そういった者達の為に作り上げたこの幻想郷：力を失い忘れられれば遅かれ早かれここに来るはずだった貴女方、けれど力を宿したままで来訪した、そう出来た貴女方には少し協力をしてもらいたいの」

扇越しに殺さない理由を語る紫。

『戻せば』と言い放ち、その気になればいつでも放り出せると含ませて話す。

扇の奥で目を細め、選択の余地はないと眼に宿るナニカをパチュリーへと放つ大妖怪。

見つめられるパチュリーもここでノーといえどどうなるか理解し、見つめてくる瞳から顔を背けられず逃げられないような状況となった。

背後に佇む藍も顔色を変えずに主を見ているが、もう一人の従者、仮初めながら紫に仕える形で雇われているアイギスだけが、紫を見つめて瀟洒に笑んでいた。

これから先に話す内容は何か、聞き逃さぬよう髪に隠れた耳に集中していた。

「人と妖かし、互いに相容れない者達が住むこの地。相容れないながらも人がいなければ私達化け物は存在できない、かといって何もせず人間をのさばらせると外と同じく消えていく：危ういバランスの上」

静まる書庫内で一人語る紫。

現した怪しさは影を潜めて、正しく管理人たる姿を取り戻して話す雰囲気に戻る。

コロコロと姿を変えてその心を掴ませない紫だったが、話す内容は本心に近いそれであった。イエスとは言わない、未だ侵略者である魔女にここまで話すのは、協力しないのであればこの地にしようといわずれ消えると示唆するためでもあった。

ただでさえなかった選択肢が更に強調され、パチュリーの思考など関係なくその決定先が一つだけの答えに向く。

「言わんとする事は理解したけれど、具体的に私達に何を求めるの？」

「何をして頂くか、それは屋敷の主が目覚めた時にお二人にお話致しますわ：悪いようには致しません、むしろ研鑽できるような事となりますわね。この地を一度でも揺るがそうとしたその力、今後共磨いて確固たるモノとして私に見せてほしいのですわ」

怪しむ視線で返答するパチュリー、イエスとは言わずにその先の事を問い正すが紫を信用しての返答ではなく、逃げられないのなら先を聞こうという考えの元に返事をする。

この返答だけでも協力すると答えたようなものだが、更に餌を撒いて頭を縦に振らせる算段の紫。普段の会合、というよりも脅しに近い片方からの文言であればこれで終いとなるのだが、期待を裏切れない者が側にいるため正しく会合として終わらせたい。

そうする為にその厄介な契約者を利用する事にしたようだ、疑惑の眼差しを向けるパチュリーに追加を述べる。

「疑って当然、ですが嘘は話しておりませんわ」

「今更疑ったところで意味が無いけれど、話の真実味が増すのなら聞いておきたいわね」

「アイギスと契約を結んでいる、これでは疑いを晴らす理由にはならないかしら？」

少し悩み納得したように瞳から疑いの色を消していく聡明な魔女。

魔女の瞳を見て紫が扇で隠した口元が緩む、隠すそれを見られ真似られたかのように、紫を見つめていたアイギスの口元も緩んだ。

会いたいと願う妹の為計画した侵略行為、その行為のために手段と化し力を見せた魔女であればアイギスを知っている、ならば契約していると述べれば邪推し勝手に納得してくれる。紫が推測したその通りに魔女は納得し頷いた、悪魔の証明ならぬ悪魔を証明と立てた事で敵対者の疑いを晴らした妖怪の賢者：魔女を納得させてアイギスの期待を裏切らず楽しませた妖怪。

その頭脳も武器だと自称するくらいなのだ、これくらいは余裕でこなすのだろう。

その後は少し話してすぐに去った八雲の二人。

そうして地下の書庫で行われた今日の会合は終わりを迎えた。

残された魔女は緊張の糸が切れたようで、カグリと机に突っ伏して疲れた素振りを見せていた。もう一人緊張していた従者の方は随分前に緊張の糸が切れていたようで、床にへたり込み俯いて動かなくなっていた。

唯一固くならず場の雰囲気を楽しんだアイギス。

楽しいな笑みを浮かべクスクスと小さく声を発しながら、席を立ち歩き出す。

期待を裏切るどころか寧ろアイギスを利用して魅せた紫。

大妖怪八雲紫と対峙しながらも媚びず、大図書館の主らしい振る舞いで最後まで乗り切ったパチュリー。

紅魔館の者達に何をさせるのかは聞く事が出来なかったが、今回はこれで十分だというように、足音で軽快さを示すようにヒールを鳴らし地下へと歩み消えていった。

後日目覚めた屋敷の主と書庫の主、幻想郷の管理人とで話し合いがあったのだがその場は三人だけで話し合ったようだ。

屋敷の主を他所にトントン拍子で進んでいく幻想郷の新しいルール。

妖怪の賢者が話す内容に納得する魔女と、その話をわかったようなわからないような顔で聞いていた吸血鬼がいたとか、いなかったとか。

確かなのは、二人から蚊帳の外にされかけて放置されそうだった吸血鬼が『うゝ』と鳴いた事、それだけである。

く中休み 休暇先は地の底でく  
第二十一話 染まる色

少し前には悲鳴で騒がしかった人間達が住まう土地。

囲われた狭い土地の中に纏まり、皆で集まって協力しながら生きていく幻想の里に生きる人間達。元を正せば何処か山深い地にあった集落に生きた者達の子孫らしいが、今この里に生きる者達は皆幻想郷生まれの者達で、外の世界を知るものはいない。

種族人間で外の世界を知る者は、その短い生と繰り返される転生から真つ当な人間とは呼びにくい者くらいだろうか？

月夜には姿を変えてしまう半分獣の人間も知っているかもしれないが、彼女の場合は半分獣なのでこの場合は含まずにおこう。もう一人半分人間半分妖怪という男もいるにはいるが、あの男は人里住まいというよりも里に商い修行に来ている手合で、住まいは魔法の森近くに構えている。

そんな外住まいの半人半妖も里住まいの半人半獣も、転生を繰り返す短命の女も、今日は一箇所に集まっていた。

「この辺りで一息入れましょう、麦茶が入りましたよー」

パンパンと華奢な両手を叩く娘。

紫色の綺麗な髪と飾る花飾りを揺らし作業者達の声をかけている。

あまり大きな声が出せない為両手を叩いて休憩を知らせるが、背も低くても小さい為叩いた両手の音も小さかった。

「皆！ 休憩だ！ 一息入れよう！」

小さな声と叩いた手の音を聞いていた者が代わりに声を張る。

よく通る澄んだ声色、立ち姿に似合った声色で代わりに休憩を伝える半人半獣の女性。

両手を頭上で叩いて先ほどの少女よりも遠くへ音を響かせる、里の守護者と呼ばれるようになった上白沢慧音。

そんな慧音の声と柏手の音にぞろぞろと集まり始める里の男衆。

皆が皆汗を掻いて、額や腕が時偶に光らせていた、ぞろぞろと集ま



り各々が日陰や近くの誰かの家へと入っていく中、小さな少女と慧音の側で愚痴る男がいた。

「頂くよ、やっぱり力仕事は僕向きではないな」

グラスに注がれた麦茶を一気に煽り、カランと氷の音を立てる男。皆と同じく汗を掻いているが他の男達よりは疲労の色が見えにくい男、かけている眼鏡の奥に見える瞳も然程疲れていないように見える。

「向き不向きは終わってから考えて下さいね、霖之助さん」

空いたグラスにおかわりを注ぐ少女。

グラスとともにタオルを手渡しながら男に向かい霖之助さんと声をかけている。

この男こそアイギスが初めて里を訪れ、種を購入する際に接客してくれた半人半妖の男、森近霖之助である。

普段は静かに店番しているが、今日は珍しく屋外で汗を流し、慣れない力仕事に精を出していた。

「やれやれ、阿弥は人使いが荒いね」

タオルを受け取り首にかけて、二杯目の麦茶を口に含む霖之助が少女の名を呼ぶ。

名前と共に軽口を言われた少女、阿弥と呼ばれた華奢な少女が慧音と共に長腰掛けに座る、二人掛けのそれに並ぶもう一つに霖之助も座って、三者がそれぞれに同じ相手を眺めていた。

三人が見つめる先には白いタンクトップ姿、下半身は膝丈のハーフパンツに切られたもんぺを履く誰かがいる。

褐色の肌に汗を光らせて、偶にタンクトップの胸元を摘みパタパタと風を送る女性：紫の命により人里での工事の手伝いをするアイギスの姿があった。

「あの方、良く働きますね」

ポツリと呟いたのは阿弥。

皆が休憩する中で一人休まず動く黒羊を見て、見たままの姿を述べた。

当然疲れはするが普段の荒事に比べれば疲れる内に入らないと、休

憩を告げる声も聞こえていたが気にせず一人で柱を立て打っていた。彼女が立てている柱は建物の外、軒を支える部分。

里の中央にある稗田のお屋敷に並ぶように新しく建てられる学び舎、その基礎工事が数日前から始まっており、里の者達だけでは捗らないだろうと八雲が遣わせた助っ人職人代わりのアイギス。

母屋はすでに建っていて、後は外の軒や外廊下など外観工事くらいで人出はいらないように思えるが、行けと命ぜられた為素直に手伝いに来たようだ。

「来てもらっているのだし、私が話してくるよ」

「あ、私も行きます」

席を立ち小走りで進む慧音、その後を追って同じく小走りで動く阿弥。

初対面の阿弥や追い返すように接客した霖之助よりも自分が適している、そう考えアイギスに歩み寄ろうとしたが、初対面という事は阿弥も用事があって当然だと思ふ慧音。

追ってくる阿弥を待ち二人並んで声をかけた。

「アイギス殿、少し休まれては？　そう急ぐ必要ありませんし」

「お気になさらず、疲れる程の仕事でもありませんし力仕事は向いておりませんので」

「ですが…あまり汗を掻かれるとその、透けてしまつて」

慧音と阿弥の視線がアイギスの顔から下がり胸で止まる。

見つめる先はタンクトップが張り付いて綺麗にラインが見えていた、無論下着はつけているがその花柄の、オレンジに近い赤の下着が綺麗に透けていて、誰が見ても色も形も確認できるような状態であった。

見えた所で減る物ではないし、隠れているのだからとそれも気にしない羊の悪魔…タロットの誘惑や肉欲ではないが、それを充てがわれ司つてもしかたがないというくらい、健康的な透け具合が目立っていた。

「アイギス殿は気にしないでしようが、回りの男衆…特に既婚者がです」

「…なるほど、そちら方面で墮とすのは別の者ですし、少し休んで一旦着替えましょうか」

慧音の見る先を見るアイギス。

二人の視界には住まいの中で妻に頭を小突かれる中年の男と、慌てて視線を逸らす若い男達が見えた。男達から慧音に目線を戻すと、申し訳ないと何故か謝られる。

謝罪を受ける事などないが、言われる通り今は確かに透けていて、形や大きさまでがくつきりと分かり男の性を搔き立てるような状態だと自覚する…あの淫魔の手口にもこうした濡れ姿を見せて墮とすモノがあつたなと思ひだし、苦笑していると別の者からも声をかけられた。

慧音の横から掛けられた少し気弱に感じられる声色、視線を下げて見ると紫色の髪と濃いピンクの花をあしらった髪飾り、髪色に似た色合いの瞳を持つ少女が見上げていた。

「でしたら一旦我が家へ来ませんか？ 着替えるにしても外では、その…」

「お気遣い感謝致します、初めてお話される方だとお見受けいたしました、アイギスと申しますれば…以後お見知り置きを」

いつもの仕草、格好こそタンクトップにハーフパンツだが指を伸ばした右手を胸元に添えて深々と頭を垂れるアイギス。

少女の身長に合わせて深く礼をすると綺麗なレースがあしらわれた下着まで見えて、それを確認しデカイと一言だけ呟く阿弥…頭を垂れたまま身長的事かと納得する黒羊だったが、阿弥の視線は汗が貯まる谷間にあつた。

思考を切り替えた阿弥からも紹介があり、それぞれ自己紹介を済ませると、誘つてきた少女が先に歩きその後を羊の悪魔が追う形で移動していった。

く少女移動中く・

綺麗に張り替えられたばかりに見える畳の上に立つアイギス。

通された和室で少しお待ちくださいと言われ、言葉通りに佇み待っている白い布を携えた少女がパタパタと廊下を歩く音がする。

走っている感じではないが何処か急いでいるように感じられる足音、変わった歩き方をする少女だなと考えるだけで、それ以降は思考せず阿弥の帰りを待つていた。

「お待たせしま…やっぱり大きい」

「大きく見えるかもしれないね、ですが私の国であればこれくらいある女性も偶におりますよ」

それぞれがアイギスの見た目の事を話し、噛み合っているように思えるが何処かで噛み合っていない会話をする二人。

着替えの為に招かれた稗田の屋敷内で汗に濡れたタンクトップを脱ぎ、タオルで汗を拭いてからそのままの姿でいたアイギス。

阿弥も幼く見えるが二十歳を迎えるくらいの年齢らしく、自身の小さな体と比べて色々とき大きなアイギスを羨むような目で見てから、他国生まれであればもう少しと気を落としかけていた。

「稗田様、それは？」

「そうでした、取り敢えず着る前にちゃっちゃと巻いてしましましょう、万歳してください」

少し俯き、ますます小さく見える阿弥が持つ幅のある白い布、サラシを携えてこれから巻くので万歳しろと話す阿礼乙女。

バンザイとは？ と首を傾げているアイギスに両手を上げて再度伝える阿弥だったが、仕草も表したせいで持つていたサラシを放り投げる事になった。

「あ…：やらかした、換えを持ってきますのでまたお待ちいただけます構いませんか？」

転がり広がるサラシを追いかける阿弥、逃げる巻物を追いかけて捕まえた先でそう述べる。

口にするものでもないのだから換えなど必要ないと思うが、床に落ちた物連れ込んだ女性の肌に巻くのは気が引けるらしい。

アイギスからの返答を待たずに雑にまとめたサラシを持って立ち去る人間の少女、人に恨みしかないアイギスにしては人間と仲よさげで違和感があるが…紫から聞いた彼女の生い立ちから普通の人間ではないと捉えているようだ。

実際には転生を繰り返すだけの人間、人格を変えずに短い生を生きるだけの人間なのだが、真つ当な命を生きられない阿礼乙女に対しては、先ほどの半人半獣や半人半妖に近い感覚で接する事が出来るようだ。

「足音は生き急ぐ姿に似たのでしょようか？ 焦っても変わらないと思えるのは私には終わりが見えないからなのか…よくわかりませんね」  
パタパタと去った阿弥を考える。

雇い主から聞く限りでは、後十余年もすれば一端は終わりを迎えるという少女。

代々続く纏めもの『幻想郷縁起』に囚われたと言っても間違いではない少女の事を少し考え悩んでいる、終わりの見えない者。

終末が見えれば急ぐ理由も理解できるか、だが終わりを迎えるつもりはないと自問自答を繰り返していると再度足音が響いてきた。

パタパタからバタバタへと変わった騒がしい足音が部屋の障子前で止まる、見えるシルエットは肩で息をするように上下していた。

「おま…たゼエしました」

「そう焦らなくとも、息を整えて下さいまし。はしたなく見えてしまいますよ、稗田様」

勢い良く障子を開けると、息を荒らげて勢いなく歩み入る阿弥。

アイギスにはしたくないと言われられても、いいから早くバンザイしろと荒い息遣いで吐く。

着替えくらいで急かすような事はないと思えるが、彼女には着替えを手早く済ませてしまいたい理由があった。

先日の里の襲撃、あの晩に不意に現れほとんどを消してから、自身も忽然と姿を消した見慣れない妖怪…出来れば少し話して幻想郷縁起に書き記したいと考えている。

焦る理由は目を離せばまた消えると考えているからだろう…それともう一つ、阿弥として会ったのだから阿弥として記しておきたいという気持ちも少しだけあるようだ。

「あの、稗田様？ そう抱きつかれてはさすがに…汗を掻いた後ですし」

バンザイするアイギスに正面から手を回す阿弥だが、結構な身長差があるせいで阿弥の両手がアイギスの体を回り切らないようだ。

アイギスに抱きつく形で指先を伸ばし頑張るが、どうにも届かず四苦八苦している。

「汗臭くはないですよ？ 寧ろ花のような匂いがします」

汗臭くないはずはないが、それを感じさせないくらいに花の匂いが強いと語る抱きつく少女。

原因は身に付けている下着。

その柄と香りから語る必要もなさそうではあるが敢えて述べる。

幻想郷に着の身着のままに近い形で訪れたアイギス。

ある程度の物は八雲紫から支給されるが身に付けるもんぺやタンクトップから分かる通り、半分遊ばれているように取れなくもない。

下着もその類に漏れず、支給される物はアイギスの趣味とはかけ離れた物が多かった：それでも仕方なく身に付けていたのだが、今日のように汗かいて透かしていた雇われ人の姿を見た香りの元が、お古で良ければと時期を見て寄越してくれるらしい。

雰囲気も似れば趣味もサイズも似たらしい。

こちらを貰えるようになってから、八雲から届く下着は封切られる事すらなくなった。

では話を戻す。

「すいません、回してもらってもいいでしょうか？」

自身で巻くことを諦めた少女が申し訳無さそうに願ってくる。

背に回したサラシを受け取り前に寄越せと仕草で伝えてくるが、背中側に立った方が楽に回せるのではないだろうか？

急いでいるというのなら手早く済ませる位置に移動すべきと考えられるが、この少女は立ち位置を変える事はなかった：前から抱くように捕まえていれば消えない、そんな思惑もあるのかもしれない。

「キツくないですか？」

少し離れてアイギスの顔を見上げる阿弥。

巻いたサラシの話であれば胸元を見ながら離せばいいのに、今更になつて気にするようにわざわざ顔を注視している。

八雲の式によくわからない方だと評されたアイギスが、よくわからない娘だと考えながら巻かれたサラシに指を通し、具合の確認をしていた。

「問題ないかと、では工事の方に戻りましょうか」

事は済んだ、とすぐに替えのタンクトップを着て部屋を出ようとす  
るアイギスだが、立ち止まったまま少し手を伸ばす少女に気が付くと  
振り向き止まった。

行かないのかと阿弥と外を二三度見比べる黒羊、アモン角の巻が見  
えたり顔が見えたりしていると阿弥が手を下げ話し始める。

「あの、良ければ少しお話しませんか?」

「工事が済んでからでは遅いのでしょうか。後少しで終わる気配も  
しますし、その後で良ければお付き合いますよ?」

「終わった後はスキマに回収されて消える、慧音さんからはそう聞い  
ていたのですが?」

足を止めて見上げてくる華奢な女性。

顔にはちよつとした疑いというか、疑惑というには可愛さが強い表  
情が浮かんでいる。

百年以上幻想郷で暮らしているながらアイギスが里に訪れるのは今  
日で三度目、一度目は買い物をしてすぐに帰った為慧音と霖之助以外  
とは話しておらず、里人から見慣れない妖怪がいると見られただけ  
だった。

二度目は先日の騒ぎの夜。

あの晩は確かに仕事を終えてすぐに回収されたが、時間に追われな  
くなった今は回収はされないだろう…遣わされた際にも帰りは好き  
にと命ぜられていた。

「帰りは好きに戻れというお話ですので、私の気分次第となります…  
行こうと考えていた先は夜にならないと楽しめませんし、それまでは  
時間もありませんよ」

消えもしないし時間もある、それを伝えると阿弥の紫の瞳に光が宿  
る。

人間との会話に興じるなどらしくない、襲うなどという縛りがあるに

しても随分とらしくない対応をしていた。

恨み憎む人間に対して親切心を見せるアイギスだが、年を召していると言う割に幼く見える姿が見知った誰か達とダブって見えてしまうのと、前述した唯の人間と見られない事が相まってこんな対応をしていた。

ちなみにこの少女と出会った事で後々人間に対する評価が少し変わるのだが、それはまた別の話である。

「では工事が終わったら再度我が家でお話を：そうと決まったら行きましょう！ さっさと終わらせてちやつちやつと戻ってきましょうね！」

言うが早いパタパタと急ぎ足で歩み、アイギスを追い抜いて部屋から廊下へと去っていった屋敷の主。

どこの主も慌てやすいなど、夜に訪れる予定だった赤い屋敷の主を思い出し一人笑む黒羊だったが、遠くから聞こえる早く来て下さいという物言いが、主ではなく妹の方に似ているのかもしれないとも感じさせた。

人間にも面白いのがある、長く生き永く憎む中で感じる初めての感覚を覚えながら、届けられた声を追うように屋敷から歩み出た。

少女工事中

戻ってみれば後片付けだけの状態になっていて、持ち込んだ仕事道具を革製のシオルダーバッグにしまって終いという状況であった。

少し長く話しすぎた、これでは遣わされた意味がないと考えるアイギスだったが、お疲れ様やらありがとうやら里の者達から色々と言われていた。

何もしていないはずだと考えこむアイギスだったが、里の者達の感謝は夜の襲撃から救ってくれたという意味合いが強く込められているもので、今回の紫からの依頼はそれを知らせる為に遣わされたようなものであった。

アイギス本人は仕事を成しただけとしか捉えておらず、感謝されても濡れ姿の方くらいかなと考えているが、紫の思惑としてはその部分には然程意味合いがなかった。



八雲紫が紅魔館で魔女に向けて話した事。

互いに相容れない者同士が住まうこの地、あちらを立てればこちらが立たずで済まさずにどうにか両者立てられないか？

そう考えた紫が試験的に試したのが、人を憎みながらも人から糧を得て満ちるアイギスを里に送るというものであった。

先日の襲撃時には依頼の条件通り里の内では人を襲わなかった悪魔、では荒事のない場面ではどうかと、仕事の依頼にかこつけて少し試してみたようだ。

結果は成功といえるだろう、透けた服を鼻の下伸ばして見てきた男衆にも、屋敷に呼ばれ阿弥と二人きりになっても襲うような事なく平凡に過ごしたのだから。

そんな平凡に過ごした悪魔。

今は愛用品もしまい終えて再度稗田のお屋敷内にいる。

阿弥の部屋の正面。

庭に面した外廊下に腰掛けて日が暮れ始めた空を眺め、その下に広がる手入れされた庭園を眺めて、出された麦茶を味わっていた。

「お疲れ様でした、里を代表してお礼申し上げます」

部屋に対して斜めに、廊下の屋根を支える細い柱に背を預けるアイギスに向けて、部屋の中から阿弥の声が届く。

感謝される程の事はしていない、する前にやる事がなくなった為大した事はしていないと謙遜するように角を撫で小さく苦笑んでいた。

「さあ、ここからは私に付き合ってもらいますよ？　まずは私の事、八雲様から聞かれていますでしょうか？」

「転生を繰り返し書物かきものを続ける家系、そのくらいしか伺っておりますが、他にも何かあるのでしょうか？」

「いえ、その通りでそれ以上は…書物の内容も聞かれていますか？」

部屋にいる阿弥に向かい話しながら、足は庭先に投げ出して、右手だけを後手にして体を捻る黒羊。

褐色の肌や髪に斜めから夕日を浴びて、日の当たる部分は普段より赤く、日の当たらない部分は影がさして余計に暗く見える肌。

けれど瞳だけはいつも通り赤黒く、影が指している顔の中で唯一妖

しく輝いているように見えていた…が、横に広がる瞳孔のせいで綺麗とは呼べず、寧ろ得体のしれないモノに見えてしまう。

「内容までは伺っておりませぬ、その内容に何か？」

脅したり怖がらせるような事は何もしていない、そのはずなのに何故か届けられる少しの恐怖心。

それを感じて訝しむアイギスであったが、目と目が合うとすぐに逸らされた為、原因は私の瞳かとすぐに察することが出来たようだ。

今更気にする事でもないが、やはり特異に見えるのかと少し座る角度を変えて顔に日が当たるようになる、届けられていた恐怖が薄れていく感覚を覚えた。

「幻想郷に住まう妖怪達を纏めておりまして、宜しければアイギスさんも書かせて頂けないかと…」

表情が分かる角度になったアイギスを見て、すぐに昼間のような雰囲気を取り戻し饒舌になる阿弥。

瞳の光も何も変わらない、座る角度を少し外に向けただけのアイギスの背に明るさが戻った声色で語りかける。

「用途次第、と聞けばお答えして頂けるのでしでしょうか？」

妖怪を纏める本、そう聞いて少し考えてから返答する悪魔。

アイギスの知るものでそういった物は魔導書、同族である小悪魔のそれのように実情と内容が咬み合わないまま書き記してある物も多い。

そういった物は大概書いた者の偏見と偏った知識が混ざるもので、小悪魔を例に出せば、他者を堕とし死者を操る古い悪魔と濁して書いてある物である…快樂にと頭に書いてあれば勘違いもなかっただろうに。

勘違いから生み出されたアイギスは勘違いや思い違いをされる事を嫌う、阿弥の言う物もそういった物であるのなら断るつもりでいるようだ。

「最初是对策本という物でした、幻想郷にいる数々の妖怪に向けた対策を纏めた物…中には人を殺め喰う事を目的とする者も多いので、そういった者達と出会った際逃げる為の手段を纏め書き認めています」

た」

「過去形ですね、今は違う物になっているという事でしょうか？」

向かっている低く横に長い机から離れ、少し歩く阿弥。

机の奥に誂えられた本棚に並ぶ数冊、同じ装丁がされた和本を眺めながら歩み、自身の書き記してきた本『幻想郷縁起』の事を語り始める。

本棚の前で立ち止まると同じ想定の内の一冊を取り出して、著稗田阿一、そう書かれた古い字体に見える方をアイギスに手渡した。

「これから変える、という感じですが、対策本から紹介本になると思ってくださいるとわかりやすいですかね」

本を手渡してアイギスの隣に腰掛ける阿礼乙女。

渡された本をペラペラと捲り流し読みしていくアイギスだが、古い字体の漢字が多く殆どが読み取れないようだ。

けれど読めなくとも問題はないように見えた、本の厚みに対して身が少なく思える程の情報量しか書かれていないからだ。

「今ご覧になっっているのは二代目が書き記した対策本、こちらが私が認めている物です」

阿弥の説明を聞きつつ視線も感じながらペラペラと捲られるページ。

だんだんと文字数が減り途中のページから白紙だけになると、パタンと閉じられたアイギスの手元の本。

閉じられた本を阿弥に返すともう一冊、先程よりも新しく日にも焼けていない本を再度手渡されていた。

褐色の指が書を開き、中扉もペラリと捲ると先に渡された本よりも随分と充実した目次が目に入る。

「今は里で暮らす慧音さんや商売される霖之助さんもいますし、聞けばろくろ首も隠れ住んでいるとか」

先に目を通した本よりも増えた項目、幻想郷に住む妖怪達の他にも半人半獣や半人半妖、この地にある名のある名所までが書かれるようになっていた。

書き方も対策というよりも、何処に行けば会える、こんな性格だ、と

確かに紹介本に近い物となっていた。

ここが危ないだとか、こうなったら逃げるだとか、対策本としての姿も残しつつ、書かれている者達がわかりやすいように、砕けた文体で各々が紹介してあった。

目次には八雲の二人や花の妖怪など、見知った者達の事も書かれている。

藍のページを少し読むと、真面目な顔した狐が真面目に油揚げを買いに来た、などと目撃証言までが書いてあり、その姿が想像できて思わずクスリと声を漏らすアイギスであった。

「フッフ笑ってもらえるようになったなら良かった」

着ている着物の袖を口に当てて笑う阿弥、小花柄があしらわれた袖先辺りを揺らして楽しそうに笑んでみせた。

後から手渡されたこちらが阿弥が書き、話してくれた書物なのだろう。

楽しい紹介本を読みながら本棚に目をやるアイギス、左端と右端が抜けた同じ装丁の本が視界に写り、冊数から今が八代目なのかと気づいて再度書物を読み始めた。

読み進めると見知った誰かの挿絵がある。

挿絵の横には、太陽の畑で見かけたが笑顔が怖くてすぐ逃げたという目撃例が書かれていて、あの笑顔で振るわれる日傘は確かに怖いなと頷き、また笑った。

「いかがでしょう？ 書かせてはもらえないでしょうか？」

足を揃えて座る阿弥の腿に両手が揃えられる。

そのままアイギスの顔を見上げて、下から覗き込むような形で書き記す許可を求めてきた。

目撃証言は見た者の偏見と言える文言で、そういった事を嫌うアイギスであったが：書き方が上手で偏見というよりも冗談、もしくは文章の賑やかし程度にしか感じられず、紹介本として楽しむ為にこれくらいなら構わないかと考えていた。

「構いません、ですが今ではなくもう少ししてから書いて頂きたいですね」

「もう少し？　今ではなにかまずい事がありましたか？」

書かれる事自体は構わない、けれど今ではなく後にしてくれと逆に願う黒羊。

その言葉に今ではマズイ何かがあるのかと、疑惑の色を浮かべて聞き返す紹介本の筆者。

「問題というよりもそうですね、この地に馴染んでいない自分に気が付いたので：色々と逸話を増やし恐れてもらえるようになってから書いて頂きたく思います」

正直に言えば今でも構わない、そう考えているアイギスだったがわざとらしく理由を作り難色を示した。

一時の断りをいれたのは、今書かれても外の世界の事ばかりになると気が付いた為だ。

どうせ書かれるのであれば今暮らしている幻想郷での事を多く書いてもらったほうがいい、その方が読み手が想像しやすく畏怖や恐れを覚えてもらいやすいのではないか？

そんな事を思いつき、少しだけ意地悪に笑んで阿弥を見つめる黒羊。

不意に見せたアイギスの笑み、意地の悪い笑みを見上げている阿弥の顔には素直に不服と書かれている。

だが不満を述べる事はなかった、お願いが断られたわけではなく後回しにされただけだと理解しているから、今不満を伝え嫌だと言われってしまうと旗色が悪いと考える阿弥。

今の見た目だけなら旗色が悪いどころか、同じように夕日を浴びて赤みが強い顔色にしか見えないが、そう考えて文句は言わずに納得し、わかりましたと述べていた。

けれど、阿弥からの色よい返答を受けても意地の悪い笑みをやめない悪魔。

意地の悪い笑みといい、サラシの巻かれた今の姿といいらしくない色を身に纏うアイギス。

彼女が人間相手に楽しそうに笑うのは、今の僅かな時間だけ相容れない人間と同じ色に染まっているからだろう。

## 第二十二話 観光旅行

「地獄、ですか」

美しく切り揃えられた生け垣。

その内に建つ古い様相の日本屋敷。

この屋敷に住み始めた者が細かく手入れをし始めてから、随分と小綺麗な屋敷となった。

朽ちかけた低い垣根は緑逞しい生け垣へと変わり、随分と前に葺かれて放置されていた藁葺き屋根は新しい藁が葺かれて、快適な屋根の姿を取り戻していた。

庭先にも変化があり、迷い死にかけた者くらいしか訪れなかったのだが、今では何処からか迷い込み住み着いた猫達が日に当たり猫背を伸ばしたりしている。

そんな和やかな屋敷の中、丸いちゃぶ台に向ってお茶を啜る二人。

一人はモコモコの羊が数匹周囲に描かれた湯のみで茶を啜る黒羊。

先ほど地獄というオドロオドロしい単語を言った者、この屋敷の手入れをするアイギス。

もう一人は足を横に揃えて座り、太腿の上にいる猫を撫でながら、その単語について訂正しようと口を開く雇い主。

「正しくは旧地獄、ですわ」

『ゆ』とでかでかと言われた湯のみを右手に持ち、そこに左手を添えて優雅に啜る八雲紫が訂正する。旧と聞いて今はなんなのかと、少し考えるように頭の角を傾けるアイギス。

アイギスの知る地獄と言えば嘆きの川と呼ばれるあそこ、自身の名前の元となった神が伝わる神話の地獄コキュートス。

もしくは、世界樹ユグドラシルの地下にあるとかないとか言われている死者の国くらい：外の世界で寺住まいとなった時に日本の地獄、ハチダイ地獄やらハチカン地獄やらも聞いた覚えがあるが、多くあるそれらのどれかが廃業したのかと悩んでいるようだ。

「傾いている所悪いのだけれど、答えを言ってしまうえば地底世界ですわ。地底がちよつと騒がしいので地上も煩くなるかもしれないと、あ

こちらの管理人が便りを届けてくれましたの」

ズズツとちよつとだけ騒がしい音を立てて茶を啜る紫。

言葉をなぞつて態度に出す、ほんの少しの悪戯心を見せながら旧地獄についての話を続ける紫。

考えていた地獄ではなく唯の地底かと、紫と同じくちよつとだけガツカリした態度を表すようにアイギスがほんのり肩を落とす、音を立てずに茶を啜る。

「では煩くなったら静めろ、本日はそういったお話でしようか？」

啜る湯のみをちよつと静かに置いて問いかけるアイギス。

紫がこの先に続けるだろう言葉をぎつくりと読んで話すが、帰ってくる文言はそれを肯定するものではなかった。

「いいえ、先の侵略では頑張って貰ったし偶にはお休みをと思ひまして、物見遊山と洒落こんでみてはいかが？」

膝にいる猫を見ながらそう述べる紫。

気まぐれに紫が猫を持ち上げると、猫の尻尾は二つに割れていて片方には黒いリボンが着けられていた。何処かで飼われている変わった二本尻尾が迷いこんできた、怯えも妖気も血の匂いも感じるが、この雇い主が愛でるくらいなのだからそれらを感じても不思議ではないのだろうと、それらを特に気にしないアイギス。

「観光ですか…お仕事だというのであれば構いませんがそう仰られませんかし、その地底にも管理人がいらつしやるのでしょうか？ 私より紫様が向かわれた方が宜しいのでは？」

地上と地底とはいえ同じく幻想郷を管理する者。

いくなれば冥界の幽々子のような、紫と親しい間柄かもしれない相手。

その者のお膝元へ向かうのなら顔の知られていない自分よりも、名の通った紫が向った方が話が早いと考えるアイギスが返答する。

何をしてほしいのか、何の為に行くのか、その辺の事は何も聞かずに取り敢えず自分の考えを話す悪魔。

「あら、臨時賞与代わりに休暇でもと思ひましたのに、あつちはいいわよ？ 温泉も湧いているし血気盛んな者も多い…八代目に話せるお

話も増やせるかもしれませんわ」

数日前の人里での話を聞いていたのだろう、それを話して促す紫。他者に促されて考えを改める事などそうはないアイギスだったが、確かに話題作りにはいいかもしれないと、少しだけ理解を示すように首を小さく縦に振った。

だが、そのまま言われた通りにはせず紫の顔を見据えて返答を述べた。

「畏まりました、偶のお休みですしゆつくりと羽を伸ばしてくるとし  
ましよう」

確実に何かある、でなければ休みなどと言わずに調査してこいとも言うって向かわせるはず。

そう確信しているアイギスだったが、その部分には言及せずに紫が話した通り休暇を貰って遊びに行く体で地底世界へと向かうと決めたようだ。

決めた理由は紫の膝にいる猫。

それなりに強い妖気と血の匂いを感じる妖かしが、逃げもせず紫の膝の上にいる：長く紫の側にいながら初めて見る姿の猫妖怪。

尾にリボンが結ばれていることから誰かに飼われている感じも見受けられるし、その態度も借りてきた猫そのものである、飼い主は地底の管理人でこの猫が便りの配達人か？

そう都合よく邪推し、血の匂いが漂うのなら羽を伸ばし楽しめるかもしれないと向かう事を決めた。

「入り口は妖怪の山に空いた大穴、この屋敷からそう遠くないあそこですわ：邪魔されないように伝えておいて差し上げますので、この子を案内係にでもして向かうといいわ」

持ち上げたり撫でたりと好き放題している猫の首根っこを摘み上げ、アイギスに向って放る紫。

放物線を描いて放られた猫がアイギスに到達する前に、自らちやぶ台に降りてそのまま外へと駆けようと足を持ち上げる。

けれどその前足は台も地も搔く事はなく、パチンと何かが鳴り響くと空間毎抉られたように穿たれ消えた。



「本当に便利ね、ソレ」

「紫様ほどでは」

猫背で無くなった前足を見る猫は浮いている。

捕まえているのはスキマから伸ばされたスキマ妖怪の左腕。

そしてその左腕の持ち主は、右手の指が伸ばされてそのまま畳まれたように見えるアイギスの拳を眺めていた。

二人で互いに褒めあっているが、どちらも本心ではないような物言  
い。

何を思っただ話しているのかわからないが、この場で一番理解から遠いのはいつの間にか前足が穿たれ無くなり、逃げたはずなのに捕まった猫であった。

少女移動中

借りてきた猫を又借りする事はせず、悪魔一人の地獄行脚。

少しの着替えと少しの仕事道具を肩掛けカバンに詰め込んで、短い小旅行に出た黒羊。

案内係と押し付けられそうになった猫は紫に返して、一人寂しく歩  
みを進める。

休暇中にまでお目付け役は必要ない。

面が割れていない者が、地底の管理人が放った使いを連れていては八雲の手の者だと地底世界でバレてしまう。血気盛んな者達が多いと聞くと、地上の管理人である八雲との繋がりを知られれば離れていってしまうかもしれない。

そんな読みで一人動き硬い土の道をコツコツと、偶に踏む葉でサク  
リと音を立て歩く夏の山。

住まいとしているマヨヒガから然程進まずに着くはずの大きな穴。  
そこに辿り着く前に誰かに話しかけられるアイギス。

止まりなさいと上から物を言われても気にせず歩く私の強い悪魔、  
歩む速度を緩めずに数歩ほど歩くとその頭上に誰かが現れた。

アイギスと似た髪色、光を透かす事のない真っ黒な髪に赤い頭巾が  
目立つ頭、飛んでいるのに何故か見えないミニ・スカート姿で足には  
高い一本歯の下駄を履く少女。

顔つきは凜々しいがその黒い瞳には強い興味が宿っている、この山の広報と言える者が話す。

「聞こえていないわけではないでしょう？ その貴女ですよ」

太陽を背に宙に立つ者が、アイギスの正面を塞ぐように降り立つ。

右足の赤い一本歯の下駄で器用に片足立ちする黒い少女。

左足は折って、まつすぐに伸ばす右足の膝部分に当てて、数字の4のような形のままでいる少女にアイギスが話しかけてくる。

「確か、天狗の…新聞記者殿でしたか。私に何用でしょうか？」

正面に立つ天狗の横をすり抜けて、気にせず歩く黒羊。

アイギスが新聞記者と呼んだのは種族烏天狗の少女。

名を射命丸文という、千年を超えて生きる結構な大妖怪である。

今の妖怪の山であれば上位陣に名を連ねているはずの彼女。

「あややや、覚えていらしたとは、私はそれほどに印象深かったでしょうか？」

アイギスの横を飛び、歩く速度に合わせて移動する射命丸。

顔を見合わせてはいないが営業スマイルで話す二人、どちらも長く続けている仕事があり外面の良さには定評がある。

「腕の立ちそうな御方が気になる性分ですので覚えておりますよ、命に逆らい我を通す天狗様など他にはいらっしやいませんし」

命を気にしない烏天狗はもう一人いるが、そちらとアイギスは面識がない為この場では割愛し先に進める。

嫌味とも取れる言葉を混ぜて返答するアイギスだったが、その嫌味は通じなかった。笑みは変えず丁寧な態度も変わらない射命丸、あくまでも一烏天狗なのだがこの程度で怒る程小者ではない。

先に述べた通り小者ではなくその逆で、まるで風そのものと呼んでもいい疾さで空を駆ける、幻想郷最速の異名を持つ腕の立つ烏天狗だ。その名は古くから轟いており、アイギスが訪れる以前まで山を支配していた『鬼』と呼ばれる者達からも、名を覚えられ記憶されるくらい力を宿す者である。本来であればそれなりの立場にあってもいいはずの烏天狗のだが、彼女は役職に付く事はなくいつも自由だった。今回も八雲紫の話が通り、一時の通行許可が降りているアイ

ギスを引き止めようとしていた。

上司から放っておけという話が降りているはずなのに、それを無視するように好きに行動しているように見られるが、実際は彼女なりに山を思つてアイギスを監視しているようだ。

「どうせなら一流記者の顔で覚えて頂きたいですね、それで続きですが、貴女こそ本日はどの様な？ お住いは逆ですよ？」

歩いて行く先と向かう方向を考えればアイギスが住まいから出て歩んできた、それくらいは余裕で察することが出来る記者がわざわざらしく問いかける。

自由な行動をしながら悪魔を監視する新聞記者が、質問と同時に帰るようにアイギスに話すがそれも気にする素振りはない。

荒事大好きなアイギスからすれば一蹴してもおかしくはないが、幻想郷最速がいつでも動けるように飛んだままである事で、手を出すよりも無視した方が早いと判断した。

同じく射命丸も全速力で追い返せばいいのだが、放っておけという命令が出ている手前、全力を出して回りにバレると面倒が増えると考えている。

面倒事が増えるくらいならこのまま少し話してアイギスの動向を知り、ついでに先日吸血鬼達が起こした事件の内容でも聞ければと企んでいた。

「休暇を頂きました、これから地底へと遊びに伺おうかと考えています」

「ほう、地底へ…休暇で行かれるとの事ですが何かお目当てでもあるのでしょうか？」

互いに笑みながらも空気は悪く感じられる。

問掛けては答えられず少しずつ訝しんでいくインタビュアーを雑に扱い歩く者と、自分の聞きたい事だけを聞いて質問には答ええない自由人。

仲でも悪いのか？

そう感じられるアイギスと射命丸だが、単純に顔を会わせる機会が少なくてこうなっているだけだ。共に妖怪の山に居を構えている二

人でいかなければ近所さんだ：が、近くに住んでいる割には今日のよ  
うに顔を会わせる機会は少なかつた。

運良く顔を合わせて少しの会話にしても、すぐに回収用のスキマが  
開いてアイギスが回収されて中断されるという事ばかりで、ほぼ初対  
面に近い状態であつた。

近所なのだし会いに行けば、そう思えるが射命丸はマヨヒガにはた  
どり着けない。

アイギスはこの山で迷う者しか辿り着けない屋敷に住んでいる、一  
方射命丸はこの幻想郷を見続けて知らぬ物など無いとまで言うほど  
にこの地を知り、見ている。

その言葉は伊達ではない為山で迷う事などはなく、マヨヒガの存在  
は知っていてもたどり着ける事はなく、直接話す機会も少なかつた。  
「温泉があると聞きました、記者様ならその辺りの事も詳しいので  
しょうか？」

「そうですね、伝聞する限りですが良い湯が湧いているそうです。鬼  
が笑って浸かるほどに心地よい湯と聞いています、休暇ならゆつくり  
と浸かり楽しんでくると良いでしょう」

アイギスの質問に初めて答えた射命丸。

答えながら表情も少しずつ変わり、営業用の笑顔から古い妖怪らし  
い狡猾さの望める笑みに変わっていった。その笑みに合わせるよう  
にアイギスの笑みも影のあるものへと変わっていく、期待した通り血  
生臭い事があるのかもしれない。

ネタを探して飛び回る新聞記者、時にはマッチポンプをしてでもネ  
タを作るといわず賢い記者が情報をくれた事で、その話から今回も  
ネタを作ってくれたのかもしれないと当たりを付けたアイギス。

それを悟らせぬように、別の事も質問し始めた。

「ふむ、記者様はこの地の事に詳しいご様子、もう少し新参者にご教授  
願えますでしょうか？」

「知っていればお答えします、何が知りたいのでしょうか？」

アイギスと射命丸、二人の間に何処かで見たとような光景が見える。  
言葉使いと相手こそ違うが、このやりとりはアイギスが初めて日本

に降り立った日に交わされた会話のそれに近い。

あの時は本心で漢字について問掛けて紫を惑わせたが、今回は惑わそうとして、それを狙って言葉を述べるつもりが悪魔。

「旧地獄があるという事は、旧天界なども幻想郷にはあったりするのでしょうか？」

以前の紫の時と同じ様に何を聞かれるのか、少しだけ身構えていた射命丸が小さく笑んだ。

あろうがなかりうが構わない、天狗の記者の注意を少しでも逸らす事が出来ればそれで良いと考えたアイギスが、向かう先をかけて言った冗談。

声と出して笑うということはそれなりに通じたらしいが、通じた冗談は別物であった。

「失敬、突拍子もない事を聞かれて笑ってしまいました、天界はありませんが旧はありませんよ…ころつと話を変えて冗談まで言うとは、案外面白い方だったんですね」

アイギスの考えた適当な冗談は気が付かれないが、それ以外の部分で笑う射命丸。

話の展開を急に変えるような突拍子もない話を持ちだした黒羊が、面白いものと映ったらしい。

取っ付きにくい真面目な奴、目の上のたんこぶのように山に住み着いた八雲の子飼いの、聞く話からそんな風に捉えていた射命丸だったが、実際に会話をしてみるとそうでもなかったと評価を改めたようだ。

これくらいの柔軟さがあるのなら山で暴れる事もないだろう、それならば後はネタになって帰ってくるのを待つだけと、少し会話した後飛び去っていった。

射命丸の飛び去る背中を見送った後、そのまま空を見上げて歩き考へこむアイギス。

冗談を述べて笑われた、その部分には満足しているが射命丸の返答を噛み砕くと、なんとなく言った冗談とは違う部分で笑われた気がする。

けれど何処に何がかかったのか、その答えは教えてくれなかった射命丸。

次回会うことがあればその際に聞いてみよう、そう決心し歩を進めると足音がしない事に気が付く。

足音のしなかつた右足の下を見ると、ポカリと口を開いた大穴。

記者と話し考えこむ間に着いたのが今回の物見遊山の目的地、その入口であった。

「これはまた埋め立て甲斐のありそうな穴、何年くらいかかるでしょうか？」

右足は穴の上で宙に、左足は穴の縁ギリギリにあり、中途半端に翔ぶような状態で穴を見つめて楽しげな顔を見せるアイギス。

最近はずち、掘り返すことばかりで何も考えずに埋める事が出来ない、けれどその行為自体を忘れていた気がする墓守だった者。庭木の剪定や花壇いじりという庭仕事などを覚え、それを教えてくれた先生方との楽しい手合わせも偶に行っている今現在、暇つぶしの穴埋め代わりが色々と出来たため忘れていたのかと納得する。

けれど無意識の内に顕現させていたスコップは、その刃先を地に刺してほんの少しだけ土を浮かせている状態。意識の外では体が覚えている暇つぶしの地ならし行為、長く続けていたそれを急に忘れられるほど都合の良い展開にはならないなど、穴の入り口で一人苦笑するアイギスだった。

## 第二十三話 恐るべき穴の怪、暗い洞窟の明るい糸

どこまでも続くような穿たれた穴。

真上に上った太陽の光が途中から届かなくなる程の深い大穴。

いつからここで口を開けているのか、知る由もないが穴の縁が緑で覆われてしまうくらい、自然の一部と見えるくらいには古くから空いている穴なのだろう。

見れば見るほど深い穴、よくよく見れば横に広がる枝穴も数多くあるようでこちらもアイギスの心を攪つてしまう。

「堀跡もこちらは新しく見えますし…横穴であれば怒られはしないでしようか？」

縦に伸びる大穴。

途中途中に大きな回収ネット、落下する何かを途中で遮り助けるように見られる。

飛べない者が落ちた際に拾い上げる命綱？

烏天狗なら兎も角力なく飛べない妖怪もいる妖怪の山、そういった者達を拾い上げる保険のような物かと一人納得し更に下へと降りていく黒羊。

妖怪の賢者が言うには、極稀に自殺志願に山を訪れる人間もいるという話だ。

天狗が侵入制限している山にどうやって人間が入り込むのか？

迷い人ではなく自殺志願と言い切れるのは何故か？

わかっていながら放置するのは何故か？

色々と思うところがある八雲紫の物言いだったが、降りる途中で不意に覗いた穴の中にその答えが横たわっていた。

張られた蜘蛛の糸の影には、乱雑に転がる無数の白骨死体。

綺麗に喰われ白骨化した人間だった誰かの体、一部が欠損している者が多く、全身揃っている白骨死体は一体もないように見える。

失っている部分は首が多いが、モノによつては腕や足などがない状態。

切り口も鋭利な何かで断ち切られているように見られた。

が、死体の事などは気にせず嬉々とした顔で穴を眺め、スコップを顕現させてソワソワし始める素晴らしき穿孔者。

「ここだけ、少しだけであれば許されますよね」

頭のない白骨死体を眺めつつ一人呟く墓守。

骨に話しかけたわけではなく、単なる独り言である。

大穴の入り口で一度思い出してしまうた自身の気に入る暇つぶし、少しだけと自分を納得させる事を呟き、何も考えず唯無心で横穴を壁へと戻し始めた。

そんな穴埋め羊が二箇所目を埋め立てて三箇所目ももうすぐ壁に戻る頃合い。

アイギス以外誰もいなかったはずの大穴の中、ゆっくりとした動きを見せる者がいた。

緑色の瞳でアイギスの背を見る者。

せつせと穴を埋め立ててスコップでパシパシと壁を叩く顔の羊を、白の髪留めで纏めた緑色の短いツインテールを揺らす少女。

見慣れないあれは誰だ？

友人が掘ってくれた餌場を埋めるあれは誰だ？

そんな事を考えながら、餌場にいるしあれも餌でいいかと携える鎌に力を込めた。

ゆっくりとした振り子の軌道で揺れていた木の桶、その桶の内に収まる少女が縁に手を掛け自身の妖気を流すと振り子軌道が大きくなる。

一度高々と下がってから、重力と妖気の勢いに乗った桶が風を切り、一直線にアイギスの背へと向かい動いた。

少女の妖気が込められた鎌が振りかぶられて勢いに乗り、斜め上から首目掛けて振り下ろされる…が、その鎌は首を狩らずに弾かれた。

背で動く誰かに気が付いたアイギスが振り向き、自身の象徴、大きなアモン角で鎌を受け弾いたのだ。妖気を纏う鎌を弾いても欠けもしなかったアイギスの角だったが、生える頭の方は別で首を傾げるだけでは勢いを殺しきれず、首を断たれはしなかったが体は勢いを受けて壁に打ち付けられた。



「出会いから随分なぐ」挨拶ですが、聞いていた通りでありがたいですね」

打ち付けられた壁の土をパラパラと底へ落とし、衣服に着いた汚れを少し払うアイギス。

結構な勢いで土壁に打ち付けられたが、大したダメージはないようだ。

ぶつかり汚れてしまったスーツの左袖など、左半身を払ってから握っていた鎌と両手を振っている少女に声をかける。

「何を聞いて来たのか知らないけどさ、そつちこそ随分な事してくれるじゃない！」

硬い物を叩く音を鳴らし弾かれた鎌。

それを強く握っていてまともに衝撃をもらった少女の両手。

衝撃から痺れた両手をブンブンと振る桶入り娘が強気に述べる。

からすれば覚えがない事で、何の事かと鎌を弾いた角を撫でつつ考えるが、桶妖怪の視線から横穴を埋めた事がこの少女の言う『随分』に当たるのかと気が付いた。

不機嫌そうな少女を警戒しつつ周囲を見れば、まだ一つ二つ、多くて三箇所くらいだろうと考えていた横穴跡地だが、この高さでは3つ目というだけで上の方は穴がない。

少しだけのつもりが確実にやり過ぎで、怒られても当然である。

「折角掘ってもらったのに、狩場兼餌場をどうしてくれるのさ！」

ぐ機嫌斜めな木桶の少女が文句と共に炎を発現させる。

何も無い空間にポツポツと灯る青い炎、少女のいる周囲から頭上にかけてポツポツと、穴を埋め尽くす勢いで灯るのは少女が操る鬼火であった。

「ウィル・オ・ウイスプ？ いえ、見た目からすればランタン持ちの蕪妖怪といったところでしょうか」

灯る炎が妖怪のそれだとわかると、少女の正体も妖かしだったかと納得し、見知った魔物に宛がうアイギス。

今でこそカボチャが主流のランタン持ちの呪われ人、松明持ちのウィリアムことウィル・オ・ウイスプ。またの名をジャック・オー・

ランタンだが、アイギスの生まれた地では古い伝承通り蕪で伝わっており、ハロウィンともなると未だに蕪でマスコットを作り飾る地域もある。

この少女も緑の頭に白い着物で蕪の色合いに似た姿。

宛てがうには悪くないと思いつべてみたようだが、少女の方は気に入らないようだ。

「誰が蕪か！こっちは伝統ある釣瓶落としよ！」

回りの鬼火で暖められたかのようにプンスカと怒り出す釣瓶落とし。

ツルベとは何だったか？

井戸に吊るされた水汲み桶と言われればわかるが、古い言い回しである釣瓶をすぐには理解できなかつた異国人。

怒りとともに落とされた鬼火の滝がアイギスに振り落ちてくる。

「伝統なら蕪の方もそれなりにありますが、この場では然程大事なことででもない、か」

振り子のように規則正しく揺れながら落ちる鬼火。

途中で合流し大きくなったり、壁に当たり小さくなってみたりと、動きとは違ってサイズはランダムになりながら黒羊に迫る。

獣であれば嫌う火だが彼女は元羊の現悪魔だ、恐れもせず顔色も変えず、両手の指を鳴らして鬼火を穿ち消し払う。

「な！ちよっ！」

数度なる指鳴りの音。

鳴る度に消えていく鬼火の滝を見て驚く少女だったが、驚いている間に自身も真っ直ぐに落ち始める。繋がる先の分からない自身が収まる釣瓶の紐、それを穿たれ自由落下し始めたようだ。

飛べばいいはずだが、消された鬼火と伸ばそうとしても伸びない釣瓶の紐に驚く方が先であった。振り子のように揺れる少女が真っ直ぐに落ちていくと、途中で釣瓶に紐が掛けられ縛られる。

「キスメ？なにやってんだい？」

釣瓶を縛った紐、白く光が当たれば輝くような絹糸のような紐。

それは蕪の少女を捕まえた、金髪の少女の指先から伸びているよう

に見えた。

自称釣瓶落としての少女をキスメと呼んだ女、落下していく桶入り娘を指先から一本の糸を伸ばし、腕も指もしならせずに捕まえた少女。「わっかんないよー！ いや、アレよアレ！ アレが 縄張り荒らして襲ってきたの！」

何故落ちたのかはわからないが、何故こうなったのかはわかる木桶がアイギスを指差し襲われたと騒ぐ。指を差されたアイギスが金髪の少女に気がつくのと、小さく会釈してから緩々と高度を下げてきた。「アレって…見慣れない妖怪さんだねえ、どちらさんだろか？ パツと見だけなら牛っぽいか？ 角あるし。でも牛ってかたつむり蝸牛みたいな角だったっけかな？」

会釈したためか特徴的に見えたらしい、アイギスの大きな角。

高度を下げて近寄ってきた黒羊に向かい、牛やら蝸牛やらと言い出して独りでに悩む金髪の少女。暗い土壁に馴染み溶けこむような焦げ茶色のシャツと、それよりもワントーン薄い茶色の広がりあるジャンパースカートを着ている妖怪少女。スカートと一体に見える上着部分には胸から腹に掛けて6個の大きなボタンがあり、それが特徴的に見える衣服に身を包んだ明るい女が一人悩む。

「偶蹄目と括れば一緒ですが、正しくは羊です。その少女に襲われたのは私の方なのですが、縄張り荒らしは否定できませんね」

家畜仲間ではあるが牛ではない、そう訂正しついでに襲撃も訂正する元羊。

縄張り荒らしは嬉々とやらかした為否定できなかったが、他の勘違い部分はきつちりと訂正するアイギス。

丁寧な物言いが気になったのか、指先から垂らす糸を巻き取りキスメ入りの桶を片手に下げて、茶色の女性が口を開いた。

「ヒツジってのがわからないけどまあいいさ、地上の妖怪がこつちに何の用だい？ 取り決めに知らないわけじゃあないんだろ？」

荒らされたというよりは壁として整えられた辺り、横穴が空いていたはずの壁を見上げつつ地上の方も見上げる少女。

焦げ茶のリボンで纏めたポニーテールを左右に揺らして、随分と埋

めてくれたもんだと苦笑し、用事は何かと問いかける。

が、言われた方のアイギスは首を傾げて悩んでいた、取り決めがあるとは一言も聞いていない……言い様から地上と地底の間の事であるとはわかるが、ある事を知らないはずがない地上の管理人兼雇い主は何も話さなかったと悩む。

「取り決めとは？ 新参者ですし、初めてこの地に来たもので……詳しい事は一つ知りませぬ」

少し困るように眉尻を下げるアイギス、その物言いに嘘はない。

この地に古くから住んでいる天狗や花の妖怪からすれば新参者であり、地底へと繋がるこの大穴にも初めて来たアイギス。

取り決めの事も聞いてはおらず、知らないと素直に述べた。

「新参者で初めて来た、か。来てそうそう縄張り荒らしとは豪胆だねえ、地上との取り決めは後で教えてあげるから、まずは地底のルールを覚えてもらおうかね」

キスメを下げていた糸をプツリと断って切り離す少女。

落ちていくキスメに片目を瞑って何かのサインを出す素振りをしてから、瞑っていた金混じりの茶色い瞳を光らせる。

暗い大穴の中で揺らめいて光る瞳、服のボタンもほんのりと灯つて、その見た目は闇夜に隠れ蠢く捕食者、生物に例えるなら蜘蛛の顔のようにも見える立ち姿となった。

「わかりやすそうで小気味良い、ご教授願います」

対するアイギスの瞳も光る。

闇夜に浮かぶ8つ目に対してこちらは二つだけ赤黒く、少しだけ横に広がり伸びる光。

返答を受けて動き始める土色の蜘蛛。

ほとんど光が届かなくなった闇の中、音もなく動いて指先から糸を伸ばし奔らせる。

細いがしなやかで断ち切ることが難しい糸、最初の数本は顕現させたスコップで受け避けたアイギスだったが、糸が絡んだスコップが強引に力で引っ張られるとすぐに手放した。

この場での敵対者。

土色をした蜘蛛のような少女はその見た目通り種族土蜘蛛、名を黒谷ヤマメ。

鬼と共に恐れられ、鬼を討った日本の武将に討たれる伝承が残る程の大妖怪である、怪力を誇りながらも糸を操る巧みさも見せる蜘蛛女。

「鋤<sup>すき</sup>? 変わった獲物を持つてるねえ、縄張りを埋めたのはこれかい」  
「誰かにも言われましたね、切って突くには十分なのですよ? ついでに掘って埋めても出来る、言う事なしの逸品です」

取り上げたスコップを手にし、ちよいと見つめてから膂力で柄を握りつぶすヤマメ。

自身の掘った横穴を埋めてくれた獲物、それを取り上げて軽々潰すと声を出して陽気に笑った。

それに対して再度スコップを顕現させたアイギス、体が隠れるほどの本数を空中に現して自身の周囲に展開し、勢いを付けて投げ、蹴り飛ばし始めた。

ヤマメの体や頭目掛けて風切り音を立てて突き進むスコップ、だがヤマメは避けもせずに両手の指先から伸ばした糸で絡めとり、勢いを殺してからアイギスに向けて投げ返す。

器用な糸だと感心し瀟洒に笑むアイギス、その笑みを見てヤマメも更に笑った。

「ルールも知らない新参者だつて言うから喰っちゃまおうと思ったが、存外やるじゃあないか! ヒツジの姉ちゃんよ」

「お褒めに預かり感謝の極み、貴女様こそ期待以上で堪りませんね」  
カンカンと金属音がやかましい中話す二人。

投げ込む勢いも投げ返す勢いも変わらずに笑み嗤ったままに話す妖かし達だったが、受け止め投げ返す側に少し動きがあった。

「なんだい、余裕がありそうだね! ならもうちよつと本気で行くかね!」

戦闘前のようにヤマメの八つ目が妖しく輝く。

何をするのかと少し身構えるアイギスが目を細めると、その目からたらりと何かが流れる。

手勢は衰えさせずに、小指で垂れた何かが残る頬を撫で確認すると、赤い血混じりの膿だと確認できた、目に続いて唇や腕等にも症状が現れ始める。

気がつけば、いつの間にか手先等にも多くの丘疹が見られるようになり、スコップを握る指先や首等、毛のない肌の部分にポツポツと丘疹が出来始める。

「これは…？ 何を…？」

粘膜部で出来た丘疹は腫瘍となり、そこからは血が流れ始め、鼻や口腔内も少しずつ侵され始めるアイギスの体。

少しずつ発熱もしているようで、上がる体温と気道を塞ぎ始めた血混じりの膿のせいで呼吸も厳しい物となる。何処かの魔女のようにヒューヒューとなるアイギスの呼吸音、さすがに息が続かねば手勢も衰える：投げ込むモノよりもグジュグジュとした膿などを吐く方が多くなり肩で息をし始め血反吐を吐く悪魔。

「やっと効いたか、妖怪相手だと時間がかかって困りもんだ」

楽しげに嗤ってアイギスへと糸を奔らせるヤマメ。

最初に瞳が光った時には既にヤマメの能力は発動していたようだ、彼女が操るのは『病』それも感染症をメインに操る『病気（主に感染症）を操る程度の能力』といったものだ。

妖かし相手には効きにくいらしいが、時間をかけて中て続けければ、生き物上りの妖かしであれば病気にもなるだろう。

ヤマメが体に教えてくれた今現在の地底のルール。

一言で言えば弱肉強食で済む。

弱者はただの獲物であり、強者はそれを好きにできる捕食者である、この蜘蛛は家畜上がりに教えてくれた。

それを正しく伝え復習するように、強者となったヤマメが強靱な糸で張った巣に縛るアイギスを叩きつけ、そのまま四肢や首、体を締め上げる。

「病気持ちは喰っても不味そうだけどき、ヒツジってのが旨いのかは知らないし興味もある。ここで味わつとくのも一興さね」

貼り付けられ獲物となった黒羊に向けて言葉を放つ捕食者。

四肢に奔らせる糸をクツと引くように指を握りこむと、強く締めあげられて肉に食い込み断ち切っていった。

バラバラと落ちるアイギスの四肢や体、残ったのは二の腕から先がない短い腕と、脇から上しか残されなかった体の少しと頭だけ。

「年経た羊は癖が強い、そのお口には合いそうにないですね」

「死ぬ間際の冗談にしちや面白いじゃないか、その辺は喰って判断するさ…餌は黙ってるといいよ」

体の殆どを失いながらも血反吐と軽口を吐くアイギス。

黙っているようにとヤマメの糸がアイギスの血塗れの舌に伸ばされて、クツと引かれて差し出される。差し出された舌に指先を伸ばすヤマメ…牛と呼んだからタンでも味わうつもりだったのか、スツと右手が伸ばされて糸が奔ると舌を断ち、首も落とした。

底に向かって落下していく首を見送り、舌を摘んでいる中指と人差し指を頭上にかけて垂れる血を舌尖へと持つていくヤマメだが…数滴味わったくらいですぐに足元を睨み始めた。

今し方死んだ者、感染症を発症させて仕留めたはずの相手の魔力が再度現れるのを感じ、首が落ち消えた先を睨むと一瞬光った逆さまの五芒星に気が付いた。

「もしかして余裕があったのはこれかい？ あれで死ななけりや化け物なんだが…」

一瞬見られた赤黒い光、すぐに消えたが魔力はその光の辺りに感じられる。

下方を睨んだままのヤマメ、その耳にパチンという音が届く。響いた音を警戒するように両手を構えてみせるが、その右腕は穿たれて消えていた。

「お!?…なんだってんだこりゃあ!？」

痛みもなく消えた自身の右腕、それを怪訝な顔で見て騒ぐヤマメ。視線を下と右腕交互に向いていると、隣に見えるヤマメの張った蜘蛛の巣にかかる獲物、残ったアイギスの体の一部の後ろにも先ほどの方陣が浮かぶ。

方陣から噴き出す瘴気が体を包むと、首が落下していった方へとヤ

マメの糸を穢しながら進んでいく。

進んでいく先には、首だけとなり落ちたはずの、発症し死にいくだけだったはずの黒羊が全身を取り戻し佇んでいた。

「嬉しい驚きですね、一度殺されるとは思いませんでした、貴女様は良い敵かたき：私も少しばかり本気を見せますので、是非ともその身で味わって下さいまし」

ヤマメを下から見上げて、ヤマメ以上に酷い顔で嗤うアイギス。

口角は歪み歯も見えるがその口元は血反吐で穢れ随分と汚い、頭は元々残っていたモノなのだから致し方ないが、それを差し引いても酷く歪んだ笑み。

完全にやる気を見せたアイギスが先ほどのように無数のスコップを顕現させる、対するヤマメも穿たれて右腕を一度切り落とし、新しい腕をズルリと生やす。

蜘蛛である彼女なのだ、手足と呼べるモノは8本くらいはあつて当然だろう。

「参ったな：正しく化けもんだつたつてか、喰つてる余裕なんかなかったねえ」

自分も正しく化け物であるヤマメが愚痴を吐き、指先から糸を垂らす。

先ほどと同じ手を見せるアイギスに同じく、ヤマメも両手の指先から糸を奔らせゆらゆらと漂わせる。

同じ手なら捌ける、そう考えるヤマメの瞳にアイギスの瞳やシャツ以外の赤が揺れて映った。

顕現させたスコップ、その全ての柄を撫でて轟々と燃やし始めるバフォメツト。

「おつとお、こいつは聞いてないなあ：ちいとばかり相性が悪いねえ」  
暗いはずの大穴がアイギスを中心に明るくなる、話す間にドンドンと数が増えていく灯り。

愚痴を吐いて苦笑いするヤマメを余所に、その愚痴を燃やすように数を増やしていく炎。

三本目の燃え盛る角を燃え上がらせて、スナップを利かせヤマメに



向かい無数にぶん投げ始めた。

「話しておりませんでした。上手に焼く事も出来る愛用の逸品です」  
持ち手の象牙色の部分以外が燃えていて高速回転しているスコップ、燃える丸鋸の刃と化して糸を焼き切りガンガンぶん投げられる。壁に刺さっては燃え上がり、ヤマメの体を掠つては血飛沫飛ばして傷を焼いていく。

糸を伸ばし体を引っ張ってみたり、ランダムに飛んで躲すヤマメだが、壁に刺さり燃え上がるスコップが無数に増えて、糸を伸ばす先が次第に減ると飛んで逃げるだけにならざるを得なくなる。

逃げ方がわかりやすくなると、攻める動きが少し変わった。

右手ではスコップを放りつつ、左手の指は何度となく打ち鳴らし、飛び逃げる蜘蛛を追い込んでいく黒羊。

数本の手足を犠牲にして下方へと逃げるヤマメだが、アイギスが攻めたまま追いかけて、穴の底で待っていたキスメが二人の姿を捉えると青い顔を始めた。

「おおぅ…私はおつかないのに喧嘩を売ったんだろうか？」

小さな声で愚痴るキスメ。

彼女の瞳に写ったのは、所々燃え上がる大穴の壁とその火の手を増やし続けるアイギス。キスメが引く程の酷い笑みでヤマメを追いかけ、追い詰めていく姿。

逃げるヤマメも額に汗して糸ばら撒いているが、殆どが焼け断たれていくのみで、アイギスを止めるには至らなかった。

「ヤマメ、ご愁傷様…取り敢えずあれだわ、えらいのが来たって知らせないと」

両手を合わせてからぼそつと呟き逃げ翔ぶキスメ、変に冷静に見えるのは標的が自分からヤマメに移っているからだろうか、それとも伝える予定の相手なら問題なく処理すると信じているからだろうか？

木桶が逃げる先は暗い洞窟だというのに人工的な明かりが見える辺り。

地底世界の入り口である、誰かが佇み妬み続ける橋の奥であった。逃げたキスメを余所にして、未だに逃げる黒谷ヤマメ。

強靱に練り上げた糸を穴の壁に向かい幾重にも奔らせて、向かつてくる燃え盛る丸鋸を防ぐが、左手を突き出して真つ直ぐに突貫するアイギスが触れた瞬間穿たれた。

綺麗に真円を開けられた強靱な蜘蛛の巣、そこから現れた先ほどまでの獲物が、土蜘蛛の顔面を捉え握りしめたまま地面に突っ込む。

結構な土煙を立てて揺れる地面、図書館の時といい今といい、真つ直ぐ何かに突っ込むのが好きなアイギス…これでは牛と間違われても仕方がないと思える。

「ようやく捕まえましたが、残念ですが楽しい喧嘩もこれにて終いですね」

土煙舞う中で話すのは低く冷たい声。

ヤマメの腹にヒールを刺し、スコップは右の肩口に深く突き刺してその柄に両手をかけて立つアイギス。

話を終えて口内に残る血反吐を吐くと、踏まれる側が覚悟を示した。

「参った参った、お手上げだ！ 刺されて上がらんが私の負けだわ」  
刺さるスコップを見ながら間際の冗談を返すヤマメ。

ルールなのだから仕方がないと潔さを見せる、とそれを聞いたアイギスが表情を変えた。

楽しい喧嘩を終わっていつもの顔、瀟洒で落ち着きのある笑みを覗かせる、表情を変えると刺したスコップを魔力に戻し、踏んでいた足も腹から退けた。

「なんだい？ トドメはいいのかい？」

「上との取り決めとやらを教えて載っておりますし、私は肉は余り…逃げる貴女様から頂けた分でもいい具合に腹は満ちましたし、これ以上食しても太りそうで困ります」

土煙を浴びた体を払って両手も払うアイギス。

払いながら、血と膿混じりの痰を吐くと、ヤマメが朗らかに笑い立ち上がった。

病を操った時のように一瞬瞳が輝くと、熱が引き体の調子が戻る感覚を覚える黒羊…自分も大概だとは思いますが、病を操れるのも大概だな

と感じて笑んだ。

「教えたらサヨナラしそうだし、負けた手前だ治しといてやるよ」

「サヨナラ？ それは残念です、幽香の他にも良い喧嘩友達が出来たと思いましたが、つれない方ですね」

ヤマメの返答を聞いてから落ち着いた表情で言葉を返すアイギス。

この少女と同じ様に楽しく殴り合える幽香の名を出してみると、そっちには反応を示した。

一応蟲の範疇に入るヤマメ、花の妖怪とは面識があるらしい。

「幽香ってあの花のかい？ こりやあ狙う獲物を間違えたわ、キスメにえらいのを押し付けられちゃったよ」

えらいのと言われ訝しむアイギス。

この場で話してはいないが今の立場は休暇中の雇われ者だ。

どちらかといえば偉くない部類に入る彼女。

また勘違いされているのかと、訂正しようか一瞬悩むが、八雲の名を出さずに話す言葉も見つからない。

思い悩む黒羊だったが、その悩みは明るいヤマメの笑みに消された。

何を悩んでいるか知らないが、そう悪い意味じゃない。

笑顔のままアイギスの肩を叩く新しい喧嘩友達にそう言われ、それならいいかと納得する外国産の妖怪。どんな意味合いがあるのか気にせずに、二人並んで色々と話しながら人工的な灯りに向かって歩み始めた。

## 第二十四話 騒ぎの理由はその匂い

黒羊と土蜘蛛がじゃれ合った地底世界の底。

その地底の地面よりも下、熱氣揺らめく地底の更に奥深い場所。

地上から離れた地底世界の中心に建つ洋館の更に地下には、以前までは鬼や獄卒が屯し落ちてきた者達を責めていた場所があった。

今は切り離されてその機能を失っているが、当時に作られた施設や地形はそのままに残り、誰かが落ちればまたすぐにも責め苦が始まるだろう、そんな雰囲気が残る場所。

残る施設、例えば針山。

手入れの行き届かなくなった今は錆びついてしまい、美しい銀と赤のコントラストは見られなくなったが、錆びついていようとその鋭さは変わらない。

上を歩めば突き刺さりそのまま体を穿く鋭さはのこったままで、錆びた今のほうが責め苦には良いかもとすら思える。

他の箇所も同じである。

残る地形、例えば血の池。

手入れをする者が消えたのは針山と同じ、こちらも流れは止まり淀んでいる。

流れない水は腐るだけ、そして流れない血も腐り凝固する。

完全に流れなくなった端の方では表面は凝固しているが、空気に触れないその下部分は腐敗しゴポゴポと沸き立つようにガスを放っている。

稼働全盛期には真っ赤でサラサラと流れていた池は黒ずみ、今では腐敗臭とガスのような何かを湛え死の池と呼べるモノとなっていた。

そんな血の池地獄に唐突に墮とされ現れた船があった。

見た目は木造の船だがその帆には赤い筆文字で『寶』と書かれている。

帆に描かれた文字から鑑みればこの船は宝船という事になるが、乗っているモノは財宝ではなく人であった。

正確には元人間、今は妖かしと成り果てた者達とその守護者。

一人は快活だった幽霊。

封じられてすぐは船の先頭に立ち、誰かに対して強く想う心酔に近い心を宿し、暗く見えない天を仰いでいた…が、その強い心は今では折れかけ、心酔よりもこうなった事への怨む心が強くなってしまい、今の彼女の青緑の瞳には憎しみしか宿っていない。

もう一人は凜としていた尼僧。

墮とされてすぐの頃は、誰かを尊信する想いを瞳に宿し天を仰いでいたが、その心も今では被る頭巾の奥に隠れてしまった。頭巾で隠した瞳には失望を浮かばせるようになった、天を向くことなくただ船の床を見つめるだけとなり、消えてもおかしくない尼公。

変わらないのは彼女を只々守り続ける大きな入道雲だけ、彼だけが天を仰ぐばかりとなっていた。そんな入道雲の見る先に変化が起きる、パラリと何かが落ちる音を桃色の入道雲が確認していた。

「ウンザン…？」

入道雲の動きに呼応する尼公、入道使いと呼ばれる妖怪の彼女が数百年ぶりに天を見上げた。

この地に封じられ、何もない暗闇を見続けて次第に病んだ彼女の心、今も促され見上げただけで、視界が定まる事はなかった…が、今日だけは焦点が定まる。

「あれは…？」

同じく促され天を見た船幽霊。

左手に持つ穴開き柄杓を見つめる先に高々とかざしている。

背に担ぐ錨にうつすらと何かが辺り、そのナニカが届けられている大元を見上げ見つめていた。

三人の瞳に届いているのは光。

なんでもない、ただの外の光だ。

だが封じられこの地に捕らわれた三人には、これが唯の光には見えなかった。

「ヒジリ…」

光を見つめ眩く船幽霊。

呼んだのは彼女達が心酔し尊信した誰かの名前。

偶々届いた光、偶々この地に引つ越してきた者達がいたせいで届けられた光。

地を揺らし土地ごと地上に現れた誰か。

血の色をした屋敷の起こした振動が、彼女達の封をほんの少しだけ歪ませ光を届けた。

血の屋敷が届けた光は血の池に囚われる彼女達の光明となったのだ。

船幽霊の眩きと共に動き出す三人、その光に何かを見た船幽霊と尼公。

忘れかけていた誰かを思い起こさせる一筋の光明に向かい動く。

光に向かい再度ヒジリと、互いに一言だけ眩いて。

血の池地獄の血を迫り上げて、光満ちる世界へと戻ろうと。



左右にゆらゆらと飛びながら進む木桶。

綺麗に灯る赤提灯や橙のような赤のような色合いで灯る灯籠の列の中、誰かを探すようにキョロキョロと回りを見渡して、町並みの中心地に向って飛んでいる。

彼女の心境を知らない地底の住人が、楽しみに揺れ翔ぶキスメに向って色々と声をかけるが、声を掛けられているキスメは目当ての誰か以外を構うような余裕はなかった。

顔つきは普段よりも真剣で、まるで見たくないものでも見てきたかのような青ざめた顔をしている。

「ああもう！ 大将はどこにいるってのさ！ こっちも騒がしいけど、入り口の方が騒がしいってのに！」

口悪く愚痴るキスメ。

拉致があかないと町中を探しながら飛ぶ事をやめて、地底の町並みが一望できる高さまで高度を取り、その位置から大将と呼ぶ誰かを探し始めた。

キスメのいる高さまで上ると地底の入り口から中心地の大きな洋

館まで続く、地下のメイン街道の全景が見える。

「いつものたまり場にもいかなかったし…」

普段であれば笑う声や喧嘩する声が聴こえる飲み屋。

そこが今の探し人のたまり場と呼べる場所。

こうして空から探し始める前にキスメが一番に向かった場所であつたが、今日はそこにはいなかった。平常時なら9割方そこに居て、片膝立てて豪快に酒を煽り、侍らせる者達と痛快に嗤っているはずなのだが…

「もしかしなくてもあれか、あつちに手を取られてるのか!？」

酒場に連なる大衆食堂らしい店や、一本道を入った場所に建つ、娼婦が積めて淫靡な灯りが灯る小さな館や、その近くに並ぶ職人が開く仕立屋など、別の辺りを見ていたキスメが何か思いついたように見る方向を定める。

見つめる先は地底世界の中心部分。

旧地獄跡地の真上に建てられた大きなステンドグラスが目立つ洋館。

和風な建物がほとんどに思えるこの地底世界、その中で異彩を放つ屋敷『地霊殿』がある中心部を見つめていた。

「お！ やっぱりこっちにいた!」

桶入り娘が見定めた先。

地霊殿のすぐ側に建つ誰かの住まい、その屋根の上で大きな盃に並々と酒を注ぎ、煽り飲み干す者がいた。腰まで伸ばしっぱなしの輝く金髪、その上には尖った赤い何かが見えるがあゝの位置にあるのはなんだろうか？

金の髪と半透明なロングスカートを血の匂いが乗る風に靡かせて、地霊殿の扉を眺めている。

取っ手の部分には外から門がかけられて、扉前には色々と積まれていて、それを若く見える鬼や腕力のありそうな大柄な妖怪が抑えていた。

扉の前にある屋敷の庭も床に中たる部分が赤く染まり、その染みは地霊殿の扉の方から広がっているように見えた。

「やつと見つけた！ 勇儀の大将、大変なんだってば！」

高度を下げながら、聞こえるように大声で叫ぶキスメ。

フラフラと下がっていると、勇儀と呼んだ女性の少し後ろにゴトンと着陸し目と耳で周囲を確認していた。

キスメの耳に届くのは隣の女性の喉が鳴る音と、下で踏ん張る者達の息遣いくらい、事件の中心部に近いこの辺りは避難も済んでいるしさすがに静かだ：が、少しばかり匂うなと思うキスメ。

勇儀と呼んだ者が見つめる先と、勇儀の事を見比べ始めた。

「なんだい慌て顔で、こっちもそろそろ慌ただしくなりそうなんだが」キスメが見比べているとクルリと振り向く大将妖怪。

振り向くとよく分かる赤い何かの正体、それは角であった。

後ろから見ても分かるほどに立派な一本の角、額から天を衝くように伸びるそれには1つ星が宿り、天を衝く角にあるそれはこの者以外は輝かず落ちる、そう語るくらいに力強く見えた。

そんな一本角の女性、声をかけられ振り向いたが、その表情は少しばかり笑んでいて、濃く漂う血の匂いを楽しんでいるかのように捉えられた。

「こっちもこっちだけどあつちもあつちだよ！ ヤマメを殺つちまうようなのが来たんだ！」

死んでもおかしくはない争いだったが、ヤマメは死なず今頃は二人並んで歩いているだろう。

その辺りは後述するとして、ヤマメが負ける相手がいるとにわかには信じない一本角の女。一度眉を上げてからキスメを見つめなおすと、偽りないかとキスメに問い正した。

「鬼の大将相手に？を言うわけないだろ！ さっさと行つてくれないと本格的にヤマメが逝つちやいそうだ！」

当たり前のように？はないと言うキスメ。

それもそのはず、この女性は種族鬼で？を嫌う、一言でも？を話せばたちまち角に宿るソレのようにされるだろう。

地上ではとうに忘れられた存在である鬼、たった一人いるだけでも危うい幻想郷のバランスが崩れかねない者達、その頭目と言い切つて



もしい者がこの女だ。

ヤマメと共に恐れられたと以前に伝えたが、身に宿す怪力は土蜘蛛と同等か場合によってはそれを超える者、それがこの鬼の御大将、星熊勇儀であった。

「んなもん知るかい。死んだら死んだでそれで終わりさ、負けたヤマメが悪いつてただけだ：その相手が何者か知らないが、こつちに来て暴れるってんならその時は出てってやるよ」

互いに同じ人間に討たれた逸話があるヤマメと勇儀。

それを互いに知っていてどちらもその力量を知っている二人、その割には冷めたような態度を見せる勇儀だが、鬼という種族は喧嘩や戦いに拘りを持つ者達だ。

この勇儀が拘るのは他者の介入など交えない、一対一の、力と力をぶつけあう真剣勝負。

旧知であるヤマメもそれを知っていて、勇儀もヤマメなら余程の者が相手でも負ける事などはないと考えている、冷たく言い放つのはその信頼に対する裏返しである。

「んもう、じゃあいいさ、パルスイはどこにいるか知ってるかい？」

「パルスイなら橋にいるだろう？　寧ろあいつが橋以外のどこにいるってのさ？」

キスメが地獄の繁華街を通った際にはいなかった者の名を問う。

その問いかけに対して、さも当然の事のように橋にいるだろうと述べる勇儀。

名が出たので先に紹介しておくが、パルスイと呼ばれた者は旧地獄に広がる都の入り口、そこに架かる朱色の橋の番人兼嫉妬心の化身である。

日本に伝わる嫉妬の化身、妖怪橋姫だと思われがちだが単純に嫉妬心の化身であって橋姫ではない：と、心を揺らすような深緑の瞳を揺らして語っていた事がある。

突き放すような物言いも多く、あまり他者と関わらない性格で明るいとは言いがたい妖怪だ、雰囲気からすればこの勇儀の真逆と言ってもいいだろう。

そんな者が景色を揺らしてモヤアと顕現した。

「(っ)よ」

鬼と釣瓶落としの話でも聞いていたのか、返答しながら現れたパルスィ。

勇儀の金よりもワントーン暗い金髪を揺らし、細い両腕を組んで華奢な体を隠すように現れて鬼の隣に降り立った。二人並ぶと勇儀の肩くらいしかないパルスィの身長、華奢な体のパルスィが小さく見えるが、この場合は勇儀がデカイだけである。

「うお!?…脅かすなって、地霊殿の主はどうだい? 少しは綺麗になつたかい?」

不意に現れたパルスィに驚きを見せる勇儀

その拍子に少しだけ盃を傾け酒がチヨロロつと宙に飛ぶが、体毎動かしてその酒を迎えに行きゴクリと喉を鳴らして飲み干した。

一息ついてから預けた者『さとり』という地霊殿の主の事を問いかけるが、綺麗になつたとは何の事か?

それは屋敷に掛けられた門の理由と共に、もう直わかる事になる。

「さあ? 流せというから川に投げ入れたけれど、その後は知らない。

ペット達は水浴びしてたわ」

「水浴びさせたんならそれでいいさ、血腥いよりかはマシだろうよ。で? お前さんまで出張つてきて、こつちの相手でもする気になつたのかい?」

「まさか、近くのほうが心地いいだけよ…羨望も憎悪も私の糧だもの」  
本来ならば地霊殿の中にいるはずのさとりという者とそのペット達。

それらを川に放り込んできた、ペット達は遊んでいたと素知らぬ顔で話すパルスィ。

どうでもいいような態度に見えるが実際どうでもいいらしい、同じ地に住む管理者であるさとり、立場を鑑みれば敬うべきそれに対して興味が無いと態度で示すが、彼女が興味があるのは他者の感情だけだ。

閉じられた地霊殿の扉、その奥深くを見るように目を細める嫉妬の

化身：彼女が言うようにこの奥には羨望や憎悪といったモノが閉じ込められている、正確にはそれらを放つ者達なのだが。

屋敷の庭を赤くしている理由もそれで、ミシミシと鳴り始めた扉からもうすぐ溢れ出てくるだろう：光求め誰かを求めて。

少女達移動中

一方旧都の外の者達。

彼女たちがいるのは緑や青に淡く光る苔が生した鍾乳洞。

外から訪れる者などほとんどいない、ましてや歩く者など余計にいない暗い洞窟。

その広くて暗い洞窟内を並んで歩く妖かし二人。

ハイヒールから響くコトオンコトオンという音を楽しむようにわざと鳴らすアイギス。

その隣には踵のないローファーからのカツカツという足音を立てるヤマメ。

つい先程まで命のやり取りをしていた妖怪二人が、仲良さ気に話し歩んでいる。

「全く、早く言ってくればいいのにさ。温泉目当てで遊びに来たんなら、取って喰おうなんてしなかったってのに」

並んで歩く二人の見上げる側。

黒谷ヤマメがアイギスの顔を下から覗きながら、ほんの少しだけ意地悪さの混ざる笑顔で話す。

自身の流した血に濡れたポニーテールを僅かに揺らして、着ている焦げ茶色のシャツ、その右の肩口にはザツクリと突かれた跡を残しながらも、話をする表情は明るい。

明るく輝く金髪も貫かれた跡が見える右肩も痛々しく見えるが、本人に痛がる素振りは見られなかった。

「煽ってきたヤマメが悪いのです、問答無用で始めたのは貴女の方ですよ？ 私が文句を言われるのはお門違いというやつです」

歩く二人の内の見上げられる側。

ヤマメに下から覗かれる形で話すアイギスも穏やかな笑みを見せ、意地悪に話してきた新しい友人に対して返答する。

こちらもちちらで随分と血で汚れていて、一度バラバラに裂かれたとわかる跡が、きつちりと着込んでいる三つ揃えのスーツに見られるが同じく表情は明るいものだ。

一度の命のやり取りを経て、下の名前で互いに呼ぶほどには仲良くなつたらしい。

「喧嘩を売った私が言う事でもなさそうだが、先に縄張り荒らした奴が何言ってるのさ。それよりあれだ、タイミングが悪かったね。お目当ての風呂だが今は楽しめそうにないよ」

自分に対しても話すアイギスに対してもご尤もな事を話すヤマメ。意地の悪い笑みから悪戯な笑みに表情を変えて、タイミングが悪かったと見上げたままに話している。先程からこうして見上げっぱなしのヤマメ。

首が疲れるほどの角度ではないが、見上げられっぱなしはなんとなく気になる黒羊、すこし浮くか離れるかすればいいのにと考えている。

が、ヤマメからすれば普段話す相手、今はどこかの住まいの上に立つ鬼と同じくらいの背をした友人は、見上げるにしても慣れた角度で疲れるような事はないようだ。

「タイミング？　楽しめないとはどういう意味合いでしょうか？　お休みだったり、枯れてしまったり：期間限定で湧いていたりするのでしょうか？」

気になるからか、ほんの少しだけ猫背になるアイギス。

歩くにしても立つにしても、シャンと背筋を伸ばしていたアイギスが背を丸めた事でなにか気を落としているように見られたようだ。

見上げながら歩いてきたヤマメが少し近寄り、低くなつた肩に腕を回して悪戯な声を出して語る。

「期間限定つてのは正解かな、今は違うモノが湧いててねえ：そろそろ気がついてもいい距離なんだが、私らが匂うからわからないかもね」

肩に回した腕を利用し、アイギスに体重を預け背を伸ばすヤマメ。そろそろわかる距離というのを、こうして背を伸ばせば見えるくら

いだと姿勢で表し伝えている。遠くを見るようなヤマメに釣られてアイギスも背を伸ばし遠くを見るが、つま先立ちになったヤマメが騒いですぐに背を丸めた。

見えないと少し眉根を寄せる長身の女だが、匂いも言われたなと思いだし、少し鼻を鳴らしとすぐに気がつくことが出来た。

「血の匂い？」

「そういうこつた、本来なら中心地の屋敷周辺で温泉が湧き出してるんだが、ちよつと前から血混じりになつちまってねえ。原因もなんとなくわかつてるが手が出せないのさ」

ケラケラと笑うヤマメ。

名物と言える物が楽しめない状態にある、そう言いながらも嗤うのは彼女が明るいから：ではなく、彼女達からすれば手が出せないからどうしようもないと開き直っているからのようだ。

温泉に混じる血は地下深くから立ち上ってきた物だ、光目指して上ってきた誰かが吹き上げさせた物：いくなればかつての地獄の名残であり、その管轄は地底世界ではなく別の場所にある。

が、そこは後々に述べよう、二人が何かに気がついたようだ。

「いや、タイミング：良かったかもしれないねえ、アイギスちゃんよお」

声色は変わらないが笑みが変わるヤマメ。

ちゃんなんて付けて呼ぶのはわざとだ、そう言うとき変な顔をするアイギスの事を面白がり敢えて付けて嗤っている、がそれはこの場ではどうでもいいか。

話を戻す。

名を呼んでからスンと鼻を鳴らすヤマメ。

一気に濃くなつた血の匂いに気がつくとき、アイギスの肩に回していた腕を下げ手を取り走り始める。勇儀が取りまとめ力業で閉ざした栓、地霊殿の扉を閉ざす門。血の池地獄を管轄する現地獄の偉いさんが来るまでは持つだろう、そう考えていたその栓が外れたと、匂いから気付き一気に走り出す。

手を取られ連れられる形で走りだしたアイギスも匂いに気づいた、

溢れるように一瞬で濃くなった血の匂い、温泉よりも心地よいものを  
浴びる事が出来るかもしれない、そう語るように笑み走りだした。

## 第二十五話 魅せる怪力乱神

渡る者の途絶えた橋を駆け抜けた二人。

先導し手を握る土蜘蛛と、手を取られ後に続く黒羊。

真つ直ぐに走る二体の大妖怪が血の匂いと騒ぎの中心へとたどり着くと、好ましい景色が広がっていた。

栓代わりに固く掛けられた門はへし折れて、留まることを知らない濁流となつた血の流れが大きな洋館の正面扉から垂れ流されている光景。

濁つた赤と濁つた匂いを周囲に撒き散らしながらも、引く雰囲気を見せずに轟々と流れ続けている。まるで大津波にあつた町のように血の波に流されて住まいは動き、町並みは歪んでいる。

「こりやまた派手に出たもんだ、他のは無事かねえ」

走る途中で迫ってきた血の波。

それを避けるように少しは頑丈に見えた酒場のある建物、その屋上で話すヤマメ。

轟々と流れている血の川を眺めながらも誰かを探すように周囲を見回している、キヨロキヨロと二三度辺りを見回すと遠くのほうで争う誰かの姿が見られた。

「お、勇儀見つけた。喧嘩の相手は…なんだいありやあ?」

勇儀の姿を見つけたヤマメ。

元気に戦う友人を見つけ嬉しそうだったが、友が争う相手に目をやると少しだけ目を細め、首を伸ばして顔だけを前に出した。

争う相手その内の一人は、真つ赤に染め上げられた半袖に太腿丈のキュロットスカートを着て大きな錨を振り回す者、もう一人は同じく血に染まつた法衣のような服を着て輪っか片手に戦う者。

その二人は人型で何かしらの妖怪だとわかるが後者の側に寄り添い、輪の動きに呼応して動く何かヤマメにはわからなかった。

「なんでしようね、ピンク色で少し可愛いですが」

ヤマメの言葉はただの独り言だったが、それに返答するようにアイギスも述べる。

二人が見る先には確かにピンク色がある、正確にはいるというのだろうか。

法衣を着て徒手空拳を放つ女に合わせるように、動きをカバーするように独自に動いて、時に呼応して自由自在に大きさも姿も変えるピンク色の雲。

その雲には凛々しく逞しい男性の表情が浮かんでおり、険しい顔で勇儀に拳を放っている…それを可愛いというが、あの庭師といいこの雲といいアイギスの男性趣味はそっちなのだろうか？

「入道雲のどれか、でしょうか。ここにはいないはずの妖怪ですが、うちの下に封印されている妖怪のどれかにいたと記憶しています」

二人の後ろから聞きなれない声がある。

心の奥に響くような静かな女の声色。

ヤマメは声の主がわかるため振り向かないが、聞きなれない女の声に振り向くアイギス。

「ピンク色のアレが雲？ その割には物理的な拳を振るっているように見えますが？」

「そういう妖怪ですから、貴女は…」

「なるほど、では聞きますがどちらが敵でどちらが味方だと思えば宜しいのでしょうか？ 今ここで話すよりも、終わらせてからの方が落ち着いて話せると考えますが」

佇んでいたのは三つ目の女性、全身ずぶ濡れで髪や纏う衣服の袖、スカートなどから雫を滴らせる誰かが何かを言いかける。

けれどその言葉はアイギスの声に遮られた。

アイギスの物言いに振り向いて嗤うのはヤマメ。

濡れ姿の三つ目の正体を知るヤマメからすれば、今の少しの会話だけでもそれなりに楽しかったようだ、この三つ目の女性こそこの地の管理を任された者、地霊殿の主古明地さとり。

真つ先に血の池に飲まれた後、勇儀に拾い上げられてペットと共に川に投げ入れられた雑な扱いをされたこの地の管理人であった。

「額に角を生やした方が味方、それ以外は見慣れない者です…それより…」



「ふむ、ご助言感謝致します…ヤマメ、あちらの方に、ご挨拶して参りますのでこの方をよろしくお願い致します」

聞きたい部分の返答を聞いてすぐに飛び去るアイギス。

会話の途中でいなくなつた黒羊のいた辺りに、低めの身長に見合つた小さめの手を伸ばさざとりを置いてすぐに飛んだ。

アイギスを捕まえられず空を切るだけのさとりの手、それを見て再度笑い声を上げるヤマメ。

相手の心を読みとり好きに覗けるといふ三つ目の覚妖怪古明地さとり。

「アイギスちゃんはずれない女だったか、大失敗だねえ、さとりよお」  
飛んでいったアイギスの背を三つ目で睨むさとりと、それを眺めてゲラゲラと嗤うヤマメ。

忌み嫌われる者達しかいないこの地で更に嫌われるその力、それを見慣れないアイギスにも行使し、上手く利用し管理人としてこの場を納める算段だったようだが…何を読み話そうとしても聞かれなくては意味がない。

足を止める事も話す事にも失敗したと、見た目でわかる仕草で止まったさとりと同じ方を眺めヤマメが楽しそうに嗤う、その笑いはさとりとアイギス二人に対して向けられていた。

旧都に向かう途中、私に対して問答無用などと言っていたがそれはアイギスの方じゃないのかと、腹を抱え嗤っていた。

アイギスの飛ぶ先で争う者達。

三対一という数の差がありながらも、余裕を見せあしらうのは先ほど味方と言われた無勢側の女。振り下ろされる錨を片手で受け払い、女の体よりも大きな入道の拳も片腕で受け殴り返す女性、その動きはまさに鬼だった。

「何故鬼がいて、何故私達の邪魔をするのよ！」

「知らないわよ！　ここって地上じゃないの！　鬼がいるからまだ地獄!？」

文句を言うのは多勢側の二人、正確には三人だが一人は会話しないので二人でいいだろう。

殴り返されかき消された入道雲の拳を再度顕現させるように、両手で少しの印を組み騒ぐ尼公。

その会話相手は同じく受け払われた錨を強く握り直し、敵対する鬼を睨む船幽霊。

出てきた瞬間こそ荒れ狂い、邪魔する者、邪魔してくるはずだった『人間』達に向けての憎しみや怒りを露わにしていたのだが：相手取るのが人ではないとわかってから変に冷めていた。

「そっちの錨が正解さ、ここは地獄、正確には旧地獄ってところだ。地獄に鬼がいるのは当然だろう？ さつきから温いが、血の池噴き上げた気概はどうしたい？」

軽く握った右拳を左手で受け、パンパンと鳴らし煽る勇儀。

態度も雰囲気も手を抜いているとわかる雰囲気、荒事にいる鬼らしくはないが喧嘩というよりも見定めようとしている為、敢えて抑えているようだ。

忘れ去られた自分の事を出会いから鬼と呼んだ者達、二人共鬼を知りその力も知っているというように全力で退治しようと、正面から向かってくる妖怪二人。

狡猾な攻め方しかしなくなった人間を見限り地上を去った鬼が、正面から挑んでくる元人間二人をほんの少しだけ気に入れて、争いを楽しみ力量を見ようと捌いていた。

「水蜜、どうするのよ!？」 出てきてこれじゃ封印どころか消されるわ!？」

「うっさい一輪！ 出てきちゃったしどうにかするわよ！ 黙って殺られてなるもんかっつての！」

腹を括ったと表情を引き締める、水蜜と呼ばれた船幽霊。

轟々と流れる地の川近くへ移動すると左手に持った穴空きの柄杓を川に伸ばし、勇儀に向って掬ってかけるような仕草を見せた。

何をするのかと眺める勇儀。

眺めていると村紗の足元に地の水流が纏まり始め、グルグルと螺旋のような動きを見せて、赤い大蛇のような姿になり鬼の元へと畝り動いた。

「派手な技だなあ、血を操る妖怪なんて知らんが、中々面白い！」

眼前に迫り鎌首上げる血の大蛇、それに向けて右足を引いて少しだけ構えてみせる勇儀。

確かに勇儀の言う通り血を操る妖怪は知られていない、血を好むのが妖怪ではあるが血そのものを今のように操るといふのは聞かない。それでも村沙が操れるのはこれが血の『池』で血の『川』となつていくからだろう、彼女は船を沈めてきた船幽霊、溺れるモノである血が池となり川となる今なら操れるようだ。

「面白いで済まさないよ！ 鬼なら血に溺れたらいいんだ！」

携える穴空き柄杓を勇儀に向ける村沙。

それに合わさり大蛇の口が開くと、勇儀に向かい猛然と奔る。

赤い一本角が蛇の口内に消えたように見えた瞬間、周囲を響かせる程の咆哮が轟いて蛇が口先から振るえて掻き消えた。

何かでかき消されたと身構える村沙だったが勇儀は特に何もしていない、ただただ吠えただけでこうなつたのだ、声すら武器になる鬼…その咆哮が大蛇を口内から散らしてみせた。

「水蜜だけじゃないって事、忘れないで欲しいわ！」

吠えた勇儀に向かい叫び法輪を向ける一輪。

蛇の口内から現れたばかりの鬼に向つて巨大化させた入道の両手の拳が迫る、ガツチリと組まれた両手の指、固く組み一つの鉄槌と成つた雲山のスレッジハンマーが勇儀の頭上から振り下ろされる。勇儀の佇む建物毎破壊する質量と勢い、だが雲山の両拳は地面に触れず一定の高さで止まっていた。拳の下の開いた空間、そこにいるのは鉄槌を片手で受け両足を少し地に埋めた鬼、片手の平を雲山の両拳に宛てがい下から小さな動作で打ち上げると高々と、打ち上げられる雲山の両手。

「地に足ついてない拳なんざ怖くないねえ、踏ん張りが足りないよ！」  
「このっ化け物め！」

「おうさ！ 化けもんさ！ こちとら生まれて今までずうっと鬼だ。

鬼の四天王、力の勇儀つてなああたしの事だ！」

勇儀の名乗りを受けて一瞬固まる元人間二人。

彼女達が外の世界で封じられる前、その頃から悪名轟いていた鬼、その四天王で力の勇儀といえば当時の妖怪を知る者からすれば…固まるのも無理は無いだろう。

だがここで諦める気はない二人、再度柄杓を動かして血を集め蛇を操る村紗と握る法輪に力を流し、雲山の体を肥大化させる一輪。

別の場所に封じられた誰かを救いたくて出てきた二人。

取り仕切る旧都の街を守るつもりで鬼。

それぞれが引けない理由で動く中、何の思い入れもなく遊びに来たのが横槍を入りにきた。

再度勇儀に迫る大蛇。

それに対して拳を構える勇儀だったが、その拳が振るわれる前に後方から聞こえたパチンという音と共に大蛇が消えた。

次はなんだと首だけで振り向く鬼、角度を変えた一本角の先には一対のアモン角が見えた。

「誰だい？ 角なんて生やして、知らぬ同族にしちゃあ見慣れないが、こいつらとも感じが違うなあ」

振り上げた拳を下げる相手が取られ、少し機嫌が悪くなる勇儀。

大蛇を殴るために構えた右腕はそのままに、突然訪れた見慣れない妖怪、村紗達のように血塗れたスーツ姿のアイギスを睨む。

念のため言っておくと、見た目は近い濡れっぷりだがアイギスの方はヤマメに寸断された時のソレである。

「お初にお目にかかります、ご挨拶と助太刀に伺いました」

返答をし、下げ慣れた頭を垂れるアイギス。

それを受けて機嫌の悪さを表に出すように立っている屋上の床、瓦を足を動かさずに踏み抜く勇儀。

横取りしたのが挨拶なら随分な挨拶で気に入らない。

それともこれから挨拶をしてくれるのか？

そもそもこいつは誰だ？

と考えていたが、面を上げたアイギスの追加の挨拶を聞いて機嫌の悪さは増した。

「三つ目の管理人殿から貴女様の事を聞きました、少しのお手伝いを

と思いついて寄ってみましたが、必要ないようにも見えませぬ」  
勇儀に向って話すアイギス。

少し話したさとりの事をこの地の管理人だと言い切り、その者から頼まれたと嘘をつく。

さとりを地霊殿の主だと断定したのは勘でも？でもなく、はつきりとした確証があつての事だ。

ここにはいないはずの妖怪と言いつつたさとりから、この地を管理し把握しているといった風合いが見て取れるし、うちの下に封じられた妖怪という言葉からも地底の中心地に住まう者だと察することが出来るだろう。

ピンクの雲を操る者とその隣の血の池を動かした者、彼女達の血濡れた身形と地霊殿の現状を見れば彼女達が何処から出てきたのかも推測できる。

「ほう、管理人からねえ。ヤマメと喧嘩してた地上の妖怪ってのはお前さんかい」

今し方まで見ていた妖怪二人を余所に、すぐに別の者に目が移る鬼。

正面から向かってくる相手を気に入り楽しみながら見定めていた最中、機嫌はそれなりに良かったはずだが、そんな中唐突に現れたアイギスのせいでその機嫌は傾いた。

さとりを管理人と呼ぶ者はこの地底にはいない、あれは管理を任せただけの覚妖怪というだけで、地底の皆に認められて成ったというわけではなかった。

そんなさとりを管理人と呼ぶのは極々偶に訪れる地上の妖怪くらい、それもあの胡散臭い地上の管理人の息がかかった者くらいである。

それを話さず身分を隠す、強引だが偽っているような者が現れたせいで機嫌が傾いたようだ。

「良い喧嘩でした」

「ああそうかい、そっぴやあその管理人はどうだった？ 血だらけだったんだがちよつとは綺麗になつてたか？」

「匂いはしましたが、ずぶ濡れで、ぱつと見は綺麗な状態でした、ヤマメに預けたので多少は安全でしょうが、何か？」

傾いた機嫌がほんの少しだけ戻る勇儀。

自信が認められた友人であるヤマメとやり合い尚生きている黒羊。

ヤマメが勝てば喰うか散らすかして終わりだと知っている勇儀、こいつが生きているならあっちが死ぬか喰われたかしたと地底の妖怪らしく邪推していたが、ヤマメの生存を聞いて少しだけ機嫌が戻り、不機嫌からご機嫌斜め程度になった。

けれどこれ以上機嫌が良くなる事はない、がその話は後述しよう、この場では番待ちをしている者達が三人ほどいる。

鬼と悪魔、話す二人のところに再度向かう血の大蛇。

完全に放置して話していた二人を余所に、力を練り上げて大きく逞しい姿と化したソレを、勇儀とアイギスのいる建物毎飲み込ませる勢いで動かす村紗。

「悠長に話してくれて、また忘れられるとか我慢できるかっての！」

流れでた血の池の残りほとんどを纏めた大蛇が迫る、向かう途中にある住まいをなぎ倒し進む姿は赤い水害といったものであった。

温泉と入り口の川、後は月を移す地底湖くらいしかない地底で水難事故と呼ぶには規模がでかく結構な被害がでた旧都の繁華街だが、住人皆に水難の相が出ていたとも思っただけで諦めてもらいたい。

「いい気概だあ元人間、もうちょっと頑張ればあたしに届く蛇に出来そうだな！ 次があったら退治して見せとくれよ！」

軽く右の拳を握り、左手の盃煽りながら大蛇と睨み合う鬼。

飲み込もうとする激流が勇儀の眼前にまで迫ると、拳を振りかぶるモーシヨンが見えないほどの速度で右腕が動く。

勇儀の拳の先に空気の層が出来るほどの疾さ、その空気の壁を軽々貫いて撃ち抜かれる鬼の拳。ボンという大気を抜く音と共に大蛇が殴り抜けられて、その奥にいた水夫姿の船幽霊に向けて拳圧が飛んだ。

勇儀に向けて錨を向けていたのが幸いしたのか、拳圧が体に触れる前に錨をひしゃげさせてそのまま後方に殴り飛ばされる船幽霊。

遠くの地面に斜めに着地し、土煙を上げて旧地獄の繁華街の中にその身を埋めていった。

「水蜜!? ってこっちもこっちでマズイか!」

鬼にぶつ飛ばされた船幽霊の名を呼ぶ尼公、水蜜に一輪と呼ばれた尼僧も、蛇を鬼に押し付けたもう一人から攻められて、防戦一方となっていた。

一輪が操る見越し入道という妖怪、雲山が放つ拳は触れる前に悪魔が鳴らすパチンという音と共に消されていく。アイギスの正面に現れ上から見下ろす形の雲山がふ、どれほどサイズを大きくしてもその拳は届かなかった。

「寡黙な紳士も好ましいのですが、あちらは終わりましたしこちらも終いと致しましょう、死なない程度には加減して差し上げますので」  
珍しく自分から加減すると言うアイギス。

気に入ったわけではなく、入道を眺め穿つ中である事を思い出していた。

外で世話になったとある寺の者達、彼女達が探し続けている身内の中にピンク色の雲妖怪がいたような、頑固者で話さないが一緒にいる尼公を無言で守る紳士がいた、そんな話を聞いた気がすると思いついたようだ。

一度結んだ縁のある者、世話になった者の探し人を殺めるのは気が引ける黒羊、でかかど育てていた雲山は一輪の消耗と共にサイズを小さくし始めて、頭を残してアイギスに穿たれた。

残る一輪も真つ直ぐに突っ込んでくるアイギスに、携える法輪を使いながら徒手空拳を放つが、殴打を無視して突っ込んでくるアイギスの右手に捕まり、水蜜の飛んでいった辺りに向って胸元掴まれゴリ押されていった。

「真つ直ぐ行くかあ、やり口は気持ちいいねえ」

一輪を盾代わりに並ぶ住まいを数軒突き抜けて走る黒羊。

そろそろ船長の沈んだ辺りに差し掛かると、ヒールを地に差しブレーキをかけ右手を引いて一輪をぶん投げる。

数枚の壁を抜いて水蜜のいる辺りまで投げ込まれた一輪、ギリギリ

残る意識をハッキリさせるように頭を振るが、後から飛んできたスコップが頭巾で隠れた頭を弾いた。

カコオンと良い音が響くとガクリと意識と頭を落とす入道使い。不意に訪れた静けさ。

音を立てて流れていた血の川は纏まった所を殴り消され、その殆どを霧散させた。

残るのは血で汚れた地底世界と、鬼と悪魔が暴れたせいで盛大に壊れた旧地獄の繁華街。

「これは…封じられていた妖怪達の方がマシだったのでは…」

引いた血の匂い、その代わりに感じる埃や土煙の匂い。

そして終わらない争いの匂い、全部を捉えてポツリと呟くのはこの地の管理人であるさとり。

これまでもそれなりに騒がしい事はあった。

突然やってきた少数の鬼達、今暴れている一本角を筆頭にここ何処かに住まわせると言って先住と争い、今日のように繁華街が荒れた事もあった。

その時は一方的に終わり、短時間で済んだからまだ良かった。

今日も出来ればそうあって欲しい…が、啗う土蜘蛛の思考からは嫌な事しか読み取れない。

鬼と似たような存在の土蜘蛛、それが負けて啗う相手。

この後確実に酷い事に、今より酷い事になる。

こんなつもりで上に知らせたわけではない、来れば面倒事に巻き込まれると知らせる為にわざわざペットを使いに出したのに…まさか面倒が上から来るとは考えなかったさとりであった。



## 第二十六話 語り合う怪力乱神

モクモクと土煙立つ地獄街道。

先に血で濡れていたから幾分マシだがそれでも舞い上がる土煙。

その原因は繁華街でも気にせず拳を振るった鬼。

それと、本来であればいいはずの上から来た悪魔。

この二人が騒ぎを沈めようと更に騒ぎを起こしたのが原因であった。

最初の騒ぎ。

閉鎖した地獄跡地から現れた者達が起こした血の池地獄は既に鎮まり、後は住人総出で地域一括清掃でも始めれば終わる、終わるはずであったのだが…

「さとり、そろそろやめて。もうお腹いっぱい」

旧地獄街道の少し高くなった部分。

今地面で騒いでいる鬼が普段のたまり場としている酒場、その屋上の角に立つ女が文句を言う。細く華奢な腕で自身の腹を抑えて撫でる緑眼の妖怪、騒ぎが始まった当初は地霊殿の地下深くから届く『羨望』や『憎悪』といった『妬み嫉み』に含まれる感情を味わい楽しんでいたが…今は隣にいるジト目から漏れ続ける僅かな憎悪を感じてしまい、もういらないと呟いていた。

「なら止めてきて下さい、そして唾うなら顔に出して下さい、気持ち悪い」

文句を言ってきた緑眼の女、嫉妬の化身水橋パルスイを睨み文句を言い返すさとり。

川遊びに飽きたペットの黒髪黒翼の少女をあやしなから、モヤッと現れた後から今まで、好き放題に言ってくる嫉妬の化身を妬むような瞳で睨んでいた。

その顔にある瞳は片方を瞑っている。

睨んでいる瞳は開いている右目と、体とは管で繋がる第三の目、種族の象徴であるサードアイでパルスイを睨み憎まれ口を吐いていた、何かするため瞑っているわけではなく唯の癖だとして述べておく。

パルスイがお腹いっぱいだと言っているのはこの憎まれ口が原因だ、先程からちよつとずつ吐かれるさどりの憎まれ口、その可愛い憎悪がパルスイに伝わり、満ち足りた腹に後から後から届いていた。

「食い過ぎて腹一杯ならパルスイも暴れてきたらいいのさ。勇儀でもアイギスちゃんでも、どっち相手でも大差ないから行つてきたらいいさね」

嫉妬の化身と覚妖怪の会話を茶化したのは土蜘蛛。

ケラケラと笑い、この騒ぎを楽しんでいるような振る舞いで、パルスイに行つて来いと煽る。妬みも嫉みもほとんど現さない勇儀も、心を読み動かそうとしたさどりを放置し、自分が聞きたい事だけを聞いて好きに動いたアイギスも大差ないと理解しながら煽る。

「嫌よ、面倒臭い。貴女こそ行かないの？ 二人より三人の方が楽しい喧嘩になるんじゃないの？」

一対一を好む勇儀、それを知りながら煽り返すパルスイ。

互いに軽口を言い合うのはこの騒ぎが収まるとわかつているからだろう、アイギスの力を知らないパルスイは当然として、争つたヤマメもさすがに勇儀には叶わないだろうと考えていた。

ましてや機嫌が悪い雰囲気の勇儀、理由は分からないがご機嫌斜めな鬼の大将相手に地上の妖怪が敵うはずがない、そんな事を考え文字通り高みの見物をしていた。

そんな三人が見下ろす先。

少しの血だまりが残る旧地獄街道のメインとも言える通り。

入り口から地霊殿へと続く道。

その入口側に立つアイギスと、地霊殿を背負う勇儀が互いに見つめ合い立っていた。

——大将殺つちまえ！——

——新参者もいいとこ見せろ！——

——暴れる花見て酒盛りだ、早く持つてこい——

見つめ合う二人を取り囲むのは、何処からか集まってきて思い思いの声援をかけ荒事を楽しむ地底の住人。この喧嘩を肴にしようと酒

を持ち込む者もいれば、二人の勝負をネタにして種銭集めて賭け事に興じる者などと様々な馬鹿が集まっていた。

けれど声を浴びる者達はまるで気にしていない素振り、回りのガヤなど届かない、視界にも映らないといった面持ちで二人見つめ佇んでいる。一本角は不機嫌そうな表情で、一对角は瀟洒に笑んで、似たような上背の二人が真逆の顔つきで見合っていた。

「まずはお疲れさんだ、取り敢えず手伝い感謝しとくよ。あたしは星熊勇儀、この旧都の繁華街を形だけ仕切ってる鬼だ」

右腕は腰に左腕で盃を煽り続ける勇儀が形だけの礼を話す。

形だけとはいえ名を話し礼を述べられたアイギスもいつもの仕草で自己紹介済ませた。

胸に手を当て頭を下げる黒羊が面を上げる前に勇儀が少しの間掛けをしてくる、彼女が聞きたい事は一つだけ、何故嘘をついたのかという事だけ。

「アクマねえ…まあそれはいいさ、アイギスさんよ、一つ聞くが何故？をついた？ 身分を偽る理由は何かあるのかい？」

強い瞳でアイギスを望む勇儀。

八雲の使いという身分を隠した理由は何か？

八雲の名は出さずにそう問いかけるが、問われた側のアイギスはよくわかっていないようだ。

何からバレたのか？

何故に強く睨まれるのか？

横取りという形で余計な手助けこそしたが、繁華街の顔役だということなら結果早く済んでよかったのではないか？

そもそも何故怒りを買っているのか？

色々と思う所はあるが、取り敢えず聞かれた事を述べる事にしようだ。

「休暇を頂きました、今は私個人としてこちらに遊びに来ているのです。騙したと叱責されるなら謝罪いたしますが、それほど怒るような事なのでしょうが？」

素直に話し騙した事なら謝罪すると話すアイギス。

騒ぎは一旦収まりを見せたのだから血で汚れた体も温泉でさっぱりとしたい、後で付き合えと言われているがそれはまだ後でもいいだろう。そんな考えでさっさと切り上げる算段のようだが、最後に付け加えた余計な一言のせいで火に油を注ぐ形となった事には気がつかない。

何故怒るのか、真っ向から問われ更に機嫌が悪くなる勇儀。

人を墮とす悪魔、時には騙して、時には偽ったりもするが大概は真正面から強引に、ほとんど難癖に近い形で他者を墮とす種族であるアイギス。

そんな悪魔と対するように？を嫌い、それに付随する偽りや騙しなども好まない鬼の四天王星熊勇儀、やり口も思考も真逆に近いのだから噛み合わないのは当然といえれば当然だろう。

「休みだからその立場にないってか、クビにでもなったというならわからなくもないがちと苦しいねえ…何しに来たのか、聞いてもいいかい？」

「休暇を利用し温泉旅行、ついでに血気盛んな方との触れ合いに…」  
「その物言いも気に入らないなあアイギスさんよお、もっとハッキリと言ったらどうなんだい？」

怒りを向けてくる？嫌いに嘘偽りなく述べた事で更に怒りを買うアイギス、

勇儀が最も気に入らないのは血気盛んな者との触れ合いという部分、八雲の子飼いの者が立場を隠しそう言うのなら、上から様子見、もしくは喧嘩を売りに来たと思えないのだろうか。

地底でもその胡散臭さが有名な八雲紫、その子飼いとでもなれば物言いも似るだろう…鬼らしく単純に、難しく考えずに結論付けてそう言ったらしい。

その子飼いの黒羊、？も詭弁も使うが性根は結構正直者で、それ故勘違いされる事が多い、ちょうど今のよう。

「何を言っても信用されそうにないですしまどろっこしいのは苦手です、こちらのルールでお話しませんか？」

パツと見では争うため構えではないし得物も農機具に見える為煽

るには弱かったが、アイギスがスナップを利かせて勇儀の頬スレスレにスコップを放ると表情が変わった。

埒が開かない会話に飽きて力業で拉致を開ける事にしたようだ、愛用のスコップを顕現させトントンと数度担いだ肩を叩く。

この形でアイギスの戦闘態勢と呼べる形なのだが、まだ反応が薄い勇儀。

パツと見では争うため構えではないし獲物も農機具に見える為煽るには弱かったが、アイギスがスナップを利かせて勇儀の頬スレスレにスコップを放ると表情が変わった。

刃先が鬼の頬を薄く掠めて、血が滲まない程度の線傷が入った事で正しく煽りとなった。

傷とはいえない傷だが、頑丈な鬼の体を傷つける得物を放り正面から喧嘩を売られた事で、この悪魔がなんであれ真つ向勝負を挑んできた事には変わりはないと切り替えたようだ。

勇儀の顔に浮かんだ線傷、そのおかげで機嫌の悪さは影を潜めた。傷とはいえない傷だが、頑丈な鬼の体を傷つける獲物を放り正面から喧嘩を売られた事で、この悪魔がなんであれ真つ向勝負を挑んできた事には変わりはないと切り替えたようだ。

空になった盃は左手に持ったままアイギスの煽りに乗る、ヤマメに勝ったというのが本当なら加減はいらないはずだが、日和つた地上の妖怪がどれほどのものかとまた見定める事にしたらしい。

「ごめい」

「お……尋常にいこうか！」

スコップ片手に始まりを告げる黒羊、決まり文句を返した勇儀。喧嘩の先手は返した側の勇儀から。

ただ真つ直ぐに突き進み一瞬でアイギスの正面に迫り、体よりも後にきた右拳を型も何もなくただ振るう。村沙に振るつた時のように空気の壁を打ち抜いて突き進む右の拳、アイギスがスコップで受けるがその拳が止まることはなく、安々とスコップを撃ち貫いた。

盾代わりのスコップを殴り抜いても勢いが変わらない勇儀の拳はアイギスの顔面を捉え振り抜かれた、斜め上から下に向かい振るわれ

て後頭部から地面に叩きつけられるアイギス：殴られた顔面からメシヤツと碎ける音を立て、体を数度バウンドさせてから倒れた。

「おいおい、一発か？ もうちよつと頑丈かと思つたが、さつき見たのは良いところだけだったのかね？ ヤマメとやり合つたつてのも…」  
アイギスの血に塗れた拳に向かい語る勇儀。

ヤマメとやり合い生きている、なら土蜘蛛に勝つほどの相手かと期待し、見定めるつもりで腰を入れず腕だけで振りぬいた拳だったが：期待するほど頑丈でもなくあつさり死んだ黒羊、やり合い勝つたのではなく逃げたのか？

そう言いかけた時に横たわつたアイギスの体が浮く。

足元には例の五芒星、沸き立つ瘴気を浴びて碎かれた顔が戻ると、その表情は笑んでいた。

「長く生きておりますが一撃、それも拳で殺されるとは初体験です：ここは楽しい方ばかりいらつしやる、過ごすには堪らないですね」

何事もなかつたかのように戻り嗤うアイギス。

確かに仕留めた感触はあつた、あの感触は間違いないと拳とアイギスを見比べる勇儀だったがすぐに考えを変えた。このケンカ相手は殺されると言つたのだ、なら正しく死んで蘇つただけか。

一瞬で燃え立つ黒羊の得物、受けている得物が一瞬で燃え上がり勇儀の手の平や衣服を炙り焼いていく：が、焼き焦がすに至る前に勇儀が受け手を握りこみ、強引に掴みあげて投げ捨てた。

そのまま握つた拳を振ろうとするがアイギスの姿はない、どうやら投げ捨てたスコップを握つたまま得物と共に勇儀に投げ捨てられたようだ、上手く逃げられたと関心する勇儀。

数秒はそのまま拮抗した二人だが臂力は勇儀が上のようなようだ、上段から振られたスコップが少しずつ押し返される。押せると判断した勇儀が空いた左手を握りしめ拳を振るう姿を見せるが、それを制するようアイギスがスコップの柄を撫でる。

一瞬で燃え立つ黒羊の獲物、受けている獲物が一瞬で燃え上がり勇儀の手の平や衣服を炙り焼いていく：が、焼き焦がすに至る前に勇儀が受け手を握りこみ、強引に掴みあげて投げ捨てた。

そのまま握った拳を振ろうとするがアイギスの姿はない、どうやら投げ捨てたスコップを握ったまま獲物と共に勇儀に投げ捨てられたようだ、上手く逃げられたと関心する勇儀。

「あれ、あつちいんだよなあ」

炎上するスコップを見てぼやくのはヤマメ。

少し前にあれで散々に追い回された事を思い出し、苦笑しながら愚痴をこぼす。

隣にいるさとりはその時の状況を視たようで呆れた目つきになっているが、もう一人のパルスイはヤマメが愚痴る程かと考え頷いている。

三者が三様に眺めていた相手、突然手を焦がされかけた勇儀も当然それを感じている。多少の攻撃では傷つかない鬼の体、それを傷つけて炙り焦がすアレはなんだと訝しがる。

そんな疑惑の混ざった視線に気が付いたのはアイギス、地底住まいだから皆これが気になるのかと、視線が向けられたスコップを撫でて一言だけ説明する。

ただの得物ではないと勇儀に伝えてから、バラバラと顕現させ始め自身の周囲に浮かばせたり、佇む回りの地面に好き放題に突き刺して数を増やす。

燃え盛るスコップを撫でてから頭の角を撫でるアイギス。

ただの獲物ではないと勇儀に伝えてから、バラバラと顕現させ始め自身の周囲に浮かばせたり、佇む回りの地面に好き放題に突き刺して数を増やす。

浮かび増える獲物もガスガスと刺さり増え続ける獲物も全てを燃やし、轟々と音を立て明るくなるアイギスの周囲。縦に伸びる大穴ではわからなかったが結構な熱量になっているようで、地面の血だまりが乾き蒸発して凝固し始めた。

「角だって割にデタラメだなおい、お前さんのそれは生え変わるものなの……」

見ている間に増えていくアイギスの角。

以前に際限はない、自身の終わりが際限だとアイギスが冥界の庭師

に話した通りの景色が広がっていく。炎に取り囲まれ揺らぐ景色、そのゆらぎの中に姿を消していく黒羊。

「見慣れない物見せてくれてすつかり見ちまったが、眺めてる余裕はないなあ、これは」

少し焦げた勇儀の右手の平、それを見てから軽口吐いてる暇はなさそうだと拳を握り炎の中心へと突貫する勇儀。

だが、その突撃は勢いのないものになった、動きを見せた鬼に向けて乱雑に、縦やら横になりながら高速回転する炎上した丸鋸がドンドンと飛んでくる。その一つ一つを殴り落とし真正面から突き進む勇儀、一歩進むごとに飛んでくる感覚が狭まりそれに伴い拳の回転も上がっていく。

鈍い金属音を鳴らして歩み進む鬼、楽しげに噛み突き進む。

迎える悪魔を炎の中で姿なく嗤っているようだ、低めの噛み声だけが聞こえる。

両者とも楽しそうだが、それを見る酒場の屋上にも楽しそうな者がいた。火の粉と火花を散らしながら弾かれるアイギスのスコップ、あつちこつちに飛んで行くソレを見てはしゃぐのは屋上から身を乗り出している地獄鳥。

「うにゅ！ 花火?!」

「お空、危ないから、洒落にならないからやめて」

アイギスからランダムに投げられるスコップをランダムに殴り飛ばす勇儀。

それを見ていてテンションが上がったお空という地獄鳥が身を乗り出して手を伸ばす、それを制するようにさとりがお空の肩を引くと、地獄鳥の手があつた辺りに殴られた丸鋸が飛んできた。

殴り上げられ遠くで割れたアイギスのスコップ、それを見ておお！と嬉しそうにはしゃぐお空。そんなはしゃぐペットと真逆に見える飼い主、血で汚れた、建物が壊れたくらいであればまだ良かったが…今さどりの視界に収まるのは火の手が上がり燃え広がっていく旧都の繁華街、地獄絵図に近いそれを見てゲンナリとしている。

「これでは閻魔様に合わせる顔がない…」



「ならここで捌かれて焼かれるか？ 手間がなくていいねえ」

「画期的な調理法ね、斬新で妬ましい」

地獄の閻魔に押し付けられて任された地底世界。

始まりこそ強引であったが、それなりに纏まり偶にある騒ぎくらいなら自身も楽しむ余裕が出来てきた、そう考えていたさとの顔から血の気が引いていく。

任され充てがわれたこの地は血塗れになってすぐに炎上し始めた、燃やしたのは地上から来た見知らぬ部外者。

そんな相手と笑顔で争うのはさとりが繁華街を預けた鬼。

そんな街の顔役は好きに暴れ火の手を更に拡大させているように見える。

部外者と町の顔役に心を乱されて、愛するペットの無邪気さにも青ざめさせられる地霊殿の主：合わす顔がない、ポツリと呟くと隣にいる橋姫と土蜘蛛がお空とさとりそれぞれを見ながら悪い冗談を言うてくる。

笑えない。

今の惨状も、二人の冗談も、何もかもが笑えない。

だというのに下で暴れる二人も、横の二人も愛するペットでさえも楽しそうに笑っている。

今の状況：わたしの味方はいないのか？

心を読む妖怪が心を預けられる誰かを求めるほどに、随分と酷い惨状になっていった。

鬼が前に進む度に投げられる間隔が狭まり、突貫速度が下がっていくがそれでも前に進む勇儀……この状態であれば直にアイギスを捉え殴り勝つだろう、二人を見続けているスキマ以外の者達はそう考えていた。

旧都のメイン街道、その入り口で暴れ続ける二人。

騒ぎに乗じて騒ごうとしていた者達は遠巻きに見る事もしなくなつた。

燃える自宅や繁華街の惨状に気がついて火消しに騒ぐ事になつたのだ。

今二人を見ているのは屋上にいた四人と増えたもう一人、それと目につかない位置に開いた瞳だらけの空間から覗く者くらいとなっていた。

それぞれ何を思っているのか、そんな事は気にせず大いに騒ぐ喧嘩馬鹿の二人。

片方は燃え盛る自身の角を際限なく現して放り続ける酷い放火魔、もう片方はその炎をアチラコチラへと弾き飛ばして一歩一歩進む牛歩の鬼。

鬼が前に進む度に投げられる感覚が狭まり、突貫速度が下がっていきながらも前に進む勇儀……この状態であれば直にアイギスを捉え殴り勝つだろう、二人を見続けているスキマ以外の者達はそう考えていた。

その考えを肯定するように声を上げたのは迫られる悪魔。

放つても放つても勇儀に当たらず殴り散らされる三本目の角、熱量にやられ身体も衣服も焦がしながら真つ直ぐに歩み突き進んでくる地底の鬼、ヤマメに続いて堪らない相手だと酷い嗤い声を上げるアイギス。

笑い声を聞いて勇儀も吠え、その咆哮が灯す炎を揺らし近くの火の手を掻き消した。

「いたなあ！ 見つけたあ！」

勇儀が更に声を上げる、火の手が薄れ笑い声の主が勇儀の視界に収まった瞬間に歩んでいた足に力がたぎる。

ギリツと踏み込んだ地面を踏抜き、くつきりと足跡を残して勇儀が駆けた。真つ直ぐにただだ標的目掛けて突き進む勇儀。生やしっぱなしの金髪を横に靡かせ、揺らめく炎の色を移し焦がしながらアイギスに向かい暴力となり奔った。

「真つ向勝負で追い込まれるなど何時以来でしょうか？ 知らぬ地で知らぬ相手に追い込まれるとは、なんとかは大海を知らずとはこの事か」

真つ直ぐに迫る勇儀を見返し、うろ覚えの諺を述べるアイギス。

余裕がありそうに見えるがそうではなく、ただ高揚し饒舌になつて

いるだけである。

地元の神相手に争い払われかけた事もあった、逆に神を相手取り勝ちを修めて土地を奪った事もあった悪魔、生まれ故郷近辺では色々やらかしそれ故崇拜されるようになったが……ここまで追い込まれるなど、吸血鬼相手でもなかつた事だ。

小さな島国の一つの箱庭、その中にどれほどこんな相手がいるのか？

花といい蜘蛛といいこの鬼といい堪らない、激しい興奮を覚える悪魔であつた。

今の間合いは勇儀の拳が全力で振るえる間合いの一步外、アイギスのスコップであれば届く一方的に攻められるはずの間合いだが、その得物は振るわれない：正確には振るえなかつた、一步目の振動で地は割れて足も割れた。

動かずに立つくらいは出来るが、全力で得物を振るうには覚束ないハイヒール。

追い込まれ高揚するアイギスの数歩前に黒く煤け、部分部分を焦がした勇儀が到達する。

動きを萎縮させる程の大声でいいものを見せてやると叫んだ鬼、両手に燃える角を構えるアイギスに向つてただ強く、地を揺らすほどに強く一步踏み込んだ。踏み込みと共に広がる亀裂、勇儀の踏み込んだ右足を中心にビキビキと奔るその裂け目。それだけで近くの建物は傾き、被害の酷い物は倒壊した。

「式いいい!!」

構えるアイギスを気にせず2歩目、左の足を地に穿つ勇儀。

割れた地面が更に割れ、突き立てられて放られるのを待っていた、アイギスの周囲に残る三本目の角を浮かし弾き飛ばす。

歩みの邪魔になる炎が消し飛び鬼と悪魔の間にあつた邪魔は消えた。

今の間合いは勇儀の拳が全力で振るえる間合いの一步外、アイギスのスコップであれば届く一方的に攻められるはずの間合いだが、その獲物は振るわれない：正確には振るえなかつた、一步目の振動で地は

割れて足も割れた。

動かずに立つくらいは出来るが、全力で獲物を振るうには覚束ないハイヒール。

だが、素直に殴られるのを待つほどの愚者ではない黒羊、相手が間合いに入り攻撃の手を動かす瞬間に全力を表す為、敢えて死地となるのを待っていた。

「参あぁんっ!!!」

勇儀の咆哮と共に3歩目が地に触れる。

が、その3歩目は前の2歩に比べて静か過ぎた。

掘り返す地面は殆ど無い。

殴りあっていた鬼が余韻に浸るくらいには楽しかった、それを見ていた屋上の三人もそれぞれ思うところがあるようだ。

が、原因はそれではない、勇儀が音を伝える大気、それが満ちる空間をも殴り抜いた為音が周囲に伝わらないのだ、軽く構えて振るうだけで空気を抜く鬼の拳だったが、今は勇儀の有する能力も合わさり、見た目ではよくわからない事になっていた。

結果だけ言えばアイギスはいなくなった、足首から下の両足を残して間合いの内から姿を消していた…勇儀の拳が空気だけではなく空間毎相手を殴り抜いた、その為その空間にあったモノが力業でズラされ殴り飛ばされた、と言えば状況が伝わるだろうか？

鬼の四天王、力の勇儀。

彼女の宿す『怪力乱神を持つ程度の能力』

本気の彼女はまさにソレそのもの。

語られぬ怪力乱神の二つ名は伊達ではなかった。

喧嘩の相手が消え去って、突き出した拳をしまい残るアイギスの足を見る勇儀。

無言のまま見つめ喧嘩の余韻を味わっている。

殴りあっていた鬼が余韻に耽るくらいには楽しかった、それを見ていた屋上の三人もそれぞれ思うところがあるようだ。

二人の争いを見守っていた三人が、各々感想や思う所を口にし始めた。

「やつと終わりでしょうか、一度蘇り何事かと思いましたが…」

「足だけ残っているみたいだけれど、さすがに終わりなんじゃないの？ それよりも勇儀ね、楽しそうに思いに耽つてくれて、妬ましいわ」

見たままの事を述べるさとり。

それに続いて見ていた事から感じたものを述べるパルスィ。

けれど一人だけ勇儀と同じ所から目を離さない者がいた、少し前には勇儀の立場にあったヤマメである。完全に殺つてやった、そう思い喰つた事のない羊を味わおうとした瞬間に何やら光つて驚かされた、それから随分と酷い、えらい目にあつたなとヤマメが考えた瞬間にその感情が誰かに届く。

「やつぱりありやあ化けもんだ、勇儀の拳で終わらないならどうすりや終わるつてのさ」

視線の先を変えずに目を細め悪態をつくヤマメ。

ヤマメの覚えた感情が届かねばここで一旦終わつていたかもしれないが、それがわかる程互いの事を話してはいないし、わかつたところで既に後の祭りとなつていた。

土蜘蛛が覚えた焦り、恐怖混じりの焦りから少しずつ身体を取り戻すデタラメな悪魔。

同じく勇儀も目を細める、僅かに残つた両足の下に先ほど見ていた五芒星が小さく浮かぶのが見えたからだ。

まさかと考える勇儀が足首から先しかない黒羊だつたモノに手を伸ばす、が、触れる瞬間にその足首が瘴気の渦に包まれて浮いた…それを中心に旧都のあちこち、外からも瘴気が流れてくる。

流れてきたのは勇儀に弾かれたモノと、大穴に残したままの無数のスコップであつた、アイギスが三本目の角だと語つたモノが瘴気へ変わり纏まつて、再度本人の姿を形取つていく。

「おうおう、なんだい死なずだつてのか？ あたしの奥義が？ にされちゃあたまつたもんじゃあないんだが」

漂い集まり、だんだんと先ほど殴り殺した相手の姿が戻ると、ソレに対して軽口を吐く勇儀。

勇儀がアイギスを散らしたのは鬼の四天王がそれぞれに持つ奥義、

勇儀の場合は3歩の拍子にのせて必殺の拳を振るう、見たまま通りの四天王奥義『三步必殺』

身に宿る怪力乱神、それを全開で表すように3歩進んで一発殴る、単純故に強く単純故に止められない奥義である。

その『必殺』を覆すように蘇るアイギス、再三現れた悪魔を相手に？を嫌う鬼がその本心を口にしていた。

「綺麗さっぱり死んでいるの？にはなっておりませんよ？ 同じ日に三度殺されその内の二度は同じ相手：糧とする事はあれど、他者を怖いと思うのはこの地で二度目、久しぶりに感じるこの想い：滾ってしまつて止まりそうにないですね」

完全に戻るアイギスの身体。

浮いていた足が地につくといつももの様にカツンと足音が鳴る、鳴る音は変わらないが表情はいつもとは真逆、笑みはなく真面目な表情。ヤマメにも見せなかつた冷たい顔、この地でこんな顔をしたのは初見時の花と争つた時くらいだろうか？

「楽しいならなんでもいいさ！ こつちもスッキリして気持ちがいい、終わらないなら終わるまで殴りやあいだけだつてんだ」

先ほどまで酷い噛い声を上げていた黒羊が静かに佇む事で、まだまだ終わりではないと遊戯も感じ取る。二度殺しても終わらない相手、デタラメなのは角じゃあなくて本体だったかと合点がいった顔の勇儀。こちらはスッキリとしたらしく口の端が裂ける程に歪んだ笑みを見せ、口内に生える力強く鋭い牙を覗かせた。

終わりの見えない旧地獄での一幕。

広がり続けるこの地獄絵図を止めてくれ。

この場でそう願うのは、旧地獄を預かる立場を押し付けられた誰かだけであつた。

## 第二十七話 怪力乱神を語らず、水滴りて石を穿つ

普段であればガヤが煩い程度の旧地獄繁華街。

騒ぎとなっても誰かの喧嘩くらい。

その程度の煩さであればこの地を預かる管理人も、その三つ目を瞑り見逃すか、自身もそこから発せられる歪んだ心を読み楽しむ事が出来た：出来るようになってきていた。

だが今日の旧地獄は管理人、古明地さとりが楽しむには少しばかり派手でやんちゃ、可愛らしい小さな彼女の見た目に習って表現するならそんな状態となっていた。

「血の池地獄に続いて焦熱地獄、ここは本当に切り離された旧地獄なのでしようか：」

ずぶ濡れの身体のままぼやく地底の主。

ぼやく相手は誰でもない、唯の独り言である。

が、それを聞いて嗤う者が周りにいてそれぞれが煩かった、下を眺めてはしゃぐペットといつの間にかいた自分の妹。

それらを余所にしながらも見つめる先は同じとする土蜘蛛と橋姫。

それぞれ何を思っ下を眺めているのか？

妹以外の全てがわかるさとりだったが、下を見て考える事を半ば諦めた。

諦めを三つ目に宿す地底の管理人が見つめる先。

それは旧地獄街道、そこにいるのは言わずもがなの喧嘩馬鹿二人。

片方は強く拳を握りしめ、口角釣り上げ嗤う鬼。

もう一人は滾る心を抑えるように真面目な顔して、両手の指を合わせる悪魔。

むき出しの腕や生足、頬や首などに焼け焦げた跡の見える鬼が拳を振るう、その度に悪魔の身体の何処かが散っていく、が、殴られた勢いに乗って距離を取り離れると、鬼の身体の何処かを狙い指を鳴らしては訝しむ悪魔。

「さつきからパッチンパッチン、なんだってんだい？」

小首を傾げるアイギスト、それに対して問いかける勇儀。

本日三度目の復活を遂げた先程、その時から指を鳴らして勇儀を穿とうとするアイギスだったが、能力は何故か発動せずその理由がわからずに首を傾げて訝しんでばかりいた。

「遊んでいるわけではないのですよ？　これはこれで攻め手…のはずなのですが」

殴り飛ばされた頬は醜く抉れたまま、頬から首にかけて着ているYシャツの色と同じ赤に染め上げながらも冷静に返答するアイギス。

何故発動しないのか？

鬼には発動しないのか？

モノは試しと、右手で酒場の奥で火消しに動く鬼の誰か目掛け指を鳴らす、そうするとこちらを見て勇儀の応援をしながら火消しに走る者、青い鬼の角がその根本から角を取るように穿たれた。

同じ種族のあちらには発動する。

だがこの鬼に対しては発動しない、歪に発現してしまうアイギスの穿つ能力。

何故この鬼にだけ能力が現れないのか？

そちらのほうが気になり、頬を治すよりも歪に発動する力を直したいようだ。

「なるほど、あんな感じで無くなるはずが何故かあたしにや通じないってか。なんだろうな、よくわからんなあ」

アイギスの指が向く先、酒場の中で角を抑えて騒ぐ鬼を見て何かを納得した勇儀が一つ頷き左足を出す。

強く一步踏み込んで、そのままアイギスを殴り抜ける算段だったが、アイギスの左指がパチンと鳴らされると左足で踏むはずの地が穿たれて、踏み込む勢いそのまま前につんのめる勇儀。

「落とし穴!?　その指は小賢しい事しか出来ないのかい!」

「ふむ、やはり星熊様でなければ問題ない、この辺りに何かありそうですか…」

穴から這い出て文句を言ってくる勇儀。

殴られようと構わずに真正面から一輪を捕まえに行ったり、ド派手に燃やして勇儀と真っ向勝負をしているアイギス。



投擲など距離を取ったり姿を炎に消すなどはしているが、真正面から向っていた者らしくない小賢しいやり口、だからこそ素直に落つちたようだがそれが気に入らないようだ。

が、言われたアイギスは我関せずで自身の考察を続けている。

「鬼を前にして考え事か、つれないじゃあないか！ よくわからん事考えてないで、こっちに集中してもらいたいね！」

歩く度にパチンと鳴って穿たれる鬼の足元。

最初の数歩は足を取られ多少よろけたが次第に全く揺れなくなる、それはそうだ、この勇儀も幻想郷に住み着いて長い妖怪だ、飛ぶくらいなんぢやない。

だが地に足付けずに拳を振るい始めた事で少しだけアイギスに余裕が出来た、この鬼も本来地に足つけて地を鳴らす大妖怪、飛んでしまつては全力全開で拳を振るえない。

「熱烈に求められて非常に嬉しいですね、滾る拳を浴びれば達してしまいそうなほどです…ですがそれはお断りします、責められるよりも責める方が私の性には合うのです」

地表スレスレを奔るように飛ぶ勇儀、飛んでも動きは変わらずにただ真つ直ぐにアイギスへと猛進していく。

その鬼の到来を無手の状態で眺むつアイギス。

開いた左手を前に差し出して、同じく開いたままの右手も腰の高さで少し引いて構え、鬼に向って突貫した。

戦闘時に何かしらの構えなど取らない悪魔が構えてみせた、なにかあるのかと思うが何もない、ただ引かずに真つ向から受けて立つと仕草に取って見せたただけである。

「おおおおおらあああ！」

叫び声を上げ拳を振り上げる勇儀、ただの暴力、もしくは災害としかいえない鬼に真正面から突つ込んでいくアイギス。

体躯が似通つて腕の長さもほぼ同じ、ヒールと下駄の高さを差し引けば若干勇儀の方がリーチがあるように見える二人。その二人が互いに右手を相手に届ける。

先に暴威を届けたのは当然勇儀、褐色肌の顔面目掛けて真つ直ぐに

鋼の拳を振り抜いた、空気の壁はとうに抜けた鬼の拳が皮膚を裂き肉を散らして骨もひしゃげる。

上唇から上、三日月状に殴り抜けられて鼻も右目もなくなったアイギスが一瞬グラつくが踏み止まる、そうして頭のないまま、勇儀により掛かるように右の平手で伸ばされきった鬼の腕を掴む…そのまま爪を立て握ると深々と指先が腕に食い込んだ。

「…てみる」

歪に残った口から血と眩きを吐くアイギス。

聞き取りにくい言葉を発し、失った頭を復元させるまえにそのまま右手で能力を行使する。

ある物は何でも穿つ、そこにあるのなら穿てないモノはないと豪語するデタラメな悪魔が身を挺して試す事、それは単純な事だった。

よくわからない力を体現する勇儀、存在し殴り合いながらもよくわからない力を体現する勇儀は、言ってしまったえばあるのかないのか分からないようなモノだ。

だからこそ指を鳴らしても穿つ事敵わなかった…だが触れている今であれば、突き立てた爪先から肉の感触を感じて『そこに在る』と認識している今であれば、穿つ事が可能だった。

「それくらいじゃあ潰せないよ！ あたしを潰すのなら萃香の本気でも持つてき…なんだ？ 削られた!？」

音もなく痛みもなく放たれる穿つ力、それが勇儀の腕に現れアイギスの触れている右手の形そのままに穿たれる。

アイギスの爪が食い込んだ分、数センチ程の深さだがその分だけ綺麗に穿たれた勇儀の腕。この鬼が言う通り、パツと見では右手の触れた部分が削られたようにしか見えないが、確実に勇儀の腕は穿たれていた。

やってみるものだとはくそ笑む黒羊に対して、右手の異常を察知した怪力乱神の鬼が、自身の腕に突き刺さる指を剥がすようにアイギスの体ごと強引に振り回した。

力業で振り回されて、勢いがついたまま繁華街の壁を抜いていく羊の悪魔が瓦礫に埋まっていく、数件分の壁をぶち抜いて抜けた先、一

本奥の街道で転がってどうにか勢いが止まった。

「やってくれるじゃないか！ デタラメな隠し球持ってやがったなあ！」

パラパラと落ちる瓦礫となった誰かの住まい、その中央に空いた人間サイズの穴に向かい吠える勇儀。

どれだけ妖気を練り上げて治そうとしても治らない傷、

アイギスに穿たれた穴は、アイギスが戻さぬ限り空いたまま。

勇儀自身が『語られぬ怪力乱神』そのもので在るように。

アイギスもまた『素晴らしき穿孔者』の二つ名そのものであった。

「我ながらデタラメだと思えますね、見て駄目なら触れてみる…ただの思いつきの割に存外良い手となりました、触れては余計に滾りそうですが、これで好きに穿てます」

穴の奥からカツカツ鳴らして現れるデタラメなアイギス。

殴られた頭を中途半端に復元し、右の角だけが欠けているような姿で現れた。投げられ叩きつけられた為に起きた粉塵、それで汚れたロボロボのスーツを払いカツカツと歩み出てくる。

「穿つ？ なるほどお、これは『穴』か…地底の鬼が日和った地上の妖怪に掘られるってか！ 良い皮膚だ、良すぎて気に入らないなあ！！」

「下にいるのだから掘り返される、道理でしょう？」

皮肉を吐く鬼に正論を返す悪魔。

互いに言い切ってからまたすぐに肉薄する、先手はやはり勇儀。

「口も達者で腕も立つ、中々好ましいなアイギスさんよお！ お互い生きて終わったら次は風呂場で酒盛りでもしようやあ！」

単純な腕力を振るうだけなら確実に勇儀が早いが、今の彼女は地に足が付けられない状態のため、豪腕を振り回す度に腕の勢いを殺すために腕の逆足で空を蹴り体を止めている。

振りぬく度にアイギスの体の何処かが散らされていくが、それくらいで引くはずがない真っ直ぐ大好き黒羊。脇腹も胸も殴り抜かれその度に血反吐を吐いて勇儀に両手を真っ直ぐ突き伸ばす。

触れられる…穿たれる。

それを理解した勇儀が右の拳を回した勢いを利用し、伸ばされる腕を体言吹き飛ばす為の左後ろ回し蹴りを放つ：が、それを半分削れた腹で受け、上半身だけとなったアイギスが両手で抱えてそのまま穿つ。

「ちりも積もれば山となる、でしたか。少しでも触れられれば好きにできるとわかりましたし：滾るその身に触れ心も身体も少しずつ穿ち、最後には無くしてみせましょう」

赤く染まる黒髪から血を垂らし、恍惚な表情で足を抱くアイギス。雑に蹴り分けられて、臓腑やら背骨やらと大事なはずの中身がぶら下がったままという状態、パツと見では完全に死に体で恍惚に色を浮かべ笑み抱きつく。

責める方が性に合うと言っていたが今の見た目では真逆に見えてしまう：だが、アイギスの言葉は肉体的なモノではなく精神的なモノだ、殺ろうとする相手に向かい殺られた側の者が、色を浮かべて話し噓うなどホラー以外の何物でもない。

「半身で!? デタラメにも程があるだろうがあ!!」

その黒羊に抱かれた形そのままに穴の空いた鬼の足、二匹の蛇に巻きつかれたような痣型に穿たれた勇儀の左足。

それに纏わりつくアイギスの上半身、回された腕は強いというよりも優しく抱擁している程度、歪に抉れ穿たれた足を力のままに振り回せば振り払えるくらいの力しか込められていない。

ならばと左足をアイギス毎振りぬく勇儀。

蹴る勢いで飛ばされて再度距離を取られるアイギスだったが、飛ばされていくその時の表情は笑んでいた：先程まで勇儀が見せていたように、口の端が裂けるくらいの酷い笑い顔。

そのままの顔で小さくなり、また建物に投げ込まれた黒羊：埋まっ ていく瞬間まで見せていたその笑みは歓喜の笑みであった、足に手を回した際の勇儀の声、あの声にはほんの少しの不安、何度殺しても蘇るデタラメな悪魔に向けての畏怖がほんの少し声色に混じっていた。

「まだ：まだまだ終わらない、終われないのですよ。満足しようが達しようが終われない、お付き合い下さいまし：星熊様」

投げ込まれた瓦礫の中から囁かれる悪魔の甘美な声が響く、上半身だけになったアイギスが動かぬままにそこで話しているようだ。

話しながら纏う瘴気。

勇儀の足元に遺された下半身に再度浮かび上がる五芒星が、断たれた半身を浮かばせてまたしても瘴気となり上半身の元へと流れていく、それを見ていた勇儀が吠えて自身を鼓舞する。

覚えた畏怖を吹き飛ばすようなその叫び。

勇儀自身も鬼でありながら怪力乱神の体現者なのだ、恐れるものがあるのかないのか、終わりがあるのかないのかなど、それこそよくわからない者。

だが一度感じた畏怖、あると感じた少しのそれが完全に消える事はないだろう。

◇◇◇◇◇

血の池に封じられた妖怪達の騒ぎ、続いて始まった鬼と悪魔の酷い喧嘩。

現地では阿鼻叫喚となりかけていて、住んでいる者から管理している者までほとんどを巻き込んだ大惨事の様相。そんな地獄の騒ぎを高めから見ていた者が、自身の操る空間の中で誰かと静かに会話をしていた。

幻想郷という箱庭の地上の管理人を名乗り、この騒ぎの中心地にいるアレをこの地に呼び込んだ者。いくなればこの騒ぎの原因を愛する土地に放した妖怪八雲紫、スキマの妖怪が操る気持ち悪い空間の中で誰かと向き合い、争いを見つめ話していた。

「こうなるとわかっていて招き入れた、そういうわけではないのですね？ 八雲紫」

紫の正面に立つ人物が問いかける。

この地を作った妖怪の賢者、その一人に向かって完全に上から、紫との身長差の通りに上から言うような態度。

扇で顔を隠す事をやめている紫に対して、右手に携えた悔悟の棒を突きつけて話す者。悔悟の棒に似た飾りがある帽子を被り、そこから紅白の長いリボンを伸ばし漂わせる誰か。

出生を表す赤のリボンと、死や分かれを表す白のリボン両方を同じ長さで揺らめかす者が紫に問掛けた。

「はい、私は休暇代わりに温泉にでも浸かってきたらと話しただけです…血気盛んな者が多いから楽しんで、そう伝え送り出しただけですよ」

問われた事を正直に話す紫。

あるのかわからないのかわからない曖昧な物言いばかりをするスキマ妖怪が本心話す、それも嘘偽りなく話し送り出した事までを述べていて気持ちが悪い。

が、今会話する相手から鑑みれば致し方ない事だった。

「？はないようですが全てではない、ですがいいでしょう。貴女から企み事を取り上げては回るものも回らなくなりそうですし、縁の内にいる間は裁きは待つて差し上げましょう」

「つまり今後も安泰だと、映姫様がそう仰ってくれるなら私もまだまだ元気にいられますわね」

本心から軽口を吐く紫。

それを窘めるように、握った悔悟の棒を左手で受けてパシンと鳴らす映姫という女。

からかいや言葉遊びではなく八雲紫が本心から『様』と呼ぶこの女性性が幻想郷担当の閻魔、四季映姫やマザナドゥその人。

再生や生命力という言葉を表す緑の髪、右側だけが長く伸ばされた穏やかな緑色を湛えた髪を揺らして話す、幻想郷のお偉いさんである。

「それで、この騒ぎの始末はどのように考えているのですか？ 悪戯に地底を乱す為にアレを送り出したというわけではないのでしょうか？」

紫から視線を移す映姫。

パシンと鳴らす悔悟の棒を見ているスキマの中央へと向ける、棒の先に映るのは上下の半身二つに分けられた話題の者。

アイギスが嗤いながら体を戻していく姿が、映姫の指す先には映っている。

「さあ？　そもそも地底で何かをしてこいとは命じておりませんわ、こうなったのはアイギス個人の考えから。責任を取り、裁くというのであればアイギスを裁くのが筋ではありませんの？」

「ここも嘘なく話している。」

『休暇』という名目でアイギスを送り出した紫。

送り出された方も、その『休暇』という命を利用し血生臭い観光旅行を楽しむために敢えて八雲の名を語らず、あくまでも個人的な来訪だと話すアイギス。

利用するために隠したアイギスの動きのお陰で、紫は企みを話さずに済むようになっていた。

企みとはいってもそれほど難しい事ではない。

四季映姫に管理を任されておきながらどこかやる気のない覚、荒事を好まず鬼にいいように地底を動かされている覚に対して、こういうのがいるから使ってみてはとアイギスを斡旋するつもりで送ったようだ。

閻魔より地底の管理を任されているさとりに恩を押し付けておけば、後に広めようと考えている幻想郷の新しいルールも浸透させやすい、ついでに鬼の支配力も下げてこいつらにも従ってもらおう。

そんな幻想郷の管理人側らしい魂胆が紫にはあった。

最も、星熊勇儀がこのまま死ねばこの地のバランスは崩壊する、それは防ぐ、その為に遠巻きに覗き見ていたのだが…覗き見中のスキマ内に閻魔が来るとは思わなかったようだ。

「生死の内にはいない者を裁くなど出来ないのですよ、閻魔は輪廻の内者を裁く者です。貴女は曖昧だがまだ妖怪です、ですがアレは聞く限り…いえ、では質問を変えましょう。アレがどういった者なのか、理解した上で招き入れたのですか？」

紫の答弁を聞いてはいるが見つめる先は変えない閻魔様。

幻想郷担当の閻魔様が他国の悪魔、輪廻の外にいる管轄外の悪魔を見つめる理由はなんだろうか？

招き入れた理由まで問われるのだからそれなりに大事、もしくは大事に繋がる可能性があるのかもしれない…が、今までの仕事ぶりを見

る限り紫目線では怪しい素振りは見られなかった。

「前半部分は私の預かる所ではないので問いませんが：後半も仰る意味がわかりませんわ、異国の悪魔、長く生き崇拜されるほどに恐れられる黒羊。それ以外で何かあるのでしょうか？ 私以上にお詳しい話しぶりですが？」

スキマに映る悪魔を眺め尋ねる映姫と、映姫を見て答える紫。

四季映姫自身が面識があるわけではない、が同じく地獄を統括する他の閻魔、他国の地獄を統括する他国の閻魔に当たる者にアイギスの事を少し話し、その有り様を聞いたらしい。

アイギスの知っていた地獄と同一なのか、その判断は出来ないが他国にも幻想郷と同じ様に四季のある国が在り、四季を名に冠するこの閻魔がその地の神、冥府の神と個人的に付き合いを持った為、多少話を聞くくらいの仲になった。

「アレの名と成り立ち、それは聞いていますね」

「アイギス＝シーカー、山羊と勘違いされて生贄にされた可哀想な羊、そう本人から聞いています。それが何か？」

何を今更と考えつつ述べる紫。

名も成り立ちもこの説明通りでそれ以上の事はない、アイギス本人もこれ以上話す事がないと言っているためこれは正しい情報だろう。

「ではその名、向こうの国では真名というのでしたか、それらの意味を聞いたことは？」

「確か盾、古代ギリシアの女神が持っていた防具と同じ名前ですわ。穿つ私が盾など、と皮肉な冗談を言っていた覚えがありますわね」

「皮肉、そして冗談ですか、エスプリの聞いたジョークのつもりなのでしょうか：まあ良いですね、大事な部分はその中ではありませんし、では姓の意味は聞いていませんか？」

名の意味合いは紫の語る通りである、元を正せば以前に述べた古代ギリシアの神が元ではあるが、そこを振って呼ばれ始めたのがアイギスの始まりであった。

ありとあらゆるものを穿つ力を持ちながら、絶対の盾、場合によっては山羊皮で逃えられた絶対の防具の名で呼ばれるようになった彼



女：こつちでも山羊と間違わえるのかと、酷い皮肉だと感じ自己嫌悪しながらジョーク代わりに言うようだ。

「羊の墓守、だからシーカーと名乗るようにしたと、これも本人から伺っております」

シープのアンダーテイカー、これを単純に混ぜただけ以前にそう述べたアイギス。

職業も動物としての種族も見たまま通りの言う通り、納得できる理由であったし、それを言われても特に気にしてはいなかった紫だったが、続く閻魔様の言葉から感じなかった違和感を覚えるようになる。

「それを素直に信じているのですか？ 八雲紫が何の疑いもせず、聞いたままに？」

リアルタイムでスキマに映るアイギス。

分かれた上半身を戻した後、対峙する鬼に腕や足、頭や腹など何処かしらを殴られ飛ばされながら同時にその腕や足、肩といった部分を穿っては倒れ蘇っている映像が見える。

紅魔館の者達とヤマメ、それと地霊殿の主等、今の惨状を見ている者達から恐怖という名の信仰心を届けられている、だから戻り蘇る、というには随分とタフでありにも歪な姿：争う勇儀からもほんの少しの畏怖が常に届いているが、それを踏まえたとしてもタフで本当に終わりがないように、歪に見えた。

「信じる信じないという：その名が何か？ 真名に何かがあるからこうして映姫様が現れた、直接旧都に向かわずに私の所へとお姿を見せた理由がそれですか？」

「墓守の仕事は墓を守るだけが本分、百歩譲って棺桶職人を名乗るのは良いでしょう。ですが棺桶の中身まで用意するなど墓守のする事でしょうか？」

紫の感じた違和感、それは真名であった。

悪魔であるアイギスから聞いた通りであれば悪魔は真名に縛られる、紅魔館の小悪魔が力ある古い悪魔でありながら力を現せないように、名に囚われてそれ以外は成せなくなるのが悪魔、紫はそう聞い

ているし自身の調査結果でもそれがわかった。

ついでに述べれば数千年生きる悪魔が随分前から今のよう墓守として存在している事もわかった、だからこそあの説明に納得した紫だったが、映姫の言葉で一つ気がついた。

「羊の墓守が死体を築くか？」

「答えるならノーだ。」

出来た死体を守るのが墓守、新しく死体の山を築くのは仕事の範疇外。

ではシーカーの意味合いは？

「つまり真名の意味は別にある、映姫様はそう仰りたいわけですね。ですが他の意味とはどういった物なのでしょう？ そのものずばりシーカー、搜索する者という事ででしょうか？」

紫が閻魔様からスキマに視線を移した。

体の所々を穿たれて勇儀に殴り飛ばされたアイギスが、片足と片腕それぞれを失いながら、それでも勇儀に向かっていく姿が映る。

喧嘩を楽しむ声や会話は聞こえているが、その姿は紫にも歪なモノと映ったようだ、バランス悪く片足で立ちそのまま一足飛びで勇儀に向かう姿、片腕だけで勇儀に手を伸ばすその姿が何か探し物に手を伸ばすように見えてしまった。

「その通り、だからこそアレは終わらない、いや…終われないのですよ」

終われない、そう言い直す四季映姫。

崇拜される限り終わらないと述べたアイギスの物言いと相違が見られる閻魔の言葉。

自身の事について話し実際その通りに見られるアイギスだったが、この閻魔様が嘘をつくはずもない、？を見抜く力を有し自身も白黒ハッキリ付ける御力を持つ幻想郷の閻魔様。

どちらも信憑性がある物言いどちらがより正しいのか、紫がそう考えた時点で答えは出た…アイギスは墮とす側の者で閻魔様は裁く者、確たる証拠もない唯の言葉でより信じられるのは後者であるとハッキリと確信した紫であった。

「ですが映姫様、その終われないというのが彼女の名と？にどう繋がるのでしょうか？」

「それについてはあちらが終わってからお話しましょう、そろそろ互いに知る相手が着く頃です…さっさと行きなさいと言ったのにまたサボって」

アイギスの映るスキマとは別のスキマ。

隣り合う窓のように並ぶ画面には、四季映姫の忠実な部下の姿が映る。

癖のある赤髪をとんぼ玉の髪留めで2つに纏めてゆらゆらと揺らす女、立派な体軀を青の着物で包んだ女性が欠伸しながら旧都の入り口方面へとちんたらと歩くのが映る。

互いに知る相手というがどういう繋がりがあるのか、それはこの後に話されるようだ。

## 第二十八話 渡りを付けるは川渡し

火事と喧嘩が華となる薄暗く明るい地底の町並み。

少しのボヤと少しの殴り合いを楽しみ、偶に出る死人も致し方なしとされる町。

平常時から荒っぽい閉ざされた世界の開けた町。

その一角で始まった大火をバラ撒いた馬鹿と大成している馬鹿の喧嘩。

その終わりはもうすぐ側まで来ていた。

「しつこい女だな、アイギスさんよお！ そろそろ気持ちよく逝っちまったらどうなんだ！」

声高に叫んで手形の目立つ腕を振るう鬼。

振り抜いた右の腕にも、二発目を放とうと構える左腕にも、身体を支える両足にも手形のような痣のような何かが浮かび…いや、挟まれて残っている姿で暴れている。

その不自然な跡の残る腕で殴る相手は体中の痣を残してくれた者、グラリと立っては揺れながら、それでも真っ直ぐに勇儀に向かって手を伸ばす敵対者に向け拳を振るい殴り抜いていた。

「二人で逝けとはつれないですね、こうして肌を重ねているというのに」

鬼に殴られ身体を欠損させながら前進する悪魔。

右のアモン角も折れ、身体を戻す勢いも衰えて見えてきたアイギスが血塗れの姿で勇儀に向かう。殴り抜かれた左の肩、そこに突き刺さり残ったままの鬼の腕を掴み、新しい手形を穿ちながら、肩に刺さる腕が深々刺さるのも気にせず前に進み鬼の顔に手を伸ばす。

「そういう冗談も飽きたってのさー！」

顔面に迫る褐色の手。

それを避けるように大きく仰け反ってから勢い付けて頭を前に突き出す勇儀。

額から生やす立派な一本角でアイギスの腕を肘手前まで裂くと、そのままの勢いで近寄っていたアイギスの顔面目掛けて頭突きをかま

す。

「本心…です！」

勇儀の角を残った左の角で弾く黒羊。

硬度はほとんど同じのようで、大型の建造物同士がぶつかり合うような音を立てながらも互いに折れる事なく、その頭を大きく弾き合う。

だが、鬼は顔の中央に在る角、羊は頭のサイドに生やす角。

互いの角の位置のせいで弾かれた後に動き始めるまで少しの時間差が出来た。

「素晴らしい！」

弾かれて数歩離れた二人の間合い。

そんな中先に動きを見せたのは勇儀、空いてしまった間合い詰め、同時に自身の奥義を放つ構えを見せた鬼の四天王。振り上げて地を抜いた右足から亀裂が走り、その振動がアイギスの両足を破壊する。ただでさえグラついていたアイギスの足が壊され片腕を地について止まってしまふ、動きを止めたアイギスに向けて勇儀の二歩目が振り下ろされた。

「素晴らしい!!」

勇儀の足元から奔る亀裂の数が増える。

地を割り周囲の建物を揺らして壊す鬼の歩行、咆哮も武器なら歩行も武器になる常識外れの鬼の力。その力があと一歩で放たれる、動けないアイギスでは回避する事は無理な間合い。

その3歩目が振り上げられるとパチンと指なる音が響く、勇儀が踏み抜くはずだった足元の地がアイギスにより穿たれる…3歩歩いて殴るならその拍子を崩せばいい、踏み抜く地面がなければいいと動かぬアイギスが地を穿った。

「くお！ つ参ああん!!!」

強引に、それこそ力業で宙を踏抜き必殺の拳を放る勇儀。

空間毎周囲を殴る拳が動き、腕が完全に伸びきる。

すると一度目の奥義では残ったアイギスの身体が綺麗さっぱり消え失せた、がその魔力は未だ消えず、彼女が動けず止まっていた位置

よりも低い位置から魔力が流れてきていた。

壊れ動けないといえどアイギスの両足は地についていたのだ、足元を穿ちその身全てを落とすこむ穴を掘り下へとズレただけであった。

「避けるお前さんのほうがつれないなあ、ぶち抜いてやるつてのによおー！」

「数千年前に散らしておりますので間に合っております」

突き出した拳を引けない勇儀が文句を吐く。

突き出し振りぬかれたままの右腕には、下方から伸ばされたアイギスの両手が食い込んでいた。

歪に細くなつた勇儀の右腕に爪を立てて穿つ姿勢を見せる黒羊、これは持つていかれるかもと顔に覚悟を見せた勇儀と、腕を伝つて垂れてくる鬼の血を舐め笑むアイギスの視線が合った時、聞きなれない声が場に響いた。

「喧嘩の台詞にしては随分色っぽいなあ、お二人さん」

血で染まる大輪の花、そう言える見た目の二人が火花散らして争う最中。

引き剥がそうと腕に力を込め持ち上げた勇儀と、その腕に釣られるように穴から這い出てきたアイギスの横に現れた誰かが話す。

その地にちんたら現れたのはこれまた綺麗な曼珠沙華であった。

携えた鎌を両肩で担ぎ二人を見比べる地獄の死神が、恍惚に笑む異国の悪魔とそれを釣り上げた姿の地底の鬼、終わりそうにない争いを続けるこの二人の間に割って入った。

「地獄の船頭が何用だい？ こっちは取り込み中だ、邪魔するなら一緒に殴り飛ばすだけだ！」

アイギスを剥がして肩を回す勇儀が、その拳を死神の赤髪に向けて放つ。

だがその拳は届かず寧ろ体ごと遠くなつた、拳とともに前に踏み出した勇儀だったが真逆の後方へと一瞬で動いた：ように見えた。

「？…いつかのカロン代理の…？ 貴女様までこの地にいるとは、世間とは狭いものですね」

動きを見せず勇儀を後方へと動かした死神。

彼女の操る能力『距離を操る程度の能力』を行使し鬼を前に歩ませながら後方へと下がらせた女に向けて、カロン代理と知り合いのような表情で話しかけるアイギス。

黒羊の地元にも地獄が在りそこにも川がある、そして川渡しも存在するのだが：代理とはどういう事か？

「よう羊さん、アケローン以来だ。何年ぶりかね？ 随分前な気がするが変わらず生真面目そうだなによりだ：まあその辺はいいか、上司命令でね、この辺で手打ちにしてくれないかい？」

アイギスの地元の地獄、そこに流れるアケローン川の名を話す死神。

随分前というように一時期この船頭があちらの船頭、アケローン川の船頭を務めているカロンという船頭の代理をしていた事があった、その際に顔を合わせ安定のじゃれ合いをやらかしたらしい：どちらも生きている、というよりどちらも死なぬ者だから今も気安く話せるのだろうか？

懐かしむ顔で話すアイギスとあつけらかんと返答する小町、後腐れないような会話に聞こえるがどちらも腐り落ちる事などないからかもしれない。

少し話が逸れたので戻す。

で、本来ならば代わりの者などいないはずのカロンだが、歌声と豎琴が素晴らしい誰かに魅了され仕事サボって抜けだし、罰として一年間ほど閉じ込められる事があった。

その一年間、カロンに代わり船頭をしていたのが彼女である。そういった流れがあったからこの地の閻魔も他国の冥府の神を知っていないようだ、距離を操りどうか両方の仕事をこなした仕事のデキルやらない死神、多少サボっても説教だけで済むものはやれば出来ると知られているからだろう。何処の船頭もサボったり他に気を取られてみたりして、変わらないように思える：そんな似た彼女達の事を発端に上司同士も愚痴を言い合うくらい交流し、それ故仲が良くなったようだ。

「確か小町様、でしたか。上司というとヤマザナドウ様：直接ヤマ様

がいらつしやらないのは…」

「良く名前なんか覚えてるねえ、私は羊さんの名前なんて忘れちゃったよ。うちの上司もそのうちに来るさ、今はお前さんの雇い主にお説教かましてる、そのうち来るから取り敢えずこれで終いにしようや」  
「突然出てきて横槍入れてくれて、ハイそうですかっつのは無理な相談だな！」

アイギスと小町が話す中、大声で話すのは勇儀。

後方へと動かされその位置から声を荒らげている。

無傷で全力の彼女であれば小町の能力をよくわからない方法で突破出来るのだろうか、今の彼女は結構な重症だ、然程血は流れていないが至るところを削り取られそこを流れるはずの妖気も穿たれている。それでも動いているのは力尽くだ、持ちうる怪力があるからこそだろう。

「星熊様と同意見なのですが、邪魔するのであれば小町様といえど…」  
「やめときなつての、外のお前さんならともかく今の羊さんじゃ私にやあ届かんよ…：それにあの鬼を無くしちまったら約束破ることになつちまうよ？」

勇儀の声を受けて尚やる気を見せるアイギス。

鼻息荒い黒羊に向けて携えた鎌をくるくると回してから、その首筋に軽く宛てがう小町。

外で受ける信仰心が届かず弱体化しているバフオメット、死にはしないが身体を戻すのも力を行使するのも外ほどではないアイギスに力の差を見せつける死神だが、現状ではそうかもしれない。

距離を操られそれを穿つとしても、伸ばされた距離の結果を穿つほどの力は幻想郷では現せない、出来ても伸びた道にでっかい穴凹開けるくらいだろう…：外での全開ならわからないが。

「星熊様との約束？ 特にこれといつて…」

「喧嘩後に風呂で酒盛りするんだろう？ 一緒に呑む相手を掘り返しちまったら約束なんて守れやしないよ？」

小町の述べる方便を噛みしめる元偶蹄目。

久々に見た相手がひょうひょうとした態度で接してきた事で、完全



に荒事の空気が抜けたアイギス。

あれだけ血生臭い事をやらかしておきながらころつと変わるこの態度、性格でも変わったように見えるがなんて事はない、争いよりも大事な約束なんて物を投げつけられて興味がそつちに移っただけだ。小町が言うものが方便だとわかつている、言った勇儀のその場の冗談だとも理解しているが、神相手に抗えるほど万全ではない今の状態：やりあうなら万全で、わかりやすい方便でも乗ればこの場は収まると考え取って？に乗るようだ。

お楽しみはまた後でと小町と勇儀を見比べてから、今日は諦めるとボロボロの両手を上げた黒羊であった。

そして荒事の雰囲気は抜けたのがもう一人、遠巻きに吠えていた鬼の四天王だ。こちらは争う相手がいなくなったと感じ取り、やり場のないモノも湧いているが相手が死神では相性が悪かった。

死神小町も名の通り神様の一人、死人がいる限り存在し続ける神様で殴り殺して死ぬような相手ではない、怪力乱神の鬼が張り切れれば瀕死くらいにはなるかもしれないが、死神が死ぬなんて事はないだろう、多分。

殴るにしてもこちらも万全とは程遠い、下手を売って喧嘩で負けるなら、横槍入れられた興が削がれた：ついでに嫌々ながらも住まいを与えてくれた地霊殿の主に恩を返すつもりで拳を納めるようだ。一本気で義理堅いのも鬼の性分、怪力乱神で在る前に彼女は鬼の頭目だった。

そんな二人を見て場をめる小町。

ひょうひょうとした死神が拍子を取って終わりを告げた。

「さあさ終いだ、続きをやるならお説教を聞いて町並み戻した後にしとくれ。店がないんじやサボりに来れやしない」

◇◇◇◇◇

上司をスキマの内に届けてすぐさま迎えと言われた地獄の渡し。

自身の操る能力を使えば数秒かからずにとどり着けるはずが、それはせずに命ぜられた仕事をサボるようにわざと遅れて現れた者。

遅参したサボリ魔死神小野塚小町の迷裁きを見て、スキマの中でた

め息をつく誰か。

送られた上司がため息と言葉を同時に吐いた。

「後でお説教ですね、ですが任せてよかった。アレの扱いは八雲紫よりも小町のほうが向いているかもしれないね」

スキマTVを見ながら部下を褒めてけなす閻魔様。

ついでのようにけなされた八雲紫が少しだけ目を細めるが、確かに言われた通り紫よりも小町のほうが向いているように見て取れた。

曖昧で遠回しに言う紫より、方便でもハッキリと物を申す小町のほうが、アイギスに何かを言うのなら向いているのかもしれない。

「映姫様、お話を戻してもよろしいでしょうか？ お小言よりも先ほどまでの話の方が興味深いのですが」

話しついでに小言を言われた妖怪の賢者が、はつきりと小言よりも大事な、続きを聞きたいと幻想郷の閻魔様に問いかける。

スキマから紫に向き直り、悔悟の棒を一度鳴らす映姫。パアンと鳴った四季映姫の平手に一瞬だけ紫が視線を取られると、そのまま目を逸らすようにスキマに向き直る映姫。

「アレ、アイギス⇨シーカーは迷える羊なのですよ、自身の成り立ちを求めて自ら彷徨い続ける哀れな羊。それが彼女です」

映姫の瞳にアイギスが映る。

自身の部下と会話しながら荒れた雰囲気消していく姿が見えると、やはり歪なモノだと納得するように頷いていた。

「成り立ちであれば既にわかっている、アイギス自身もわかっているはずですが？」

「ええ、理解しています『勘違い』で贄とされた、そう理解していながら探し続けているのですよ。何故勘違いされたのか…勘違いに理由などないのに。その時そう思われたからそうされただけだということ…それを理解しながら在りもしない答えを求めているのです」

アイギスが紫に話した成り立ち、そこに隠したモノ。

紫が『？』だと述べたモノに対して地獄の閻魔が説明をし始めた、内容は四季映姫の話す通りの事で聞く限り。

『？』というよりもアイギスからすれば唯話さなかつただけの事、深く

聞かれなかったから話さなかっただけの理由であり、隠し通すほど深いものでもなかった。

「答えがないとわかりながら探す、矛盾しているように思えますが：それが真名だというのですか？」

「その通りです、既に知る答えを探す、盾の真名を持ちながら穿つ矛である彼女：生きも死にもせず在りもしない答えを求めて現世を彷徨い探し続ける者、矛盾している存在というのがあの悪魔の在り方です」

スキマに映る仮初めの従者を見ながら説明を受けた紫。

一瞬考えてから思いついた事を話す、それに対しても四季映姫から説明が入った。

語られたのはアイギスの在り方、四季映姫の言葉を借りればそのまま矛盾した存在というのが彼女だ。勘違いから生まれ出されそうされた理由を求めて彷徨う者、悪魔っぽい色と容姿ただただで墮とされたかわいそうな羊。

アイギス自身それはわかっているが同じ羊の中に似た者は大勢いた、だというのに何故私だったのか？

その答えを求めるように生きもせず死にもせず、墮としてくれた恨みを宿したままに現世を移ろいいくだけの者：真名に縛られ理解しながら求め続ける哀れな黒羊が彼女であった。

「探した末にある救いを求めていないのが更に厄介ですが、それは別問題なので今はいいでしょう。納得しましたか、八雲紫」

哀れな羊と言う割に嬉々として他者を手に掛けるのはこれだ、悪魔として成り果てた今はそれも楽しんでるらしい。

終われないのならそれもいい、いつかあるかもしれない終わりまでなんでもいいから暇を潰す、その暇つぶしの中で好ましいのが血腥い事だったというだけである。

「彼女についてはわかりましたが、彼女を招き入れた事を聞かれましたね？ あの言葉の真意はどのような？」

「気がついているでしょうが敢えて言いますよ：命じられた事を守りそれをその通りに遂行する悪魔、八雲紫との契約が完遂するまでは

その姿は変わらないでしょう。ですがその後…仮に貴女以外と契約し幻想郷を壊せ、そう命じられたらどうなるでしょうか？」

スキマの中で小町と話すアイギス。

穏やかさを取り戻した彼女を見ながら真面目な顔で語る閻魔様。

アイギスの在り方を知る者でこの地を大事に思う者なら懸念する事だろう、八雲の子飼いとして従順な間は良い番犬になる、けれど仮にこの地を壊す…転覆させたりひっくり返そうとする者と契約し、それをしようとすれば…そんな懸念を話す映姫様。

「貴女の懸念している通り、真正面から壊そうとするでしょう。先ほど見せていたように何度死んでも終わらないままに破壊の限りを尽くす、どうにか滅したとしてもそのうちに外の世界で復活し、結界を穿ち再度現れるのでしょうかね」

無言で聞いて考えている素振りの紫。

扇を開いてその奥で悩むような瞳のスキマ妖怪に閻魔様が追加を述べる、先程まで見ていた地底世界の惨状。紫が試すように敢えて首輪を緩めて向かわせた旧地獄の町がどうなっているのか、それを見せるようにスキマTVを悔悟の棒で差す楽園の裁判官。

映姫の指したスキマを見てここまで無言で聞いていた紫が少し変化を見せる。

そこに映るは小野塚小町。

パンパンと両手を叩き場のメを告げた瞬間が映る。

紫の変化、それは疑問であった。

本来定命の者とは関わらない立場の閻魔様がここまで肩入れする理由、自身の右腕、というには動きが悪い事が多いが信頼の置ける部下を使ってまで場を纏めた理由が気になったようだ。

「そんな危険因子を引き入れた、この地の管理人を名乗る貴女がですよ？ 私はこの地の死後を見る者、生者の行いにこれ以上関わるつもりはありませんが…裁き切れないような状態になるのは好ましく無い…そうならぬようアレを上手く使い続ける自信はありますか？」

紫の心を読んだかのようにドンドンと追加される言葉。

お説教が趣味、そう言っても過言ではない閻魔様の心に火が着いた

ようで、問いかける前から今後に対して考えられるお説教をガンガン話していく四季映姫。浅く思える判断でアイギスを招き入れた紫にお説教だけ、そのつもりだったはずが幻想郷に対する懸念も見せる。今回のお節介の理由なども話してからこれ以上はないと告げているが、口うるさいながらも有り難い説法を解くのは自身が衆生を救うお地藏様だったからだろうか？

「返答がないのは何故でしょう？ また曖昧にぼかすのですか？ その結果幻想郷がどうなるかわからなくはないでしょう？ アレを抑える吸血鬼（段）があるのはわかります、ですが貴女のその企みは確実ではない、危ういのですよ…そう、貴女の…」

元石像だとは思えない滑らかさを見せる閻魔の口。

幻想郷を憂う説法から本格的なお説教に移る素振りを見せ始めた、映姫の説教が始まるスイッチである『そう、貴女は』と聞こえた辺りで、ここまで静かに聞いていた紫が動いた。

表情を隠すように開いていた奥義をパタンと閉じて、有り難いお説教を垂れ流し始めた四季映姫に向って正面切つて返答する。

「問題ありませんわ、既に契約の代償で裏切れない状態なのです、じゃじゃ馬だろうが暴れ羊だろうが乗りこなして見せましょう…幻想郷はなんでも受け入れるのです、残酷な事ですが終わりを内包する者も当然として受け入れますわ」

？を見抜く四季映姫に向かいはつきりと、真つ直ぐに瞳を見据えて返答する紫。

抑える手段と言われた吸血鬼の事を持ちだされ、その時の心境を思い出しながら饒舌に語る。吸血鬼姉妹を見るアイギスの瞳は慈しむものだった、ああいった者達が住まう地を壊す事を望まない。

もしそうなれば何かしらの難癖をつけて契約者を墮とし、契約自体をなかった事にするだろう、素直に雇い主に使われながら裏切れば何度死んでも殺すと脅してくる狡猾な悪魔なのだ、何を犠牲にしても守りたいものは守る。

真名に囚われているのだからそこは揺るがない。

アイギスからの期待を裏切らず、上手に乗りこなす為には？

地底の鬼よりもやはり吸血鬼を利用すべきか？  
もうすぐ広める新しいルールを思いながら四季映姫に返答し、スキ  
マに映る黒羊を見て嗤う妖怪の賢者だった。

余談だが、この騒ぎの復旧のためアイギスはしばらく帰ってこな  
かった。

閻魔の来訪により始まったお説教は丸三日。

地底組、黒羊、部下とそれぞれ一日掛けて説かれていた。

その説教が終わりすぐに復旧作業は始まったのだが…

ここでもタイムロスがあった。

本来陣頭指揮を取るはずの地底の管理人が説教後に腹を抑えて倒  
れたからだ。

代わりに鬼連中と土蜘蛛が陣頭指揮を取って復旧作業に当たった  
が、指揮と呼べるモノではなかった。

酔っ払って作業に当たる鬼連中とそれを嗤う土蜘蛛、まともな指揮  
など出るはずもない。

どうにか始まった復旧作業。

その場に混ざるのは黒羊と、偶に悪戯する路傍の小石。

ついでに捕まり作業に混ざる封じられた妖怪達。

何もせずに逃げ切ったのは橋姫位だろうか。

炊事等で動いていたらしいが詳しくはわからなかった。

工事途中で喧嘩もあり、宴会だけの日もあった。

温泉の拡張などもついでにされて、色々な要因が混ざり期間が長く  
なった修復工事。

予定よりも一年以上伸びた着工期間。

その為、地底にも仮住まいを構える羽目になった雇われ人がいるら  
しい。

## 幕間 書物に記される悪魔く幻想郷縁起く

血煙が舞った地底の喧騒。

突然訪れた見知らぬ妖怪、いや悪魔がやらかした大惨事。

あの騒ぎのせいで地底の様子は少し変わった。

住まう妖怪たちは何一つ変わっていないが、作り変えられた町並みが一新されて、以前の荒々しい雰囲気を残したままに温泉街の様相を見せるようになっていた。

騒動の震源地近くにあったが、普段から鬼がいついて頑丈さに定評のある酒処や、騒ぎの中心であった旧地獄街道とは別の通りにある店などは無事だったが他はまるつきり建て替えられた。

正面通りに面したこ汚い食堂や長屋などは全て崩れて今は見た目新しい日本長屋となっており、規則正しい高さや間口で立てられて統一感を見せていた。

拡張された温泉の湯けむりと合わさり、本当に温泉沸き立つ観光地と見えそうな町並みになったが、前述した通り住んでいる輩はまるで変わらないので、綺麗な日本の町に荒々しい妖怪が住むという状態になっている。

これはこれでオドロオドロしく見えて、こういう怪しさも悪くないと通りを歩く土蜘蛛が嗤っていた。

「はいはい、いたら言っておくから勇儀に後から混ざるって言っとおくれよ」

通りを歩きながらあちこちから声をかけられるヤマメ。

誰にでも朗らかに笑って見せる佇まいと、その明るい性格、ついでに復旧工事で見せた力からこの地では慕われていて、すっかり地底のアイドルといえるような状態であった。

かけられたその声に手を振り替えしたり、声の主が見知った者であれば歩きながら少し返答していくアイドル妖怪。今返した相手はこの地底の繁華街を取り仕切る鬼、そのうちの若い部類の下っ端鬼だ。今日も酒盛りしてるから用事が済んだら一緒に来いと、ヤマメを誘って他の誰かも来るように伝えていた。

「まあいたりいかなかったり、よくわからないんだけどね」

朗らかに独り言を吐いて、旧都のメイン街道から一本奥に入る。通い慣れたようにヒラリと角を曲がって、足が覚えているというくらい余所見をしながら歩くヤマメ。彼女が向かうのは誰かが立てたこちらでの仮住まい。

奥の通りで並ぶ長屋、その一番端の角の部屋。

長屋だというのにここにいるのはその仮住まいの女と、同じ通りで仕立て屋を営む猫の妖怪だけ。他に住んでいる者がいないから実質はアイギスとその猫妖怪だけがいる仮住まいとなっていた。

「今日は…残念振られちゃった」

長屋に立てかけられた板の看板を見て苦笑するヤマメ。

その看板には木の囲いだけが描かれた絵と『NO』という文字が掘られていて、長屋を改造した店の主はいませんと示していた。在宅、というか開店しているならこの看板は裏返されて、木の囲いの中に羊が1頭後ろ足で立ち『OK』という立て札を持った柄が見えるのだが、裏側の看板がかけられているこの長屋の店には今日は店主はいなかった。看板だと言う割に随分と可愛らしいが、これはヤマメと地霊殿の主、ではなくその妹が一緒になって作った『判じ絵』というものだ、アイギスが開いた店に宛てがって開店祝いに送ったらしい。

店の入口には積まれた分厚い木材や薄めの木材。

それぞれが大きさと幅が揃うように切られ、濡れないように長く伸ばされた軒の下に積まれている、ヤマメが店内を覗くと土間には大小様々な丸い輪っかが見えた。

部材から伝わるこの店の正体、土葬よりも火葬が主流になってきたこの日本で棺桶ではなく違う物、似通った物を作るだけになったアイギスがどうやら桶屋を開いたらしい。

復旧工事の最中に拵えた風呂桶や手桶なんかが好評で、そのまま幻想郷での暇つぶしにする魂胆のようだった。

「いないって事は今日は上かね、偶にやこっちに來たらいいのにねえ。クソ真面目なのはいいが、仕事しすぎて儲けてばかりだったら次は台風でも起きちまいそうだ」



軒に積まれた材木に腰掛けて、茶色がかった金眼で暗い天井を見上げる土蜘蛛。

こちらにも住まいを構えたといっても未だ八雲の子飼い。

残り数十年となった紫との契約。

その契約がある限り雇われた立場である黒羊、地底にいる事よりも上で何かをしている事が多いアイギスを、偶には帰ってきたらいいのにとちよつとだけ寂しそうに話す明るい地底の蜘蛛であった。

◇◇◇◇◇

地底のアイドルが見上げた地の天井。

そこから続く幻想郷の地表。

その地から生える草や木と同じく地面を歩いて過ごす者達が多い場所。

幻想の里だというのに住んでいる者達は何の変哲も無いものばかりが暮らす人間の里、その一角の畳の上に両足を横に出して座るアイギスの姿があった。

今日は仕事ではなく約束を果たすために人里を訪れている。

座っているのは稗田の大屋敷。

以前に約束した自身の話を伝えるに訪れているらしいが、珍しく和室に似合う座り姿ではないアイギス……結構な期間日本で暮らしているが未だ正座には慣れないらしく、和室に座り込むときは片膝立ちか今のように女座りが多い。

「種族は羊と……いえそうではなくてですね、こう妖怪とか吸血鬼とかあるじゃないですか。羊さんなら妖怪でいいんですかね？」

アイギスの対面に座る少女。

少し低めの長机に向かって、筆を持ちながら話しかけている。この少女、稗田阿弥が問いかけているのは自身が書き認めている書物『幻想郷縁起』に書き記すための情報、一度は断られたアイギスから今度は書いてほしいと言われた為に今のように問いかけていた。

「そういう意味合いでしたら悪魔、で間違いないですね」

「では悪魔と書き記します……それで、その、旧地獄で好き放題に暴れてきたというのは本当なんですか？」

阿弥自らが書き記した書物に追加を記入し、聞いた話を再確認するように問いかける。

「どうやらみやげ話は既に話されているらしい、一度見た事は忘れないうという阿礼乙女が聞いた話を反芻して問い直している。」

「鬼や土蜘蛛とじゃれ合ってしまいまして、休暇など頂いたものですかから柄にもなくはしゃいでしまいました」

「鬼？ 忘れられた鬼と同じく土蜘蛛ですか……今こうしているって事はどちらも仕留めてきたと？」

「いえ、どちらもご躰在です。楽しい喧嘩相手ですし、一度の逢瀬で終わりなどつまらないと思いませんか？」

「思いませぬね、表情でそう語る阿弥。」

「共感を得られなかったアイギスが少しだけ眉間を潜めるが、妖怪、それも伝承で語られる事もなくなりかけた鬼や土蜘蛛との殺し合いに共感を覚えられる人間などいないだろう。」

「いたとすればそれは人の形をした人外か、妖かしを払うだけの力を持った例外的な人間だけだろう。」

「ちなみにそんな例外的な人間だが、幻想郷には結構いる。」

「正確に言えば今後増える。」

「その辺りの事も今後少しずつ述べていこう。」

「この場は取り敢えずとす、アイギスに向ける阿弥の視線が痛々しい物になってきた。」

「変に書かれる前に幻想郷縁起を書いてもらうとしよう。」

種族 : 悪魔

名前 : アイギスIIシーカー

二つ名 : 穿孔の黒羊、素晴らしき穿孔者

能力 : なんでも穿つ程度の能力

危険度 : 極高

人間友好度 : 低

主な活動場所 : 妖怪の山々霧の湖周辺、旧地獄(※1)

仕事とあれば如何なる場所でも

羊から成り果てたという悪魔。

本人は種族の通りでそれ以外ではないと言うが、文献に照らし合わせるにバフォメットという悪魔に近い。この悪魔は社交的で会話も通じる、けれどそれは人里の中だけの事で里の外で会う事があれば話しかけたりせず、一目散に逃げよう。

里の中であれば襲わないという約束を誰かとしているらしく襲わないが、里の外で出逢えば人間は血袋くらいにしか見られない。ただ喰われるだけであればいいが彼女の場合感情を喰べるらしく、恐怖を得るために生きたまま何かをされるとの話だ、泣き叫びたくなければ見かけたらすぐに逃げよう。

逃げてても無駄かもしれないが。

### 『容姿』

背は高いが細身、日に焼けたような褐色の肌の色。

瞳は赤に黒みが挿した色合い（※2）

クルクルと巻いていて癖の強い黒髪。

頭には羊らしい巻き角。

ベストまで揃った三つ揃えの黒い細身のスーツ。

中には赤地で黒柄のタツタソールチェック柄のYシャツ。

ネクタイは黒が多いが、偶に花の香りがする別の物もしている。

寒くなるとインバネスコートという外套も着こむそう（※3）

足元は黒いハイヒール（※4）

### 『能力』

そこにあるのなら何でも穿ち穴を空ける事が出来る。

見える物から見えない物まで、あるというなら問答無用で掘り返すのだそう。

時間や空間、結果など概念的な物であったとしてもそこに存在するのなら穿つ事が可能だというが、幻想郷にいる今は以前よりは弱体化しているらしい。

崇拜される外の世界であれば前述通り。

だが、僅かな信仰心しか得られない今は結果などは難しいそう。

一度見せてもらったが、指を鳴らした後に畳に綺麗な真円が空いた。

縁の下の地面も綺麗に穿たれていて、井戸掘りにいいかもしれないと思える。

他にも愛用のスコップを振るい物理的に危害を加える事も得意としていて、瀟洒な態度をしながら力尽くで獲物を振り回すらしい。

『日常』

大概は八雲紫の宛てがった屋敷にいるが、仕事となると何処にでも現れる。

性格は真面目で口調も丁寧、表情も穏やかなモノを浮かべている事が多い。

だが、その口調や表情に油断すると酷い目に会うらしい、先に話を聞く事が出来た吸血鬼や魔女がそう語っていた。里内で話しかければ会話してくれるが、興味のない話題になるとすぐに立ち去りいなくなってしまう。

住まいは前述した屋敷。

だが、霧の湖に建った紅魔館にもよくいるらしい。つい最近まで地底世界にある旧地獄にいたらしいが、不可侵条約が結ばれているというのにどうやって行ったのだろうか？

ちなみに住まいの屋敷には風見幽香が良く訪れているそうだが、死にたくなければ近寄らないのが懸命だ、行こうと思っただけで行ける場所ではないという話だが。

八雲の二人を様と呼び仕えているように見えるが、正確には雇われているらしい。

妖怪や半人半獣、半人半妖とは気安く話す姿が見られるが、特に仲がいいのは紅魔館の者や花の妖怪、地底の土蜘蛛だそうだ。(※5)

『幻想郷との関係』

前述通り八雲紫に雇われて結構前からいるらしい、幻想郷が博麗大結界で閉ざされる前くらいからいたと本人は語る。雇われの警護役、幻想郷を荒らす者達対策として八雲紫が雇った御庭番だと言うが、雇われという割には結構自由に過ごしていて、最近出来た里の花屋なん

かにもいたりする（※6）

『この妖怪に纏わる逸話』

吸血鬼異変では八雲紫が戦力として使い、人里を危機から救い出した。

里の守護者は彼女のお陰で被害が少なくて済んだと語っている。

風見幽香とは頻繁に争っていて互いに血塗れになるのが常だそうだが、本人はじゃれ合いというが風見幽香と戯れる事自体がおかしい。

幻想郷に来る前には紅魔館と共に暮らし生きてきた、怒るとあの姉妹が黙るそう。

温泉旅行のついでに星熊勇儀と真剣勝負をして生き残っている、何度か死んだと言っているが死んだようには見えないし、これは異国人らしいジョークというやつだろう。

地底にも住まいがあるそう（※7）

『目撃報告例』

・霧雨の本店にいるなあ、半妖の店員と偶に話してる（匿名）

・霧の湖近くの洋館に入っていく姿を見た、門番と話してたよ（釣り人）

・真面目な方だが……里の中以外では会いたくないな（上白沢慧音）

・あの花の妖怪と並んでうちに来た、二人とも笑顔で怖かった（花屋）

・笑顔より目が怖い（著者）

『対策』

里の中でなら今は安全、本人が襲わないと言い切っていた。

寧ろ里の中だけでしか安全は保証しない、そのようにも言った。

ハッキリと言い切られて、里の外で会ったらどうなるのかまで追求出来なかった。

もし話してみたいなら人里内で話しかけよう。

里の中であれば穏やかな物腰で気が余所に向くまでは相手をしてくれるだろう。

（※1）地獄にも住まいがあるとか、地元の話か？

- (※2) 横に伸びる瞳孔が怖い、見透かされそう。
- (※3) 小説の探偵っぽい。
- (※4) 踵が高くて疲れそうだ。
- (※5) 仲良しは殴り合いしなと思う。
- (※6) 確かにいた、私も見た、花のと一緒だった。
- (※7) 地底で桶屋を開いたらしいが、何故桶屋？

く出会いを交わすく

## 第二十九話 研ぐ庭師

地底の湯煙が届かない地上の更に上。

正確には上ではなく世界がちがうと述べるべきだろうか、地底深くで起きた喧騒や、地上で暮らす者達の笑い声も届かない世界。

アイギスが今いる世界は夏の暑さや冬の寒さとは縁遠いような世界。

長く続く階段とその先に立つ日本屋敷だけが人工的な建造物に見える場所、その屋敷の庭園に広がる枯山水を望める縁側にアイギスの姿があつた。

今日も今日とて休暇中の御庭番。

胡散臭い雇い主からまた休みを押し付けられたのかと思われそうだが、今日は違っているようだ。

「休みに付き合つて頂いて申し訳ありません」

外廊下兼用の縁側に座るアイギスが、誰かに話しかける。言いながら見つめる先は視界に広がる優美な庭園ではなく、持ち込んだ木桶に水を張り丁寧に砥石を動かす老紳士の手先。

シャリシャリと静かな音を立て、話しかけられても無言のまま何かを研ぐ妖忌の姿をじっと見ていた。

今日のアイギスと言う通り暇を潰すつもりで白玉楼を訪れていた。クビになつて暇というわけではなく、気に入つた者がいる地底で過ごしそのまま暫く帰つてこなかった御庭番にどうせならと定期的な休暇を設け、休みの間は好きに過ごすと紫が命じたようだ。好きに過ごせ等と危なっかしいが今の黒羊からは荒事の匂いは感じられなかった：血気盛んな者達と楽しめ、御庭番としてそう命じられての休みではないのだから荒れる事などはない。

「手練れておりますね」

老紳士の動かす砥石と、磨かれて光つていく自身の愛用品、旧都の

復旧工事の際に刃毀れするほど使ったノミが磨かれていく様を見て  
関心の声を呟く黒羊。

胡座をかいて座っており、その足の間には妖忌の髪色と似た色合い  
の髪と結んだ黒いリボンを少し吹く風に揺らして、アイギスの下腹辺  
りに顔を埋めて眠っている幼子がいる。

小さな両手を強く握ってネクタイを握り離さない幼女。

その周りには妖忌と同じ半透明の霊が漂っている。

「包丁や枝切り鋏もこうして研ぎます故、こちらこそ孫の面倒を見て  
頂いて。子守りが得意だとは思いませんでしたな」

研ぎながらチラリと胡座に収まる子を見る妖忌。

豪の者らしくない慈しむような瞳で子を見てから、そのまま視線を  
アイギスの顔へと上げていき好々爺らしい顔つきのままに話してい  
る。

「寝ているだけで面倒など、それに得意とは申しませんが慣れては  
おります、お孫様とは違って半霊ではなく翼を生やした者達相手では  
たが」

妖忌から胡座の幼子へと視線を下げるアイギス。

淀んだ瞳にはスヤスヤと眠る幼子が写っており、どこの子供も揺れ  
る物を掴んで離さずに眠るなど、慣れているという翼を生やす幼子を  
思い出しつつ話していた。

「気弱で人見知りする子なのですが、初対面だというのに泣きもせず  
静かに眠っておる。アイギス殿は昔から謙遜ばかりを仰られますな」  
「謙遜も何も、私は何もしておりません。寄って来たから座らせて  
放っておいたら眠っただけです、眠たくなる理由はわからなくもない  
ですが」

妖忌が悪戯に目を細めて昔の事を例えに話す。

出会いから謙遜しその後には驚かさされた黒羊の手腕、それを思い出し  
ながら、人見知りが激しく見知らぬ他人の前で眠る事などない孫娘が  
不用心に寝る姿を見て、アイギスのあやす業だと勘違いしていた。そ  
れを訂正するように何もしていないと返す布団代わりの悪魔、事実何  
もしておらず、好奇心に負けた孫が見慣れないアイギスに寄っていき



肩に跨って角を掴んだり、揺れるネクタイで遊んだ後に電池が切れたように眠っただけだ：眠くなる理由はアイギスが角を撫でている事で伝わったようだ。

「そういえば羊でしたな、妖夢も数を数えられるようになったという事か。いよいよ隠居が見えてきた気がしますな」

妖忌の手元からチャポンという音が鳴る。

たゆたう水面が乱された木桶からの水音が庭に広がると、研いでいたノミの刃先を濯いで持ち上げそのまま淡い太陽に透かすように見つめる。

淀みなく光る刃先を見つめながら、嘎れた声でそれらしい事を呟くと手ぬぐいで水分を拭き取り始めた。

「ご謙遜、そっくりそのままお返しします。貴方様程切る事に特化した方もおられませんのに、未だ錆びついてもらつしやらないのに隠居などと仰られては、楽しみが減ってしまいます」

「お褒めいただくのは有り難い、されど年には勝てませぬよ。本気で振るえば痺れを覚える我が手、これではアイギス殿を断ち切るなど無理な話：もう少し早くお会い出来ていれば」

刃物の扱いに長けた老人の手にある研がれ磨かれたノミ、一度刃毀れし切れ味の悪くなった自身のノミを見つめてアイギスが述べた。

長く使い込まれた物が磨かれて研ぎ澄まされた、錆も見えなくなりまだまだ使えるようになった古い刃物を日に透かす妖忌へと視線を移し、蘇った刃物と並ぶ者のいない剣客を見比べて話すが言われた側は蘇るには年を召し過ぎたと考えている。

「老いるという感覚はわかりかねますが、その剣技を妖忌殿で絶やされてしまつては困りますね」

一本目を研ぎ終え二本目に手を伸ばす妖忌に向かい我儘を言うアイギス。

妖忌の放つ哀愁など気にもとめずに自身の今後の為だけを思い言葉返した、一本目よりも傷んで見える二本目のノミの持ち手を握り、回しながらトントンと木槌で金属部分を叩く音が鳴り終える。

チャポンと落ちた外した刃先を見てから、これは研ぐよりも交換し

た方が早い、そう考えた名剣士がアイギスの我儘に返答し始める。

「伝える術も相手もいるというのは嬉しいもの、なれどその相手が気弱では全てを切れる者になれるかどうか」

ノミの持ち手と刃先を分けたまま研がずに手渡すと、開いた両手で孫娘の髪を撫でる爺。

穏やかな顔つきでゴツゴツとした手で優しく撫でる、本当に愛おしいというのが伝わる姿で孫に触れてその嬉しさを表す妖忌だったが…言葉からすると少し悩んでいるようだ。

この子の親は剣を学ばなかった、切れぬモノなどない父を持つ娘は切るモノなどないと言い切り、刀ではなく別の道を歩んだようだ。

そんな娘の地を引く孫、遊びに来ては小さな玩具の刀を振り回し、電池の続く限りちゃんばらをするなど剣術に興味があるようには見えるが…伝えていいのかわからないといった状態らしい。

「気弱でもよいではありませんか、それくらいの方が逃げ時がわかる。それに、わからないと仰るなら刃を合わせれば良いのでは？ 妖忌殿のお言葉をお借りするならば、いざという時には切れればわかるのでしょうか？」

切ればわかる、それを己の価値観だと考える妖忌に対し宛てがうアイギス。

妖忌が何を考えて孫を撫でるのか、ちゃんばらごっこに興じる孫娘をどうしたいのか、そんな事はどうでも良く唯自身の後の楽しみへと繋がるように煽り半分で言っただけである。

完全な自分の都合、それしかないアイギスの言葉であるが妖忌には別の意味合いにも感じられたようだ…寝こける孫を預かるというようにアイギスへと両手を差し出す庭師の翁。

ネクタイを掴んでいるままで胡座の上で寝る孫を、タイを解いて抱き渡した。

「切ればわかると常々考えておきながら自身の迷いは断ち切れない、面目ない姿を見せましたがお陰で踏ん切りが付きもうした…爺のようにならんだ時には切ってわかる事が出来るよう、そう成れるように伝えてみるのも良いのかもしれない」

妖忌が孫を抱き上げ笑みを見せる。

皺の目立つ目尻に更に皺が増えるとすつきりとした面持ちになる。迷いを断つ刀を振らずとも自身の迷いを断つた剣士、やはり並ぶ者がいないと再認識したアイギスが孫と爺二人を眺め小さく頷いた。

◇◇◇◇◇

少し時は流れ、悪魔の胡座と庭師の両手で抱える事が出来た娘も少しは育った。

幼い頃は唯のちゃんばらごっこだったモノも今では一端のちゃんばらと見えるようになった、素人目から見てもまだまだ祖父には程遠い動きに見えるが、それでも刀に振り回されるから、刀を振るうくらいには育つたようだ。

そんな少女が真剣を握りしめ、白玉楼の剣道場内で偶に来る稽古相手と対峙していた。

「ハアッー！」

少し高めの声で低く唸る少女。

祖父に似た色合いのボブカットの髪と祖父よりも濃い緑色のスカートをはためかせ、鋭い剣戟を何度も振るうが、先程から刀は空を切るばかりである。

「素振りでしょうか？」

少女が振るう真剣をひよいひよいと交わし、時偶足をかけたりして捌く相手が軽口を吐く。

軽口を吐いている者に向けて大真面目に刀を振るう少女が、煽られバカにされたと感じ両手にも瞳にも力強さを宿して突き進んだ。刀の切っ先を床スレスレまで下げて、強く踏み込んで間合いに入るとそのままの勢いを刀に乗せて切り上げるが、斬ろうとした相手は既にその場にはいなかった。

「あれ？」

正面にいたはずの手合わせ相手、アイギスが消えると左右から上へと視線を流す少女。

キョロキョロと視線を回し背後へと振り返ると、緩々と手を伸ばす姿が瞳に映った、この手に捕まれば今日の手合わせはおしまい。

少女の刀がアイギスの体を断ち斬るか、アイギスが少女に触れその手に捕まえるかすれば終わる稽古。片方は真剣で真剣に攻め、もう片方は気楽な鬼ごっこくらいの感覚で相對している。

その真剣な側の少女が伸ばされる手から逃れるように数歩下がって刀を握り直す、力強く握りしめ踏み込み一刀を袈裟から振り下ろすが、刀を振り切る前に肉薄したアイギスが柄頭を手の平で強かに押し返されていた。

「ちよっ！ それは狡いです！」

「狡いも何もありませぬ、狙われる方が悪いのですよ」

両手で握りしめる刀を片手でらくらく押し返された少女が狡いなどといちやもんを付ける。

勢い良く振り下ろすはずがアイギスに安々と、少女の全力を何でも無いように返されてご不満といった物言いだ、そのイチヤモンを叱責して次の言葉を吐かせない黒羊。

「そもそも私は無手、この場合真剣を振るう妖夢殿の方が狡いのでは？」

振られるはずだった刀ごと緑色の少女、魂魄妖夢を大きく押し飛ばすアイギス。

柄頭を押し返した平手のまま、それを妖夢に見せつけながら更に言葉を追加していく。追加された文言を聞いているのかいないのか、わからないような態度で再度刀を構える妖夢だったが先ほどの言葉もこの態度も布石だったようだ。

アイギスが話している間に正面に立つ妖夢が増えた。

追加で現れたもう一人の妖夢が、アイギスの角が生える側頭部側、死角から迫りその刀を構える。横から現れた妖夢が攻めるの見て、正面に立つ少し透けたような妖夢も刀を構え、くつきりした妖夢とは逆に正面からアイギスへと攻め走る。

「隙ありい！」

テンポをずらした正面と死角からの二重攻撃。

先にアイギスへと剣戟を奔らせたのは死角より迫る妖夢本体。

声を発し己を奮い立たせて上段からの一撃を放つ。

切れぬモノなどないはずの剣技がアイギスの頭部目掛けて振るわれるが、特に身構えることもなく頭に生やす角でそれを受け弾いてみせた。迷いを断ち切るはずの刀は大きく弾かれて少女の手元より離れる、くるくると回ってから床に刺さると、その刀は相対者ではなく床目の節を僅かに断つに留まった。

「良い手ですが、声を発しては意味がない」

気合の入った言葉を吐いてしまい、奇襲にならなかつたくつきり妖夢の奇襲攻撃。

それを角で弾くと、弾かれた両手を持ち上げたままの本体に蹴り飛ばすアイギス。浮いた体を蹴られ体をくの字にさせて後方へと転がっていく本体と入れ替わりで半霊が間合いに入った。

こちらは声なく攻めより、下からの切り上げを放つ構え。

刀の間合いまで一步というところで半歩踏み込み、刀の切っ先を天井に向かい振るう、が、その刀はアイギスの体に触れる事なく鼻先を掠めるだけに留まった。

後ろに蹴り飛ばされた本体を意識した半霊の踏み込み、それが間合いを見誤り半歩分届かなかっただけのようだ。

自爆とも言える妖夢の攻め手、だが相対するアイギスは手を緩めたりはしない。

正面で刀を振り上げ止まった半霊のベストを強引に掴み、ギリツと握りこんで床に向かって叩きつける。背後から床へと打ち付けられカハツと息を吐いた半霊だったが、アイギスの拳は未だ開かれず、握った拳をそのまま腹に埋めるように押し込み捻り込んでいく。

褐色の拳が1/4ほど腹に埋まり、妖夢の顔色が白く澄んだものから赤く、その後すぐに青くなり始めた頃、手合わせを見ていた審判役がそれまでとゞを告げた。

「お疲れ様でした、妖夢殿」

アイギスが腹に押し込んでいた拳を開き、その手を妖夢に向かって差し出すが手は取られず床で丸まっとうずくまるだけの半霊。

そのまま姿をいつもの半透明な物へと戻していく、そういえばこっちは半霊だっと思ひ出したアイギスが蹴り飛ばした本体の元へと

歩む、がこちらにも腹を抱えて丸まっていた。

半身の腹は強めに拗じられ、本体も同じく腹を蹴られた剣客少女。抜かれる事などはなかったがそれでも結構なダメージらしく、手を取ることも返答することもできないようだ。やれやれと眉尻を下げ、丸くなる妖夢を抱き抱えて審判役の元へと歩むアイギス。

孫を抱き上げ手合わせを見ていた妖夢の祖父、魂魄妖忌の元へと歩みそのまま手合わせの感想を述べ始めた。

「同じ力を発する半霊を囷に使うとは良い発想ですね、声を上げなければ尚良しというところでした」

分身こそしなかったが同じ様に死角を狙ってきた誰か、数百年前に手合わせをし吸血鬼の姉を思い出しながら話すアイギス。

あちらは高速移動からの奇襲だったがこちらは自身の半身を囷とした奇襲、レミリアとは違ってどちらも同じ霊力を纏う半霊と本体の攻撃はそれなりにいい手だったと関心し、ついでに助言も話す。

無言のままに刀を振るえば届いたかもしれない、そのように褒めはせずあくまでも軽口での助言としていた。

「毎回孫の稽古にお付き合い頂いて申し訳ない」

「いえ、成長していく姿を見ていくのも面白いものです、こちらこそ良い暇つぶしになっておりますよ」

腹を抑えて話せない孫娘を預かりながら話す妖忌。

胡座の中に妖夢を収めて頭を撫でつつ軽い会釈をした、普段は妖忌自身が妖夢の稽古をつけているがアイギスが不意打ちで遊びに来ると、遊びと称してちよつと運動するのが習慣になっていた。

妖忌が孫娘見せた剣技の数々。

流派もない我流の剣技だが、それを覚えた妖夢が偶に来る、祖父と気安く話すアイギスに手合わせを願いだたのが始まりである。

「成長したと見てもらえるのはありがたい、ですが先ほど言われた事はご尤もです。声を発したのも気が逸れたのも、この子の未熟さ故ですな」

態度は優しく、言葉は辛辣な爺。

厳格な老紳士でこの屋敷の主も堅苦しくて苦手だと言うほどだが、

まだまだ幼い孫にはほんの少しだけ優しく、ほんの少しだけ甘く態度では良き祖父となっていた。

そんな祖父の胡座の中で抑える手を腹から顔へと動かした妖夢。

優しい祖父の手に泣かされたわけではなく、敬愛する剣の師匠から冷たく言い切られた方がショックのようだ。

妖忌の着ている着物を強く握りしめて、真っ直ぐに切り揃えられた前髪も肩も頭もプルプルと揺らし、グスツと声を漏らした。こうなると後はあやす爺と泣く孫娘になるだけで、暇つぶしとはいえなくなる、それを知っているくらいには白玉楼に顔を出しているアイギスが、魂魄の二人に頭を下げて剣道場を後にした。

廊下を歩むとすぐに開かれる迎えのスキマ。

気色悪い空間に踏み入ろうと片足を動かした時に、アイギスのネクタイの先が少し欠け落ちた。

避けたつもりが少し切られていたようだ。

ハラリと足元に落ちた布切れを拾わずに、廊下に残したままスキマへと消えた黒羊。

これを見て気がつくだろう剣客が孫になんというのか？

褒めて伸ばす事もするのだろうか？

あの紳士の柄ではないか？

いや、孫には甘いように見える、などと想像しながら冥界を後にした。

### 第三十話 増える月夜

何かの侵入を防ぐように視界を霧が埋める湖。

それほど広くはない湖だが、日中はかかる霧のせいで広く見られる池沼。

今は夜間で霧も晴れ、その全貌を露わにしているから然程広くないとわかる。

幻想郷にいつからあるのかわからないこの湖。

いつからかこの地にあり、最初から霧を生じていたこの湖、その湖畔に土地ごとお引越してきたお屋敷がある。数十年前に突然に、周囲の土地ごと引越してきた赤い血のようなお屋敷……だったのだが、引越してきたその晩に盛大に破壊され、新しく修繕された部分は赤ではなく白い部分が多いように見られた。

外壁を染めるための染料不足というのもあるが、この屋敷に住まう妹が母を思い出した事で少しは白い部分があっても、と駄々をこねたのが大きな理由らしい。

赤七割、日光の加減次第では白六割くらいに見える色合いになった吸血鬼の屋敷。

日中から紅魔館を眺む者がいた。

「ここまで近づいても警戒の色も見えない、本当に吸血鬼の居城？」

霧の湖の周囲に茂る森。

その緑の中に身を潜め紅魔館を探るように見つめる者が呟く。

ろくに手入れもされていない汚れた銀髪を目深に被ったフードに隠し、同じく決して綺麗とはいえない汚れた衣服を着ている人間が、視界に写る赤っぽいお屋敷の感想を述べていた。

首の部分だけが止められる作りの黒いコート、というには随分と端々が切れているがフード付きのコートを羽織り、顔も身も夜の闇に隠して探るこの人間。

名もない子供が綺麗に晴れた月夜に身を潜めて、魔の者しかいない屋敷へと近寄り動いていた。

「まあいい、私が考える事でもない」



数日前の昼間からこうして探るこの人間。

見た目は10歳になったかならないかくらいの子供である。

口調こそ大人びているが声色もまだまだ幼く、人里で遊びまわる童子共と大差がないような体つきの人間が屋敷を望み呟いていた。

「考えた所で聞いてくれる相手もない…」

するすると音なく動く子供。

何度か門番に気が付かれて、潜んでいる辺りを凝視されていたりするのだが、一瞬にして姿を消して門番が寝こけた頃にまた現れるを繰り返していた。

その力を今も操り発現させたのか、門番の警らから逃げた時と同じく音なく姿を消していった。

少女行動中

屋敷の中は随分と騒がしくなっていた。

機嫌を損ねた吸血鬼が暴れまわっている。

一度は収まった妹の狂気が再度現れて暴れまわっている。

妖精メイドが仕事の名目で邸内を荒らして回っている。

といった荒々しい騒ぎ方ではなく、キヤイキヤイとはしゃぐ幼女の声で騒がしくなっていた。

騒ぎの中心にいるのは吸血鬼、その妹。

数十年前の引越し時には単独で分身となった喜びの感情、それが再度現れたのかという勢いで全身から喜々とした雰囲気放つように、背に生やした宝石を輝かせ飛んでは抱きついていった。

抱きついては離れ、再度輝いては抱きついてと落ち着きなく飛びはしゃぐ姿は、ある意味で気が触れたと言えるかもしれない。

「お気持ちは嬉しいのですが、もう少し落ち着かれては如何でしょうか？ フランドール御嬢様」

はしゃぐ妹、フランドール・スカーレットに飛びつかれて苦笑しながらも、少し嬉しそうな顔のまま窘めるのはアイギス。

いつかのお引越し、今では『吸血鬼異変』と呼ばれるようになったあの騒ぎの後、何度か訪れているがその度にフランドールには抱きつかれ今のような顔を見せていた。

「イヤー！」

嬉々と輝く翼に負けなくらい瞳を輝かせて、全力でアイギスに抱きつくフランドール。

加減などないままに抱きついて、アイギスの体の何処かからミシツという音がしたりしなかつたりするくらい勢いである。

正面から抱きついて短い幼子の腕をアイギスの脇腹へと回す妹君、黒いスーツの背中側までは回らない腕でしがみついたため結構な力でくっ付くが、肋あたりから鳴るミシツという音はそれが原因のようだ。

「そう強く抱きつかれては、さすがの私でも壊れてしまいそうです。落ち着かれないのでしたらせめて力を緩めて頂けませんか？」

「イヤったらイヤ!!」

「そう仰らずに、我儘を仰られるのであれば壊される前に帰ってしまいますよ?」

ミシツからメリツに変わった内の音。

体内で鳴るその音を聞いてからフランドールにお願いを述べるアイギス、体を傷つけられているというのに随分と悠長だが、日が悪かったと諦めているから窘める程度で留まっていた。

数度気が触れた吸血鬼、安定しない力を持ったままの妹が満月が過ぎたとはいえ満月に近い十六夜に、気が触れる事もなくただ嬉しげに飛び回っている姿。

それを見て感じるのは、成長した嬉しさやこの地に慣れたという事。

痛い痛いが良い感情の方が強いらしい。

「壊れなくせに……でもいいわ、久々にお泊りしていくって言うし、我慢してあげる!」

フランドールがはしゃぐ理由はこれであった。

仕事だのなんだのと難癖付けて。顔を出したとしても日帰りですべて帰っていたアイギスが、今夜は泊まっていくと伝えたものだから大はしゃぎとなっていた。フランドールからすれば久々に遊べると楽しげだが、アイギスは今日も正しく仕事として紅魔館を訪れていた。

雇い主から受けた今日の依頼はひとつ。

もうすぐ広めるルールの為に吸血鬼に贈りモノをした、今晚辺りには訪れてくれるだろうから、上手く話が纏まるか見届けてきて欲しいという物だった。

「はい、久しぶりですし楽しい夜を過ごしましょうか。フランドール御嬢様もレミリア御嬢様も楽しく…他の者も楽しく過ごせる夜と致しましょう」

腹に顔を埋めるフランドールを抱き上げて、両手で強かに抱きしめるアイギス。

近くなつた妹の耳に楽しく過ごそうと述べると、キラキラと目を輝かせてアイギスの頬に自身の頬をすり寄せてきた。

擦り寄ってくる幼女の匂いと感触を嬉しく思いながら、今夜はどういった意味合いで楽しい夜になるのかと色々と期待して、フランドールを抱き上げ何をしようかと楽しげに話すアイギスであった。

～妹様遊戯中～

紅魔館の地下深く。

充てがわれた部屋で妹蝙蝠と羊の悪魔が戯れ始めた頃。

赤い屋敷の中でも小さな戯れと呼べるような事が起き始めた。

誰もいない部屋の戸がいきなり開いたり、急に閉じたり。

掃除という名の悪ふざけをする妖精メイドがいきなり倒れて目を回したりと、なんだかよくわからない事が少しずつ起こり始めていた。

「なんででしょうか、見知らぬモノの氣を感じはするけれど飛び飛びで感じ取れるとは。イマイチ掴みきれないですね、この騒ぎに関係……するんだらうなあ」

倒れて伸びる妖精メイドを数人、肩や両手に抱えて歩くこの屋敷の警護役が呟いて屋敷内を歩いている。

夜間になり主である吸血鬼達が目覚めた今の時間帯はお勤めを終えて、自室で休むか地下の図書館で書物を読んでいるのが常なのだ  
が、今日は書物ではなく荷物を抱えていた。

「しかしあれですね、あの方が来るとなにかしら騒ぎが起きる。アイ

ギス様が何かを起こしているわけではないけど、それでも毎度賑やかになるなあ」

追加で寝ていたメイドを拾い、雑に食堂へと投げる美鈴。

食堂から続く宿舎がメイド達の寢床であり、そこまで運ぶつもりだったようだがさすがに人数が多く、一回休むだけで死にはしないし、これでいいやと投げていた。

アイギスが来ると騒ぎが起こるなんて独り言を言っているが、かつては自分もその騒ぎの一人だった自覚はあるのだろうか？

「取り敢えず見回りでもしますか、ナニカがいるのは間違いないし……匂いからすれば野良犬っぽいんだけど、迷子なら飼ってもいいなあ……御嬢様方、犬って好きだったかな？」

開いていた食堂の扉を閉じて、屋敷の警護に動き始めた美鈴。

メイドを運ぶついでに感じた気がある食堂へと顔を出し、色々話して気が逸れている素振りを見せていたが、この食堂の奥に隠れ身を潜めていた侵入者には気が付かなかったようだ。

気を感じ出来る美鈴が気がつかないとは、どういった者だろうか。

「あの方？……吸血鬼の屋敷でその名は……？まさか、ね。あの女からは何も聞いていないし、あれはただの民間伝承のはず……それより犬って、犬……」

時計を持つ自身の腕を嗅ぐが、よくわからない顔をする子供。

数日間も風呂に入らず過ごせば匂いもしよう、ついでに言えば普段から綺麗にされてはいなかった人間だ、慣れてしまい良くわからないのだろう。

それはそれとして、美鈴の残した言葉から何かが思い当たる侵入者だったが、この者の物言いからもある程度察することが出来る。

どうやら誰かに雇われてここに送り出されたらしい。

この侵入者の記憶を辿るなら依頼人は日傘を差した金髪の女で、紫色のドレスを着ていたようだ。どこかの貴婦人のような出で立ちで現れ、口元を和風の扇で隠したままこの侵入者に吸血鬼退治を依頼した。

正確に言えば妖かし退治を生業とする者達を悪戯に滅した胡散臭

い女が、運良く最後に残ったこの子供を拾い上げ、祝福儀礼を施した銀の武器を押し付けて、ちよつとやんちゃしてきなさいと屋敷近くに放っただけである。

前述した贈り物とはこの人間の事のように、人間と妖怪が対等に争う、もとい遊ぶためのルールを広めるために吸血鬼の屋敷に人を入れるとどうなるのか、八雲紫はその辺りを見たかったようだ。

運がいいのか悪いのか、この子供は体よく紫に拾われて利用されることになった。

相手から考えればなんとも不運だが、それでもこの子供にとっては幸運か。

ボロに近い服と一切れのパン、寝泊まりする屋根をくれていた大人は死に絶えたが、死んだおかげで持ち得る力を利用していた者達からは開放されて、上手くやれば自由も得られるチャンスが与えられたのだ。

「それでも裏付けにはなるか、忘れられたっていう伝承の悪魔、その名を話す従者がいる屋敷……この主が吸血鬼である証拠としてあの女に話すには都合がいいわ」

養う、というよりもこの子供を飼っていた大人達の口調を真似て、その者達から得た中途半端な知識を呟く子供がまた小さく呟いて姿を消した。

黒いコートに隠した唯一の愛用品。

腕の中で輝きを放つ銀の懐中時計を開き、秒針を少し見つめてから匂いだけを残して忽然と姿を消していた。

そんな外の世界から届けられた贈り者が屋敷の中をうろつく中。

屋敷の主は地下にいた。

目覚めてから感じる屋敷の中の匂い、数日風呂にも入っていないような獣に近い匂いと、それに隠れている芳しい匂いを感じ取り、その原因を探っていた。

寝起きでまだ朝食も済ませていない屋敷の主レミア・スカーレットが、友人で地下の大図書館の主パチュリー・ノーレッジに見せつけながら左手に天球儀を浮かべていた。

「うーん？ 確かにいるんだけど操ろうとすると場所が変わっているのよね、忽然と消えて別の所に移動している感じがするわ」

左手に浮かぶ運命の輪を眺めながら、首を傾げて悩むレミリア。

屋敷の中に突然現れた美味しそうな青い果実を探そうと、その者の運命を操るつもりで寝起きから手の平の上でグルグルと輪を回しているが、どうにも掴みきれないでいた。

「瞬間移動、空間移動といった転移魔法を短距離で使い続ければ出来なくもなさそう。魔女であれば可能だろうけど、匂いは人なのよね？」

「美味しそうだから間違いないわ。ちよつと臭うけどジビエだと思えば問題ないでしょ」

「悪食癖がついても知らないから、それよりもどうやって捕まえるの？ いたりいなかったりするんでしよう？」

「待っていれば来るわ、そろそろここへの階段に気がつくはずよ。匂いも近づいてきているしコレにもそう出ているわ」

悪食と窘められつつもレミリアは特に気にせず輪を見つめる。

先程から少し回っては止まってを繰り返していた運命の輪、その指針が大図書館の扉方向を指して、時計の秒針のようにカチツと音を立てて止まった。

早速来たのか、と扉を振り返るレミリアだったが、振り返った瞬間にはキラリと輝くナイフが数十本は刺さり、お？ と言葉を発しながら床に傾き始める。

「レミィ!？」

「まず一人、次いで…魔女、か？」

ハリネズミのようになったレミリアに手を伸ばし、体を浮かせて後方へと下げるパチュリー。

魔法を行使しながらナイフを放った方向を睨む魔女。

その視線の先には誰もおらず、投擲してきただろう敵の姿は見られなかった、だが警戒は解かず自身の周囲に5つの魔導書を浮かばせて全てを5色のクリスタルへと変化させていく。

くるくると回るクリスタルが5つの方向を警戒するように動く、

パチュリー周囲にも先ほどのナイフが展開された……音もなく作られたナイフの檻、その全てが一斉にパチュリーに向かって飛ぶが、青い何かに阻まれて魔女には刺さらず宙で止まった。

「詰めが甘い、でも手段は魅力的ね。どうやったのか聞きたいけれど、姿を見せてくれそうにはないわね」

無色透明の水の泡のような結界に刺さるナイフを抜き取り、侵入者の詰めめを甘さを述べつつ手際の良さだけは褒める魔女。

レミアアを移動させた瞬間から元素を操り自身を守るバリアのような水の結界を張っていたようだ、時折煌めいて見える泡の中で周囲を見渡すパチュリーが、敵の次の手を考えていた。

「まず、というのだし全員が標的なのだろうけど……そっちはマズイわ、どこから迷い込んだのか知らないけれど、怖い目にあっても知らないわよ?」

「……下に行ったの? 怖い目って、どちらも怖いわね、確かに」

「今の貴女も大概怖い見た目よ? 祝福儀礼までされた銀の刃物を受けているのに、随分と余裕ね」

「満月が過ぎたとはいえまだ十六夜よ、これくらいどうともないわ。それよりもこの猟犬ね、視る限りプレゼントらしいんだけど、噛み癖から直さなければいけないみたい」

顔面、その瞳に刺さったナイフを抜きながら起き上がり、パチュリーに向かって軽口のような事を話すレミアア。

図書館内に四色のクリスタルを飛ばして敵の探知し始めたパチュリーが、匂いの続く一箇所を見つめてポツリと呟いた後、起き上がったレミアアにも呟いていた。

魔女の見つめる先は地下へと続く道、同じくレミアアも修復した瞳で階段を見つめる。

美鈴の警戒を抜け、レミアア・パチュリーに気が付かれずに行動し更には攻撃までして姿を消した何処かの誰か、意外と面白いモノを寄越してくれたと、侵入者のこれまでの運命を視たレミアアが頷き笑んでいた。

スキマが送り込んできた者。

案として固まったスペルカードルの最終的な様子見としてわざと送り付けてきた人間。

手酷く相手をしては紫にどう見られるかわからない。

そんな事を輪の中の景色から読み取り、食うよりもそれを逆手に取ってスキマに見せつけようという魂胆も見え隠れする笑みであった。

一方レミリアを針のむしろとした子供は足音を殺しつつ階段を降りていた。

投げ込んだ本数から一匹は仕留めた、魔女も逃げられるような隙間はなかったし、あの魔女の動き方からすれば攻めるよりも守りに強い者だと認識し、逃げながら手を考えているようだ。

「退路の確保が済んでからナイフを回収、邪魔をするのならあの魔女も…いえ、無理な話ね。私の邪魔が出来る奴なんて…」

地下へと降りる最中フードを外して顔を見せる子供。

少し汚れているが顔立ちは整っていて、綺麗に手入れをすれば十二分に輝くような女性に育つ、そんな事を想像させる凜とした顔つきの少女が呟きと共に足を止めた。

正面から階段を登ってくる誰かがいる。

コツコツと足音を立てて登ってくる者。

場所からすれば確実に屋敷の者。

すなわち敵だと感じ取り、残り少なくなった銀製のナイフを構えて、その者が視界に入る瞬間を待った。響く足音が近くなる、後数歩登れば影が捉えられる…少女がそう感じた瞬間に、暗い地下の闇の中に赤黒く光る横長の瞳を視た。

「人間？ ああ、紫様の仰られていた贈りモノという…」

見えた瞳の主、低い声の女が話す最中で言葉が聞こえなくなる。

話している最中で銀のナイフが額、喉、胸の中心とそれぞれに刺さっていた。

赤黒い光が消えてほっとする少女だったが、その体が倒れ崩れずに踏み止まった事で再度警戒し、一度引くように階段を登り始めた。踵



を返して逃げ始めた少女が足を踏み出すと、パチンという音が狭い階段の中で響く。

音が鳴ると階段状に削られた石段が穿たれて、少女の足元を安々と掬った。

「足場が!？」

「手癖が悪い子ですね、少し躰が必要でしょうか？」

喉に突き刺さるナイフを抜いて、喉と口から地を流すアイギスが少女に向かって手を伸ばす。

額と胸に刺さったナイフはそのままに、生き物であれば確実に絶命している見た目で、怯んだ少女へとゆっくり歩んでいく。

が、手が届く前に少女の姿が忽然と消えた。

「いない? 手品で……」

また話す途中で言葉が遮られた。

懲りずに喉や首に刺さる銀のナイフだったが、今度は刺さったまま事などなかったかのように動くアイギスが少女の動きを捕らえた。

先ほどアイギスに穿たれ抉れた部分。

階段があつた辺りで右手にナイフを構え、左手で懐中時計を開いている少女に、千切れそうな首を回して微笑みかけるアイギス。

「なんで!?! 止まってないの?!」

開いた時計のスイッチ部分をカチカチと鳴らす少女。

その時計を使って何かをしたいようだが、少女が今立っているその部分では何も発動しないように見えた。

「何をしたのかはわかりませんが、その場所では何も起こりませんよ?」

冷や汗を浮かべる少女に一步近づいて、首や胸、額に刺さるナイフを抜きながら穏やかに話すアイギス。

時計を弄り突如消えては現れる少女、時間でもどうこうしているのかとそれっぽいあたりをつけて、その力が発動しない理由を簡潔に述べ始めた。

「貴女様が立つその抉れた部分にはもう何もありませんよ、私が穿ちソコに穴を空けましたので」

再度指を合わせ、捨てたナイフの刃先を穿つアイギス。

普段は見える物体を穿ちわかりやすいが、今日はよくわからない状態であった、彼女は空間でも時間でもそこに在るなら穿ち掘り返すと豪語している。今の物言いからすればこの少女の立つ位置はアイギスに穿たれた、そこにあつた空間も時間も穿たれて穴が空き無くなった、それ故何も操れなくなったという事らしい。

少女の上下する胸を視る限り空気は残っているように見える、デタラメな能力でデタラメな発現だが、事象の境界を操る隙間妖怪もいれば、よくわからない力で空間ごと殴り抜ける鬼もいる幻想郷だ、この地であれば然程デタラメではないのかもしれない。

「吸血鬼の屋敷にいて、穿つ…その角…あれはただのお伽話でしょうに！」

「お伽話とは一体何の事やら、もしかするとそのように伝わったという事でしょうか？ その辺り、是非とも詳しく聞きたいですね」

まだ降りられる地下へと汗を飛ばしながら降っていく少女。

アイギスが穿ち抉った部分から身を動かして再度時計をカチツと鳴らす、その瞬間から少女の姿は消えたが…：階段の続く先からアイギスに言ったよりも酷い声色で叫びが聞こえてきた。

少女の瞳に映つたのは、恐らくだが宝石羽を生やした幼女四人のバラバラ死体。

一人は瀕死で生きているが、他は中身もぶち撒けているような状態で部屋の塗料になっているような状態だ、それを見て声を立てずにいられるほど少女は成長していなかった。

小気味よい声を聞いて甘美に浸っていると、上から降りてきた屋敷の主と魔女が合流する。

聞こえてきた声を確認してからアイギスに歩み寄ってくるが、胸に穴の開いたスーツや血塗れの襟元を見てから、やっぱり怖い目の者に会ったんだなと納得し頷いていた。

「あの人間は？」

「また派手に刺されたのですね、それでもレミイよりはマシか」

「あの少女でしたら高揚し過ぎて分かれた妹君と対面されておりま

す、久々に見た異能な人間が面白くて少し遊びすぎましたね」  
先頭を歩き問いかけるレミリア。

その一段後から別の事を問いかけるパチュリー。

二人にそれぞれ返答して、祝福儀礼の施された刃で刺された額などを撫でるアイギス。

並んで地下へと歩んでいく魔物三人。

足音鳴らして降っていくとフランドールの部屋で行き詰まり、復活する兆しを見せた吸血鬼の妹から逃れようと階段を上ってきた人間と対面したが、その少女は意識を穿たれて登る途中でふらりと倒れた。

少女失神中

ちよつとした追いかけてこが行われた屋敷。

鬼役だった者が途中から追われる側になるなど、少し歪な鬼ごっこではあったが、歪な悪魔を交えたお遊びとしてはそうなくても仕方がない。

そう思えるくらいに最後はあつさりと終わった捕物だった。

屋敷の主レミリア・スカーレットが芳しい匂いだと評じたあの少女。

あの後には捕まり匂いから喰われたのか？

と獲物として見られればそう考えらるが、喰われるという事はなく、今は屋敷の皆と一緒にいて身を清められるのを待っていた。

「喰われる……」

屋敷の主は流水が苦手だという割に何故かある大浴場。

丸く大きな湯船が中央にあり、その周りには体の洗い場兼獲物の洗い場がある。

その洗い場の端で小さくなりポツリと眩いたのはあの時計を持った少女だった。

「何か言いましたか？」

木で作られた和風な椅子に座る少女。

その後ろから声をかけるのは屋敷の警護役兼使用人兼門番兼料理長の紅美鈴。

何時寝ているのかというほど色々任されている彼女が、縮こまる少女に声を掛けた。

「何も……」

「人外しかいませんが皆さん良い方ばかりですよ、食べられなくて良かったじゃないですか」

「綺麗にされたら喰べられる……」

「食べませんよ、レミリア御嬢様も仰っていたじゃないですか。人間の割りに面白いから飼ってやるって」

丸まって猫背になる少女。

気落ちして、まるで地獄の底にでもいるかのような声色で話すが、同じ椅子に座った美鈴が両足を開き子の背中にピタリとくっついて頭からお湯をかけ始めた。

ゴボゴボと何かを言う少女の事は気にせずに、数度頭からお湯を被せてそのままワシワシと頭と髪を洗っていく。

「泡立ちが悪い、何日くらい野宿してたんですか？」

「今日で7日」

「どおりで、犬と間違えるわけだ」

優しく笑みながら獣臭い少女を洗う美鈴。

一度では泡立たないほどに汚れた灰色っぽい髪をすすぎ、再度泡立って楽しいに洗っていく。

コレでもかとシャンプーを手にとって少女の頭をマルマルモコモコとさせていくと、それを見ていた湯に浸かる者達が何を遊んでいるのかとジト目やら笑顔やらで見始めた。

「また贅沢に使って」

「汚れを落とすのなら泡は多いほうがいいけど、あれじゃ逆に落とすきれなくなりそうね」

「アイギスみたいな頭だね」

「あそこまで丸くモコモコでは……モコモコでしょうか？」

屋敷と書庫の主達が遊ぶ美鈴をじっとりとした目で眺めている横では、四肢をバラされた後だというのに楽しげに笑う妹と、その妹の背もたれ代わりになっているアイギスがやや不機嫌な顔で湯に浸

かっていた。

四人が見つめる先では数回ほど頭から湯を掛けられても逃げようともしない、屋敷でただ一人の人間が小さくなっている。

「さあ次は体です、ちよつと立ち上がりましょう」

「体は自分で…」

「いいから、お姉さんに好きにさせなさい」

少女の両脇に手を伸ばして軽々と持ち上げる美鈴。

ちよつとだけ抵抗した少女の手が美鈴の頭にペチンと当たると、そのお返しと言わんばかりに脇をくすぐり始める拳法家。

耐え切れず笑い声をあげる少女とそれを楽しげに見つめる美鈴、主の命を狙いに来た侵入者相手だというのにキャツキャツと楽しげな雰囲気である。

「それで、本当に飼うの？ 特異な能力があるとはいっても人間よ？」

「飼うわよ？ 人間にサボテンみたいにされるなんて初めてだもの、美鈴の時にも思ったけれど、私にない物を持っている者は手元に置いておきたいのよ」

少女の笑い声が響く中、パチュリーからの問掛けに答えながらアイギスを見つめるレミリア。

手の届くところにいて欲しいという気持ち半分、あれは私じや手に負えないという気持ち半分で見つめている。問掛けたパチュリーも笑う少女を見て少し考えているような表情だ、かつて人間に殺され焼かれていった両親の事でも思い出しているのだろうか？

「もう…本当に…ダメ…」

「やつと諦めた、最初から素直にすればいいのに」

笑い疲れた少女が身を振る事をやめ呟いた、そのままぐったりと美鈴にもたれかかる。

抵抗を諦めた少女を抱いたまま丁寧な体を洗っていく美鈴、全身まるっと洗い終えて抱かれたまま美鈴ごとお湯を被る。

「楽しそう、アイギス、あれやって」

背もたれ代わりのアイギスの胸をペチペチと数度叩いて、自分も丸洗いして一緒にお湯をかぶって欲しいとねだるフランドール。

レミリアにしろフランドールにしろ湯船に浸かるなど自殺行為に思えるが、流れていなければ問題ないらしい。それでも川のような流れはないが多少の水流はあるはず、だがそれは『流れ』ではなく水の『動き』としか感じないため大丈夫との事だ。

同じ作りのプールも大丈夫だと姉妹共に言っていた、雑な認識力である。

「お断り致します、紅様かもう一人の悪魔におねだりされるがよろしいかと」

「なんで不機嫌なの？」

ペチペチと叩かれながら完全拒否の姿勢を見せるアイギス。

先程から濡れた髪を撫でてはつまんだりしているが、その表情は少しだけ不機嫌そうな眉根だけがほんの少しだけ寄って下がるような表情だ。

フランドールにモコモコと言われたのが気に入らないらしい、羊なのだからある程度は仕方がない、そう思っていたようだが少女のモコモコ泡頭を見て思う所が出来たようだった。

ちなみに美鈴と一緒に言われた小悪魔は端で壁に寄りかかりぐったりとしている、その子は私が洗うと下腹部と胸に手を伸ばそうとした瞬間から、首に落とされた美鈴の手刀によって違う世界へと旅立っていた。

「反対はしないけど面倒見られるの？」

「諸々は美鈴に任せるわ、屋敷の中の事でも仕込んでもらえばそれなりに使えるようになるでしょ。ついでに組手でもしてもらって猟犬から番犬にしてもらおうわ」

全部丸投げするつもり、そう述べたレミリアにパチュリーがため息を吐いて吹きかけた。

幻想郷に来る時もパチュリー頼りだった紅魔館の主、従者も他人任せにするとは主としてどうなのか？

そんな事を考えているようだが、それくらいに大らかだから私も受け入れられたのだったなと思っ直して、湯船に浸かってきた美鈴と少女に視線を移していた。

「そういえばお名前は？ 名無しでは呼ぶに困ります」

「名前、ない……です」

美鈴の隣で湯に浸かり、小さな体の顎先までを湯船に浸けて話す少女。

綺麗に洗われた伸ばしっぱなしの銀髪を湯船に漂わせて、小さな声で名前はないと呟いた。外の世界でこの子を飼っていた連中は便利な道具、時を止めて色々と出来る道具としか見ておらず名前は与えられていなかった。

与えられていたのはその者達への強い恐怖と殺しの業だけ。

不満を言えば殴られて。

汚い仕事を押し付けられて。

手に入れた全ての物を掠め取られて生きていたようだ。

能力を鑑みれば脱出など容易に思えるが、物心付く前からそう仕込まれていれば逃げるという発想は思い浮かばないのだろう。

殴打などの暴力だけで済んでいたのがまだ救いか。

「名前ね、では私が名付けてやろう」

レミリアが全くない胸を張り宣言する。

悪魔二人と少女以外が全員レミリアを見つめ、誰が見ても不安という顔で屋敷の主を見つめていた。この屋敷の者達はレミリアの高尚すぎて理解し難いネーミングセンスを知っている、スピア・ザ・グングニルはまだいい。

が、八雲紫から手渡されたカードに付けた名前は、こう、声高に宣言したりするには少しばかり格好が良すぎる名前ばかりとなっていた。

そんな主の口が動く。

「そうね……サクヤ。サクヤ・イザヨイにするわ」

「おお、まだまともな名前」

「安直だけど、いつものよりはいいわね」

「今日の月夜と昨夜の満月からですか、いいですね」

どうだという顔でふんり返る姉。

それを聞いてまだまともだと返答する妹。パチユリーと美鈴も同

じく、予想以上にまともだったと感心しながらそれぞれが少女の顔を見つめていた。反応はせずに話だけ聞いていたアイギスも予想外だったようで、不機嫌顔は変わっていないが小さく頷いていた。

「さくや？…いざよい？」

「良かったですねサクヤさん、良いお名前だと思いますよ」

顔を上げて付けられた名前を呟くサクヤ。

隣にいる美鈴から名前を呼びかけられて、花の咲いたような笑顔を見せた。

生まれ落ちてから初めてついた名前。

それを呼ばれ始めて感じた暖かな感覚。

それが何かはまだ理解できないのだろうが、人外しかいない風呂場で人情を感じ笑うというのも幻想郷らしくていいのかもしれない。

「お姉さんのお名前は？」

「お姉さんは紅美鈴です、よろしくお願いしますね」

「ホンお姉さん？」

「メイリンお姉さんですかね。サクヤさんとは逆で、文字も漢字というのが入っています」

真面目に考える顔で美鈴を見上げるサクヤ。

青い瞳で真っ直ぐに美鈴を見て悩んでいるが、この子の扱っていたナイフから察するに、この子もレミリアやアイギス達と同じく異国の出なのだろう。あちらの者達からすれば漢字などはわからないし、名前の姓名が逆だという事も違和感があるのかもしれない。

「カンジ：私もそれがいい」

「私の名付けに不満を言うとは…：躰が必要か」

ふんり返り返っていたレミリアが、サクヤに顔を近づけてその牙を光らせる。

首元に向かって少しずつ動くレミリアの頭だったが、妹がレミリアの背におぶさって二人で湯船に沈んでいくと、ガボガボと底で文句を言っていたが、飛沫から逃げるように思わず美鈴に飛びついてきたサクヤを見て考えを改めた。

妹を引き剥がし顔を上げると美鈴を睨んだ。



「懐いたみたいだし、いいわ。何か考えてあげて」

「さすがにそれは出来ません、御嬢様に仕える身として拒否します」

「では言い換える、良い名を与えよ」

言い切つて一人で先に出て行く主。

クスリと小さく笑つて後を追つたのはパチュリー、素直じゃないなと考えながら、同時に身形に似合わない寛大さで良い友人だと感じているようだ。

そのまま無言でアイギスも湯から上がる、それに続いて飛びついてくるフランドール。フランドールを背中に乗せたまま美鈴とサクヤそれぞれを見比べると、表情を変えて瀟洒に笑んでみせた。

ビクツとして美鈴に隠れるサクヤ。

自身の能力もナイフも通じない黒羊は正しく恐怖と映つたようだ。

畏怖を感じ満足そうに笑んで湯から出るアイギスも、紫からの依頼は問題なくこなせた、レミアも配下を想える良い主になったと感じているようだ。壁にかかる置物になっていた小悪魔を雑に掴んで、ズルズルと引き摺りながら浴場から去つていった。

サクヤと美鈴だけが残された湯船から、少しの笑い声が聞こえた。

### 第三十一話 気分新たに

紅魔館の正面玄関。

四方を壁に囲われたこの屋敷で唯一中へと歩める門が、屋敷の正面にある。

往來に不便な造りではあるが、この屋敷の者やこの屋敷に通う者達はほぼ飛べるので、この壁に壁としての機能は必要なかった。

屋敷を建てたかつての主が世間へ力を示すために、己の根城を確固たる物にするためにわざわざ作った壁で、言うなれば唯の見栄である。

見栄の為に作られた壁と門であったが、いつからかここを自分の持ち場と考える者がおり、その者が守護するようになってからは正しく壁や門として機能するようになった。

その守護者だが、今は門にはいない。

「さて、どうしようかな？」

姿のない屋敷の門番、紅美鈴の音がする。

その声は門を潜ってすぐに見える噴水の側から聞こえてきた。

腕組みして首を傾けて、何かに向かって話しかけている。

「よし、バツサリといきますか」

組んでいた腕を解き、目の前で日光に輝く銀の髪に手櫛を通して、持っていたハサミをくるくると回してから、持ち上げた髪に刃を入れはじめた。

数度動かしては迷いなくバツサリと断たれていく銀の髪。

楽しげに切る美鈴とは裏腹に、切られる側は真剣な表情をしている。

「あ、動いたら危ないですよ」

ひざ下に届くくらい長く、伸ばしっぱなしだった銀髪が切り落とされていく。

散髪のために少しだけ濡らしているからか、少女の首には少し重いようで、切られる度に髪とは逆側へ頭を動かしている。

「頭が軽くなるの始めてだから」

他者に髪を梳かれるのも切り整えられるのも初だという少女。

十六夜咲夜が美鈴に向かってモジモジとしながら口を動かした。昨晚レミリアから付けられた名前に美鈴が漢字を当てはめたこの名が、これからの彼女の名前となった。

『咲』だけ漢字を変えたのは花のように咲いた笑顔が可愛かったから。少し気恥ずかしそうに、照れながらもそのような事を美鈴が話していた。

今は楽しい顔の美鈴だが、その時の恥ずかしそうな顔は咲夜の方に移ってしまったようだ。

表情を隠すように俯いてモジモジとしているが、既に髪は切られ、その表情を隠す事はできなくなっていた。

「そうですか、ならこれからは私がいつでも切つてあげます。これでも結構器用なんですよ？」

櫛も使わずにハサミ一本でサクサクと切っていく美鈴、恥ずかしそうに俯く咲夜を見つつ朗らかに笑んで、髪を払いながら不意に頭を撫でている。

バサバサつと髪を払われて、その度にちよいちよいと撫でられて、昨晚の風呂場の時のように小さく頬も赤くなっていく咲夜。

「後は前ですね。さあ、下向いてないでこつちを向いて」

頭頂部を払った手で咲夜の頭を持ち上げる美鈴。

慣れてない撫でくりのせいですっかりと借りてきた猫のような咲夜。

犬っぽいかと思えば次には猫っぽい、可愛い生き物だと内心で思いつつ、笑い顔のまま美鈴が咲夜の側頭部辺りの髪にハサミを当てると、刃を閉じる前に咲夜の姿が消えた。

「逃げ足が早いなあ、でも切りますよ」

「切つてもいいけど、少し残して」

「少し残す？」

逃げておきながら自分で戻り、美鈴の前に座り直す咲夜。

美鈴の側頭部で揺れる編上げを見ながら自分の髪を持って、美鈴の顔を見つめ始めた。

昨晚の風呂から随分と懐いたようで、部屋も用意されたが寢床を共にした二人。

美鈴とおそろいにして欲しいと言う事を言葉にはしていないが、それでも態度からお揃いにしてほしいと語っていた。

「おねだりしてくれればいいですよ、お揃いにしてほしいって言うってみてください」

「おねだりってなに？」

「こうしてほしい、そうしてほしいと誰かに願う事です」

年長者が子供を諭すように、柔らかい表情のまま少し背を丸めて顔を寄せる美鈴。

根が真面目で今のような悪戯に近い言い方をしないのがこの武人だが、人間の子供だというのにお願ひも、誰かにねだる事も知らなかった少女に教えるため、敢えてそうしたようだ。

氣を操る能力を持つ拳法家、氣を使う事も得意らしい。

「……にして」

「ん？」

「お揃いにして！」

少し近寄った美鈴の顔を俯いたまま、目だけで見上げて、子犬のような瞳で言われた通りにねだる咲夜。

よく出来ましたと頭を撫でて、自身の編上げと同じくらいの長さで咲夜のもみあげあたりを切り、チョチョイと編みあげると、片方の編上げからリボンを解くとそれで結んだ。

肩にかからないくらいに切り揃えられ、銀のボブカットとなった咲夜の頭に美鈴と同じくらいの編上げが結われて揺れる。

視界の端に映る三つ編みに何度か触れて、揺れる動きを確認してから眼の色を変えて美鈴に飛びつく子供、本当に可愛い生き物だと飛びかかれた美鈴も楽しげに笑っていた。

く少女破顔中く

「十六夜咲夜、ね。良い名前だと思いますわ」

「私もそう感じます、紅様によく懐いているようで、これから館内の仕事を手解きされ、組手などもされるようです」

スキマに映る赤いお屋敷を見ながら、よくわからない地に建つ屋敷で話す者達が二人。

見ているスキマの中では庭先で花を植えた後、そのまま噴水の前で手合わせをし始める楽しげな顔の武人と、汗をかいて真剣な表情で動く咲夜の姿が見られた。

「無事受け入れられたようですし、あの子がもう少し育ったら始めてもらってもいいかもしれないわね」

人と妖怪が血を流さずに笑い合う光景を見つめてから、何も書かれていない見本のカードへと視線を流して淑やかに笑む八雲紫。

これから広めるルールの為の布石として、拾い上げて利用した人間の少女が無事受け入れられた事で任せても大丈夫だという確信を得ていた。

アイギスからの報告も悪い話はなかった、それどころか紅魔館の主が少しずつ成長していると、幻想郷に馴染み漢字の意味を理解して名づけたと聞いて良い環境になってきたと感じていた。

「あの人間は素敵な贈り物となりました。感謝致します、紫様」  
吸血鬼の姉妹に代わり深々と頭を垂れるアイギス。

状況から言葉の通りの謝辞だと思われるが、期待を裏切るなどという報酬に対しての謝辞でもある。

そんな事をわざわざ言う事など普段ではないのだが……

「雰囲気からまるで最後の挨拶ね、契約更新は出来ないという事かしら？」

重そうな頭の角を畳につくスレスレまで下げているアイギス、その肩に手を添えて紫が契約更新と口にした。

紫が話した通り残り数年で最初の契約期間である300年が経つ頃合い、後の事を考えれば契約を続けて手綱を締めておきたい、以前の紫はそう考えていたが今は違うようだ。

「お望みであれば更新し、今まで通りに過ごしますが如何なさいますか？」

「更新前に一つ伺っても？」

畳に向かつて、なんなりと、と返答する雇われ人。

何を聞かれるのか、と少し考えたようだが穏やかに話す紫の声色と、肩に置かれた手の暖かさからそう悪くない事を質問されるとこちらも確信を得ていた。

「アイギス個人に問います、ここは良いところかしら？」

「良い場所だと感じますね」

「言い切ってくれるのね、嬉しいけれどその心は？」

「良き闘争相手もいますし、愛おしい者もおります。そして良き友人と呼びたい者も眼前にありますので……暮らしても悪くない、良い場所だと思えますね」

肩に置かれたままの紫の手、それに自身の手を添えて頭を上げたアイギス。

個人として問われた事で、雇われからアイギス個人の姿勢へと変えるように面を上げて紫を見つめた。扇で隠されていない顔に向かって瀟洒に笑み、素直に述べた。

「そう、ではもう一つ……もしここを、幻想郷を壊せと、そう依頼を受けたらそれを成そうとするのかしら？」

肩に置かれている手に少し力が入る。

押さえつける程でもなく、殺気などが込められているわけでもない、ただ真剣な質問をしていると知らせるために紫が少し力を込めた。

「紫様から壊してほしい、そう依頼されれば全力を以って壊しましょう。この返答では不服でしょうか？」

表情を変えずに淡々と話すアイギス。

訪れてすぐはタダの箱庭、妖怪が妖怪のために築いた小さな箱庭としか思えずそれほど興味もなかったが、この地を愛する紫の命やお出かけ、偶の休暇の際に出会ったこの地の者達と信仰を深め、ここで暮らすのも悪くないと感じ始めていた。

外に出れば暇を持て余す終われない暮らしが待っているが、ここであれば、気が向けば殺し会える相手が大勢おり、その者達と気軽に会う事も可能だ。

外では感じられない充実感や高揚感、絶頂感を感じる事が出来る良

い相手達。

そんな者達と別れるなど、今のアイギスには考えられなかった。完全に自分の為だが、種族柄致し方ない思考だろう。

「なるほど……ではアイギスとの契約更新はなしとします」

紫から依頼されれば破壊する。

そう言い切ったアイギスの顔を眺め、以降の契約更新はなしと決めて肩に置いていた手を引いた。言い方からすれば紫以外からそれを依頼されたとしてもそうはしない、そのような事を含めて言っているように取れるアイギスの返答。

紫が真剣に問うて真剣に返されたが故に、その言葉を信用する事にしたようだ。確証などない唯の口約束、だがアイギスから話された口約束だからこそ紫は信じる事にした。

「畏まりました、ここまで長きに渡るご利用誠に感謝致します。残り10年もない雇用関係ですが、何卒最後までご贖員に」

「こちらこそ最後までよしなに。さて、残る数年ですがまだまだ働いて頂きますわ。つきましては今から霧の湖近辺に行ってもらいたいの」

「構いませんが、こういったお仕事でしょうか？」

「あの近辺に宵闇の妖怪がいるのよ、その者にコレを渡して使い方を教えてきて欲しいの」

スキマを開き腕を入れてゴソゴソと探る紫。

目当ての物が出てくる前に、標識や墓石など余計なものが色々出てくるが、ある程度弄った後で、何も書かれていない新品無地のカードが取り出された。

「スペルカード？ 使い方などは私もよくわかっておりませんか？」

「難しい事なんてなくてよ、これはただの紙だもの。これに名前を書いて、それに因んだ弾幕や技をこれから見せますよとわかればいいだけの紙よ」

紫の手持ちにあるのは、何か呪のような文言が書かれた紙帯で纏められた白いカード。

紙帯のせいでそれらしく見えるが、形式上そう見せているだけで実

際は紫が言った通りのただの紙ツペラである。

使い方も紫が言うまま。

これはただ宣言する為のカード。

弾幕や技はそれぞれが持つ力をカードに描いたように表現するものだ。

強さよりも美しさに重きを置いた戦いの為のアイテム。

血生臭い争いを減らす為のアイテム。

「加減させるような拘束力などはないのですね、ルールを破ったらどうなるのでしょうか？」

この地の争いを血で血を洗う殺し合いから、楽しめる遊びへと変える為の物が紫からアイギスへと手渡される。ペラペラと数回扇いで両面を見た後に、本当になんの効力もない紙のカードだとわかり、カードの感想を述べつつルールを破った際の罰則を伺っていく。

このルールが広まり布かれれば、真っ先にルールを破りそうな位置にいるのが、友人達の中で数人浮かぶ為聞いているようだ。

「アイギスが楽しめるといっただけね、会ってもらうつもりの者にもルールは伝えなければ首を縦に振ってくれないの。体に教えてきてくれていいから宜しくね」

珍しくニコリという明るい笑みの妖怪の賢者だが、話す内容は物騒だ。

直接こうしろとは言ってこないが、ルールを破れば今日のように体に教えていい、そのようにルール制定者から言われたアイギスも嬉しそうに笑む。

ニコニコと笑む二人、気安い友人のように互いに笑んでいるがどちらも胡散臭いものとしか映らない。力尽くで従わせてこいと言いつつ雇い主と、その物言いに迷いなく頷く雇われ人。

もう直この関係も終わるといっのに、きつと最後までこうなのだろう。

「畏まりました、今から向かえばよろしいのでしょうか？」

「アレは夜の方が元気だから暗くなるまでは…そうね、散髪でもしてきたら？」 気にしているんでしょう？」



開いたままの紅魔館上空に浮かぶスキマ。

その先ではおおまかな形に切り揃えた後、最後の手直しを終わらせる寸前の美鈴と、整えられていく自分の髪を見て、嬉しそうに笑んで終わりを待つ咲夜の姿が見える。

美鈴にでも貰ったのか、咲夜の三つ編み二本には華人服とお揃いの色をしたりボンが結ばれていて、動いてはそれが揺れるのが楽しいようだ。

見た目も種族も違うが姉妹が遊んでいるような、出会いからたった一日しか経っていないというのに本当によく懐いたらしく、これが終わればまた飛びつきそうな未来が見える景色。

だがその未来は訪れない、散髪を終えた瞬間を見計らいスキマに入っていく者がいるからだ。

紫が見つめるスキマTVに黒い姿が映る、散髪のためにかぶっていた古いシーツを剥がされた咲夜が美鈴に飛びつく前に、アイギスの足音に気がついた美鈴が振り向く姿が紫の視界に収まった。

「私が願えば、ね。契約を終えても期待したまままでいてくれるという事かしら：：友人から期待されているのなら、裏切るわけにはいかないわね」

スキマに映る今の雇用者で後の友人を見つめ眩く紫。

紫がかかる金の瞳には、表情も動きも止めた咲夜に微笑みかけてシーツを受け取り自ら被るアイギスが映る、バサツと羽織る姿を見て羊なのに白が似合わないとクスリと笑んだ。

闇魔様の心配は杞憂になる、杞憂にしてみせると映姫の前で話した時以上に気合を入れる紫。

生中継される後の友の散髪を眺め、バツサリ刈られたらいいわと眩き笑んでお茶を啜った。

少女毛刈中

霧の晴れた湖の湖畔。

近くの魔法の森を背に、紅魔館を正面に見る形で、ちょうど湖の真ん中辺りで夜間に見つめ合う二人がいる。

両者共に闇夜に目立たない二人。

片方はまだ目立つ部分が多いか、黒いスカートに黒いベスト姿だが着ている長袖のシャツは白で髪は黄色みの強い金色、瞳と同じ色合いの赤いネクタイとリボンも闇夜に目立っている少女だ。

湖上で止まる姿も両手を広げ伸ばしたような、十字架に磔られたように見えなくもない姿で浮かんでいて、伸ばした指の先には渡された白いカードを挟んでいる。

もう一人は真逆で、肌まで黒くて灯りのない夜ではよく見えない、けれど黒いスーツの中に着ているシャツとその瞳は赤く、その部分だけが浮いて見えて見方を変えれば目立っていた。

「ご理解頂けたでしょうか、ルーミア様」

昼間切られた髪を揺らし話す悪魔。

後ろから前に下がっていくボブカットを夜風に揺らすアイギスが問い掛ける。

癖の強い髪のせいで綺麗に切り揃えられたとはいえないが、普通の鋏で器用に毛量も減らしてもらいスッキリと随分落ち着いていた頭になった。

広がったり内に入ったりしているのはご愛嬌として、首側から顎先に向けて毛先が長くなる髪型が新しい黒羊の髪型のような。

結構気に入っているらしく、ちよいちよいと弄りながら話していた。

「紫から聞いているから知ってるわ、面倒臭いルールが出来るってお話でしょ?」

ふよふよと漂いつつ会話するルーミアという少女。

目的もなく漂って、腹が減れば人を喰う。

人間の子供と変わらない小さな体ながらその食欲は旺盛で、自分よりも大きな獲物を多い晩であれば数人は食す彼女。今日はアイギスに付きまとわれてしまいまだ食事に取り付けていない、その為声色にも態度にも早くいなくなれという態度が見え隠れしていた。

「面倒臭いですか……確かに、人に付き合って差し上げなければならぬ分手間でしょうね。ご不満ですか?」

落ち着かない態度に不満の色が見えるルーミア、ふよふよと好きに

漂っているくらいだ、何かに縛られるのは嫌いなのだろう。妖怪の賢者を呼び捨てて呼べるくらい古くからこの地にいる妖怪、力はないなどと妖怪図鑑には記されているが食べるだけで全力を出す者もない。

実際の所はどうなのだろうか、少し楽しみなアイギス。

「不満、食べちゃダメって話じゃないけど名前とか考えなきやならないんでしょ？」 面倒くさくさい

両手を広げてくると回り、ルーミアの浮かんでいる周囲に闇を散らしていく。ズモモと広がりを見せる暗がり、霧の湖の湖面が見えなくなるほどに大きく広く拡散し、月明かりも届かなくなった。闇の中でルーミアの動きを見ていたアイギスだったが、宵闇の妖怪の姿が見られなくなると少しだけ笑み始めた。

「面倒事はなかった事にする、そういつた事でしようか？」

「そくなのよ、このカードも見なかった、紫の話も聞かなかった事にすればいいって思いついたの」

アイギスが問いかけると、闇に紛れ姿をなくしたルーミアの返事だけが聞こえる。

声の聞こえる方向に顔を向けると、その方向から何も書かれていないスペルカードが数枚飛んできた。見なかった事にするとは、受け取らなかった事にして知らん振りを決め込むという事らしい。暗い闇の湖面へと沈んでいくカードを見ると、アイギスの背後から忍び寄る何かが現れた。

「腹ペコだから狩りに出る前に少しだけ……イタダキマス」

背から近づき大口を開けるルーミアがアイギスの左肩に齧り付く、少女の口に生やすには鋭い、牙に近い鋭利さを持った歯で服も骨も気にせず強引に噛み千切った。

ミチミチという千切れる音が鳴り、体に歯形を残して消えた黒羊の肩。

脇部分に残る少しの肉と皮膚だけでぶら下がる腕を見て、ヤマメよりも先に喰われるとは思わなかったと、感心するように鼻を鳴らして肩を戻すアイギス。

遠くではペット、口から吐き出す音だけがした。

「マズイわ」

「食べておいて吐くなど、失礼な御方ですね」

「おやつにもならない」

「本当に失礼な御方だ、少し窘めて差し上げます」

聞こえてきた声に返答し、バラリと周囲にスコップをばらまく。

そのまま全てに炎を灯すが、燃え盛る音が立つのみで周囲が明るくなる事はなかった。

「無駄よ？　ここは私の闇の中だもの」

猛る炎の音の中に少女の声が混ざる。

カン、カコンという音がした後再度アイギスに迫る黒い影。

今度は正面から迫り、アイギスの眼前まで肉薄すると頭を齧れるくらいに広がった赤い口がアイギスの視界に入った。

先ほど噛み付いて残る血と唾液が糸を引いている口が開かれ、羊の頭を飲み込む勢いで閉じられるが、肉を裂く音はせず、代わりにガチンという硬い物に歯を立てる音が響いた。

アイギスが頭を横に向けて角で歯を受け、硬さで勝ったようだ。

「いったあいー！」

一瞬だけ見えたルーミアの顔。

両方の頬を抑えながらすぐに消えたが、自身の歯よりも硬いものを噛んだせいで顎にでも負担がかかったのだろう。闇の奥から何度かガチガチと歯を噛み合わせる音がして、その後でカコンという金属にぶつかる音と同時に、アツツイという文句も聞こえてきた。

「先程からの音と今の文句、もしや私と同じく見えていないのでしょうか？」

度々ぶつかるスコップとルーミア、それと熱いという文句から何かあたりをつける黒羊。

この読みは正解である、宵闇の妖怪ルーミアは種族通り闇を操りそれを好きに広げたり出来る妖怪。際限なくとは言わないが、本気を出せば霧の湖一帯くらいは全て真っ暗に出来るくらいの能力はある、が、完全な闇となるため一切の光は届かない。瞳に光が差さないの

あれば物が見えないのは当然で、それは一応生物の形でいるアイギスにも、闇を操るルーミア自身にも該当した。

「見えないけど、嗅げばいいの。血の匂いは覚えたわ」

あたりを付けて手を考える中、再度アイギスにルーミアが迫る。

三手目は横から、牙を剥いて迫りアイギスの右手に噛み付こうとするが、大口を開けた瞬間に口内で顕現されたスコップで噛み合わせることなく止められた。ンガつと言いつつ後退するルーミアだったが、下がっていく途中でアイギスの指の鳴る音が数回響く。

鳴り響く度に数箇所ずつルーミアの広げた闇が穿たれ、虫に囓られた葉のように湖を覆う闇がかき消されていった。

「暗幕だというなら取り払えばよろしい、簡単な事でした」

虫食いの闇の中、体の両脇に燃えるスコップを回しているアイギスが現れる。

炎から生じる上昇気流を受け、前髪と少し長めの側頭部の髪を揺らし、赤黒い瞳を輝かせて、暗幕の虫食いを指を鳴らして広げていく。

だんだんと小さくなるルーミアの闇。

ある程度闇の範囲が狭まると、顕現させた三本目の角を高速回転させて放り始めた。

「なに!?、これなに!?、あつっ!?、あつっいつて!?!」

僅かに残る闇の中からルーミアの悲鳴に近い声が聞こえる。

聞こえた声の方向に向かって集中して投げ込まれる炎上する回転ノコギリ。何にも当たらず湖に沈もうが、先の地面に突き刺さり地面や草を炎上させようが、全く気にされずにボンボン放られる燃えるスコップ。聞こえる悲鳴が悲痛な声に変わった頃、少女サイズの小さな闇に入っていくモノがスコップからアイギスに変わった。両手を横に伸ばしルーミアの飛行姿勢を真似たような体制で、闇に向かって真っ直ぐに突貫する黒羊。

闇の中で左腕に柔らかな感触を感じると、ソレを右手で掴み上げ、そのまま地面に突撃した。

「追い詰められても能力を解かない気概は好ましい、ですがもう少し頭を使われた方が宜しいかと」

ズゴンと落ちた妖かし二人。

ルーミアは力尽くで背中から地に伏せられて、アイギスは右手が折れるのも構わず地面にルーミアを埋め落とした。地に埋まるルーミアに大して助言のような皮肉を言うアイギスだったが、その言葉はルーミアには聞こえていなかった。

偶にピクリと動くだけで返答はしない闇の妖怪。

致し方なしとルーミアの体の上に予備のスペルカードをばら撒く黒羊、衣服や切ってもらった髪に付いた土や埃を数回払うと、迎えに開いたスキマへと消えていった。

霧の湖で起きた短時間の荒事。

これを見ていたのは三人。

スキマの主とルーミアが捨てたカードを拾ってはしやぐ氷の妖精、そしてその氷精の背に隠れついてきた緑髪の妖精だけであった。

### 第三十二話 始動前

「仰りたい事は理解しました、ですがお断りさせて頂きます」  
「どうしてもダメなのかしら？ 楽しいと思うのだけれど」

「私のやり口を考えますと、混ぜられない方が良いと判断できますが？」  
「では、吸血鬼姉妹の保護者という立場で…」

「今はそういった立場にございませぬ」

地底深くにある町並みの一角。

ほとんど開店していない桶屋の居間から話し声が聞こえる。

声はこの店主と友人のもの。

『ゆ』と書かれた湯のみを持つ友人が作業中の店主に話しかけている。  
「混ぜてとお願いしてもダメ？」

「くだいですね」

「どうしても？」

「お断り致します」

話の流れからすると大家が何かをお願いしているようだ。

けれど店主の方はきっぱりと拒否し、関わる気がないと返答していた。

突然う訪れた友人八雲紫が卓袱台に頬杖をついて、少しだけ不機嫌な顔と仕草を見せてもお願いされる店主アイギスは首を縦に振らなかった。

「そもそも庭を守れという依頼で私を誘致したのでは？ 異変に混ぜり庭を荒らせという願いは真逆の行為だと思うのですが？」

十枚くらいの木板を並べそれぞれの板にカンナをかけていく店主が問いかける。

シャツと小気味良い音がすると、その音と共に滑らかになっていく木肌を擦って、紫とは目を合わせずに返答をした。

「荒らすといっても血生臭いことにはならないわ、今までのように血で血を洗う戦いとはならないはずですし、今回は」

紫がアイギスのいる土間兼作業場を見つつ問いに答えた。

お願いしてもダメかという物言い通り、アイギスと紫の雇用関係は

二週間程前に切れていた。

何事も無く契約満了となり、同時に充てがわれた住まいからも一つの住まいへと、居を移したアイギスは建物に架かる看板通り桶屋を営み地底で暮らし始めた。

並ぶ木板とハメられる事を待つ籬を見る限り、今はその仕事からしい。

今日の紫は友人として来訪し、友人として少しのお願い事をしに来ていた。

紫からの頼み事は、吸血鬼達が近く始める騒ぎにアイギスにも便乗してもらいたいというものだった。契約終了時からそのうちに何か事を起こしてもらいたいと願っていた紫だったが、以前も今もアイギスが頑なに拒否した為、譲歩案として紅魔館の者達がもうすぐ起こすに混ざり騒ぎに乗れと話した……が、それも拒否されご機嫌斜めとなっていた。

「今回の異変はルール制定後一発目でルールをしらしめる為の異変よ？ レミリア達が起こすだろう異変は私が依頼したようなもの、危険という事にはなりませんわ」

「どうなるのかはわかってる、そういった口ぶりに聞こえます」  
含み笑いを見せる紫。

その笑みに含まれたモノは準備期間は終わりというモノだ。

十六夜咲夜が受け入れられて十年近くが経ち、紅魔館の者達もこの地に十分慣れた、そろそろ目立ってもいいだろうと紫は考えているようだ。

紫が認識の境界を弄り存在こそ公にされていないが、幻想郷縁起に記述するなどしてこの地にいるという情報だけが広まっている状態が今の紅魔館の立場である。

人里を襲った事自体も載っていないが記述内容は少し違っていた。

死体の群れは紅魔館とは関わりない、外からの侵略者で既に滅しているというのが幻想郷縁起に載る情報となっている。ここの部分は境界云々よりも紫が上手く言い包め広めた事で、吸血鬼達とは繋がら



ないお話となっていた。

里を守護した者もレミリア達とは出会っていない為口だけでどうにでもなったようだ、実際噂を広めたのは式だったが、国を傾けるよりは簡単だったと後日話していた。

「内容も結末もわからないわよ？ 私はお願いしただけでレミリア達に一任しているし、それがいつまで続くのかも終わるのかもわからない」

「紫様が仕向けておきながらわからない、とは？」

「何か騒ぎを起こしてほしいとはお願いしていますわ、でもね？ 何を起こすのか、いつ頃始まるか、その辺りの話は聞いていないのよ」紫が湯のみを置いて姿勢も正す。

綺麗に姿勢を伸ばしてから妖美な顔で薄く笑み、今回の企み事についてネタバラシをし始めた。

先に紫が述べた通り何かをしてほしいと頼み、定期的な食料の確保を条件にレミリアはそれに頷いた、そうして動き始めた出来レースに近い異変だったが、仕向けた紫は何が行われるのかまでは聞かなかつた。

計略や企てを武器にする事ばかりの八雲紫にしては珍しいやり口であったが、これにも理由があったようだ。

一つは前々からの話通りルールを広めるためも広告塔として、八雲の匂いがしないように、あくまでもレミリア達が自分達の為にルールを利用し動くと見せたかったというのがあった。

幻想郷にいる事だけが確認されているレミリア達であれば目立たずに動ける状態にある、そして自身達の存在をアピールする為に何かしらの事を起こすというのも、回りから受け入れられやすいだろうと考えて、敢えて聞かずにいた。

「何をしてくれるのか、期待しながら待っていたほうが楽しいと思わない？」

「自身自身の庭が荒れるというのにその仰り様。余裕が見られますが、いざとなれば力尽くで止めるから問題ないという事でしようか？」

笑みを崩さない紫に向けて似た笑顔で話すアイギス。

そういつた時の出番でそっち方面でのお願いならと、少しだけ自分を売り出していくが同じ笑みを浮かべる紫から、つれないアイギスに今回は出番はないと言い切るような返答が届く。

「力尽くで止める事も可能だけれど、そうしてしまっただけはスペルカードルールを広める意味がないのよ。力がなくても妖怪と人間が対等に戦えるルール内で争ってもらい、ルール内で負けて終わりを迎えてもらわないとダメなの」

言い切り湯のみを取るとズズツと茶を啜る紫。

返答を聞いて少しだけ残念そうなアイギスだったが、この地の管理人がそういうのであらば今回は素直に静かにしていよう、そんな事を考えながら四面全てを磨いた木板を並べ立てる。

用意していた銅製の籠たがに並べ器用にはめて木槌で目を詰めていく。

「混ざって、とお願ひしたから断られたのかしら？」

綺麗に籠に収まり、おひつとしての姿になった木板の部分を紫の左手が撫でる。

スキマから差し出された左手が木板から籠へと撫でる箇所を変えると、すつぱりと収まっていた木板がパカアンと音を立てて外れてしまった。

音が鳴ると同時に、紫に対して丁度横を向く姿勢で作業していたアイギスが、組んだおひつから目を移して流し目気味に紫を見る。

「言い換えるわ、そうならないように少し子守りをしてもらえない？得意ではないけれど慣れているのでしょうか？」

ばらばらになったおひつを見ている紫がアイギスに再度のお願いを述べる、紫の視線に促されて手元でバラけた木板を見る桶屋の店主。

少しだけ眉を持ち上げた後、すぐに目を細めてバラされたおひつを組み戻していく。

組み上げた物を足で挟み数力所を摘んで雑に穿つと、手に持ったまま流しに歩いて丁寧に水で濯いで逆さに置くと、流しに近いその位置から紫と目を合わせるように見つめた。

「仕事の依頼と言えば断る事などありませんのに、そう仰らないのは

何か理由が？」

「よく知る子供の面倒を見て、なんて仕事にもならないでしょう？だからお友達らしくお願いとしてみただけけれど、依頼として話した方がいいかしら？」

目が合った二人の少しの会話、他愛もない物言いだが互いに色々と含み言っていた。

お願いされているアイギスの場合、お仕事と依頼されれば引き受けるつもりではあったようで、ついでに妹と戯れられればいい、という心持ちだったようだが紫はもう少し踏み入った心情のようだ。

雇用関係が解かれた後は紅魔館に身を寄せる、かと思っていたアイギスが地底の仮住まいに本拠地をおいた事で、もしもの場合の籬として考えていた者がいなくなってしまうと考えていた。

幻想郷に慣れ落ち着いたとはいっても、あの屋敷にはあの妹がいる。

異変という遊びの最中暴れられては企みが上手く進まない、そうならない為にアイギスをフランドールの籬としたいようだ。

「互いに嫌いというわけではないのでしょうか？ 何か近寄りたいたい理由でもあって？」

開店だけして営業いなかった店をどうするか？

そんな事を考えていた店主をどうにか引つ張り込もうと言葉を増やしていく妖怪の賢者。

テンションが上がり過ぎるとはっちやける悪魔の妹、気が昂ぶるアレを止めるのにはアイギスは打って付け、それが第一の理由ではあったが愛おしい者だと言っておきながら態々離れるアイギスの腹積もりを探る心もあった。

話してから少し黙る紫。

ニコニコと少女のような笑みを見せて、黙る姿と合わせて胡散臭い。

「わかりました、お願いをきいてあげます」

胡散臭い友人の願い、しつこさや話のぼやかし具合から、確実に何があって願ってきている事をわかりながらも聞き入れる黒羊。

ある程度水気が切れたおひつを持って、紫の対面へと上がり腰を降ろすと清潔そうな布で雑に水気を撮り始めた。

「あら？ いいの？」

「かつてはそうしておりましたが、今はその理由もありませんし、御嬢様方が良いと言われるならあちらに引越しても良い気がします」

座り見合う二人。

どちらも表情は柔らかいが中身まで柔らかいのは紫の方、自身の企みもあるがソレと同時に素直にならない年寄り悪魔を動かす腹積もりもあった。

その企みに気がついていないのか、わからないままに話にのるアイギスも自身が偏屈であると自認している。本当ならば吸血鬼姉妹の近くでと考えていたが、今更近寄るのもと変に意固地になる部分もあり、この話を都合よく利用して自身の考えではなく紫からお願いという体で紅魔館へ向かうつもりになったらしい。

腹積もりなど何もなく唯素直じゃなかったただけなのだが、これもよくされる勘違いの一つだろうか。

「変に素直なのね」

「その方が紫様も都合が良いのでしょう？」

「そうね、都合がいいわ」

「私も都合が良いですし、偶には素直になっただけの事です。おかしなところでも？」

「……いいのだけれど、ほんの少し癩だわ」

「癩？ 互いに持ちつ持たれつ、良い友人だと感じますが？」

「友人を利用し合うというのも、ね。偶には企み事なく話したい、そうは思わない？」

奸計を腹に溜めっぱなしのスキマ妖怪から小さなため息が吐かれる、始めは雇い主という立場で突如訪れた異国の悪魔を監視するという企みもあった紫だが、今では少しだけ気安い間柄となっていた。

どちらも自身の為に利用できる。

本気の殺し合いなどした事はないが、やりあえば互いに最後を与えられるかもしれない二人、姿なく裏で動くスキマ妖怪と真正面から

突っ込んでいく悪魔と真逆にいるが、そうだから馬が合ったのかもしれない。そんな二人の内の奸計を得手としている側から、企みなく友人としてだけ話したいとちよつとした愚痴が吐かれた。

「…なるほど、わからなくもないですし…ではこうしましょう。コレ、買い取ってくださいいな」

薄笑いばかりしていた元の雇用主。

それが先程は少女と見まごう笑みを見せたり、今は可愛い愚痴を吐いたりしている姿を見て少しだけ悪戯心が湧いたアイギス。

コレと言いながら詠えたばかりのおひつを卓袱台に乗せると、紫に買い取れと言いつつ切った。

「間に合ってますわ」

「間に合つていようがどうでも良いです、壊した商品の買い取りはして頂きます」

「アレは少しの演出よ?」

「話せば済んだ事だったはずです。それに、友人なら友人の儲けとなつてもいいでしょう? …友人らしいジョークとするには良い案だと思つたのですが」

アイギスが来る前に外に出すつもりだった看板を見て話す。

出す前に少し拭かれ、綺麗になつた羊の判じ絵が赤い瞳で二人を見ていて、ここが何屋だったのかをその二人に示している。

看板から紫に視線を移すと紫の方も気がついたようで、すつかり冗談も上手くなつたとクスと小さく声を漏らして、差し出されたおひつを手にとつた。

新しいルールを広め幻想郷に新しい風を吹かせる寸前の今、先に桶屋を儲けさせておけば企みもつつかなく進むだろうと感じたようだ。

お代は引つ越しのお手伝いで。

そう言つておひつと共に沈んでいく紫。

珍しく見せる明るい笑みをスキマの中へと消していった。

見送つたアイギスもすぐに動く。

いそいそとかばんを取り出し、着替えや新しく作つた名刺などを突っ込んでから居間に置き、銭だけを持って長屋を後にした。

またどっか行くのかと土蜘蛛や鬼に言われ絡まれる前に、自分から地底の友人達のところへ挨拶回りに行くらしい。

向かう先は隣の通り、旧地獄メイン街道にある酒場。

酒飲みだけで終わればいい、と珍しく荒事を避けるような思考で歩き始めた。

く少女挨拶回り中く

あいも変わらず霧のかかる湖。

もう数日で拜めるはずの満月もかかる霧のせいで昼間は少し見にくい。

その陰る月を見上げる化け物が、湖に近い屋敷の屋上におり、沈み始めた太陽と浮かび始めた月を眺め目を細めていた。

「どうしようか」

「どうしよう、とは？」

「八雲紫からGOサインが出たのはいいんだけど、何をやろうか……全く思いつかないのよね」

目を細めて空を眺む屋敷の主、レミリア・スカーレットが隣の者へと話しかけている。

会話相手は日傘を指す従者。

切り揃えられた銀髪のボブカットに、白いヘッドドレスを着用した姿の十六夜咲夜。

青い膝上丈のスカートが特徴的なメイド服に袖を通し、エプロンや袖部分には白を差し色とした出で立ちで、静かに佇んでいた。

「何をされても宜しいのでは？ 手段は問わないというお話なのですし」

レミリアの悩み顔を見て咲夜が促すが、それでも主の顔色は晴れない。

幻想郷への引越しも咲夜の事も他の者達に投げてきたこの主、思いつきで行動する傲慢さを持ち合わせているが、手段は毎回他人に任せてきていた。

我を通す為の手段を自身で考えるのは苦手のようだ。

「そうだけど、いざ何かをしようとなると色々考えすぎてしまつて……パチエにでも何か……」

「パチユリー様は手伝いなんてしないと、そう言われていたはずですが？　今回は御嬢様だけで考えるようにと……」

「皆まで言わなくてもいいわ、じゃあ咲夜は何か思いつか……」

「私からも何もありませんわ、御嬢様のお心のままにナニカなさつて下さい」

会話を被せながら話す二人。

主と従者だというのに気安いような、友人同士で話す感覚に近い会話の流れだが、これも主の思いつきの一つだ。パチユリーが屋敷に来た時と同じ様に、咲夜も身内として扱うというのがレミリアの意向のようだ。

口調も砕けていいという話だが、咲夜は門番を真似てこう話す事にしたらしいが、レミリアには別人の影が見えた。丁度門に現れた誰か、大きめの旅行かばんを両手に、紅魔館の正面入口で門番と話すアイギスの影を、丁寧な口調の中に見たようだ。

「ああ、来ちゃった……何も思いついてないのに来てしまった……叱られる……うー……」

レミリアが弱々しい声で呟く。

今日あたり来るとは聞いていて、来訪自体はわかっていたがアイギスが来るまでにはなにか考えておこうと思っていたレミリアだったが、未だ何も思いついていない。

紫からの頼みを聞いてレミリアが動くことを知っているアイギス。それが現れたという事は発破をかけに来たか様子見にでも送られた、レミリアはそう考えていた。

「アイギス様……ですか」

うーと鳴く主の横にいる従者の顔も暗い。

咲夜もアイギスを苦手としていた。

自身の能力が効かない初めての相手であり、組手の際には本気の体術もナイフも物ともされず真正面から手を伸ばしてくるアイギス。

笑んだまま真っ直ぐに向かってくる姿は酷く恐ろしいモノだと刷り込まれていた。

吸血鬼姉妹との手合わせでもそうだったが、人間の幼子相手でも問答無用で真っ向から突き進む黒羊、幼かった咲夜には死に体で動くアイギスが怖いナニカ以外の何物にも映らなかった。

二人が屋上から見下ろしていると視線に気がついたアイギスが顔を上げた。

下から見上げる角度では屋上の二人の顔が影になるが、そこは気にせずに深々と頭を下げて屋敷へと歩み始めるアイギスが、正面の噴水を過ぎて屋敷の影へと踏み入ると、霧の姿で現れたフランドールが実体となり羽と顔を輝かせて飛びついている姿が見えた。

「あ、あれにしよう」

「あれ？ 妹様が何か？」

「庭だけど、引き籠もりが外に出たのよ？ どうせならこのまま外に興味を持ってもらいたい、その為に外に出られるようにするわ」

アイギスが影の中に入るまで待っていたフランドールの姿を見て、レミリアが何かを思いついた。

自身の体から赤い霧を発生させて、まだ日が当たる部分へとそれをまき散らし影を広げ作っていく。吸血鬼の魔力を帯びた赤い霧が屋上の一角に出来上がると、その下の部分へと歩み出るレミリア。普段であれば日光に焼かれる体であったが、その霧が陽の光を遮りレミリアの体は焼かれなかった。

「幻想郷を赤くする、我ながら似合いの異変だと思う。良し、これにしよう！ 後は始めるだけね、咲夜、次の満月に合わせるからそのつもりでいなさい」

「畏まりました」

これをこの地全てに広めれば妹は好きに出られる。ついでに八雲紫からの願いも叶えられる。

あくまでも自分の考えを優先させる屋敷の主、傲慢な吸血鬼の姉が愛する妹と怖い悪魔の姿を見て思いついたのが、のちの紅霧異変と呼ばれる騒ぎに繋がる手段であった。



これで妹が外に出る。八雲紫との盟約も果たせる。ついでに叱られずに済むと、明るい事ばかりが思いついて、沈む太陽や咲夜の表情とは逆に、レミリアの表情から影は消えていった。

く広がる赤い霧く ―紅霧異変―  
第三十三話 動き始める者達

満月の訪れと共に、太陽の見えない暗い日が続いた。

昼間は少しだけ明るいのが、今のような夜間になると暗さと視界の悪さから晴れているのか曇っているのか、わからないような天気が幻想郷を包み込んでいる。

陰りの原因は霧の湖にある。

この地に建ったお屋敷の主が、今は見えなくなってしまった月に向かい両手を広げ何かを撒いて以降数日、この様な赤暗いような天気となっていた。

たった一晩でお日様の光も空模様も読めなくなってしまった幻想郷の空。

夜を生きる妖かし達は昼間から元気に過ごしていたり、霧に含まれる魔素に感化され少し騒いでしまったりと、一部分を覗いてそれぞれがこの異様な空模様を楽しんでいた。

その一部分に含まれないのが紅魔館近くの湖上空を漂う、この妖怪はあまり楽しめていない側であった。両手を広げゆらゆらと、何も考えずに漂う宵闇の妖怪ルーミアがこの騒ぎに乗じて考える事はただひとつ。

「今日はご飯、食べたいな」

漂いながらぼそつと呟いたコレだけであった。

良く言えば寛大な、悪く言えば面倒くさがりな彼女は自分から餌を求めて湖を離れる事はあまりない。彼女は自身の縄張りからあまり離れず、湖に訪れる大物狙いの釣り人をメインの食事としていたというのに、数日前からルーミアは食事を取れていない。

数日前の満月の晩に突如広がった紅い霧を恐れた人間が、釣りなどと遊び歩いている場合ではないと閉じこもってしまった、ルーミアの餌場に姿を見せなくなっていた。

「お腹、空いたな」

湖の湖面近くまで高度を下げて、遠くに見える屋敷を見る。

気持ちの上では両手を広げずに腹を抑えて飛びたいくらいの人喰いだったが、気に入らないと喧嘩を売りに行ったあの屋敷には食料である人間がいるのを知っている。

けれど、あの屋敷にいる人間は食べられる部類の人間ではなかった。

「近くにご飯がいるのに……美味しそうなものにな、アレ咲夜」

背を湖畔に、正面を紅い空に向けて飛ぶ。

ここ十年近くずっと狙っている獲物を思い、あれが食べられたらきつと美味しいとおよそ少女らしくない笑みを浮かべ、アレの味わいを想像する。幻想郷にたまにいる飛べる部類の人類、人間でありながら空を飛び移動する連中は総じて異能者であり、その味わいはルーミアの嗜好にこれ以上ないというくらいに合っていた。

そんな至高の逸品が、最近はとんと見かけなかった種類のご飯が近くの屋敷にいる……すぐにでも襲える距離にいるというのに、屋敷を守る門番にあしらわれ食せず、年月が経った今では成長した咲夜自身にすら敵う事がなくなってきた。

ゴソゴソと体を弄り何かを取り出す、ルーミアの手元には何か、雑な文字列が目立つカードが数枚ほど収まっていた。

コレのせいでやりにくい。

そう考えながらも、コレを守らないとスキマ妖怪も、コレを押し付けてきたマズかったご飯もやかましいのだろうなど、小さな舌打ちをしてゆらゆらと湖面を飛んでいる。脳裏に浮かぶ大嫌いな面倒、それと対面しているルーミアの瞳に映るモノがあった。

「おっ……美味しそうなのが……二人も……」

ルーミアの視界に映るのは飛べる部類の人類が二人、一人は霧に溶け込む赤い巫女服に、白い袖だけが独立した一風変わった装束の少女。

もう一人はルーミアの衣服と近しい色合いで、黒いスカートやとんがり帽子が目立つ少女。

どちらも湖の対岸にある紅い屋敷を目指し飛んでいて、湖面スレス

レにいるルーミアには気がついていないような雰囲気、少しの会話をしながら真っ直ぐに飛翔していく姿が見えた。

「あれは食べていい部類の人間よね、こんなお天気の下に出歩くんだったもの……どちらにしようかな？」

久しぶりに見る咲夜以外の飛ぶ人間、それも少女。

食べるならあれくらい年代が好ましい、成長途中で未成熟だがそれ故の柔らかさや瑞々しさなどがルーミアには堪らないものだった。

「紅い方も美味しそう、でも黒い方も捨てがたいわ。本当にどちらにしよう？ いいや、食べられる方を食べよう」

心から嬉しそうにニンマリと嗤う夜の人喰い。

夜空を進む二人に狙いを定め目を細めると、久しぶりのご飯だと思考もそちらに切り替える。熟れ落ちる寸前の鬼灯みたいな紅い瞳を輝かせ、赤い空を進む少女達の元へと漂い飛んだ。

く少女吟味中く

湖上の二箇所が始まった弾幕ごっこ。

それを濃い赤色の屋敷を背にした美鈴が眺めている、いつもの様に門に背を預け寄りかかるような姿勢ではなく、紅魔館の門から少しだけ湖側に進んだ辺りで浮かび滞空していた。

遠くで美しく広がる流星群やお札の波、それと対するのように黒い空間から赤いレーザーのような物やキラキラとした氷のツブテが、赤い空の中に広がり、実戦だとあなるのかと頷くながら眺めている。

「綺麗なものですねえ」

巫女らしい破邪の弾幕に真っ直ぐさが伺える緑の矢尻に似た弾幕、キラキラと輝く氷弾や細い筋から太く変化する白いレーザーなど、四者四様の弾幕をバラ撒いて、夜空を縦横無尽に飛び回る少女達に目を奪われる美鈴。

それぞれ個性が見える少女達を視界に入れ、湖全体を見るように目を細めていたのだが、いつからか見つめる先は二人に集中するようになっていた。

「人間の、それも子供が上手にやるなあ」

美鈴が呟くと同時に湖上の一部を覆っていた闇が薄れる。

薄れた闇の中心には少しだけ驚き顔の、それでも楽しそうに弾を放っては緑色の弾幕を身に受けるルーミアの姿があった。

両手を広げ飛ぶ姿は十字架のようにも見えるが、相手取る黒っぽい少女にはどう見えたのだろうか？

「どちらの人間も勢いがあるし今日はルーミア達の負け、か」

腕組みする武道家の目に留まるのは氷精が湖に墜落していく姿。

ほぼ同時に始まった弾幕勝負だったが、先に決着がついたのは氷精と赤い少女の勝負。氷精がスペルカードを提示して記述されたスペルを放ったが、真正面に立つ少女が逃げることもせず真正面から御札と針の弾幕を浴びせて気持よく勝利していた。

「どちらの人間も本当に上手、私じゃダメっぽいなあ。咲夜うちの子さんならどうか、つてところかな？」

遠くでご飯がく、という断末魔が聞こえその後すぐに落水する音も聞こえてきた。

水音の方へと美鈴が視線を流して弱気な言葉を吐く、美鈴はスペルカードルールでの争い事を苦手としていた。日々鍛え上げた美鈴の武術は此度の争いではほとんど意味を成さない、卓越した回避や読みなど技術面では研鑽した武が光るだろうが、一番の持ち味である氣を使った物理攻撃という面ではまるで意味がなかった。それ故美鈴は弾幕での勝負を苦手としていた……

が、すぐに思い直したようで、組んでいた腕を解き右拳を左手で受けパシッと鳴らす。

「いけない、氣を引き締めないと。生き死にとは遠いってお話だけど勝負には違いない、ならそれらしくやらねば御嬢様にも相手にも失礼……よし、やる！」

一度鳴らした拳を再度鳴らす、それだけで美鈴の気概は酷く集中した。

自身の内に流れる氣を操り、意識を血の流れにくい闘争の場へと向かうようにしたのだろう、雑用から警護まで器用にこなす美鈴らしい小器用な気合の入れ方であった。

そうして鬨気の巡る門番の前に、先に勝負を決めてきた赤い少女が

高度を合わせてくる。

行く手を阻むように滞空する美鈴に向かい、なんの会話もないままに巫女が針と札を放ち始めた。

表情一つ変えずに投げつけられる巫女の弾幕が美鈴に迫るが、両手に気を纏い真つ直ぐに奔ってくる破魔の弾幕をいなしながら回避し続けてみせた。

ある程度捌いたところで巫女からの弾幕が少し弱まる、不意打ちに近い攻撃を捌いて見せた妖怪が気になったようだ、対峙する距離を僅かに寄せて美鈴と会話出来るくらいに近寄ってきた。

が、美鈴は流れに乗らず懐からカードを一枚取り出した。

一瞬だけあれ？ という顔を見せたがその表情が巫女に伝わる前にカードを宣言する。

——華符『芳華絢爛』

宣言すると同時に美鈴の気配が変わり、華やかな色合いの気を纏う。

そのまま纏う気を全身から発し、美鈴を中心とした空に咲く華のような弾幕を展開し始める、ブワツと全周囲に広がっていく花卉の弾が巫女を包んでいく。

美鈴が見せた初のスペルカードだったが、それでも巫女の表情は変わらず、詰めた距離を再度開いて花卉のスキマが広がる辺りまで後退すると再度破魔の弾幕を放つ。

迷いなく花卉の中央へと進む破魔の流れ。

美鈴が動きまわっても狙われ浴びせ続けられて、設定した耐久力の限界を感じると、スペルの終了を告げるように花弾幕のカードを巫女へと投げた。

「参ったな、巫女さんの足止めをするつもりが……」

巫女がカードを受け取ったのを確認すると、何かを探すようにがさごさと体をまさぐる美鈴。

探しているのは用意していたはずの他のスペルカード、だったがどうやら持ち場にでも忘れてきたらしい。今日に向けて準備していたものを本番で忘れるとは、と恥ずかしそうに苦笑するが表情を変えた

事で巫女の気を引けたようだ。

「あんたは私の事知ってんのね、さっきの雪ん娘は知らなかったみたいだけど」

「騒ぎを起こせば鎮めに来るのは巫女さんだと聞いてますので。あれは湖にいる妖精ですし、私達とは関わりないですね。それよりも……」

「あー！ 逃げるなー！」

「またすぐに会えます」

戦いから話へと気を移していた巫女を余所に、全速力で屋敷へと戻る美鈴。

武人として戦場から背を向けるなど、と考えながらも逃げも三十六計の策の内だと自身をぐまかし全力で引いて見せた。追いかける素振りを見せた巫女は、二人の弾幕勝負に感化された野良妖精連中に絡まれてすぐには動けず、グングンと距離を離されていった。

く少女後退中く

門番が巫女と戯れている頃。

守る者がいなくなった門を抜け、するりと侵入を果たした者がいた。

空を飛ぶために跨っていた箒を片手にコソコソと動く黒い奴、廊下ですれ違う妖精メイドには容赦なく弾幕をぶつけ騒がれる前に静かにしてから動く侵入者がいる。

「行くな、と言われると行きたくなくなるってな。何かあるか知らんが何かあるんだらうな？」

廊下を曲がりながら、メイドを蹴散らしながら下り階段を探す黒白がブツブツと呟く。

異変の中心地に向かって来る最中、隣を飛んでいた巫女から言われていた事は地下へは行くなという事だった。

何かがある、何かがいる、そういった事は何も話されていないが、嫌な予感がするから地下には近づくなと注意されていたが、この少女の悪い癖が出始めてしまい止まらなかつた。

「良い物があればいいんだが、お？ あそこが下り階段っぽいな……」

行けないようになっていたら諦めたんだが、行けるんじゃないかな  
ぜ」

楽しいな独り言が狭い階段内で響く。

ササツと動いて階段を下る少女がこの先にある何かに期待し、楽し  
そうな表情で暗い地下へと進んでいくと、屋敷に比べると新しい、作  
られたばかりに見える扉が視界に収まった。

あからさまに何かがある扉をギギツと鳴らして中へと踏み入る少  
女だったが、室内に入った瞬間から完全に動きが止まってしまった。

「こりやすくないな」

周囲をぐるりと見回しても見きれないほどの本棚。

入り口の横から遠く見える先まで、どこまでも続いているくらいに  
並ぶ本棚を見て、身を隠すことすら忘れて感想を述べる少女。

少しの間書庫内を眺めてから近くの棚に寄り、並ぶ背表紙を流し読  
みしていく。

「おや？ 見慣れない……青々しい娘がいますねえ」

本棚に沿って、ズラズラと続く本の世界へと歩を進める少女を見る  
のは怪しい瞳。

歩む先を見ずに背表紙に気を取られている少女の後方、ポツポツと  
灯る明かりの中間で姿こそぼんやりとしか見えないが、頭に生やす羽  
と下品な物言いからここの主ではないとわかる。

「何かお探しでしょうか？」

「見てわからないか？ お探した」

「ではその探し物、言いつけて下されば私がお持ちしましょう」

ニコニコと、表面上では微笑む小悪魔が次の言葉を待つ。

〇〇を持ってきてと願われて、それを届ければ契約は成り、この娘  
の魂でも体でも好きにできる。早く言えと笑む裏で毒を吐く小悪魔  
に、黒白の少女が何か八角形の携行品を構えて返答を述べた。

「気が利くな、それなら先にお駄賃渡してやる」

話す少女が右手をがさごとエプロンのポケットに入れる、取り出  
したカードをちらりと見せると、その小さな手に収まる八角形に光が  
灯った。



灯った光が道具の中心に向かい集まると少しずつ輝き始め、キイインという甲高い音が鳴ると、小悪魔の顔から笑みが消え、舌打ちしてから距離を取るように後退していく。

下がりながら牽制の魔力弾を放つ小悪魔だったが、少女の手元に光が集束すると、その中心部から光が激流となり顕れた。

轟音と共に若々しい魔力が少女の手元から垂れ流され、その光の中へ姿を消した小悪魔だったが、弾幕ごっこ用の火力では消滅するまでには至らず、光の進む方向へと体毎吹き飛ばされ奥の本棚の棚部分へと体を埋めていった。

「釣りはいらんぜー!」

光と音が静まると八卦の文字が浮かぶアイテムをしまい、ふつとばされてすっかりと姿の見えなくなった小悪魔に釣りはいらんとのたまう少女。

へへつと笑んでとんがり帽子のつばを上げると、隠れていた視界の外で宙を漂う誰かを見つけた。見た目パジャマのようなローブを着こんで見た目から活発ではないと語る魔女が、魔力の流れを感じ取り少女を見下ろしていた。

「人間……の、魔法使いね」

下で見上げている少女には聞こえない声量、自分にしか聞き取れない声で話し、瞬きをしてから少し長く瞳を瞑り開いたパチュリー・ノーレッジ。

一瞬だけ考えた外での事、魔の者だと両親を焼いた人間が魔の者の真似事など……そう考えたようだが、すぐに思い直した。

この世界は外の世界とは違う、人間が魔法を疎み嫌う事などない世界。怪しむ事はなく、寧ろ学び己の手段として選ぶ世界なのだ。視界に映る黒白の魔法使いを見て感じたようだ。

キツカケこそ押し付けられた異変だったが、そう悪くない初戦になりそうだ、と用意していたスペルカードをそつと撫でる。

カードを撫でると、パチュリーにしては珍しく、柔らかな表情を見せ少女と対面した。

### 第三十四話 動きたい蝙蝠と動かない大図書館

何も無い天井を見上げる子供。

暗く血の匂いが染み付いてしまっている室内で、ぼんやりと天を仰ぎ見ている。

見つめる先は唯の天井だが、そこから続く何かを感じ取り、赤い瞳に染しげな光を灯して見知った天井を見つめていた。

「なんか外が煩いね」

キラキラと輝く金の髪を結び、左の側頭部だけで纏めたサイドテールを揺らす少女が見上げる先を天井から誰かの顔へと変える。

少女の見る先にいるのは室内に溶け込むブロンズ色の肌をした女、足を揃えて座る女の膝の上で、対面するようにその少女は座っていた。

「気になるのでしたら見学にでも……」

「行かない！」

椅子代わりの女、アイギスから気になるのなら見学に行こうと誘われるが、強い拒否の姿勢を見せる部屋の主フランドール・スカールェット。

争い事を感じられる門番の妖気や、誰かとじゃれ合う書庫の主からも魔力を感じ取り、瞳には私も混ざりたいと浮かばせているが変に我慢をして部屋から出ないでいるようだ。

「見るくらいでしたら止められる事もないように思われますが？」

「だって、見たら我慢できなくなるもん」

門のある地表辺りから聞こえる爆発音や、近くの書庫から聞こえてくる、弾幕が地面や本棚に当たり弾ける音が響く度にピクリと揺れる金のサイドテール、音が聞こえてくる方向をちらりと見つめる赤い瞳。

そういったフランドールの五感に届くモノから、外で行われているのはとても楽しい事だという事はわかる……が、それでも我慢を続ける幼子がポツリとつまらなさそうに話した。

「知ってるわ、私は混ざっちゃうダメなんですよ？」

「そのような事はないと……」

「じゃあなんでお姉様はカードくれないの？」

俯くフランドール。

見上げていたアイギスの顔から腹の辺りに視線を落とすと、視界に入った黄色のネクタイの先をむんずと強く握りしめた。

以前の異変時に何も話してくれないと姉に文句を言った後から、この屋敷に住む吸血鬼姉妹は良く話すようになった、けれど話をするだけで今回の異変にはフランドールは関わらせないと姉は言っていたようだ。

『こういった事をするから、貴女は終わるまで静かにしてて』

姉から言われたのはそれだけ。

言うだけ言われてスペルカードも渡されずに自室に追いやられた妹。

きちんと話はされていいるから以前のように怒髪天を突くような怒りは見せないが、それでも一緒に遊べないことに不満たらたらといった雰囲気だ。

俯いてしまったフランドールをどうかあやそうと、下を向く頭に手を置いて撫でるアイギスだったが、それくらいではフランドールの不満は収まらず今度はアイギスに噛み付いた。

「アイギスだってなんで私といるの？ また暴れたら困るから？ あの紫色のお姉さんに頼まれたの？」

ネクタイをグイグイと引っ張り文句を言う妹様。

言っている内容はほぼ正解で、そのあたりの事は一切話していなかったが、騒ぎが始まる前にアイギスが来た事と屋敷内の雰囲気から察したようだ。

利発で聡明になられたと、なにか納得するような顔で微笑むアイギスの頭が引つ張られる度に揺れていた。

「八割方は正解ですね、今回は頼みではなくお願いですが」

「お願い？」

「レミリア御嬢様には内緒ですが私のお仕事は終わってしまって、今回は友人からのお願いで訪れております」

仕事では来ていない、正直に話すとフランドールの瞳が再度アイギスを捉えた。

姉には内緒の事を話して秘密の共有でもできれば少しは機嫌が戻るか、と考えたアイギスであったが思ったほどの効果はなく下げた頭が上がる程度で、フランドールの顔に書かれた不満は消えない。

「お友達……アイギスにはお友達がいるのね、私にはいないよ？」

「外出させないのでですから出来る機会もありませんし、出来なくて当然では？」

「だって……外怖い」

「怖い？ 吸血鬼である御嬢様が恐れるモノなどあまりないのでは？」

「だって……」

再度下がるフランドールの頭。

モゴモゴと口を動かしているがそこから先の言葉は出てこない、思う事を言って成す姉とは違い妹は我慢強く自分を外に出さない事が多い吸血鬼の姉妹。

見た目といい性格といい本当に母親似だと、久しぶりにフランドールの親を思い出すアイギスだったが、考えている内にネクタイを強く引かれて頭を下げられた。

下がった首にフランドールの両手が回されると、そのまま膝から浮いて抱きつく形になった悪魔の妹が耳元で囁いた。

「また壊したらお姉様に嫌われる……」

ぼそつと言ってから抱きつく力が強くなる。

何の為の我慢か、それを一言で表すのなら今の言葉だけで十分だろう。

ギョツとくつつく妹を片腕で抱いて、したくてする我慢などはなかったなと感じる黒羊がゴソゴソと胸元を探り出した。

フランドールの腹の辺りで動くアイギスの手、くすぐりたいと少しだけ明るい声で話す妹を余所に、スーツの内ポケットにしまってあった新品のカードを取り出した。

「よろしければお使い下さいませ」

「それって、スペルカード？」

「左様です、紫色のお姉さんから渡されたのですが何分私の性には合いませんので、御嬢様に差し上げますよ」

押し付けた桶の代金として引越しの手伝いを。

八雲紫からはそう言われていたが本格的に住まいを移す事はせず、地底にも住居を構えたままにする事にしたアイギスが、代金代わりに押し付けられたスペルカードを自身とフランドールの間に割り入れた。

視界に入つて数秒はマゴマゴと、躊躇するような仕草を見せていた妹君だったが、カード越しに笑んでいるアイギスの顔を見てからくっつけていた体を離しカードを受け取った。

姉からは貰えなかった新しい遊びの道具、これがあれば楽しい遊びに混ざつてもいいと決められている物がフランドールの手に収まると、嬉しそうに頬を綻ばせたが……すぐに笑顔に影が差した。

「貰つてもつかえないわ、これって唯の紙なんですよ？ 私、加減出来ないもん」

「加減が出来るように、壊さずに済むように少し練習を致しましょう、私でよろしければお相手仕りますので」

影が差したままの顔がさらに暗くなる。

アイギスの申し出を受けて背に生やした宝石のような羽が爛々と輝いてしまい、眩いばかりの光を放ってしまったからだ。

少し眩しくてアイギスが目を細めると、ちよつとだけ輝きに落ち着きが見られたが、それでも光り輝いて嬉しさを表す。くつついていた体を離し部屋の光源となつている羽を羽ばたかせると、アイギスに向かって正面を切り、早く早くと催促し始めた。

つい先程まで我慢して、暗い顔を見せていた事などわからないくらいのはしやぎっぷり。

この程度の事でこうまで喜んでくれるフランドール、いらぬ我慢から開放されるかも、と見た目通りの幼女らしいはしやぎ方を見せると、それを眺めているアイギスも少しだけ楽しそうに笑んだ。

門番が幼かったメイドに感じたように、アイギスも可愛い生き物だ

と感じ、何も書かれてないカードを掲げ笑う子供と対峙した。

く少女練習中く

ありとあらゆるものを破壊する妹が、何をどうしても壊れない、壊れる素振りが見られないアイギス相手に致死量たつぷりの弾幕を放ち始めた頃。

妹の部屋から聞こえてきた激しい音を聞きながら5色の弾幕を放つ魔女が、対決する見習い魔法使いを見つめていた。

争い始めてすぐはただの模倣者、見た目から入り携えたアイテムの力を垂れ流しているだけだと感じていた。パチュリーだったが、どれだけ撃つても躲される状況から評価を改め始めていた。

「まだまだ未熟、そして荒い。でも伸びしろはありそうね」

自身の周囲に浮かぶ5色の魔法石からそれぞれの色に似合った魔法弾を放つが、本棚の影に隠れてみたり軌道を読み制動をかけて逃げまわる人間少女を評し話す。

きつとこの呟きは相手には聞こえていない、そう理解しているがこれはパチュリーの独り言。

聞こえていようがないなろうが構わなかった。

呟いてから遠く広がる本棚の中に消えた少女を探すように目だけを動かす魔女、いつかもこうして侵入者を探したな、と少し余裕のある表情で探している。

「随分奥まで逃げたのね……でも、そこは危険よ」

5色のクリスタルの一つが淡く輝くと、遠くで同じ色の赤い爆風が上がる。

爆風と同時にうおっという女の子の叫び声が聞こえると、仕掛けたパチュリーからもフフっという楽しそうな声が漏れた。

九尾の狐相手でやらかした失敗を元に配置していた魔法陣、試作中の自動制御が上手く動いたと自画自賛していると、爆風を利用し飛び進んできた侵入者が弾幕を放ち攻め寄ってきた。

牽制用の弾幕の奥で、少女が携えた八卦の魔法炉に魔力を込める。

「それは見た、タメがいるのよね……」

向かってくる弾幕を魔法障壁で受け、輝くマジックアイテムだけに

狙いを絞るパチュリーが一枚カードを提示した。

手元には若葉の緑色に似せて塗られたカードが見える。

——木符「シルフィホルン上級」

宣言と共にクリスタルが変色し、5色だったものが緑一色になるとパチュリーの背後弾けた。

チュインという甲高い音を立てながら魔法の周囲から飛び出てくる、緑色の木の葉のような弾幕が黒白少女へと向かって一定方向から向かっていく。

ふわりと一度広がった後敵対者に対して斜めに進んでいく木の葉。

あまり速度がない木の葉乱舞の中を、黒白の魔法使いが縫うように飛び距離を詰めてくる……が、一定距離まで近寄るとパチュリーが再度カードを提示した。

次に見えるは青いカード。

それを見せると展開していたクリスタルに変化が起きる。

緑一色だった魔法石に青が混ざると、弾幕にも変化が起きた。

——水&木符「ウォーターエルフ」

宣言とともにゆらゆらと舞っていた木の葉が消えて、パチュリーから緑と青の球体が発生し書庫内の空間を二色で埋め尽くしていく。

魔法から放たれる多量の弾幕を見て、軽く口笛を吹いた後に初めて黒白少女が言葉を発した。

「二つの属性が混ざってるのか、器用な魔法使いもいるんだな！」

パチュリー自身から発せられる魔力と弾幕から感じる魔力を肌を感じ、少女が素直に褒め称えた。

魔法を操る事だけであれば確実にパチュリーに分がある、そういった事がわかりそうなほどの素直さを見せる人間少女がへへッと笑う。

笑む余裕などないと言うようにパチュリーの弾幕が空間を支配していくが、ここで笑った少女もカードを示した。

——魔符「スターダストレヴァリエ」

提示すると同時にタメていた魔道具を軽く放る少女。

攻撃用のアイテムを手放すなど、と隙を見逃さずに弾幕を集中させるパチュリー。

黑白の姿が見えなくなるくらいに弾を集中すると、放った先で何かに当たり弾が弾ける音が聞こえてきた。

攻め手を見せるには遅かった、パチュリーがそう考えたと同時に放った弾幕が何かにかき消されていく姿が視界に映る。

「当たったはず、だけれど……」

スペルの効果時間が過ぎて、通常仕様に切り替えたパチュリーが喉元を数度撫でてから目を細める。

息遣いと共に細くなった視界に映るのは自身の放った2属性の弾幕が何かに当たり弾けていく姿、何かと訝しんでいると最後尾の弾が掻き消えて、その奥から黑白少女が真っ直ぐに飛び出してきた。

跨る筈の先からは綺羅びやかな星を引いて、自身も流星のような速度で真っ直ぐに突っ込んできた。

慌てて通常弾で撃ち落とそうとする魔女だったが、続けざまに放った属性魔法の影響か、少し前から患い始めた喘息の症状が出てしまい、回避も迎撃の手も止まってしまふ。

勢いが緩み少なくなる魔法弾幕。

その中を真っ直ぐに突き進む少女が、パチュリーに突貫し空中でハネた。

派手に跳ね飛ばされて落下していくパチュリーを、速度を緩めずに拾いに回る侵入者、床に当たる前にか掴んでそのまま床へと降りていった。

「侵入者、それも見習い魔法使いに負けるなんて……私とした事が」

荒くなつた吐息と共に負け惜しみも吐くパチュリー。

この人間の魔法を扱うと語る見た目や、小悪魔に対して見せた極太のレーザー等から遠距離特化と考えていたが、先ほどのように突撃がまさされて落とされるとは思っていなかった。

種族柄か弱い人間に体当たりで撃墜されるなど完全に予想外で、思わず愚痴が出てしまった。

「お？ 文句を言うならもう一回やるか？ 何度でも退治するぜ？」

「遠慮するわ……」

「そうか、それよりお前凄いな。水と後はなんだ風か？ 西洋魔術を



混ぜるなんて思いついてもやろうと思わなかったのに、五行の相生そうじょうか？」

水生木すいしょうもく、そう返事をしようとするが咳き込んでしまい言葉にならない。

火力調節し加減までしている魔法をたかが数発放ったくらいでこれでは、と自己嫌悪するがこれは魔法を放ち消費したからではなく、少女がかかったトラップのせいで舞い飛んだ埃や塵のせいである。

普段の冷静なパチュリーであれば空気の汚れ具合にも気がつくのだろうが、今の魔女殿はまさかの敗北に気を取られ気がつけずにいるようだ。

そんなパチュリーを余所にして勝者となった魔法使いの少女が周囲を見る。

邪魔者が静かになり宝探しするには絶好の機会となったが、周りの本棚に収まっている魔導書や禁書には横目で見るだけで留まった。

チラチラと左右を周囲を確認してから気がついた一箇所へ向かって、ふわりと飛ぶと真っ直ぐに向かっていく。ただでさえ暗い書庫内で、更に暗い一角にある地下への階段、そこに向かって飛んで行く魔法使い。

屋敷の地下にはお宝の山があった。

ではその更に地下には何が？

単純な発想と真っ直ぐな好奇心に動かされて地下へと続く階段へと入りかけた時、明かりのない下り階段の中で光る赤黒い目と視線が重なった。

### 第三十五話 籠から外れる

地下も地上も騒がしい紅魔館のすぐ外で始まった弾幕ごっこ。

地下の方は一旦の終わりを迎えていたが、地上の方もそろそろ終幕といった雰囲気を見せていた。門を堺に始まった人妖の争い事が紅魔館の窓から見える、門を守る者に向かって放たれるのは少し大きめの破魔札と、同じく長めの封魔の針。

継続的に放たれるそれらが一箇所に集中して奔っていた。

撃たれているのは屋敷の門番。

美鈴が放たれる弾幕を避けるように動いても、どう逃げても正面から間違ひなく飛んでくる破邪の弾、体に触れる寸前で気を発し散らしてみたり、両手で捌いて相殺してみたりしているがもうすぐに決着がつきそうな気配がしていた。

「思った以上にキツイですね！」

随分と身形の煤けた門番、紅美鈴が弾幕を浴びながら声を上げる。

怒声を浴びせた相手は一度争った相手、紅白の巫女。

霧の湖上空で一度対峙した後、屋敷の前で二度目の出会いを果たし、美鈴の持ち場である紅魔館の正面上空で再度争っているが……争いといってもほとんど一方的な物で、美鈴は避けながら偶に弾幕を放つだけしか出来ないでいるが、対峙する巫女は舞うように飛んで回避しながらも常に攻める姿勢を見せている。

本当に手厳しい、と弾幕を浴びながらも抗い屋敷を守る美鈴の眩き。

どれほどの妖気弾を放つても全て避けられる。

ルールの範疇内であれば肉弾戦に近い事もアリだと聞いてはいるようだが、不慣れな弾幕ごっこでは力加減が上手く出来ず、格闘戦はまともに出来ていない。偶に仕掛けてやり過ぎたと思う事もあったが、それは杞憂に終わってばかりであった。

やり過ぎたと思った美鈴の弾幕も、体に触れそうな物はお祓い棒で払い当たりそうにないものは気にしない空飛ぶ巫女、随分と手馴れている少女に向けて手厳しいと素直な愚痴を吐いていた。

「こうまで追い込まれるとは……」

蓄積されたダメージから動きを鈍らせていく美鈴が再度ぼやく。向けられる針はどうか受け流し、ダメージの少ない御札は体力で受け切ってみせているが、確実に追い込まれていると感じているようだ。

一度は落とそうと考えた紅魔館。

攻め入った際には雇われていた臨時の従者に手酷くやられ、紅魔館で雇われてからこの地に引っ越してきた際にはわからない内に腕も意識も狩り落とされた。

門番として、一番最初に敵と対峙する屋敷を守る屋敷の守護者としての矜持から今日は通さない、そう心に誓っていたがこのままでは負けるだろうと自身の敗北も感じ始めていた。

それでも今回は最後まで意識あるまま戦い負けよう。

立てた誓いを破る事になるが、私が負けたとしても屋敷の誰かが死ぬようなことは多分ない……それならば精一杯楽しく遊んで、精一杯派手に負けようと誓いを新たにしたら美鈴がカードを一枚提示する。

「最後の一枚！ 避けて見せてくださいね！」

敵として言うにはおかしい言葉を言うが、話しかけた相手である巫女は位にも介さず弾幕を放つのみで返答はない。

それでも精一杯の笑顔と気概でカードを見せ、描かれたスペルを放っていく美鈴。

——虹符『彩虹の風鈴』

提示と共に美鈴の四肢の先が虹色に輝く。

赤い霧に包まれた夜の中異彩を放つ華人小娘。

練り上げてキラキラと輝かせた美鈴の妖気が動きと共に放たれた、右回り左回りと規則的に回転と制動を繰り返す武闘家が紅い夜空に虹を描いていく。

何が来るのかと身構えた巫女が美鈴の放つ弾幕を見て、一瞬だけ目を大きく開いてからすぐに動き出した。一定のリズムで放たれる虹弾幕の間を縫うように避け、その間から封魔針を集中して浴びせていく。

避けるよりも最後まで攻める事を選んだ門番がその針をまともに受けると、ある程度の時間が過ぎてから派手な爆発を起こし動きを止め地に落ちていった。

けれど地に伏せる事はなく、地面ギリギリで体を動かして両足で立つ美鈴。

ダメージの酷い両腕を抱えて、降りてくる巫女を見つめていた。

「お強い、お見事でした」

自身を落とした巫女が正面に立つと素直に褒める美鈴。

賞賛してから破られたスペルカードを差し出すと、無言で歩み寄りそれを受け取った少女。

そのまま何も言わずに過ぎていくかと思えたが、屋敷の正面扉に手をかけてから一言だけ話した。

「最後の、綺麗だったわ。また見たい」

言葉の最後は扉に閉まる音と被っていたが確かに美鈴に聞こえた言葉、褒めた相手から綺麗だったと褒められてこういった戦いも悪くないかもしれないと感じていた。

入り口を守る役目は果たせなかったが、紅魔館の門番として恥じない戦いは出来たかな、と巫女を見送り庭で大の字に倒れた。

死にはしないが結構疲れる、最後に感想をぼやくと笑ったまま瞳を閉じた。

く門番昼寝中く

地上と地下、両方の争いが落ち着いた一瞬の静寂の中、屋敷の主が手の平に浮かぶ輪の連鎖を見つめていた。

謁見室の専用椅子に腰掛けてクルクルと回る輪を見ていると、音もなく現れたメイドが状況の報告をし始めた。

「美鈴もパチュリー様も敗北されたようです」

「そう、まあそうでしょうね」

回る運命の輪から目を逸らさずに横のメイド、十六夜咲夜に返答し、そのまま手の平で回る輪を握り潰すレミリア・スカーレット。

操る運命の輪に二人の負けが現れていた、だから叱責する事なく受け入れたと咲夜は考えるが、レミリアの返答はそういった意味合いは

含まれていない。

「どちらもただ負けただけではないだろうし、後で直接聞くわ。それよりもフランは何をしている?」

「アイギス様と弾幕ごっこの練習をされております」

「ふむ、アイギスが付き合っているという事は、あのスキマに妹も混ぜろと言われて来ているのか? ……いや……あの子の力を知っているのならそうは……」

「何か思われるところがありませんか?」

「今回の異変には不安定な要素はいらないはずなのよ、今回は結果がわかつている異変だからね」

そもそもが出来レースに近い今回の異変。

スペルカードルールを広めるために八雲紫に利用されているのだから、結果も負けて当然とレミリアは考えている。

だが負けるにしても派手に、幻想郷に紅魔館ありと知らしめられれば良いと考えているレミリアは勝ち負けに拘ってはいなかった。

拘るのはあくまでも身内、それも妹の事だけ。

紅魔館が知られ、過去の世界で恐れられていたくらい認知度を得られれば、すっかりと引き籠もった妹も昔のように外に出て狩りにもでるかも……そういった確証などない考えの元に妹を遠ざけたのだが、アイギスがフランを混ぜる理由がわからなかった。

「まあいいわ、それよりそろそろ出番よ。どちらに行くかは任せるから好きな方と楽しんできなさい」

侵入者は二人、その内にどちらと遊んで来ても構わないと従者に述べる屋敷の主。

普段であればあちらの相手をしてこいと傲慢に話すレミリアだったが、今回は負けの決まった遊びでそれほど気合を入れてはいない。

それ故判断も咲夜に任せていた。

「命じてはくださらないのですね」

淑やかに頭を垂れたまま、レミリアの顔は見ずに咲夜が問いかける。

問掛けを受けてレミリアが少し笑うと、下げていた頭を上げて仕え

る主の方を見るメイドだったが、目と目が合うとニヤツと笑われてしまい少しだけ恥ずかしげな表情を見せた。

回されるのなら地下だろう、不安要素であるフランドールがいる地下の方が騒がしくなりそうだと咲夜も考えていた……が、心情としてはそちらよりも……そんな可愛い悩みを浮かばせているとレミリアから追加の言葉が伝えられた。

「遊んで来いって命じているわ、聞き分けよく好きな方に行きなさいな」

「……では手練だと思おう方に向かいます」

見本のような礼をして忽然といなくなる咲夜、一瞬で消えた従者を見送り、手練などときもありそうな理由を言わなくてもと笑うレミリア。

慕う美鈴を敗った相手に向かう、運命を読まずともそうわかっているレミリアがニヤニヤと笑み、感情を表に出さず冷静さだけを見せるようになったが、中身は可愛い生き物のままだと咲夜を評し席から立った。

立ち上がりバサツと翼を開くと窓の外を仰ぎ見る。

今も何処かから見ているだろう妖怪の賢者に向かい、利用されるだけでは終わらせず何かしら感じさせてやろうと、牙を剥いて狡猾に嗤った。

く少女達行動中く

それぞれがそれぞれの場所で動き、勝負を決めたり勝負を挑みに再度動き始めた今、地下の大図書館では新たな動きが見られた。

地下へと続く階段を進もうとした黒白少女が地下から現れた者に阻まれて、箒ごとぶん投げられ、奥の本棚に向かって叩きつけられようとしていた。

勢い良く投げられた少女がクルクルと飛ばされると、本棚に当たる寸前でなんとか静止する。

「いきなり何を……って、お前は確か」

静止した少女が地下から歩み出てきた者、アイギスに向けて知ったような顔をする。

見られている側は思い当たる相手がおらず、首を傾げていた。

「はて、どちら様でしょうか？ 人間に知り合いなどあまりいないはずなのですが」

「うちと香霖の店で何度か会ったな、覚えてないのか？」

「うち？ それと香霖の店と仰られますと……髪色や雰囲気からすると霧雨のお嬢さんでしょうか？ 暫く見ない間に随分大きくなられたようで、確か魔理沙様と仰られましたか？」

正解だ、と朗らかに笑う黒白少女もとい霧雨魔理沙。

笑みを見てようやく合点がいった顔になるアイギスだったが、確かに数回は会っているなと思いだしたようだ。

種の買い付けやらで訪れた霧雨の大道具屋の中、はしゃいで遊びまわる小さな子どもと、それを見ながら店番をする香霖堂の店主の姿を思い出し、あの子供が少女になったかと少し懐かしんでいた。

「思い出したならいいんだが、それよりいきなりぶん投げるってなんだよー！」

「そっくりお返し致します、いきなり通路に飛び込んできたのは貴方様でしょうに」

「そりやそうだが……それでもだ、出会い頭で雑な扱いをしてくれたんだ、やり返される覚悟はあるんだろうな？」

アイギスに問い掛けながら持つ魔道具に力を込めていく。

耳の奥まで響く高い音が鳴ると一枚のスペルカードを取り出してちらりと見せる魔理沙、提示後すぐに光を宿した八卦炉から極太のレーザーが放たれた。一瞬でアイギスの眼前にまで迫り光が全身を飲み込もうとするが、アイギスの指が鳴るとレーザーの照射部分の殆どが穿たれ消えた。

「おいおい、そりゃあ反則だぜ？」

「反則とは？」

「弾幕ごっこなら避けるかスペルカードでどうにかするかしないと……」

反則だと言った魔理沙が反則理由を話す最中でも構わず鳴るアイギスの指、動きを見せた黒羊を警戒し速度を上げて飛ぶ魔理沙。

つい先程までいた辺りの本棚が綺麗に円を描いて消えるのを見ると、弾幕はどうしたともう一度文句を述べるが、そんな事はどうでもいいというように瀟洒に笑むアイギス。

「いつ私が弾幕ごっこにお付き合いますと申し上げました？」

「何言ってるんだ？ 異変での争い事はスペルカードルールで……」

「異変を起こしたのはこの屋敷の者達でしょう？ 部外者である私には関わりない事。今回は付き合えとお願いされてはおりません、願われた所で付き合う気もありませんが……霧雨様こそ何かお忘れでは？」

魔理沙が全て言い切る前にアイギスが言い返す。

魔理沙からすれば異変の最中で出会った妖怪であり、異変を起こした連中の一味と考えられなくもないがアイギス自身は部外者であり、楽しい弾幕ごっこに興じるつもりもなかった。

見ている分には美しく楽しい物だが自分でやるには温い、好ましいのはもつと血生臭い争い事だと自認している黒羊が笑んだまま魔理沙を諭す。

「忘れてるってなんだよ!」

「里の外で出逢えば身の安全は保証しない、私はそのようにお伝えしております、だというのに貴方様は勝負を挑んでこられた……お言葉をお返し致します、死ぬ覚悟はございますね？」

幻想郷縁起に記された自身の内容を話すアイギスが、いつもの様に愛用のスコップを顕現させ周囲に展開し派手に回転させる。形だけは弾幕ごっこ用の物に見えるが、ちよつとでも触れれば人間の少女など振れて切れる勢いで回る切れない刃、時々わざとぶつけて火花を立てると、火花立つ回転ノコギリの奥で悪魔が笑む。階段で魔理沙に見せたように赤黒い瞳を輝かせると、少女の後を追うように空中へと飛翔した。

笑んだまま獲物を狙う羊の悪魔。

不安要素であるフランドールの籠にしたつもりアイギスが、今回の異変で一番の不安要素になろうとしている事を、喉に手を当て咳き込む魔女が見ていた。



### 第三十六話 稼ぐ者達

あの時こうしておけば良かった。

そう考える事は誰にでもある。

日常でも非日常でも色々と思うものだ。

例えば、仲の良い誰かと喧嘩をしてあの時こう言っておけば良かったとか、出かける前にあの時確認しておけば忘れ物をする事等なかったのとか。

上記のような可愛い物事で思うこともあれば、もっと真剣味が感じられる場合にも考える事もあるだろう。仕事の最中にあの時あししておけば今楽だったのとか、あの時に殺しておけば今殺される事もなかったのとか。

全てが後の祭りというやつだ、後々で後悔しても時間は既に流れる物で足掻いても戻らないのが当たり前、後悔して反省して後に活かす事しか出来ない。

けれど、今屋敷の廊下を進むメイドには当てはまらなかった。

「妖精メイドが……これでは掃除が大変だわ」

廊下のあちこちで倒れている妖精メイド達を横目にして、すぐに場を整理する瀟洒な従者。

特に動きを見せずに愛用の懐中時計を握っただけで、散らかったメイドを全て消してみせた。

能力を行使しその間に処分した、わけではなく、ただ窓から投げ捨てただけだ。

自然の化身なのだから放っておけば戻る事を彼女は知っていた。

今のように彼女は後悔する前にその場で判断する時間を作れた。

彼女だけが動ける彼女だけの時間、条件によつては動ける相手もいるが屋敷にいる限り敵対する事はないのだから、その者については割り愛する。

取り敢えず、一回お休み状態に入ったメイド達をポイ捨てし、後は散らかすモノを片付ければおしまい。そういった合理的な考えを思い浮かべていると、片付けるべき者が現れる。

「掃除の邪魔をしに来たの?」

言葉を発すると咲夜の雰囲気が変わる。

番犬から狩猟犬へと変わるように、日常世界で話す声色から荒事に向けた冷たい空気を纏って、正面から現れた巫女、美鈴を下し屋敷の中へと踏み入った人間に向けて話し始めた。

「あんたがここの主人、じゃあなさそうね」

門番とは話さなかった巫女が返答をする。

妖怪相手ではなく同じ人間同士だから少しは会話する素振りが見られるようだ、だがその声は抑揚のない物で警戒の色は解かれていないように感じられた。

「御嬢様目当てのお客様、まずは私が歓迎して差し上げますわ」

「あなたに用事はないから通してほしいんだけど、言っても通してくれないわよね」

「ええ、御嬢様は滅多に人と会われる事はないわ」

「軟禁でもされてるの? なんでもいいけどさっさとアレを止めて、暗くて迷惑なのよ」

「それは別の御嬢様、後半も無理な話ね、御嬢様方は暗い方が好きだもの」

「あっそう、じゃあここで暴れて出てきてもらおうわ」

「好きにしたら、何をしようと先には行かせないから会えないと思うけど」

時間稼ぎは得意なの、最後にそう言った咲夜が両手の指にナイフを挟む。

一瞬で戦闘準備を済ませたメイド長に対して、同じく一瞬だけ目を細めた巫女が右手に破魔の札、左手に封魔の針を携えて対峙した。

数秒にらみ合い互いに動き始める、先に攻めたのは咲夜。

両手のナイフを投擲し、その刃を追うように一気に距離を詰めていく。

移動しながら再度ナイフを構えると、投擲した刃物を避けた巫女に向かつて刃を光らせた。

キラリと光る銀のナイフが奔るが、巫女が半歩下がりこれを避け

る、まるでそこを狙われるのがわかっているような動きで避け、回避とともに針を放った。

咲夜の攻撃に合わせて放たれた針、普通の人間であれば避ける事困難なタイミングであったが、針が当たる前に咲夜の姿は消えていた。

「消えた？　って感じもしない？　なにこれ？」

姿を眩ませた咲夜を探し左右の窓や扉へと視線を流す巫女だったが、振り向かずに札を背後へと展開させ札の障壁を発生させた。

壁が出来てすぐにカカカツと札に刺さる銀のナイフ。

「良い読みね」

「ただの勘よ」

忽然と背後に現れた咲夜が弾幕を撃ちながら話しかける。

それを回避し障壁を張る巫女も迎撃の弾幕を撃って返答していた。

どちらも弾幕勝負用の物だが彼女達は人間、当たれば唯の怪我では済まないはずなのだが、どちらも冷静さを保ったまま行動していた。

冷ややかな思考を働かせる内の見た目も冷ややかな方が、このままでは長引くだけだ、そう認識して左足のキャットギターに挿していたカードを一枚提示した。

——幻在『クロックコープス』

提示したカードはすぐにしまわれて代わりに大量のナイフが巫女の視界に映る、けれどこれだけなら大した事はない。

巫女が反撃しようとして少しだけ距離を詰めると咲夜の手元でナイフとは違う物が光っている事に気づいた、巫女が視認すると同時にカチリと音が鳴るその懐中時計。

音と共に針が止まると、咲夜以外の全てが止まった。

そのまま動きを止めた巫女を中心にして、咲夜がナイフの壁を作り上げる、ぐるりと取り囲むように展開させると再度カチリという音が鳴った。

音と共に咲夜以外の時間が流れ始めると一気に動き始めるナイフの壁。

巫女からすれば瞬きをする間に与えられた大量の弾幕である、が、それに焦ることなく巫女もカードを提示した。

——夢符『封魔陣』

宣言と同時に巫女に近いナイフ弾から勢い良く弾かれていく。

巫女から放たれた白い枠線が展開されたナイフの殆どを弾き飛ばして、そのまま領域を広げていくが、咲夜自身の体は弾かれる事なく結界とも言える白線枠の内にあつた。

放つた巫女が少し目を細めるが、なんとなく目についた咲夜の懐中時計を視界の中心に捉えると、アレかと当たりをつけていた。

巫女の視線を追った咲夜が声には出さずに鋭いと関心し、感付かれたのか確認するかのようにもう一枚スペルカードを見せつけた。

——メイド秘技『殺人ドール』

メイド秘技つて、と巫女が一瞬呆けた顔になるがそんな事は関係なしと秘技を放つメイド長がバラバラとナイフを広げていく。

放射状に投げ出された青い柄のナイフとそれに線引するように走る紅い柄のナイフ、パターンもわかりやすく大した事はないと感じた巫女が接近しようとするが、突如現れた緑のナイフに行く手を阻まれる。ランダムに飛ばされる追加分が厄介、と、空飛ぶ巫女がこの異変で初めて敵を厄介者だと感じていた。

人間と妖怪が争うために考えたスペルカードルール、だというのに初めて苦戦する相手が人間相手だというのが腑に落ちないようだが、少しだけ楽しげに見えなくもない顔をする博麗の巫女。

同じ年頃の人間、それも同姓の者で魔理沙以外にも遊べる相手がいちたというのが嬉しいらしい、そんな嬉しさを面には出さず、冷めた面で咲夜へと針と札を飛ばしていった。

く人間遊技中く

屋敷の廊下が人間同士の弾幕ごっこで騒がしい中、地下も地下で騒がしい。

こちらは人間VS妖怪という正しく対立すべき物同士が争っているが、争う内容は華麗で楽しい弾幕ごっことはいかず、片方が一方的に撃たれ逃げ回っていた。

開幕こそ多少の弾幕を撃つてみたり、得意そうな魔砲を放出してみたりと色々と試していたが、その全てを穿たれたり、軽々と弾かれた

のを見てからは逃げの一手を選んでいた。

逃げる人間の少女が全力で本棚の間を縫うように飛んで、命を刈り取る勢いで回り放られ続けるスコップから身を逃していく。

逃げる側は必死な顔で本気で逃げまわっているのだが、投げる側は淑やかに笑んだまま。

上手く躲して逃げる獲物だと、エモノを投げつけては偶にクスクスと笑っている。

「喧嘩を売ってきたというのに、いつまでも逃げてばかりですね。これでは埒が明きませんし、強引にでも明けてしまいませんか」

高速回転する三本目の角をテキストに、何かに当たればいくらいかに周囲に奔らせて、空いた両手の指を好き放題に鳴らしていく。

逃げ先を読んだり逃げた先を狙ってではなくランダムに、視界に入るところならどこでもいいといった風に、乱雑に辺りを穿っていくアイギス。何度となく鳴らして、本棚も床もボコボコと歪な形にしていると、その最中にチラチラと周りを確認しながら飛んでいる魔理沙の姿を見つけた。

見つけた獲物に向かって笑んだままの悪魔が指先を向ける、狙撃手が照準を合わせるようにわざとらしく片目を瞑り、パチンと伸ばした右手の指を鳴らそうとした瞬間に魔理沙が動く。

ゴソゴソとエプロンから試験官を数本取り出すと、宙に向かって放り投げ八卦炉からの弾幕で撃ちぬいた、撃たれ弾かれた瞬間から小さな爆発を起こして少しの煙を辺りにバラ撒いていく。

爆煙が漂うとそれに紛れ、再度身を隠す人間少女。

「良く逃げる、けれど逃げ続けるだけでは意味がないのよね」

魔理沙が逃げた先、並ぶ本棚に向けてパチュリーが呟くがその小さな独り言はアイギスの指の音にかき消された。

音が響くと煙も本棚も消える、すると隠れていた魔理沙が再度逃げる。命を種銭とした鬼ごっこは始まってからこれが繰り返されている。周囲で残る本棚は虫食い状態で機能を成していないように見えていた。能力で穿たれた部分はまだいい、後で戻してもらえないはずだ……けれどスコップで破り散らされた書はどうにもならず、これ以上

逃げられて蔵書が傷つくのならば、パチュリーが動いた。魔理沙と争った時のように5色のクリスタルを周囲に展開し召喚用の魔導書を手にすると、あちこちを飛んで逃げ回る魔理沙と、狙いを定め指を合わせるアイギスの間に割って入る。

「この辺りでお引きくださいませんか？　また荒らされては困ります」

「お断り致します、止めるのならば力尽くでどうぞ。横槍でもなんでも歓迎致しますよ、ノーレッジ様」

「出来もしないとわかっていてそう仰るのは……」

視界に入り話す魔女も気にせず、指を鳴らしてその奥を穿つアイギス。

邪魔しに来たパチュリーには残るスコップを投げつけ、奥で逃げる魔理沙には能力を行使する。割り入られて増えた所でさして障害にもならないと見せつけ、両者を同時に狩り立てていく。

が、パチュリーに奔らせた回転する得物は弾かれて、代わりに5色の魔法弾と召喚された大図書館の司書役がアイギスへと迫る。

放たれた魔法弾を穿ち掻き消すと、そのすぐ後ろから爪を突き立てようとする司書。

「その姿、少しだけ昔に戻りましたか？」

突き出された小悪魔の爪を切られながらも握り折ったアイギスが、見た目の変化した司書に問いかける。問われたのは当然小悪魔だが、その姿は今までに見慣れていた姿ではなかった。

頭と腰から生える翼などはそのままだが、胸にも尻にも凹凸もくびれもなかったちんちくりん体型だったはずの小悪魔が、胸も尻も膨らみ体つきが女性的なラインとなっていた。

「サイズだけどうにかって感じよ！　あんたのお陰ってのが癪なんだけどきー！」

「私の？　仰る意味がわかりかねますね」

「あんたの角も混ざってんのよ、癪だけど調子いいわー！」

「角……なるほど、媒介の話ですか」

霧雨魔理沙に吹き飛ばされた後、本棚の中で埋まってやり過ぎそう

としていた小悪魔が、悪魔らしい下卑た笑みで嗤い話す。

先の吸血鬼異変後から妹様の遊び相手としても使われているようで、殺されかける度につまらないと言われていたパチュリーが、実験を兼ねて再召喚した事があった。

花の妖怪に折られたアイギスの角を混ぜればどうなるか？

レミアアの羽を主な媒介に、アイギスの角を追加の媒介に使ってみるとどうなるのか？

思いついてすぐに行われた実験の結果が今の姿。

身長こそアイギスよりも低めだが、以前よりも随分と頑丈で少女の魔砲や妹様の戯れではかき消えないくらいには強く、見目麗しい姿へと変じて姿を見せていた。

「そういう事よ、そういうわけでお礼してあげる！」

「どういうわけかわかりませんが、前よりは殺り甲斐がありそうですしいいでしょう。貴女で我慢するとします」

小悪魔の成長した四肢、その内のすらりとした左手から伸ばされた鋭い爪を手の平で受け貫かれる。肩が外れる勢いで真つ直ぐ抜かれているが、何でも無いというようにそのまま握りこむ黒羊。

乱暴に握りこんで爪も指もひしゃげさせると、掴んだままで地上に急降下していく。激しい激突音を響かせて小悪魔を床へと打ち付けるが、今の小悪魔はこれくらいでは止まらない。床に打たれた反動を利用して掴まれた腕を気にせず、体を捻り立ち上がると、残っている腕をアイギスの腹に向けて伸ばした。

風切る爪を避けようと身を翻すアイギスだったが、貫かれている左手を強引に引かれて体を戻され、避けきれずに脇腹を抉られる。

そのまま小悪魔の爪が振りぬかれると、床や本棚に血飛沫が舞った。

「うお、ビシヤっていったけど大丈夫なのか？」

赤黒く染まったその本棚の影から聞こえた声。

小さな独り言を口にしながら棚の影から半分だけ顔を出す魔理沙、視界に映るのは悪魔同士で酷いじゃれ合いが行われる光景。

嗤ったまま体を裂き貫く死なない二人。

生々しい音と匂い、それらと共に肉々しい赤色を周囲に撒き散らせながら、罵り合いと小競り合いを続けていく。体の何処かが欠損しても止まらない二人を見て、うわあ、と独り言をボヤくとその言葉に反応する者がいた。

「今のうちに逃げなさい、長くは保たないから」

隠れる魔理沙の更に背後からの声。

5色のクリスタルを霧散させ、意識されないように気配を殺したパチュリーが、自身の使役する悪魔と信仰する悪魔の争いを見ながら話す。

「ん？ 負けたくせに逃がしてくれるのか？」

つい先程争った相手から手助けされるとは思えない。

敵だった者の言葉を素直に信用するほど愚かではない魔理沙が問い返すと、逃げされる理由も少し話された。

「逃さざるを得ないので、異変の全容を語ってくれる者がいないと私達が困る」

「負けた事を知られるのが何かの役に立つってのか」

「勝ち負けが重要ではないとだけ教えておくわ、いいから早く行きなさい」

「よくわからんが甘えさせてもらうぜ、後でまた来るから礼はその時にな」

勢い良く出口へと飛び立った魔理沙の背に、来なくていい、そう言いかけたパチュリーだったがそれは伝えずに静かに見送った。

加減した遊びとはいえ自身の魔法を初見で破った幻想郷の魔法使い。

五行説を利用し二つの属性を混ぜた手法までを理解された相手なら、自身の研究の糧に出来るかもしれない、であれば今後も交流を持ってもいいかもしれない、そんな事を考えていた。

地上へと消えた背を見送り魔女が視線を荒事へと戻す、見つめる先には……

「殴り合いをしていたはずが、何が……」

映るのは悪魔二人が抱擁し合うような姿、クチュッと音が立つのは



合わさっている唇だが、パチュリーが視線を戻すと同時に瞼を閉じていた両者が眼を開く。

何故こうなるのかと魔女は訝しむが小悪魔からすればこれが自身の戦う術だ、誘惑し墮落させ自身の思うがままに操る淫魔らしい攻め手が彼女の持ち味である。

土手っ腹に風穴やら肩にトンネルやら作る二人が淫猥な瞳で見つめ合う姿、顔だけを見れば色濃い景色に見えるが、腕は互いもげたりたり捻っていたりと綺麗とは言い切れない……そしてその風景も長くは続かない。

奪われた側のアイギスから唇が離される、ツウつと紅い糸を引いた口元には何かが見えた。

歯で甘咬みされるソレは舌。

少し先の尖った長めの舌には歯型あり、ソレから紅い血が垂れると、とてもマズイ物を吐くように紅い血糊とともに床に吐き捨てていた。

「キスだけで墮ちると思われるとは、舐められたものですね。逆に墮として差し上げてても良いのですが……目的は達しましたし、今はこれくらいでいいでしょう」

小悪魔との小競り合いを楽しみ浮かべていた歪んだ笑みから、魔理沙を追う前の瀟洒な顔へと戻して終わりと告げるアイギス。

自慢の舌を噛み切られ、口元を抑える小悪魔の腹を殴り抜いて、中身を雑に握ってそのまま投げ飛ばすと言葉通りに終わりを迎えた。握ったままのモノをポイと放り、カツカツと魔女に向かって歩み寄ると嫌な顔をしたパチュリーから話しかけられる。

「終わり……？ アイギス様にしては中途半端な？」  
らしくない。

一言で感想を述べるならこうだろう、パチュリー以外でアイギスを知る者から見てもらいたくない所で見逃して終わった争い事。

自分から追い立てておきながら逃すのは何故か？

普段からよくわからない方だがいつも以上によくわからないと、こちらにも珍しく眉根を寄せるパチュリー。

「先には進ませず追い返すのが目的でしたので、少し脅してみました。ノーレッジ様まで釣れるとは、我ながら良い演技だったと思えますね」

最初から殺すのが目的ではなく追い返すのが目的だった、その為に少し脅したというのが二人の視界に収まるのは随分と荒れ果てた大図書館、少しでこれかと溜息をつく書庫の主。

「異変を解決に来たのなら異変関係者と争っていけば良いのです、それにあのまま地下に進まれては妹君に殺されるだけ。出会うならもう少し慣れてから会って頂きたい」

「妹様ですか？」

吐かれた溜息を履き返すように饒舌に語る黒羊。

話す内容は今し方逃した獲物の事ではなく地下で寝る幼子の事、今までにした事がない手加減に疲れ果て、糸の切れた操り人形のように寝落ちしたフランドールを思い出しつつ語り始めた。

「多少の加減は出来るようになりましたがまだ危うい、少し高ぶるとすぐに壊そうとしてしまいます、人間と遊ぶにはもう少し練習が必要でしょうね」

「……なるほど、レミイは関わらせないと言っていたけどアイギス様は関わらせるのですね」

「目の前に楽しそうな遊びがあるのに、それから離してお預けなどと意地悪な事は致しません。遊べないなら遊べるようにして差し上げるのも年寄りの役目と考えます」

妹を思うあまり遠ざけさせた姉と、同じような感情を持ちながら敢えて近寄らせる古い知人。

どちらもフランドールの誕生から見ている保護者二人だが、扱い方が変わるの血を分けた肉親と一歩引いた立ち位置にいるからか、そのように結論付けた魔女が頷いた。

「だからアイギス様も加減したと、わざと逃したのはそういう事でしたか」

最初からそう話してくれば割入るような危険など冒さなかったのに、再度のため息を吐いたパチュリーが友人の事を少し考える。

変な所で頑なで素直じゃないのはこの方に似たのか……そう考えるがその思考はあながち間違つてはいない、主なら不遜で、傲慢であれと仕込んだのは目の前のアイギスなのだから。

「語弊がありますね、形だけは弾幕ごっこに見えるよう加減はしましたが死んでも構わないつもりでした」

言われてふむと考える魔女。

確かに直接的な殴り合いはせず真つ直ぐに突っ込んで追い立てる事もしなかった、唯スコップをバラ撒いて能力を行使していただけ。見た目だけは言う通り弾幕ごっこらしいが……それでも酷い有様だと思ふが蔵書が燃えていないだけマシと、自ら地獄に仏を見つけた書庫の主殿。

考えが纏まり心に余裕が出てくると今の言葉の穴をついた。

「死んでもいいとは？ 先ほど仰つた事と矛盾しますが？」

「遊び相手は霧雨様だけではないのでしょうか？ 彼女が死のうが生きようが詮無きこと。後に妹君が遊べれば良いのですよ？ 楽しめるのであれば相手は誰でも構いません……ですが、上手く逃げられまして、後の来訪までに妹君を慣れさせなければなりませんね」

言い切つて最後に、頑張つてください、そう呟くアイギス。

弾幕ごっこに付き合うのは私ではなくパチュリーだと、名を出さずに押し付けると三度目のため息が咳と共に吐かれた。

獲物が逃げ去り小悪魔も静かになった今、戦闘の気配が落ち着いた為、天井近くを舞っていた埃が降りてきたのだろう、大きな溜息を何度もすれば吸い込んで当然だった。

ゴホゴホと咳き込む魔女を見て、お大事にと告げスコップを顕現させるアイギス。顔色が悪くなるほど咽るパチュリーを余所に、満ち足りない腹を撫でてから、自身で穿つた本棚や床を楽しそうに埋め戻し始めた。

### 第三十七話 見られたい者達

やたらと広く感じられる真っ赤な屋敷。

外観から見た感覚でもそれなりに広く見える紅魔館。

だが、館内は外から見た以上に広く入り組んでいるように感じられる。

壁も床も赤く塗られていて、灯る燭台のオレンジ色くらいしか赤以外見られない目に痛い空間。そんな空間が何者かに無理やりらませられているように歪に広がり、屋敷内を大きく広くさせていた。

それこそ屋敷の主達が翼を広げて飛行し、楽しく戯れるには十分な広さがある館内で、今争うのは主達吸血鬼ではなく人間の少女二人。「強い……美鈴が負けるだけの事はあるのね」

その人間少女の内の迎え撃つ側の眩き。

スペルカードは撃ち切つて後は4つの魔法陣と、自身の放った銀のナイフを回収しながら弾幕ごっこに興じるこの屋敷のメイド長、十六夜咲夜が愚痴を吐く。

広く赤い廊下で対面する巫女に用意してたスペルカードは全て打ち破られていた、ここまで出来る人間が私以外にもいるのかと、感心しながらもまだ諦めていない様子。

「そろそろ終わりにしない？ スペルカードも打ち止めなら後は負けるだけでしょ？」

飛ばされるナイフをロール飛行しながら躲す巫女。

距離を詰めようとする咲夜に対して一定の距離を保ったまま、札や針を続けざまに打ち続けている。

「貴女も打ち止めに……なりそうにないわね、どういう理屈？」

「ああん？ 企業秘密よ」

回収しながらの投擲を続ける咲夜とは違って、巫女から放たれる弾幕には限りが見えそうにない、それほどの勢いが感じられる博麗の巫女が打つ弾幕。

自分のように時間を止めて回収しているわけでもないのに、と戦闘時だというのに余計な事まで考え始める咲夜だったが、少し考えた辺

りですぐに思考を切り替えた。

遠距離戦では向こうに分がある、ならば接近できれば……

話す時以外は口を結んだままの瀟洒な従者が珍しく舌打ち鳴らし時計も鳴らす。

カチリと止まる巫女に咲夜が迫るが、その勢いはすぐに止まった。

「なにかしら、この珠？　いつの間に？」

咲夜がナイフを逆手に構え時計に手をかけると、巫女から二つの球体が放たれていた。

今までの戦闘では見せなかった魔道具らしい物が、咲夜の前後で時を止め静止していた、再度の思考時間を取られた咲夜が紅白の珠を見ながら時を動かす。

何もせずに能力を解除したメイド長、そのまま攻めれば楽に勝てるのかもしれないが此度の争いは遊びであると主からも言われている、能力を使いはずれど対等とはいえない使い方を今の咲夜は好まなかった。

負けても死にはしないというのも理由だが、慕う門番が正々堂々を好むと知っているから、遊びではそれを習って行動すると心に決めていた……けれどその心意気が仇となる。

時が動き出すと巫女本人と紅白の珠2つからこれでもかかと弾幕がばら撒かれる、取り敢えず回避と感じた咲夜が再度時計に手を伸ばすが、時は止められなかった。

「本当に唯の人間……なのよね、参るわ」

三方向から発射される針と追尾性のある破魔の札、それぞれがスキマを埋めるように周囲に広がりながら放たれる光景。

今止めれば全て止まる、そうなれば逃げ場がない。

そう理解していまい能力は使えないものとされた咲夜、本来なら時間停止を阻害するなど不可能。

時計をカチリと鳴らすだけで咲夜以外の全てが止まるのだから、そうされては誰も動けない、誰でも考えつく無理難題だがこの巫女はそれを逆手に取って弾幕の結界を展開してみた。

「せめてもう一枚くらいは無駄撃ちさせないと」

スペルカードは破られ能力までも封じられた咲夜、自身の負けを認めつつ後の事へと気を配る考えへと再度頭を切り替える。

美鈴を打ち倒した巫女を狩る狩猟犬から主に尽す忠犬へと立場を変えると、巫女から放たれる弾幕を急旋回や急制動など動きだけで気合で避けて突破し接近する。

上方から一気に近寄るメイド長が最後に残るナイフを逆手に握り、巫女へと刃を光らせる。真っ直ぐに突かれる銀のナイフだったがそれが巫女へと届くことはなく、お祓い棒の柄部分で受け、そのまま真っ直ぐに突き返された。

「まだ終わらせない！」

「しっつこいのよー！」

少しの押し合いを経てから攻め手をかけるメイド長。

お祓い棒に刃を埋め抜けなくなった武器に懇親の力を込めて棒を弾くと、門番仕込みの徒手空拳へと移行する。東洋武術を学んだ弟子が平手での裏拳を放ち巫女の体を打ち床へと落とす、それを追って流れるように二連の裏拳から右の回し蹴りまで出した咲夜だったが、蹴りは巫女を捉えなかった。

胸部狙いの回し蹴りを屈んで避けた巫女がその位置から蹴りあげる。

お返しとばかりに体全体を使って蹴り上げる巫女。

伸ばしきった足を戻す前、隙だらけのメイド長に向かい空中で後方宙返りするよう蹴られると、咲夜の顎先を掠めていった。

掠めただけ、まだやれる、顔にやる気を見せたままのメイド長が動こうとするが、掠めただけの攻撃だというのに咲夜は動けなくなっていた。

「顎って弱点らしいわ、私の勝ちね」

空中でぐるっと回転し、床で膝つく咲夜に勝ちを告げる巫女。

言い切ってからすぐに飛び去った。

消えていく巫女の背を眺めて尚追いかける素振りを見せた従者であったが、最後に受けた蹴りを考え追いかけるのはやめたようだ。

屋敷に籍を置いてからずっと習ってきた武術でも負けた。

真正面から挑んでそれで負けたのだからお嬢様も美鈴も叱ってはこないだろう。

寧ろ、楽しく遊べたのか？

満足出来るまで遊べたのか？

見てもらいたい二人から、そんな事を聞かれそうだと少しだけ笑う  
咲夜。

クスッと笑ってから、頬を伝った悔しさを拭った。

「従者しんみり中」

「善戦しただけど、負けて泣いていたりして……誰に似たのか、負けん気だけ強くて困る」

紅魔館の屋上で空と月を見上げる幼女が、誰かを思っ頭を軽く振っていた。

態度ばかりは一丁前の瀟洒な従者だが中身は可愛いままの生き物の事を考えて、まるで見ていたかのように話す。今の彼女は運命を覗いてはいなかった。

見なくとも結果がわかるとまでは言わないが、今回の異変の成り立ちを鑑みれば負けは読めるし勝つわけにもいかない、はなっから箍の付けられた者達では解決に来る者には勝てないだろう。

そんな事を考え優雅に空を見上げていたが、見つめる空に自身の放った霧以外の赤が見られると翼を開き宙へと舞った。

「ようこそ人間、うちの者は皆使えなかったけどあなたは違うみたいね」

「人間ってさっきのメイド？ 門番よりは手強かったわ、弾幕は門番のが綺麗だったけどね」

赤く陰る月を背に、赤い空の中映える白い皮膜を大きく広げるレミア・スカーレットが、目の前に現れた紅白の人間を煽るように身内を下げる物言いをする。

言われた人間の巫女がそれに対して返答すると、幼い吸血鬼の顔に笑みが零れた。美鈴も咲夜もこの人間に対して十分に印象付ける事が出来た、負け試合の中でよくやったと語らずに表情だけで褒めるレミア。

「それで迷惑なのよね、サツサとやめるか退治されてくれない?」  
紅い霧の供給をやめるかさつさと死ぬと簡潔に、言いたいことだけを言った巫女。

気持ちが良くくらいにすっぱりと言い切ってくれて、人間の、それもまだ少女くらいだというのになんとも堪らないと笑えてしまつてこらえ切れないレミリア。

一笑いしてから理解を見せずに答えた。

「短絡ね、しかも理由が分からない」

「言われないとわからない? 見た目ほど子供じゃないんでしょ? とにかくここから出て行ってくれる?」

「ここは私の城よ? 出て行くのはあなただわ」

翼を数度羽ばたかせて腕を組み、体と自身の力を大きなモノだと見せつけるレミリアが巫女に返答をする。クツクと嗤い高慢さや不遜さを表しているようだが、巫女には唯の我儘な娘つ子としか映らない、小さくため息をついて目を瞑った紅白が言葉を追加した。

「子供だったならいいわ、わかるように言つてあげる。この世から出つてほしいのよ」

閉じた瞼を開きレミリアに言い放つた巫女。

屋敷の主を巫女が見上げる形で対峙する二人。

この世から出て行けという物言いを聞いて、小さく嗤っていたレミリアの顔が更に酷い笑みへと変わつていった、ニイッと笑つて巫女に牙と舌を見せつける。

「しようがないわね、今お腹いっぱいだけど……」

「私を喰うつて? 護衛のメイドもない箱入りなんて敵じゃないわ」

「勘違いをしているわ、咲夜は優秀な掃除係。おかげで首一つ落ちてなかったでしょう?」

「咲夜つて言うのね、あのメイド。あれよりあなたのが強いのか?」

質問しながら紅白の陰陽玉を浮かばせる巫女が少しの針と札を放つ、パラパラと打たれたそれを避けもせず、周囲を漂う赤い霧を集



めて防いでみせたレミリア。

異変の首謀者を中心に霧が渦を巻くと赤い球体バリアのように展開される。

「さあ？ 私は日光に弱いからあまり外に出してもらえないのよ」

自身の魔力が満ちる空間の中、自分の弱点をネタに話を振る吸血鬼。

展開した霧を散らして返答ついでに弾幕も返していく、レミリアから放たれた赤く大きな魔力弾と皮膜の色に似た白い魔力弾。

両手を広げてバラバラとばら撒くように周囲に放っていくが、表情を変えずに巫女がそれを避けた。

「……中々出来るわね」

「避ける相手に褒められてもね、まあいいわ、楽しい夜になりそうだしそろそろ始めましょ？」

赤く見える月を見上げ楽しい遊びに興じようとレミリアから誘いが述べられた。

話しながら両手を胸元で畳み指を小さく丸めて見せる、初めて訪れた社交界でダンスの誘いを待つように手を畳んで巫女からの返答を待つ。

「そうね、さつきと退治するわ」

異変の解決者が待つ姿勢を見せた吸血鬼にお祓い棒を突きつける。

差し出して欲しいのは誘いの手だが国が違えば誘いも変わるか、と構えたままのレミリアが巫女に向かって台詞がかった言葉を言い切った。

「こんなにも月も紅いから、本気で殺すわよ」

異変を始めた当初から考えていたキメ台詞を正面切って言い放つ。

誰にも言わず今まで内緒にしていた台詞を言ってから動き始めた屋敷の主。

開幕からスペルカードを一枚取り出すと巫女に向かって宣言した。

——天罰『スターオブダビデ』

カードを見せると巫女へと投げつけるレミリア。

スペルカードを受け取ったのを確認すると、幼い体を中心に紅く大

きな魔法陣を背負った。魔法陣を描いている細く紅い筋が輝くと、示された筋道通りに紅い魔力が込められたレーザーが照射される。ブワツと周囲に奔っていくレーザーが巫女の行く手を阻むと、筋の接点で成長し青白い魔力球となって爆ぜた。

「一枚目くらい余裕で避けて見せてくれよ？ その為に押し付けたんだから」

紅いレーザーと青白い弾を掻い潜る巫女に期待いっぱいという言葉を眩く首謀者。

先に渡すなどルールの概要になかったが、結果破られれば同じ事だとその姿に似合ったワガママっぷりを見せる……昔言われた、先にそうしてしまえばそうならざるを得ないというのを実戦で試した御嬢様、幻想郷を異変から守るために現れた敵対者の姿を見て少しだけ考えていた。

いつまでも守られる側ではなく、愛する妹や慕ってくれる屋敷の者を守る側に少しは成れたと見せつける為、その為に巫女を利用し大げさに魔力を迸らせ見ている者達全てへと力を示し始めた。

### 第三十八話 見る者達

朱に染まる月を舞台背景に、激しく争う白い吸血鬼と紅白の巫女。同じく紅い屋敷の上空で、互いが放つ弾幕をヒラリと躲して戯れている。

景色に映える白いドレスのレミリア・スカーレットが放った一枚目のスペルカードは突破され、今は一度通常弾に切り替えた状態のようで、口の端を僅かに開いて笑みながら大小の紅い光弾を巫女に向かって打ち続けていた。

スペルが破られ尚笑う屋敷の主。

押し付けた期待に応えた巫女を賞賛し、夜空に笑う。

声高に笑い光弾を三発、六発と数を増やしながら巫女へと飛ばしていくが、打たれる側は涼しい顔でそれを躲していく。

レミリアの派手な光弾を躲し、旋回しながら封魔針を浴びせていく博麗の巫女。

翼を畳んで急加速するレミリアが逆方向へと旋回しそれを避けようとするが、回避方向からは破魔の札が迫ってきていた。

更に勢いを増し飛ぶ夜の王だが札は猛追してくる。

「追尾するか、面白い弾幕を考える」  
が、脆弱。

幼子の声でそう叫ぶと眼前に迫った札が体に触れる前に焼け落ちた。

博麗の巫女が魔を払う際に用いる札、それが焼け落ちるなどそうはない、そうなる時は余程の手合が相手の時くらいだろう、今退治している吸血鬼が叫びと同時に周囲に魔力を垂れ流す。

すぐに紅い霧となって散っていったが、それが発せられた瞬間に遠くに見られる森から野鳥がばさばさと飛び立った。

飛んで行く鳥の群れに二人の視線が移った一瞬、レミリアの半身に深々と封魔の針が打ち込まれていく、破魔の弾幕を直接食らって少し表情を変えたレミリアだったが、一度体を霧へと変えると何でもなかった顔で元の姿で現れた。

「なんだ、幻想郷の少女というのはハリネズミにするのが好きなのかな？」

咲夜もそうだったなと懐かしみ、同時に元に戻った腕を一払いしてボヤク。

言われた巫女からの返答はないがこれはレミリアの独り言に近いものだ、両者気にせず戦闘を続け、巫女から返答代わりに針が再度放たれる。

真つ直ぐに放たれるを針の山、それをフンと鼻を鳴らして翼で受けバサツと払って弾く吸血鬼、パラパラと落ちる針を見てお返しだと二枚目のカードを手にした。

—— 獄符『千本の針の山』

宣言すると共にレミリアの体が見えなくなる。

レミリアから発せられた紅い針のような弾幕が体を覆うほどの濃さで放たれたからだ、ブワワと広がりを見せる円状弾幕が現れるとその外周に紅いナイフまでが現れた。

仕えるメイドの弾幕と似通ったそのナイフがクルクルと廻り刃を光らせる、周囲に漂う針やもナイフが綺麗な円軌道を描くと、引力が切れたようにレミリアから離れ、巫女へと駆けていった。

夜を裂くような勢いで吸血鬼の弾幕が盛大に広がる。

四方八方へと飛び奔っていく刃物達、そのスキマを巫女が縫うように飛ぶ。

前後の移動はほとんどせずに、左右の移動や体の捻りだけで回避しながら針を撃つ博麗の巫女。

宣言の後から数度放たれただけの弾幕の軌道のはずが、まるで次に広がるスキマがどこかわかるといった回避行動。

見た目こそ派手に展開されて広がり、逃げ場を埋めるようなレミリアのスペルだったが、軌道自体は大量の刃を模した弾幕が回転し動くだけのパターンである事を、この巫女は何となくこうじゃないかと尖すぎる勘から理解していた。

運命を操る吸血鬼の攻撃をなんでもない勘だけを頼りに避け、攻める。

レミリアの弾幕に帯びる魔力と巫女の持ち得る霊力が干渉し合い、カリカリという音がたつ中、グルグルと放たれる吸血鬼の刃を避けて確実に破魔の弾幕を浴びせていく今代の巫女。

ばら撒かれる魔の針とは違い、封魔の針は確実にレミリアを削っていった。

チクチクと全面に広げた翼に針を受け、見た目からダメージを受けていると分かる濃霧の吸血鬼、ある程度攻め追い詰めると陰陽玉を取り出した巫女がこれでもかと弾幕を集中させた。

札や針がレミリアを包むと放ったスペルカード弾幕が白い煙となって消えた。

「なによ、針もナイフも見た目だけじゃない」

今のでスペルカードブレイクだと確信を得た巫女がレミリアを煽る。

左手に持ったお祓い棒を一度払って突きつけると、やる気が感じられない抑揚のない声色で語る。

「見た目を真似ただけだもの、使い慣れない物を弾幕にしてもダメね」レミリアが穴だらけにされた翼を数度羽ばたかせ針を取り払う。

バサツと空気を叩く音が鳴ると刺された針が周囲に飛び離れる、チツと口を尖らせてから大事そうに翼を撫でた。

「針は兎も角ナイフくらい使うでしょ？」

「斬るなら爪こゝれで十分、つれない人間と思っていたけど案外喋るのね」

二枚目のスペルを破られた吸血鬼。

鋭い爪でスペルカードを摘み巫女に向かって飛ばす。

巫女の読み通り今のでスペルカードブレイクだったようで、人間のくせによくもやると関心してばかりのレミリアが通常弾幕に切り替えた：：が、その通常弾もナイフ弾であり、見慣れたといった顔で巫女が避けた。

仕えるメイド長のスペルカードよりも苛烈で、大量だと思える弾幕量に見える通常弾を、斜に構え正面を維持しながら回避し博麗の巫女が反撃を放っていく。

狙ってもバラ撒いても当たらない人間を見つめ、レミリアが

感嘆のため息を吐く。

フウと吐き気を入れ替えると同時に評価も改める、この巫女は全力で遊んでもいい相手だと認め、認識とともに難易度を上げた三枚目のスペルカードが封切られる。

——神術『吸血鬼幻想』

本気で行くと気合たつぷりのレミリアより、紅い球体が勢いよく放たれる。

ゴウつと風を切つて飛ぶ薄紫の光弾が間隔を開けて巫女を襲うが、量も少なくスキマも今までのものよりも随分と余裕のあるスペルに見えた。

舐めているのかと巫女が睨むが、細めたその目には別のモノが映つた、光弾の過ぎ去つた軌跡には無数の紅い弾幕が残っていたのだ。

滞空する魔力の弾幕が巫女の周囲に現れると、ニヤリと笑うレミリアが翼をバサリと動かす、その動きに呼応して紅い魔力が宙でうずを巻き始めた。

く吸血鬼奮闘中く

「楽しそう……」

自室で両足の内ももを床につけ、首を傾げる幼女が瞳を輝かせている。

ソファアームもベッドもあるというのに、姉かメイド長にでも見られれば窘められる姿でランランと瞳に楽を表す幼女。

ペタンと座つたままジツと壁を見つめていた。

「貴女も混ざつたらいいのよ」

壁を見つめ、普段からキラキラと光る羽を感情の昂ぶりと共に特級の水晶へと化していく吸血鬼の妹、フランドール・スカーレットの背に話しかける落ち着いた声色。

フランの見つめる壁にリアルタイムでの生放送をお届けしている妖怪が、似つかわしくない優しい声で話しかけた。

「混ぜられるようになるかなあ?」

「今出来ないのなら後で出来るようになってほしいのよ、簡単な事でしょう?」

スキマTVに映る人妖のお戯れを眺め、弾幕ごっこについて話す二人。

混ざりたい幼女は視界に映る姉のように上手く遊べるか不安といった顔だが、その不安を払拭するように諭す妖怪の賢者。

問われたことで少し悩むフランだったが、ちよつとの沈黙の後に幼子らしい笑みを浮かべてニシシと笑った。

「お姉さんも似た事を言うのね」

「も？ 他にも応援してくれる者がいるのね」

「うん、アイギスが練習に付き合ってくれたよ……でもまだまだダメだったわ、アイギスだから壊れなかっただけで加減がわからないもんだ」

姉の遊戯を見ながらも俯くフランが初めての弾幕ごっこの感想を話した。

戦う姉と自分の右手を見比べて、ニギニギと手を開いたり閉じたりしてうくと鳴き失敗を紫に話す。フランの放つ弾幕を自ら食らってこれでは死ぬと見せるアイギス、もつと抑えないと遊びとは呼べないと体現して見せてくれた、そんな事をフランが話していくと聞いていた紫がクスクスと笑った。

「お友達なのよね？ なのに死んだ話が楽しい？」

「楽しいわね」

「そうなの？ ホントは嫌いだったりするの？」

「さあ、どうかしら？」

と、疑問を投げかけてくるフランに笑ったまま曖昧に答える紫。

どつちなのと追い打ちされるがこの話の流れを逸らすように、あつちが盛り上がってきたわとスキマへと視線の先を逸らしていく、そうだったと再度生中継に食いつくフラン。

見つめる先では三枚目のスペルカードを破られた姉の姿。

だが唯破られただけではなく巫女のスペルカードも一枚使わせたようだ、白い枠線が広がり消えていく瞬間がフランの赤目に写り込んだ。

「嫌いではないけれど、不器用だとは思わ」

中継される弾幕ごっこの音で聞き取れないくらい、本当に小さな声で呟いた紫の独り言。

この屋敷の主も自身の友も妹に対しては非常に甘い。

けれど、どちらも直接内容を話したりはせずかいつまんだ話だけをして過保護に引き離してみたり、自身の死を持つて体感させてみたりと、不器用にしか接しない保護者二人を笑む表情の裏で考える。

そして更にその奥では自身の事も考えていた、姉と巫女の戦いをワクワク顔で見つめる妹の背を眺めて思う事、異変が始まる前までは一番のネックだと考えていたこの妹が楽しそうに弾幕ごっこを見つめる姿……それを自身で確認し余計なお世話をしたかもしれないと、私も存外不器用だと感じていた。

「任せたのだから横槍を入れるべきではなかったのかもね」

「お姉さん、何か言った？」

「貴女のお姉様の槍が素敵と思っただけよ、気にしないでいいわ」

こっそりと呟いた紫のぼやきにフランが反応する、振り返りはせずにはスキマに映る姉の姿を見ながら返答をした。

見やるスキマには姉の紅い魔力が固められた槍が揺らめいている。『神鎗・スピア・ザ・グングニル』を手に巫女のお祓い棒と剣戟を重ねる姉の姿、あれを見て素敵というのだからこのお姉さんもそういうセンスなのかと、フランは一人納得していた。

「あの人間すごいね、お姉様と遊ぶなんて本当は人外なのかな？」

姉やこの紫色の妖怪の独特なセンスも気になるが、フランのもっと気になるものがスキマの中で元気に戦っている。

人間なのに空を飛び、人間なのに吸血鬼と正面から戦う少女。

咲夜も飛ばしじゃれ合う限り結構規格外な人間だと感じていたがここまで姉を押し込める事はない、今画面の中で姉と争う人間は、フランが生きてきた中で見た事がない種類の人間だった。

遊びとはいえ空中戦で吸血鬼を押し人間がいるなど、引き籠もり吸血鬼のフランですらありえないと感じている。

「あの子は間違いなく人間よ」

「そうなの？ でも人間ってあんなに強くないし飛べないよ？」



顔を見合わせない二人の会話。

両者ともに見ているのはスキマの映像。

映しだされているのはフランが感想を述べた通りの状況で、レミリアの宣言したスペルカード『紅符・スカーレットマイスタ』が破られ、白いドレスも端々が千切れたりする痛々しい姿が見えていた。

あの我儘で分からず屋の姉をここまで追い詰める人間がいるなんて、言葉にはせず内心だけで感心してみせるフランだった。

「外の人間は飛べないわね、それでもあの子、霊夢は人間よ。貴女のお姉様と遊べるくらい強くて、空も『飛べる』けれど」

何者にも邪魔されず自由に、何処であろうとも好きに飛ぶ人間。

それが日常生活でも異変の最中であろうとも、霊夢と呼ばれた巫女は飛ぶ。

誰にも邪魔されず、邪魔をするならきつちりと叩きのめして空を飛ぶ博麗の巫女、曖昧でどこか歪なバランスで成り立っているこの幻想郷を体現するかのように、本来飛べない人間が飛ぶ力を備え華麗に飛び回る。

幻想郷の危ういバランスを保つ為八雲紫が考えた『命名決闘法案』それを屋台骨として博麗の巫女が練り固めたスペルカードルール、幻想郷の新しい秩序とするルールを広めるための此度の異変だったが、この妹はその部分は聞いていない。

だからこそ純粹に遊びを楽しんで、自身もやってみたいと瞳を輝かせているのだろう。

異変の首謀者と解決に現れた人間の争いを真剣に、じつと見つめているランドール：：こうまで興味を引けたのなら最初から籬など用意しなくとも問題なかったかもしれない、自身の思い描いた不安要素は的外れだったのかもしれないと考える紫が部屋の入口を見る。

見つめる扉の奥の方からは、聞き慣れたカツカツというヒールの音が聞こえてきていた。不器用な友人が帰ってきたと理解すると、ランドールの肩を軽く叩いて手を振る妖怪の賢者。

もう帰るの？ と顔に書いてある幼い吸血鬼に、練習頑張りなさいと告げてから小さく笑んで一人スキマへと消える。

必要のなかった枷が図書館で戯れている間、代わりとして自ら妹君と過ごしていた紫が消えると同時、頼まれていた本来の枷代わりが部屋に戻ってくる。

ギイと開かれる重い扉。

外に出る為の入り口が開くと、スキマから扉へと視線を移していたフランドールが立ち上がり、楽しそうな笑顔を見せて迎え入れた。

「おかえりー！」

「ただいま戻りました、お目覚めになられていたのですね」

ニンマリと笑うフランドールにアイギスが問いかける。

弾幕ごっこの練習で加減に疲れ果て、電池の切れたおもちゃのように眠ったはずのフランドールが笑顔で迎えてくれた事に少し驚くが、機嫌がいいならそれでいいとそれ以上考える事をやめた。

楽しそうに笑う妹君に更に楽しんでもらおうと、上で出来た事を話すとヨシ！ と気合を入れ無地のスペルカードを見つめる悪魔の妹。「用意されるのは良いですが、加減出来るようになりませんかと思えませんね。うまく出来るようになれば遊びに付き合ってくれる者もおりますよ」

アイギスとの練習ではテンションが上がりすぎて能力を使ったフランドール、その結果何度となく殺してしまったようだ。

スペルカードを扇のように広げる幼子の手を見て、ちよつとだけ窘めつつも練習を頑張りましょうと、遊びを餌にフランドールを上手く煽てていく。

付き合ってくれる者、先ほど逃した霧雨魔理沙の姿を思い出しつつ話しているが、あの時に追わず追い返しただけで抑えたのは追わなかったわけではなく、追いかけられるほど余力がなかったからなのかもしれない。

それらしい理屈を述べて魔女は納得していたが、何度となくフランドールに壊されてからの追いかっこは意外と疲れる物だったらしい。むくと悩むフランドールを余所にソファアに腰掛けて背を伸ばすようにもたれかかった。

「なんか疲れてる？」

「疲労感よりも別の方面で少々、もう少し怖がらせてあげればあの黒白から頂けたのかもしれませんが……怪我もさせず壊しもせず、追いつきだけというのも難しいものですね」

ソファアークで伸びる黒羊の横に来るフランドール。

両腕をソファアークの背もたれに伸ばしているアイギスの腹に自身の顎を乗せて、腹の上で両手を伸ばし掴んでいるスペルカードを見て話している。

「そうよ、壊さないのって大変なんだから」

気合十分のフランドールが頭を腹に乗せるとコロコロと小さく鳴る腹。

お？ とアイギスの顔を見上げニヤリと意地の悪い顔を浮かべると、恥ずかしいので他の皆様には内緒ですと苦笑するアイギス。

別の方面とは空腹感だったらしい。

「内緒にしてあげるから練習に付き合っただけ？」

「お断り致します、空腹のまま壊されたらさすがに壊れるかもしれませんが。それにノーレッツ様が付き合ってくれると仰っておりますよ」

「ケチ……でも、パチュリーも付き合ってくれるの？ だったら尚更頑張るね、応援してくれる人が三人に増えたんだもん！」

尖らせた口でケチと呟くがすぐに明るい笑みに戻る妹君、アイギスに続いてパチュリーが練習に付き合ってくれるとわかり尚の事気合が入った。

やる気を見せたのは良いが三人？ と、後の一人がわからずにもたれかかり後ろに下がる頭を傾げるアイギス。重たい角が傾くと少しだけ浮いた腹の上から悩みの答えが告げられた。

紫色のお姉さんも応援してくれるの！

つい先程までいた紫色の妖怪が帰り際に言った『頑張りなさい』をフランドールが話すと、応援してくれる事よりも態々来た事を気にして少し考えるアイギス。

お願いしただけではなく自身でも確認する、それほどまでにフランドールを危険視していたのかと一瞬考えたが、なんか気持ち悪いのを

開いて外のお姉様を見せてくれた、そう話す妹の顔を見て考えを改めた。

不安要素と感じて首輪代わりに私を寄越した割には親切心を見せる八雲紫。

姿を見せずに要所で動き、こちらののして欲しいように心を擦ってくる：：相変わらず器用に立ちまわる者だと、愛しい吸血鬼を鼓舞してくれた友人に少しだけ感謝したアイギスであった。

### 第三十九話 解決する者達

赤よりも黒が強くなってきた夜空。

未だ争いの渦中にある紅魔館の上空だが、空を紅く染めた原因が追いつまされていくと、本体に習い広がっていた赤い霧も少しずつ掻き消え始めていた。

普段の幻想郷の夜空が少しずつ戻ってくる。

血の色合いに似た暗い朱色だった月も、だんだんと見慣れる月光のそれへと戻り始め、今赤いのはスペルを破られた異変の首謀者の体とそれを傷つけた人間の少女の衣服、後は眼下に建つ屋敷くらいだろう。

このままでいけば直に異変は終わる。

異変の中心地である霧の湖周辺や、人里などで夜空を見上げている者達がそう感じ取れるくらいに赤が消えた、宵の明星が綺麗に見え始めた幻想の空。

「楽しい…楽しいな！ 人間！ 遊戯とはいえ私が、夜の王たる私  
が人間の少女に追い詰められるとは」

思っても見なかった、最後に言うべきそれは言わず自身の胸の内  
で止めた夜の王。

言ってしまうえばこの人間に負けたと告げたようなもの、はなから負  
けの決まった異変とはいえど相手は真剣に、出来レースの事などは知  
らないだろう様子で解決に来た者だ。

幻想郷を守るために私を退治しに来た人間の少女、博麗の巫女。

そんな者との楽しい遊び、出来レースとはいえ真剣に争い戯れる相  
手に対して中途半端なままで終わらせたくはない、そんな状態で終  
わっては父から継いだ家督が廃ると、負け試合の中でも吸血鬼のプ  
ライドを見せる屋敷の主が最後のカードを手にする。

「これで打ち止め、最後のカードよ！」

空の色合いが戻り始める中、纏う白のドレスが自身の血で汚れてい  
く最中でも尚声高に嗤う吸血鬼が、空中で対峙する人間の少女に言い  
放つ。

けれど反応は得られず、話しかけた巫女からは血塗れの吸血鬼レミア・スカーレットを攻め落とすための弾幕が放たれるのみ。会話に興じてみたり完全に無視してみたり、掴みどころがわからない人間だなと感じつつ、描かれたスペルを放っていくレミア。

幼い体躯を一度屈めて翼で包む、そうして蓄えた魔力を髻を開き羽ばたかせるのと同時に全周囲に魔力弾を奔らせた。黒に戻り始めた空が再度赤へと染まっていく、夜空を埋め尽くすのは吸血鬼の魔力が込められた血のような鮮赤の弾幕群。今まで見せていた通常弾やスペルカードが微微たる物に感じられるほどの弾幕量、このままレミアを放っておけば幻想郷の空が再度赤一色に染まってしまいそうな程の勢いで、周囲を染め上げ始めた。

自身の流した血に染まる紅い吸血鬼が放つ魔力。

掲げたカードには『Red Magic』とだけ表記されていた。

今までのように独特なネーミングセンスからの名付けはされていないレミアの弾幕、それが空中を覆い、黒くなった夜空を赤々と彩っていく。空を染め、対峙する巫女の姿を赤で埋め尽くしていく大量の弾幕は、まさにカードに示された『紅魔』と呼べる状態であった。

薄紫の大きな魔力弾がレミアを中心に広がっていく、水面を広がっていく波紋のように360度広がり、進んでいく軌跡には赤から白へと輝いていく魔の弾幕が残されていた。

「最後に派手ね、でもこれは見たわ」

先ほど破られたスペルカード『吸血鬼幻想』と形だけは似ている今のスペル、レミアが名付けるなら『紅色の幻想郷』とでも名付けそうなスペルを巫女が華麗に避けていく。

大玉は軽々と、漂い残る無数の小玉は身を翻して躲していく。

ひらひらと空を舞い、踊るように避け弾幕を放っていく巫女だったが、少しすると動きに緩慢さが見られるようになってきた。逃げる巫女を追い詰めるようにレミアが弾幕を操った結果、逃げ場らしい逃げ場が見られない状態になっていたようだ、それでもやまないレミアの弾幕。

逃げ場がないのはルール違反らしいが、逃げ場を作る術がある相手

にはそれは適応されない……ルールを作った巫女自身それを理解しているから、文句を言わず動きを緩めるだけに留まったようだ。

「濃いわね、どうしたもんかしら」

辺り一面に広がる吸血鬼の弾幕。

レミリアの羽ばたきと呼応して動き追い詰めてくる弾幕を眺め、抑揚のない声でボヤク巫女。

追い込まれているというのに緊張感が感じられないが、これが彼女の在り方であり同時に彼女の強みでもある、普段はただの人間少女で焦りも慌てもするが異変となればそういった物は全て影を潜める異変の解決者。

良く言えば冷静、悪く言えば無頓着というのが博麗霊夢という少女だった。

「考える暇があるならどうにかしてみせなさい！ 異変を終わらせるのでしょう？ ならば切り抜けて見事退治してみせろ！」

激しい弾幕を放ちながらも霊夢のボヤキを聞いたレミリア。

こんな所で吸血鬼の身体能力を發揮しなくとも、と感じられるがそれは兎も角として、間違いなく聞こえた言葉に対して煽りを入れていく。

多大な期待が込められたレミリアの煽り。

用意した最後のスペルカードまで使っても一度の被弾すらない巫女を賞賛し、自身を退治できる者だと認めた上での煽り、それが巫女の耳に届くと舌打ちしてからカードを取り出した紅白。

「煩い、言われなくとも退治するわ」

悪態を吐いて手を伸ばす、伸ばした先には一枚のカード。

—— 霊符『夢想封印』

宣言すると瞳を閉じる博麗の巫女。

瞼を閉ざして少し集中すると、霊夢から色とりどりの大きな光弾がと飛び出して周囲に浮かび始める。クルクルと少女を取り囲んで一拍置くと、標的であるレミリア目掛けて真っ直ぐに空を奔った。空を覆う紅い吸血鬼の弾幕を弾き、かき消しながらターゲットへと向かう破魔の光弾。放った弾幕が浄化されていくのを見たレミリアが、どつ

ちが派手なんだと愚痴を吐くと体に触れた光弾がド派手に炸裂した。弾幕ごっこ用に威力を調整された破魔の光弾だが、性質自体はほぼ変わっていないようだ。この光は妖怪や魔の者が最も嫌う破邪の光、触れれば問答無用で妖怪を封印してしまう事もある、博麗の巫女が培った妖かし退治の為の業である。

それをまともに、真正面から身に受けた吸血鬼。

頭を庇うように翼や腕で防御姿勢を取ってみせたが、触れる先から吹き飛ばされる四肢や翼、これはまた手酷いと感じつつ爆発の中へと体を消していった。

く吸血鬼墜落中く

破魔の爆発が身を包む中、これで異変は終わりかと考える首謀者。

美鈴や咲夜は存在感を見せつけた、パチエも上手くやっただろう、こういつた謀はかりごとは私よりもパチエのほうが向いているし、私よりも的確にこなすはずだ。

このまま落ちれば私も負ける、太陽を隠していた霧も完全に晴れる、そうなれば妹はまた引き籠もり続けるのだろうか……爆ぜる破邪の光の中考えることは身内のことばかり。

「わかった、フラン？」

「わかりました……」

「そう、いい子ね、貴女は終わるまで静かにしてなさい」

不意に思い出される妹との会話。

これは異変を起こす前の会話、紅魔館を訪れたアイギスの姿を見て思いついた、紅い霧を垂れ流し始める前の事だ。

フランドールを外に出す。

それだけのために異変を利用しようとしたレミリアが妹に向けて言った言葉、異変を起こすから終わるまでは静かに待っていてと伝え、フランドールが聞き分けよく頷いたものだからその時はこれだいたいと思っていた。

だが、今になってみればこれでよかったのかと考え始めていた。

吸血鬼異変の際に、何も話してくれないと本音を言ってくれた妹にこれから行う事を話し、素直に頷かれた事でフランドールも納得した



と考えていたが、本当に納得したのだろうか？

言い切つてすぐに異変の準備に取り掛かったレミリア。

思いついた事を成そうとそちらに思考がいつてしまい、あの時のフランドールの顔までは見ていない……あの時の妹はどんな顔で頷いたのだろうか？

外に出るためのお膳立てを整え、好きに遊べる場所を作つてやるのが姉としての優しさ、そう考えての行動だったが……妹はどう感じたのだろうか？

言いたい事だけを言つて妹の話は聞かなかった。

あの時の妹からの返事は……

あの時のフランの声色は……

地面に落ちる瞬間まで妹の事を考える姉、そのまま頭から地に落ちる瞬間に体を無数のコウモリへと変えて散らしていった。

く吸血鬼霧散中く

「メイドも主もしつこくて疲れたわ」

地に消えたレミリアを見て終わりだと呟く。

携えていたお祓い棒を肩に宛てがいとんと二度ほど叩いて疲れたとぼやく、爆発が落ち着いていくのを見ていた霊夢が振り返り住まいの神社方向へと体を向けると、その背中に姿のないレミリアからの声が届いた。

まだ終われない、巫女の耳に確かにそう聞こえた。

本当にしつこいと少しだけ眉間を寄せる巫女、その視界には大量のコウモリが映りこみ一箇所に集まる光景が見えていた、唐突に現れたコウモリに封魔の針を打ち込むが標的が小さく当たらない巫女の弾幕。針も札もすり抜けるだけで、ダメージを与えられないとわかると撃つのを止めた巫女、霊夢の動きが止まると声の主が姿を現す。

穴開きの翼でボロボロの体を包み込んで、数回の錐揉み回転の後にバサツと広げて見せる、紅魔館の主レミリア・スカーレット。

「まだって、ボロボロのくせに、まだやるの？」

見た目からして戦闘出来るような状態には見えない、が、それでもまだ終わらせないと叫ぶレミリアに霊夢が問掛けた。

勝負はついたと言ってくる巫女へと右手を掲げるレミリア。

その手にはクルクルと回る天球儀が浮かんでいる、運命の操り手が今覗き見るモノは愛する妹のモノ、地下の部屋を出て幻想郷の夜空を飛ぶフランドールの姿がレミリアには視えていた。

視えたそれが今夜の事とまでは消耗したレミリアにはわからない、けれど今夜かもしれないと考えるとまだ終わらせるわけにはいかなかった。

「まだだ、まだ翼に穴が空いただけ！ きつちりと退治してみせるんだろう!? 夜はまだ終わらない、異変もまだ終わらせない！」

「しつこいわね、それにその輪つか？ なにそれ？」

「コレは運命の輪、引き籠もる妹が外へ向かう運命が映るものだ……コレが見える限り私は負けを認めるわけにはいかない、いかなくなつた！」

抗う力が無くなってから思い出した、この異変を起こした理由。

八雲紫との盟約もあるが、それ以上に愛する妹を思つて太陽を遮つた今回の異変。

既に負けは見えている、けれど思い出してしまった以上はここで素直に負けるわけにはいかないと、土壇場で我儘さを見せ始める吸血鬼の姉。

思っていた以上に楽しめた遊戯に熱中し、このまま終わつてもいいと考えていたが、当初の目的である妹の事を今になって思い出し、妹の為に諦めないと食つて掛かる。

「妹？ 身内の事くらい自分でどうにかしなさいよ」

「その為の異変だったんだけど、今の今まで忘れてたわ。妹は屋敷に引き籠もり、私は考えを忘れ押し込める、ダメな姉妹ね」

「ならダメな姉に教えてあげるわ、引き籠もりなら外に放り出せばいいだけでしょ、簡単じゃない」

今までのような上から目線ではなく、同じような高さで話し始めたレミリアに巫女がまたボヤク。感情の見えない一本調子で妹を放り出せと簡単に話す巫女、他人事だと思つて簡単そうに言ってくれると、小さな舌打ちをして返事するレミリアだったが、この案は思いの

外心に響いた。

妹の事を知らない他人から見れば簡単な問題、出ないなら出せばいい、出られるようにしてあげればいい……此度の異変のようにお膳立てしての物ではなく、フランドールが自身で考えたままに外に出られるようにすればよかったのかと、今更になって気がついた。

「気軽にそう言わないで貰いたい……でも、そうね、それもいいのかもしれない……言われてスッキリしたしそろそろ終わりにしましう」

完全に荒事の気配が消えたレミリアから、終わりにしようという提案がされる。

雰囲気から退治は済んだと感じている巫女が本当にまだやるのかと目で語るが、その目に映り込む紅い槍を意識すると表情を異変に向かうモノへと戻す。

巫女がやる気を見せた事でニイと嗤う異変の首謀者。

異変の終わりとするには穏やかすぎる今の流れを散らすように、逆手で握った槍を振り、紅い槍に流れる魔力を空へと飛ばし存在をアピールさせた。

そのままギョツと握りこんで体を弓のようにならせると、握っている右腕を伸ばして大きく振りかぶる、投擲する姿勢に入り巫女を睨みつけるレミリア。

こないならこのままぶん投げる、仰け反った体から見下ろす形で霊夢へと視線で伝えると、巫女のスペルカード宣言が見られ、同時に二度目の光弾が放たれた。

光り輝く光弾がレミリアの体を包み込む。

光に飲まれていく最後、笑っていたように見えた妹思いの吸血鬼。

その笑みは押し付けられた異変をこなしたからなのか。

それとも愛する妹に対して一つの答えを得たからなのか。

語らずに光へと沈んでいくレミリアの顔からは、後者だと感じられた。

## 第四十話 騒ぎの後で

つい先程まで赤い霧が全天を覆い、紅の夏霧となっていた幻想の空。

激しく飛び交っていた赤い弾幕も針も札も、放つ者達が空の舞台から降りた今では、争い事などなかったと言わんばかりに見られなくなっており、森に住まう野鳥の鳴き声と揺蕩う湖面の水音が聞こえるくらいの静けさとなっていた。

静寂と日常を取り戻した幻想郷の夜。

音と同じく、染まっていた赤も忘れたようにうつすらと白み始めた空には、微かに見える夏の大三角形や宵から明けへと意味合いを変えた明星が浮かんでいる。

後一刻も過ぎれば星も見えなくなり、屋敷の主が憎む朝日が登り始める時間。

目を嫌い陰らせたその主が、意識なく誰かの腕の中にいた。

「負けちゃいましたね、いやいや、この地の人間は手強い」

幼い吸血鬼を抱き上げる妖怪が、目覚めない主に話す。

腕の中でスウスウと寝息をたてる幼い主にニコリと笑んで、今回の異変の感想を述べるのは屋敷の門番紅美鈴。巫女と争い負けてから暫くは瞑想するように浅い眠りについていたが、レミリアと巫女が最後の舞台上で舞い始めた辺りに目覚め、その姿を見上げていたようだ。

「御嬢様まで綺麗に負けたし、これで異変はお終い……ってならないんだらうなあ」

真つ赤な舞台を彩った一人、夜の王が引き起こした真つ赤な舞台の幕引き役を務めた博麗の巫女、美鈴自身も負かされた相手が飛び消えた南東の方角を見上げ呟く。

主を拾い上げた紅魔館の庭先に立ち、見つめる先を屋敷の門へと向けていく。

「今回は個人的な来訪だと言っていたけど、あの方が来ると毎度賑やかで飽きない……のはいいんだけど、その度に誰かに侵入されてる気がするなあ」

レミリアを抱く右腕を少しよじって、主が落ちないように少し強めに抱く美鈴が、開いた左手で頬を搔く。巫女の針で傷つき薄い線傷が見える頬をポリポリしつつ考えているのは、異変の前に門前で話した相手とそれに飛びついた二人の事。

咲夜が屋敷に侵入してきた夜にも現れ、今回の異変が始まる前にも現れたアイギスと、楽しい異変遊びに混ぜてもらえなかったもう一人の主人フランドール・スカーレットの事を思う。

「アイギス様は上手くやったかな？ あの人不器用：：いやいや、変なところだけ放任だからなあ、妹様にキツカケだけ作って後はよろしくとか言ってそうだわ」

見てきたかのようにアイギスの行動を呟く。

美鈴の予想は大方当たっている、レミリアが外で戯れていた最中、大図書館での騒ぎの後でそのものズバリの事をパチュリー相手に話していた黒羊がいた。

今は妹に連れられて紅魔館内を彷徨いているようだ、何やら難しい顔をしているようだが、それは後述するでしょう、美鈴が動きを見せたようだ。

よつと声を発して主を抱き抱え、拾い上げた紅魔館の庭先に立ったまま屋敷の門をチラリと見ている華人。

充てがわれた自分の持ち場を見つめ、もう少し本気で門番をした方がいいのかと考えているが、太陽が登り始めた事で寝苦しいのか、ぐずつくようにウウンと寝言を吐く吸血鬼の顔を見てその考えを改めた。

「むしろ逆かな、もつと手を抜いたほうが良さそうだ」

腕の中で眠るレミリア、その表情は非常に明るい。

寝ているというのに楽しげに笑っているような、穏やかだが何かに満足したような顔つきで眠りにについている。

異変を起こして愉快に楽しんで。

侵入者に盛大に負けて。

見に纏うドレスもボロボロたというのに、それでも楽しそうな顔で眠るレミリア、そんなやりきった顔の幼子を見て独り言を続ける屋敷

の年長者。

「決まっていたとはいえ御嬢様を降せる人間が本当にいるとは思わなかったし、そういった手合との出会いは大事なものですよね。さすがに素通しは出来ないけど少しくらいは……出会いは多いほうがきつといいはず」

レミアアのやりたいようにやって、最後には負ける事まで決まっていた此度の異変。

シナリオ通りの流れではあったけれど、プライドの高い紅魔館の主がそれを楽しみ、利用しようと動いたのが美鈴にはとても良い事だと思えていた。

利用しようという者までも利用して自身の糧とする、糧にしようとした愛しい小さな主、負け試合の最中でも自身の為にも動こうとするその貪欲さが良いと、仕える主を再評価していた。

初めて姿を見た時の事を考えれば、こんなに大それた事が出来るとは思えなかった幼い吸血鬼。

紅魔館のダンスホールで行われた生誕記念のパーティー、あの時には父と母の背に隠れていただけだったのに。あの頃のビクビクした姿はもう見られないなど、少し懐かしんで幼子の顔を見る門番。

「御嬢様は満足したみたいだけど、あっちはまた泣いてるんだろくなあ。いつも通りメソメソしているんだろけど、どうやって慰めるべきか」

主の可愛らしい姿を思い出すと同時に、もう一人の可愛い者の事も思いつく。

屋敷に現れて十年、寝食も仕事も、鍛錬も共にして今では立派なメイド長となった可愛い人間の姿を想像している。

人間にしては強く異能な力を持った十六夜咲夜、ただ強いとは言っても二十年も生きていない彼女、美鈴から見ればひよこに毛が生えたくらいにしか見えない瀟洒な従者。

今頃赤っぽい瞳を更に赤くさせて屋敷の何処かで泣いているのだろう、そんな事を考えつつ門から屋敷の入口へと視線を流した。

「全く、本業以外で忙しい……でもいいかな、通した私が悪いって事

で。さて、お天道様も上つてきたしお屋敷に戻りましょうかね」

東の空を横目で見て、屋敷の玄関内へと進んでいく美鈴。

屋敷から見て東北東に見える妖怪の山、その稜線が明るく輝く。

ここでぼんやりしていると主が焦げてしまう、ただでさえ忙しくなりそうなのにこの上文句を言われてはと、少し早足で屋敷の中へと歩み消えていった。

日が当たらぬように窓側を避け、屋敷の内側を進み主をベッドに寝かせると、そのまま邸内を確認する武道家。廊下や部屋のあちこちに一回休みに入ったメイド妖精がいて、これはまた大変だと溜息をついて妖精を担ぎ端に積んでいく。

少し進んでは山を築き、また進んでは小山を盛っていく、ある程度の数を纏めるとキリがないからもういいやと、二度ほど手を叩いて残りは放置し歩き始めた。キヨロキヨロと屋敷の中を見回していくと、屋敷の螺旋階段を登る途中のもう一人一人の主と、そのお供を見かける。

「妹様、とアイギス様。こちらにいらしたんですか、咲夜さんは見かけませんかでしたか？」

問いかける美鈴にフランドールが少しの仕草を見せた。

両手の甲を目の下に宛てがい、グシグシと擦るジエスチャーをしてみせると、美鈴にニンマリとした笑みを見せる悪戯な吸血鬼。

「膝抱えてたよ、早く行ってあげたら？」

「ワインカーヴ貯蔵庫にいらっしやるようです、声だけ聞こえたのでそのままにして来ましたが、お連れしたほうがよろしかったのでしょうか？」

「やっぱりあそこですか、ありがとうございます。あ、御嬢様を主寝室にお連れしたんですが、カーテンを締めたか忘れてしまつて……良ければ確認しにいつて頂けませんか？」

構いませんという返答が話されると、争いで破れ赤い髪が見える帽子を脱ぐとペコリと一礼し、そのままアイギス達に背を向けて歩いていく美鈴。

妖怪の割りに礼儀正しい武人、品行方正な美鈴が自身で確認には行

かずに他者に願う事など殆ど無かったが、探し人が見つかってそれなりに気が急いでいるらしい。慌てているというよりも、早くあやしてやりたいといった感情が見て取れる足の早さでその場を後にした。歩き目指す場所は地下、正確には半地下というくらいの深さだろうか。

大図書館へと続く下り階段を少し降り、途中にある木造の扉を静かに開けると、何処からか鼻をすする音が聞こえる。

「また泣いてる、ここに逃げこむのも飽きないですねえ」

悩みもせずにカーヴの奥へと進んでいくと、奥の小さなサイドテーブルで突っ伏す給仕服姿を見つけた。

幼い頃、仕事や武術指南で叱っては時を止められ逃げられて、その度にここに来て同じようにテーブルを抱えていたなど、多少育っても変わりもしない人間に微笑みかける体術の師匠。

「泣いてなんか……」

テーブルから顔は上げるが、面と向かって話はしない咲夜。

エプロンからハンカチを取り出して、ゴソゴソと顔を雑に拭う。

化粧などしていない、する必要もないくらいに綺麗な肌だったが、今は僅かに赤くなっていた。慕う美鈴に頭を撫でられてヨシヨシと、小さな子どもをあやすような事をされてしまったせいだ。

「もう子供じゃないんだから、やめてよ」

「いくつになりましたっけ？ 100歳？ 200歳？」

「妖怪じゃないんだからそんなに……」

「私は妖怪なので。それくらいの年でも子供な妖怪はいっぱいいますよ？ その代表が近くにいますじゃないですか、だからいいんですよ、偶には」

負けて悔しい時くらい、そうは言わずに偶にと濁す。

美鈴の手がヨシヨシからポンポンへと触れ方が変わると、テーブルに押し付けていた拳骨を開いて代わりに華人服の袖を握りこむ人間の少女。

キュツと握って自身の顔へと当て押し付ける。

偶にはいいと言われたからか、最近はあまり見せなくなった甘え姿



を見せて美鈴の袖を少しずつ濡らしていく。

他の誰かの前では瀟洒な態度で望み続けている従者、十六夜咲夜がこうまで甘えるのは屋敷の中だけでも美鈴だけ、可愛い相手に頼られ甘えられて悪くないと感じニコニコと破顔する師匠役。

あの方も吸血鬼姉妹に対してこんな気持ちでいるのかな？

余計な事をしてみたけれど気がつくかな？

断られていたら少しまずかったかもな？

と、泣く咲夜を静かにあやししながら薄暗いカーブの天井を見上げた。

くメイドすすり泣きく

少し時間が戻って、廊下の角を曲がり消えた美鈴の背を見ていた二人。

静かに急いで進んでいった門番を見て二人で目を見合っていた。

身長差のある二人の小さい方は、本来一番に心配されなければならぬ主。

今この場にいるのが屋敷の主である姉であったなら、立場が云々なんて文句を門番に言っていたかもしれないが妹はその辺りは寛容、というかほとんど気にしていない。

気にしているのは立ち振舞よりも感情のようで、心配症な門番が少し可笑しく、同時に心配されるメイドが少し羨ましくなり、隣にいる黒羊に飛びついた。

「ねえアイギス？」

「なんででしょうか？」

「私が泣いたら心配？」

フランドールの悪戯心がジェスチャーから問掛けへと変わる。

幻想郷の魔素に当てられて、爆ぜる感情を表に出してしまった夜も気がつけば現れて、血塗れとなってもどうにかしてくれたアイギス。

それ以前の外での暮らしでも、屋敷の守り手であったり見てくれな父に変わって保護者役まで引き受けていた黒羊、今までの態度から聞かずともわかるような事を先ほどの笑顔で問いかける。

「フランドール御嬢様が泣き出してしまいそうな時には、出来るだけ

近くにいたつもりですが……それでは伝わりませんか？」

くつつく妹の笑みに、少しだけ表情を崩すアイギス。

首に手を回してダラっとぶら下がるようにいるフランドールの尻を片手で持ち上げ、いつもよく見る立ち姿で歩き、話している。

最初はただの鼻息客の娘達としか見ていなかった。

愛想を振り撒き見知っておけば後に良い客となる、そんな雑多な考えで姉が物心付く前から屋敷を訪れ語らい近寄っていたが、妹が生まれるとその算段はまるっと潰れた。

誕生とともに母を壊し、その影響と姿で父を壊した妹。

能力を体現したように周囲を破壊し始めた妹、その誕生とともに屋敷との関わり方を変えてきたアイギス。商人から盾へ、盾から今のような保護者役へと変わっていき、羊の悪魔が思い描いていた繋がり方とは別の関わり方で今に繋がっている。

敢えて妹にかけて述べれば、関わり方を壊され続けてきた、そういうえるのかもしれない。

「わかんない、ねえ、心配する？」

「酷く心配すると思いますね、ですからそうならないようになさって下さいまし」

珍しく素直に言い切ったと目を丸くするフランドール。

自分から問掛けておいて驚きを見せるとはなんとも抜けた事だが、これくらい抜けた雰囲気のほうが今のフランドールには似合っている、そう感じて窘めもせずに笑むだけのアイギス。

壊すのはいつでも出来る、ただ壊してしまえばそれでいい。

そうはせず、色々な物を見て感じて、今までは見せなかった、見られなかった表情が増えていくことを喜ばしいと考えていた。

幸い次の目標も見えている。

目を丸くした後表情を丸く、朗らかな顔で見つめてくるフランドールの片手に見える無地のスペルカード、これが上手く使えるようになればもつといい表情が見られるようになる。

上手く使える保証などないのにそれでも確信を得るアイギスが、その確信を事実とするために眠りについたレミリアの部屋の前で立ち

止まり、ノックをする……前に妹が勝手に扉を開いた。

「お姉様寝てるの？ 自分だけ楽しく遊んで疲れた？」

吸血鬼の眠る昼間、寝ていて当然なのだが妹は何故か元気。

手加減の練習で一度燃え尽きて変な時間に眠ったせいとか、太陽が登り切った今の時間でも眠そうな素振りは見られずに、姉が眠るベッドへとダイブしていく。

止まり木代わりになっていたアイギスがフランドールに続いて入室する、眠る姉とはしゃぐ妹を眺めてから部屋の奥を見ると、確かに開いていたカーテン。

部屋の端の一枚だけが中途半端に開いていて、日が昇ってもレミリアの布団に日が差すことはない程度に開けられていた。

「別に？でも構いませんのに」

「なんか言った？」

わざとらしく垂れ下がるタッセルを見て、締め忘れたのではなくわざと開けたなど、含み笑いを見せるアイギス。余計な気を回さなくとも今回はすぐにいなくなったりはしない。

むしろ異変を起こし、見事にやりきったレミリアを褒めてから住まいに帰るつもりだったのにと、美鈴の下手な気遣いを笑う。

「何笑ってるの？」

「なんでもありませんよ、あまり騒がれると起こしてしまいます、お疲れでしょうから少し静かに……」

「イヤー！ 除け者にしたお姉様コイツなんて起きたらいいの！」

口汚く姉をコイツ呼ばわり。

普段ならそんな言い方はと窘めれる、それがわかりながら覚悟して言ったフランドールだったがアイギスからは叱りの言葉は飛んでこない。

それどころか逆に、そういった考えならば良いと目で語り始めた。

異変のついては褒めるつもりだがフランドールの扱いに対しては思う所があったらしい黒羊、以前は何も言わなかった為に妹の逆鱗に触れた姉、今回は言うだけ言ってお預けという形でフランドールを悲しませたレミリアを少しだけ叱る気があったようだ。

紅魔館の主としたは賞賛し、姉としては叱責する。

一人で飴と鞭をこなすつもりだったようだが、フランドールが自分から動きを見せたため今回はフランドールに全てを任せる気になったらしい。

異変が終わり静寂が帰ってきた幻想郷だったが、異変の元凶である紅魔館は、まだまだ騒ぎが収まらなかった。

## 第四十一話 出る姉、待つ妹

天氣の荒れやすい夏場らしく雨降りの空。

それを眺める者は二人。

一人は幼い吸血鬼。

雨が降り始める前に外出した為、問題なく屋敷を抜け出る事が出来た者。

もう一人は背の高い悪魔。

振る雨を眺めながら日傘を差している。

出かける体で外に出た二人がしばし景色を眺めてから、雨空とは言えない幻想郷の空を飛び始めた、音もなく静かに振り続ける霧雨に濡れていく屋敷を背に向かうは神社。

2週間ほど前に幻想郷中を覆った赤い霧、紛うことなき異変となつたアレを収めた巫女が住まう神社へと、粒の細かい雨を背にゆつくりと移動し始めていた。

飛ぶ二人の影が濃く見えるくらいに日差しが強い、だというのに気にせず我先へと向かう吸血鬼、レミリア・スカーレット。

その表情は季節が移つたように明るい。

が、同時に夏らしく荒れているようにも見えた。

「大丈夫……よね？ 練習したし、咲夜も残しているし……ああ、でも……」

フワフワと飛びソワソワとするレミリア。

大きな期待を背中側に向けながら同時に不安も発している、目的地へと向かつて飛びながら偶に振り返って、残してきた者を思う。

「気になるのなら屋敷に残ればよろしかったのです、外出までしなくともよろしかったのでは？」

「いいのよ、私がいけない方があの子の好きに出来るでしょ？」

「いらしても好きにされていると感じますが、レミリア御嬢様がそう仰るならその通りに。それよりも何故私を？ 十六夜様ではなくてよろしかったのですか？」

見返り背面飛行をしながらの会話。

日光の苦手なレミリアが昼間から出かける理由は妹、フランドール・スカーレットの為の物であった。

「咲夜にはもしもの場合の保険になってもらったのよ、あの子に時間が壊せるのかわからないけれど、少なくとも止まった時間の中では動けないと聞いているわ」

「なるほど、では今日の私は十六夜様に代わる鞆持ちでしたか」

「代わりじゃないわ、あの子は私の付き人だけど今のアイギスはスキマのお付きでしょ？　ここで帰せば次はいつ来るのかわからないし、またいなくなられる前にデートでもと思っただけよ」

「その事ですか。お話してりませんでした、既に契約期間は満了しております、今の私は八雲の使いではございませんよ？」

「そうなの？　と振り返るレミリアが付き人代わりのアイギスにトントンとぶつかり見上げる。

顔を伺いつつ触れてきた幼子の体を支え手を取ると、レミリアの身体を不意に抱えるアイギス。

「ですのでお願いさえあればいつでも駆けつけます……しかし嬉しいですね、レミリア御嬢様から逢瀬のお誘いを受けるとは」

抱き上げた幼子に笑みを見せ、嬉しさも見せる悪魔。

手を取られ抱えられ、表情にクエスチョンマークを浮かべたレミリアだったが、過去そうされていたように抱き上げられると少し騒ぎ出す。

「ちよつと……恥ずかしいんだけど」

これが話題に出ていた妹ならば素直に抱きついてくるが、主としてのプライドを得た吸血鬼は少しだけ気恥ずかしいらしい。

握られた手をほんの少しだけ振るい、抱きとめられた体も揺するが、その程度では解けない拘束。どちらも強い力で縛られているわけではない、ただ態度で恥ずかしいと伝えたかったレミリアだったが、その姿を見られアイギスに微笑まれた。

「レミリア御嬢様から誘ってくださったのに、何を恥ずかしがられるのです？　見ている者もおりませんし、偶のデートならばこれくらい良いではありませんか」

懷で揺れるレミリアの体を抑えるよう、アイギスが少し強めに抱き上げる。

レミリアが余計な仕草をしなければただ付いて来るだけだったろうに、変に気構えて見せるから完全にかかわれていた。

それでも悪い気はしない吸血鬼。

家督を継がされてからは不遜であれ。

高慢な夜の主たれ。

と、厳しい目ばかり見られていたが、父が存命だった頃、幼い頃は今のように抱き抱えられていた事もあるし、それを好ましいと感じていた事ある。

昔は素直に喜べたのに、何故今恥ずかしいのか？

考えながら少しだけの羞恥心を見せたが離されない為、もういいやと開きなおる。

「抱き抱えられるなんて、いつ以来なのか覚えてないわ」

アイギスの言う通り誰も見てはいないし、偶にはと少し甘えを見せた、振り解く体ていで揺すった身体をアイギスの肢体ていに添えるようにくつつける。

「御嬢様方が転居されてきたあの晩以来ですね、さして昔でもないはずですが？」

そうだつくと顔に書くレミリアに、そうですと返事述べて目まで瞑って微笑むアイギス。

瞳を閉じて思い出すのはあの夜の事。

今のように吸血鬼を抱き、紫には渡さないと宣言した夜。

あの晩は意識なく静かに抱かれてくれたのに、今日は随分と忙しい。

あの晩は脅されただけのだったような、と難しい顔や考える顔へと変えて悩んでいるレミリアを見つめ、左手に握る日傘を首と肩で挟みわざと日陰の部分を減らしていく。

ほんの少しだけ日が当たり、レミリアの翼から焦げる煙が立つと、カッと照る白い日差しから逃げるように、減らされた影を求めて幼い体をねじ込んだ。

少なくなつた影部分となつているアイギスの右肩へ、頭をグリグリと押し付け、いきなり何をするのかと騒ぐ日光嫌い。

「焦げたわ……今の、わざとでしょ?」

「仰る通り、故意的なものです、何か?」

キツと見上げるレミリアに瀟洒な笑みでそう返す黒羊。

窘められてばかりの相手を窘められる絶好の機会を得た、そう感じたレミリアがわざとだと突いてみたが、言う通りだと返されてしまい繋がる言葉を吐けなくなつてしまった。

静かに顔を見上げるだけとなつた吸血鬼、その臀部を右腕に乗せクツと持ち上げ寄せる日除け役の悪魔が更なる悪戯をした。

まだ足りないと言ふ傘をズラし、更に影を小さくして顔を見る。

またやられると察したレミリアが眉尻から眉根へと上げる位置を変え、空いていた両手をアイギスの首に回す、そこまでしてようやく影に収まる事が出来た。

「最初から今のようになさつて下されば、つまらない悪戯など致しませんのに」

妹の姿と瓜二つに見えるようになると悪戯を止めた黒羊。

アイギスの狙い通りの形になってから日傘の角度を戻して影を広げる、けれど広げた影にレミリアを離すことはなく、寧ろ腕の力は強く硬くなった。

口で言つて甘えてこない相手に実力行使で甘えさせた不器用な保護者役が、我儘な吸血鬼の上に行く私の強さを見せると、諦めた吸血鬼が昔の姿を取り戻し話す。

「……だつて今更な感じがするじゃない、屋敷に居た時もいつもフランの事ばかりだったし……騒ぎの時にも見てくれなかつたし」

押し付けた頭をパイと左に、そっぽを向いて話す吸血鬼。

赤い霧の異変、巷では紅霧異変などと呼ばれるようになったあの時も、レミリアの側にはおらずフランドールの近くにだけいたアイギス。

騒ぎを起こして見事にやりきつた後は賞賛してくれた黒羊だったが、紅魔館内にいながらレミリアの晴れ姿は見てくれていなかった



…結構頑張ったのに見られなかった、屋敷の主はその事がご不満のようだ。今度はムスツと、いささか頬を膨らませて睨む幼子。

住まう屋敷の中ではあまり見せない子供の表情で睨んでいるが、その視線は全く通じていない、フツツと笑い痛くも痒くもないと示すアイギス。

笑われた事が不服だと更に頬を膨らませるレミリアだったが、アイギスの背中越しに見えた屋敷周辺の光景、霧のような雨だったのが少し雨脚が強くなったのが見えると、ここで言い負かされている場合ではないと気がついた。

「もうなんでもいいわ、さっさと行きましょ、フランに癩癩を起こさせようで……それはイヤ！」

腕の中イヤと騒ぐ我儘なコウモリ。

姿はそれぞれ父と母に似ていて姉妹ではあまり似ていないが、抱き上げた際の重さや物言い、見上げてくる角度までそっくりだとアイギスが気付く。

やはり姉妹か、血筋は争えないと古くからこの一族を知る悪魔が笑って話す。

「畏まりました。では急ぎますので、このまま向かうと致しましょう」  
急ぐつもりで畳んでいた翼を開こうとしたレミリアだったが、その白い皮膜が広がる前にギュツと抱かれてしまう。

誰にも見られていないから素直に腕の中にいられた不遜な夜の王。それだというのにこのまま向かうと、抱き上げられたまま神社を訪れると、離してくれない悪魔にそう言われ強かに焦り始める。

離せ降ろしてと騒いでいるが、まるで聞こえていないように無視して空を進むアイギス。

腕の中でこう騒ぐのも懐かしいと、昔の姿を思い出しながら部分的に降る雨を背に快晴の中、東へと飛んだ。

く御嬢様搬送中く

東の端を目に教える大きな鳥居が二人の視界に入る。

幻想郷と外の世界の間に建つという神社。

異変時の出会いでは不遜な化け物を演じてみせた相手に抱かれた

ままの姿を見られる、アイギスのことだからこのまま境内まで真っ直ぐに飛ばれる：抱っこされて来るなんて、そんな風に笑われる未来を予見したレミリアが致し方無いと覚悟を決めた。

が、読んだ未来は訪れなかった。

鳥居が見えると神社内に向かわずに、神社の参道、長めに続く石階段の途中に降り立つ黒羊。

地に降りるとレミリアも降ろされた。

「ここから先はお一人で」

「一緒に行かないの？」

久しぶりに見るアイギスの頭頂部、頭を垂れて先へは一人で行けと話すアイギスの頭にレミリアが疑問を投げかけた。

ここまで一緒に来ていながら顔を出さないのはなぜ？

八雲の使いとして過ごしていた頃はここの巫女達とも顔合わせをしていたはず、先代や先々代とはスキマを通して知り合っていたアイギスが断る理由、それがレミリアにはわからなかった。

「楽しいデートはお終いです、他の女と会うのなら私はきつと邪魔になる、ですのでここでお暇致します：：またそのうちに、レミリア御嬢様」

反論は聞かず振り返り、カツカツと鳴るハイヒールがレミリアから離れていく。

石段をある程度下ると立ち止まるアイギス、瞳を瞑って聞き耳を立てると背後から聞こえたバサツという翼の音が立てた耳に届く。

小さくなり次第に消えた羽ばたく音を聞き届けた後、しばしその場で立ち止まり、空を見た。

「いつも妹君の為に動いているのは私だけではないでしょうに、姉妹愛が強すぎるのも困りモノですね：：そんなところが良いところでもあるのですが、しかし久しぶりでした」

見上げる空から少しだけ視線を傾ける。

視線の先は自身の右肩、つい先程まで抱き上げていた吸血鬼の姉の体温が残る辺り。

いつも『フラン』の為と言ってきた姉の温もりを感じつつ考える。

『フラン』ではなく『私達』の為、そう言われていたら己はどんな風に感じたのか？

素直に嬉しかったのか？

昔のように、突き放し不器用に否定したのか？

今なら前者かもしれないなど、右肩を少し撫でてから、音のしなくなつた鳥居の方向を振り向く。

「もういいなら送るわ、それとも会っていく？」

姿を見せずに声だけが聞こえる。

聞き慣れた女の声が聞こえると、鳥居とアイギスの合間に瞳が蠢く空間が開く。

「紫様も一緒に会うというのなら会いましょう、ダブルデートに興じるのも悪くはないと……」

「まだ霊夢と顔合わせする気はないわ、それにダブルデートなんて野暮よ？ 初々しい子供でもなし、逢瀬なら私達だけでも良いとは思わなくて？」

言葉を遮られたアイギスがレイム？ と呟く。

傾いだ羊に今代の巫女よと話す紫。

ああ、と納得し紫から視線を鳥居へと移すと、視界の端に雲がほとんど見られない青い空とぽつんと浮かぶ暗雲が見えた。

「あの子、少しは上手になれたのかしら？」

「当たり前どころ次第では死なない、その程度には加減できるようになられましたね」

視線を交えず言葉だけを交わす二人。

方や暗く雨音立つ方向を、もう片方は空を見つめる黒い女を眺め、それぞれが同じ相手の事を考えていた。

「そういえば謝辞も伝えておりませんでした、妹君へのご好意感謝致します」

「私は一緒に見ていただけよ？ 感謝される事などしていないわ」

素直に礼を述べてみたが礼はいらないと突っ返されて、思わずやれやれと小さな息を漏らすアイギスだったが、言われた紫はただ静かに微笑むだけ。

素直に願いを聞き入れなかった友人が素直に礼を述べた、それが面白く感じられてフツとアイギスとは別の息を漏らす。

主従の関係にあった頃は両者同じように笑い、別の事を考えていた二人、その二人が今になって表情を別にして考える事を同じにするようになった。

「感謝を伝え悪戯に笑われるとは、損をした気分ですね」

「あら、まだ儲けたいと言うの？　あまり儲けてしまつてはあの雨雲が荒れてしまうわ、それは困るだろうと思いましたが」

異変の前、地底での話を持ち出す紫。

風が吹けば桶屋が儲かる、それを返して桶屋を儲けさせた紫が再度ソレを引つ掛けて語り、いつの間にか取り出した扇子で雨雲をパタパタと扇ぐ。

扇がれたせではないのだろうが、紫の手の動きに呼応してゴロゴロと音が鳴り始め一筋二筋と雷光が横に奔り始める雲。

魔女の放った雨雲が本気を出し始めると、その雲に向かって飛び立った二人の人間が見られた。

「さて、楽しく遊ぶだけとなつてくれれば良いのですが」

「霊夢は死なないと保証してあげるわ、もう一人はわからないけれどね」

「ではもう一人の少女は私が保証致しましょう」

「あっちの人間を？　ただの道具屋の娘に何かあるのかしら？」

「逃げられてしまった事があるのですよ、足の早さを保証致しましょう」

わざと逃したとスキマから覗いていた紫は知っている、だが否定せずにはゆっくりとした瞬きをして肯定する紫。

形はどうあれアイギスから逃げ切った結果は彼女の自信になる、根拠の無い自信は厄介でやたらに強く、やたらに壊れにくいと精神的な生き物である紫は理解していた。

厄介で後が楽しみな只の人間を作ってくれたものだと思しげに笑む。

「後は若者達だけにして私達は行きましょ？　デート先は何処がいい

かしらね？　そうね、こちらは暑いから少し涼みにでも行きましようか」

紅白と黒白が飛び去った空から更に上を見上げる。

高々とした夏空を眺み、そのまま涼みに行こうと紫が扇子を持つ左手でスキマを開き、右手をアイギスに差し出す。

「涼みに？……顕界の次は冥界、御嬢様方の次は西行寺様でしょうか？　利用するばかりではなく貴女様も動かされた方が宜しいかと存じますよ」

雨雲を眺めていたアイギスが紫の手を取り言葉を返す。

先ほど溜め息を漏らした顔、やれやれという呆れ混じりの笑みで他者を動かしてばかりの友人に語りかけるが、口調や雰囲気からは注意するような感覚は感じられない。

感じられるのは友人同士が楽しい遊びを前に話す雰囲気だけ、次の遊びの話をしようとスキマを開いた友人にアイギスが少しの軽口を吐いただけであった。

「気が向いたら私も遊ぶかもしれないわ……それより早く行きましよう、幽々子も弾幕ごっこを見たいって言うのよ。妹さんの晴れ姿、一緒に見ながらのお酒なんていいと思わない？」

会話の繋がりを断つように、つなぐ手を強かに引いてスキマの中へとアイギスを誘う紫。

断るつもりなら振り払える、それくらいに僅かな力しか込められていない手だったが、なんとなく離さずに、そのまま手を引かれスキマへと進んでいく黒羊。

幻想郷へ迎え入れられた際には、仕事の依頼という形で誘われただけ。

少しの好奇心と少しの腹の足しの為に受けた仕事……だったというのに、今では手をとつてもいいかなと思うようになった羊の悪魔。

小腹が空く事も多いけれど、今の暮らしも悪くはないと、着いた枯山水の庭で感じていた。

く春を想うく

## 第四十二話 春を詠う

綺麗に整えられた御影石の欠片たち。

揺蕩う湖面を描いたようにランダムながらも画一性の感じられる地面。

それを眺める位置取りで並んで座る三色の妖怪。

左から順に高貴さや妖艶さを現す紫色の金髪美人、その隣には淡い風合いと少しの冷たさが見られる水色の和服美女、最後の右端には一部鮮烈な赤が見える黒い麗人。

色合いも雰囲気も、種族も違えど互いに仲の良い友人達が整えられた枯山水を眺め、和やかに話をしていた。

会話の内容はつい先程まで見ていた少女達のお戯れ。

綺麗な宝石羽を輝かせ、甘いキャンディーのような弾幕を放ったり、揺らめく炎のような筋の太いレーザーを横薙ぎにしていた吸血鬼と、それに向かつて破魔の弾幕と炎に負けない魔力の光線を吐き出していた人間の少女達。

どちらも一歩も引かずに楽しそうに。

場合によつては死ぬかもしれないというのに、三者とも恐れを見せずに色取り取りの弾幕を放ってはキャツキヤと屋敷の中で戯れていた光景を話していた。

「感想は？」

「甘そうな弾幕だったわね」

左の美人が問いかける。

紅白と黒白二人のコンビが勝ちを収めた弾幕ごっこ。

それを写していたスキマを閉じ平手を見せてどうだったか促すと、華麗な遊びだと聞かされていた弾幕ごっこを見たいと話していた、真ん中の美女が感想を述べた。

「甘くはないかと、痛いだけでしたね」

「そうなの？ それは刺激的だわ」

話された感想に右端の麗人が物言いを付けた。自身が浴びた経験から甘さはない、相手を倒すために放った通りきちんと痛いだけだったと伝える。

けれどそれも受け流された、刺激的だと口にしてたおやかな笑みを浮かべる。

フワフワと捉えにくい態度で両端の友人達と語らう白玉楼の主、西行寺幽々子。

「刺激的ねえ、それだけなのかしら？　我関せずといった風に見えるのだけでも」

このままでは話が進まない、そう感じた左端、八雲紫が聞く。

浮世から離れて久しい幽々子に見せた顕界で流行らそうとしている弾幕ごっこ。

紅魔館の面々が上手く幻想郷を脅かしてくれたお陰で、山の天狗や河童達など、動きの悪い古株連中まで少し興味を示した此度の遊戯。

華麗で派手なこの遊びを同じく古い友人はどう感じたのか？

はぐらかすような感想ではなく、真面目な意見として聞いてみたいようだ。

「そうよ、我関せずだわ。だって私は関係ないもの、お誘いだってなかったし今のも見せてと言わないと見せてくれなかったのでしょうか？」

クスリと笑んでからプイと顔を逸らす幽々子。

紫からは見えない右側の麗人、アイギス側へと顔を向けると、そのままペロツと舌を出し少しだけおどけてみせた、楽しそうな遊びだというのに最初に私のところへ話を持ってこなかった。

冥界の管理という大事な仕事がある幽々子だったが、60年周期の花の異変でもなければそれほど忙しくなる事もない、寧ろ暇な時間が多く遊びに飢えている。

それを知っていながら遊びの誘いをしてこなかった親友にほんの少しだけ意地悪をしたらしい、茶目っ気たっぷりな亡霊姫。

「悪かったとは思っているのよ？　でも誘えなかった理由というのもあるのよ……」

表情を隠された紫だが、これがただの悪戯だというのも長い付き合いから感じ取っていた。

そして長い付き合いだからこそ最初に誘えなかったと、二人に聞こえないくらいに微かな声量でポツリと、唇をわずかに動かして何かを言った事だけ分かるように話していく。幽々子の後頭部から視線を動かして見つめる先を変えたスキマ妖怪、その目には枯れたように見える大きな桜の木。

「あの枯れ木が何か？」

「西行妖がどうしたの？」

「なんでもありませんわ、それよりもやってみたくなかった？ お試しに私とやってみる？」

視線に気づいたアイギスが視界に映る枯れかけた桜を尋ねると、その視線を追った幽々子も同様に問掛けたが、欲しい答えは述べられない。

返ってきたのは紫らしくない雑なはぐらかし方。

あからさまな逸らし方で幽々子の興味を別の方向へと動かそうとし始める。

「紫と？……今はまだいいわ」

「あら、刺激的な遊びは嫌いだった？」

「草案を考えた妖怪の賢者様とやっても勝てないもの、やるならきちんと教わってから楽しみたいわ」

話がズラされた、緩い表情をしながらも一つの世界を任されている白玉楼の主がその事に気がつかないわけではない、けれどズラされた部分の修正をしようとはせずに紫の話した事にだけ返答をしていく。思惑があって話の筋をズラすなら認識力の境界を弄んででも動かす紫、誰にも気が付かれずに水面下で事を成す賢者がわざとらしく話を逸らすのは、本当に聞かれたくない事だというのも長い付き合いから理解しているようだ。

二人のやり取りを見ていたアイギスだけが何やら言いたそうだが素振りだったが、話題の中心にいた幽々子がそれでいいのならと、余計な事は言わずに枯れた桜の木を眺めるだけで過ごしていた。



場の空気を気にせず猛進する事が多いが、読む事も一応出来る年配の悪魔。

「ではゆつくりと練習しましょう、スペルカードも考えなくてはね」  
「一枚は考えてあるのよ、カードにそれらしい事を書いておくのよね？」

いつの間に、と呟く紫に誘われなかったから暇だったのと再度文句を放って笑う幽々子。

クスッと声を漏らしてから、考えたという言葉を謳う。

——ほとけには 桜の花をたてまつれ 我が後の世を 人とぶらはば——

私がこの世から去ってしまったならば、その時には桜の花でも備えてください。

もし私の死後も思い、弔ってくれる人がいるというならば。

そんな意味合いが読み取れる歌。

枯れかけた桜を眺める屋敷に住む幽々子、彼女が自身の持ち得る『死を操る程度の能力』にかけて読み上げたある歌人の歌。昔の歌人が詠んだ歌を口ずさみ、悪くないでしょうと笑んだまま、桃色の髪を揺らして紫に感想を尋ねる幽々子だったが、問われた紫はほんの一瞬押し黙ってから、いい歌ねと返していた。

誰がどう見ても何かがあると分かる素振りだが、幽々子はこれも気に留めないようだった。

そんな姿を晒すなどこのスキマ妖怪らしくないのだが、敢えてそれは見ないと知らせるように動きを見せた幽々子。素直に褒められて嬉しくなったのか、庭先でこんな演出はどうかしらと、背に大きな扇子を背負って華やかに輝かせた。紫と幽々子二人が揃って持つモノ、それと同じ柄の扇を反魂の蝶で形取る。

「美しい演出だと感じます、そうは見えませんか？ 紫様？」

「・・・そうね、良い案だと思いますわ、形だけではなく次は弾幕も考えないと・・・」

反応のない、出来なかつた紫にアイギスが助け舟を出す。

内情を知らず、聞こうともしない黒羊に問われた事で少し余裕が生

まれたのか、幽々子の背で輝く扇と同じ物をパチンと開き表情を隠し、いつもの姿を取り戻した。

見慣れた姿を二人に見せると誰かのように指を鳴らす、音が響くとスキマが開きそこから二匹の妖獣が現れた、金色に輝き揺れる九尾とその隣に黒黒とした二本の尾を持つ黒猫が姿を見せる。

「二人共、幽々子の練習に付き合っただけで」

「心得ました、まずは私から。形や加減に慣れましたら橙にも行わせましょう」

両手を組んだいつもの姿勢で深々と礼をして紫と幽々子の二人に話す、八雲の忠実なる式。

ふわりと浮かびいつでもどうぞと目を輝かせると、幽々子が藍を追うように空中に舞った、二人を見上げその後紫とアイギスの二人をチラリと見た橙という黒猫。

藍が見つけた藍の式、紫から見れば式の式という少しおかしな立場だが：：かわいい藍が見つけた者なら何も言うまいと、こちらに来るようにとポンポンと黒い膝を叩く。

叩かれた黒い膝の持ち主も一瞬紫を見た後で、同じように膝を叩いた。

以前に住んでいたマヨヒガの新しい住人だと藍からは聞いている、同じ天井を見上げる者なら取り立てて拒否する理由もない。

胡散臭い笑顔と瀟洒な笑顔の二人が促すと、弾幕を放ち始めた藍を見てからその膝へと向かって歩み始めた。

く反魂蝶飛翔中く

白玉楼の枯れた庭で黄泉路へと誘う蝶が舞う。  
放ったのは言わずもがな。

淡い桃色や霞む水色の蝶達、八雲の式達と行った数度の弾幕ごっこでその扱いにはすっかりと慣れたこの主。初めての練習から暫くの時が流れ、顕界では寒さが厳しくなってきた季節だがこの冥界では季節の移り変わりは然程関係ない。

年間通して変化が見られない気温に気候、まるでこの主を季節にしたように変わらない、動きの見られない冥界の景色、弾幕ごっこに

慣れすっかりと手練となった今の幽々子もそれに習い変わらずつたりとしていた。

この従者から見る限りいつでも遊びに混ざれるくらいとなつてはいたが、八雲の者達が帰った後でも、何度かこの従者と戯れただけでそれ以上をしようとはしない、縁側から腰掛けて景色を眺むだけの亡霊の姫。毎日が暇だと語り、それを理由に紫にゴネて見せたはずがそれでも動かないなど……鍛錬や研鑽した力を試してみたいとは思わないのだろうか？

お暇なら何かされればいいのに、弾幕ごつこという異変<sup>遊び</sup>の為のルールもあるのだし……

そう考える者がこの屋敷の庭先で枝葉を揺らしている。

動かない主の事を考えながらパチンパチンと、祖父が使っていた剪定鋏を使い庭木の手入れをする少女。人間の年齢に換算すれば60歳ほどになり、その見た目も幼さよりも可憐さや凛々しさが同居するようになってきた半人半霊が庭先で一人刃物を握っている。

「試してみたくならないのかな？」

パチンパチンと枝葉を落とす少女が、綺麗に整いつつある庭木を会話相手に疑問混じりの声で語る。祖父から受け継いだ庭師という仕事をこなしつつ、別の事を考えるのは魂魄妖夢。

十数年前に唐突に消えた祖父、魂魄妖忌が残した二振りの刀を背に担ぎ、その手にも残した刃物を持って読めない主の心を考えていた。

「妖夢、春を集めましょ」

悩み事をしている妖夢の背に不意にかけられる主からの言葉。

今の今まで考えていた主の心が妖夢に伝わったが、言葉の意味合い通りには伝わらなかつたようで、何を仰ったのかと再確認するように振り向いた妖夢。

「へ？ 今なんと？」

「春を集める、そう言ったのよ」

「……春告精でも捕まえてくればいいのでしょうか？」

また思いつきで突拍子もない事を言い出した、そんな事が読み取れる目で振り返る妖夢だったが、主の顔を見て少しだけ頭に浮かんでい

た呆れは消え失せた。

半人半霊の瞳に映る姿形は何も変わらない幽々子であったが、纏う雰囲気だけはいつも見せてくれていた。穏やかで好ましい顔つきではなくなっていた。生死の範疇からはずれて幾久しい亡霊姫、だというのは今にも消えてしまいそうな、儂げで臆気な、桜の花びらが散っては飛んでいくような羸弱るいじやくさが見て取れた。

「あの妖精が姿を見せるのはまだ先でしょう？ それにあの子が春を告げてくれてもあの桜は咲かないわ」

儂げな笑みで扇を開きパタパタと扇ぐ。

扇ぐ先には現した小さな蝶が数匹、ひらひらと飛んでは羽の末端から消えていく。

口調も声色も普段通りで何も変わったようには見られない、それなのに何故いなくなってしまうなどと感じたのか？

今まで支えてきた中で見たことがない主人の雰囲気を感じ取り、真剣な事を話されていると感じ取った庭師の剣士が一度深く目を瞑って開く。

「わかりました、全身全霊を以って春の回収に回ります。祖父から受け継いだこの楼観剣に、切れぬものなど……」

「まだいいのよ？ 冬を迎え始めた今じや春なんてどこにもないわ、もう少し季節が春に寄ってから始めましょう……紫もゆつくりと、そう言っていたじゃない」

真剣な主の期待に応えようと心を入れ替え、戦いの場へと向かう姿勢を見せて妖夢が凜として問掛けたが、その口上は途中で挟まれ止められた。クスリと笑ってから、今し方まで纏い見せていた儂さを消して、まだ動くには早いと背負う真剣を構えかけていた妖夢を諫める幽々子。

中途半端なところで止められて、やり場の無くなったやる気の行き先を何処へ向かわせたらいいのか悩むように俯く庭師、プルプルとした始めた可愛らしい従者を眺め、ウフフと声に出した微笑む姫様。飄々とした態度を取り戻した後で一瞬だけ枯れかけた桜を見ると、妖夢に気が付かれないよう目を細め、紫が気にしたあの桜になにがあるのか

を考え始めていた。

胡散臭い友人は何も話してくれないし、一緒にいた比較的真面目な友人も、そこには触れないような素振りを見せた。二人だけ異変という楽しい遊びに首を突っ込んで、私だけ除け者。アイギスの方はあの時の紫の姿からそうしただけだと理解しているが、紫は何を思っている態度を見せたのだろうか？

考えてもわからない事を悩み、その末に一つの答えとして導き出したのが先ほどの春。友人が気にしていたあれを咲かせてみれば、わからないことがわかるかもしれない……曖昧な事ばかり話して本質はあまり語らない親友に、ほんの少しの意地悪をしてあげよう。

亡霊として過ごし始めてから、久しく覚えていなかったハッキリとした目的。それが久しぶりに出来た事に喜び、まだ咲かぬ桜の並木を眺め、一人だけ春めいたように笑む西行寺のお姫様だった。

## 第四十三話 開花を惟う

赤や黄に色めいた木々を木枯らしが撫でた季節は過ぎて。

静かに吹く北風だけでも冷えを感じられるようになってきた空気。冷たい空気と相まって、辺りに見られる白景色からも寒さが目立つようになり始めた幻想郷。数日前までは雪が降るには温かい気温だったが、今年も姿を見せた冬妖怪が目覚めの一息を地に放つと、その力を受けて白く化粧し始めた幻想の箱庭。

毎年恒例の動き話す寒季が今年も訪れて、正しく冬と呼んでいい気候を迎え始した箱庭の空に、バサバサと黒い外套をはためかせるアイギスがいた。

白玉楼での異変見物以来地底の住まいから出てこなかった彼女が、今日は久々に地上世界の冬空を飛行している。二つの世界の出入口である大穴から静かに現れ、妖怪の山から南へと向かって移動している現在の彼女、今回は友人からの呼び出しに応じて姿を見せていた。「やはり怒られるのでしょうか？」

珍しくハアと、気弱な息を吐く。

見た目夏らしい肌の色から吐かれるのは真逆の白い息。

モヤつと広がり、一瞬だけ顔をぼやけさせるとすぐに消えた。

「投げたわけではないのですが、そう捉えられても致し方なし、か」吐き出した息をすぐに追い抜いて、目的地の方向を見る。

僅かに目を細め眺めているのは、冬らしくない花の香りが流れてくる南の地上。

「争い事にでも繋がれば身体を暖めるのに良い……けれど、そうはならないのでしょね」

僅かに口を開いて小声でこちる。

ふわりと鼻をくすぐり始めた嗅ぎ慣れた香り、偶に自分の衣服からも漂わせている清楚で柔らかい、鈴蘭のような香りを嗅ぎとる。口内と鼻孔から感じ取った香りからは、華々しいモノと同時に好ましい魔力の流れも感じている。深く地に根を張り揺るがない、巨木のような感覚すら覚えられる力強い魔力の流れを身に浴びて、出来ればこれが

発散される流れの方が好ましいと考えるが……今回の呼び出しからは、そうはならないだろうと確信していた。

「愚痴をこぼしていても何も解決致しませんし、向かいますか」

この先で待っている友人の顔を想像しつつ、太陽光を受けて白く輝く花畑へと身体を傾けていく。こちらお見もせず辛辣な物言いでも迎えてくれて、その後はもつと厳しい事を楽しそうな顔で話してくれるのだろうと、飛行速度を幾分早めた。

話の内容が楽しい事かどうかはさておいて。

「さて、今日はどちらにいますのか……」

見つめる先に花畑が見られるようになる、少しの覚悟を示すような独り言を呟いて、花畑の奥へと進んでいくアイギス。匂いも魔力も強く感じられる地へと降り立つと、丘の中央、何もなさそうに見える空間に出入口と見られるゆらぎが現れる。

夢や幻の世界へ続いている、そのように見えるゆらぎへと慣れた調子で歩んでいく黒羊。先に見える湖の中に館を見つけると、ひとりで開いた門戸を潜り、少しだけ立ち止まった。所々が剥がれて見える青いタイル張りの床、その上に佇みアイギスが何かを待つ。数秒ほど待つと、こちらへ来るように誘う道標が現れた。

タイルから浮かんで見える案内代わりの星形の標、それが進む方向は長く続く廊下、館のエントランスから奥へと進むと、廊下の中ほどにある魔法陣を堺に青から赤へと色合いを変える床面。住まう主とは違ってコロコロと表情を変える館内を、先を教えてくれる標の後に沿って高い踵を鳴らしていく。

少し進むと一つの扉を前にして立ち止まったアイギス。扉の奥から漂う、彼女に向けて強く発せられている花の香りを、スンと鼻を鳴らし吸うと、中指で四回ほどドアを叩いてから開いた。

「遅いわ、すぐ来なさいと伝えておいたのに」

少しの家具とカチャリと陶磁器の音を鳴らして迎えてくれるこの主。

猫足の丸テーブルと揃いの椅子に腰を下ろして、足を組んだまま見もせずに放った言葉は遅いという一言。アイギスが共通の友人八雲紫から

『太陽のような女性から呼ばれている』と聞かされたのは、地底世界でも雪がちらつき始めた今朝の事、そして今の時間は正午前といったところ。たかだか数時間で、それも地底の繁華街から訪れてきたにしては早いと思えるが、夢幻の館の主からは遅い動きだと感じられたらしい。

「寄り道もせずに向かってきたのですが、それでも遅いのでしょうか？」

出足からのお叱りを受け、アイギスが予想通りだと苦笑を見せる。開けたままだった扉を閉めて中へと歩み隣に立つ、そのまま次の言葉を待っていると、しなやかな指先でトントンとテーブルをつつく日華の妖かし。

まずは座りなさい、返答はせずに人差し指だけでそう示した。

「遅いわね、何処にいても来いと言われたらすぐに来なさい」

「また無茶を、出入口は妖怪の山にしかありませんのに」

「ないなら作ればいいのよ、掘り返すのも真つ直ぐに向かうのも得意なのだから」

アイギスが隣に座ると配膳される花柄のソーサーとカップ。

空のカップを手に取りながら無茶を言うなど返したアイギスに向かって、紅茶が淹れられたティーポットを見せつけ、無茶ではなく無理を言ってくるチェック柄の少女、風見幽香。

「得手ですがそういう事はあまり……」

「紅魔館ではそうしていたじゃない、距離が違うだけでしょ？ あ  
の姉妹の為には出来て私の為には出来ないって事？」

「あれは……」

「していたはずよね？」

何かを言い返そうとしても、その度に幽香から口を挟まれる。

唇キユとむすんでろくな反論も出来ないでいるアイギス。

他にも何かを言ったようだが返ってくるのは『していたはずよね？』という問い掛けのみ。言葉を返す事を許されない黒羊がむうと、なんとも言えないぼやきを吐くと楽しそうに頬を綻ばせる花の女王。可憐で華々しい笑みを浮かべ、フフツと声を漏らすと満足したよう



で、眉尻を下げ顔から困っているとわかる悪魔に配膳した空のカップに茶を注いだ。

「理不尽だとか、そう言い返してもいいのよ？」

「何もなければそう言いますが、今日の呼び出しは私が悪いと考えますので、なんとも」

「殊勝な事ね、まあいいわ。取り敢えず冷めないうちに」

茶が注がれても香りも味も楽しまずにいたアイギスに、右手の平を見せた幽香が促す言葉を届けられた。茶よりも呼び出しの内容に興味がある客人という名の弄られ役だったが、カップに注がれたもてなしの為の物に視線を落とすと、形はともかく友人からの歓待であれば快く受けようと考えなおしたらしい。

カップを口元へと運ぶ、少し水面が揺れるだけで軽やかで甘い香りが立つ、しばし香りを楽しんで口に含むと甘い香りと甘くない味わいが舌と口内に広がった。

僅かに感じられる渋みや苦味が程よく、味わいのアクセントを楽しむと下げていた眉を戻し唇の端を僅かに上げる、紅茶に頼り地域生まれの雌羊。

「酷く言われると理解しているのに、これがあるのも覚えているから、急な呼び出しでも素直に来てしまうのかもしれないね」

「褒めてもダメよ？　これはこれ、あれはあれだもの。地底に引つ込むのも良いけれど、手入れの仕方くらい仕込んでから引つ込みなさい。あれではあの子達が可愛そうだよ」

アイギスが席に着き、もてなしを受けるとようやく話された今日のお呼び出し理由。

歓待を褒めた相手は見ずに、出窓に飾られた鉢の中で咲き誇る花を眺め語る幽香、何処かで群生していた生き残りの紫色の花を見つめ、可愛そうだとわずかに傾いだ。

花と羊が縁側で並びマヨヒガで眺めていた花。

今ではマヨヒガで見られなくなった花。

あの屋敷の管理人がアイギスから橙に移るまでの間、手入れをする者が誰もおらず、残っているのはそこに見える鉢植えの花と、どこに

あるのかわからない紫の本邸のモノくらいになっていた。

屋敷の持ち主は兎も角、式の方は手入れぐらいするのでは？

そう思えるが、主から『忘れていなければ手入れぐらいしに来るでしょうし、放っておきなさい』と命ぜられ、出来る式が手を出せないでいる間にほとんどが枯れてしまったようだ。植え、手入れをしていた元マヨヒガ住まいの黒羊も忘れていたわけではなく、自分が原因で行う羽目になった地底での復旧工事から手を離せず、気にしながらも手入れ出来ないような状態だったらしい。

「忘れていたり、放置していたというわけでは……いえ、言い逃れは致しません。報いを受けよと仰るのならそのように致しますが？」

物憂げに窓辺を見つめる赤い瞳に、少し黒ずむ赤の目を持つ者から謝罪代わりの提案が言い出される。

二人にすれば好ましい提案。

どちらも地を好み、血を好む者達。

一度始まれば両者ボロボロになり、自身の血液なのか返り血なのかわからないくらいに赤く染まる二人、先ほど幽香の口から次いで出た紅魔館ではじやれ合うだけだった、そしてあの日以降戯れていない。争わず語らうだけで済む日も多くあるアイギスと幽香だったが、両者共に最近では暴れていない。暗然とした顔でいる幽香の機嫌も戻せる良い案で、自身の好ましい流れにもなると読んだアイギスが血生臭い逢瀬をしないかと臭わせる。

「ダメよ、今はそうする気にならないわ」

「何故でしょう？ 我ながら悪くない誘いだと思えるのですが？」

カチャと鳴る幽香の手元。

会話を進めながら飲み干したカップを置いて、互いに好ましいと思えた提案を断る。

まさか断られるとは思わなかったアイギスが素直に疑問を呈する、赤い瞳や身に纏うチエック柄等そここの共通点がある二人、その共通点には手強い相手との争い事という物もある。だというのに、デー卜のお誘いは歯牙にも掛けられずに断られてしまった。

断る理由がわからず角を撫で返答を待つ羊に、空になったカップに

両手を添える花が返答を述べた。

「外は寒いわ、これではすぐに冷めてしまう。それは暖かくなってからにしましょう」

「身体を動かして温まる、というのは……」

「ダメね、温める気にもならないし今日は気分が乗らないのよ。冷え切ってしまったモノって好きじゃないの、それも美味しくなくなったでしょう?」

言いながらアイギスのカップへと視線を落とす幽香。

つい先程まで湛えていた湯気は消え、すっかりと冷め切ってしまった紅茶を見つめられ、撫でていた指先を立てポリポリと掻きはじめるとアイギス。冷めた紅茶を口に含むと香りは閉じていて、温かであった頃に比べると楽しめない、言われた通りの美味しくないモノに変わっているかと理解できたようだ、代わりに強く感じるようになった渋みを味わい瞳を瞑る。

寒さで冷えてしまつて興が乗らないと言つてきた相手、姿は添えたものであるというのに言う事はつれない事だと、瞼の裏で考えて含んだ紅茶を奥へと流した。

「では幽香の話した通り、春先にでも」

「そうね」

「春が待ち遠しいですね」

「そう、ね」

「……約束ですよ?」

「しつこいわね、あまりクドいとそつちの熱まで冷めてしまいそう」

それは困ります、寛雅かんがな面持ちでそう返すアイギス。

ならしつこくしない事、と幽香からの返答が届くと無言で頷き待ち座して街侘びる姿勢を見せた黒羊、普段は誰かの言う事を聞く事などあまりない我儘な悪魔であるが、今回は素直に折れた。ここで食い下がるよりも後にあるお楽しみのはんの少しだけ我慢だと、話の取っ掛かりに使われた妹コウモリを真似るようだが……それでも約束ですよ、と僅かに欲を見せてしまい、しつこい、クドいなどと言われている。

またも苦笑を浮かべたアイギスだったが困り顔ではなかった。  
　　強かに窘められても微笑む事が出来る、それくらいに春先が待ち遠  
　　しいと感じ、窓辺で開く花越しに外を眺めた。

## 第四十四話 座して待ち侘び、立ち奪う

下品な笑いと賑やかな呼び込みが聞こえる。

酒を煽っては笑う者達と、それらを煽って一儲けしようと考えている住人達の声、旧地獄街道のメイン通りに屯する彼らが、地底の喧騒を囃し立てている。

ワイワイと、がやがやと、殴打する音までが時偶混ざり地底の名物街道の音を作っていく。

いつかの誰かの喧嘩が原因で派手に崩れ、後にその誰か達の復旧工事によって蘇った、綺麗に整備された穢れに満ちる地獄街道、今日も今日とて騒がしいと、通りを練り歩く鬼が周囲を眺めて進んでいた。手入れなどしていないのに輝く長い金髪を寒風に揺らして、通りのど真ん中を我が物顔で進む怪力乱神の鬼、空もないのに降る雪も、それを運びながら袖も揺らす冷えた風も気にせず、素肌を晒す肩で風を切り歩んでいた。

通りの左右から声を掛けられても見もせずに一箇所へと進み向かう彼女、目的地は彼女が一日の殆どを過ごしている地底世界の入り口近く、少し高い位置にある地底の酒場である。

他にも何件か酒場や、アルコールを提供する店はある。

が、彼女がいるのは常にここで、酒場と呼ぶのもここだけであった。カランコロンと下駄を鳴らし、空いた右腕から垂れる鎖もチャラチャラと鳴らす彼女がガラツと戸を開けると、何も言っていない店主が視線と会釈だけで挨拶をする。

目が合った店主に右手の指先だけで挨拶を返し、何かを受け取る鬼の女。

客と店員という間柄ながら会話もないというのは不自然だが、彼女がここにいるのが自然になり過ぎていて迎える言葉も訪れた言葉も必要はなくなっていた。

無言のまままで店内の奥座敷、もはや彼女の私室と呼んでもいい部屋へと歩を進め、笑い声が聞こえる辺りまで行くと、何も言わずに閉められた仕切り戸を開けた。

「お、やっと来たね。今日は遅いねえ、勇儀」

「遅くはないかと、私達が早く来過ぎてしまっただけです」

座敷の奥から聞こえていた声の主、その内の一人。

鬼と似た色合いの金髪を店の明かりで光らせる土蜘蛛少女が、既に空いたおちよこ三本を摘んで揺らし、先に飲み始めていると伝える。

そしてもう一人、ヤマメと並んで座る黒羊も軽い会釈をして後から訪れた部屋のヌシ、星熊勇儀を迎えた。

「アイギスの言う通りさね、ヤマメ達が早いのさ。全く二人して、折角のお披露目だつてのに先に飲み始めるやつがあるかい」

並ぶ二人の対面に腰を下ろし、両足を揃えるような科のある座り方をする勇儀。

同時に右手に持っていた瓶も下ろすと、チャポンと水音が瓶の内から鳴った。

「酔うほど飲んじゃあいないよ、なあ、アイギスちゃん？」

「駆け付け三本といったところですのでまだまだ、楽しみもあるとの事です」

座った勇儀に声をかけ、音のした瓶を見る二人。

視線がすぐに移ってしまうと、それも面白くないのか僅かに顔を強張らせる鬼の四天王。

「二人共あたしと飲むって事よりこつちのが楽しみだつてか、折角めかしこんできたつてのにそつちには何もなしかい、ああ？」

「着崩して着るのが勿体無いくらいに上等な物に思えますが、そうされていの方が星熊様らしくて良い、酒気に負けない色香も漂っておりますしお似合いですよ？」

「だつてさ、褒められてよかつたじゃないか」

悪態をつくると視線が勇儀に戻る。

ヤマメは笑つておどけるだけだったが、アイギスの方は素直に感想を述べていた。

派手さはない青の着物だが質は良く手入れもされている、そんな上質な着物を崩して、肩を出し乳房も見えてしまうのではというくらいにはだけさせて着る勇儀。

5寸はありそうな幅の太く赤い帯も前で結っていて、さながら遊女や花魁のような様相だが、それが勇儀には似合うと話し視線も顔ではなく零れそうな胸元に向かっている。

「うむ、アイギスはそれでいい。でもヤマメはダメだ、お預けだね」  
同姓で風呂場でも良く一緒になるケンカ相手。

裸体など互いに見慣れているが着衣だからこそその色香もあると視線で語られて、？も感じられないしこの一言でコイツはまあいいかと、強張る顔を普段のものへと戻した鬼がアイギスを強めに引っ張る。

二対一で座る形が逆になると、一人になったヤマメにお預けだと話して瓶を揺すった。

「はいはい、綺麗綺麗」

「雑だねえ、もっとマシな言い方ってのがあろう？」

「下手な事を言って取って食われるなんて私は簡便だつての、アイギスちゃんは知らないけどさ」

勇儀から瓶へ、瓶からヤマメへと、コロコロと動いていた皆の視線が次はアイギスに向けられる。

酔うほど飲んではいけないというのに下世話な話を振るヤマメ。

喰いたい時に喰って寝たい時に寝る、やりたい事が出来たら好きなた時にそれをやる、自分に正直で、ある意味素直な地底の妖怪を体現するようにそれらしい事を言つてのけると、振られた相手もそれに乗る。

「私は出来れば殿方相手のほうが、その角には興味がない事もないですが」

自身の角を撫でつつ勇儀の角を見つめるアイギス。

着物から溢れる勇儀の生足にも触れ、固く逞しいと体感し知っているソレなら、なんて悪ノリをしてみせると、カコンとアイギスの角に勇儀の角が当てられた、左右に少し揺れる羊の頭。

ボケに対する勇儀からのツツコミが入ると三人が笑い、話の本筋が本題へと向かっていった。

「冗談は後だ、さあさお立ち会い。今度のやつは当たりかハズレか、ど

ちらだろうねえ」

持ち込んできた瓶に勇儀が借りてきた升を突っ込む、店主から預かったものはどうやらこれだったようだ、タポンと音を立てて瓶の中身をすくい上げると少し目を細めソレを睨む。

「見て何かわかるのでしょうか？」

「わかるわけないねえ、いいから早く飲めつての、何格好つけてるんだかね」

店の明かりを反射させてキラキラと光る水面を勇儀が見つめてみると、側でソレを見ている二人が小声で話し始める。

ガヤが煩くなり始めると、少しだけ格好をつけ浸っていた勇儀が、グイツと升を煽り、黙る。

「黙ってないで、なんか言いなよ、ねえ？」

「先程から、なんでもかんでも私に振らないで下さいまし」

雑に話を振るなど言った割に気にする素振りのアイギスを、ヤマメが無言のまま横目で見る。

勇儀程ではないがアイギスも酒好きではある、吸血鬼のお屋敷で長女が生まれた夜にもブランデーを嗜む程度には酒を好む、そんな酒飲みには日本酒も合っていたようで、今日のようにヤマメ達と酒を飲む日も多いようだ。

「それで、味はいかに？」

空になった升と瓶から香る酒精に感化され、黙る勇儀にアイギスが問いかける。

「やっぱり気になるんじゃないか、そんな事を横目で伝えるヤマメをよそにして勇儀の顔色を伺っていくと、瓶と同じ香りを口から吐いて同時に感想も吐いた鬼。」

「悪くないが、物足りん」

「悪くないけど物足りない？ 楽しみにしていた『酒虫』だろ？ 何がダメなのさ？」

味自体はまずくはない、ニカッと嗤う勇儀の表情からも先に述べた感想からもそれはわかる。

だが、普段の豪快さは見られず明るく笑うだけで、それに続くはず



の勇儀らしい快活な言葉は出てこなかった、その姿をヤマメが不思議に思つて問掛けた。

「そうだねえ、角がなくて丸すぎるって感じか。あたしはもつと雑味があつたり、よく言えば複雑な味わいが好みなのさ」

感想よりも少し詳しく話す、そうして勇儀が瓶の中を覗き込む。

瓶の底には髭を生やしたサンシヨウウオのような生き物が静かにいた、酒の中を偶に動いて水面をたわませる生き物、勇儀の同族の言葉を借りれば『手のひらサイズの黒くてヌメヌメした可愛い虫』といった姿。

ヤマメの言つた『酒虫』とはコイツの事で、今日はこの酒虫が作り出した酒のお披露目という名目での宴会であつた。

「養殖物には難しいのかねえ、かといつて鬼の国まで行くのも手間だし。萃香のやつ、あたしの分も捕まえてきてくれないかねえ」

ポツポツとぼやき、升を瓶に突っ込んで、開いたグラスに酒を注ぎ振る舞い始める鬼の頭目。

この地底世界にいるもう一人の鬼の名前を出して、代わりに行つてきてくれないかと呟いている。姿こそ見たことはないが最近頻繁になり始めた宴会、頻度で言えば週に一度はある宴会の席で良く聞く名前をアイギスが呟いた。

「そのスイカ様ですが、どなたなのでしょう？ 度々お名前は耳にしますが」

「その辺にもいるんだろうけど、顔出さないねえ。萃香つてのはもう一人いる鬼の四天王の事さ、こつちが力の勇儀ならあつちは…：幼女つて言えばいいのかね？」

注がれた酒を含みつつ話す二人。

違いないが本人の前では言うな、言うなら酒の感想にしてくれと、升で酒を煽る勇儀がヤマメを窘めるが、文句でも言えば来るんじゃないかなんてヤマメが逃げると一瞬止まり、笑い出した。

「確かに最近見ないねえ、まあ仕方ないか、あれは寒いのが嫌いだからな」

「火い吹くくせに？」

「あれなんで覚えたか知ってるか？ 寒いのがイヤだからだぞ」

閉められた窓の外を見る勇儀とヤマメが、なんだそれとこの場にはいない鬼を笑う。見ている先では雪が舞い、暗く暖かな地底の世界を少しだけ明るく冷たくしている。

カラカラと楽しそうに笑う二人を見て、何かを思いつくアイギス。「来年まで振り続きそうですし、暫くお姿は見られそうにないですね」「お？ なんだい、ただの冬でただの雪だろ？ 何かあるってのかい？」

「雪見て勇儀が笑ったからだろ、不意打ちで冗談言うなよ、アイギスちゃん。一瞬悩んじまったじゃないか」

笑う鬼を見て吐いたアイギスの冗談、例えにされた鬼は気が付かなかったが土蜘蛛はほんの一瞬考えてから、アイギスの肩を叩いて軽く笑った。

笑むヤマメと一緒にアイギスも微笑むが、その顔には冗談でいった事の裏にある物も出ているようだ、雪が止まねば春は来ない……春が来なければ楽しい喧嘩も出来そうにない。

早く暖かな季節になつてほしい。

鬼が笑う姿を眺め、角の取れた酒を飲む悪魔。

自身も角が取れてきていると感じているアイギス、こんな暮らしも悪くはないが、血生臭い空気を好ましいと感じる自分も知っている。我ながら変な感覚だと自身の事を考えていると、開いたグラスに酒を注がれソレもまた飲み干した、飲めば角が取れてしまうのかも……そんな事を考えつつ酒宴の場を楽しむ黒羊の姿を、外から眺める霧がいるとは誰も気が付いていなかった。

く少女飲酒中く

酒虫の生み出す酒を楽しむ地底の皆を習うように、地上よりも高いところに住むお姫様も、少しの酒を嗜み書物を読み開いていた。

白玉楼で過ごし始めてから身についた読書という趣味。

偶に来る友人達と過ごす楽しい時間、ソレ以外で幽々子が楽しいと感じるのは、紫が寄越してくれる本や、屋敷に残された古い書物を読み解いている時間だけだった。

今日もいつもの様に書見に興じていると、ずらりと並ぶ書架の更に奥からから、見た目から古いとわかる書物を見つけた。

ボロボロになった表紙からはこれがなんの書物なのかわからなかったが、立ったまま読み進めていくと、何かを記録したものだと感じられたようだ。

千年以上も前の事が記述されているらしく、言葉遣いや文字遣いも古いものだが、幽々子にはこれがすんなりと読めて、むしろ文字からは暖かな懐かしさのような物すら感じられていた。

弱くなつた紙を切らないように、優しく丁寧に手付きでページを捲つていく西行寺の姫、ある程度まで読み進めるとある文章に強く惹かれた。

——富士見の娘、西行妖満開の時、幽明境を分かつ——

——その魂、白玉楼中で安らむ様、西行妖の花を封印しこれを持つて結界とする——

——願うなら、二度と苦しみを味わうことの無い様、永久に転生することを忘れ……

ここまでは文字として読み取れたが、この先は文字が滲んでしまつていて読み取れない。

一度書き上げた物の上から水を垂らしたように滲む文字、他の書物ははつきりと美しい文字で書かれているのにこれだけが何故？

書を手取る幽々子の脳裏に少しの疑問が浮かんだが、これを書き上げた者は既にいないのだから、考えてもしかたがない事だと思考を切り替え始めた。

悩み顔から淑やかで、僅かに少女らしさが見える笑み。

それは喜ばしい笑みであった。

紫に対しての微かな嫌がらせと楽しいイタズラから始めようと思つた異変。

もう直に始める春を集めるという事。

ただの思いつきだったはずが、この書に書かれた事を鑑みて、異変を起こすための別の理由も出来たと楽しそうに笑つた幽々子。

今までは何故咲かないのか疑問に思うだけだった西行妖。

その理由が封印されているからだを知り、同時に花を咲かせてみればその封印が解けるのではないかと考えたらしい、あの妖怪桜が満開になれば富士見の娘さんが死ぬと記述してあったが……誰ぞ知らない相手が死んだところで幽々子には関係がない。

寧ろ封印を解けば、結界の贅とされた富士見の娘とやらが見られるかもしれない。

新しい楽しみが出来た、白玉楼の書架の前に立つ亡霊の姫が笑み詠う。

——ほとけには 桜の花をたてまつれ 我が後の世を 人とぶらはば——

紫達の前で詠んだ歌、ソレを再度呟いて、たおやかに笑んだ。

## 第四十五話 終わらない冬、続く宴

降り止まない雪が空気も町並みも冷やしていく。

地上世界であれば、シンシンと降り積もる雪の結晶が音を吸収して静かな風景となるところだが、ここは地底の旧地獄、冷えた空気に湯煙が目立つ地獄街道一丁目だ、雪程度で静まる事などそうはない。

今日も今日とて賑やかな地底の町並み。

整えられた街道には楽しいげに肩を組んで歩く強面の鬼や、客引きの為にあざとい声をかけている遊郭勤めの女が並ぶ、一本入れば金を巻き上げる強者と、金品を巻き上げられへたり込む弱者も見られるが、それも常の事で誰一人として気にしていない。いや、気にかけている者はある、正確にはそれを肴に酒を浴びる者がいる、といった感じになるが。

その気にかけている者達がいるのは言わずもがなのいつもの場所、鬼の頭目がたまり場として一つの酒場、こちらの方も、今日も今日とて騒がしくなっていた。

だが、今日は奥座敷からではなく酒場の外。

店舗入口のすぐ横から談笑が聞こえてきている。

店内から引つ張り出された厚い一枚天板のテーブルには、背の高い大きな番傘が立てかけられ、その下から数人の女性の声が発せられていた。集まる者は全員が妖かし、金髪黒髪桃色頭と、白い景色の中でその一角だけがやけに華々しい。

「しっかし今日も冷えるねえ、こう冷えちや酔えそうにないなあ」

口を開いたのは大江山の鬼。

愛用の盃を高く傾け、額から生やす堅強な角を真上に向けて豪快に笑う女、少し話しては楽しそうな声を上げ、ハラハラと降る雪を盃に注がれた酒で受けている星熊勇儀。

暦の上では春、月で言えば卯月も過ぎる頃合いだというのに、未だ降り止まぬ白い結晶を着にして、今日は雪見酒と洒落こんでいる。

「飲んででも飲まれない奴が何言ってるんだ、好き好んで外で飲もうって言い出したのは勇儀だろうに」

次いで語るは土蜘蛛。

笑う度に揺れ動いている、天を衝く鬼の角を眺め話す。

週に一度の頻度で行われていた化け物少女の宴会だったが、先月の終わりくらいからその周期が少し変わったらしく、今ではメンツを変えて5日に一辺は集まるようになっていた。

その宴会に必ずいるのが先の鬼と、この黒谷ヤマメである。

「そう言うなよ、偶にや外もいいもんだらう？」

「そこに文句は言っていないよ、文句を言ったのは冷えるって方さ、卯月も終わるってのにいつまでも雪じゃ花見もできないってこった。なあ、そう思うだろ？」

地底の何処に桜があるのか、それは兎も角としてヤマメが言う通り今は春、それも4月の終わりを迎えていて、後数日もすれば5月に入るといった時期。

だというのに未だ降り続く白い雪。

さすがに長いと、勇儀の一言に乗ったヤマメが、6人掛けのテーブルに両肘をつけて誰かに話を振る。並んで座る勇儀とヤマメが見つめる相手は、彼女達と同じく金の髪を揺らす女とその隣に座る黒髪の女、朗らかに笑むヤマメからなあと振られると二人共何も言い返さず、目線だけを逸らしてみせた。

「なんだい、返答もなしか、つれない女共だねえ」

口を尖らせてケツと地底のアイドルがおどけてみせると、隣の鬼がカラカラと笑う、明るい笑い声が周囲に響くとつれないと評された女達が口を開いた。

「パルスィは兎も角、私は強引に振ってくるのはおやめ下さいと再三申し上げておりますので」

「アイギス一人で逃げないで、私達だけノリが悪いような言い方はやめて」

先に反論し、隣のつれない仲間の一人、水橋パルスィに全てなすりつけようとしたアイギスだったが今回は失敗したらしい、口早に訂正されている。

黒羊を挟んで座るもう一人、おなじくつれない桃色髪の少女はアイ

ギスの物言いを聞いても薄く笑むだけで無言であった。

数カ月前から続く宴会の席、その最初の頃から毎回ヤマメに話を振られ、その度に誰かや何かにそれをなすりつけるようになっていたが、今回のように大概は失敗している。

そんな見慣れた失敗を見ていたヤマメが、笑顔のまま問掛けた。

「これって異変ってやつじゃないのかい？」

「私に聞かれてもお答えできかねますが？」

「仲良しのスキマからなにか聞いていないの？」

「今回は何も。宛自体はなくてもいいですが、こちらから伺って巻き込まれるのも困りますし、正確な所はわかりませんね」

ヤマメには一言返すだけだが、隣に座るパルスイにはちよつとだけ話すアイギス。

毎度話を振ってくる友人は少し雑に、特に詮索せずに疑問だけを聞いてきたもう一人の友人には答えられる範囲で返していく。

何故雪が続くのか？

何故春が来ないのか？

そこまでの理由はわからないが、白玉楼での会話や、博麗神社の階段で八雲紫と話した事から、これが異変だとすれば起こした相手はあの亡霊のお姫様だろうと当たりをつけていた。

そういえば場合によつては自身が動くとも言っていた紫、暗躍してばかりのあの女が動くとはどういう場合なのだろうか？

姿が脳裏に浮かんだ事で、そちらの事を考え始めるアイギスであったが：：振られる手が視界に入ると考えを止めた。

「おいこら、帰ってこいって」

「何か？」

「いい女しかいない酒の席だつてのに呆けちゃダメさね、考えるならこつちの事にしときなつて、なあ勇儀」

自分から話を振ってきたくせに考えるなら目の前の事にしろと、都合のいい事を言つてのける地底のアイドル、僅かに眉根を寄せたアイギスの事を笑うと次は別の相手、隣の鬼に話の筋を放り投げた：：けれど、勇儀はそうだねと薄く頷いて酒を煽るのみ、話が膨らむ前に消

えそうでそれは面白くないヤマメが、今度は投げた相手をだしに使う。

「そーいやアイギスちゃん、今更だけどさ、なんで勇儀だけ星熊様なのさ？ 私やパルスィは呼び捨てにするくせに、勇儀だけ畏まって話すのはなんでだい？」

ヤマメが聞くとそーいえば、と勇儀も身を乗り出す。

先ほどの思考時から少し傾いたままのアイギスがそのまま考え始めるが、隣のパルスィが傾いた角を押し返して頭を真っ直ぐに戻した、傾いで言い訳を考えていないで早く話せという事らしい。

ちなみに特に理由はない。

ヤマメはそう呼んでもいいくらいに気に入った喧嘩の相手。

パルスィの方は他者の心を弄び墮として嗤い、そこから生じる嫉妬を糧とする姿が気に入ったから名で呼ぶようになっただけである、この流れからすれば良き喧嘩相手である勇儀も名で呼ぶくらいの仲ではあるが……

「町を仕切る御方ですので、一介の住人としてそう呼んで当然では？」という事らしい。

儲けの事は考えていないがアイギスもこの地底で屋号を上げた商人、言うなれば勇儀の仕切りに身を任せる側の者である、交友関係や周囲からの見られ方は置いておくとして。

そういった商人の立場から見れば、形だけでも旧地獄の繁華街を取り仕切る勇儀は敬い、それなりに敬意を表すべき相手だと考えているようだ。

「あたしやなんでも構わんよ、呼ばれ方で変わるわけでもなし、呼びたいように呼んだらいいのさ」

言い切ると盃を煽る鬼。

並々と注がれ揺蕩う酒を数度喉を鳴らすだけで空けた、一升入る鬼の逸品星熊盃を傾けてなんでもいいと快活に破顔した。

「鬼が？を言うなど、なんの冗談ですか？」

今の今まで黙っていた桃色頭が静かに語る。

左の目を瞑り、残る二つの眼で勇儀の顔を眺めている少女、普段は



住まう屋敷から出てくる事がない覚妖怪が鬼の顔を見てニヤリと嗤う。

「ああ？ 聞き捨てならないなあさとりよお。あたしには嘘偽りなんてないよ？」

「では言い換えますね、一人だけ仲間外れなようで嫌だ……という感じですかね？ 私達も名前で呼ばれますし、勇儀さん、いえ、星熊様だけ違うのが気に入らないといったところでしょうか」

存在感が強くなるとクスクス小声を漏らす。

読んだ心を言い切ると勇儀を見つめるサードアイが横に動く。

目線の高さは変わらずにギョロリと真横に瞳が動くとアイギスと目が合った、視線を外した辺りでは少し不機嫌になっている怪力乱神がいるというのに結構な余裕が見られる。

というのも以前の争いで倒れ目覚めた後、悪い意味でも目覚めたらしい。

管理を任された地が溢れでた血に濡れ、燃え上がった事から心を痛めていたが、その後の閻魔のお説教から悪い意味で開き直り、誰が相手でも心を読んで突くような事が増えていた。

そうした事で忌み嫌われて地上を追われたというのに、それが嫌で地底へ逃げたというのに……ソレを忘れたかのように昔の姿を取り戻した地霊殿の主。

荒れた旧地獄が復興したのと同じく今の古明地さとりも立ち直り、いや、以前にも増して相手の心を弄ぶくらいには、気持ち良く吹っ切れていた。

「おお、ズケズケと言い切ったな」

「勇儀相手に強く出るなんて、豪胆で妬ましいわ」

——お姉ちゃんがやる気だ、珍しい——

金髪二人と誰かがそれぞれ嗤う。

テーブルに頬杖ついてさとりを褒めるヤマメ、アイギス越しにサードアイを見つめ妬むパルスィ、そして酒の注がれたグラスを傾けているかもしれない誰かの声が聞こえた、気がした。

旧地獄が炎上した日もまるで他人事のように話していた者達が、今

回も他人事の様相でさどりの言い草をらしく評した。

「さどり様もこいし様も、姓では紛らわしいのでそう呼んでいるだけです……」

「そこは黙つとけつて、酒の肴になりそうなんだからさ」

——私はこいしちゃんでもいいよ？——

さどりに見られ少し考えていたアイギスが理由を話すが、黙つとけとヤマメに口を挟まれる。

ヤマメが手と口でそう促すと、それを聞いた誰かが少し長くて余るフリル付きの袖を揺らし、アイギスの後ろに回つて両手で口を優しく塞いだ、わからないまま余計な事を言えなくなった黒羊が目だけ動かし鬼を見る。

見られた鬼がガタツと立ち上がりさどりを見下ろした、そのままの形でニイツと噛い右腕を突き出してクイツと手招きをしてみせる。

煽られたさどりが懐から数枚のカードを取り出すと、勇儀が無言で頭を掻いて頷いた。

拳を振るい暴れる事を好む鬼だが、名の通り遊戯も好むらしい。

「互いに五枚で如何かでしょうか？」

「おいおい、わかっているくせに無理を言うな、まだ三枚しかないよ」

弾幕ごっこに乗ってきた勇儀にさどりからの提案がされるが、これも挑発の一つだったようだ。

吹っ切れたとはいっても好戦的とは言えないさどりだったが、地上で流行り始めた華麗な遊びはそれなりに嗜んでいるらしく、それ故勇儀相手でも強気に出る事が出来ていた。

閻魔經由で地底でも広めろと話されているこの地の管理者、繁華街を収める勇儀相手に仕掛け私が勝つ姿を見せれば他の者達も強い興味を示すかも、という算段もあるようだ。

「おおつと、勇儀ちよつと待った」

「なにさヤマメ？　つて、そうだったね」

立ち上がった勇儀を呼び止めヤマメが酒瓶をフリフリ見せる。

彼女が相手を見極める為によくやる己だけのルール、盃の酒を零さずに争うというのはこの遊びでも見られる。破滅的な金剛力と言え

るその身体能力を制限するには、結構いいらしい。

表面張力でどうにか溢れない、それくらいまで注がれた酒をチビつと、少しだけ舐めて水面が揺れるくらいまで減らした勇儀が先に争いの場へ向かう、動いた怪力乱神を追うようにさとりも空へと飛翔した。

——お姉ちゃん頑張れ〜！——

「いい着が出来たねえ、確かに、偶にや外もいいもんだ」

「注目の的ね、二人で視線を集めてくれて、妬ましいわ」

「ならば皆様方も混ざっては？ 多人数戦もアリだと伺っておりますよ？」

雪華舞う空を見上げる四人、地獄の皆が見上げる先をこの四人も見上げ語る。

鬼と覚の演し物仰ぎ見て、今日は乗り気じゃないとか、今日も面倒だから嫌だとか、キャイキャイと楽しいなガールズトークが始まると、空の方で動きが見られた。

まずは小手調べと勇儀が弾幕をばら撒く。

空いた右腕を振るい、自身の妖気を周囲に広げそれを爆発させる、地獄の針山のような鋭い弾幕が全周囲にバラバラと広がると、少し後退しながらそれを躲すさとり。

「なんだか刺々しいねえ、あれで結構気にしてたのかね？」

「だとしたら勇儀も可愛い所があったのね、意外性もあるなんて……」

「妬ましいわ、でしょうか？ そう言うパルスイも大差ないように見えますが」

「お、そうかそうか、パルスイはそうだったか」

「違うわ、注目を浴びて気持ちよさそうな姿が妬ましいだけよ、変な勘ぐりはしないで」

——こつちでも始まるの？ これはどつちを見たらいいのかわからないわ——

華々しい弾幕が雪空を彩る中、酒場の店先も見目麗しい者達の騒ぎが始まりその場を彩り始めた。冬空を見上げながら姦しい酒場の入り口、誰が何処で何をしていてもこの地獄街道は喧しいらしい。

少女達上機嫌

まだまだ続くから騒ぎ。

地の底から見上げる者達は空を彩る華麗な弾幕と、それを放つ二人を眺め、やんややんやと花見酒。最初は静かに飲んでいたアイギスやパルスイも表情を柔らかく、最初から騒がしかったヤマメは相変わらず嗤っていて、隣の席には閉じたサードアイを空に向け、まるで見えているみたいに空を拝む者が、いつの間にか座っていた。

「そーいやこーいし、お前さんいつからいたのさ？」

「最初からいたよ？」

「酒もツمامもすぐなくなったのは……」

「私の分がこなかったんだもん、しょうがないでしょ？」

「だからといって私のグラスを使わないで頂きたいですね、さとり様の物を使えば宜しいのでは？」

「一番多く入ってるのを取っただけよ？」

ヤマメとパルスイ、それぞれから声をかけられどちらにも答え、グラスを飲み干して綺麗に空けると、それをアイギスに突っ返す古明地こいし。

またこいつはと見ている三人を他所に、ケラケラと無邪気に笑い酒とアテを口に運ぶ、何も考えていなさそうな者。先程まではいたのになかったのか、よくわからなかった地霊殿のもう一人の主も、姉が鬼相手に善戦している姿を見て自身の姿をくつきりと現し、皆に混ぜあって酒と花火を楽しんでいるようだ。

「私よりあつちを見ようよ、お姉ちゃん頑張ってるよ？」

視線になれていないのか、話題を変え、私の見ている先を見ると、袖に隠れた人差し指がちよこんと差す。

そこには不敵に笑う覚と高らかに嗤う鬼の姿があった。

未だ続いている弾幕ごっこ。

今は互いにスペルカードを一枚宣言し、勇儀のスペルをさとりがブレイクさせた瞬間である。

先に放った勇儀のスペル、鬼符『怪力乱神』から放たれた∞型の弾幕を、さとりが想起『石窟の蜘蛛の巣』で相殺し絡め取った形だ。

してやったという顔で勇儀を見返すさとりが小さな身体に似合う短めの腕を伸ばすと、少しだけ眉の位置を上げた勇儀が何かを言いながらカードを投げ渡した。

「気に入っていたただけたなら見せた甲斐がありますね」

カードを受け取ったさとりが口の端を上げ語る。

一枚目は勇儀が認める土蜘蛛のスペルカードを模した物、互いに伝説として残り肩を並べる妖怪のスペルをさとりの持つ能力で具現化させたのが先ほどのスペルであった。

「こちらも気に入って頂けると嬉しいです」

さとりが二枚目のカードを手にするが、そこには何も書かれていない。

無地？ と勇儀が目を細めるとすぐに見開かれた。

鬼の瞳に映るのは炎。

無地のカードを二本の指で挟み笑んでいるさとりの周囲に、轟々と燃え上がるスコップが何本も現れたのを見てこいつは厄介だと嗤う鬼。

笑顔を確認するときとりがわざとらしく指を鳴らす、それを合図にして、スコップが火の粉を撒き空気を焼き切るように回転し始めた。

「あれは私の？」

「まあ面倒臭いを出すなあ、あんなんだから嫌われるってわかってるのかね」

「ヤマメ、それわかってて言ってる？」

あ？ と呆けるヤマメがクスクスと声を漏らす。パルスイを見やるが、その横と目が合うと顔にやべえと書き席を立った、さとりが展開した物と同じような物をアイギスが周囲に現したからだ。

瀟洒に笑みを浮かべ、面倒とはどういう事かと同じく席を立ちヤマメに詰め寄る黒羊。

「ちよっ！ 待った！ 今のはあれだ！ 言葉の綾だったの！」

両手と金のポニーテールをブンブンと揺らし、そうじゃないと全力で訂正するヤマメ。

ズスイと伸びてきたアイギスの手を払い、強引に肩を組んで悪い意

味じゃないと声を荒らげて苦笑する。

「では面倒以外の意味が？ てつきり喧嘩を売って頂けたのかと思いましたが？」

組まれた肩に回る手を取り、ほんの少しだけ力を込めて握る。

嫌われるという方は大昔から忌み嫌われているため気にしてないようだが、闘争であれば誰が相手でも真っ直ぐに突っ込み、口論であれば小難しく言う事はあまりないと、自身では考えている我儘な悪魔。

面倒と言われるのは予想外であるらしい。

「やりにくいってだけさ、アイギスちゃんはぶん投げる側だからわかんないだろ？ ほら、勇儀だってやりにくそうだ」

ヤマメが取られた手を上げて、喧嘩から空へとアイギスの思考を逸らす。

見上げるとまさに丁度の場面。

さとりが想起した勇儀のトラウマ、とまではいかないかもしれないが面倒な業を対戦者に向けて奔らせ始めたところだ、耳に響く高音を響かせ回るスコップが勇儀に向かい空を駆ける風景。

空中を走る回転ノコギリを同じくスペルカード、枷符『咎人の外さぬ枷』で強引に弾いていく勇儀。ビリビリと青く奔る鬼の妖気と、猛る勢いが弱まらない炎の角が空中でぶつかり合い、一層派手な弾幕ごっことなっていく地底の空。

その音だけが響いて、ヤマメの前に見えていたスコップは消えた。どうにか誤魔化したと確信したヤマメがアイギスをチラリと見る。覗き見るアイギスの頭は、下で騒がず上を見ると騒ぐ妹妖怪に角を抑えられ、けたたましく争う二人を見上げる形となっていた。

持ち上げられた視界に映る自身の攻め手を見て、端から見るとあんなのか、確かにアレは面倒かもしれない……が、だからこそ潰されにくい、我ながら良い手であると空の二人を見上げ、どこか満足気に頷いていた。

## 第四十六話 少女起動中

雪にも負けず、寒さにも負けず、忙しさにも負けずに動く誰か。金の瞳に力強さを込めて、ギョロギョロと蠢く瞳の世界から幻想の世界を覗き見ている。

身に纏う道士服、その膨らんだ袖口に両手を収めて佇む女。

身体よりも大きな9本の尾を僅かに垂らして静かに正面のスキマ、冥界の妖怪桜が写っている一際大きなスキマのリアルタイム映像を眺めながら、その回りに配された別々のモノが映るスキマにも目を配っている。

「未だ動かずか、このままでは困るのだがな」

呆れも伺える声色でポツリと呟いた狐、八雲藍が視線を左に動かす。

白玉楼を捉えるスキマの周囲にある一つ、魔法の森を写しているモノへと視線を流した、目だけで望むそこは小さく纏まった、悪く言えばごちんまりとした建物。

建物の中はこれ以上なくくらいに雑然としていて、僅かな揺れでもあれば建物内のあちこちに積まれたアイテムが雪崩てしまいそうなほど。少しは捨てるなり整理するなりすればいいと誰が見ても感じられるが、白い雪景色の中でも目立ちそうな色合い、見方によっては盗人のようなカラーリングを好むここの住人の蒐集癖が酷い為、物は増えるばかりである。

自身の興味を惹くものであればどうにかして手に入れる、それが他人の物であれば死ぬまで借りるなどと言って盗み出す黒白のシーフ、もとい魔法使いがこの建物の主。

今日もいつも通り、うず高く積まれ、今にも崩れそうなほどの魔導書の上に愛用の帽子を投げ置いて、パチパチと音を立てる暖炉のオレンジを柔肌にし、なにやら制作中のようだ。

「まずはこの人間にキツカケとなってもらうか」

組んだ腕を説いて、自身の尾先に触れた。

数本ほど自慢の金毛を抜いて、覗いているスキマに放つ藍。

ヒラリと霧雨邸の前を漂うと瞳を光らせて変化させる、狐の变化術が作用して細く輝いていた毛が淡い暖かさを見せる。ピンクの花びらに変わると、魔理沙の座る位置から見えるように窓に張り付いた。

「後は好きに気がつけばいい、次は……」

見つめる先を変える獣の瞳、次に見やるは寂れた場所。

朱色の鳥居が目立つ神社が見える。

スツとスキマを動かしてこたつで茶を啜り、茶菓子をかじる巫女を見るが、その巫女と目が合ってしまったいそうになりすぐにスキマを閉じた。

「相変わらぬの勘か……紫様、あの子は私の悪戯には乗ってきそうにありませんので……流れに任せます」

今は深い眠りの中にいる主を思い、式がまた眩いた。

まだ霊夢に顔を見せるつもりはない、紫がそのように言っていたことを忘れず自身も直接関わろうとはしない藍、未だ続く終わらない冬の異変よりも主の考えに重きを置く忠実な式。

この九尾がスキマを操る事は本来できないが、紫が冬眠という名の惰眠を貪る季節だけはある程度操作出来るらしい。

主に変わって冬の間……暖かな季節も大概は藍が仕事をしているがそれは兎も角として、今時期の結界管理維持などは藍が行っていた、先ほどの人間達にした事も幻想郷に関わる事である。

単純な話、この管理人代理が成そうとしているのは、長く続く冬の異変を誰かに解決させようというものだ。以前の異変、紅魔館の者達が仕掛けた霧の異変に続くものとして次に紫が利用したのは友人、冥界の管理者西行寺幽々子。

彼女が見たがっていた物を見せ、興味を示したところを上手く乗せて、なにかしらの異変を起こしてもらおう算段であったが……起こされた、春を奪う異変を解決しようとする者が未だおらず、致し方なしと異変を起こさせた側から動けとアプローチをしているところだ。

「前は先の二人だったがどちらも動きが悪いか、ならば保険も用意しておくのが懸命」

閉ざしたスキマを再度開き幻想郷の色々な場所を覗く。



次に開いたのは旧地獄の長屋だったが、ここはよく見もせずすぐに場面を変えていった。ここの店主は誘ったところで乗ってこないのはわかっているし、彼女は異変を起こす側で今回の事には使えない：：場合によっては想定以上に荒れる事にもなりかねない、それは困ると敢えて知らせない事にしたようだ。

敬愛する主であればどうかこじつけて動かすのだろうか、私には扱いきれそうにないと過去の一幕を思いつつ笑った藍：：図書館の本棚をなぎ倒していく姿を思い出し、そこにいる悪魔と同じく手籠めにしようにも、軽く楽しまれて終わりそうだと尾を揺らし、スキマの写す先を変えた。

次に映る先は神社と別の赤。

新たに開かれたスキマには頭や肩に雪を積もらせた門番の姿が映り込む。

まるで時間でも止まっているかのように動かない門番妖怪、またここを使ってみるかとおと開いたスキマだったが、屋敷内に目を向けてみると和やかな日常生活が映り込む。

白い息を吐きながら館の掃除をしたり、妖精メイドに指示を出したり、それが住めば料理という名の解体作業を試みたり、そろそろ起きるだろうお嬢様の世話準備をし始めたり、見るからに忙しそうな少女。

外に出る暇もなさそうだなと、スキマを閉じかけると少女が不意に消えた、どこへ行ったのかと再び画面を広げると屋敷の中ではなく外にいるメイド長が見られる。

この屋敷の住人であって唯一の人間が音もなく門前に現れて、少し大きめの傘を差し出し、からかわれている姿が映った。

「そうか、あれも人間だったな。それもあの巫女が褒めるくらいに出来る人間……保険とするには丁度いい、か」

門番の肩に傘を乗せ立ち去ろうとする人間が、その門番に捕まって少し騒いでいる風景、こうして見るだけであれば外で働く姉に差し入れをしに来た妹：：いや、門番の開いた瞳には母性といったモノが感じられるか。

また仕事を抜けだして、と話す門番が傘を受け取り笑いかける、それに対して傘くらいと顔を背けて話す人間少女。関係性はどうにせよ、慕う誰かに要らぬお節介をして、そこから少しからかわれ寒さ以外でも頬を染める人間がそこにはいるようだ。

あれで大丈夫かと一瞬不安になった藍だったが、他に思い当たる人間もないわけだしと、今回も役立つてもらおう算段でスキマの中へと身を沈めていった。

〈傾国行動中〉

「で、咲夜を貸せと?」

うつすらと青く見える紅茶を口に含み、友人である魔女と子飼いの従者を背に従えて、私が主だとアピールする者。少し早めに起きだして、降り止まぬ氷の結晶、それと日光を遮ってくれる厚い雪雲を眺めていた吸血鬼が、日の差さない窓を眺めたまま口を開いた。

「はい、貴方のような強力な妖怪に仕える従者なら、此度の異変も簡単に解決出来るかと思ひまして」

足を組み優雅にティータイムを過ごしていたレミリア・スカーレット、彼女が会話をしている相手は、先ほど屋敷の正面に姿を見せた八雲藍。門番とメイド長のやり取りを少し茶化した後、すぐにクソ真面目な顔を浮かばせ『御屋敷の主殿にお伝えしたい事がある』と、深々と頭を下げて入館していた。

「異変ねえ、前回は起こせと言ってきて今回は解決しろと言ってくるか、随分と勝手だな」

「前回は私の主との盟約でしょう? 今回は私個人からのお願い、といった形です」

「ほう、お前の独断? 主の命には逆らわない忠実な式様が勝手をしているのか?」

構いません、今は。

下げた頭を上げ、目線を交わしつつ語る藍。

紫が眠っている間であれば藍が代理人となり幻想郷を維持管理している、紫からも余程のことがない限りは藍の考え通りにしてもいいと命じられている為、はつきりとそう言い切った。

「面白い話だとは思う。手を貸せと言われるほどお前たちに認められたというのも悪くない、正直良い気分だ……が、それだけでは弱いわ。私は今の気候に文句はない、寧ろ好ましいとすら感じている」

だから咲夜を貸し与え、異変を解決させる理由がない。後に続くだろう言葉は言わずにふん反り返るだけの小さな主。

私の気分や考えをひっくり返す、納得出来るだけの言い分はあるのかと、口元を僅かに歪ませて藍からの返答を待っている。

「前回の異変は約定通り、弾幕ごっこを広めるのに良い異変となりました。同時に紅魔館の存在も確かな物となった、それは私達も認めるところ……ですが、まだ弱い」

言われた言葉をそっくり返す八雲の式。

悪戯に笑うレミリアに、妖艶さの見える笑みをわずかに見せて言い返した。

「弱い？ 天狗の新聞や里の反響を聞く限り十分アピール出来たはずよ？」

「外に見えるモノはアレで十分、ですが私達との盟約を守ったというには弱い、という事です」

「弾幕ごっこは広まった、そう感じられるが？」

幻想郷で名を轟かせる八雲の名、それを匂わせずに紅魔館だけで動き、異変を起こして弾幕ごっこを魅せる、紫との約束をざっくりとまとめればこの様な形になる。

確かにレミリア達紅魔館の面々は己の力だけで異変を起こし、弾幕ごっこを武器にして解決者と争い見事に散った……結果、力のない人間でも妖怪に勝てる弾幕ごっこは急激に流行り始めて、血で血を争うやり取りは随分と減ったように感じられた。

ここまでは前述した通り紫も藍も認めている……だが。

「そこも十分、私が言いたいのは異変の最中の事ですよ、主殿……解決に来た人間のうち一人は追い返された、そして追い返したのは屋敷の者ではなく部外者だったと聞いています」

「パチエとフランが遊んだという人間の魔法使いか、確かにあれを追い返したのは屋敷の者ではないが……」

「わかっておられるのなら私の言いたい事も理解されているでしょう？ 紅魔館だけで行くと交わした約束なのです、それなのに部外者の手が入った形で終わっている……あの形ではまだ不十分、盟約は果たされていないと私は考えています」

最初は謙虚な態度を見せていた藍だったが、今ではクツクと小さな声を漏らしている。

言い放った自分でもこれが暴論ではあるとわかっている、わかっているがそれでもこの主であれば断れないだろうとも読んでいた。

藍の読み通りに少しだけ表情が陰るレミリア、彼女もこれが詭弁にもならない言いがかりだとわかっている、だがそれを払拭するための言葉はすぐには言えなかった、邪魔をする者が彼女の内にあったのだ。

不遜で傲慢な夜の王。

外の世界に在った頃は、その地域の最後となるまで消える事なく、化け物としてあり続けた吸血鬼、プライドも高ければ力もそれに見合うものがある悪魔だが、悪魔だからこそ約束には少し煩い。

「私達は貸しつけたままでも一向に構いませんよ？ 主殿のプライドがそれを許すというのであれば」

言葉を選ぶ屋敷の主に傾国の妖怪が追加をノセる。

煽りを入れられ傾いていくレミリアの機嫌とプライド。

八雲が気に入らない、それは強く思ったままのレミリアだが、異変を起こし弾幕ごっこと自身の存在をアピール出来た事でそれなりの満足はしていたはず、そのはずだったが、煽られる要素を残したままに在る事もプライドが許さない。

強く偉大で我儘な500歳児が表情にまで不機嫌さを見せ始めると、静かに話を聞いていた魔女が代わりに返答をした。

「咲夜でなければダメなのよね？ 私が代われるのであれば乗っ取ってあげても構わないわ」

図書館から出てくることすら珍しい魔女、パチュリー・ノーレッジが思いがけない案を言い出す。まさかそんな事を言い出すとは友人であるレミリアも、話を振った藍も予想出来てはおらず、パチュリー

の顔をそれぞれ抜けた顔や神妙な顔で見つめた。

「そう不思議そうな顔をされても、個人の考えで来たのでしょうか？  
なら私も個人的に動くかなと思っただけよ、貴女個人には少しだけ感謝もしているし」

一度目の異変では藍に主従もろともやられた魔女。

今回動く事であるの時見逃された、殺さずに見逃してくれた借りでも返すつもりだろうか？

魔女を見る二人はそう読むが、実際はそうではない。

あの異変で藍が操り見せた符術、あれは東洋の魔法ともいえる五行の力である、洗練されたその業を直接見せ放ってくれた事でパチュリーはソレを吸収出来た、自ずと操る魔法も極まった。

自身の研究では四色が限界だったクリスタル、アレに一色追加できるようになったのは、言うなれば藍からの手酷い教育があつたからであり、あの時は手荒な授業となつたが今は言った通り少しだけ感謝しているようだ。

死にかけて感謝するのもおかしな話だと思うが、自身の命よりも知識を求め研究する種族らしいと言えらしいのか。

「ありがたい申し出だが魔女殿ではマズイですね」

「人間ではないから、ね。見た目も肉体的な強さという意味でも人間と然程変わらないけれど、それでもマズイと？」

「人間という種族は貴女が思う以上に厄介なのです、少しでも人の域から外れているならそれは味方ではない、恐れる側の者なのですよ。そんな者が異変を解決し、広まったところで意味がないのです」

反論しながら、魔女、次いで主、最後にメイドへと視線を流していく九尾の妖かし。最後の人間とだけ長く見つめ合いその心を伺うが、目を見なくともわかるくらいの雰囲気メイド長は纏っていた。

今は完全な従者であろうと口も挟まず静かにしているが、異変の際に巫女に敗れ、暫く悔し涙を流していたのをこの九尾は知っている。主が地下で不安要素の相手をしている間、代わりに霊夢の動きを見ていたのはこの藍なのだから。

けれども瀟洒でありたい、あろうとしている従者には何も言わず、

それぞれを一瞥してからスツと席を立つ八雲の式。まだ話は終わっていない、紅く幼い瞳からはそう感じられるが藍が考えていた事は伝えた、後は好きにしてくれていいと、スキマを開いて一瞬でその場から去っていく。

「主が主なら式も式で胡散臭い、けれどまあいいわ、咲夜が行きたいと言うのなら私は止めないから……好きになさい」

藍に向けていたモノとは違う、少しだけ穏やかな目で従者を見る主。

負けず嫌いな咲夜が負けて泣いていたのをレミリアも知っている。鈴に泣きついて機、会があればあの巫女を見返すと泣き言を言っていたのも知っている。

今回の誘いはそれに都合がいいかもしれない、そんな事を考える。

「私は何も……」

「折れない私の代わりにパチエが動いたのよ？ わざとらしく感謝なんて理由まで言つて、友人に恥をかかせる者はこの屋敷にはいらないわ」

言い切ると立ち上がり、先に部屋を出るレミリア。

それは自分にも言っているのか？

ボタンと閉じたドアを見ながらパチユリーが思いつくが、言葉にはせずに少し笑うだけで済ませる事にしたようだ、素直に言えない主の可愛さを笑い、残された咲夜を見る七曜の魔女。

主から言われ、その友人からは見られ、いたたまれないが二人が自分の為に折れてくれたというのは雰囲気からわかっているらしい。

門で見せたような頬の色になると、また魔女が微笑んだ。

## 第四十七話 風が抜ければ、桶屋が売りつける

桜が散って若葉が萌える、力強さや生命力に溢れる世界。舞い散るものも白い結晶から桃色の吹雪、線のように降る雨へと変わる。例年であればそんな季節が訪れているはずなのだが、今年の幻想郷は未だに白一色で、どこもかしこも静けさしか感じられなかった。

少し前に赤い屋敷の吸血鬼が起こした霧の異変から、ちよつとした耐性を付けたこの地の人間達もさすがに寒さには勝てず、人の生活音で賑やかなはずの人の里は静寂に包まれている。

では妖怪ならどうか？

人間よりもタフで、肉体的には逞しい者達なら、この銀世界も楽しんでるのではないか？

そう考える事も出来るが、人の動きが静かであれば心も静かであり、その者達の心から生まれた妖怪達もほとんどが静かになってしまっている。元気なのは、冬以外は寝て過ごし、寒さと共に全盛期を迎える低血圧症な低気圧妖怪と、この寒さを楽しむ湖住まいの氷精くらいか？

もつとも、その二人も今現在は元気とは言い切れない、この寒さをどうにかしようと動き始めた巫女と魔法使いに、こてんぱんにのされた後のようだ。

退治された二者は置いておいて、他にも元気な者を探すとするならば獣上がりの妖怪、例えば化け猫や化け狐であれば多少の寒さは問題ないが、幻想郷に住まうその二人は仕事や使いに追われ、別の意味で熱くなっているようだ。

動き始めた人間達の動向を常に監視し、場合によってはまた発破かけなければならぬと、気を休める時間もない八雲の狐。冬空を飛び始めた少女達の行末を覗く金色の瞳、その瞳孔には変わらず強さや聡明さが灯っているが、目頭には少しの熱さが見え、下瞼の辺りには血色の悪さが浮かんでいる九尾の化け狐。

主以上に仕事熱心な姿勢を見せているが、今日は久々にスキマの外にいるらしく、誰かの店を訪れてそこから監視をしているようだ。

「お氣遣いなく、少し休憩したらお暇しますので」

丁寧に敷かれた三和土たつきの土間に足を下ろし、身体だけ畳の縁に腰を下ろしている者。

僅かに肩を落とし、目には隈を作り始めた傾国の美女が、店の主から差し出された湯のみを断るように平手を見せる。チエツク柄の赤いYシャツ、その袖から伸びる浅黒い手には湯気が揺らぐ湯のみ、心遣いはありがたいがすぐに発つのでとやんわり断る管理人代理だったが、言葉は聞かれず無言でコトリと目の前に置かれる。

『ゆ』の字が目立つ、店に置かれっぱなしの誰かさんの湯のみ、一度断ったが下げられないので、諦めて手に取り、フウフウと弱い吐息で冷ますと、鼻を鳴らして店主の顔を見た。

「これは……酒、ですか？」

「なにやら疲労……心労かもしれないですね、それらが見て取れますので少しだけ。なに、ただの卵酒ですよ」

この地に住んで長い藍には嗅ぎ慣れない芳香。

薄く立ち上る湯気に乗って香るのは甘い樹液のような木の匂い、疲れ顔の藍が店内に入り、少し話した頃から、奥の台所より漂ってきていた香りと同じ物が湯のみからも感じられる。

見た目は白濁した茶色、以前に主に勧められ口にしたカフェオレという飲み物のそれに近い色合いで、よく知る卵酒とはかけ離れた物だと感じるが……手に取り湯のみを見てみると、冷めないうちにと促される。

忙しい最中に酒などと、仕事に響くと、そう考える頭もあったが……卵酒というのならこれは酒ではなく薬だろう、それにもう断れる気もしないと、諦めと共にコレも少しずつ口に含み味わう。

「すこし甘い……が、落ち着きますね、これは」

「お口にあつたなら何よりです」

藍が口にした卵酒、その原酒であるボトル二本をそれぞれ片手に持つ店主、アイギスが少しの飾りが見られるボトルを振って、中身はこれだと音で知らせる。

タポンと揺れる濃い琥珀色。どちらも紅魔館に行つた際にセラ



から失敬してきた物で、片方は飾り気のないボトル、もう片方の帆船型のボトルの物は、現当主が生まれた時にアイギスが飲んでいたものと、年代こそ違うが同種らしい。日本酒も嫌いではない彼女だが、ラムやブランデーの方が口に合うようだ。

「なるほど、洋酒でしたか」

「牛乳と卵を合わせたものにこれらを少々、気晴らしにいらしたのなら少しのお酒くらい、と思ひまして」

例年通りに留守を預かっていた八雲の忠実な式。今年も主の冬眠期に東奔西走している。前回の霧の異変といい現在の冬の異変といい、自身の手には余る物を監視させられていてさすがに堪えていたが、どうにか暇ができたらしい。数日前に魔法の森で仕掛けた悪戯から動いた魔法使いと、話に乗って釣り上げる事が出来た吸血鬼の従者、その二人に誘われてやっと動いた博麗の巫女。

此度の異変を解決しようと人間達が動き始めた事で、僅かな時間ながら暇が出来たようだ。

空いた時間に不意に訪れたアイギスの店。

人間達を覗いていた時に除いた場所に来たのは、ただの思いつきらしい。

「ふむ、メイドも動き始めましたね」

暖かな湯のみを持ち、小さなスキマを覗き見ている藍の呟き。

骨休めに訪れたが、スキマでの監視は終わる事はなく、アイギスと共にいる今も人間少女の動向を見つめている。本当なら一番やる気の見られない巫女を見なければならぬが、敢えて紅魔館の従者を写す藍、これは彼女なりの気遣いなのだろう。

「左様ですか」

「初戦の相手は…騒霊か、3対1になるようです」

スキマに映る悪魔のメイド、十六夜咲夜とポルターガイスト三姉妹の弾幕ごっこを実況していく藍。

咲夜の左右に浮かび追従する魔道具、魔女の魔力が感じられる星のマークが目立つ球体から、空を裂く銀のナイフが放たれると、対戦相手の姉妹達も白い騒霊を中央に陣形を組んで動く。

鋭い弾幕を放つメイドに姉妹の牽制弾とそれに続くラツパの音符弾が放たれて、弾幕ごっこの開幕を告げた。

「それはそれは、初戦で泣きを見なければ宜しいのですが」

生放送を見つめる藍に振り向きもせずそう話すアイギス。

状況を語りながら見物するスキマの式が少し話しては横目でアイギスも見やるが、二人の視線が重なることはなく、他愛のない返答をしながら奥の部屋へと消えていく黒羊。

「……やはりあの姉妹以外は気になりませんか？」

台所へと消えた店主に向かって、少しタメてから別の事を問いかける藍。

妖艶な目はスキマに、帽子の奥に隠した耳は黒羊に向けている藍が、少し冷め始めた湯のみに口をつけ、答えが返ってくるのを待つ。

「特別視はしておりますが、気にかかる相手はあの者達以外にもおりますよ?」

「鬼や土蜘蛛などですか?」

「彼女達もお気に入りはありますが、もつと近くにもおりますね」

「他にも? ああ、あの風見幽香もいましたか」

「もつと近い者ですよ……例えば、普段は訪れて下さらない方ですか……普段の真摯な御姿も美しいが、今のような弱り姿も良いものかと」

姿は見せずに低めの声だけが返ってくる。

その場にはいないアイギスにご冗談を、と返す藍。

最近は何談も覚えてしまっただけからかい甲斐がなくなってきた、他者を欺いてばかりの主からそのように聞いている藍が、これもその冗談の一つかと考え、湯のみを飲み干す。

コクンと僅かに喉を動かして少し笑む、結界の維持管理で張り詰めた気を緩めるには良いものだったようで、軽やかに立ち上がり姿勢を正すと、丁度そのタイミングで戻るアイギス。

「もうお帰りですか?」

立ち上がり背を見せる藍の背後、輝き揺れる尾の後ろから近寄ってアイギスが囁く。

もう戻りませんと、そう返す藍の尾に指を絡め、壊れ物でも扱うような優しい手付きで撫で付けて、そのまま尾の付け根、付け根から腰へと腕を回し、強かに引いて藍の細腰を捉えたアイギス。

少し強引に腰を取られアイギスを見る藍、その目にはキツチリと閉められていたネクタイが緩み、シャツのボタンも二つ外されている姿の悪魔が映る。

「偶にもいらっしやらないのです、もう少しゆっくりされては？」

「冗談の続き……とは思えないのですが？」

「いいえ、仰る通りの冗談半分というやつですよ」

——残り半分の方をお見せしている形になりますよ。

藍の帽子を強引に脱がし、見えた耳に向かって吐息を漏らしてそう語る。

吐いた息からは仄かにアルコールの臭いがする、台所で一杯引つ掛けてきたのかと感じる藍だったが、僅か一杯で酔うわけがない事も知っていた。

では今のこれは？

酔いからのお戯れではないとわかる今の姿、間に挟んだ九尾も気にされず身体を密着させ、酒と共に色香も香らせる悪魔からは、確実にそういった誘いだと知ることも出来た。

けれども……流れを変えこの場を離れるにはどうすべきか？

思考をそちらに向けていく藍だったが、耳に温い息を浴びてこそばゆいのか、二度三度耳を跳ねさせると、それを合図にモゾツとアイギスの両手が腰を離れ、それぞれ上下に動き始めた。

「あの、それ以上は」

「何か問題が？ 性別の事でしょうか？ であれば問題ないかと、そちら方面でもご満足いただけはるはずですよ」

宴会の席で鬼や土蜘蛛相手に、抱かれるなら殿方の方がいいと言っていたタロットカードに載る悪魔だったが、今は誰でもいいのかもしれない。

それもそのはず、今の彼女は欲求不満なのだ。

最近宴会の酒を浴びる事ばかりで、力を振るうことも拳を浴びる

事もほとんどなくなっていて、好ましい争い事からはとんと離れている状態、一言で伝えるなら欲求不満といった状態となっていた。そんな時に姿を見せた傾国の美女、同族で淫魔小悪魔なあいつを簡単に攻め堕とした狐、そちら方面でも確実に楽しめる美女を捉え、淫猥な笑みを見せる。

「いや、今はその」

「今は？　今でなければ宜しいと？　ではいつ？」

言い淀む藍に聞き返すが、手は止まらない。

彼女が纏う白の法衣と青い前掛けの間にアイギスの手が伸びる、するすると下腹の先や胸の膨らみに指先が這い動く。

焦らすように這いよる魔の手、その感触を感じつつ少し前にはこんな事を思った、そしてそれも悪くない、寧ろ楽しめるかもしれないとも考えた藍だが……それでも今はマズイですと、服の上を這う指から身体を逃がす。

逃げながらスキマを見る。

少し揺れる瞳で見ているのは、映るメイドの姿ではなくスキマの中。

主の空間内に残した自身の式を見ていた。

肌を触れ合わせる事自体は構わない、けれどもあの子にソレを見られるのは少し……式の前では凜とした姿しか見せない八雲藍、橙に別の姿を見せては主としての形が崩れると察し、どうにか逃げようと試行錯誤していた。

「いえ、逃げられそうにありませんし偽りなく述べます。今でも構わないのですが……見られていては、その……困ります」

変に逃げず真っ向から逃げる。

這い寄る悪魔の手に尾を巻きつかせ、ギョツと締め拘束した。

困る、本心を吐いた、素直に困ると話す藍。

言ったところでこの羊の事だ、問答無用でくるのだろう。

そう邪推し見られても構わない覚悟で逃げ口上を述べたが、藍が真面目な顔で話したのが利いたのか、前掛けの下にある、道士服の合わせ目を過ぎた指は止まった。

「ふむ確かに。魅せるつもりであれば別ですが、その気のない時に見られながらも困りますね……橙様ならともかく、知らない相手に見られていては興も覚めてしまいます」

藍の耳元から首筋へと場所を移していたアイギスの口、そこから彼女の思考が漏れる。

何も無い、長屋の梁だけがある天井の端を見つめ呟いた言葉。

欲求をぶつけようとした藍に向かってではなく、何も無い、何も無いはずの天井に向かって言葉をぶつけると、ナニカが動いてまともり始めた。

この動き、そしてこの感じは……目には見えない程の薄さとなりながらもその存在は薄れない相手、曖昧にぼやける相手の事を藍は知っているはずだった。

「ほお、私に気付くか、中々目敏いな。羊つてのは目がいいのかね？」  
「羊として言うならば目より鼻ですね、振る舞った酒とは別の匂いがあるなど感じましたので……ノックもなく来店されて、お客様でしょうか？」

子供のような声色が店内に響く。

言葉と匂いだけを表して姿は見せない相手に対し、少しだけ警戒するアイギスだったが、隣に立つ藍の雰囲気からその警戒はすぐに解かれた、どうやらこの声の主は藍の見知った相手らしい。

アイギスが言い切ると店舗の内に霧が萃まり濃く纏まる、揺らぎ萃まる霞が輪郭をはっきりとさせていく、2本の角と長い髪、そしてその髪や腕から繋がる長い鎖、それらがくつきりと見えるようになる、すぐに人の形へと成っていく。

「伊吹萃香か、姿を見るなどいつ以来だ？」

「久しいな紫のペット、月との争い以来か？ そっちの羊さんは初めましてだ、伊吹萃香って鬼の一人さ、勇儀達から聞いてるだろう？」  
幻想郷にいる、それだけがわかっていた鬼。

大昔に紫と共に月に攻め入った夜、その晩以来しばらく姿を見せていなかった、主のスキマにも長い間姿を映す事はなかった鬼、伊吹萃香が唐突に姿を見せる。

「アイギスと申します。貴方様が萃香様、お噂は常々聞き及んでおりますよ」

不意に出てきた鬼の小娘、実際は鬼の中でも恐れられる四天王の一人なのだが、その見た目から小娘と言っても差し障りの無さそうな伊吹萃香。

どこか下品さの伺える笑顔を浮かべ初めましてと挨拶をしてきた者に、名を告げて軽い会釈を試みせるアイギス。

「それよりだ、続きはまだかい？ 酒の肴に見てやるから早いところ始めなよ」

床についても垂れ下がる、○△◇の飾りがついた鎖を鳴らし、右手は自身の顎へ、左手は見ている二人に向け、ドカッと胡座をかいて座る鬼。

ジャラジャラと鳴らした後で、左の手はこの鬼のいつものスタイル、酒が無限に湧き出すという瓢箪を持ちクピッと一杯引っ掛ける。「ほれ早く、獣らしくまぐわう姿を見せてみなつて。それとも春がないから出来ないつてか？ なんなら少し分けてやるぞ？」

酒に酔った下品な笑い顔で話すのはやはり下の話。

獣呼ばわりされた獣上がりの妖かし二人が、目を細め酩酊中の鬼を見る。

視線が萃まるとどっちがタチでどっちがネコだ？ などと言い出し更に話を掘り下げていく萃香、自分で言ったことに対してネコはお前の式だったかと言いつつ始め一人囁く。

この酔っぱらいはいつにもまして、そんな事を瞳に宿す藍だったが、何か引っ掛かることがあつたらしく、囁く鬼に言葉をぶつけ始めた。

「少し分けるとは……何を知っている？」

「なんだ、何も聞いてないのか？ お前の飼い主から少し頼まれているだけさ、桜が満開にならぬように少し萃めて持っていて欲しいってな」

問掛けた藍に萃香の右手の平が向けられる。

強い視線を感じた鬼が笑うと、ポウッと灯る鬼の手、淡い花びらの

ような形で現れたピンク色の光、輝きとともに感じられるのは暖かな温度と柔らかな香り。

この鬼の手の平には確かな春があった。

「桜……なるほど、私に全てを任せて頂けたわけではなかったのか」  
藍の主である八雲紫の友人、西行寺幽々子が仕掛けた現在の異変。幻想郷の春を奪い白玉楼を春で満たし、咲かない化物桜を無理矢理に咲かせるという異変、紫が眠り始める寸前に幽々子から話されたその内容を聞いて、紫は自身でも動いていたようだ。

あの桜が咲けば亡霊の姫は……咲いた後の顛末がわかる八雲紫だが異変を起こせと促した手前もある、ならば表向きには反対せずに好きに異変を起こさせて、まかり間違っても満開にはならぬよう裏で手を回しておく、そのような筋書きだったのだろうと藍は結論づけるが……

主の考えを読むと同時に、大きなショックも受けているようだ。

眠る前に聞いた事、藍に思惑通りに動くようにと、命じる時間もあるにはあった、けれど何も言わずに眠りについた紫、そこから後の事を任せてくれたと考えていた藍であったが、自身の読みから肩と尾を大きく下げ落とす。

「集める、そう聞こえましたが？」

「ああそう言った、それがなにさ？」

「一つお尋ねしても？」

「嘘をつかなければ構わんよ」

「ではお言葉に甘えまして、最近頻発している酒宴ですが、あれも貴女様に集められていたのでしょうか？」

「頻繁に開かれる地獄の宴。」

「その宴会で度々名が上がる萃香。」

不自然に名前だけが出てくる者、それでも毎回姿は見せず話題だけで終わっていた者、その者に真正面から問いかけるアイギス。

「本当に鼻が利くなあ羊さん、勇儀が気に入るのもわかる気がするねえ」

「ご返答頂き感謝致します、そして別の事でも感謝致しませんと」

「別つてのはなん……」

してやったりという顔でアイギスを褒めていた萃香が、胡座姿のまま回り飛ぶ。

返答を受けそれに返したアイギスが一瞬で詰め寄り放った渾身の右拳、それを額に受け、店舗の入り口をぶち抜いて向かいの長屋に飛び込んでいった。

ガラガラと音立つ瓦礫の中に消えた鬼、それを追い掘り返すつもり  
の黒羊が一步踏み出すと、藍に肩を掴まれる。

今し方まで冷静に話していたアイギスが唐突に動いた、突然過ぎて  
藍にも動きが読めなかったようだが、このまま行かせては更にわから  
なくなる。

主の腹積もりを知って衝撃に揺れていた頭脳明晰な式、鬼の言葉に  
思考能力を麻痺させていた九尾の狐だったが、肩をとらえ一言問うく  
らいは出来る。

「いきなりなにを!？」

アイギスからの返答はない。

あるのは笑みを浮かべ店外へと進む姿だけ。

この状況はどういう事か？

言葉なく始まった喧嘩、片方が理不尽に殴り飛ばしただけでまだ喧  
嘩とはなっていないが、この後どうなるのか……脱いでいたスーツの上  
着を羽織り、タイもシャツのボタンもとめて歩き出したアイギス  
と、周囲の瓦礫を吹き飛ばし立ち上がる萃香が通りで睨み合う。

抜かれた入り口から入る寒風を受けつつ、二人が正面切つて立つ姿  
を見る藍。

先ほどの感謝とは一体？

言い残した言葉を考えても理解するには及ばない藍の思考回路。

それでも一つだけ分かる答えがあった。

また旧地獄が荒れる。

鈍る頭でもそれだけはすぐに察する事が出来た。



## 第四十八話 地底の売りを捌く商人

鬼や土蜘蛛の働きから美しくなった地獄の町並み。

地上との相互不可侵条約など無ければ十分に観光地として見られる。

整えられた石畳の街道に、綺羅びやかな灯りが地底世界の中心地、地霊殿まで続いていく旧地獄街道。絢爛豪華とは言えないが、古き良き時代の名残も見せながら真新しい長屋や出店、酒場や娼館などが見られる幻想郷の温泉地といった町並み。

街道の入口である橋にでも『おいでませ』と掲げれば、完全に客を呼び込める造りとなっただろう、その橋に現れる妖怪がそんな物は掲げさせてくれないだろうが。

綺麗で楽しい地獄の繁華街。

一丁目はメイン街道に面した部分で活気にも満ちた場所だが、一本通りを入れてみれば昔の暗く、オドロオドロしい雰囲気を残したままの建物も見られる。

血塗れ乾いたような赤黒い壁等が目立つ長屋もその一つ。

綺麗に生まれ変わった一丁目と合うように後々取り壊して建て替えられる予定もあるにはあるようだったが、それを指揮する者もいざ建て替えに動く者もどちらも地底に住人だ、話だけで一向に進まない計画であった。

このまま話は流れるだろう。

そんな計画があると聞いた地底の住人達が話を忘れ始めた今になって、その一辺が瓦礫と化した。最近流行り出した弾幕ごっこ、その流れ弾程度では傷つかないくらい丈夫な、土蜘蛛の編んだ糸を練り込んだ壁をぶち抜いて、ガラガラと周囲に広がる瓦礫。

今し方誰かが殴り飛ばされた場所がそこである。

「派手な挨拶してくれるじゃないか、ああ?」

瓦礫の奥で声だけがする。

二次性徴を迎えてすらいらないような子供らしい声。

見た目も同じく幼女としか言いようのない者、声色に似つかわしく

ない凄みのある口調で語る鬼。ぶち抜いてゴミの山となった周囲と近くの長屋を気合一発で吹き飛ばすと、向かいの店舗入り口を睨む。「殴り飛ばしただけです。取り立てて派手な事はないかと。そういう物はこれからお見せ出来ると考えております」

カツカツと踵を鳴らす店舗の主、鬼を殴り飛ばしたアイギスがドスの利いた口調の鬼に語る。

返答が返ってくると、スカートや袖の破れた上着の誇りを払い、四肢から垂れる鎖を鳴らして土埃に塗れた髪を払う伊吹萃香、前髪を掻き上げついでに殴られた額も撫でる。

僅かに赤みを帯び、ほんの少しだけヒリヒリと感じるおでこを撫でながら、腰を曲げて前のめりになる鬼、突き出された顔には当然浮かぶはずの表情が浮かんでいる。

「そう睨まないでくださいまし、元はといえば貴女様が悪いのですよ？」

メンチを切って見上げる幼女。

前のめりになり過ぎて身体が倒れそうになると不意に後ろに仰け反って、まるで大陸の人間達が編み出した、酔えば酔うほど強くなるという拳法のような動きに思える姿。

フラフラと前後に動いては、手にする瓢箪を煽り燃料を補給し続けている。

「私が悪いだあ？ やることやれなかった腹いせとしか思えんが、まあいいさ。鬼に喧嘩を売ったんだ、どうなるのかわかつての事だろう？」

アイギスの言い分に殴り飛ばされる前の流れ、それを加味すればそうにしか見えないだろう。

少し強めの洋酒と少々強引な誘いから僅かに色付いていた店舗内の空気、この鬼も述べた春色めいた空気に乗せて藍で欲求不満を解消しようとしていたアイギス。

八雲の式が困り果てたところで二人で果てる事は諦めた黒羊だったが、折角作った雰囲気をぶち壊すような鬼が気に入らない。そんなところだろうと踏んだ幼女が一人頷く。

煽った瓢箪を肩に下げふんぞり返って返答を待つが……

黒羊から放たれたのは口撃ではなく、またしても攻撃であった。

返答をせずに一足飛びで強襲したアイギス。

私は開戦を告げた、だというのに未だ語るだけの鬼。

勇儀であれば先の拳だけで伝わるはず、だというのにこの子鬼は動かない。

ならばもう一度教える、そう言わんばかりにスコップを現し振り抜く。

カコオンと軽い音が鬼の頭とスコップから鳴ると、再度地面を跳ねた鬼。

二・三回ほどバウンドし、瓦礫から通りに身体を飛ばされる萃香。側転するように横に転がり、頭から落ちたが勢い良く飛び起きる。軽く頭を振って敵対者を赤い瞳で捉えようとするが、眼前には投げられたスコップが迫る。

けれどそれが身体を裂くことはなかった。

萃香の身体が薄れていたのだ。

自ら実体を薄く、疎密とさせてスコップをやり過ぎた鬼。

萃香の身体を通り抜け、遠くでカランと鳴るアイギスの角。

その音が鳴り終わると言葉少ない桶屋の店主から、少なめの売り言葉が追加された。

「鬼だというのにおかしなものです、売ったのではなく既に売りつけているのですよ？」

言い切ると片手の甲を見せる悪魔。

鬼の赤目。

顔を歪め大きさが不揃いになってその目に向かって、真正面から甲を手前に折って見せる。

『かかってこい』という煽り。

いつまでも話し込むな。

鬼だというのなら口ではなく拳で語ってみせろ。

そのような思いを込めて珍しく、自分から煽っていくアイギス。

らしくない事は自覚しているが、今日くらいは悪乗りしてもいいだ

ろうとも自覚していた黒羊が差し出した右手、ソレに向かい萃香が駆ける。地面を蹴り抜いた一步目で加速し、二歩目でアイギスの視界から消える。一瞬で身体を霧と化して、再度現れた時には煽りに使われた右手をミシリと音を鳴らして掴んでいた。

メリメリと鳴る羊の腕、ソレを右手で握りこんでいく鬼。

軋む原因を絶とうとアイギスが左手に獲物を構え振り下ろす。

が、こちらも鬼の拳に止められた。

スコップに綺麗に残る幼女の拳跡、あちらの鬼であれば殴りぬかれ、その奥にあるアイギスの顔も消し飛んでいた今の角度、その形から勇儀ほどの力強さはないと感じたアイギスがスコップを放り指を合わせるが、パチンと響く前に右肘を殴り抜かれた。

もう一人の鬼、星熊勇儀のように瞬間でその場からモノがなくなるほどの威力ではない萃香の拳だが、それでも鬼の暴威には違いない。

ブチブチっという音を立てアイギスの右腕を左拳で殴り断つ。

握られていた腕が断ち切られても意に介さず、萃香に向けて血飛沫と指を向けるアイギスだったが、それは見ている、知つていふと言わんばかり萃香の足が悪魔の残る左手に奔った。

指が合わさり弾かれる数瞬間前、小さな足がアイギスの左腕を蹴り抜き、前腕をひしゃげさせた。

「煽る割には軟じやないか、羊さんよお！ 鬼相手に喧嘩をう……」

アイギスの右腕をもぎ取り、左腕は潰した。

同族が苦戦した手口はこれではばらくはこない。

してやったと煽りを返そうとした萃香だったが、それでも鳴る指の音を聞いてしまい一瞬動きを止めた。折れ尖る骨が露出し、見た目には動きそうにない左手、その指が合わさりアイギスの穿つ力が発動する瞬間を見てしまったのだ。

そういえばデタラメだった。

勇儀と殺り合う姿を再度思い出した萃香だったが、これくらいではまだデタラメの範疇にもならないかと軽く嗤って、指を鳴らした悪魔の頬に向けて愛用の瓢箪をぶん回した。

「やられっぱなしは性にあわんでなあー！」

会話の途中で殴り飛ばされ、転がされた意趣返しのもりなのか、通りの石畳に向かって転がるよう、角度を調整してアイギスを飛ばす萃香。

頬を抜かれ、石敷きの地面を割りながら小さくなっていくアイギスに向かって煽り返す言葉を放ったが、頬を抉られ小さくなりながらも嗤っていたアイギスの視線の先に気がついた。

少しだけ軽くなった自身の頭。

それを撫で気が付くと強い舌打ちを響かせる鬼。

ひしゃげた腕で鳴らされた指。

本来であれば萃香の身体を狙った穿つ力だったが、狙いの定められない腕では萃香の頭に生えた捻くれた角の片方を穿つだけで、狙いは外れてしまったらしい。

短い腕で頭から角を撫で、片方の角が僅かに短いことに気がついた二本角の鬼。

触れた手を握りこみ、震える程力を込めると、飛ばした悪魔の後を追いつける。

少し先の方、ひん曲がる左腕を地につけ、片足立で止まっているアイギスが見えると腕から下げる重石付きの鎖を振り回す、触れたモノを肉塊として弾く勢いとなった鎖分銅をアイギスに向かい奔らせた。

が、その万力鎖はアイギスの身体を散らす前に二人に間に現されたスコップで巻き取られる。

「私の角を……やってくれたなあー！」

力強さを魅せつけるように片手だけで鎖を引く萃香。

失った右手からはどす黒い血を流し、ろくに握れないような、歪んで残った左手のみでスコップを引くアイギス。

「小さな身体で随分と力強い御方だ、その角は伊達ではなかったのですね」

「てめえ……こつちが合わせてやれば！」

「合わせてくれなどと誰がお願いしましたか？ 本当に口数の多い御

方でいらっしやる」

ギリ、ミシと音を立てる二人。

一見すれば釣り合いの取れた形に見えるが、今の形は鬼の余裕から見られる形だ。

潰れた腕ではろくに対抗できない、それがわかつている萃香が短くなった側の米噛みに不快の証を現す。それでも減らない減らず口、力だけでは萃香に当然分があるが、言葉のほうではアイギスに余裕が感じられた……というよりも普段以上に饒舌にすら思える黒羊、それもそのはずだ、欲求不満を解消するのに打って付けの相手が構ってくれているのだ。

眉根を寄せ怒りと力を魅せる不羈奔放の古豪、古兵と呼ぶに相応しい鬼を相手に同じく古い悪魔が嗤う。

アイギスがニイと笑みを見せると、萃香の腕に力が込められる。

「その顔……気に入らないねえ！　追い込まれているって自覚はあるのかい!？」

「ございますよ？　私は羊ですので、追い込まれる事には慣れております……それ故この程度で慌てる事などもございませぬ」

余裕の表情、アイギスの顔をそう見た鬼が言葉を投げつけ、空いた左手も伸びる鎖に添えた。

鬼に気に入らないと言われた笑顔。

瀟洒な笑みのまま軽口を返すアイギスだったが、その顔は一瞬でブレた。

舌打ちを響かせた鬼が鎖を両手に持ち替えて引いたのだ。

それだけで崩れる二人の均衡。

ラクラクとアイギスの獲物を取り上げ身体も寄せる萃香が一発顎を殴り上げた。

黒羊の長身が仰け反り、血を吐いて浮かび上がらせる。

殴った勢いが余る鬼だが、そのまま後ろに仰け反ると勢いを利用して大きく息を吸った、そうして身体を戻しながら地獄の火炎を吐き出す。

僅かな時間焼かれただけで地面の石が赤く染まる鬼の炎、火の手の見えない範囲でも周囲の景色が揺らぐほどの温度が感じられる猛炎、アイギスの赤黒く淀んだ瞳の色合いに近いソレが、その瞳を持つ者の

全身を包んだ。

鬼の炎がアイギスの身を焼き、焦がす。

黒羊の血が湧き肉が炭化していく。

足元から頭髮の先まで一気呵成に燃え上がり、煙となっていく悪魔の身体。

これがアイギスではなくただの羊で、炎も調理用のそれであればBのような食欲をそそる肉の匂いが辺りに満ちるだろうが……この炎は地獄の業火、焼かれる肉も悪魔の血肉だ、周囲に満ちるのは嗅ぎたくない匂いだけだろう。

プスプスと片足立ちの形で残る焼死体。

元から黒かったアイギスの身体が完全な黒に染まると、鬼の劫火が消えていった。

「鬼を馬鹿にするからそうなるんだ……さあ、さつさと復活してみせろ！ この程度じゃあ死ねないんだろう!?!」

人型の炭と化したアイギスに言い放つ萃香。

姿を見せずにいながらもこの地底や地上で起きたことは全て見ていた鬼、霧となり広がって幻想郷中で起きた事の殆ど全てを観てきた鬼がさつさと身体を戻せと煽る。

花妖怪とのお戯れでも、吸血鬼異変でも、地底で勇儀やヤマメと争った際にも終わりを迎えずに、相手にしつこいと思われ疎まれるくらいには蘇り嗤った悪魔。

その死体を萃香が蹴るとドシャツと崩れた。

焼け残る芯の部分だけが地に伏せると、その地面と遠くで残された右腕の元で方陣が輝く。

モヤモヤと集まる瘴気。

遠くに消えたスコップや漂い消えた煙を元にしたソレが焼け残る身体に集まると、再度現れる終われない悪魔。

「仰る通り、この程度ではまだまだ。さあ、もつと……やつと温まり始めたのです、もつと身を焦がして頂かないと」

復活するやいなや藍に見せたような顔を萃香に向けるアイギス。

久しく感じていなかった憎まれる感情、自身が糧とするモノに近い

想い。

そこから見られる憤怒の表情、向けられる怒りの宿る視線。

忘れかけていた身体の痛み、流れ落ちていく暖かな血、そしてその匂い。

自身が纏う焦げた血の匂いに頬を緩めるアイギス。

最近は何が取れ丸くなったと感じていた悪魔だったが、やはりこういったモノは好ましい。

血で血を洗う命のやり取りは楽しいと心の底から歓喜していた。

高ぶる何かに自身が散らされる。

昂ぶる何かを自身が散らす。

これを楽しまずに何を楽しめというのか？

ソレを萃香に伝えるように、声を漏らして嗤う悪魔。

終わらない冬が続いてすっかり冷えた思考と身体。

冷えきってしまったコレらを暖めるにはピッタリの相手が現れた。

ここ地獄の売り物を買ってくれた相手、良き客となりかけてくれた。いる鬼に向かい強く感謝する商売人が、瀟洒に微笑み鬼に向かった。



## 第四十九話 燃ゆる地に訪れるは

享楽と悪徳に塗れた街、自身の欲のままに動き、喚く者達が蠢く地底世界の繁華街。

一丁目は美しく作り替えられた温泉街といった様相の温泉街、実質は綺羅びやかな風俗街というような店しかない元地獄の二丁目。

普段のここなら酒や色を楽しむ男どもの胴間声どうまごえや、その男達を自分の胸元へ引つ張りこもうとする女郎達の猫撫で声が聞ける旧都だったが、少し前に始まった鬼と悪魔の小競り合いがその視界に入ると、皆が皆またかと伝声でんせいを上げ始めた。

一つの方向を見る住人達の視線には土煙と舞い飛ぶ屋根瓦が映り、立てられている耳には豪快に何かを殴打する衝撃音等が届いていた。

——この雰囲気からすれば以前のような事になりそうだ……

盛大な音と土煙が舞い上がる中、誰かが発したその一言。

旧都のほぼ中心で沸き立つ荒事の狼煙、それを見つめる誰かが不意に漏らした一言。その眩きが何かを崩壊させる音にかき消されると、聞き耳を立てていただけの者達がそれぞれに動き始めた。

ある男は自身の営む店から客を追い出し閉める。

ある女は開けて見せていた谷間をしまい、いそいそと暗がりへと姿を消した。

モウモウと立ち上る煙や埃とは逆に、誰もが下を向いたりあらぬ方向を見たりして、我関せずという態度を見せ始めた。

そんな中誰かがまたぼやく。

——旧地獄が地獄に戻った時のあの景色がまた……

通りに残っている誰かの声が、静かになり始めた町中を通り過ぎて行く。

それを聞いていた店仕舞いの男は、また儲けのない仕事かと嘆く。

影へ消えた女は、また商売どころじゃなくなるのかと袖を振った。

楽と悪を楽しむ者達が諦観する姿を晒け出す、少し前までは湯煙と喧嘩が地底の華、そう言い切る者しかいない世界であったが、弾幕ごっこが広がりを見せ浸透した今は血と喧嘩の気配が薄まり、底世界

の花型名物だったものは今では中々見られないものとなっていた。

そんな過去のお楽しみを現在進行形で楽しむ者達がいる。

一人は新参者だが、街の顔役である星熊勇儀と盛大に殺り合い、旧都を火の海と化したあの悪魔。霧と化した喧嘩相手と楽しげに殴り合いをするアイギスが、この争いを楽しむように嗤っては殴り飛ばされていく。

先程から殴り飛ばされ建物を抜いていく彼女、焼け千切れたスーツの上着やネクタイをたなびかせ、今も瓦礫を増やしている。

「しつこいってのは見知っていたが本当にしつこいなあ！」

飛ばした相手に向かって罵声浴びせる鬼、伊吹萃香が言葉と共に火球を滾らせる。

萃香の手の平の上で躍る橙色。数瞬揺らめくと、激しく燈りながらアイギスに向かって放たれる火線となった。瓦礫に埋もれ姿の見えなくなったアイギスに鬼の炎が奔る、発する熱から表された時のように周りの景色を揺らがせて進む火の玉が瓦礫を焼き焦がす。

「これで何度目だ？ てえか何回殺せば死に切るってんだ？」

焼き上げられる瓦礫を見つめ再度悪態を吐く、アイギスから寄越された煽りの通りに黒羊を焼き上げる萃香。

建材が焼け落ち炎の高さが低くなると、チリつと小さな音が鳴る。

何かに火が入るような、着火したような音がすると、耳に入ったそれを確認するように二本の角が僅かに前傾する。すると、その角のど真ん中目掛けて宙を裂いてくる物があつた、硬い何かが空気を裂く高音とともに萃香の赤い瞳に収まる。

「ようやく暖まったってのは嘘じゃなかったみたいだねえ！」

激しい回転から金切り声を上げるアイギスの三本目の角、纏う炎をそこいらに撒き散らし数本のスコップが萃香に目掛けて宙を切り巻いた。それを見据える萃香が吠える、歪んだ笑顔のままに迫る炎刃に對して愛用の瓢箪を構えてみせた、鬼の豪腕を以って横に回転する紫色の大きな瓢箪、その口部分から繋がる鎖をぶん回し、こちらも回転速度を上げていく。

鬼の秘宝が紫色の輪にしか見えなくなると、そこ目掛けて迫るアイ

ギスの回転ノコギリ。

「これも知ってるんだよ！」

萃香が吠え嗤う。

瓢箪を振り回し、放られるスコップを何本も何本も弾き返しては声を荒げる、同格であるあの一本角と黒羊の争いの始終を見ていた萃香が怒号に近い嗤い声を上げ、弾く。

カンカンと折れたり、アチラコチラに弾かれていくアイギスのスコップ。

十数本がスコップからただのガラクタになった頃、笑っていた鬼が瓢箪を煽った、二度ほど喉を鳴らした後で雑に瓢箪から口を離すと、鬼の酒が薄い放物線を描いて宙に舞う。

「手ノ内がバレてイル、コレは中々どウシテ……ヤリ甲斐がありませんね」

未だ鎮火しない炎熱の中から聞こえる声、普段通りの低めの声だが何処か歪な声色が萃香に向かって囁かれる。喉が焼け、掠れたように聞こえる声、煤けたその声が嗤っていた鬼に届くと声の主を探し強く睨む。

並の者なら視線だけで凍りつく冷たさが見られる赤い瞳、それがガゴンと崩れた元長屋の奥を見据えると、同じような赤い目と視線が重なった。

「あん？　なんか言ったか？　ぶつくさ言ってるなら出てこい！　口数が多いって煽りはてめえがくれたもんだろうが！」

鬼火で焼かれたアイギスの喉から出た言葉、内容はただの独り言だったのだが、対面する萃香は何かを言われた事だけに気が付いたようだ、視線には正しく気が付いたがなんと言われたのかまでは聞き取れていなかったらしい。

子供のような身体を大きく仰け反らせ、私の上だと見せつけながら顎を上げ、下げた目線で傲慢さを見せる萃香が、再度酒で喉を潤し、未だ炎の渦中にある悪魔を睨む。

灼けるような度数のアルコールで喉を鳴らす伊吹童子、かつて酒が原因で外の世界でしてやられた鬼が瓢箪を高々上げてはふらつく姿、

軍場にそぐわないその姿が見られるとカラアンと金属がぶつかり合う音がする、鳴り響くその音は声の出にくいアイギスからの返答。

スコップが打ち鳴らされると炎や煙が漂う瓦礫が吹き飛ぶ、そこから現れるは、煤けて黒さの増した羊の悪魔。

姿を見せると両手に得物を握り奔る。嬉々とした顔で鬼に向かって迫る黒羊、二本の炎の刃を振り上げ攻め立てるがその攻撃は届かず、薄れ散りかけている鬼の霧を辺りに広げるだけであった。

「物理的な攻撃は届かない、そう考えるべきでしょうか？」

「届かなくはないさ、さつきから少しずつ焼き切られて気に入らんよ。まあそうだな、ソレだけで全て焼くってんなら……何年かかるかわからんがな」

空を切ったアイギスに萃香からの返答があった。

姿は薄れ最早見られない、声だけはつきりと聞こえる状態、疎密となった鬼の四天王が自身の持ち得る能力でもってアイギスの攻め手を無効化したようだ。

返事と動きからふむと、何かに納得し焼ける角を放り投げた黒羊。そのまま両手の指を合わせ、音を鳴らす。

乾いた指の音が辺りに響くと、鬼の霧が晴れていく。

「この方が早いですね、見えなくともそこかしこにいらつしやるのでしょう？　であれば回り全てを平らに均せなぐばその内に終わりもあるはず……何年でも消し続けて差し上げますとも、終わりまでお付き合いくださいいますか？」

パチンパチンと両手が鳴ると周囲に感じられる酒気を帯びた霧が消えていく。

数度かき消されアイギスの能力を体感すると、萃香の拳だけが具現化し指を合わせる腕目掛けて暴威となって動き始めた……が、その拳もアイギスに穿たれ、暴力となること無く消えていった。

が、消えたはずの拳はアイギスの視界の外、背後側から再度振り回される。

幾分小さな鬼の拳、最初の一撃に気が付いたアイギスが微温い温かさとしりを感じる腹を見る、そこには背から抜いている鬼の拳が生え

ていた。

「これは？ 確かに消し……」

言い切る前に口内を血が満たす、腹から生える幼女の腕が数本に増え、中にはアイギスの中身を握り外へ露出させている拳までもあった。

赤黒い内腑をつかむ腕が強く結ばれる。

後から追加された萃香の拳が後ろから前へと白い骨を抜き貫いてくる。

穿ち消したはずの拳に逆に穿たれて、歪な点線を見せるアイギスの腹を一番大きな身体をした萃香と、それよりも小さな萃香の群隊が上下に断った。

血飛沫と中身を散らせ分けられる黒羊、それでも上半身だけで動きを見せ、両手の指先を合わせるが、その指がはじかれる前に漂い広がる霧より現れた新たな萃香に指を振り切り切られた。

「こんなもんかい、羊の悪魔さんよお？ この程度で私に喧嘩を売ったつてのか？……舐めるなよ！ 我が群隊は百鬼夜行、鬼が萃まる所に人間も妖怪も！ 居れるモノなどいないってんだ！」

上下二つに分けられたアイギス、下側は踏みつけられて、その上側は本体らしい鬼に持ち上げられ掲げると、死に体の悪魔に口上を言い切って上半身を投げ捨てた。

雑に放られ血も、そのナカミも周囲に零しながら地に伏せる黒羊。

それでも未だ終らず、上半身だけで嗤ってみせると、裂かれた下半身が萃香の霧よりも濃い、黒い瘴気となり始め上半身の元へと伸び漂っていく。

本当にしつこい、が、殺し甲斐はある、決め台詞を言い切り眺めていた鬼の四天王も、羊の悪魔と似たように嗤って大きく萃まり『育ち』始めた。

く少女闘争中く

再度の炎上を見せ始め新たな争いの火種となっている地底世界。

熱風に血煙混ざるソコとは別の場所で、従者に揺り動かされ穏やかな眠りから目を覚まそうとするものがいた。夢の中なのか現の世な

のか、よくわからない雰囲気を持つこの世界。その地に建つは一軒の日本屋敷。広すぎず、けれど狭くもなく、まるでこの屋敷に住まう主人のような佇まいを見せるお屋敷の奥、従える式の尾にも負けない柔らかな温かさがありそうな布団の中で眠る屋敷の主。

「紫様……」

ゆっくりと上下する上掛けに手を添えて、小さな声で主を呼ぶ八雲藍。

2度ほど肩の辺りを揺り動かすが主からの反応はない、致し方ないと触れる場所を変え、冷えた指先を紫の首筋に差し入れた。曆の上からは感じられない、冬のような冷たさがある藍の指が紫の鎖骨を撫でるとピクリと動き、薄ぼんやりと目を開いた。

「……おはよう藍、貴女から私を起こすなんて、何かあったの？……着崩れているわね、どうしたのかしら？」

布団から半身だけを起こし、透き通るような肌を露わにしながら問いかける紫。

数カ月ぶりに寢床から出した右腕をスキマへ通すと、少し曲がっていた藍の帽子を綺麗に正す。少し着乱れた道士服と帽子を慌てて整えた跡が見られる自身の愛する式を愛でながら、左手では別のスキマを開き、さつと一枚軽く羽織った。

「はい、少々……襲われはぐってしまいました」

直された帽子と、愛おしそうに撫でてくれる主の手に自身の手を添えて、問われた事へ偽りなく語る……が、言葉では言いにくいのか、眉と耳の両方ともに僅かばかり斜めに傾いていた。

「襲われ？……おいでなさい」

撫でていた手が藍の後頭部へと回り、そのまま紫の顔へと引き寄せられる。

何の抵抗もなく、するりと動く九尾の尾裂狐<sup>おせき</sup>。

母に呼ばれた幼子のように紫の元へ体ごと頭を預けると、二人の額が優しく触れ合った。

「まずは報告を簡潔に、現状はその後でいいわ」

困り顔の藍に笑いかける紫。

式と主という間柄の二人、会話でも当然意思の疎通が可能だが紫の寝起き時だけは毎回このように肌を触れ合わせ、情報のやりとりを行っていた。

伝わる内容などは語る事とほぼ同じだが、こうして寝起きから式を愛でるのが恒例となっていてやる取りであり、これが二人の確認作業であった。合わさる額部分から施した式を通じ、藍と自身の記憶の境を曖昧なものとして、手駒が見て感じた事を情報として仕入れていく紫。

「幽々子は、動いているのね……もうすぐ霊夢達が白玉楼へ着くというところ、か」

微睡む思考を藍の冷静さで補いながら、幻想郷の現状から読み取り始める。

そうして目覚める季節にはなっていたけれど、目覚める気温にはなっていない理由を知る紫が僅かに頬を緩めた。

「このままであれば幽々子と霊夢達が弾幕ごっこをし始める、という感じかしらね」

「特に問題視すべき部分はないように考えます、幽々子様に限っては」読み通り、そんな顔で笑む主と答えを述べる従者。

これは以前に紫自身から仕掛けたもので、寝ている間に起こっても問題ないだろうと判断した異変である、その為動揺などは見られない。

「限って？ 何か別の問題でも？……アイギスの方ね……萃香？ 萃香が何故アイギスと争っているのかしら？」

次に藍の引き出しから取り出したのは話しに出た友人の事、現状を知り読み通りだと微笑んでいた紫の顔に真剣さが見え隠れし始める。

「感謝すべき、アイギス殿はそのように話されておりました」

「感謝？ 萃香に向かってそう言うのは……二人に親交はなかったはずよね？」

「会話の流れ、そして見ていた様子からは初対面といった様子でございました、存在自体は知っていたようですが」

段々と曇っていく主の顔、柔らかく微笑んでいた表情は冷たく妖艶

なモノへと変じていく。

敬愛する紫の大真面目な顔を間近で眺め、背に冷たいものが流れるのがありありとわかってしまう金毛九尾、それでも聞かれた事を言葉にして答えた。

声と思考、両方で伝える場合は藍が紫に策を求める時であった。

「争いを止めもせず戻り……いえ、あの二人相手では荷が重いわね、そこは不問としましょう」

「申し訳ありません、私一人では二人を止めるどころか手も出せず、不甲斐ない」

「不問に処すと言ったわ、それよりも何故争っているのか、それが問題ね。今二人のどちらかにでも消えられてしまつては、困ります」

「二人？　伊吹萃香が萃めている春、あれが保険だというのは理解できませんが、アイギス殿には何か？」

鬼の話聞いて一度は落胆した藍だったが、今では思考を切り替えて、全ては主の考え通りになるようにするのが最優先だと考えているようだ……そもそも自身の思考で読めるような事をこの主はしない、私で考えつく事しか成せないのなら式として慕う意味もない、取り戻した冷静さで藍が結論付けた事である。

「アイギスも保険よ、本当に最期の保険」

「伊吹萃香と同じだと？……万一の場合は西行妖を穿ち、消し去る。そういったおつもりでしょうか？」

真顔から一転、普段使いの笑みへと変わるスキマの女。

自身の成したい事の為に友と呼ぶ者達を異変の元凶として、そしてその異変を抑えるための切り札として利用する、利用しようと画策する女の顔へと変わる……以前にアイギスに見せた表情、利用し合うだけの関係などと言ったあれも嘘ではないが、今の紫の心情も嘘ではなかった。

万物の堺を操る幻想郷の管理人、白にも黒にも成らず、同時に染まる事も出来る策士が、良い読みを見せた愛しい式に微笑み少し話した。

「それも手としてはあるけれど、それが無理だというのなら別の方法



で風穴を穿ってもらおうと思っっているわ、それだけの事よ……さあ、話は兎も角として二人を止めに行きましょう、お友達同士が傷つくなんて見ていられないもの」

すつと立ち上がり全身を冬の気温に晒す紫。

前も留めずにいた服を脱ぎ、輝く金の髪を一度かき上げた。春というには弱い日差しを受けふわりと髪が輝くと、一瞬で毛先がリボンで纏まり、透き通る肌の上にも多量のフリルが目立つドレスを着込んでいた。そのまま無言で藍に歩み寄り白いコルセットの赤紐を結ばせると、手先に向かって広がりが見られる白と紫の袖先を眼前に伸ばす。

結ばれる紐の音だけがする部屋の中、音もなく口を開く異界への空間、その中へとブーツのつま先を進め、地底へと向かう幻想郷の管理者。いつも以上に胡散臭い、あからさまに作っていますという顔色で荒事続く地の底へと向かい始めた。

## 第五十話 火中に敷く境界線

空のない地底世界。

見上げて黒、もしくは濃い茶色くらいしか見られない空に、今は灰と赤が立ち上っていた。

モウモウと立ち上るは荒事の空気。

敵対する悪魔を焼いた鬼の焰、それと悪魔の角から発せられた炎熱が、綺麗になつた地底の町並みの一角を昔の荒れた街へと焼き戻していった。

旧都に住む物は当然として、以前の荒事で地底の外れに仮の住まいを建てることを許された、地霊殿の下に封印されていた者達がいる辺りからも、街がどうなっているのか一見するだけでわかるような状況。だというのに、地底の者達は見に行く事よりもその後には備えるように聞き耳を立てるだけとなっていた。吹き飛ぶ建物や、飛び交う炎、漂う煙を眺める住人達がものも言わずに聞き耳を立てる……が、耳だけで状況を視ていた者達の視界にむりくり入ってくる者がいた。

その者が叫び、地底の妖共の耳に一際大きな音を届ける。

「おおおおらあー！」

幼さを見せる鬼の体型に似合わない豪快な声。

けれど、今の彼女の大きさには似合いの声を腹から放つ萃香。凹凸のない体型はそのままだが、今の彼女の体格は立ち並ぶ長屋の屋根よりも大きく、角の先端を含めれば一番大きな地霊殿の屋根に届くかというサイズの鬼。幻想郷中に散らしていた自身の『霧』をより萃め、本来の大ききとなった鬼の四天王、息吹萃香が吠えた。その咆哮が響き渡ると、数瞬後、声に似合いの衝撃音が轟いた。すでに地の底だというに、それすらも割る勢いの拳がただ一人に向かって放たれる。

巨大な幼子の豪腕が向かう先、その狙いは当然敵対者。

「見た目に似合わず猛々しい拳ですね……ですが……」

猛然と迫る拳に対し左手だけを伸ばして語るアイギス。

アイギスの身長よりも大きな拳、暴威の塊となつたソレが今まさに眼前に迫るが、伸ばした左手と拳が触れ合うと、両方が一瞬で掻き消

えた。

「私の拳を?! って、てめえの腕もねえのかい!」

振るうはずの拳が消され、一瞬戸惑う萃香。

アイギスに向かい文句を垂れてから、再度霧を萃めて拳を成す。

「文字通り命の削り合い、これもまた一興ですね、萃香様」

左腕の付け根を含む半身、肩から背中の中肩甲骨までを吹き飛ばされたアイギスが、僅かながらも戸惑いを見せた鬼に嗤いかける。

黒羊が過去の鬼退治で見せた『触れれば穿つ事叶う』という事。

それをこの鬼に対しても実践した結果が現状のようだ、自身の身体を自由に霧へと変え物理的な攻撃は効かない萃香。それに対し、相手が私を消そうと実態を成した瞬間であれば触れられ穿てるのではないか?

その考え通りに動き、読み通りになった事が面白く、たまらないと嗤う穿つ者。

「楽しそうだなあ、ええ!」

「楽しいですよ、この上なく。形こそ違いますが同じく終わりの底が見えない者相手……どこまでやれば壊し切れるのか、それを考えるだけで堪りませんね」

「壊し切る、ねえ。ならば先に壊れてくれるなよ! 削り合いなんて言った事、嘘としないでくれよなあ!」

嗤うアイギスに言い放ち、一瞬で姿を薄れさせる萃香。

目を細める黒羊の視界からは消えていたが、遠く街の外れから見ている者にはその姿が見えていた。何も言わず無言で見っていた者が見上げる、錨を背にした少女が帽子を脱いで地底の空を拝むと、その先には大きな鬼が小さく見えていた。

水夫帽の少女が見上げる空を隣の頭巾も見上げ、少しずつ視線を降ろしていく、その先には黒いスーツに斑な赤を差し色とした悪魔が、失った左側を取り戻す姿が映った。

「何処に行ったのかと思えば……触れられなければ問題ない、とでも?」

左右から上下へと瞳を動かすアイギスが、上の空といった表情で眩

く。

遠くの空で見つけた大きな幼女の足の裏を眺め、右手の指を合わせそちらに向ける……。そして背後から忍び寄る小さな鬼の軍隊にも空いた左手を向けた。

「これは知っている、でしたか？ 私もソレは知っております」

静々と語るアイギス、萃香に言われた売り言葉を買取って自身の言葉とし、低い声で売り手に返却しながら指を打ち鳴らした。自身のドス黒い血に濡れ滑りの良い指先、それを力で擦り合わせ、指が折れんばかりの力を込め鳴らす。

音が響くと消える鬼。

空に在る巨体も、背後に現れていた小さな百鬼夜行も、その空間毎削り取るように穿つ。

「やってくれるなあ！」

上と裏、両方の自分を消された鬼がアイギスの真横、大きなアモン角に隠れ見えない角度に現れ、返事と共に拳を放つ。錐揉み回転し、勢いと腕力を右手一本に全ての力を込めた一撃を放つ……。がそれは届かずに終わった。

「そこからも来るのだろうか、これも読めておりましたよ？」

全身をバネに殴りつけようとした鬼、その頭にアイギスの腕が伸び身体を捕らえる。

単純な話、小さな萃香の腕よりも勇儀と同じくらいの体躯を持つアイギスの方がリーチがあるというだけの事で、鬼の拳は届かなかった。

「くおっ！ てめえ、見えて……」

「おりませんよ？ ですが、この手も知っておりますので」

過去レミリアや妖夢が攻めた角度、相手の力量や年季こそ違うが、同じく死角より狙ってきた者達と同様にこの鬼もそこから来る。そんな読みはあったが……。軍事に長けた相手がまさか声まで発するとは、と、些か面食らいつつも反撃に移る黒羊。

眉間を潜め何かを言いかけた鬼の頭、それをムンズと捕まえて地面に叩きつけ、言い切らせる前に静かにさせたアイギス。茶色の頭を似

た色合いの地面に埋め捕まえた理由を話すと、ヒールで以って踏みつけ穿つ。音もなく穿たれ掻き消えた連携する群体の一部、次は何処からと、血に濡れた髪を揺らして周囲を眺む黒髪の羊。

「舐めるな、とも仰っておりましたね。そのお言葉もそっくりお返し致しましょう、まだ片手で余るくらい殺されただけの事、この程度で私を仕留め切れるとは思わないでいただきたい」

姿を見せない鬼を挑発するように、身体を二つに分かたれた瞬間に言われた言葉を返す。

ハスキーで小さな声、それでも地を這って遠くまで響くような低い声色で語るアイギスが、霧の濃い部分に向かい顕現させたスコップの刃先を向ける。

主の声色に似て綺麗とは言えないが、玄人が好むように鈍く光るスコップの刃先で一度空を切り、その摩擦から悪魔の炎が刃に灯ると、切っ先に好敵手が姿を現した。

向けられる切れない刃を眺め、腰に縛った鎖へと手を伸ばすと、その先に繋がる瓢箪を煽ってげふうと酒精を吐き出す萃香。

「ハッ！ 派手な挨拶といい今の物言いいいい、身体に似て態度も口もデカイなあ！」

「口は兎も角、身体の方は貴方様が小さいだけかと。同じ鬼ですのに、随分と……慎ましやかなお体ですね」

「あん!? うるせえ、あいつらが無駄にデカイんだ！」

「あいつ『ら』というのが気になりますが、それは後で何うとします。言葉よりも別のモノで語らう方がこの場には似合いでしょう?」

「そうさなあ! 理由は知らんが売られた喧嘩だ! 買い占めてやらにやあ鬼の名が廃るってもんだあ!」

アイギスが空を切った事で仕切り直しといった空気が流れる、闘争の空気が流れる前のように少しの会話をしてから、再度血を流す雰囲気醸し出す二人。

その空気を裂くように、悪魔と鬼の間が割れた。

コトンと響く可憐な足音、ふわりと輝く金の髪が割れたスキマより現れる。

「その理由、私にも教えて戴けないかしら？」

「お、紫い？ まだ寝てると思ったが、あつちが佳境だもんなあ、さすがに起きてきたか」

「お目覚めとなるにはまだ寒いようですが……おはよう御座います」

「おはよう二人共、なんだか楽しそうだけれど、寝起きから血生臭くて嫌になるわね……寝覚めが悪い気がしますし、ここは預かせてもらいますわ」

突然に現れた紫。

何を？ と、間に立つスキマ妖怪を見て二人が同じ事を考える……

鬼がしかめっ面になり、悪魔の頭が傾いだ瞬間、二人に足元に胡散臭い空間への入り口が開いた。落ちかけた二人がそれぞれに浮かび上がろうとするが、落とされた空間より全身を出す前に一方通行な出入口は閉じていった。

「取り敢えず二人が消える懸念は消せましたし、後はそうね、やっぱり聞いておこうかしら」

パンと鳴らして開かれる扇子、紫色の蝶が描かれる愛用の品を開き、先に沈んだ二人と同じくスキマに消えていく妖怪の賢者。炎上し荒れた地底の町並みをゆるりと眺めてから、問い正したい者がいる空間へと沈み消えていった。

く少女達潜伏中く

音がするのであればギョロギョロ、そんな動きを見せる瞳が連なる空間で一人不機嫌を露わにする悪魔。鬼に向けていたスコップの先を視界にある気持ち悪い瞳に向かって掲げている、2個、3個目と切っ先を流していくと5個目に差し向けた辺りでここに落とされた者が姿を見せた。

「取り上げるとは酷いですね、折角温まってきたところなのに」

「丁度仕切り直したところだったのでしよう？ なら続きは後日にして頂戴」

「それはお願いと考えても良いのでしょうか？」

「構わないわ、必要だというのなら三指付いて言い直してもいいわね」  
扇は開かれたまま、けれど顔を隠しはせず、合わせた指先を隠して

ゆるりと膝をたたみ始める紫。両手でふわつとドレスを畳みその膝が地面代わりの空間に触れそうになる、その前に、アイギスからお待ちを、という返事があった。

「あら、何故止めるの？ 強引に喧嘩を止めた詫びはいらない？」

紫が床面に膝をつく前にアイギスの手が伸びる。

すつと伸ばされた手は紫の身体を支え持ち上げた。

「ええ、そうまでする理由をお話くだされば結構です」

「……理由ね。私もソレが聞きたいのよ、何故萃香と闘うことになったのか、問えば答えてくれるのかしら？」

見下ろす形で話すアイギス、髪に残る自身の返り血がポタリと垂れる。

鬼と自身の熱により水分が飛び、赤黒く変色した悪魔の血が地で弾けると、顔を持ち上げ大きな帽子で隠していた表情を見せた紫、あまり見られない真面目な顔をしていた。

「それも先にお話くださればお答えしましょう、少しでも悪かったと思うのであれば、譲歩して見せてほしいものですね」

真剣な表情を見せた紫に同じく、アイギスも誤魔化さずに真剣に返す。

楽しい楽しい闘争の邪魔をしてくれた相手、これが紫でなければ代わりに相手をしてくれと言いついで出すくらいに苛ついている黒羊だったが、相手は元雇い主であり、この楽しい土地幻想郷に足を踏み入れる理由をくれた者だ。邪険にも出来ず、かといって素直に許す事も出来ず、ならば好ましい荒事の代わりに興味を惹ける理由を話せ、そう伝えるアイギス。

「私のは単純な理由よ、大事なお友達が三人も消えてしまうかもしれない、それは避けたかったというだけ」

問われた理由を語りながらスキマを複数開く紫。

髪を結びリボンと同じ色合いの物が数個宙に浮かぶと、それぞれ二個ずつタテ・ヨコ・ナメに繋がってパクリと開く。小さな物には先程まで争っていた鬼や、偶に手合わせをしている半人半霊の剣士が映っている。鬼は諦めたのかドカリと座り込みまたも瓢箪を煽つて

いる、そして剣士は瞳を瞑り、半身である白い浮遊体と並んでぐったりと地に伏していた。

「妖夢殿？　彼女が傷ついているということは異変はもうすぐ……」

「終わるはず……でも見て欲しいのはコレではないわ」

二人の姿を確認させると並ぶスキマの位置をずらす、次にアイギスの目に留まったのは一番大きなスキマ、そこに移るは桜吹雪が風に舞う枯山水の庭園。

見慣れた庭には明るさはなく、冥界の名の通りに暗く見える場所、そこには艶やかに羽ばたく蝶が花嵐と共に舞い飛ぶ景色が広がっている。その映像の中央で小さく移りこむのは、紫と同じ柄の扇を背負った西行寺のお姫様。優雅に死界の空を舞い、対峙する三人の少女と弾幕勝負に興じている。

「楽しそうにされておりませぬ、心配する必要などなさそうに見られますが？」

「理由は幽々子でもないのよ、あの子の奥で花開くモノが問題なの」

映る映像の焦点が変わる、幽々子を捉えていたピントがその奥、今まさに満開となりかけている大きな大きな桜の木に移る。幽々子と大きな桜の木、桜吹雪が舞う最中だというのに、その間が不自然なくらい何も無い景色。まるであの者達の間には割り入れられない何かがあるというように不自然に、そこだけ呪われているように空いた景色のスキマ。

それを見ていた紫の顔に一瞬だけ暗い影が差し、その陰りを横目に見ていたアイギスが問う。

「いつかも気にされておりましたね、あの桜になにが……いえ、咲けばどうなるのでしょうか？」

「西行妖が満開となれば幽々子は消えるわ」

「消える？　亡霊となって幾久しいあの方が消えるなど……白玉楼で見せられた表情の理由はそこでしたか」

「あの時はありがとう、アイギス。そしてもう一度感謝を述べる事になったら……その時は手伝って頂けるかしら？」



少しの会話と以前の流れから、紫の話す理由のほとんどを察したアイギス。そして少しの動揺をフオローしてくれた事に謝辞を伝え、それとは別の理由で頭を深く下げる紫。

そのまの姿勢でもう一度感謝を述べるような状況、あの化け物桜が完全に花開く事になったのなら『その時』の『ソレ』を『どうにか』したい事を言葉に含ませる。

大事な部分は何も言わず、ぼやかしたままに万一の際には手を貸して欲しいと話す妖怪の賢者。

「その際にはお仕事としてご依頼くださいませ、お客様」

白い帽子が落ちそうなほど腰を曲げる紫を起こした後、順番待ちでもしていたように次はアイギスが頭を垂れる。鎖骨よりも少し上くらいの長さがある、揉み上げ辺りの癖髪と、大きなアモン角の先からポタタつと粘りのある赤い雫が落ちる、その数滴がアイギスの頭を起す紫の袖に飛び付いた。

「わかりましたわ。さあ、私の話は終わり。次はアイギスの番ではなくて?。」

「私の理由はもつと単純にございます、ただ気に入らなかつたというだけの事ですよ」

紫の袖に飛んだ自分の血を眺めつつ、気に入らなかつたと言だけ話す。

『何が』と問われればこたえるつもりにいたアイギスだったが、返答を受けた紫からは気に入らない、というオウム返しが小さく聞こえたのみで、それ以上の詮索はなかつた。

アイギスの語るこの理由に嘘偽りなどはない、本当にあの鬼が気に入らなくて喧嘩を売っただけである。この黒羊の楽しみである力ある者との小競り合い、春が来ればあの花の大妖怪とやりあえるだろうお楽しみを、あの鬼が春を隠し持っていたことで遠のけられていた事が気に入らないというのが一番の理由。

他にも一時は同じ相手に仕えた相手、欲求不満を解消するに丁度いいだろうと思えた金毛九尾を落胆させたのも気に入らない。そして知らぬ内に萃められ、毎日に近い頻度で酒盛りをするように操られて

いたのが気に入らない、などもあるが、一番の理由は私の強い悪魔らしい、酷く自分勝手な物であった。その溜まりに溜まった鬱憤を晴らすのに都合が良い、いいタイミングで来てくれた事にアイギスは感謝という言葉を送っていった。

「内容は問わず、でよろしいのでしょうか？」

「いいわ、聞いたところで私には関わりない事でしょうし。それよりも……今のアイギスにあの桜、穿つ事叶うのかどうか聞いておきたいわね」

互いに胸の内を話しスッキリとしたところで普段通りの顔使いに戻る。

胡散臭い笑みを貼り付けた妖怪の賢者が、袖に出来た赤く小さな染みを撫でて、瘴気を纏い自身の怪我を癒やした瀟洒な悪魔に問いかける。

「以前であれば出来た、というところでしょうか」

「過去形なのね……幻想郷で長く過ごして弱体化したから、という事かしら？」

『以前であれば』など、昔ならそういった飾り言葉は付けずに話しただろう穿孔の黒羊が、右手の指を合わせて目線の高さにまで上げると、鳴らさずに音なく滑らせた。

紫の語った通り確かに弱体化しているアイギス、幻想郷に移り、住み始めてすぐであれば外と変わらない力があつたが、受けなくなつて久しい悪魔崇拜の心と、幻想郷縁起というこちらの書物にそう書かれた事から随分と弱体化していた。

本に記された小悪魔があのような状態であるように、近い立場のアイギスも書に記されればそうなつていくようだ。

「正確にお話いたしました。あの桜自体は穿つこと叶いましょう、ですが今のような、西行寺様と強く結びれている呪縛のようなアレは難しいかと……全盛の力を持ってすればそれも可能だったのですが」  
いつもの顔、いつもの表情を作った紫に偽りなく述べるアイギス。

全てがこの賢者の術中にあるのなら先のように顔色を変えたりはしない、最初から胡散臭い笑みを浮かべ、最後までその顔のままに話

すのが八雲紫というスキマ妖怪だという事を、この悪魔は仕えてきた時間から見知っていた。それ故今が危うい、切羽詰まっている状況だというのも自ずと理解し、欲しいだろう答えを整然と述べた。

「そう……不便な力ね、ソレ」

「紫様ほど難儀ではございません」

静かに聞いていた紫が少しの軽口を吐く。

それに対してアイギスも返す。

地底世界を訪れる前に話した会話の流れ、あの頃を彷彿とさせる言葉を話す二人。

アイギスの能力は先ほど彼女が述べた通りだが、紫も今回の状況では手を出せずにいた。万物の境を操れる彼女が手が出せないなど有り得ない、が、今紫が瞳の中央に捉えている者を思えば手が出せずとも当然であった。幽々子と西行妖の繋がりを弄び、切り離してしまう事は出来る、されどそうしてしまえば幽々子が幽々子でなくなってしまうかもしれない……西行妖を封じているのは彼女の遺体なのだ、それとの繋がりを断つてしまえば親愛なる友人が、その皮だけを被った別人に成ってしまうかもしれない。

そう考えると手が出せずにいた紫。

だからこそ、そこにあるモノを穿つ『だけ』のアイギスを最後の保険としていた。

彼女の能力であれば、今の在り方を歪めずに繋がりを穿ち断ち切る事が出来る、桜の下に埋まる遺体が自身の物だとは知らない幽々子、彼女がこの繋がりを立たれたと気が付いても存在に影響はないだろう……そのような判断からの保険であったが、どうにも思惑通りにはいかなかったようだ。

扇の奥に難しい顔を隠し、瞳だけは笑んで見せる紫が、激しく飛び交い始めた反魂蝶や破魔の札、綺羅びやかな星、銀のナイフが乱れ飛ぶ空を眺む。このまま華麗な弾幕勝負だけで終わってくれば、そう願うスキマを見つめる空間の主だったが、並び立つアイギスはそんな変化を隠そうとする紫を眺めていた。

〈少女見物中〉

やや暗いスキマ空間の中、色取り取りの弾幕が灯り代わりに映り込んで紫の横顔を明暗とさせていく。そうしてしばらく眺めた頃、幽々子を見つめる紫の瞳に力強さが宿った、幽々子が少女三人の連携弾幕を浴び今にも落ちる寸前となると、その背で揺れる桜の原木が妖しく輝いたからだ。

このままでは……そう認識した瞬間には口を開いていた。

「アイギス、お仕事よ」

ギリつと扇の要を鳴らし、憤りを音として表してから一度目を伏せて視線を流す、憂いを帯びる決意の眼差しでアイギスを見つめて話す幻想郷の管理人。

「此度のオーダーは？」

仕事を受ける、そういった物言いは省略し紫からの願いを依頼として請け負うと、強い瞳のままで見つめる紫を見据えるアイギス。

何をどうして欲しいのか、それを話す前に依頼を聞き入れてくれた友人の前で、ほんの少しだけ強さからやり切れなさが強くなる紫の瞳……自ら動き異変の元凶として利用している幽々子を助けて欲しい、土地の管理人としては言いたくない偏った言葉だが、今の光景とアイギスの在り方を考えるとやむを得ずにはいられた。私が出た行つては……」

普段使いの妖艶で気丈な声で仕事内容を語る、けれど後半になり僅かに声色が弱くなる。

紫自身が出て行つては幽々子を利用してまで起こした異変に意味がなくなってしまう。異変は妖怪が起こし解決は人間が行う、その形が提唱者の一人である紫の介入によって崩れてしまつては流行り始めた物が崩れる、それでは意味が無いのだ。

それを伝える前に依頼を受けた側から声がかけられた。

「スペルカードルールが、という事ですね？ 本当に、難儀なお客様です……心得ましてございます、報酬の話は事後に」

「ええ、頼んだわ、アイギス」

右手を胸に当て肅々とした礼を見せるアイギス。

紫の視点からその右手が見えなくなると一度強く握りこむ、自身の

爪が食い込むほどに力を込め何かを確認する黒羊。その傷からは鮮血と黒い瘴気が僅かに漏れてゆつくりと傷を塞いでいく、全盛期は当然として今の平常時よりも戻りの遅い傷を眺めるアイギス。当然だろう、鬼と争つてすぐなのだ、種族としての不死性だけでは減った体力は戻りきらず、自身の魔力で補い手を修復した。

数度殺され消耗している悪魔、紫の話した通り以前よりは随分と弱体化しているアイギスが、それを知られる前に眼前に浮かぶスキマへと身を投じた。

「頼まりました・・・では、後ほど」

コツンとヒールを鳴らし、後ろ跳びでスキマへ消える瞬間にアイギスが言った言葉。

変わらない低い声色で言った言葉だが、何故か紫には強く言われたモノに思えた。願いではなく仕事として受けてくれた事で『絶対にやり遂げる』というような決意が見えたからだ。

紫の耳に届いた強い決意、それを信頼し黒羊を見送った依頼人。

アイギスの沈んだスキマに向かって指を合わせ、パチンと鳴らすと、映る西行妖が風に吹かれて花卉を散らした。

## 第五十一話 優美に散らせ、冥惜しみ月

綺羅びやかな物など何一つない空。

あつても転生を待つ魂が浮かび漂うか、それに似た雲がかかるくらい。

見られる色もその魂の青白い色や、長い階段の両脇に咲く桃色の花くらいだろうか、そうやって散った後の者や、これから舞い散るモノしかないようなこの世界、冥界。

それが空も地上も花びらが覆ってしまい、今や絢爛さの見られる世界となっている。

見た目だけならなんということはないただの桜吹雪だが、この花卉には魅了される何かが充満していた。誰しもが何れ迎えるだろう生の終わり。そこへ向かつて誘う、死への誘いが花卉には感じられる。ただの生き物が触れれば一瞬で死に絶えることが出来る。それくらい強い怨嗟が花びらの一枚一枚に込められているように見えた。

そんな花びら舞う中を華麗に飛んでは翻る少女達。

それぞれが違った色合いのツートンカラーを纏い、それぞれが自身を特徴付ける弾幕を放っていくが、身体を透かし、どこか機械的に死の蝶々を放つ亡霊姫には攻撃足り得なかった。

「なんなんだよあれ！ 当たっても反応がないのは幽霊だからだつてのかよ！ 弾幕ごっこだつて言うにはズルいぜ！」

ひらりひらりと舞う花卉の嵐。

その中を箒に跨る少女が、小さな肩掛け鞆から色鮮やかな薬瓶を取り出しては放り、火線を引いて縫うように飛ぶ。黒いトンガリ帽子を抑えては横に回ってみたり、制動をかけて周囲の花卉を撃ち落としてみたりと、忙しなく空を翔ける普通の黒魔術師、霧雨魔理沙。

「さあ、多分耐久スペルつてやつでしょ。時間が経てば勝手に落ちるわよ」

返事をしたのは紅白カラーの巫女少女。

冥界に似つかわしくないおめでたいカラーリングで考えなしにそこらに飛んで、テキトーに花びらを回避していく楽園の素敵な巫女、

博麗靈夢。

「庭師には弾幕が通ったけれど、あれは半分幽霊だから？ 多分って、貴女が考えたルールなのでしょう？ 随分テキトーね」

誰かが話すと同時にカチリと音が鳴る。

そうしてスペルカードだけが二人の視界に収まった。

——幻符『殺人ドール』

忙しない黒白の周囲で漂う花びらが、クルクルと回る銀のナイフ群に断ち切られていく。ナイフをすり抜けた反魂の蝶も、突然現れた少女と紫色の球体から発射された銀のナイフで寸断された。弾幕群が消えると少女達が滞空するスペースが出来た。

その空いた空間に二人が近寄ると、並び立つように現れたのはメイド、蒼に白を差し色としたツートンカラーの侍女、紅魔館のメイド、十六夜咲夜。

「私『も』考えたルールよ、大本は決まっていたし私は枠を確かなものにしただけ、だからテキトーではなく適当よ」

「そう、まあそれはいいですわ、取り立てて重要だとは思えませんし」「自分から振つといてそれか、主に似て我儘な言いつぶりだな、メイドさん」

三人が纏まって話す、するとその会話を聞きつけたように皆に向かつて風が吹く。

意思でもあるのか、そう思えるくらいに真つ直ぐに三人に向かつて奔る死の桜吹雪、それに合わさって反魂の蝶も飛び漂ってきた。

「ガールズトークに花咲かしてる暇はなさそうだ！」

右手に携えるマジックアイテムを握りこむ魔理沙、くつと握ると描かれた八卦の陣が僅かに光る。ぼんやりと魔光が灯ると器用に箒の上に立ち上がり、そのまま両手で八卦炉を構えてみせた。合わせた両手の外側、左手の指には七色に輝く魔砲の絵が書かれたカードがある。光が彼女の手に集うと、その絵の物が迸った。

——恋符『マスタースパーク』

スペルカードの宣言と共に魔法使いの魔砲が奔る。

真つ直ぐに突き進む魔力の波動が、三人に向かつて伸びる無数の花

びらを焼き落とし、命を吸う蝶の羽も焦がし散らしていった。そうしてそのまま半透明の亡霊姫をも飲み込むが、魔理沙の収束した魔力が終息を迎えても傷ひとつない西行の姫。

「あ？ 無傷だったのか？ これじゃ私が傷つくぜ」

「言ったでしよ、そういうスペルだって」

「なんでもいいけれど、そういうスペルだと言うのならいつまで耐えればいいのかしら？」

「そんなの、終わるまでよ」

「なあ、やっぱりテキストでいいんじゃないか？」

「そうね、やっぱりテキストでしたわ」

迫る死が消えた事で少し余裕が生まれたのか、軽口を叩き合う少女達。

一歩間違えれば傷つく、まかり間違えばそのまま現世とおさらばしてこの地の住人となるような状況なのだが、随分と明るい彼女達。この余裕は自分たちの放つ弾幕やスペルでどうにかなると見られたからであった。

が、その考えは間違いだったと少し時間が過ぎた頃に気が付く。

く少女軌道中く

輝く汗を散らして飛び回っていた少女達。

華麗に花びらや蝶を撃ち落としていたのはつい先程までで、今では少しバテていた。真っ直ぐな視線を亡霊姫に向けていた魔法使いは僅かに速度が下がり始め、瀟洒な従者も姿を消して次に現れるまでの距離が近くなっていた。

唯一元気だったのは最初から今まで自分のペースを崩さない、のんきに避けて飛び回る巫女さんくらい、それでも見た目は少し変わっていて、最初はなかった博麗の秘宝が巫女の両脇で回っていた。

「おい霊夢、これ本当にスペルか!? 耐久するにしてもキリがなさすぎるって！」

再度のスペルカードを宣言し、冥界の空に星空を描いた魔理沙が疲れた顔で愚痴る。

魔法使いの流星雨に飲まれ一時消えた死の弾幕群だったが、綺羅星



が消えると再度怒涛の勢いで妖怪桜から舞い散り始めた。

「知らない、多分って言ったでしょ。それよりも、どうしたらこの異変が終わるのかって事を考えなさいよ」

研究するの好きなんでしょ？

そんな文句を言い切ってひらりと花卉を避ける巫女。彼女の持つ術の一つ、結界術をもってしても届かなかったほど無量な桜吹雪、さすがにどうしたもんかと悩み、晒している二の腕をかいて考える霊夢。

「ごもつともだけれど、そもそも終わるの、これ？」

思考し動きを緩めた霊夢に向かう花びら、それを右手のナイフで切り伏せ、左手に持った銀時計で時間を確認する咲夜。

この場でこう動き始めてから小一時間は過ぎている、ここまでの長丁場はこの三人の誰もが経験していない、終わりはあるのだろうかと考え始めても仕方がないことだろう。三者三様で異変の元凶を眺め、何か手はないかと思いを巡らせ始めた頃、白玉楼の入り口で動きを見せ始めた者がいた。

左腕や左腿にナイフを飾るように刺し、焦げた右の袖やスカート部分には破魔の札の欠片を貼り付けた半人半霊の剣士、少し前に彼女も目覚め今の光景を見つめていた。

「幽々子様、今のお姿は一体……」

弱々しく漂う半霊を支えにする妖夢、遠く斜め上を見上げ、よろりと片膝ついてどうにか立つ。視界に移る主、すつかりと影を薄くした幽々子を見つめ、今の状態はどういう事かと思案するが、腕や足に奔る痛みが邪魔をして集中は仕切れない。痛みを発生させている原因、解決に現れた人間が放った銀のナイフをしかめっ面で引き抜くと、雑に放り投げ、眉を寄せた。

顔に出した我慢を全身にも向けて、傷ついた左足に少し力を入れて地を踏み込む。痛みは当然感じるが短時間ならば我慢できなくもない、祖父やあの練習相手からもらう一撃に比べればこんなものは痛いうちには入らない、そう自分を誤魔化して奮い立つ。

「このまま長引けば西行妖が、そうなれば……お祖父様はきつと悲し

む」

背負う二頭の柄頭に手を添え、今はいない祖父を思う。

幼い頃の記憶。妖夢の祖父、魂魄妖忌から話された事。まだ剣術を教わる前の、本当に小さかった頃の記憶で、確実な記憶とは言いがたいが、それでも忘れずにいたのは祖父の顔。

白玉楼の庭から見える大きな桜の木、あれが咲いたら凄く綺麗ねと笑って祖父を見上げた妖夢に、祖父は悲しい顔を見せた。あの厳しくも優しくかった祖父が唯一見せた泣き出しそうな表情、何故そんな顔を見せたのか、今となつては知る由もないが……もしこの場にいればまたあの顔をしようだ、そう気が付いた妖夢は自身を奮い立たせた。

背の二刀をチャキツと鳴らす、その音が響くと妖夢の背後でカツンと音がした。

「妖夢殿もお目覚めですか、春は近いという事ですかね」

「アイギスさま……殿?!」

突如現れた黒羊に驚くも、平静を装って受け答えようとする庭師。それでも冷静さなんてものはなく、普段使いの『さん』を言いかけから、祖父と同じように言おうと考えていた事を思い出し、慌てて『殿』と言い直していた。

「妖忌殿の真似をして無理に言わずとも、敬称などなんでも構いませんよ。それよりも今はこの場をどうにか致しませんと」

「う……そう、そうなんですけど……情けないことに何がどうなっているのかわからなくて」

二人で見上げる冥界の空、未だ続くは桜の吹雪。

異変の解決に現れた三人の少女も健在ではあるが、緩慢に見え始めた動きから疲弊しているのがわかる、その少女達と敵対する白玉楼の主も僅かずつだが気配が薄くなってきていた。

それらに変わって存在を大きくしていくのは西行の妖怪桜。四人の命、一人は既に事切れているがそれは言葉の綾として、空にいる四人の生命を吸い取ったかのように、彼女たちの弱り方と比例して蓄を開いていく化け物桜。

それぞれに視線を流し、どれに何をすれば良いのか分からない妖夢

が困惑顔で空の主を見つめる。切り裂かれ歪な形になっているリボン  
を風に吹かせ、背負う二刀に似た姿勢で凜と眺める姿は何処か祖父  
に似た荘厳さが見えた。

「わからない、ならばそれでいいではないですか。大事な事だけわ  
かっていれば宜しいかと」

華麗とは言えなくなってきた弾幕勝負を見上げる妖夢の頭、綺麗に  
切り揃えられた前髪が揺れると、隣に立つボブカット仲間の悪魔から  
声がかけられる。

「大事な事ですか？」

「左様です、考えてわからない事は斬って理解されればよいのです、妖  
忌殿ならそうされたはずですよ」

見上げる妖夢の瞳からその背、二刀の内の花飾りのない、短い方を  
見つめ話すアイギス、視線が動いたことに気づく妖夢がその白楼剣に  
手をかける。

魂魄家の者しか扱えないという家宝。斬られた者の迷いを断つこ  
とが出来た刀に手をかけると、妖夢の表情が変わった。

「大事な事……お祖父様……幽々子様！」

冷たさを感じさせる青の瞳、迷いなく澄み渡る瞳に火が宿ると同時  
にもう一振りにも手を伸ばす剣士。

迷いを断つ刀を抜き放つ事無く自身の迷いを断ち切った魂魄の跡  
取り娘、斬ることに特化した家系らしい切り替えの早さをアイギスに  
見せると、再度自身の主を見つめた。

「理解されたのなら向かわれては？ このままではあの桜が満開と  
なってしまうですよ？」

「はー！」

妖夢とは別の場所、幽々子の奥を見つめ、もうすぐに満開を迎えて  
しまいそうな桜を眺む黒羊。咲き誇る勢いは更に増しており、二人の  
いる辺りにピンク色の花びらが舞い飛ぶようにもなってきた、ひ  
らりひらりと漂うそれらを返事をしながら妖夢が断つ。

振るう刃の長さよりも遠く、二百由旬とまでは言えないが、それ  
も視線の先までを一閃すると飛び上がり振り返った。

「なにやらボロボロですけど……アイギスさんはわざわざそれを伝えるに？」

「じゃれ合いを楽しんでおりましたが、途中からお仕事となりまして。それよりもあちらを、私もすぐに合流します故構わずに、どうぞ主殿の元へ。それほど時間も残されていないのでしようし」

たまに来る手合わせの相手、祖父ですら斬り伏せる事が叶わなかった悪魔を見据え、アドバイスだけに来たのかと庭師は問うが、今日は仕事で来たと偽りなく真摯に語る商売人。

丁寧な問いに答え、話はこの辺りで切り上げて行くべき所に行けと、右手で亡霊少女を指して促す。

「そうでしたー！ では先に!!」

傷を気にせず真つ直ぐに、使える主の側目指して飛んで行く妖夢。小さくなっていくその背中を見つめ、心の迷いは一度断ち切ったが、他に気を取られる気の迷いは切れていないなど、祖父よりも華奢で細い背中を眺め思うアイギス。

それでもあの切り替えの早さは師匠譲りかと、かつて彼女が埋まっていた腿の辺りを撫で、別の部分で妖夢の評価を改めると感慨深そうに頷いた。

「お孫様は立派になられましたね……あのように姿を変えて後世に残るというのも、案外悪くないのかもしれないかもしれません」

少女が進む冥界の空、白玉楼の長い階段からそれを見上げ眩々と自身も緩りと宙に舞った。

先に空にいる少女達と同じく疲弊した身体、それでもあの場で踏ん張る彼女たちよりはまだまだ余裕が見られる悪魔の肉体、随分と血や土埃で汚れているが名の通りになるには十分と言える肢体に軽く力を入れる。

雇い主と愛するお嬢様のお気に入りか二人。

好ましい男の忘れ形見が一人。

そして自身が紫に対して推した者が一人。

彼女達の奮闘する姿を眺め考えるアイギス。

手段は問わないオーダーを受けているけれど、これは人妖が争う異

変の一部だ、それならば私は戦を収める矛ではなく、それぞれを守る盾となるのが良い。思いついた考えに一人頷き、未だ収まりの見られない渦中の陰りへと身を進めた。

〜黒羊潜行中〜

はらりはらりと散っては風に乗る死の花。

少し前から数も勢いもそれほど変わりはないように見えるが、これが嵐の前の静けさだという事はこの花卉を避け続けている少女達が一番良く理解していた。

元氣よく飛び回っていた箒も今ではすっかり速度を落とすし、跨る姿も可憐な横座りとなっていた。冥い空に輝いた葉瓶はとうにストックを切らし、代わりに額に汗を輝かせる普通の人間の魔法使い。

「さすがに……ちよつと疲れた」

息を切らしてはいないがジツトリとした汗が帽子の色を濃くする。

独り言のつもりでいった言葉が近くにいた巫女の耳に届いたのか、若干の汗が滲む白い袖を風に流して飛翔する楽園の素敵な巫女が舌を打った。

「キリがないわね、しつっこいのよ」

利き手である左に持ったお祓い棒を振り、近くを舞っている蝶や花弁を祓う巫女。

勝手に怪異を追い掛けてくれる便利な破魔の札は後数枚で売り切れ御免となる、もう一つの破邪の武器、封魔の針もまだ使い時ではないと、囁いた勘を頼りに出し惜しむ巫女。

「そうね、終りが見えないというのがこれほどキクとは……結構辛いのね」

他の二人よりも少しだけ余裕そうな声色の三人目が同意する、先の方達と同じように、輝く首筋の汗を門番から預かったマフラーで拭う完全に瀟洒な従者。

彼女だけは残弾に余裕があった、投げては止めて拾い集め、それを繰り返しているからだ……そのせいで体力面では一番消耗しているが、それを気にしている余裕はなく、動けるなら動く、何処か人間離れした思考で動いていた。

「参るな！　これは！　あのお姫様ルールわかってないんじゃないのか!?!」

少し落ちかけていた気を持ち上げるように声を上げる魔理沙、そうして視線も上げていく。

見つめる先に浮かぶのは虚ろな瞳を薄く開け、両手は広げて全身を透かしている者、透ける身体を怪しい花びらの色に染める西行の姫。

その姫様に対して愚痴を吐いて舌を出した魔理沙、それを見ていた咲夜が余裕もないのに余裕を見せてとクスリと笑った、その瞬間に西行妖に動きが見られた。

突然に強く吹く風、冥府へ誘う桜の香りをノセた強風が吹き乱れると、化け物桜に桃色の光が煌々と灯る……それと同時に幽々子の背にあつた扇が消えていく、蝶が鱗粉を散らすように端から霧散していくと、その本体にも同じ徴候が見られた。

「おい！　あれヤバイんじゃないのか!?!」

「どっちの話よ？　桜、幽霊!?!」

「両方でしようね……魔理沙！　前見て!?!」

変化に気を取られ動きを止めた三人、強風に煽られ幾分飛行にも乱れが生じる。

その中でも帽子が飛ばないように、深くかぶり直した魔理沙が一番危うい状態となっていた。腰掛ける箒も帽子も風に煽り負け滞空位置がズレる、風に流され魔理沙が動くとその風の流れに乗ってくるは当然死桜の花弁。

気が付いた咲夜が懐中時計のチェーンに手を伸ばすが、汗と風に邪魔をされ掴み損なう。時間停止するまでに僅かなタイムラグが出来る、魔理沙が花弁で見えなくなる。

「魔理沙!?!」

「ちよつと?!　無事なの?」

過去の紅霧異変で起きた騒動から、出会った当初は険悪だった巫女とメイド。

それでも一緒に行動する内に異変に当たる仲間意識が若干ながら芽生えたようで、見えなくなった黒白を心配するくらいの共同性は見

られるようになったようだ。それぞれにも迫る花卉をそれぞれが切り被い、唯一まともに食らったように見えた者に急行する……

が、二人が近寄る前に剣閃が奔った。

ランダムに飛ぶ花吹雪を一刀で断ち切った剣士、彼女も同じくツートンカラーであった。

「助かった、ええと」

「魂魄妖夢です！ 倒された時に名乗ったでしよう？」

「聞いたのはその楼観剣って刀の銘だけだぜ」

そうだっけ、と頭を搔いてリボン揺らす半人剣士。

文字通りの助太刀となっておきながらイマイチ締まらないが、この三人も似たような締りのなさなのだ、混ざるにはこれくらいで丁度いいのかもしれない。

「その半分幽霊、いいの？ あんたはあっち側でしょ？」

親指で薄れる幽々子を差す霊夢。

仲間を裏切るような真似をしていいのか、そう問うが、妖夢に真つ直ぐ見据えられて返答を待たずに視線を桜に戻した。

「なんにしても手数が増えましたわ、これでどうにか……」

「お三方にお願いが、幽々子様をお助けしたい。あの方は西行妖に操られるだけになってしまわれたようなのです……お力添えをお願いします」

「いきなり何の話？」

「わかりません、でもそう思うんです、なにか惑わされているような……兎も角お願いします！」

え？ と呟く三人娘だが、その言葉は妖夢には聞こえていない。

言い切ると集中し、一人で真つ直ぐに突き進んでいく剣士、この場では一番長く共に過ごしてきた者、寝食から、時には泣き継る事もした主。その変化には気が付いたようで、確信はなくとも迷わないくらいには思い込んでいるようだ。

事実、今の幽々子は本人の意識ではなく、あの桜に動かされていた。最初は自身の興味のために起こした異変であった。けれど、春を集め春を浴びて、桜として、元々の形を取り戻しかけている墨染の冥界桜

が、根に埋まる幽々子の亡骸をを自身の支配下に置いたらしい。生きもせず逝きもしなかった彼女、彷徨いはしないが、何故記憶がないのか？

その部分では多少迷っていた為、記憶を持つだろう遺体は桜の誘いに惹かれ、亡霊姫と成り果てた今も、それに引つ張られる形でこの桜の呪縛に囚われていた。

両手に桜の銘がある刀を握り締め、背後の少女達を先導するように突き進む。近寄るモノは全て切り伏せ、冷えた眼差しで主を望む庭師。その背には勢いに乗った少女三人が連なっていた。妖夢が蝶を絶ち道を切り開く、連なる少女が撃ち漏らした花びらを撃つていく。打ち合わせなしのぶっつけ本番にしてはコンビネーションのいい少女達：：だったが、ある程度近寄ると突貫速度がぐんと落ちた。

西行妖に近寄れば寄るほどに密度の濃くなる花卉の雨、幽々子の元へたどり着くにはまだ遠い、けれど手を伸ばせば掴めそうな近さ。歯がゆい距離で止まる従者が歯を食い縛るが、西行妖の花卉に押され少しずつ後退していく。ゴリゴリと下げられる中分断される少女達、紅霧異変を解決したコンビと、異変を起こした側にいる二人に分断されると両方に花卉が舞い寄る。

そんな中チラリと見えた幽々子の顔、普段見るような穏やかな顔で声なく口を開いた。

——身のうさを 思ひしらでや やみなまし そむくならひの  
なき世なりせば——

音にはせずに呟いたソレ。

操る桜が言わせた辞世の句を言い切ると、瞳を瞑り姿を消していく幽々子。扇も消え、最早黒い輪郭だけの幽々子となった状態になると、今まで以上に苛烈な弾幕を放ち始めた。全周囲に奔るレーザー、ソレと同じく360度に放たれる紅と蒼の弾幕、今でギリギリだった少女四人がその弾幕の吹雪に飲まれかけると、ようやく姿を見せた悪魔。パチンと指を鳴らし迫る弾幕の嵐を穿つと、右肩に篝火のようになったスコップを担いで現れたアイギス。左側にも燃え盛る角を数本現して、巫女達の前に回転させて展開させる。



あれで暫く保つと横目に見ると、妖夢達従者組達の前に割り入った。

「貴女方を囿に私一人でどうかと思いましたが……中々良い事を仰いますね、妖夢殿」

「アイギス様?! 何故ここに?」

「一人でどうにかって、出来るんですか?!」

心にもない事を挨拶代わりの軽口で述べるアイギス、どうやら混ざりやすい空気になるまで陰間で伺っていたようだ。突如現れた悪魔に対して、顔を合わせていない巫女は誰だコイツと睨み、以前のやり取りからバツの悪い魔理沙は無言、そうしてメイドは驚いて、剣士だけはアイギスを見ずに前を見て話す。

一人だけ歳を重ねているからか、いや、覚悟を決めているからか、と横長の瞳孔でそれぞれを見たアイギスが燃え上がるスコップを眼前に構える。

「少しお手伝いして差し上げます、妖夢殿、これを」

「これはスペルカード? でも色が」

アイギスの懐から取り出されたソレは確かにスペルカード、けれども色合いが通常の物とは違っていた。普通は白無地タイプで何かを書き入れられるようになっていたが、妖夢に渡されたソレは緑一色で、でかでか『B』と描かれていた。

「さてお立ち会い、スペルカードを初披露するのが貴女方というのは中々に心地よいですね」

肩に担ぐスコップを撫で、愛おしげに見つめるアイギス。

その視線のままカードを押し付けた妖夢を促し宣言させる。

——突盾『スピード・ポリウーコス』

妖夢が宣言するとアイギスのスコップが肥大化する。

刃先だけがやたらとでかくなり、中世の騎士が構えるような盾となると、表面に頭から蛇を生やした美しい女の横顔のような紋章が浮かび上がる。そのまま三人の前に掲げられ持ち手が擦られると、閃光と音を立てて燃え上がった。

「参ります」

言葉とともに突貫する羊の悪魔、妖夢が切り開く速度とは比較にならない早さで進み、近寄る花卉を焼き落とし、迫る弾幕も触れるそばから穿つ、怒濤の勢いで距離を詰めていくオプション装備役。盾となったスコップをほんの少しずつ削り取られながらも、押し戻された位置を超え、一気呵成に詰め寄った。

そうして輪郭だけとなった幽々子に肉薄すると、一度速度を落とし妖夢を睨む黒羊。

「暫くは保たせるとお約束いたしましたしょう、その間にどうぞ、ご自由に」

眼前の幽々子から放たれる弾幕、その全てを、発生する側から受け穿ち続けるアイギスの盾。

端の方から黒い瘴気を上げ、少しずつ小さくなっていくが、彼女は種族柄約束を破れない。言う通り暫くは耐え忍ぶのだろう、そうする中で妖夢に向かい言葉を投げる絶対の盾。

「ご自由について、どうすれば……？」

アイギスの赤黒い瞳に横目で見られるが、それでもこの場でどうすればいいかなどわからない妖夢。異変で集めた春のせいで力を増した西行妖に飲まれ、今や傀儡に近い姿となった主を救いたい、その一心でここまで来たが救う手立てなどまるで考えていなかった、が……「その刀も腕も飾り？ 貴女、私達になんて言ったか覚えていないの？」

言いながら、目が泳ぐ妖夢の左頬に銀のナイフを当て、薄い線傷をつける咲夜。

スツと赤い筋が妖夢の頬を伝う、その血が妖夢の左腕に落ちる。

「斬れぬものなど、殆ど無い……」

「なら斬ったらいいいじゃない。主の迷いでも何でも、私が貴女だったらそうするわ、迷わずね」

段々と小さくなる絶対の防御壁、その中で会話する少女二人。

主を救いたいと突貫してみせた従者も、紅魔の屋敷を取り仕切るようになったこの従者も素晴らしい者達となった、コレならば守り甲斐もあると、薄くなった盾の部分に左手を添える黒羊。

咲夜の前に空いた穴をカバーするようにアイギスが手を伸ばし、その腕で弾幕も花卉にも直接接触して穿つ。いくら終らないとはいえ直接の死を浴び続ければ長くは保たず、指の先から瘴気となり消えていく悪魔の身体。

それを見ていた妖夢が再度呟く。

「斬れば理解<sup>わか</sup>る」

妖夢の小さな声が確かに響く。

声が消えると瞳を瞑り、流れるように白楼剣を構える。

幽々子に対し真正面。

正眼で構え、眼を開くと、一枚のスペルカードを取り出し宙に放つた。

——断迷剣『迷津慈航斬』

ひらり、花卉のように漂うカード。

それが一度回転すると白楼剣が妖力を得て青白く灯る。

更に回転し落ちるスペルカード。

ソレが幽々子とアイギスを繋ぐ空中の点となり、一筋の線が視えると、迷いなく刀を振るつた。

音なく奔る魂魄の剣閃。

縦に一筋奔ると、輪郭だけの亡霊に色が宿る。

ガラリと幽々子に色が差すと見慣れた姿のまま落ちた。

咲夜が気が付き手を伸ばすが、ピンと張る指の先でパクリと空いた空間に幽々子が拾われる、それを確認した後でその手を別の方向へ向けた。同じく断ち切られたはずのアイギス、そちらに向かって手を差し伸べるが、羊の悪魔は健在で同じくカードも傷一つなかった。

「見事、迷いだけを切り伏せましたか」

アイギスが褒める、手合わせの中でも正面切って褒めることはあまりなかった、が、集中し切って何も耳に入らない妖夢にはその言葉は届かなかった。自身の修める業<sup>わざ</sup>以上の事を土壇場で成しそのまま気を散らした剣士、落ちかけたその体を軽く蹴り、咲夜に預けると視線で離れると促すアイギス。ボロボロに千切れた指を強引に鳴らして退避路を穿つと、咲夜をそちらに押し飛ばした。数本指の欠けた真つ

赤な手形が咲夜の肩につく。

「さて続いてはあの桜、西行寺様の起こされた異変は終わりましたし、後は正しく八つ当たりを。これが春を求めなければ私の我慢などなかったでしょうし、であれば少しの報いくらいは……巫女殿」

花卉を祓いながら、遠巻きに一部始終を見ていた者二人に声をかける。

見知らぬ妖怪から声を掛けられ、若干機嫌が悪い顔の博麗の巫女が目だけで振り向いた。

「露払いは致しますので、後の封はお任せ致しました」

「え、ちよつと」

「では、お先に」

巫女にも二枚目の『B』を投げ預け、返答待たずに翔けるアイギス。先ほどのように三本目の角を巨大させ自身の前に展開する、だが先とは違い今は横向き、切っ先を化け物桜に向けている。そうして突き進みながら端を蹴り回転させた。

激しい回転から銃の弾丸のような形となると、そのまま真っすぐ西行妖の幹へと突き進む。止めようと流れてくる花卉は全て焼けていく、死を漂わせる桜の妖気も回転に飲まれ散らされていく。そうしてアイギスの背中側に一直線の道が出来ると、霊夢が封魔の針を投げ入れた。

アイギスが幹に着弾し丸い傷跡を穿つと、数瞬遅れて刺さる針。針の先には霊夢の御札が刺されており、針が刺さると穿たれた円に『く』と列を成す。巫女の側で回る陰陽玉と同じような柄が描かれ、それを目印にスペルカードを宣言する。

#### ——夢符『封魔陣』

霊夢を中心に真っ赤な札が乱れ飛ぶ。西行妖の花卉に負けない程の量が空に舞うと、幹に刻んだ印に向かい滝のように奔った、先に突っ込んだ黒羊の事など構いもせずに叩きこむと、緩く握っていたお祓い棒を2度払う巫女。

魔を打ち祓う棒の先に結ばれた紙垂がシャランと鳴る。

清浄な調べが西行妖の幹に届く。

音が届くと印を起源に破邪の光が幹に奔る。

印から根へ、印から枝へと浄化の光が伸びるとブワツと花を散らし、一瞬にして墨染の幹だけに戻った西行の妖怪桜。

不意に訪れた静寂。

チラチラと散り始めた花卉には最早死の気配などはない。

それでもこの花卉を放置できない、したくない者が箒に立ち得物を構えた。

「いい所で出番なかったしな！ 後処理くらいはしていくぜ！」

ユラユラと冥界の空を漂うピンク色、それが空を焼く魔光によつて灼かれていく。

横薙ぎに払われる魔力の奔流が、暗かった冥界の空に光を戻していく。

明るくなると共に感じる暖かき。かかっていた暗い雲も散り始め、人間の放った魔砲に裂かれた雲間からは薄い光芒が差して白玉楼を照らす。

その暖かさと輝きが、冬の終わりを告げた。

## 閑話 付き従う者の集い

暖かな日差しを背に顕界へ戻るツートンカラー。

春風にふかれる帽子をやれやれと押さええる魔法使いと、ぶつきらぼうに棒を担ぐ巫女、その二人が並んで飛ぶすぐ後ろをマフラーで口元を隠すメイドが続いていく。

冥界住まいのツートンカラーはそれを見送り空を見上げ続けている、穏やかさを取り戻した冥界の空。少し前まではそこに浮かび、空一面に弾幕を放っていた主のことを思う。

主の古い友人が回収してくれた事はメイドから聞いた、それでも無事な姿を見たい、弱り臥せっているのなら傍に寄り添い見守りたい。いなくなつた祖父に代わり近くで自分を見続けてくれた白玉楼の主。彼女の事を考えると、異変が終わつた今でも心静かに、とはなれずにいた。

「幽々子様……」

上の空でポツリと呟く。

その声に呼ばれたように風が流れる、するとガサリと鳴る階段横の桜。

異変を終えてすぐ、ピリピリとした雰囲気が抜けきれないこの庭師が二刀の柄頭に手をかけ、目を細めて凝視し動く。音の聞こえた木の裏手に忍び寄ると、そこにいたのは見慣れた相手。

「容赦のない方だ、人間に対して死を感じるなど何年ぶりなのか」

寄つてきた妖夢の足音、それが聞こえると声を発して存在をアピールするアイギス。穏やかな桃色の合間に寝転がるのは、同系色だがもっと物騒な色合いに染まる羊の悪魔。

桜色に映える黒スーツと黒髪、褐色の肌までもドス黒い血で汚し、固まった血の結晶を大きなアモン角から剥がしてポイッと捨てる黒羊。苦笑しながら身体を起こし立ち上がるが、フラリと桜にもたれかかる。音の正体が誰だったのか、わかつた妖夢がふらつく女に駆け寄った。

「アイギスさん!?!」 なんてそんな、異変で見た時よりボロボロじやな

いのですか！」

本来の象牙色よりも赤黒い部分が多い角から見て嫌な顔をし、スーツの布地と腕の肉が混ざる左手に視線を下げると、自身の横に浮かぶ半霊のような顔色になる妖夢。

異変の最後を迎える前に気を失った彼女はあの後どうなったのか見てはいない、ざっくりとした流れを紅魔のメイドから聞いただけで、突っ込んだアイギスごと封じる勢いで巫女が弾幕を放ち、そのまま西行妖を封じたとは聞いていなかった。

「人間が怖い、こう思うのは家畜だった頃以来ですね。しかし妖夢殿、そう青白い顔をされますと、悪戯したくなってしまうですよ？」

血塗れのアイギスが青つ白い顔を眺め、悪戯な笑みを浮かべる。

淑やかに微笑みながら左腕に食い込む袖を千切って、腕の形をどうにか残している部分を露わにし、少し持ち上げた。黒い瘴気を漂わせ少しずつ修復してはいるが、西行妖の力を浴びて壊死している部分もある腕。それを視界に入れられて、ヒイツと小さな悲鳴を上げる人外。妖怪、それも半分は霊体だというのに、ホラー要素の強いものにめっぽう弱い半人半霊の庭師が怯む。

「あまり見せないでいただけると……その……」

「少し調子に乗りましたね、互いに本調子でもないというのに、失礼致しました」

妖夢の目が揺れると、指の欠けた左手で腹を撫で擦るアイギス、大した苦労もなく恐れを抱かれたおかげなのか、いくらかは糧として得られたらしい。悪戯心の感じられる雰囲気から満足気な笑みへと変わる、調子に乗るなど自身の足元にまで窘められ、ハイヒールのヒール部分がパキンと割れた。不意に折れたためぐらつくくと、遠のく右手に妖夢が手を伸ばす。

「助かりました……レディ」

引かれる手を懐かしく思う黒羊。

雰囲気も姿形も違う、性別も違うのに感じる祖父の気配。あの時は砂利に足を取られたのだったなど、階段の上で静かに建つ屋敷の門を見つめた。異変の最中に考えた後世に残るという事、これもその一部

なのかと小さく笑って妖夢に呟いた。

「え？ なんと？」

「なんでもありませんよ。よろしければこのまま肩を貸しては戴けませんか？」

折れた左のハイヒールを脱ぎ、そのまま足元に注意を促す。

妖夢がそちらに目を向けると、再度顔色が悪くなった。封魔の針が数本刺さる腿はまだいい、それより下、膝から下は外側半分が赤く爛れて黒煙を吐いている。あの巫女が放った破邪の光、その間近にいた割りにはマシな姿だと本人は思っているが……妖夢から見れば結構な傷跡に見えたらしい。うわあと目で語ると、アイギスが再度腹を撫でた。

身長差のせいで肩を借りるというよりも妖夢を松葉杖の代わりにして歩く形、それでも飛ばずに歩くアイギス、飛ばば早いと思える光景だが、先に浮いた妖夢を昔を懐かしむアイギスが引き止め、いや、引きずり下ろした事から素直に歩く事となっていた。

仕事中は真面目な彼女だが、ソレが終われば悪魔らしい我儘さが見え隠れする羊。相手が幼い頃から見ている者だから余計に素を出しやすいのかもしれない。

そうして枯山水を歩き、外廊下に腰を下ろす二人。

「取り敢えず着替えか何かと、あと拭く物でも持つてきます」

「お気遣い感謝致します」

「いえ、これくらいは、お待ちくださいね」

腰掛けても繋いでいた手を離し、パタパタと屋敷の奥へと消えた庭師。

着替えといっても彼女の服か、今はいないこの屋敷の主が着る和服くらいしかないだろう、ここのご令嬢は兎も角あの子の服ではサイズに無理があるだろうなど、脱いだ上着と破れたシャツに目を落とすアイギス。そのまま視線を流水の描かれる砂利へと移すと、少し先で開くスキマ。

「汚れましたね」

「そうですね、ですが問題はなくなりました」



現れたのは八雲の式。

すつかりと整えられた道士服の袖に両手を組んで隠すいつもの姿、ペコリと頭を下げてから小さなスキマをアイギスの隣に開く。

ふわりと音無く落ちるのは三つ揃えのスーツ一式にシャツとネクタイ。デザインもサイズも今着用しているものと同じ物で、アイギスの住まう長屋にいる唯一の同居人が営む店で誂えられた物らしい、タグに描かれた、ほつれたボタンホールの絵がその店のシンボルだ。「袖を通すなら傷を癒してからの方が良いのでは？」

「確かに、今のままではまた汚してしまいますね」

「アイギス殿、問わないのですか？」

「何を問えば宜しいのでしょうか？」

思いがけないところで腹が満ちてそれなりに機嫌のいいアイギス、真面目に問いかけてくる藍に対して、何を聞いて欲しいのかわかっていながら意地悪に返す。暴れている間にいつの間にかいなくなっていた抱こうと考えていた相手、言うなれば逃した魚が再度現れたせいで、つれないのなら自分もそうして返そうという、彼女なりのブラツクジョークのようだ。

クスリと漏らす低い声、それを聞くと少し碎ける藍の顔。異変時の硬い雰囲気になかった顔が緩むと、やっと答える少し意地の悪い悪魔。

「では問いましょう、この服はいつ、どなたが用意してくださったのでしょうか？」

「紫様が眠りに着く前に用意した物ですが、そこを問うのですか？」

あまり汚れていない右手で新品の衣服を撫で問いかける、それに対するの答えは返ってきたが聞いてほしかったのはそこではないと、藍の苦笑いからわかる。

それでも答えは得られたと納得顔の黒羊、直接姿を見せないのは二度寝をしたからとわかり、それなら無理に起こす事もないだろうと、眉を下げる藍を見上げた。

「紫様はお察しされた通り、と答えておきますが……伊吹萃香の件は宜しいのでしょうか？」

「構いません、気に入らないのなら今頃再戦となっていているでしょう。私から売った喧嘩なのです、弱った所を襲われても卑怯とは思いませんし、鬼もそうは考えないでしょう。ですのに現れないのです、であれば気にかけてません」

紫が眠りに落ちたのなら、あの鬼もスキマの外に出ているだろう。霧となり広がっているというのなら、今の会話も聞いているだろう。

場合によっては記憶か思考の境界でも操られて、あの時の考えが伝わっているかもしれない。

そのように邪推して、わざとらしい説明口調で語るアイギス。この言い草に文句があるのなら出て来いという煽りも含まれているが、これは彼女の本心でもあった。何かを残して終わるのもいいかもしれない、そう考えた自分がいて、それも悪くないと自覚する悪魔……終われるのなら終わってみるのも一興かと考える、終われない古年寄り。

特別それらしいモノを残しているわけではないが、吸血鬼の姉妹がそれぞれ手に持つ炎の杖と神の槍、二人が振るうアレの発想元は自分のスコップかもしれないと思うと、遺せたと思ひ込むにはいい相手がいいたとも感じているらしい。

「お待たせし……藍さん、いらしてたんですか……その、幽々子様は？」

手桶にタオルと薬箱、自分が怪我をした時に用意する安心の3点セットを持ちだして奥より現れた屋敷の者。アイギスであれば前の二つだけで十分なのだが、最後の一つまで持ち歩くのは幼い頃から続く習慣のせいだろう。

そんな妖夢が庭に現れたもふもふに気が付き、顔に少しの陰りを浮かべる。

「ご無事だ、今は我が主と共にお休みになられているが直に目覚めるだろう。お目覚めになられたら送り届ける、そう心配するな」

藍の口から無事と聞けたことで表情に明るさが灯るが、それでもイマイチ抜け切れない暗さというか、不甲斐なさ。仕える者としては大

先輩、それこそ祖父の代から紫とともにいる藍に任せておけば問題な  
どおきようもない、それはわかっているが……

「今すぐ送り届けて差し上げては？」

前門の狐と後門の霊をそれぞれ見比べ語るは羊。

異変の時に話した思いと、今の妖夢の顔からなんとなく読み取れる  
感覚。それに気づいて少しのお手伝いを試してみているようだ、預けつ  
ぱなしのスペルカード、ボムというべきか。それを持った相手だから  
オプション代わりに僅かな助言横槍を入れるアイギス。

「構いませんが、今動かすよりは……」

「そうですね、もし傷つき倒れた紫様の面倒を私が見ていたら、  
藍様は嫉妬してくださいますか？」

「……ふむ、合理性にばかり気を取られ配慮不足でしたか、半刻後には  
お連れしよう」

考える素振りの藍にアイギスが問う。日焼け肌に白い歯が見える  
ようなニヤリとした顔、腹に一物含んでいますとまるわがりの悪い笑  
顔で藍に問い掛けると、表情から察した傾国も同じように笑ってから  
妖夢に向かってそう告げた。

「しし、嫉妬!? ベ、別にそんな感情は！」

「ないのでしょうね」

「ないのだろうな」

桶に組まれた水を暴れさせる白玉楼の従者、それを見ていた八雲の  
現役従者と短期契約者が同時に言い返して笑う。

完全にからかわれたと、嫉妬とは別の意味で頭を熱くし始めた妖夢  
が、背負う刀の切っ先に似た態度を見せると、それも含めてクツクと  
笑う年配組。何をしてても笑われるのかと諦めた半人前が、両膝を付い  
てタオルを絞った。

そのまま紅い血塊がこびり付くアモン角を拭いていく。

「手慣れたな」

「散々やられましたので、剣術より得意かもしれせん」

「そうしたい相手は私ではない、自分からそう仰れば笑われる事もあ  
りませんのに」

アイギスの頭を若干揺らしつつ角を磨く妖夢に、穏やかな顔で語る藍。彼女も妖夢が幼い頃から見ている者の一人だ、言い訳を聞かずとも何故手慣れたのかくらいはわかる、今のは合いの手代わりだろう。その合いの手に合わせて話すのは散々にした相手、磨かれていく角とその延長線にある妖夢の顔を見ながら話す。祖父のような立派な従者とは言い切れない、言えるほどの腕もないけれど、看病くらいは上手に出来る。

そう言えばいいのにと、年配者二人の老婆心が動いたようだ。

「あの……藍さん」

「なんだ？」

「幽々子様を回収してくれた、そこまでは覚えているんです。でもその後は覚えていません……そんな半端者なんですけど、主の看病くらいはしつかりとこなしてみせます。だから……」

しばらく待つが言い切れない妖夢、後一節と待つアイギス……だったが、誰も話さない中で屋敷の奥で音がした。柔らかいナニカがフアサツと擦れる音と、その横に降りた誰かの足音。

その足音が大きくなると、小さな二本尻尾の少女が廊下から姿を見せた。

「さつきは半刻と言ったが済まない、あれは間違いだった」

「間違い？」

「私の主は手がかかってな、紫様一人のお世話をするのに猫の手も借りるほどののだ。幽々子様を見きれないので後は妖夢に任せるとするよ」

藍の元に駆け寄ってきた少女、九尾の式、異変で敗れて結構傷だらけの橙がよくわかっていないという顔で主を見上げる。その顔を見てから妖夢の顔へと視線を流し、行っってはどうかと金の瞳を泳がせた。

角を磨く手が止まり、手当をしていた者の顔を見る妖夢。こちらの黒羊も藍と同じような表情で見上げていた、日焼け色の右手でタオルを奪い、後は自分ですると態度で示したアイギス。

二人に見られる白玉楼の庭師が綺麗な座礼を見せてから屋敷の奥

へと駆けていく。

「真っ直ぐで宜しいですね」

「そうですね」

「先ほどの、告げ口しても？」

「出来れば、他言無用で」

「では一晩お付き合いくださいますか？」

「今はその、お答え出来かねます」

「お二人共、何のおはなしですか？」

アイギスは穏やかになった冥界の空を、藍はなんの話をしているのかと見上げてくる橙を、それぞれ別のモノを見ながら話す。

言葉も態度も濁している傾国の美女は見ず、空を拝んだままアイギスがクスクス笑う。

その声だけを聞いていた藍が、鬼との喧嘩前に言ってきた事、あれは冗談半分ではなく全て本心だったのではないかと、橙の傾いだ顔を見ながら悩んだ。

## 第五十二話 隠者舞う月夜

長く続く冬、というよりは、春が奪われていたというのが正しいか。生命の息吹萌ゆる春が死んだ者達の住まう世界に集められた異変から十日ほど過ぎた今、幻想郷の何処を見回しても春らしい景色が見られるようになっていた。どこもかしこも白一色で、冬妖怪が元気づぎて疲れると愚痴った風景は解け消えて、代わりに幻想郷の空に見られるのは舞い散る春色の吹雪。これに乗るのは当然春らしい桜の匂いだけで、黄泉路へと誘うような妖しさはない。

そんな舞い飛ぶ花を付けない種類の木々も、枝の先には若々しい新芽を芽吹かせて生命力を見た目から教えている。濃い緑色になり始めた葉の群れなどにも小さな虫がたかるようになった季節。時折降り出す俄か雨は春らしい紅雨というよりも次の季節に翠雨に感じられてしまうが、暦の上ではそんな走り梅雨が降る月日を迎えているのだ、ある程度は致し方ないのだろう。

不安定な天気模様の幻想郷。

それは地底の世界でも同じであった。

たまに地を濡らす驟雨しゅううのせいで桜は既に葉ばかりとなっている地底世界、見られる景色も花を愛でる賑やかよりも、いずれ落ち枯れる葉のようにしんと静まる雨上がりである。普段は騒がしい旧地獄街道も雨では客の入りが悪く、店は開いていても客引きは通りにいない。呼び込む客がないのだからそれで当然で、開けているのは天気に関わらず訪れる馴染みの客が来るからだろう。客足のない地底の繁華街、そんな閑古鳥を飼いだめたメイン通りの店に同じく、開店休業している店が裏通りにもあった。判じ絵の看板が濡れないように、表に立て掛ける形から、灯る行灯とともとともに軒先に吊るし、下げるようになった看板を見て、湯気立つお茶を啜る女がいる。

名の通りの色みのドレス、その裾を僅かに濡らした者が、湯のみを少しだけ傾けて口に含む。暖かな茶が喉を過ぎるとふうと視線を上げて、ちらりと見える羊の看板を見ている。

「今日は静かですね、珍しい日もあるものだ」

土間と座敷の上がり口、段差部分にはしる上がりかまちに腰を下ろし店先を眺む紫に、景色に似合う少し冷えた声をかけるここの店主。紫が持参した新茶とは別の、黒みが強く、華やかに香る酒を背の低いグラスに注いで少しづつ口に含むアイギス。

「寝起きなのよ、少し呆けているの」

紫の背後でカロンと鳴る、グラスに入る小さな氷が動いて澄んだ音がした。

まったりとした空気が流れる店内。異変を終えたばかりの今。もう少し張り詰めた雰囲気があつても良さそうに思えるが、紫からすれば友人に何事も無く終わった事に安堵する時間であり、一方のアイギスからすれば仕事の中休みという時間である。今のように降ったり止んだりしている雨音を着に、それぞれが何もしない事を味わっていた。

「寝ぼけている者ははつきりと返答致しませんね」

アイギスがダークラムのグラスを傾け、はつきりと言い切る。

態度も雰囲気も普段使いの静かなものだが、その言葉だけはつきりと、紫に少し言いたい事がある、聞き取り方に寄っては機嫌を損ねるような事を先の声色で述べている。紫が店を訪れてからずっとこんな事を言っている店主、数日前には自分から鬼に殴りかかり、派手な喧嘩をし始めたというのに、今日は打って変わって口だけで文句を言っていた。

「機嫌を治してと依頼すれば、普段通りになつてくれるのかしら？」

「そのお仕事を私が受けると？」

「受けてくれない？」

敢えてアイギスの顔を見ない紫、畳の目を白い指先で数えながら、受けてくれないかと少し幼気な声を作って身を振る。共通の友人が消えるかもしれない、そう語った時の鬼気迫るような雰囲気は全くない姿でアイギスに願う。

紫がかかる金の瞳、それをあざとい上目遣いにして見つめているがアイギスは一切反応しない。無言の時間がしばし流れる、僅かに汗を掻くグラスの中に薄いグラデーションが出来上がった頃、沈黙となつた

店内に代わり、羊の見える窓の外がポツポツと鳴り始める。

「また降り始めましたね」

アイギスの声色が若干穏やかなモノになる。

ポツリと言うと立ち上がり、そのまま奥へと消えていった。数秒過ぎるとカランと鳴って、空いたらしいグラスに数杯目を注いで戻ってくる。少し前の春雪異変時に切り出しておいた天然氷、飲み仲間の皆と共同して用意したソレを鳴らし、グラスを傾けながら戻ってきたほろ酔い悪魔が、未だ上目遣いを続けている誰かの横に腰掛けた。

「さて、今日の来訪は何用でしょうか？」

「やっとな話をしてくれるのね、機嫌を直してもらえたのかしら？」

真つ直ぐに伸びたアイギスの背筋が紫の視界に入る。

傾いたりせず隣に並んだ事で機嫌も真つ直ぐに戻ったのか、ソレを聞いてみる紫だったが……

「今だけです。通り雨の中追い返すのは気が引けますので、過ぎるまではお客様扱いでもしてみようかと思っただのですよ」

「そう、なら 遣<sup>や</sup>らずの雨が降り止む前に話してしましましょう。まづはそうね、伝言から」

ただの通り雨、時期に降り止む。それがわかっているから短時間だけ付き合っただけあげる、そのつもりだった悪魔とは別に、遣<sup>や</sup>らずの雨などと宛てがって自分の立場を少しでも良くしておこうと笑う紫。これから話すモノで下手を打てばまた機嫌が傾く、その為に先んじて保険を打った。

「言伝など、どなたから……」

「済まなかった」

誰から何に対しての謝罪か、思い当たる節のないアイギスが、視線を紫からグラスの縁へと移す。それを横から見上げる紫が悪戯に笑う、幼さも我儘さも見られるような作った高い声が小さく漏れると、真似た声色のまま伝言の続きを話す。

「が、気に入らないのはためえだけじゃない、私も同じだ、木偶の坊！……ですってよ」

紫の口からためえなど出ると思わず、アイギスが静かに傾けていた



グラスの動きが静止する。溶けた氷が涼しい音を立てると、普段使いの声と顔になり、形の違う悪戯心が含まれた笑みへと変わった。

「ご自分で仰れば宜しいのに」

鬼は嘘を嫌う、勇儀と親交のあるアイギスもそれは理解している、だからこそ謝罪に対して何かを言うつもりはなかった。だが、誰の口から伝えるのかでも意味合いが変わるのが言葉だろう、紫ではなく本人から言ってくるのであれば自分も頭を下げたかもしれないのに。そんな事を考え、肌の色に近い酒を口に含む。

「そうね。でも顔を合わせるのが気恥ずかしい、それくらいには悪いと思っっているのよ、きつと」

アイギスからの言い分としては然程間違っていないが、紫にも伝言を引き受けた理由があるにはあった。春を預かっていて欲しい、そのかわりある程度のことには目を瞑る、そんな約束をあゝの鬼としていたようだ。その口約束には異変を起こしても黙認するし、やり方も度を超えなければ好きに任せるという意味合いも含まれていた。

終わらない冬の最中に萃香が起こした、続く酒宴という異変。内容自体も可愛いものだし起こす事自体は構わないが、ここに少しでも紫の誤算があった。異変は妖かしが起こし、人間が解決するものだ、だというのに萃香は地底の連中だけに向けて異変を起こした。

その部分について、ある程度のルールは守ってくれ、異変を起こすのであれば妖怪だけに向けた物ではなく人間に対しても起こしてくれと、紫が少し諭した結果が萃香の謝罪に繋がるらしい。傲慢な鬼が謝罪など似つかわしくないが、曲がったことが大嫌いという習性から見れば案外似合うのかもしれない。

「あの方の言い分はそれとして、誰が悪いと感じているのか、そこには言及しないでおきましょう。今はお客様ですし」

空けたグラスを両手で握り、紫は見ずにグラスの底を見つめる黒羊。

全ては読みきれないが、藍を寄越さず紫自身が赴いて語った事からなんとなく察したようだ。悪いと思いつながら顔を出さない、伝言で済ますというのも、個体差はあれど真つ直ぐなあの種族らしくないと見

知っている。ならば伝言を言い出したのは紫から、そしてあの鬼の言葉に重ねて言いたい事でもあるのだろう。そう邪推していた。

「優しい店主さんね、それじゃあ優しいうちにご機嫌伺いもしておきましようか」

先の流れからすればアイギスの我慢と八つ当たりの原因を作ったのは紫。彼女も萃香や幽々子、アイギスに対してほんの少しだけ申し訳なかったという気持ちがあった。

全てを語らずとも頼める、期待に答えてくれる友人達、心を許せる親しい者達を利用し、表には出ずに画策してばかりだった者。それが今までの彼女であったが、その友人が手段を間違え、それに憤り、まかり間違えば消えてしまうという状況にまで陥った。これは自身の甘さが招いたと何かやりきれない部分があるようだ。結果的には振り舞わされ、しまいには代理での謝罪までさせられる事になった現状、それも利用し少しでも感謝と謝罪を、と赴いたのが今日である。

伝言に乗せた謝罪を伝え取り敢えず要件は済ませた。後は雨が上がる前、アイギスの機嫌が傾く前に帰れば、と考えたが：：顔に貼り付けた心から別の事を思いついたようだ、紫が微笑んだままにアイギスを誘う。

「お詫びではないけれど……デートをしましょう、アイギス。今ならばそうね、桜が見頃だわ。お花見に行きましょう」

誘いながら畳の流れに添わせていた手を伸ばす、そのまま褐色の手を取ると背面にスキマを開いた。紫が倒れスキマに沈む、話ではなかったのか、そう考えながらもしかたがないと諦めたアイギスが身を委ねる。二人の体が瞳蠢く空間に沈みきると、最後に残った二つのリボンが霞んで消えた。

く少女移動中く

暖かな空気が流れる空にフォンとわざとらしい音が鳴る。  
音と同時に空が割れると、一人だけそこから姿を見せた。

一緒にスキマに入ったはずの紫はおらず、無理矢理連れ出されたアイギスだけが幻想郷の夜空に放り出された。何処にポイ捨てされたのかと、周囲を見渡す大きなアモン角が、少しずつ消えていく雲霞か

ら漏れる月明かりに照らされる。

唐突に連れ出されたのは何故か？ と、夜に輝く瞳に映った神社、つい最近酷い見た目にしてくれた相手がいる場所を見ながら、紫の意図が読めずに悩む。

「強引に連れ出しておきながら放置するとは、そういった趣味は……する側であればわからなくもないのですが」

ブツクサと文句を言うと言と視界に留まる青白。

つい最近訪れた地ならいても当然だが、何故これがここにいるのか？

手を伸ばせば触れる距離で漂う霊体を見てみると、下の方から声がした。

「アイギス？ ひよんなどころから現れてどうしたの？」

ゆったりとした姿に似合う声、天冠を春風に揺らして見上げる少女がアイギスに声を掛けた。亡霊だというのに神社の縁側で寛ぐ少女、その隣に降りていく。

「また妙なところでお会いしますね、西行寺様。頭界に降りていらして大丈夫なのですか？」

返答しながら軽く頷く、連れ出したのはこの方の相手をしろ、正確に述べれば様子を見てくれという事かと理解した。それなら一言伝えて欲しい、そうも思うがすぐに思い直したアイギス。こちらは雨模様ではないし、客でないならこれ以上考えてあげないと、地底での会話を思い出していた。

「隔てていた結界も壊れてしまったし、きっと大丈夫よ。久しぶりね、妹ちゃんの勝負以来？」

久しぶりという言葉に黒羊の大きな角が傾く、つい先日顔を合わせただばかりというに、フランドールの弾幕ごっこを見た日以来だと話するのは何故なのか？

悩んでいると幽々子の視線の先から見つめてくる従者がいた、目が合うと美しい礼をして半霊を頭の上に移動させる、そのまま空に向かい昇らせ薄れさせた少女。あつちはあつちで妙な事をする、半霊の昇る姿を見て、見上げる角度がキツくなつていくアイギスを、幽々子

が笑った。

「頭が重いんだからあんまり見上げると倒れちゃうわ、眺めるならこっちにおいでなさいな」

重いのは頭ではなく角だ、そういった文句を言いたげな顔の角度が下がる、その顔に向かい幽々子が微笑みかけ少し青みのかかる指先を動かした。座る縁側の隣をトントンと、か細い指二本で叩く。促された場所へアイギスが腰を下ろすと、丁度目の前には九割ピンクに緑が僅かばかりとなり始めた桜の木。少し前に見た墨染の桜よりも当然小さいが、手入れもなく、生やしっぱなしの状態から咲いた花には生命力が感じられた。

「わけも分からないまま拉致されましたが、良い風景が見られたのでヨシとしましょう」

「拉致？ ああ、紫に誘拐されたのね、私と同じだわ」

桜を眺める被害者二人の会話、内容も同じ相手のことを話す会話。

仕える式には結局断られた、誘惑・肉欲なども司る羊の悪魔が、式に振られた位で主に八つ当たりをするのも馬鹿らしいなど笑う。アイギスが景色に似合う顔で微笑むと、隣の亡霊も同じく笑む。人外二人が神社で破顔すると、視線の先がバクンと割れた。

「噂をすれば・・・何をされているのでしょうか？」

「今日はサボっていませんわ、キッチンと働いていますわって見せてるのよ」

カメラもないのに中継されるのは冥界の夜空、雲もない綺麗な空に浮かぶ紫が閉じた扇を持つ右手を軽く伸ばして、何やら唱えているような映像が見られる。

彼女が何をしているのか、知る由もなくさして興味もないアイギスの頭が再度傾く。傾き近寄った羊の角を左手で撫でる幽々子は紫が何をしているのか知っているようだ。寝起き早々、と言っても起きてから数日は経っているが、それでも起きてからそれほど経っていない紫が行うのは結界の修復作業。

「紫様も働く事があるのですね、てつきり藍様に任せたきりなのかと思っております」

「任せつきりよ、普段はね。こつちも私と同じねえ」

「こちらもっ。」

「そうよ、庭の掃除とか、私も妖夢に任せつきりだもの」

優しい笑い声を漏らす幽々子、話しつつ自身に仕える従者を見る。そういえばなにか仕事をしていたな、とアイギスも妖夢を見つめる。頭の上がない二人に見られ、主には未だ済んでいない庭掃除の事を話されて、立場をなくした妖夢が先ほど示した仕事のようにつわりと浮かぶ。そのままユルユルと飛び進むと小さくなっていった。それを見送った悪魔が、あの時のジェスチャーのようなモノはなんだったのかと、頭を傾けたついでに考える、しばし思索すると、あの動きと少しの会話から何か閃いた。

「つかぬことを伺いますが、異変の最中の事、西行寺様は覚えておいでで？」

「ふふ、さつきから同じことばかり聞くのね」

傾いだ頭を戻すと、正中線にストイツクさが見えるようになった黒羊。

姿勢を正すと幽々子の手が角から離れる。あ、と小さく呟く幽々子だったが、それを気にせずに同じ結論に至った相手、隙間の中で誰かと会話をし始めた紫を見つめた。

「紫様にも同様の事を問われたのですね？」

「そ、難しい顔をして、覚えていないのね……なんて言っていたわ」

アイギスが考えついた結論を含めて問う、それに対して似合わない、胡散臭そうな悪い顔をして、友人の言い草までも真似て話す亡霊姫。

長く見てよく知っているからか、アイギスから見ても良く似ているモノマネ。その時の顔はこうだったと胡散臭くも悲しそうな、それでも嬉しいというような色々な感情が混ざった風合いの顔で語る幽々子。記憶は飛んだらしいが、その在り方も、雰囲気も変わらずに戻ってきてくれた親友。そんな相手に見せた読みきれない表情を幽々子が真似て同じ柄の扇を開くと、スキマの中の紫も同じく扇をパンと開いた。

「戦闘？ 異変は終わりましたのに弾幕ごっこなど誰が……この巫女殿ですか」

紫のすぐ横を抜けていった封魔の針、あれを放つのはこの神社の巫女だったな、刺さると地味にクルものがあつたな、と一度刺された黒羊が左腿をさすりながら呟く。

「他にもいるみたいよ？ あの時に来た三人娘が全員で紫を退治するみたい、あいこぼかりのジャンケンをしながら飛んでいったわ」

読みは当たり、扇を開いて瞳だけに笑顔を表している幽々子がアイギスに伝える。

言うと同時に銀のナイフとごん太のレーザーが紫に向かって放たれていった。それを表情一つ変えずに難なく避けて、お返しの弾幕を打ち返す大妖怪。

「ご友人が退治されるかもしれないというのに、何やら楽しそうですね」

当たればそれなりに酷い見た目になる、身に受けた結果からそれは知っているアイギスだったが、破邪の力は感じてても所詮遊びの延長での事。あの程度では死ぬこともない、まだ終われないというのもわかった黒羊。

私が終われないのだからあの胡散臭い友人もきつと終わらない、まかり間違つても死ぬような事はない。隣に並ぶ自分よりも付き合いの長い友人もそう視て、戯れを楽しみ眺めているのだろうと、からかい気味に話すアイギス。

「楽しいわあ……だって自業自得だもの、偶には痛い目にあつたらいいのよ」

扇を口元から外し、自分の顔でそう語る幽々子。

紫もそうだが今隣にいるアイギスにもそう思っていた。隙間の中で動いている紫は何も話してくれなかった、アイギスは紫からお願いされて楽しい異変の最中にいた、私だけが除け者だった……いや、記憶が飛んでいる事を問うてきて、それ以上の事は聞いてこない二人からすれば、未だ除け者扱いになつていると感じる。

そんな風に考えて、からかわれた売り言葉に返す買い言葉に本心も

乗せて話す。人間達と争い始めて少したった辺りから記憶が曖昧な幽々子。例えるなら悪い夢の中にでもいたような感覚だけを記憶していた。あれからどうなったのかわからない幽々子が目を覚ました時に妖夢から多少聞けた事、異変で傀儡と化していたらしい自分を止める際にアイギスは既に痛い目にあつた、従者からはそう聞いていてアイギスはヨシとするけれど……紫は未だに余裕顔でいる、幽々子はそれが許せずにはいた。

——いい気味だわ。

異変の最中に詠んだ辞世の句のように、声にはせずに呟く言葉。

今のような関係、いつからなのか幽々子にはわからないくらい前から仲の良い二人。互いに無二の親友と呼び合える紫と幽々子だが、それ故隠し事は無しでいたい、無しとしてもらいたい、そんな幽々子の思いから出た言葉は、敢えて音にされなかった。何か考えがあつて黙っていた、話してほしいが話せないから言ってくれなかった……紫が自分の事を想ってそうしたのも理解しているが、それでも、と考えた辺りで幽々子の心が少し軽くなる。

何故急に？

深い思案の海から戻ると目に留まるのは、軽やかに響いたアイギスの指。

「何か？」

「なんでもないわ」

隣を流し見てからスキマを眺める亡霊姫。私の方は見ていない、それをちらりと確認すると再度扇で表情を隠す。普段よりも目深に被った帽子と扇のお陰で、本当に目しか見られない姿となる。扇の奥で、聞かれなかったはず、見られなかったはずと安堵した後、アイギスに習い紫だけを見つめた。

隠したことで少し安心したらしく、儂さはあるが何処かゆつたりとした普段の幽々子の姿となると、アイギスの指が軽く鳴る……今も、先程もアイギスは能力を行使していない、眺める先で戯れる紫が偶にドレスを焦がされたり、愛用の日傘に穴を空けられていたりするの小気味よく、紫の動きが大きくなるタイミングで指を弾いていただけ

だ。

「良い絵面ですね」

「そうねえ、うちも綺麗だけどこの桜も綺麗だわあ」

「そちらではありませんよ」

幽々子が表情を隠した、それくらいの事には気が付いているが、その奥でナニカを言った事まではわかっていない、それでも隠したのだからなにかはあるだろう。そう見る黒羊が眺む先に人差し指を伸ばす。真っ直ぐに差されるモノはスキマの中で戦う誰かさん。三人娘の弾幕に押され始めた誘拐犯と、それをかばって先に撃墜された式達がユルユルと落ちていく絵面。促すと指から楽しそうな音を鳴らし、このまま手酷くやられて見せろと、愉快さを顔に貼り付けた。

その顔を見た幽々子も同じく笑う、能力は行使せず指を鳴らしただけの穿つ者と似たように微笑む。アイギスが紫に向けてこんな顔をするなんて見たことがないけれど、それでも何か理由があるのだろうか、と穿つ者を穿った見方で思う幽々子。何も言われずに誘拐された仲間の事を考えつつ劣勢になっていく紫を見つめ続けた。暫く眺めた後、地底で寝ぼけているのたまった妖怪が無様に落ちていく様が見られると、クスリと声を漏らした。良い夢でもみたかのような朗らかな声が聞こえると、隣のアクマも声を漏らした。



く営業活動に逸るく

## 第五十三話 茶を楽しむ

桜が舞う中露雨が降る曖昧な季節、それは曖昧さを好む妖怪が弾幕ごつこで撃墜されると共に過ぎ、流れていった。異変から始まった歪な季節の景色を洗い流すように降るのは、しっとりとした雨。暦の通りに漂うようになった梅雨曇からはほとんど毎日雨が降り、幻想の大地を潤していくようになった。その潤いを浴びスクスクと成長してみせる木々達、葉もすつかりと深緑で、曖昧さは何処にも見られなくなった。花々も木に同じく、茎の色を濃くさせ地に根を伸ばしている、もう直になれば地上の太陽となるだろう花達が綺麗に並ぶ花畑。今は見えないお天道様を探し天を仰ぐようになった、いずれ太陽の花となる者達。その花を眺める誰かも、花に習って愛用品を雨に濡らしている。

「クドいわ」

雨用ではない日傘を濡らし、会話相手に背を向ける女が話す。視線を愛する花達に向け、回りで開花を待つその向日葵達からも見られている女が、相手を小馬鹿にするような声色で語っている。

「以前にも言われましたね、あの時はそれで納得も致しましたが、どうしても？」

話をするが見てくれない花の妖怪、風見幽香に向かって語りかけるのは未だ緑一色な太陽の丘で目立つ色合いの女。今のような姿になる前は花や草を食み、己の糧としていた黒い羊が珍しく乞うような声色で返す。

「ダメ、約束したのだから守りなさいな」

「ですから、守るためにこうして春の先にある季節に……」

「ダメよ、我慢なさい」

悪魔として約束を破れない、それを知っている幽香がソレを盾にし再度の断りを述べる。対してどうにかこじつけようと『春先』という、約束した季節をねじ曲げて語るアイギス。

察しの良い者ならばすぐに分かるだろう、アイギスの来訪理由。春雪異変の最中に幽香の自宅を訪れてその際に取り交わした約束、楽しく好ましい恒例のじゃれ合いをしようと、意気揚々と訪れたようだが……が、幽香にまるで相手にされない状態が半刻ほど続いていた。

「ですが……」

「来るのが遅いのよ、春になった瞬間に来ればよかったのに、もう梅雨時期よ。約束していた春は過ぎてしまったわ」

自分でも暴論で屁理屈にもならない、それを理解しているアイギスの声が段々と小さくなると、その声を散らすように断り続ける理由が語られる。

全て言い切ると一度傘を回して雨露を飛ばす幽香、ピツと飛んだ雫が回りの向日葵にかかった。

「もう一度だけ言っただげるわ、クドいのはダメ……理解した？」

「むう……理解致しました」

静かな、闘争の気配などまるでない幽香、寧ろ真逆で平和を好むような優しい笑みでいる彼女。3度までという仏でもない、寧ろその対極にいそうな花の大妖怪。見たくない、存在してほしくない、人間達からそう恐れられてこの地に来た幽香が述べるには随分と穏やかな言い方で、なんともちぐはぐに思えるが、今の彼女は穏やかであった。

それもそのはず、もう直自分が待ち望む季節が来るのだ。花の全てを愛する妖怪が最も好んでいる花、それが向日葵であり、それがこの地でもう直に花開こうとしている季節となるのだ。アイギスと同じやれ合い血腥くなる事も好ましいが、それ以上に好ましい者達がもうすぐ太陽のような笑顔を見せる。それを待つだけで今の幽香は幸せだった。

「そうね……次はこの子達が咲き誇った後の季節ね、その頃に会えれば遊んであげるわ」

今まで羊に見せていた背を花達に向け、くるりと回る花。

緩やかに回ると日傘の雫とともに華々しい香りを辺り一面に振り撒く。その香りも顔に似通った穏やかな香りで、普段の彼女を知らない男が今の彼女を見たすれば、片膝を付いてダンスに誘ってもおか

しくはない様相であった。

向日葵よりも先に笑顔の花を開かせた幽香、それを目にしたアイギスも同じように笑む。

「それは、幽香からのお誘いと、約束だと考えても？」

花開かせる相手に微笑みかけ、問いかけるアイギス。

今のような、期日がしつかりとした、約束に近い言葉を幽香から言われるのは初めての事であり、アイギスからではなく幽香からそういった話を約束として貰えるのが非常に嬉しいらしい。

彼女から仕込まれた土いじり、花壇の世話や庭木の手入れなどもそれなりに楽しく思っていたが、幽香と時を共にするならばやはり争い事が一番だという思いを、その表情で表している。

「しつこいけれど、そのしつこさも好ましい部分なのよね。難儀だわ」

「そこを好ましいと言ってくれるのは幽香くらいですね、ヤマメや星熊様もしつこいと、本来の意味合いで仰ってくれる事ばかりですの  
で」

「ヤマメって・・・ああ、あの土蜘蛛。そうよね、今は地底に引つ込んでいるのだし、面識くらいはあつて当然ね」

「ヤマメも幽香の事を知っておりでしたね、彼女とも私と同じような事を？」

土蜘蛛と初めて会った日の会話を思い、あの時に幽香を例えに『えらいの』などと言われたなど、差す傘の取手部分で揺れる羊の編みぐるみを見ながら思い出す。

頭を抱え何やら悲しそうな顔の羊、これも店の看板と同じくヤマメと地霊殿に住む妹から送られたものらしい、ヘアースタイルを変える前までは湿気で広がりでかくなっていたアイギスの頭、それを真似て妹がヤマメの糸で編んだらしい。

「偶に変な物を持つているわね、それとか、夏場の格好みたいな物だとか。今の髪型と違って似合いとは言えないわよ？」

質問には答えない花、今この場にいる相手の事だけを語る、あの土蜘蛛とも同じような事はしていたけれど、今視界に入っていない者の事はどうとも思わないらしい。

代わりに語るのはアイギスとの出会いの事。初めて出会った時には今のようなスーツ姿、そのすぐ後に争った際にも同じ格好で、シユツとした姿にデカイ頭と同じくデカイ角というのが幽香の第一印象だったようだが、夏場に不意に訪れて庭いじりをしているアイギスを見た時は思わず笑っていた。角が邪魔でそのままでは被れず、左右の形を変形させて被っていた麦わら帽子に白いタンクトップ、下には膝丈に切ったもんぺのハーフパンツという、何処か農婦に近い格好のアイギスを見れば笑いたくなるのもわからなくもない。

「どこか変ででしょうか？ 私は良く見ているなとしか思いませんが？」

そんな姿を思い出し頬を緩める幽香に変でもないと、前下りに切りそろえられたボブカットの一番長い部分、頬を隠すように内に入るサイドヘアーを撫でつつ反論する。

姿形やその時の心情などを間違いないままに形にした編みぐるみ、そういった勘違い要素のないものは、見た目は兎も角としてアイギスにとつて好ましいモノである。看板も編みぐるみも、文句も言わず受け取り感謝した姿をもし幽香に見られていたら、また笑われていただろう。

「本人がいいなら何も言わないけれど、それで、この後の予定は？」

「特にありません、幽香にも振られてしまいましたし、未定ですね」  
にも、の部分で小さく傘を揺らした花。

また私以外を見ていたのかと、瞳が少し怖くなるが、すぐにどうでも良くなっていた。私も向日葵を見ていたし、今時期ならそれもいかと機嫌を傾けず、代わりに日傘を傾ける。ツウつと雫が流れると、止まった会話も流れていく。

「暇って事ね、それなら……そうね、今は気分もいいから私の代わりに紹介してあげるわ」

「代わり？ 幽香の代わりと申しますと……そういった相手をご紹介頂ける、そのように捉えて宜しいのですね？」

「さあ？ 付き合ってくれるかは知らないわ。でも、付き合ってくれたら楽しいかもしれないわね、あれもそれなりに力のある者だから」

「それはそれは、期待できそうなお話ですね、その方はどちらに？」  
「そう逸らないの、焦らなくとも逃げはしないわ。偶に来たのだからお茶でもして話しましょう、今日は冷める前に味わって貰えそうで、振る舞い甲斐があるわ」

アイギスからの問いかけを聞き流すと、花の香りがするりと流れる。

周囲の花達もその動きに合わせて、首をユルユルと横に向けていく。向日葵達の動きが落ち着くと、そこに開いたゆらぎの中へ消えていく二人。少ししてから聞こえる声。夢と現の境にある幽香の屋敷の中で静かに語らう声、その声を開花を待つ向日葵が雨音と共に聞いていた。

少女歓談中

花と羊が出会ったというのに語らうだけで済んだ、そんな少ない安寧の日から丸一日過ぎた今日。アイギスの姿は再度地上で見られていた、歩く場所は着こむスーツやそれを纏う肌が溶けこんでしまいそうな暗がり。彼女が復活する際に見られる黒い瘴気、それに近い空気を漂わせる場所を歩いていく。サクサクと、高いヒールに偶に刺さる枯れ葉を気にせずに行く黒羊。暗がりですらと光って見える赤黒い瞳には少しの期待が見られる、表情も穏やかに笑むいつもの顔で、何かに期待をしながら進んでいるのが見て取れた。

背の高い木々が日光も、雨も遮ってくれるおかげで梅雨の雨降りだというのに傘も刺さずに歩ける場所。ここに入るまで差していた傘は水気を切って閉じられている、傘の取手に下がる羊が数回揺れ、振り子の動きを見せた後、その軌道が落ち着くか落ち着かないかという頃に、一度立ち止まる悪魔な羊。

「悪くない場所ですね、森林浴するのに好ましい空気です」

立ち止まり、見えない空を拝む。そのまま目を瞑り、両手を伸ばして深く呼吸をしている悪魔。

回りの木々の根本に生える茸群が時偶放つモノ、ただの人間が吸い込めば良くてむせ返り普通で昏睡、悪ければそのまま永遠に眠れそうな成分を持つ瘴気を体の隅々へと吸い込んでいく。2度、3度と深呼吸

吸を済ませ両手も伸ばしていると、高い位置に来た編みぐるみの視線の先に、今日の来訪先が見えた。

ポツリと一軒だけ立つ小さな家、ここ魔法の森の木々よりもほんの少しだけ高い円形の建屋と、それと並んで建つ、何処か西洋文化の雰囲気が見られる白レンガの壁が目立つ建物。その庭先にあるテーブルには大きくて歪んだ帽子を被った人形と、長い耳に三日月型の三連ピアスをした兎の人形、三対のコウモリ羽を背に生やす女の人形が置かれていた。

「あそこでしょうか……なるほど、聞いた通りの住まいのようだ」

——アイギス好みの空気が満ちる場所、そこに建つ家が変わり者がいるわ。

——その編みぐるみみたいに変な……可愛い人形が卓を囲んでいるのが目印よ、目立つから行けばわかるはずね。

ここを紹介してくれた者はそう言うだけで、それ以上の詳しい場所などは聞けなかったアイギスだったが、実際に建物を目にしてみるとあの説明だけで十分だったなど、小馬鹿にされた編みぐるみを撫でてから頷いていた。

「とりあえずはそうですね、いらっしやるのか伺ってみましょうか」

見つめるだけだったアイギスが数歩進む、するとテーブルについていた人形達の首だけがぐるりと回って目を合わせてきた。焦点の合わない、何処から見ても視線が合うような人工的な瞳に見られても彼女は然程気にしない、先日の花畑でも似たような光景を眺めているし、形だけは生き物に近いモノから見られたところで気になることはないようだ。

アイギスの動きに合わせ動くソレを眺めつつ正面玄関に立つ、詭えられているドアノックを優しく摘んで4度鳴らすと、建物内で何かの動く音がした。ガチャリと音が立つと薄く開かれる扉、そこから顔を出したのは、またしても人形だった。

「この主殿、ではないですね。独りでに動く人形とは……ポルターガイストでしょうか？」

話かけてもドアノブに両手をかけている小さな人形から返事はな

い、金色の絹糸を撚り編んだような、しなやかさの見られる金髪を揺らし見上げているだけだ。問掛けに返事がない事でポルターガイストのような相手ではないとわかり、それではここの主はと、物言わぬ相手に少し傾いで態度で問うていた。

「そうやって待っていても返答はないわよ、アイギパーン……いえ、弄ぶ墓守とでも呼ぶべき?」

人形の体の分だけ開いているスキマ、その奥から冷たい声色が聞こえる。

そうしてその声色、ではなく言ってきた内容に引つかかったアイギスがその声の主らしい相手を思うと、人形と瓜二つの髪を持つ少女が扉を更に開いた。声色に似合う冷たい蒼の、袖のないワンピースを着た、人形を美しく成長させたような少女がアイギスの視界に映る。

「後半は覚えがないのでわかりませんが、その名で呼ばれるのも懐かしいですね、魔女殿に呼ばれて以来でしょうか? 私を呼ぶのならアイギスとお呼びくださいませ、死の少女殿」

「私をそう呼ぶのも昔を知る連中だけよ、貴女とは初顔合わせのはずよね」

誰から聞いてきたのか? そういった疑問を含んだ言葉尻で語る少女だったが、聞かずとも誰からの入れ知恵なのかわかっていた。幻想郷で彼女の事を『死の少女』と呼ぶの者は少ない。過去ストーキングされ、魔法を教えるまでしつこく付きまとってきた花の女か、今はどこにいるのかわからない幽霊くらいしかなかった。

その内の前者、彼女が何をどう断つても、どう逃げてでも離れなかった花の香、嗅ぎ飽きる程に知っているその匂いが、今目の前にいる悪魔からも漂ってきていて……こいつからもきつと逃げ切れないのだろうと早々に諦めた少女が指を動かす。ドアノブに掛かる人形に向かつてしなやかな指先を向けると、その蒼い瞳に魔力が灯る。一瞬だけ行使した力の影響なのか、同じく一瞬だけ瞳の色が緩くウェーブがかかる髪に近い色合いになる。

「仰りようと御力から魔法使いとお見受け致します、レディ?」

「今は人形遣いを名乗っているわ、アリスよ。アリス・マーガトロイ

ド。呼び方は好きにして」

門口で互いの紹介を済ませる二人。

呼ばれ方と一瞬見たアリスの力から種族魔法使いだと断定し言い切ったアイギス、それに対して否定しない形で肯定してみせたアリス・マーガトロイドという人形遣い。両者がそれぞれに話を終えると家の中へと戻っていくアリス、テーブルと揃いの白い椅子に腰を降ろし、アイギスと視線を合わせた。

「招かないと入れない？ そんな種族ではなかったと記憶しているけど？」

「御名前の通りで好ましい御方のようですね、突然の来訪にも関わらず迎え入れて頂けるとは。その御厚意に感謝致します、人形遣い殿」  
名も姓も聞いていながら二つ名でアリスを呼ぶ、普段であれば姓で相手を呼ぶことが多いアイギスには珍しいが、彼女が生まれた地の近隣国ではマーガトロイドは姓というよりも立場という物に近い為、こちらでは呼ばない事にしたようだ。

マーガトロイド、郷紳きょうしんというそれは、話に出た種族である吸血鬼の姉妹が生まれた頃に使われていた地主の総称だ。言うなれば男爵や公爵といった貴族階級の下に属するモノで、アイギスが姓と認識し呼ぶには少し違和感のあるモノであった。急な来訪でも迎え入れてくれた種族魔法使い、外の世界でしか知られていなかった自分の呼び名を知る相手を、上流階級に位置するとはいつても下級な部類で呼ぶのは気が引けるらしい。

人形遣いと呼びかけて肅々と頭を垂れるアイギス、頭を上げ住まいに入る前に上着を脱ぐと玄関脇に備えられた、白いケープの掛かるコートハンガーに掛け中へと入った。

「立っていないでかけたら？ お茶ぐらい出すわよ」

アリスがわざとらしく指を鳴らし、隣に浮かぶ人形とは別の人形を動かす。邸内のそこかしこに置いてある人形の数体がそれを合図に行動を開始した、音無く動く人形たちがカチャカチャと陶器らしい音を鳴らし歓待の準備に動く。その音を聞きながら客が主の正面に座ると、磨かれた食器類が配膳され始めた。



「そう鳴らしていたただかなくとも、私を知っているというのは察する事が出来ましたので」

話しながら指を鳴らす黒羊。紅茶を注いでくれる人形に指を向けてパチンと、乾いた指の音を鳴らしてみせると、指の先にいた人形がアイギスの顔を見上げた。音が響いても穿たれる事がなかった人形が操る者に代わって見上げると、少し微笑む羊の悪魔。

「何か気に触った？　そうしてくれなくとも、話してくれば理解出来るわ」

「貴女様がそうなさって下さったので、私もソレを見習っただけですよ、他意はございません」

再度弾かれるアイギスの指。今度はアリス本人に向けて指の先が向けられている。隣に浮かぶ人形、他のモノ達よりも二回りほど大きくて丁寧な仕事が見える人形が二人の間を遮るように動くが、気にせず鳴らされる羊の指先。それでも何も起こりはしない……が、アリスの内心では何か起こっていたようだ。その表情を見逃さなかった悪魔の瞳、種族として持ち得る悪戯好きな心がその部分を軽く突く。「暖かな視線を感じますが、何か思うところでも？」

「知識としては知っていても、実態を知る事が出来なかった相手と話せているの、さっきのは聞くだけだった相手を実際に見られた興奮から出てしまった、それくらいに思っしてほしいわね。粗相をしたと言うのなら謝るわ」

淡々とした口調で謝罪を述べる人形遣いに動揺などは見られない、言葉だけの謝罪と聞こえるかもしれないが決して言葉だけではない。今の流れでアイギスが能力を行使していればアリスは人形と一緒に穿たれ消えていただろう、知識として知る悪魔ならばそう出来るという事を、かつて人間だった彼女は知っていた。

伝承の中の存在としてアイギスを知るアリス。彼女が幻想郷に来る前にいた世界、外の世界とはまた別の世界で人間として暮らしていた頃に、魔法使いとしての力を教え導いてくれた育ての母のような存在から、別の世界にはこんなのがいて、関わりと手間だからと聞かされていたようだ。

どのように手間なのか、問掛けても教えてくれなかった師匠兼母、いつも微笑むだけの母が語りながら自身の頬や腕を擦って苦笑する姿は、幼い彼女の記憶に強く残っていた。

「粗相など何もごさいません。それに、先ほどのように私の手段を知っていると見せて下さらなくとも、今は何も致しませんよ?」

「それは上着を脱いでいるから、そんな認識でいい?」

アイギスの言った事は質問ではなかったが、話したことに対する答え、のようなモノを話してくるアリス。工作中、というか荒事に向かう際は身形を整えてから動いていた血溜まり好きの悪魔。アイギスとしてはその方がなんとなくやる気が出るからそうしていただいで、脱いでいるから襲わないという事はない……なかったのだが、アリスが知るものではそういった事となっているらしい。在り方が何か別の形で伝わっている、が、強ち間違いでもないなど、頭が傾く黒羊。アリスからの返答を聞いて数秒経った後、脱いだ上着を横目にしている悪魔が語る。

「当たらずとも遠からず、といったところでしょうか」

笑む悪魔が答えを語る、けれど人形遣いは腑に落ちないといった表情。紅魔のメイドとなった人間と出会い、民間伝承と言われた時にも感じたことを再度考える、語り話として残る悪魔。

私はどのように語られるようになったのか?

また勘違いされているのか、それならば少しは訂正しなければ……そうなれば上着を着なければならぬのだろうか、色々と思案するような表情を見せる。

「曖昧ね。でも、その口ぶりからすると聞いている話とは違う部分もある、という事か」

注がれた紅茶を楽しみつつ語る二人、その内の招いた者、真顔でアイギスを見つめるアリスがポツリと発した独り言。今まで記憶していた事に対して今の返答を宛てがい、同時に先ほど鳴らされた指の事を考えている。聞かされていたモノとは違う部分がある、聞いていたよりも、そう、会話の出来る相手だと言うのが新たに得られた悪魔の知識らしい。蒼の瞳に真剣さを込めて思いに耽る姿、それを眺め、視

線を重ねていた黒羊が思わず笑んだ。

「何故微笑んだの？」

「知っている内容と、新たに知り得た情報を摺り合わせる御姿が好ましいものでしたので、つい」

互いに一言ずつ話すと、二人共再度紅茶を含む。

また間違った認識をされているのなら修正を、そう考えていたアイギスであったが、何も言わずとも自身で思考し修正していく者、知識を貪る種族に対して、少し様子見をする事とした。

熱心な研究にでも当たるような目つきで羊を見る人形遣い、その熱視線に向かい研究対象が問いかける。

「人形遣い殿」

「なに？」

「答え合わせが終わりましたら結論を教えてくださいませんか？」

カップを手放し、両手の指を組み問いかける。

既に知られている穿つ能力、ソレを用いて力業で聞き出す。そうする事は楽に出来るが、そういう事はしないと指を組んでみせるアイギスだが、触れるだけでもその力は発現できる。その部分が伝承として残りアリスが知っていればなんの意味もない仕草となるが、どうやらそちらは伝わっていないらしい。

見ていた顔から組まれた手に視線を落とし、問いに返事をしてみせた。

「断る、と言いたいけど条件次第ね」

同じく指を組み返す、これにも対して意味は無いように見える。ただなんとなく組んだだけ、アイギスが組み、それを見ていたからそうしただけの事だったが……この仕草が、形だけは対等に話そう、そういったモノとしてこの場では映った。

悪くない交渉相手、アリスをそう捉えた黒羊が一つ咳払いをして返す。

「条件とは？ 飲めるものでしたらお応え致しますが、こういったモノになるのでしょうか？」

興味本位の、唯の世間話であったモノが思いがけない形で楽しい交

渉事となった。そう捉えた地獄の商売人が仕事に当たるような、瀟洒な姿勢でアリスに述べる。

悪戯心の混ざっていた声から冷静な声色へと雰囲気まで変える、テーブルに肘をつき少し前かがみだった姿勢も真っ直ぐな見慣れた姿にしていくと、顧客予定が視線を上げながらその条件を口にした。「そうね、簡単な事なんだけど、今日の来訪理由が聞きたいのよ。聞きそびれていたし、内容如何によっては話さない方がいいと判断できるかもしれないし」

「仰る通り、簡単な事にございますよ。出自がこの国ではない方がいると聞きましたので、お会いして少し親睦でも。と、考えただけにございます」

話だけを聞いていた相手、それと出会い少しの興味を覚えていたアリス。母が語っていた相手はもつと悪魔らしい、傲慢で残虐な、狂気に染まる者というイメージがあった……けれど今の相手は会話だけで済まそうとしてくれている、であれば自分も会話から判断しよう、そういった心算で条件を提示した。

因みにアリスの母が語ったのは体験談である。アイギスがまだ若く今よりもやんちゃではつちやけていた頃、自身の出自を探し正しく彷徨っていた頃に出会っていたようだ、顔を合わせどうなったかはアリスがイメージしていた通りで、娘にアレとは関わるなど言われるような出会いだった。

「その言葉に偽りないと、約束してもらえますか？」

「お約束致しますよう、して、私の問いへの返答は？」

アリスの問掛けに言い切る悪魔。普段の淑やかさがみられない笑み、ニイっとした気味の悪い笑顔で返事を述べた。その笑みを見たアリスが一瞬止まる。

「羊という割に、店主ではなく猫みたいね」

「私は羊で店主ですよ、猫はまた別の方がいらっしやいますね」

「今のは独り言、気にしないでくれるか？ 返答はまた後日、考えを纏めてから伝えるわ」

小さな呟きを拾われるが言い返し、そのまま席を立つアリス。奥の

部屋へと消えていくと、何か水音と缶を開けるような音を立て始めた。その姿を追わず、座ったまま音だけを聞いている黒羊が冷めた紅茶を口に含む。

カップに残る少しの琥珀色には先ほどの顔が映り込んだ。

顧客の帰りを待ちつつ、水面に映る自分と、答えの決まった自問自答をする。

争い事を求めて訪れたというのに、今のような約束をして問題はな  
いのか？

親睦方法の指定まではされていない。

私の好む触れ合い方は禁じられていない。

だから、大丈夫。

今後争うことになったとしても約束を破った事にはならない。

と、己の中で言葉を正当化し、含んだ紅茶とともにそれを腹に収めた羊の悪魔。

気になっていた事も聞ける、そうしてじゃれ合えそうな相手も出来た、これは非常に喜ばしい、そのような歪んだ得心を行かせるというものの瀟洒な顔に戻った。

内心で考える事とは真逆の顔でアリスの帰りを待つアイギス。後日どんな話が聞けるのかと、浮かぶ人形に顔を合わせながら、冷めて渋みやエグみが強くなっている紅茶を飲んだ。人形ではなく主が淹れてくれるだろうおかわり、それに期待しカップを空けた。

## 第五十四話 ぐも鼻貞先へのぐも機嫌伺い

恵みの雨が振る日中、強くなり始めた日差しが照る朝。

それが半々に見られるようになってきた昨今。

その二つの内、日差しが強かった日、その夜。

幻想郷の住人達が更衣を済ませて落ち着いた頃合いの今に、少し騒がしい場所があった。もうすぐで日付が変わろうかという時間帯、真っ赤で大きな柱時計が目立つ廊下で騒ぐお屋敷の者達だ。その者達の中でも小さな体躯に透き通る羽を持つ者達、両手に炒った豆を持ち人影を見かけては全力でそれを放るメイド達は楽しそうに過ごしている。季節に似合う昆虫羽をキラキラと羽ばたかせ、館内のそこかしこに香ばしく香る豆をばら撒いていた。方方から飛ぶ豆があちこちへと散っていく様、これは後でメイド長が泣きを見ることになる、そう感じながらも、自身の手がけた今の惨状を眺める者が廊下を漂う。

「エリア制限を設けておいて正解だったわ、図書館内でこうされては掃除の音で集中できなくなっていたものね」

今の騒ぎは屋敷内だけで行われている、そのように聞こえる言い草だったが実際その通りで、このイベントを仕掛けた者が管理する地下部分、大図書館内での豆撒きは一切禁止されていた。

キヤイキヤイと騒がしい中静かな佇まいを見せる魔女、その華奢な背中や大きめの帽子にも妖精達の弾幕が向けられる事はあったが、声の主パチュリー・ノーレッジの体に触れる前に何かに阻まれ落ちていく。それは彼女の左手の平で浮かぶ小さなクリスタルが起こす現象、静かな水色が見られる魔女の石からは水の波動が絶えず放たれ薄い膜となっており、主の身体を包み込んでいた。

「想定以上に騒がしくなってしまうたけれど、それでも結果は上々か」  
パチュリーを包み込む水の泡がふよんと豆を受け止め、ゆっくりとした動きで弾き返す。

それを目にしたメイド妖精たちが魔女様だけズルい、当たらないなんてズルい、動けない大図書館め、などと言い始める。そういった大

きな陰口は当然パチュリーの耳にも入っているが、彼女は全く気にしていない。気にしているのは同じ屋根を共にする友人と、その妹の事だけだった。

「その可能性もあるとは思っていたけど、本当に効くなんてね。言い伝え通り弱点ばかりの姉妹なんだから」

賑やかで紅暗い廊下を進んでいく。両足は投げ出し纏うロープを足先まで垂らして、僅かに浮かんで移動していく紅魔館の魔女。仕掛けた催し事が取り敢えずの成功を収めている絵を見た彼女が向かうは当然、自分のテリトリー。廊下を曲がった先の下り階段、そこかしこに書かれている魔法の言語を眺めながらユルユルと降っていく薄紫の少女『貸出不可・盗人進入禁止・黒白立入禁止』等と書かれているのを確かめながらゆつくりと地下へと戻る。

しばし進んで、入り口の扉に手を掛けると何もせず押し開いた。雰囲気からこの扉にも何か魔方が施され、立ち居入りを禁ずる者を追い返す仕掛けでもありそうだが今はなにもされてはいなかった。以前はしていた、が、そのせいで侵入される度の扉を破壊される事が多くなった為、鍵を掛けても掛けなくても侵入されるならもういらぬといった魔女らしい合理性と、ある意味で魔女らしくない諦めの良さからこうなっている。

「おかえり、上はどうだった？」

書庫の主が戻ると掛けられる声、聞き慣れた友人の声がパチュリーを迎える。

パチュリーがいつもいるはずの、厚い一枚天板が特徴的な机に座り足を組む上の主が問う。

「上々。メイドの中に鬼はいなかった、けど今戻ってはダメね、きつと焦げるわ」

「そう、ならもう少しこっちにいろわ」

見聞してきた事を伝えると、机に戻り、大きな椅子に深く根を張る魔女本来の姿へと変わった。

腰を降ろし左手のクリスタルが魔導書に戻ったのを確認すると、机から椅子の肘掛けへと飛び移り、そのまま書庫の主に返答を述べた屋

敷の主レミリア・スカーレット。

「いても構わないけれど静かにして頂戴。騒がしいのは上下だけで十分よ」

右側の肘掛けに座ると足を組み、わざとらしく羽を羽ばたかせて微風を起こす友。悪戯なそよ風がページを数枚捲つていくと読んでいた項を進められた魔女は読書を諦め、天上と床それぞれを見てから述べる。この友人に言ったところで聞きはしない、それはわかっているし、視線の先の者達も静かになどするわけがないとわかっているからだ。

遊びに集中し始めて聞く耳を持たなくなってしまった上の妖精メイドや、聞く耳も理解する頭もあり、理解した上で真っ向から断ってくる下の者相手にも言っている風だったが、今はレミリアだけに伝えられているようだ。

「そう言うな、我が盟友。私はこれでも我慢している。メイドの粗相からドレスが少し焦けても睨むだけで済ませている、一回休みになるまで叱ってはいないわ」

上よりも下、金属音が鳴り響いてくる床面を長く見ていた魔女。

それとは逆に上の騒ぎを気にしながら語るレミリア。

パチュリーからすれば上は無害で下の者達が扱う炎の方が厄介なモノだが、レミリアから見れば下の二人は問題視はしていない、長い付き合いから自身では止められないと悟っている為、今更問題視してもしかたがないと開き直った状態であった。

ちなみに、実際は上もそれほど気にはならない、触れたところで少々の火傷をする程度で、レミリアにとっては傷の内にも入らない：：ただメイド、それも妖精程度に傷つけられるのが面白くはないだけだ。

「そうね、確かに我慢しているわ：：全く、来ている時だけ大人びて見せて。上手く切り替えているようだけど、きつとバレているわよ？」

図書館の床、書庫から続く地下への階段を進んだ先にある部屋、やたら騒がしくなり始めた辺りを見つめる魔女が、誰とは言わずに語り始める。今地下の妹と戯れている相手をダシに使えば大概は黙る、そ



う知っている悪魔の盟友が飛ばされなくなったページに視線を移す……が、パチュリーの指が文字を追い始める前に悪戯な風がページを捲った。

「わかっているさ、こうしているのは切り替え出来ると見せているだけ。両方で見てくれるとわかったしね」

以前の異変で見せた主としての態度、その後のデートで見せた昔の姿、口にされなかった誰かにどちらの姿を見せても否定されなかったレミリアが、今は気構えず自然にこうしていると語る。

「それならまたデートでもしてきたら？」

「今は妹がデートだ、水を指しては悪いだろう？」

「あ、そう。お優しいお姉様ね」

「そうさ、私は姉だもの。妹よりも我慢強いさ」

図書館の天井を見上げていたレミリアがパチュリーと同じ床を見る、二人の視線が定まると静かな書庫内に響く声が増える。音もなく現れ、話しかけるよりも先に頭を垂れる屋敷の侍女長。上の騒ぎに少しだけ疲れているような、呆れているような顔はせず、瞑った瞼の奥だけに隠すメイドが急須片手に姿を見せる。

「申し付けていないわよ、咲夜。それに……日本茶？ そっちの黒い棒も、何？」

幼く可愛い鼻をピクリとさせ、咲夜の右手から漂う嗅ぎ慣れない日本茶の香りを嗅ぐ。そうして左手の御盆に乗った黒い棒、色取り取りのナニかが巻かれたそれ、茶色や緑だけが巻かれた物もあるそれを問いかけるが従者からの返事はない、代わりに友が返事をしてみせた。「私が目意識させたのよ、言ったところで静かにはならないのだろうし、少々強引にでも静かになってもらおうと思って」

「パチエが？ そうなの？」

「はい、パチュリー様から太巻きとりクエストがありましたので」

「太巻きって、なんでまた」

「節分に食べるそうよ、黙って食べれば縁起がいいとか。慣れない物を作らせて済まなかったわ」

「私こそ、時間がかかってしまい申し訳ありません」

謝罪を述べる咲夜、その両手にはすでに漆器の御盆しかない。

姿を見せた、用意された物はご用意しましたとパチュリーに見せてから、時を止めて配膳までを済ませていた完全で瀟洒な従者。御盆を左手に携えて頭を垂れると、右手でエプロンのポケットに軽く触れた。普段ならこのままスツといなくなるが、今日はそうなる前に主に引き止められた。

「味の感想を聞いていかないのか？」

「それは完食された後にでも、上の掃除も済んではおりませんので」

「まだ騒ぎは続くわ、妖精メイドが飽きてから済ませた方が合理的よ」

レミアアに止められても上に戻るつもりだった咲夜だが、パチュリーにまで止められしまい、この場から動く事は出来なくなってしまう。掃除などは言われる通り、全て終わった後にお仕置きを兼ねて行うつもりで、今はそれを理由に場を離れようとしただけであった。見透かされ逃げ場を失い、少し気まずい悪魔のメイド。

視線を二人から床に移し、また右手をポケット、その中に仕舞われている愛用の懐中時計に無意識のまま手を伸ばすと、二人にクスリと笑われた。

「まだ苦手？ この間の異変では一緒になったのでしょうか？」

「ご一緒致しましたし、苦手というわけでもないの……」

「怖い？」

先に話した書庫の主には冷静に返したが、後から聞かれた悪魔な主にはすぐに返せなかったメイド。それでもすぐに返答を試みせようとしたけれど、ピクリと二本のおさげが揺れた事で再度微笑まれる。

「別に隠さなくてもいいのよ、アレが怖いのは私も同じだから」

わざとらしくアレの部分強調し語る吸血鬼、本人に対してそう言えば間違いなく叱られる。言いつぷりに対してではなく、主として、淑女としてそのような物言いはと言われそのような事を理解しつつも、悪戯顔で口にする。

「私以外は皆古い知人だと、美鈴からはそう聞いておりますが……」  
顔を上げた従者が静かに問う。

咲夜がこの屋敷に来た夜、どこぞの妖怪に拉致され、選択肢なしに屋敷を襲わざるを得なかった晩からここにいた羊の悪魔。上手く侵入し吸血鬼を仕留めた、そう思っていた咲夜に対して、銀のナイフも、能力も効かないと魅せつけたお伽話の相手はレミリアに言われるまでもなく今でも当然として怖いモノのままであつた。けれど慕う門番からはあの方は古い知人だと聞かされている事もあるし、異変では盾となつてくれた姿も間近に見ている……もう少し近寄つてもいいが、それでもと、戸惑いを隠せない屋敷唯一の人間。

「私や美鈴から見ればそうでしょうけど、レミイ達から見れば……ちよつと乱暴なお隣のお姉さんつてところでしょうね、今は」

戸惑う紅魔の番犬をからかう魔女。

レミリアに同じく、魔の者らしい悪戯心が含まれた声色で語る。この屋敷の者、身内であればそう怖がる事もないと、ちよつと乱暴などと可愛らしい比喻を使って話すが内心では咲夜の気持ちもわからなくもなかった。

「ちよつと、ですか？……ちよつと？」

「確かに、昔に比べればちよつと乱暴なだけで、今のほうが穏やかに思えるわね」

「外の世界で見えていた頃に比べれば、今の方は丸いわ」

「知りたい？ 私が屋敷に来た日の事であれば教えてあげなくもないけれど、聞く？」

「宜しいのでしたら、是非」

それならと、左手に魔法の光がぼんやりと灯る。数秒すると魔女の光に誘われるように、広い広い図書館の奥の方から一冊、逆五芒星が表紙に描かれた書物が漂ってきた。

「あら、書いたの？」

「違うわ、最近図書館に流れてきたのよ。文字も紙の質も懐かしいでしょう？」

手元に届いたその書物、雰囲気からレミリア達が外にいた時代に書かれた物のようなだが、いつの間にかこの図書館に流れ着いていたらしい。それに気が付いたこの主が目を通し、自身と黒羊の出会いが書

かかっている事に少し驚いたのは記憶に新しいようだ。

指は使わず、勝手にペラペラとページを捲られる。

「あっちの文字は読めないだろうし、挿絵でも眺めながら聞くといいわ」

トントンと、レミリアが座る逆の肘掛けをつつくパチュリー。

咲夜がその横に寄り添う、と、突いた指を軽く振ってふわりと従者の足が掬われる。そうして不意に浮かんだ咲夜が肘掛けに尻を乗せる形で降ろされた。主の友人に向かって失礼な態度、これはさすがにと視線で語るが、何も言われず魔女の読み聞かせは始まってしまった。

いたたまれない顔でいる咲夜に微笑み掛ける語り部。屋敷に来た頃は碌な知識もなかった彼女、野良犬と変わらなかつた頃の咲夜に教養や知識といった部分、美鈴では見きれない部分を躱けたのはパチュリーであった：：美鈴とは少し違うがそれに近い感情がなくなもない魔女、読み聞かせるその声には、昔を懐かしむような雰囲気も感じられた。

く 魔女朗読中く

図書館で朗読会が始まった頃、地下でも似たような事が行われていた。

話し手は部屋の主、右手に持ったスペルカードを読み上げて、それを放ちながら聞き手に向かって放っている。目に見える荒々しい会話は今で三枚目、二枚目と三枚目が同時に使われている為2・5枚目と言つていいかもしれない。

四人が増えた妹が四本の炎の杖を振るい、対面する悪魔に斬りかかるが、受け手の盾を崩しきれてはいない。

「硬いの！」

「守つてばかりなんてヤダ！」

「ズルいの！」

「そうよ、攻めてもらわないと練習にならないわ！」

四人のフランドールが同じような顔つきで文句を垂れる、それぞれが言いたい放題に言つて弾幕ごっこ用に調整されたレーヴァテイン

を振るっているが、両手に炎の盾を携えたアイギスには斬撃が届いていなかった。

「そう仰られましても、これ以外のスペルカードは考えておりませんので。私には弾幕ごっこ用の攻め手が無いのですよ」

斬撃を捌き切るアイギスが眉尻を下げて笑い語る、攻撃の代わりに少しの口撃を試みせるが、それでもフランドールは面白くないらしい。受け続ける盾目掛けて、二対で組んで突撃をかます。

炎の刀身を4本、真つ直ぐに構えて、吸血鬼の膂力と勢いに任せて突き進む。過ぎる瞬間に躲せばなんという事もないが真つ向から向かってくるのは好ましい攻め手であり、それを放つのは愛おしい吸血鬼だ。ヒールを床に刺し、その場から引かない姿勢を見せた黒羊。

両者がぶつかると、甲高い金属音に炎の猛る音が混ざる。

「おお!? 刺さった!」

「守ってバツカリだカラソウなるノヨ!」

「刺さったの!」

「このままいくよ!」

フランドール達の切っ先がアイギスの盾に刺さる、ダメージとしては皆無、髪とネクタイが燃えてしまい、少しだけアイギスの服装が乱れた程度だ……が、それでも嬉しいのか、俄然力が入っていく一人吸血鬼姉妹。

「これは中々に重い、受け切るには億劫ですね」

勢いが増し始めたフランドールに向かって感心し、足元を気にする素振り。

切っ先が刺さっただけで割れも、ヒビが入るような事もなく、盾としては問題ないが、アイギスの身体とフランドールの膂力を受け切るには床が一番脆いようだ。突き刺したヒールの部分からひび割れが伸び始め、片足の蹄から順に自由を得てしまう。

そうして支えが一本になると俄然辛くなる、アイギスの顔に苦笑と満足感が見えるとフランドールが再度気合を入れ、床ごとアイギスを押し始めたが、それでも引かない黒羊が床を踏抜き、自身の両足を楔として耐えしのぐ。

「イケるの!?!」

「初めて勝テル!?!」

「イケそうなの!」

「勝てるんじゃないやなくて勝つのだ!!」

四人の妹が嬉々とした顔で確信を得る、が、それではまだ甘いといふアイギスが嗤う。

構えていた盾の先を床に刺す、元がスコップなのだから地を穿つのは得意な盾だ、当然のようにフランドール毎その場に留めた。それでも持つて数秒だろう、床の強度は変わらないのだから。

その数秒間の内にアイギスがスーツの内ポケットに手を伸ばした、表面は緑の下地にBと書かれた物、裏面は白で桶を抱える羊が描かれているスperlカード。名刺代わりにしたらしいそれを手に取り、宣言してみせた。

——責苦『終わりなき苦悩の果実』

宣言と同時にフランドールが盾毎突っ込んでくる、それを迎え撃つアイギスが宣言した通りのスperlを見せた。またしても巨大なスコップを手に取り、フランドールに向かって切っ先を向けると、刃を水平に構え片目を瞑って狙いを付ける。四人が纏まり並んで見える位置をざっくり読んでアタリをつけると、そこに向かって真っ直ぐに投擲した。自身の盾を貫いて突進してくる四人の身体の中程辺り、4つの点が線と繋がる部分に刃先が達するとアイギスが指を鳴らす。それを合図に切っ先がバクンと開いた。逆刃の鋏が開くようにスコップの刃が割れて、キレの悪い刃が生々しい音を立てながら四人の体にめり込んでいく。

「なにこ…:…!」

「騙しタ!?!」

「ちよつと待つてほしいの!」

「ちよつと! ズルいわ!!」

ブチンという肉断つ音とガキンという金属音、それらが同時に鳴り響く。盾と鋏にされたスコップと四人がそれぞれ刃に断たれるが、それでもフランドールの勢いは断たれない。上半身だけになった者や、

右と左が残るだけのフランドール達があむしやらに突っ込む。変に勢いだけがあるせいで既に止まりようにも止まれない状態であったし、それならこのままと、死にはしないが決死の突貫を決めた。

一本の炎の鏃となった四人組が体ごと特攻し、アイギスと共に炎の中に消えていく。

数分間の炎上の後で赤い勢いが収まると、一端は静かになる部屋。

その部屋の静寂を先に破壊したのは……

「勝ったの?」

「みたい?」

崩れた壁から現れたのは二人のフランドール。一人は右の肩から下腹の辺りを切り落とされ、もう一人はどうか身体をねじったらしく、腿から下がらないだけの一人吸血鬼コンビ。

アイギスよりも先に姿を現す事が出来たからか、今日は勝てたと楽しげに笑い始めるが、瓦礫の奥から投擲されたスコップによりその会話は両断された。

「驚きました、お上手になられたものです、私が不覚を取るとは」

放られた羊の角がフランドール達の間を割るように突き刺さる。声を発して存在感だけ見せ姿は現さない羊、声に乗せた歓喜の色を隠さずにフランドールを褒め称えようと、ガラリと崩れた壁の奥に姿を見せるが、埋まる上半身を見せるだけでその場から動かない。というより動けないようだ。どうやら楔代わりに埋めた足は床下部分に残っているらしい。

足も体も埋めたアイギス、彼女もフランドールに同じく五体満足で残ってはいなかった。

「! まだ元気なの」

「そうね、まだ勝ってなかった!」

まだ倒しきれていなかった、そう認識すると二人で見つめ合い、ハ イタッチでやる気を表したフランドール達、幼子の手からパチンという音が立つ。相対する悪魔の鳴らす静かな指の音とは違った若さが弾ける音が部屋で響くと、両足の脛から下がねじ切れているアイギス

がふわりと浮いて、妹達の側に寄る。

「いえ、ここまででに致しましょう」

「え！ 終わり!?」

「まだ元気そうなの」

気合を入れたところを止められ、両手を合わせたままの妹達が同時に首を傾げる。左右にいる二人が右と左、それぞれの側頭部がくっつくような形で傾いだ。まるで双子がおどけるような仕草。表情まで似通っていて本当に双子のようだが実際は一人だ、紛らわしいが。

そんな状態で止まっている双子の吸血鬼、それぞれを見てから薄く微笑むアイギス。何故笑われたのか、何故止められたのか、両方の疑問を表情に浮かべフランドール達が見上げる。

「体力は十分ですが、私には手札が残されておりませんので」

「スペルカードがないからって事なの？」

「今みたいなヤツでいいじゃん！ 早く思いついて！」

「そう言われましても、先程のはなんとなく思いついたものでして、そうすぐには」

やや鼻息の荒い二人に語りながら右手の平を見せつけ、左手はスーツの上着を摘んで中を覗かせる。手の内にも内ポケットにも残っている種がない、そう伝えてみせると、プクリと膨らむ幼女の頬。物足りない、キツチリと勝負を決めないと気がすまない、書ける面積が増えた顔にはそう書いてあるように見える。フランドールの勝ちを認め、敗者が素直に負けを認めたというのに、このしつこさは誰に似たのだろうか？

「ほら！ 早く！ 次は？」

「そう、次を見せるの！」

「ですからもう手札が……」

折れないフランドールが手首を折る、ペシペシと、我儘なお嬢様が従者を呼びつけるように空気を叩く。怒りや悲しみといった感情を忘れるくらいに我を抑える事が出来る、そう出来るようになった引きこもりにしては随分と我儘で言いたい放題だが、こんな姿を見せるのは屋敷の者やアイギスくらいだろう。



こうなってしまうと静かにさせるか、何か別の方法で気を逸らすくらいしかやりようがない、ならばと騒ぐ二人の肩を抱き、双子の間に身を埋めてはつきりと言い直した。

「私の負けです」

二人の妹にそう伝えると、同じ高さにあつた片手がすつと下がっていく。勝ったの！ と、勝利を喜んでいた分身体が本体に戻ったように、残る一人は静かに、それでも瞳に初勝利の喜びを浮かべ見上げていた。

「もう一回！ もう一回言つて!!」

一人に戻り飛び回る妹蝙蝠、綺羅びやかな羽の一粒一粒をも輝かせ、窓のない部屋の中を七色の光で満たしていく。目に痛いくらいに明るくなる部屋の中、明るさを灯した者の表情も声色も部屋と同じかそれ以上に眩い<sup>まばゆ</sup>。

弾幕ごつことアイギス、未だ勝利を収めた事がなかったモノで同時に勝てたというのが嬉しい、語らなくとも姿だけでわかる状態となるフランドール。その光を浴びる悪魔が眩しさともう一つの理由から目を細め、再度伝える。

「はい。参りました、フランドールお嬢様の勝ちにございます」

「……!!!勝ったあ!!!」

参りましたと穏やかな口調で話される、それを聞いてから数秒して宝石羽がフルフルと揺れる、地震かと思えるほどに揺れ動いてからそのまま敗者に飛び掛かる吸血鬼。勝者から敗者に向けての追い打ち、力いっぱい羽交い締めするように飛びついた。

ギリギリ、ミシミシと音がする羊の体、それでも顔は笑んだまま。負けた上に締められて嗤うなどおかしなものだが、それ以上に妹の成長が嬉しいようだ、暫くそのままの形で過ごす二人だったが満足した妹が自慢すると騒ぎ始めた。

「アイギス！ 上に行こー！ 皆に自慢しなくっちゃー！」

「畏まりました、では向かいましようか」

体から離れないままよじ登り、頬を触れ合わせる形になるとはしやぐ妹様。言われた側の羊も無言で立ち上がる。修復途中の裸足のま

まで、愛用のハイヒールを戻しきれていない姿でペタペタと歩む。

『敗者は語るな』アイギスと争い、破れた門番にそう伝え配下に置いた姉の姿、それを思い出しつつ返事だけをしてフランドールを抱き進む階段。明るい地上へと向かう上り階段を、勝者を手にしつつ静かに登り始めた。

く妹様移動中く

「と、この本には記述されているわ」

舞台が再度戻ると、丁度読み終え、視線を上げる魔女が見られた。喘息持ちだとは思えない饒舌さで語った魔女、その昔話に聞き入っていた吸血鬼と人間だったが、二人の顔色は真逆の色合いだった。該当部分を全て読み上げて咲夜の顔を見るパチュリー、こんな出会いだったと再度懐かしんで話し、感想を求めるが、先に口を開いたのは吸血鬼の方だった。

「ふうん、屋敷に来る前にそんな事があったのね」

「そうよ。私は必死だったというのに、あの方はなんでもない事とされたわ」

レミリアが感想を述べるとパチュリーが苦笑し話す。僅かに顔を上げながら、丁度大図書館の灯りが灯っている辺りを見つめ、あれくらしいの角度で何人か浮かされてもがいていたなど、挿絵を撫でて軽く笑った。当時は焦燥しきった顔でいたが、それに近い感情は、今は従者に移っている。

「あの、この挿絵の通りだったのでしょうか？」

話してくれたパチュリーの指、軽く握られ人差し指だけが伸ばされている辺りを眺め、感想よりも先に問いかける。指の辺りには丁度真つ赤な羊が噛む姿。黒い槍のような物を左手に、右手には咲夜には見慣れない器具を持った悪魔、頭の前から足先までベツタリとした赤色で染め上げられ、恍惚とした表情で血を舐め噛む赤い羊の挿絵がこの書物には描かれていた。

「まさか、これはイメージよ。回りは挿絵の通りに真つ赤で煩かったけれど、あの方はほとんど汚れていなかった」

「・・・そうですか」

ほんの少しだけ深い息を吐く、安堵とまではいかないがそれでも少しは恐怖心が拭えた咲夜……ではあったのだが、咲夜の顔から察した魔女が追加を述べる事で、考えを改める事となった。

「勘違いしていいそうね。それを知られると叱られそうだから、少し訂正してあげるわ」

「勘違い、ですか？」

「泣き叫ぶ人間達、それを蹂躪するあの方。そんな風に考えたのでしよう？」

「パチュリー様のお話からはそのように感じました、その絵も近いイメージですし、シャベルもそのまま描かれているように思えます」

視線の位置を変えない咲夜、目を細め、諭すような態度を見せている相手、敬うべき主の友人は見ずにその指先を注視したままで返答していく。返事が返ってくるのと魔女の指先が動き、嗤う羊の顔から手、血に染まる何かが描かれている辺りへスライドしていく。

「煩かったのは悲鳴ではなかった、呻き声で騒がしかったのよ」

「呻き声？」

「そう。挿絵<sup>これ</sup>だけでは惨殺されてお終いと思えるけれど、あの場で五体満足だった者は皆ギリギリで生かされていたの」

静かに頷くパチュリーと、静かになる咲夜。

あの場で生殺与奪を持っていた黒羊、当然のように蹂躪したが、ギリギリで生かし残す事で、少しのおやつと悪名を得ようとも考えていたようだ。

「殺されなかった、ではなく生かされていた……そういう事なのでしようか？」

「そういう事よ、だからレミイは怖いと言ったの」

「パチュリー様は恐ろしくはない、と？」

「怖いわ、私を追ってきた者を路傍の石とも思わない方だったもの」

正直に言えば昔ほどの恐れはないが、それは話さない魔女。

恐れが消えれば力が弱まる、それを知っている彼女。

手を取りここに連れて来てくれた恩も、親から譲り受けた信仰心も持ったままの彼女が今届ける心は別の恐れだ。アイギスに消えても

らつては私も、屋敷の友人達にもいい感情はないだろう、そういった怖さも信仰心に混ぜてある。

ふと見つめる自身の手元、護衛役として引いてくれた手を見つめ、あの場から去った過去を思い出す。背中側、アイギスの営んでいた店先から聞こえてきていた人間達の声、責苦に耐えるだけで言葉にならない怨嗟の声を思い出しつつ語る魔女。

「これは、本当なら私に使われるはずだったのよ」

挿絵の羊の右手にある物『苦悩の梨』という拷問器具、その用途を少しだけ話し、あの店に逃げこむのがもうちよつと遅かったらどうなっていたのか、それを教えるように握っていた魔女の指がすつと広がる。

言葉にしないのはパチュリーなりの優しさだ、まだ十代で、そういった事は知らない咲夜に話すには別の意味で刺激的だろうと、敢えて仕草だけで語っていたが……太巻きを味わいつつ見ていたもう一人が余計な口を挟む。

「挿れて広げるだけか、単純な作りね、それ」

「……全く、貴女はもう少しデリカシーを持ったほうがいいわね。それに、その太巻きは完食するまで話してはダメなのよ?」

「そうなの?」

「そうなの、無言で食す事で祈りを表すという話らしいわ」

屋敷の主がぶつちやけると書庫の主がため息をつく、二人の顔を見比べてどういう事なのでしょうと問いかけるメイド。話の流れで気が付けない初い娘だと、窘められても凝りないレミリアが動く。ひらりと肘掛けから飛び立ち、こういう事よと咲夜のスカートに手を伸ばす。

「レミィ、やめておきなさい。拒否出来ない相手にすべきではないわ」  
「私が私の物に手を出して何か悪いの? ダメだと言うなら止めるか逃げるかしてみせればいいだけよ、そうは思わない? 咲夜?」

夏場仕様の短めなスカートがペラリと捲られると、少し揺れる銀のおさげ。

それでも無言のまま抵抗はしない。

相手は自身が仕える主であり吸血鬼だ、今までにもこうやってからかわれているし、今日もそうした内の一つだろう。そう考えるが……今日の主の雰囲気から少しマズイ気もしていた。

ゆつくりと時間を掛け腿を伝い登ってくる幼女の指、向かってくる先はまだ誰にも触れられていない場所……緑のリボンで結った髪がまた揺れる。それを合図に、そのくらいにしておきなさいと、パチュリーが近くの魔導書をクリスタルに変えていくと、同時に何処からかパチンという音。

「従者相手に何をされているのでしょうか、レミリアお嬢様？」

魔女の赤いクリスタル、咲夜の握っている銀時計、それらが力を見せる前に鳴り響いたのはアイギスの指。屋敷の者であれば聞き慣れている指の音、静かな書庫内を通る軽やかな音が当主の腕を穿ち、肘から先を消し飛ばす。

首に手を回す妹を片手で抱く、いつもの姿で階段を登ってきた羊。普段であればカツカツと足音が鳴らされてその音で気がつけるが、今はヒールも足も修復中で素足のままだ。それが幸いしたのか、咲夜に手を伸ばすレミリアには接近がわからなかった。

「どうしようと構いませんが、生娘相手と考えますと少々品性に欠ける行いに思えますね」

「不器用なんだから咲夜が壊れちゃうわ、やめた方がいいよ？ お姉様」

僅かな呆れが感じられる声と、ざまあみろという雰囲気を纏う声。両者を知っている相手ならば誰が聞いても作り声だとわかる声色だが、今のレミリアにはそこは関係ないようだ。背中側から掛けられた声に対して振り向かない、振り向けないレミリアが、穿たれ短くなつた腕を戻して弁解を述べる。

「な、なんの事？ 私はちよつとした教育をしていただけで、その……ね、ねえ、パチエ？」

「私はデリカシーを持つべきだと、やめておけとも伝えたわ。それでもやめなかったのは当主様よ、ねえ、咲夜？」

「……私は……飼われ、お仕えしている身ですので何も……」

慌てた口調で同意を求める主だったが、話を振った親友も、ようやくそういった用途に使うと気が付いた咲夜にも、首を横に振られてしまう。けれどこれでは折れない吸血鬼、パチュリーには否定されたが咲夜には否定まではされていない。そこを利用し、調子づく。

「ほらー！ 咲夜もこう言ってるわ！ 誰がここの主だと……」

「当主であらせられると同時に淑女でもあらねばなりません、だといふのに……誘うならベッドで誘われては？ 方法も強引ではなく、リードして差し上げるのが年長者の務めではないかと」

「で、でも、嫌よ嫌よも好きのうちとか言うでしょー！」

「好き嫌いの判断も出来ぬ相手に使う格言ではございません」

苦しくなり始めたレミリアがそれらしい文言を吐くが、紅魔館の者達よりは長くこちらにいる異国人には通じないらしい。カツカツと足音を鳴らし近寄ると、主の首根っこを押さえ、そのまま引っこ抜く。

右腕で妹を抱き、左の脇腹には姉を抱える形になると、その右側のお嬢様が残る二人に忘れていた自慢をし始めた。

「そうだ！ 見て見て！ 私が勝ったの！」

「それはアイギス様の、妹様が取得されたのですね。おめでとうございます」

緑一色に白抜き文字でBと書かれたカード、いつぞやの異変でアイギスが見せ、白玉楼の庭師に預けた物と同じ物が今フランドールの手の中にある。身形に似合った声色で咲夜とパチュリーに自慢する先の勝者だったが……一通り自慢してから咲夜に手招きを試みさせた。呼ばれると左側の主、捕まり喚くレミリアを気にしつつ、カードから妹の顔へ視線を移す従者。目と目が合うとその間にスペルカードを割り入れた。

「それ、咲夜にあげる！」

「私に？ 初勝利の記念品なのでは？」

「私はまた勝つからいいの！ これで巫女にも勝てるよー！」

「霊夢をそう見てはおりませんが……」

声が続いては雰囲気までも姿に合うものにしたフランドール、アイギスの腕から身を乗り出して、遠慮する咲夜のエプロンに向かって手

を伸ばす。その動きに合わせてアイギスが身体を傾けると、咲夜の顔にアイギスの顔が近づいた。

フランドールがカードを押し付ける間の僅かな時間だったが、頬が触れるか振れないかという距離まで近寄った時、咲夜にだけ聞こえるように囁いた。

「別件でも優しく手解き致します故、どうぞ、ご鼻屑に」

甘く優しい声で囁くと、またも揺れる咲夜のおさげ。ピクツと揺れアイギスの首筋を薄く撫でるが、擦ったさとは別の意味合いでクスリと笑って、すぐに離れる墮とす者。伝えた売り文句の返事は聞かず、姉妹を抱えたままで地下への階段を戻っていった。

これからリベンジかとはしゃぐ妹、下でお叱りが待っていると察して、うーと嘆く姉、二人と共に一歩ずつ下がり消えていく羊、その頭を眺めるメイド。

「やめておきなさい、小悪魔みたいになるわよ」

「さすがにそう考えては……私が見ていたのは別ですわ、味の感想を聞きそびれてしまったと思ひまして」

「ああ、そういえばそうね……納豆巻が気に入ったみたいよ」

どうやら聞こえていたらしい魔女、咲夜の視線を追いかけているながら忠告を述べるが、咲夜からの返答を受けて当初の思惑を思い出している。強大な力を有していながらやたらと弱点の多い友人、流水や日光に弱いと伝わる吸血鬼……という割に風呂も平気で日傘があれば日中も動ける者達。

弱点というには少し雑なあり方に疑問を覚え、どれがわざと流された弱点でどれが隠したい、カモフラージュしたい弱点なのかと探る意味合いもあったようだ。倒すとか、屋敷を乗っ取るだとか、そういった意味合いからの調査ではなく、あくまで友人の弱点をカバーしてあげようという考えで探り始めたパチュリーだったのだが、連れ去られていく友を見て、一番の弱点対策が出来ないし、考えても無駄かもしれない。と、唯一完食されていた納豆巻を眺め微笑んだ。

## 第五十五話 立場を現す

パサリ、開かれる封筒。

紙の擦れる音が店内で響く、そうして取り出されるは文。

折り目一枚を捲ると『謹啓、盛夏の候、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます』という書き出し。達筆ではないが書き慣れていて、大概の者が見れば見習いたいほどの字体で綴られた手紙、蛇腹に折られた和紙にはそう言った書き出しがなされていた。それを手に取り目を通すのは文章の盛夏を体現した肌の色、縦書きの手紙にも今では慣れた異国の羊である。

1つ2つ、3つ4つ、ゆつくりと指先で折り目を追っていく。小さくなつた氷が入るグラスを手に取り、時折りカランと鳴らしては中身を減らしていくアイギスが、朝一番にスキマから届けられた手紙を読み耽っているようだ。

「わざわざ私に依頼ですか、特に売り込みもしておりませんがどういった理由からでしょうかね」

グラスに向かって吐かれる独り言。

『お手隙の折にでも一度御来訪頂きたく存じます。店主敬白』

そう書かれた部分まで読み切るとグラスに残る麦茶を飲み干し、手紙を封筒にしまう。そうして部屋の奥辺りにある小さな書き物机の引き出しを開いて、何かメモ書きや帳簿に近い物が入る引き出しへと重ねた。

「まあ……暇ですし、構いませんか」

胡座をかき、着ている服の胸元を摘み、パタパタと風を送つての独り言。

今は普段のシャツ姿ではなく、夏場らしい黒いホルターネックのチューブトップ一枚でいる彼女。下半身も隣の仕立屋で買ったらしい七分丈のカーゴパンツ姿のようだ。先日訪れた際に風見幽香に言われた辛辣なお言葉。変な物だとか、似合わないだとかを意外と気にした彼女が仕立屋の主に見繕つて貰ったものだが、普段のスーツよりは股上も浅めで布地も汗を吸うものらしく、中々に涼しい物らしい。



普段は見られない腹や肩などを晒した露出が高い姿だが、彼女は元々外国産で湿度の高い日本の夏には対応しきれておらず、この国に向かい砂漠を進んでいた頃のように、夏場だけは今のような素肌を晒す格好でいることが多いようだ。

「さて、形は違えども久しぶりの悪魔召喚、ここは着替えて行くべき……いや、知らぬ相手でもなく暑さも厳しいものだ……ならばこのままでもよい、か」

誰もいない店舗内で、見慣れた木目の天上相手に語る。

ぶつぶつと呟き己を納得させた後、着替えもせずそのままの格好で、ベルトループに緩く通していただだけのベルトに仕事道具が収まる厚手の革製ベルトポーチを通すと、そこにノミや名刺等、ちよつとした手持ち道具を入れていく。

「午後に来てくれとしか書かれておりませんし必要ない気も致しますが、一応は仕事の依頼ですしね」

道具数本程を揃え、ほとんど着の身着のままの状態で店を出る黒羊。

アングルストラップが複数見られる、どこぞの剣闘士のようなヒールサンダルに足を通し、ピシヤリと引き戸を締めると、ぶら下がる判じ絵看板をひっくり返して、そのまま地獄の喧騒の中へと消えていった。

消えていった先はここ旧都の中心部とは真逆、旧都の入り口である朱塗りの橋方面。

額に僅かな汗を浮かべ進み、そこを根城にしている橋姫と橋の下を流れる川に足先を浸し、世間話という名目の時間潰しをしてから更に歩き進んでいく、どうやら目的地はここでもないらしい。その後も、地底では一番涼しい鍾乳洞辺りで汗を引かせてから、その先に繋がる大穴より、揺らぐ空気や強い日差しなど、見た目から暑いとわかる地上へと向かい飛び立った。

く少女移動中く

目的地へと向かう途中で元の住まいにも顔を出し、いつか文句を言われた花壇の様子も確認してから進んだようで、文面にあった午後、

昼餉を楽しむくらいの間帯に召喚先にお邪魔したアイギス。今は呼び出した相手を待つ為に入り口近くで佇んでいる。

「すみません、お呼び立てしておきながら待たせてしまつて……また随分とラフな格好ですね」

歩んできた方向、妖怪の山がある方角の空を眺め、一度は枯れてしまった花壇がそれなりに整えられ、再度花壇としての役割を取り戻していた様子を思い出していたアイギスの背に声が掛かる。

「さすがに暑さには勝てませんので、今更日焼けも気になりませんし」  
振り向きながら返答を述べる褐色娘、その視界に声の主、大きく広がる長めのスカートに、細かな白レースが特徴的な、この季節では暑そうな格好の守護者が収まる。

「確かに暑くなりましたが……いえ、取り敢えず向かいましょうか」

里の入り口からは出ず、堺の門越しに話す上白沢慧音。

アイギスを促すように右手を小さく差し出すと、その手に引かれるように丈夫な木造の門戸を潜り、里の中へと歩を進めた悪魔。そのまま慧音の横に立ち、少し回りを見渡した。

「この里も様変わり致しましたね、店舗も増えたように見られます」  
「いつと比べているのかわかりますが、あれから100年以上は経っています。変わりもしますよ」

まだマヨヒガに住んでいた頃、地上にいた間も、稀に來ては花の種類などの買い出しに訪れてはいたアイギスだったが、それ以外に興味がなかった為か、今のようによくくりと回りを見るような事はなかった。

それ故明確に覚えている景色は住まいを改造した質素な作りの店ばかりだった頃で、今のような、ぱつと見から商い中の店舗だとわかるような店は目新しく見えているようだ。そうやって、昔は生活するのに不便がない程度の商店しかなかったのに、と回りを見ている羊に少し説明がされた。

「今は店も、人も増えました。居酒屋や、最近出来たカフェーもそれに繁盛していますね」

二人が見つめる先にある店舗、片方は『処飯 処酒』と書かれた大

きな看板が目印となっている居酒屋。カフェーの方は通りが違うらしく今は見られないが、慧音が話す通り賑わっているようだ。若い男女が歩き去っていく先が少し騒がしい。

「100年程度で随分と変わるものですね」

前を横切った男女の男と目が合い立ち止まる姿を見て、昔なら目が合ってもすぐに逸らすか足早に立ち去られたのに、住む人間達も変わったなと連れれの女に手を引かれ歩く男を見て思う悪魔。

八雲との契約が切れてすぐ地底に引込んで、地上の人を襲う姿を見せなくなったから逃げられなくなった、そんなところかと頷くアイギスの姿を、別の理由で頷いていると観た里の守護者。

頷く羊にそれらしい事を話す。

「妖怪からすれば一瞬ですが、人間や建物には長い時間ですから。あの頃を知っている者も少なくなりましたし」

「上白沢様は兎も角、他にもあの頃から生きている者が?…ああ、香霖堂の店主殿がおられましたか」

「霖之助は元々里にはいませんよ、私以外だと阿求くらいですね」

「アキユウ様?」

「今日の待ち合わせ相手です、会えばわかりますよ、きつと」

言い切り長いスカートを靡かせ、後に続けとわかるようにアイギスの数歩先を進む慧音。

向かう先は里の端からでも見られる立派な黒松が見られる大邸、その邸宅内へと進んでいく里の守護者。守衛代わりの里の男と挨拶を済ませ、先に奥へと歩んでいく慧音の後を続いていくアイギスだったが、この屋敷に呼ばれる理由など何かあったらどうかと、歩きながら考えていた。

歩く最中に庭を眺める、不意に感じた視線。

慧音以外の誰か、人であって人でないような、歪な、普通の人間よりは少しだけ自分達化物に近い者の感覚を察知したアイギスだったが、慧音に促されすぐに視線を戻した。そういえば幽香も来るような場所だった、ならば人外の視線を感じても当然と、すぐに思考を切り替えたようだ。

そのまま何事も無く屋敷に上がり、真っ直ぐな外廊下を進む二人。年季と手入れから輝いて見える床を歩いていくと、慧音がとある部屋の前で立ち止まる。

「阿求、いるか？ 入るぞ？」

「あ、慧音さん、どうぞ」

外廊下に面する襖越しに慧音が声をかけると、中から落ち着きの感じられる幼子の声が返ってきた。その声に促され部屋へと入る悪魔と半獣、中にいたのは10歳位の人間少女。

薄紫の髪に、桃色の山茶花の花飾りが目立つ九代目、稗田阿求。静々とした態度で座礼をすると、礼を受けたアイギスも丁寧な礼をしてみせる。

「お久しぶりですね、アイギスさん。格好も振る舞いもお変わりないようで」

二人が訪れるまで向かっていたのだろう、少し低い長机の横で小さな身体を折りたたんで、久しぶりだと挨拶する九代目。亜弥として出会い転生してからは初めての顔合わせではあるが、知識としてはある程度覚えているらしく、何処か気安い雰囲気の挨拶がされる。

が、アイギスからの返答はなく、代わりに少し考える表情が見られた。

「ご無沙汰しておりますと返答すべきなのか、初めましてとお伝えすべきなのか、悩ましいところですね」

訪れる途中の話しぶりと着いた先から察してはいたが、姿をほとんど変えずに転生してきたという相手を実際に見て、人間にしてはやはり珍しいという思いと、身体が違うのなら初めましてなのではと、変なところで考える黒羊。

最近は良く傾いている頭を見て、対面する阿求と隣の慧音が微笑み話す。

「どちらでも間違っていないんですけど、真面目に考えると変な感じがすね」

「そうだな、私も久しぶりと言ったのだったか、言われればこれも変な感覚か」

部屋で座る阿求が笑って話すと、続いて慧音も話に乗って自然流れで畳に腰を下ろす。一人立ちんぼとなったアイギスだったが、二人に見上げられると傾いた頭を戻しながら少し遅れて座った。

先に座っている二人は美しい正座だが、後から座った彼女は一人片膝立て。それなりにこの国の文化にも慣れた異国の羊だったが、長い時間の正座は辛いらしく、長話の雰囲気がある席では今のよう片膝立てか、住まいで組んでいたような胡座が多い。

単純に考えれば生まれた国の違いで、文化の違いというやつなのだが、その違いが種族の違いに思えた悪魔が、それならばと傾けていた頭で閃いた事を話す。

「では私からは初めましてと、そう伝えておく事とします。初めての  
ご挨拶という事ですし、宜しければ」

途中で言葉を切ったアイギスがベルトポーチを少し弄る、仕事道具がこすれ合う小さな金属音がした後に取り出されたのはスペルカード。Bと書かれた表面を裏返し、羊の絵が書かれた面を見せて阿求に差し出すと、すんなりと受け取られた。

「桶を抱えた羊さん？　ちよつと可愛いですね」

「判じ絵というモノだそうで、友人達が考えてくれたものですね、気に入っております」

「ふむ、判じ絵という事は看板、つまりは名刺か何かですか。スペルカードを名刺にするというのもおかしいものだ」

「なるほど、名刺代わりなら頂きます。スペルカードとしては使えませんがね、私は飛べないし、遊び回れるほど丈夫な身体でもない  
で」

「スペルカードとして使うつもりはありませんので問題ないかと。元よりただの紙ですし、里にいる限りそれを使う事もありますまい」

「・・・用意しておきながら弾幕ごっこには興じない？　合いますんか？」

渡された名刺を眺める阿求、描かれている羊と目が合うと子供らしい顔で笑った。ちよつと可愛いと褒められ悪くない気分のアイギスも僅かに頬を緩めるが、一人だけ硬い顔の慧音がアイギスの物言いに

疑問を呈す。視線は阿求の手元に落として、本来なら弾幕ごっこで使われるモノ、生き死にから近くて遠い遊びで宣言されるはずのカードを見つめ、考えついた疑問を素直に問うた。

「私には合いませんね、見る分には楽しめませんが争いというには物足りないと感じます」

「物足りない、ですか……いつかのような場の方が好ましいという事です？」

アイギスが返答を述べると表情と声に重たさを含ませた慧音が再度問いかける、今の彼女の脳裏には昔の、吸血鬼異変での事が浮かんでいた。ただ動いてただ命を奪っていったモノ、操られ動くだけだった者達。感情もなく操られる中慧音自身が再度葬った元人間達を思う。

出来れば二度と味わいたくない手の感触、あれから結構な時が過ぎたが今でも残る切った感触と、すぐに思い出せる髪や身体に纏わりついた腐肉の匂い……言葉を言い切った後、はらりと広がるメツシユの髪先を無意識の内に撫でていた慧音、浮かない顔をしている彼女に、あの夜を共にした羊から答えが伝えられた。

「はい、ああいった血生臭い場こそ争いと存じます」

「言い切るんですね……私は遠慮したいです」

淡々と吐かれた言葉、慧音が否定したい事を真つ向から肯定する物言いの黒羊、そんな彼女を否定したのは慧音ではなく阿求だった。

「遠慮など、あの頃のように里が襲われる事などないのでしようし、守護者たる上白沢様もいらっしやいます。考える事すら無用な心配事では？」

「そうですね、心配はしてません」

「……二人でからかわないでもらいたいな、バツが悪い」

「からかってなんかいませんよ、ね、アイギスさん」

「はい、からかうなど滅相もございません。今日まで守り通した実績もあるのですし、あの夜の上白沢様は気高く感じられました、それを誇り胸を張っても宜しいかと」

慧音に比べれば明るい物言いの阿求。亜弥だった頃にあの異変は

体感している、が、あの晩に彼女の姿を見てはいない。屋敷の中で囲われてそのまま騒ぎが収まった為、外に出る事はなかった当時の八代目、あの時の汚れた慧音の姿を見ていないからこそ今のよう素直な明るさがあった。

そんな明るい幼子と特に気にかけていないアイギスにからかいかも似た褒め言葉を言われ、少しだけ明るさを取り戻す慧音。今更考えたとところで致し方ないし、アイギスが言うように里が危機に瀕する事などそうはないだろうと考えを改めたようだ。

雰囲気が変わると話題もそれに伴うらしい、ふと思いついたように、わざわざ地底から呼ばれた者が話し始めた。

「さて、ご挨拶も済んだところで今日の本題に入りたいのですが、依頼とはどのような？」

「あく……実は特に何も、というか今の場が出来ただけで十分というか」

アイギスが今日の本題を口にする、歯切れの悪い感じの阿求。

依頼用の手紙には出来れば会って話したいと記載されていたため、直接会って話すようなことかと考えていた桶屋だったが、呼び出した人間の雰囲気からはそういった事は感じられなかった。

どういった事かと再度傾いでいく羊の角、その角が床に対して平行に近づいていくと、両手の指先を遊ばせながら阿求が話し始めた。

「ちよつとした面談を試してみたいなと思っただけなんですよ、種族や立場が違う相手と話す機会が欲しかったんです」

慧音をからかうような事を言っていた先程よりも小さな声、ちよつと言いくいとわかるような声量で今日の呼び出し理由を語り始める阿求。九代目となった事で何か記念のような事、幻想郷縁起の編纂以外にも何かしら形に残したくて動いたのが今日らしい。

何の為だとか、話した結果どうなるだとか、そういつた事は真っ白の状態、ただ形だけを成して見たかったと、考えなしの事を語る九代目のサヴァン。

「まだ案にもなっていないんですけど、後々にはキチンと、出来れば会談として形にして書に記すつもりです。その練習というか……ダメで

した?」

「ダメとは言いませんが、私を選んだ理由くらいは聞きたいですね」  
語られた事は兎も角として、何故自分が選ばれたのかを気にする黒羊、彼女の成り立ちを鑑みれば気になる部分ではあるのだろう。利用されるも利用するも然程気にせず好きな様になっている彼女だが、やたら拘るのがこういった部分である。

不機嫌ではないが真剣な問いだとわかるような、少し強い語り口で問うと、阿求ではなく慧音から返事が届いた。

「それは、私が推してみたんです」

「上白沢様が? 何故に私などを? 推して頂けるほど私は里に近くはありませんし、今の人里で知られているとも思えないのですが?」  
思ったままの疑問を述べるアイギス、彼女が全て言い切ると少し静かになる部屋の中。待つてみても二人からの返答が無いため、呼び出した本人である阿求を赤黒い瞳に収める羊。

それでもなにかが返ってくるような事はなかった、少し陰り始めた部屋の空気、それに伴い再度アイギスに向けて発せられる視線のような、気配のような何か。阿求の座る位置の奥にある襖、隣にあるあろう部屋の辺りから感じられるソレを見るように、黒羊の視線が流れると、その気を逸らすタイミングで推薦者が話し始めた。

「貴女は間違いなく妖怪で人の敵と言える方だ。それでも里を救ってくれた実績もありますし、こうして話に耳を傾けてくれる事も知っています。ですので他の誰かよりは安全かなと思つた次第で…：利用され、幻滅されたというなら謝ります」

「いえ、特に思うところはございません。強いて訂正するならば敵ではないという部分ですかね」

静寂を破ると、落ち着いた雰囲気ですらすら話し始める里の守護者。人里で教師をしている者らしく、他者に向けてわかりやすく聞き取りやすい口調や風合いで語り、最後には利用したアイギスに対して謝罪まで述べてみせた。

けれど言われた方は全く気にしておらず、それどころか敵という妖怪の立ち位置部分を訂正すると、慧音に負けない勢いですらすらと言



い返した。こう返ってくるのは慧音も阿求にも予想外だったらしく、どういった意味合いかと、深く思案するように腕を組んだり、机の天板を指先で叩いたりしている。

そんな悩ましい二人を嘲るように、普段見せる瀟洒な笑みを浮かべた悪魔が言葉を増やす。

「勿論味方などとは申しませんよ？ 人間は私の糧、言うなれば敵ではなくただの餌です。敵と認識してはおりませんし、その部分は揺るぎませんので、謝罪も否定もいりません」

態度も口調も何も変わらない状態、話した通りのゆらぎの見えない姿ですっぱりと告げる地底の悪魔。敵の部分を訂正した事で少し近寄ったかもしれない、そのような感覚を受けていた里住まいの二人が悩みを忘れ、ただ引いた。座る位置や顔色といった見て取れる部分も多少は引いたようだが、二人はそれ以上に内面で引いたようだ。

穏やかな物腰で笑い、再会の挨拶から会話までもする悪魔。今の言葉を言わなければ、頭の角がなければ背の高い丁寧な人という様子も見られるアイギスだったが、普段通りのままで餌と言いつつ彼女やはり別の種族で、敵対する間柄なのだ。慧音や阿求……そして近くにいるらしい誰かにも映ったようだ。屋敷の奥で聞き耳を立てているだろう誰か、燃え上がってしまったようなほど暖かなモノをアイギスに、そうした鬼気迫るモノとは別の視線を隣に慧音に向けて放っている誰か、屋敷の中で唯一明確な敵意を発しているその者に向けて、残りの言葉をの述べる黒羊。

「それでも以前にお伝えした通り、里の中では襲わないと再度述べておきましょう……さて、そろそろお暇致します。依頼は済んだようですし、それならば長居する理由もありません」

好ましいモノ、暖かで真つ向から浴びたい殺気を感じ取り、このまま長くいるときつと我慢するハメになる。以前のよう欲求不満になる前にさつきと帰ろうと、アイギスが立ち上がる。

静かになった里の二人と、姿の見えないもう一人に向かって変わらない口調で語り、返事を待たずに動き始めた。引き止める事もなく、部屋にいる二人の視線は釣られて上がるだけ、そのまま外廊下へ続く

襖へと移ると、わざとらしく襖の敷居を踏む黒羊。

そうする事が非礼だとこの場の誰もが知っているが、止められる事も、失礼と詫びるような事もなかった。そうして外に出ると、すぐに正面玄関へと一人歩んで消えていった。

残された阿求と慧音が、遠くなる足音を聞きながら小さなため息をつく。

二人の吐息が漏れるとソレを合図に奥から出てきた白髪の少女、慧音から話を聞いてもしもの場合があればと潜んでいた元退治屋の少女が、何も言わずに姿を見せた。

無言のままに間を抜けて開かれたままの襖に手をかけた。

動きの悪かったその襖がするりと動く。

触れた誰かが平らに穿った三七溝、均すように穿たれた溝に沿って、静かに仕切りが閉まった。

## 第五十六話 幻視する月夜

相も変わらず賑やかな地獄。

一番栄えているメイン街道からは笑い声と怒鳴り声が止まず、一本奥の通りからは少しの悲鳴や喘ぎ声など、いろいろな意味が含まれた黄色い声が飛び交い町並みを彩っている。

各々がワライそれぞれがナク、感情の表現も、体で表す表現も豊かな、忌み嫌われる連中が思い思いに暮らす地底世界。暗く楽しい旧地獄、その中心をはしる旧地獄街道。

地上の道理が通らない地底のメイン通りを、酒樽担いで歩く鬼一人。

半透明なロングスカートを秋風に靡かせて。腰に括った紐の先にある升を揺らして。

通りの中央を一人歩むは星熊勇儀。

肩に担いだ酒精満タンの樽を時折撫でながら、肩と樽で風を切って歩いている。通りの両脇に並ぶ住人達に声を掛けられたり、深々と頭を下げられ視線を外されたりしながら進む旧地獄のど真ん中、向かう先は当然自分が根城としている場所だ。

彼女が歩いて下駄を鳴らす、そうするだけで普段よりも騒いでいる者達、通りを屯している悪鬼共が両脇へと引いていく。古典にある雀の子、もしくはこの地底らしく、蜘蛛の子が散るように通りの喧騒が割れていく中、すぐに着いた地獄の酒場。

それでも中には入らずに、裏手にある外階段を登っていく勇儀。

和風な作りの店舗には似合わない外階段。いつだったかの争いで物見櫓の代わりになった事から今後も必要かと思われ、急遽作られた階段を登っていくとそこにいた飲み相手達。

「なんだ、今日も始まってんのか。お前らは待って事を知らないのかい？」

酒場の狭い屋上に腰を下ろす三人。

それぞれがグラスを持っていたり、何かを飲み進めていたりして、それが気に入らないらしい鬼。全員の背中やら後頭部やらに向

かつて勇儀が悪態をぶつける、全員引つ括めて言った愚痴から数秒、ぶつけた内の金髪ポニーテールが揺れると、聞き慣れた朗らかな笑い声が響いた。

「ひっかかったねえ勇儀い」

「ああ？ ひっかかったあ？ なんだってんだい？」

ヤマメがおどけて勇儀を嗤う、どういう事かと鬼が歩み寄る。

抱えた樽ごとずずいと近寄ると空いている片手を伸ばした。金髪二人が腰を下ろす逆側、丁度いい位置にあった羊の角を取っ手代わりに捕まえると、軽く引いて身をねじ込んでいく。鬼の力で引かれた頭、軽くとはいっても鬼基準の力だ、当然のように頭も体も僅かにぐらついて、持っていたグラスの中身も派手にこぼれた。

「おっと、悪いね」

こぼれた液体が地面で跳ねて、アイギスの足元を濡らす。

床と足それぞれを湿らせるのが見えた加減知らずの鬼、ちよつと雑だったなど、溢れてしまった酒と濡らしてしまった飲み仲間に軽く謝るが、謝罪した相手も薄く笑うだけで、全く気にしていなかった。

「お気になさらず、中身はただの水でしたので」

角を掴んでいる手に話しかけながら、グラスに残る液体をわざとらしく自分の足に垂らす。組んでいる上側の足先が濡れ、雫がヒールまで伝った頃、薄笑いを浮かべたままのアイギスが勇儀に答えを教えた。

「水だあ？……引っかかったってのはそういう事かい」

「そういう事、綺麗にかかったわね。勇儀」

ケラケラと騒ぐヤマメを筆頭にしてクスリとアイギスも笑う、ヤマメが仕掛けたイタズラが綺麗にハマって楽しいらしい。そうしてやられた事に気づいた勇儀も笑うと、先の二人を肯定するように、ヤマメの左隣にいるパルスイもグラスの中身を軽く放った。

皆の手元が空になると待ってましたと置かれる樽。三人が座る前に降ろされると、天板に勇儀が指を指す、そのままちり紙でも捲るような仕草で剥がすと、待っていた者達が使っていたグラスを差し出した。

「おうおう大人気だ、モテる酒虫で妬けるねえ」

「私より先に妬まないで、口が軽くて妬ましいわ」

「それは、妬ましいものですか？」

「妬みでも僻みでもなんでもいいじゃないか、早いところ寄越しなよ」

澄み切った鬼の酒が満ちる樽、その底の辺りで静かにしている酒虫を覗きこみ勇儀が明るいい声で話した。言い切つて升を突つ込むと水面が波打ち波紋が広がる。タプン、五合枰が酒で満ちるとそれぞれのグラスに注いで回る勇儀。

全員に行き渡ると升を掲げてからグイツと煽り、喉を鳴らして飲み切ると瞳を瞑つて黙る鬼。

「う〜ん…」

黙つていた鬼が声を漏らす。

何かを言いたそうな、それでもなんと言つたらいいかわからないよ  
うな、持ちうる力に似たモノを顔と声色に乗せている。

「なんだろうなあ、この前の酒よりはウマイ気がするけどさ、なにか足りないような気がするねえ」

「そうですね、美味しいお酒ですがなにか、こう」

前回の酒虫の味を知っている三人が何か足りないだとか、言うに  
言えない何かを考え頭を捻つたり真つ暗な空を見上げてみたり、思い  
思いに悩んでいると一人、前回の味を知らないパルスイがすんなりと  
言い放つた。

「美味しいけど軽いわね、鬼の技術の結晶といえど、養殖物だとこんな  
ものの？」

意外といける口のパルスイ、グラスを一息で飲み干して口にした酒  
の味を体現するようサラリと問いを述べていく。場にいる三人、主に  
勇儀に向かつて問い掛けるとそれぞれが、ああ軽いのかと同じタイミ  
ングで頷いた。揃つてなんなの、と一人わからないパルスイを眺め三  
人がらしく笑うと、自分が笑われているようで面白くないのか、エメ  
ラルド色の瞳を揺らし、ツンと何も無い空を見上げた。

「お、一人見上げて月見酒かい？ 風流だねえ、パルスイ」

「つれない態度で空見上げ、見えない月を惜しみ妬むつてかあ。絵に

なるじやないか」

「うるさいわね、あんた達」

「月がなくとも月見酒と言うのでしようか?」

「あん? 月を想って飲めばそれで月見酒さね」

「実際に見えなくてもいいのさ、雨で見えなきや雨月、雲で見えなきや無月とかこじつけて、なんやかんやで月見酒にすりやあそれでいいんだよ」

「こつちでは元々見えないし、これも無月って事になるかしらね」

「ふむ、色々とあるんですね。まだまだ覚える事が多くありそうだ」

飲みくちの軽い酒を味わいながらのガールズトーク。

話す内容は見た目のような若々しい女性陣らしくない、日本の風習といったものではあるがそれぞれ和の化け物だ、知識も当然持ち得ている。談笑してはリアクションを見せる女達、和やかな雰囲気が見られる空間。鬼に橋姫、土蜘蛛と悪魔なんて物騒な種族しか集まっていないというのに、なんとも平和な空気が流れているが、ついついと話題に出してしまう辺り、それぞれ違和感には気が付いているようだ。

「それで、いつまで眺める事になるの? 仰ぎっぱなしは首に悪いわ」

そういいながらも天を仰いだままのパルスイ。

なにもないはずの地底の空を眺めながら、ポツリ呟くと顔の角度を変えていく。斜めからゆっくりと正面に、そのまま少し横に流した。視線の先にいるのはこの場で唯一の黒髪。

「私に聞かれましたも、此度も何も聞いておりませんよ?」

「まだ、だろ? アイギスちゃんよ」

パルスイに見られるも心当たりがないアイギス、それを伝えるようにヤマメの方に顔を向けるが、こちらからも余計な事を言われてしまった。

誰かが異変を起こそうと、その異変がどのようなものであっても然程気にしていない黒羊。眺める分には好ましく場合によっては死に至る過激な遊びだ、彼女の求める物に近い物ではある...けれど、自分でその場に混ざるには少し微温く感じてしまっている、それ故の無

関心だったようだが……

「お、いつものお迎えが来たみたいだねえ」

「八雲専属の桶屋は大変だなあ。毎回独占してくれて、妬ましいいったらありやしないわ」

「またそうやって。人のアイデンティティを奪わないで、強欲で妬ましいわね」

「寄って集って茶化さないでいただきたいですね。鼻貞の一つではありませんが、専属というわけではありません」

喧嘩仲間の二人に茶化され、体裁の悪い桶屋がすつくと立ち上がる。と、それぞれに訂正のような物言いをして返事は聞かずに歩み出す。数歩進むと床がなくなり、そのまま下へと落ちていった。三人の視界から消える瞬間にヤマメがいつてらっしやいと伝えると、床と平行して開いていたスキマが、大げさな音を立てて閉じた。

く桶屋召喚中く

呼ばれて何処かに飛び出ることではなく、スキマの中に佇む羊。

少し待つとスキマの主ではない八雲、体よりも目立つ九尾を揺らす者がアイギスの視界に降り立った。仰々しく頭を垂れて、言葉にするよりも早く主の不在を姿で見せた藍。丁寧な式が端折る辺り、少し急ぎの用事らしい。

「急なお呼び出し大変失礼、ですが紫様は手が離せない状態です」

「もう慣れました、紫様はまたお仕事をなさっておいで？ 月といひ紫様といい、珍しい事が多い日ですね」

周囲に浮かぶスキマの一つが紫の背中を写している。

逢魔が時を過ぎ、すっかりと暗くなつた地上の端、博麗神社の境内でその地の巫女と語らう姿が写し出され、いつもの様に顔の前を扇で隠しているような後ろ姿が、藍とアイギスの立ち位置の間に映しだされていった。

「お気付きとは、鼻が利きますね」

「私でなくとも、化け物であれば気が付くものでしょう？ 月光こそ届きませんが、流れてきていた魔力は心地良いものでしたので。お陰様で地底も好ましい空気に包まれて、過ごしやすくなりました」

旧地獄の住人達が普段よりも騒いでいた理由がこれである。

深い深い地の底にある旧都。

当然月光は届かないが、地上の空には間違いなくお月様が登っており、何がどうなっているのかはわからないが、夜に生きる者達がいっつも感じている月光よりも強力な、それでも心地良い魔力が光を通り幻想郷全体に降り注いでいた。

魔力が地面に降り注げば続く地下にもソレは降りる、空代わりの空間こそあるがこちらの間違いなく地続きなのだから、地底の住人達が伝わってきたモノを感じても当然だろう。

「確かに我々には心地良い程度なのですが、それが問題なのです」

「心地良さが問題とは、そういった墮とし方をなさる藍様らしくないお言葉ですね」

大真面目な対応をしている藍に対して、少し入った鬼の酒の力か、スキマに落ちるまで浴びていた月光の魔力に影響されたのか、どちらにしる普段よりも意地の悪い言い方をするアイギス。

実際はどちらに飲まれる事もなく、浴びた二つのお陰で機嫌が良く普段よりも饒舌というだけだ、紫に次いで付き合いの長い藍もソレには気が付いているようで、付き合っても実がないと理解していた。

軽口に対して反論はせず、あくまでも呼び出した理由のみを話そうとする八雲の式が、言いながらスキマに視線を流す。

「アイギス殿、失礼を承知での話となりますが、主に代わり仕事のご依頼をいたしたいと……」

藍の瞳に映る先は地上の世界、パツと見から正確にココだと明言できないうような場所ではあるが、近くに見える人工的な灯りと、夜間でも目立つ黄色が印象的な地域のようなだ。自身の式を斥候に出した藍が暗い竹林を眺め言いかけるが、アイギスが途中で口を挟んだ。

「先日の春雪異変での報酬も頂いております、ですのに貸し付けたままで追加の依頼ですか……式が身体で払ってくれる事もなかったというのに」

促されたスキマを赤黒い瞳が見つめる。その目には藍の式である化け猫が興奮しながらも黒い群体と争ったり、時折集られたりする光



景が映る。尻尾の太い式の式が頑張る映像を眺めつつ、藍にそつと寄り添うと一尾を摘んで軽く食む元草食動物。

中身のない尻尾の先を甘咬みして、そのまま尾の付け根に手を滑らせていくが、今は真面目な話且つ主の命の元動いている式は全く相手にしない。軽く尾を払って食む羊を追い払う。

「あれは冗談だと仰ったのでは？」

「勿論冗談です、今のお話も冗談と捉えて頂いて結構ですよ」

藍の口調は冷たい、真摯な対応を見せて茶化されたのだからそうなって当たり前ではあるが、良くも悪くもしつこさに定評のある黒羊も、一度ふられたくらいでは諦めたりはしないようで、機嫌の良さに任せ手を出したらしい。

はなつから相手にされないとわかりながらも手を出すのは単純に欲求不満なのか、やはり月に当てられているのか、よくわからない思考回路だが、元より矛盾した存在の彼女だ、このくらいの事も長い付き合いの中でよくあることらしく、藍は然程気にしていない。

「そろそろ真面目に取り合つて頂けますか？」

「少々遊びすぎましたね。して、此度の依頼とは？」

「紫様からは異変の解決に当たらせろと命ぜられ……」

「お断り致します」

即答、先程までの機嫌の良さは消して仕事に当たる姿を見せたアイギスが真つ向から断る。八雲<sup>友人</sup>から話される依頼であれば大概断らず、何かしらこじつけて請け負う彼女だったが、今日の依頼は即断った。「アイギス殿が好む荒事に向かつて欲しい、そう言った依頼なのですが請け負つて頂けない理由があたりで？」

それでも主の命を受けている者も引かない、というよりも引けなかった。自身のプライドから引けないというものもあるにはあるが、今起きている月の異常さを放つておけばどうなるか、紫から説明されてはいないが藍自身でも読み切れていたからだ。

放つておけば月に当てられた者達が狂う。

月から流される影響を受けない人間や、ある程度の力を持った妖かし連中にとつては何の問題もない状態、寧ろ心地良く過ごせる状態で

悪くはないが……藍の式が相手にしている者などそれほど地力が無い相手にとつては、委ねるに好ましい力の源になり同時に身を蝕む毒となる。藍の指揮下にある橙ですら多少の影響を受けているのだ、何の枷もない妖怪連中が月の光を浴び続けなければならないのか、籬の外れた人喰いが好き放題にし始めればどうなるか、すぐに察する事が出来ていた。

「紫様は異変と仰ったのでしょうか？ それならば解決に当たるのは人間では？ 私は人の範疇にはおりませぬ」

「言い分はご尤もですが、今回はそうも言っていられないのです」

八雲の定めたルールに則り持論を述べる悪魔。少し前に人里を訪れ、その際に自身の立場を示したばかりのアイギス、彼女は約束事にはうるさい羊の悪魔なのだ、そんな悪魔からすれば敷かれたルールを破るのは自身のプライドが許さない。

が、藍も素直にそれを飲めない。放っておけば人が死に、人が死ぬば妖かしも死ぬ。そうなれば幻想郷も死んで、愛する主の心も死ぬだろう。それくらい紫がこの地を愛している事を一番近くから見続けたのがこの藍なのだ、それ故仕える手札を使わずにはいられなかった。

先に見せた博麗神社が映るスキマの周囲、それぞれ半人半霊の庭師や黒白の魔法使い、瀟洒な従者が映るスキマに指先を伸ばしてそこを見ろと、強い態度で表す。

「妖夢殿に霧雨様、十六夜様も動かれるのですね」

「はい、それぞれ主や親しい者と共に動き始めました」

主、とアイギスの声が漏れると三人娘の奥や隣にそれぞれの主や親しい相手が映る。

白玉楼の亡霊姫に始まり魔法の森の人形遣い、最後に見えたのはアイギスの愛する吸血鬼の姉が、紅魔館の屋上で白い皮膜を広げ、歪な満月を見上げている姿だった。

「これはどういった意味合いでしょうか？」

「見たままの通り、此度の異変は人妖共に動いて解決に当たる事となりました。紫様も術式を構築し終えた後に博麗の巫女と同行される

手筈となつています、紅魔館の主も幽々子様も互いの従者と共に行動されるようです」

「……つまりは私も誰かと組んで異変に当たれ、というのが今回の依頼内容だと」

「紫様はその様にしてほしいと話されていましたが……」

「無理なお話ですね、人と馴れ合うつもりはありませんし、組むような相手にも心当たりがありませんので」

幽霊と半霊が何かを話しながら白玉楼の階段を下る姿、雑多な物に溢れた部屋の中で語り会う魔法使い達、月を拝む吸血鬼の側で静かに佇む従者。それぞれの景色を見比べた後でも以前断り続けるアイギス。

今夜の特別ルールは理解したが、話した通り組むような人間がいない事もわかつている。仮に同行するならば見知っている相手、例えば名刺を預けたような……一人思い当たるが、病弱な彼女では無理だなと薄く笑った黒羊。淑やかさの浮かぶその顔のまま、誘いを諦め、自身の式を見つめている藍に少し語る。

「異変には関わりませんが、少しのお手伝いくらいは致しましょう」

再度藍の尾を掴む、その尾先を一つのスキマに向けるアイギス。

手伝いと言いながら尾を差し向けた場所には、黒い群体、群れて動く蟲達に押され始め、だんだんと明かりが消えていく人里から離され始めた橙が見える。踏ん張りをみせこらえているが、蟲の勢いに飲まれ何度か姿が見えなくなったりして、その度に藍の尾先が跳ねる。

「橙様も大変なようですし、まずはそちらへ。主の命に逆らえない御方に代わって子守をして差し上げますよ」

「ありがたい申し出ですが、宜しいので？ それは……」

「紫様であったならこれ以上詮索致しませんよ、ここは主を習ってお静かに」

案を伝えると何かを言いかけた藍だったが、掴まれている尾を引かれ体制を崩したことで言葉を濁された。そうして少し身体が揺れるとそのままアイギスに引かれ、強引に唇を奪われる。突然過ぎて逃げも構えも出来なかつたようで、好き放題にされる傾国の美女。

互いの口が離れ透明な糸が伸びると、微笑んだままで襲った悪魔がまた話す。

「先払いで頂戴しましたし、お仕事に当たると致しましょう。長居して疼いても困りませぬ故」

互いの唾液で僅かに濡れる唇を舐めた後、大きなアモン角とサイドの長い髪を垂らして前傾する悪魔。別れの札を済ませ軽く跳ねると、奮闘する橙が映るスキマへ身を沈めていく。向こう側に出現すると同時、両手に現したスコップを燃やし、蠢く群体を散らし橙と合流したアイギスが見えた。

式の元に信頼の置ける相手が現れると、一人胸を撫で下ろす藍。

解決に動く主に代わって個々の状況を見るように言われている彼女、この空間から動けない自分に代わり使役する式を動かしていたが、月の魔力を受けて普段よりも力強く、少し荒れ始めている橙が心配でもあった。

「慣れているという話は聞いているし、これも見ようによっては子守になる、か……動いてくれた理由がわからんが、黙れと言うならもう考えるまい」

眩くと勢いで奪われた唇に指先を当てていた指を舐める、隠微な舌を指に這わせ二人の姿を眺めながら、思考を切り替えていく傾国の九尾。先ほどまでは口を閉ざされた理由を考えていた。異変の誘いに来た藍、彼女が配する式、異変に当たる橙に肩入れするという事は間接的だが解決に関わる事になる。それ即ちアイギスが異変解決に動くような事で、見方によってはルールを破るような事になるだろう。そのような考えを巡らせていたが、敬愛する主なら使える者は使うだけで、原因究明は出来る暇を作ってから行うだろうと、そのように思考を切り替えた……ようだが、紫ほど上手な切り替えは出来ないらしい。

炎を宿す黒羊と勢いを取り戻した化け猫を眺め、若い内に知れば癖になるから万が一にも奪われてくれるなよと、舐めていた指を唇に這わせた藍であった。

## 第五十七話 蠢々蹴月

燦々とした日差しが凪いで、空に浮かぶ灯りが交代をするかしないかという頃合い。

暮れ落ちていく幻想の大地を四足ついて走り回る少女、日中の明るいうちは小さな身体を丸くして住まいの日向で丸くなっていったように、暗くなり始めてから急に忙しくなってしまった彼女。

立っていた穏やかな寝息から、暑い日の犬のような息遣いに切り替えて、尾先の割れ始めた同胞とともに地を駆け、命ぜられた任務をこなそうと、韌やかな身体を伸ばしあちらこちらと駆けずり回っている。野を抜け、藪を抜けながら、共に進む同胞達に時折指示をするように、二つの尻尾を左右に振るネコ娘。右の林を見ては同胞を走らせ、左の茂みを見ては同じく仲間を散らして。一見する限りでは、二股の尾を持つ少女を中心にすっかりとした命令系統が出来上がっている部隊に見えたが、得てしてそういうわけではない。

その証拠に散っていった猫又達は散った先で他の物に興味を惹かれてしまったり、木陰に隠れている小動物や蟲を狩り始めてしまったり、酷い者は浮かぶ月から発せられる力に当てられ、発情期のような声を上げたりしていた。

「ああん！ もう！ こういう時くらい言う事聞いてよ……橙は我慢してるのに！」

誰ともなく嘆くのは先頭を奔る化け猫。

慕ってやまない九尾の主様より『私の代わりに動け。何かあればその場で判断し、それでも対応仕切れないなら呼ぶように』と重要な任務を任された、すきま妖怪の式の式、橙。

「藍様が忙しいの、だから橙が頑張るんだから！ ちょっとは手伝ってよ！」

走りながら後ろに叫ぶ。

単純な力だけなら彼女を上回る猫の化性はこの場にいない。

そこから考えれば彼女が叫ぶような事態にはならないはずなのだが、連なっている猫又達は彼女の部下や配下という者達ではなく、ど

ちらかといえれば一緒に日向で丸くなる仲間、友人のような者達ばかりだ。それ故呼び出しには応じて一緒に駆けているが、飽きたり他に目移りすればすぐにいなくなってしまうようだ。橙にとっては頼りない仲間に思えるが猫なのだから致し方無いだろう。

「!? 止まってー!」

今までのような困り声ではない、同胞を率いる者として正しい、力強い声で指示を飛ばす凶兆の黒猫。引き連れる皆の音が静まると左右の耳をぴくぴくさせ、器用に別方向に動かして周囲の音を聞き分ける。気が付いた時には小さかった音、大きなナニかが地を這うような、ズリズリとした音が橙の耳に届く。聞こえてくるのは先に分けた仲間達の方、一瞬音が途切れるとやたら激しい猫の声が響いて、またすぐに静かになった。

同時に皆の背が丸くなる、身を屈め毛を逆立てて、猫らしい威嚇体制がどの猫又にも見られた。

「来る!」

がさり、左右の林と茂み両方から何者かが動く音がすると、感じた音の方向に同時に動く猫又達の耳と意識。それぞれがフシヤアと声を立て、未だ見えない相手、敵と認識した者に向かって威嚇を示しているが、すぐに無駄だとわかった。

茂みの奥が揺れ倒れる。そこから伸びてきたのは無数の黒い節足。

化け猫少女が見上げるほどのサイズ、足の一本だけでも橙の腰回り以上はありそうな大型のナニカが、ざわつく音を全身からかき鳴らして、仄かに灯る黄緑の瞳を猫部隊の前に現した。

「でっかい……む、かで?」

橙が見たままの感想を口にするむかと蜈蚣の輪郭が蠢く、ゾゾゾと足の形をぼやけさせると端が垂れてはまた繋がる。よくよく見れば一体ではなく群体。蟻や蜈蚣が連なる身体に瞳の部分にだけ蛍が集る群生体。数える事が馬鹿らしいほどの数で連なる虫達が一匹の大型蜈蚣と化していた。

触覚に当たる部分や口に当たる部分、その先端から垂れ下がったり、蠢いて登ったり。苦手な者が見れば目を瞑りたくなるような状態

で威嚇する猫達の前に現れ、形を僅かに歪ませながら草も細枝も飲み込み突っ込んできた。

「ち、ちょよ！ 散って!?!」

言うが早いか逃げ惑う橙と仲間達。

ただ遊び半分ですついでにきただけの仲間達だ、橙が散れと言う前から既に逃げる算段を見せていたのだが、先に逃げ出した者達も姿を潜めさせた林の奥で断末魔を上げた。

「やられた!?!? まだいるの!?! 皆逃げ……ううん、ここは……逃げない!?!」

同胞の最後を聞き、逃げの姿勢を強めるが頭を振って思い直す。

藍から貰った耳のピアスがぶつかりあい、チリンと静かな音を立てる。慕う主の声色に似た凜とした音が聞こえると、逃げから一転、追われる同胞と群体の間に割って入り一人正面を切った。

「怖くなんて、ないんだから!?!」

追われる獲物から追う捕食者へと目の色を変える化け猫。

自身を鼓舞して妖気を練り、敵対者に向けて放っていく。赤とオレンジ色の輪が橙の周囲に広がると輪の輪郭が崩れ、アチラコチラに飛ぶ弾丸となった。ランダムに放たれた妖気弾が地面や蜈蚣の身体で弾け、大きな昆虫の足が少し止まる。

怯んだその瞬間に背を丸め、加速しながら回転する。オレンジ色の球体にしか見えなくなるまで回転速度を上げ、顎の舌へと潜り込み全身のバネを活かして跳ぶ。鋭く伸ばした両手の爪に渾身の力を込めて、一撃で顎と胸に当たる部分を両断した。

「やった!?! 今のうちに逃げ……」

頭を落として一安心と完全に油断している橙が、姿の見えない仲間に向かって逃げろと言いつけるその前に、足に這い寄る違和感に気付く。くすぐつたいような感覚から一気に鋭い痛みへと変わる感覚。目を落とせば、断った頭と胸だった者達が橙の両足を這い登っていた。

堪らず泣き叫び地面に転がる橙だったが、伏してしまったのは悪手。腕や肩からも集られて、小さく鋭い痛みが全身を奔る。それでも

主の力のおかげか、僅かに残る冷静さで使役する子鬼二匹を呼び出して、自分の身体を強く握らせ地面に打たせて虫を払う。

打ち付けられるダメージも気にせず、地面を跳ねてそのまま滞空し、どうにかその場を離れる事には成功したが……呼び出した青鬼も赤鬼も蹂躪され、媒体である形代の姿に戻されて、黒い渦に飲まれていった。

「なんなのこれ!? なんですか!?! 藍さ……!!」

主の名前を言いかけて思わず自分の口を塞ぐ、今は事態の把握も打破も出来ないような状態で、すでに橙一人の手に余る状況だ、橙一人では対応しきれないのだから藍にすがってもいい状況ではある……けれど、橙はそうしなかった。

今の藍には紫から仰せつかった命がある、それに当たっている間は極力そちらに集中してもらいたい。私は未だ未熟で力も弱いが主を敬う心くらいは誰にも負けたくない、幼いながらも見せた再度の意地が主の名前を呼ばせなかった。

それでも現状は変わらない、寧ろ橙の瞳には嫌なモノが写ってしま

う。  
「あれ? 形がさつきよりも……なが?!?!」

黒い団子から触手のように伸びる虫達、形も太さも歪ませ空に向かって伸びる。空を這うように伸びてきていた虫達から逃げるように高度を上げた橙であったが、距離を取れた事で油断をしたようだ。

離れた距離を詰められ、一気に黒の中に飲まれ沈んでいく。脚や腕くらいならまだどうにか落ち着いていられたが、身体にまで這い寄せられれば冷静さなど保っていられず取り乱してしまう。

ザワザワとした感触が服の上から次第に素肌へと移っていく。

妖気で弾き飛ばしたり、身体を丸め逃げようと空を動こうとするが、橙の小さな体躯では巨大な集合体の拘束を解く事は出来ず、何度か姿を見せては再度飲まれる攻防が続く。

飲まれる度に感じる刺すような痛みの範囲も広がり、もう耐え切れない。

最後の手段である主の名を呼ぼうと口を薄く開きかけた時。



主の操る炎、尾先で揺らめき灯る狐火のような焰が、橙を捕らえる虫達を断つ。

集られ齧られる中見えたモノ、着ているワンピースも虫食いだらけにされて、あられもない姿になりかけている橙の瞳に、藍の操る焰とは違う、焦熱さを宿すスコップが縦横と奔り、身体に自由を与えてくれた。

「猫が虫に喰われるなど、立場が逆転しておりますね」

スキマより現れた瞬間から臨戦態勢のアイギス。

一振り、二振りとスコップを振るい、纏わせた焰を夜空に軌跡として残らせる。

そうして描かれた軌跡が虫を払い焼いていく。

地上で蠢く黒団子にも現した焰の刃をぶん投げて、虫達を囲う檻のように自身の獲物を突き立てる。熱気に焼かれ逃げ場を失った虫達、唯一の逃げ場である空へと向かい伸びようと、形を蚯蚓みみずに似た姿に変えるが……

「チクチク痛いし……ああ、もう！ 怒ったんだから！」

何かに統率されていたような動きから、虫らしい、本能で動き、逃げるだけとなった者達に余裕と勢いを取り戻した橙が叫ぶ。

犬歯を見せて吠えると、背を屈め、身体をバネのように縮めてから一気に迫る。

高速回転しながら妖気を纏い、全身でぶつかっていく猫弾丸。

対象との衝突から肌が擦り切れるのも気が付かない勢いで回り、天へと伸びる黒い列の先端から地面まで、回転速度を緩めずに突っ込んで派手に仕返しを決めた。乱れた姿で豪快に突っ込んで数秒後、静かになった爆心地でしたりと月を拝み、鬨の声を上げる橙。

「何やら吹っ切れましたか？ いや、興奮気味という話ですし、はしゃいでいるだけ、か」

ニヤアというらしい咆哮を聞き、下方を眺めるアイギスの独り言。

土埃と轟音を巻き上げて成した小さなクレーターの中心ではしゃぐ橙を論じる。似たような体躯の誰か達、尾と皮膜の翼と、身体から生やすモノこそ違うがはしゃぎっぷりが似ている者達を脳裏に浮か

べ、何処の幼子も興奮しやすく、落ち着きがないと考えているようだが、こうやってはしゃげるのも若さの特権かと、軽く頷いてから鎮め始めた。

「一時の勝利に酔うのも結構ですが、そうはしゃがれては……誘われているようでなんとも」

「にや、あ？……あ!!」

語りかけながら、燃え立つ盆地の中央で悦に入っていた橙の真横に降り立つと、高く掲げる右手を取って慎ましい胸を晒している身体を抱く。

藍からお代を頂戴した時と同じように、藍よりも華奢で小さな身体を抱きとめる。興奮からか、怯えのような期待のような色々な思いが重なる瞳に見られながら、擦り傷が目立つ腕に口を添える。そうして軽く吸いながら、腕から肩、鎖骨から首、頬から口元へと悪魔の口吻が動いていく。

知らない感覚を身に覚え、思わず尾や耳の毛を逆立てる猫の小娘。

「ん……待っ……て……」

小さな吐息と声にならない声を漏らす彼女。

覚えていた興奮とは違った興奮を感じると、墮とす悪魔の唇が離れ、赤色が身体に残る。

「何を待てば宜しいので？ 毒気を抜くのなら早いほうが宜しいと存じますが？」

プルプルと尾を揺らす相手に少しだけ血が滲む舌を出して見せ、吸い出したのはこれだと伝える仕草。唾液と混ざり薄まっているがそれは橙の血液で、言い草からすれば毒が回り切る前の処理となるのだろう、アイギスの表情に僅かながら見える淫猥さを無視すれば言葉通りの処理と思える。

吸われながらも血色良い橙が、その舌を見つめ素直に聞く。

「どく、けっ」

「左様です、ただの虫とはいえ数がいればそれなりとなりましたよう？」

「必要ないなら致しませぬが」

呆けた顔で問い返す猫、それに淡々と返す羊。

からかい半分処理半分だと年若い少女は気が付かず、オウム返しをするしか出来なかった。事実アイギスの表情はただの悪戯で、戦闘で興奮した頭を覚まし、ついでに体調を心配するような、藍に伝えた通り子守役としての仕事をこなした体ていでいるらしい。

アイギスがクスリと笑う。

静かだが可笑しなモノを笑うような声が漏れると、遊ばれた事に気がつき始めた橙がぶすくれて突き放すが、そのせいで露わになる慎ましい体。その肌を隠すように、上着を脱いで橙にかけ、悪戯をしかけた悪魔が問いかけた。

「さて、そう呆けている暇もございません。今後はどの様に動かれるのでしょうか？」

「うぐ……あ、取りこぼしがいるの！ 多分2つ！」

「取りこぼし、それぞれどちらへ向かったかおわかりで？」

「あつちと……んく、多分あつち！」

問いかけに姿で教える化け猫少女。

余る袖の中に隠れた手をそれぞれに、今いる位置から東と南東に向けて上げる。二人がいる辺りから考えれば左手の先は人里、そうしてそこから南となれば……

「まずはどっちに行ったらいいかな？」

「私に問われましたも、藍様より命を仰せつかっていらっしやるのは橙様では？」

橙一人で判断するには悩ましいから聞いている、だというのに答えないアイギス。

随分と気軽に話す若い化け猫と、それに対しても特に気にしていない年を召した悪魔、年齢以外でも結構な違いのある二人だがこれが通常会話である。

白玉楼やマヨイガで何度か顔を合わせている二人で、互いに金毛九尾を藍様と敬って話す二人だ。橙から見ればアイギスは自分と同じような立場にいるのだと思っっているらしく、先程からのフランクな口調はそこからくるものであった。紫に膝を叩かれても拒否せず橙を乗せたり、藍に向かって頭を垂れる姿を見ればそう捉えても妥

当だろう。

「わかんないから聞いてるの！ アイギスはどっちだと思う？」

頭の上から蒸気でも出しそうな、先ほどとは別の意味で興奮して問う。藍に直接見られていたら窘められても仕方ない態度とのぼせ具合だが、問われた相手は微笑みだけだった。

態度はともかく、式として主の命を忠実にこなそうとする姿は好ましく映り、あどけなさを強く残しながら背伸びする気概も同じく好ましく感じているらしい。逸る橙に煽られたアイギスが、笑みを少しだけ抑え返答する。

「お好きな方へ、と返答したいところですが偵察が目的でしたね。であれば東、人里方面に向かわれるのが得策かと」

「なんで？」

「もう一方は視る前に終わってしまいそうな場所ですので、あちらには虫嫌いがおりますれば」

アイギスの話す相手、それが誰かと問いかける前に橙の眼に光が奔る。

とつぷりと暮れた幻想の空を焼き、自身の愛する花以外の全てを灼きそうな勢いが見られる魔光。空に浮かぶ怪しい月にも負けない明るさを宿す魔砲が南東から発せられていた。

「アレを偵察すると仰るのであれば止めませんが、お薦めは致しませんよ」

「……うん、里に行く。アイギスはどうするの？」

「行く宛もございませぬし、宜しければこのままご同行しても？」

一緒に行動する事を願いアイギスの右手が差し出される、けれど、その手が近づいた分だけ橙は後ろに下がってしまう。先程はこの手に助けられたが、その後首やら頬やらに赤い跡を付けられる原因となった手だ、避けようとしても無理は無い。

「いいけど……もうしない？」

「当面は致しませんよ、疑うのであればお約束しましょうか」

話し合うには遠い間合い、距離と言い換えてもいいくらいに離れた二人が語り合う。

先に問いかけた橙がアイギスの手を眺め、さっきのような悪戯はもうしないかと問いかければ、当面はしないと口にして、差し出している右手の小指以外を握りこむ。この国の子供なら知っている約束での取り決め、それを先にしてみせるとそれならいいよと元気に寄ってきた。

立っている小指に爪だけが立派な小指を絡め、指切りしてから動き出す二人。

ブカブカな上着で身を包み、耳のピアスをチャリチャリと鳴らして飛び翔ける橙。少し進んで早く行こうと振り返る。異変の最中だというに何処か楽しげな姿、満足気な表情。それは一つの勝利に気を良くしているからでも、月に当てられたからでもない。

主の名を呼ばずに解決出来た。

一人ではなかったけれど同じような立場の者と協力しこの場を収められた。

その事が嬉しくて堪らない。そう体现するように耳を跳ねさせ、ピアスを鳴らす式の式だった。

く少女移動中く

猫対虫の生存競争に決着が着いた頃、別の場所でも小競り合いが始まっていた。

夜空に上って動かないお月様の灯りの下、自身の外羽根代わりを翻らせて飛ぶ少女、アチラコチラに切り傷や火傷の跡を残す身体で奔る身内を追いかける。

「待ってってー！ ちょっと、止まってよー！」

静かに降る月明かりに浮かぶ黒い群体、先の争いから逃げ、戦う相手を猫から人へと変えた蟲達に向かい叫ぶのは虫の妖怪少女。

その隣には人間を好む誰かもいるようだ。満月の夜というに、未だ人間の姿のままにいる人里の守護者が、変身後の髪色に似た弾幕を放ち、硬い表情で周囲を見つめ牽制している。

「止められないのか!? リグル?!」

虫達の羽音に混ざり聞こえるのは夜に通る声。

静かな月夜に似合う澄んだ声色でもう一人に問いかける上白沢慧

音。

争う相手や隣に連れている、というよりも捕まえている妖怪少女の事よりも何もなさそうに思える辺り、場所で言えば人里の出入口があったはずの空間を凝視し問いかけた。

「止めようとはしてるの！ 落ち着いてつてば！ 言うこと聞いて！」

名を呼ばれた少女も言い返す、夜間に浮かぶエメラルドのような瞳を揺らし、生やす触覚を蠢く虫の塊に向け、強めに睨む少女であったが今までの流れから察する通り、大きな群体は全く言う事を聞かない。

「貴様、それでも虫の妖怪か！」

再度の叱責。

あちこちが焼け焦げ、ついさつき魔光を浴びましたと姿で見せる少女に向かい、強い口調で言葉を飛ばす慧音。連れ合いのマントから手を離し、あれをどうにかしろと言うが……言われた少女もどうにも出てこないようだ。

「そんな事言われたって！ 私も本調子じゃないの！」

普段の夜であれば彼女、リグル・ナイトバグの命令を聞いてくれる身内だというのに、何かに操られているような動きで暴れ、この場所にいるだろう者達の事を探しまわる虫達。

いくら呼びかけても応えてくれない身内、このまま暴れ続けいずれ隠された里にでも到達すれば退治されてしまう。何故こうなったのか、考えるように顔を上げたリグル、視界に映り込むのは当然お月様。そうだ、私もアレのせいで気が大きくなった。そのせいで魔法使いのコンビにしてやられたのだったと、夜風に揺れる端々が千切れたマントを眺め、顔つきを凜々しいものとしていった。

焦点の定まった瞳でこれもアレのせいかと、睨む先を愛する同胞達から浮かぶお月様へと変えた少女。そうして少し見上げた頃、何か決心をしたように、頷く形で下方を眺め、空を蹴りこみ、動く。

「いい加減にいい頭を冷やせえええ！」

話を聞かない仲間へ吠えて、一気呵成に急降下。その勢いを殺さず

に右足から突っ込む。

摩擦熱ではない光。

淡い蛍火に似た光を足先に灯らせて、空に咲いて同胞を散らす。

ガリガリと地表を滑っては地面を捲り虫の団体をアチラコチラに弾き飛ばす。

橙と変わらないくらいのに、人の子供と同じような体躯をした蛍の少女が沸き立つ土埃の中一人黄緑色の髪や瞳を光らせる。蜉蝣のように灯り揺れる光、まるで地面はここだと知らせるような淡い明かりが埃の内より漏れ見られると、それを目印に飛行してくる二人の妖怪。

身内にキツイお灸を据えて腕組みしているリグルが見上げる相手、それは先ほど別の場所で争っていた者達。穿孔の黒羊と凶兆の黒猫が、落ち着いた騒ぎの現場に姿を見せた。

## 第五十八話　もう歌は聞かない

荒立つ地から見上げる蛍。

彼女を見下ろす猫と羊。

そうして三者を見比べる半人半獣。

立ち位置や雰囲気からは三竦みと呼べそうだが、全員からそういった空気は感じられなかった。ココを襲おうとしていた虫達が消え守護者は当然安堵し、着いたばかりの八雲側の者達はそもそも展開がわかっていない為荒れようもない。唯一荒れていたのは、自身の巻き起こした土埃の中佇んでいた蛍の少女、リグル・ナイトバグくらい。

魔法使いコンビに退治された上で地面ごと蹴り抜く力業を見せたからか、その結果止められなかった同胞達を散らしこの場から逃す事が出来たからなのか、何か安堵するような、力尽きるような表情を見せてすぐ彼女の意識は途切れていく。

灯していた黄緑の光をだんだんと薄れさせると、彼女の側にいち早く掛けたのは橙。

瞳から完全に意思が切れ、宿っていた緑色が消える前、膝から落ちて地に伏せかかる前に素早く動いてリグルの身体を支える。同じくらしい体躯だがそこは妖怪少女だ、問題なく抱え上げ、同行してきた羊を見上げた。

「どうしようっ。」

ここに至る途中で一度断られたというに再度問う橙。

先程は問われても答えられないと返したアイギスだったが、橙の腕の中で眠る少女とそれを抱く少女の額に汗や、何か調子の悪さを見つけると、近くに降り立ちながら少しだけ進言する。

「二度戻られては？　現状の報告も必要でしょうし、その方を抱えたまま動くわけにもまいりますまい」

噛まれた毒でも回ってきたのか、見上げていた橙の顔に少しの陰りが見え始めるが、でも、と、アイギスからの助言は聞き入れないまま言葉を濁す。

そうして顔色も濁り始めると見上げる橙の顔が左右に動いた。



「リグルは私が預かろう。八雲の者も、どうするにしろ手当ぐらいはしよう。見た目から一戦交じえてきたのだろう？ アイギス殿もそれで如何か」

アイギスに続いて降りてきた半人半獣、上白沢慧音から提案がされる。

けれど問われたアイギスは答えなかった、今の彼女は橙の付き人代わりに動いているのだ、これからどうするかといった決定権も橙にあると考え、それらしい返答はしない。

ただ口にはしない代わりに仕草は見せた。

橙の抱えていたリグルを預かってから橙のおでこを軽く小突く。

それだけでフラつき尻もちをついてしまった。

「なにすんの!？」

「逆に問います、その状態で何が出来ましょう?」

「ちよつとふらついただけでしょ!」

体力は兎も角やる気だけは十分な黒猫、言い返しながら立ち上がり尻を払って文句を言うが、言ったところで黒羊の態度は変わらない。それどころか、再度猫の額に手を伸ばし、突いていこうとさえしている、その手を避けて半歩下がる橙だったが、今度は別の相手に肩を掴まれる。

「押された程度でふらついて、少し休むくらいしてもお前の主は叱つたりはしないぞ、きつと」

「上白沢様の仰る通りでしょうね。寧ろこのまま動かれて、何か大きな失敗でもすれば藍様から檄びきが飛ぶ事になるのでは?」

肩を抑えふらつく身体を支える慧音が藍をダシに一度休めと話す。

その話に乗っかってアイギスも藍の名前を出していく。

連れ合いの黒羊だけの言い草ならばそんな事はないと言いつ返せた橙だったが、背を預ける慧音からも同じようなことを言われた為、少し悩んでしまい思わず張っていたモノが緩む。

かくり、膝から力が抜けると支えていた慧音の腕に幼子の重さが掛かる。

「おい、大丈夫か?」

「あれ？　なんか大丈夫じゃない……かも」

一度緩むと早いもので、膝も笑い身体力が抜けていく橙。

頭だけは最後までではつきりとしていたが、慧音からの問いかけに答えた後は瞳を瞑り動かなくなる。狭い額に薄っすらと浮かぶ汗や子供の体温よりも暖かな身体、荒い息。それらを感じ取った慧音が橙の身体を揺する。そうしている内に頬や首筋、手足に残る朱色の虫刺され跡を見つけた。

「結構な箇所……毒か？」

「やはりあの場で抜いておいた方が良かったのかもしれないね」

息を荒らげる橙を見ながらも慌てない二人、毒気が回り虫の息になったとしても橙も妖怪だ、肉体的にくら弱ろうともただの虫の毒で死に至る事はない、そう理解しているからこそ焦りはなかった。それに、今この場には治療に使えそうな薬などもない、あったとしても里に伝わる民間療法くらいのもので、その療法も人間に対してのものだけだ。

今は本人の体力が戻るまでは手出しのしようもないと考える二人だったが、地底住まいの悪魔が一つ手を思いつく。

「橙様を連れて一度戻ります。藍様、お迎えを」

自身が抱いていたリグルと慧音にもたれかかる橙を交換し、どこともない場所に向かって迎えを願うアイギスだったが、今見ているはずの相手から返事はなく、迎えのスキマも開かない。

十数秒待っても空間が割れることはなく、これはあちらでも何かあったのかと頭を捻るが、そうこうする間に少しずつ陰っていく橙の顔色。

「迎えが来ないのですか？　それに式の方の名前など、八雲紫は動いていないのでしょうか？」

「いえ、珍しく動いているからこそ藍様が代わりをなさっていたのですが……不測の事態でもあったのでしょうかね。致し方ありません、正攻法で戻るとします」

「戻るといつてもどちらへ？　大事はないと思いますがあまり動かすのも……」

「地底に帰るだけです。こういった事に長けた友人がおりますので、少し頼ろうかと」

月の魔力に当てられている部分もあるようだが、大元は虫の毒が原因で転じた病、であれば病を操れる友人ならこれを取り除くのも強めるのも思いのままだろう。そのような思い付きで動こうと仕掛けた黒羊だったが、踵の高い蹄が地を駆ける前に呼び止められた。

「あー？……山の穴を抜けて戻るつもりで？　なら今は通れそうにありませんよ」

「通れない？　埋まりでもしましたか？」

「伝聞ですが、妖怪の山もこの月に当てられた者が多いようで。これ以上荒れる事がないよう、天狗の指揮の元に厳戒態勢を取っているはずです……」

だから通れない。

沈まない月の下、大きな存在感を見せる山を眺め語る慧音だが、言い切る前に声を被せられる。

「それと通れない事と何か繋がりが？」

「いや、行けば天狗と事を構える事になると……」

「ですから、それが何か？」

通してくれない理由は聞いたが、通れないわけではない。進むのに邪魔、子守という自分から言い出した手伝いの邪魔になるというのなら蹴散らすなり、好きに穿ち掘り抜いて、全てをなかった事にすれば良い。アイギスの考えはそのようなものであったが、雰囲気からそれを察している慧音もおめおめと行かせるわけにはいかないと、気にせず歩もうとする羊の腕に手を掛ける。

ここで進ませれば異変の騒動が拡大する、天狗はわざわざ今は来るなど忠告してくれた、厳戒態勢が敷かれる中抜け出して知らせてくれるくらいに今の山はピリピリとした空気が流れているはずだ。知らせた記者からすれば人間が山に踏み入り妖怪に喰われたり、天狗に処断される事になれば購読者が減る恐れがある、なんてそれらしい打算からのお知らせだったようだが……相手の立場は兎も角、イタズラの騒ぎが大きくなれば自身の能力でなかった事になっている里に被害が

及ぶ可能性が増える、そうなるって一人では守りきれなくなるかもしれない。

天狗の打算から得られた情報を元に、自身も打算的な動きを見せる里の守護者。言い方は悪いが人間の里の安全を考えれば当然の考えで、人道に則る行いだと思えるが、そんな人の道理はこの相手には通らなかった。

「そろそろ離していただけませんか？ 急ぎますので」

抱える者が人間で、こうなったのが自身の仕事からであれば苦しみから生まれるモノを糧とするアイギスであるが、今の橙の意識は恐怖こそあれどアイギスには向かっていない。いいところで失敗してしまい、主に窘められるかもしれないという恐怖と、身体を蝕むモノに対する憤りしか発せられていない。

そんな感情を顔色に浮かばせる左手側、抱える橙を見てから、掴まっている右腕のほう、肘に掛かる慧音の手へと視線を流して少し引く仕草をするが、それでも離されない手。致し方なしと捉える手に向かい左の指を合わせて見せる、後は打ち鳴らせば剥がせる状態となつたけれど、指は鳴らずに腕は解かれた。それから駆け去る黒羊、向かう先は当然妖怪の山、だが見られる景色は普段よりも暗い。それでも動きは変わらずに、背中に視線を受けて暗い夜道に姿を沈めていくと、背を眺めていた瞳が空に流された。

忌々しい月を少し見上げ、これが本物なら私でもそれなりの戦力となれて里を守る、隠すだけではなく万一に備えられるのに。そう憤る守護者の視界の縁に黒い監視の目が映る。

黒い翼で風を置き去りにして、愛用のカメラと手帳を片手に、消えた黒羊を追う者の影だけを捉えた。その陰影に思うのはこれ以上の広がりがないようにという思いと、荒らげるのであれば里から離れた地で願うといった人としての切なる願いであった。

く少女移動中く

僅かな距離を移動したアイギス、身に浴びる視線とよくわからない違和感を覚え、進んだ夜道でふと立ち止まる。なんとなく呼びかけられているような、何者かに見られているような、暗い雑木林の中では

確実にこうだとは言いきれないようだが、何かを感じて後ろを振り向くが見られるのは変わらない景色……のはずだった。

「なんででしょうか、この感覚は？……今し方通ってきた道が……」  
見えない。

赤黒い瞳に映るはずだったのはつい先程駆け抜けてきた獣道、人里から妖怪の山に抜ける為、踏み鳴らされた道を逸れ真っ直ぐに、雑木林を抜けてきていた辺り。

本来の道程ではない為周囲も整っておらず、茂る林も背の高い藪もあるのだから暗い。そう考えればそれだけだが、彼女自体も夜に生きる者で、今日のような月夜は人間で言うカンカン照りの日中と変わらないくらい、だというのに酷く暗く感じている。

「向かう先を間違えた？ いえ、真っ直ぐに進んできたはずですが……月も……見えませんね」

立ち止まり空を拝む、里から見れば北東に見られる予定の目的地、妖怪の山。そちらに向かって真っ直ぐに進めば東の空に浮かぶ月が見られるはずで、今向いている方角からすれば月が右手側に見えなければおかしい。

ココでようやく何かにハマっていると気が付く。

ただ突っ立っていた姿勢から、荒事の場合に赴く体制へ姿を変える黒羊、小脇に抱えていた橙の身体をしっかりと抱きとめる……汗ばむネコ娘の顔がアイギスの頬に近寄ると、とたんにその顔が見えなくなつた。

「これはどういった事でしょうね、遠間どころか近くまで？……一つ試みましょうかね」

再度抱き上げ橙の身体を揺する、少女の重さと温もりは左手や左肩に感じられるがそれでも見えない。毒気でも移ってしまったのか、それを確認するように少しだけ顔をしかめて、自身の右目をえぐり取る悪魔。取り出した瞳を握りつぶし、血と瘴気に戻してから再度瞳にソレを纏わせ一瞬で姿を戻した。

病であればこれで戻り、幻であれば少し痛めた事で晴れるはず。そんな読みからの自虐行為の結果、若干の視界が開けたようだが、見え

るものは空で輝くお月様の輪郭だけであつた。

「月明かりはぼやけて見える、ならば周囲の明るさは変わらない、か？  
……ここだけを暗く感じているのでしょうか？」

それでもしつくりくる答えではない、けれど他に思い当たる事もない、ならばこれ以上考えても仕方がないと月の見える方角へ再度足を踏み出した。真つ暗な視界の中数歩進んで、林に貯まる枯れ葉を踏む。サクサク、ヒールに数枚の葉を刺して歩めば遠く聞こえるチツチという音。

聞きなれない音。テンポの良い音で、どこか鳴き声のようにも聞こえるが、だとしても聞き覚えのない声。思い当たらない事ばかりだ、そう思案してまた足を止めたアイギスが死にかけの視界を捨てて瞳を瞑り、聞き耳を立てる。

そうして聞けたのは女の歌声。

何事もない日であれば聞き入ってもよい。いや、聞き入り楽しむだろう。

そんな誘惑的な歌声を耳に感じると、歌声から話し声に相手の音が変わっていった。

「こんな夜中に何処に行こうっての？……女が子連れで夜歩きなん、つてまた妖怪の二人組か、白けるわ」

姿を見せず声だけを届ける夜の住人。

声からわかるのは耳を立てて聞けば聞くほどに惹かれる美しい声だという事くらい、静かで良い月夜に響く魅惑的な問いかけだった。

何処かの暗がりから話しかけてきている誰か、今姿を見せても視力に死にかけているアイギス相手なら同義だと思えるが、それでも声だけで存在を示す相手。

「夜遊び帰り、帰路の途中というだけですよ。どちら様で、何用でしょうか？」

問いかけに答えるアイギスだったが向こうからの返事はない、自分から聞いてきておいてこちらは無視かと、僅かに苛立ちつつも歩を進ませた。聞き慣れぬ声から顔見知りではない、それなら今は構ってられない、聞こえるネコ娘の息遣いから先を急ごうとするが、言葉の

代わりに聞こえた、靱やかな物が羽ばたくような音に歩みを遮られた。

「もう帰るの？　こんなに楽しい月夜なのに？　絶好の狩り日和よ？」

遠くで聞こえた羽根の音が柔らかい音を鳴らして近づいてくる。小刻みに動かされる音符のような形の肩羽、紫色のその羽からは朱に染まる白い小翼羽しょうよくうが見られ、アチラコチラに切り傷や場所によっては血を流した跡があった。

雰囲気から鳥の妖怪に思える、生憎今のアイギスにはその姿は見えないが、嗅げる好ましい匂いから手負いだとは理解出来たようだ。

「そうですね、確かに良い夜です」

「ね、良い夜よね。こんな夜は人狩りサービスタimeと洒落込むのが一番よ。そうだ、里に行つて一緒に人間で遊ばない？」

同意を得ると誘い文句が話される。

口に合わせて伸ばされる手、五指の先は磨かれたような鋭さがわかる爪が光り、その両手の爪の先端を綺麗に合わせて手を揃える少女。楽しそうに微笑んで頭を斜めに傾けて、一緒にどうかと誘っているが……

「折角のお誘いですがお断り致します、そういつた事は一人でしたほうが注目を浴びられて心地良いと考えますれば」

「残念、一緒に遊んであなたの瞳みたいな色に染まるのも楽しいと思つたのに」

真つ向から断られたがそれでも楽しげな顔のまま、声色も誘うようなモノを崩さない少女。

光の宿らなくなった濁色の瞳を例えに語り、クスクスと笑うが、次に聞こえた返答を受け、笑みと声を恨めしげなモノに変えていく。

「その手の事なら私は一人遊びが好みなのですよ。それに、狩り日和と仰いましたが……貴女様からは狩られた後のような匂いを感じられますよ」

「見えてないはずなのに、鼻が良いのね。そうよ、楽しく一狩り！　そう思ったのに……あの人間と蝙蝠め！　次あつたら絶対リベンジす

るんだから！」

明るいテンポから転調して激しいリズムで語り出す少女。

傷つけられた翼や裂かれている衣類を撫でて、憎らしそうな顔で次回は焼き蝙蝠にしてやるなどと喚く。それに対して嗤うアイギス、彼女を退治したのは愛する吸血鬼とその従者だとわかり、殺さずに異変を解決するルールは守っているのだなと微笑む。

「なるほど、お嬢様方にしてやられたと。退治されたのなら貴女様も単に戻られては？ 少女が夜遊びなどをして、取って食われても知りませんよ？」

ふふふと控えめながら朗らかな笑い声が漏れる、吸血鬼だというのに月に惑わされない誰かを想い、思わず笑う。両者の態度が逆転すると立場も返り、先に言った煽りを返された上で笑われ気に入らないのか、鋭い爪が映える白い手を震わせ、声を荒らげた夜の雀。

「あなた、知り合いなのね。ならいいわ、あなたで鬱憤を晴らす事にする！ 私が本当の闇夜の恐怖を教えてあげる！」

象徴のような翼にも体にも切り傷が目立つ夜の少女、妖怪夜雀が勢いを付けて翔ぶ。

人間など安々と五枚に下ろしてしまいそうな爪を光らせ、アイギスと抱える橙に向けて斬りかかった。突然に売られた喧嘩、それ自体に文句はない黒羊、彼女自身もこういつた事をする場合があるため言う事などはない。が、時間が惜しい今、視界が奪われ攻め手がわからない相手との戦闘などする気はない、そうわかるような言い草をした。

「憂さ晴らし大変結構、わかりやすくして潔い。そういつた事ならば私も手段を選ばずに済む」

仕掛ける夜雀妖怪、ミステリア・ローレイライに向かって賞賛し、こんな相手なら手段は問わないと言い切ったアイギスだったが、その顔はあさつての方向を向いていて迫るミステリアを捉えてはいない。

「見えないのに、強がらないでー」

黒羊の宣言をただの強がりと聞いた敵がズタボロのジャンパーとカートを靡かせて、千切れた袖から腕を伸ばす。右腕を大きく掲げ縦



一閃と爪を振るう算段だったが、その爪が狙う先、アイギスの左肩から脇までを裂く前に彼女の指が打ち鳴らされる。

爪が届くギリギリで右腕からも、幼子を抱く左手からも響く乾いた音。

パチンと響くと穿たれるナニカや何処か。

最早相手も回りも見えていないアイギスが、相手の攻撃も、発する音や空気の流れも無視して、当たり構わずに指を鳴らす。リズムカルに打ち鳴らされる両手の指、音が響き渡る度に周囲の林が真円に掘られていき、浮かぶ雲や足元の地面も、眼前に迫っていたミスティアも、何もかもを穿ち、削り落としていく。

「な!?! ちょよ、ちょよと待つて〜!?!」

自身の足先や髪が穿たれる事も気にせず、周囲にあるだろうモノを片っ端から掘り返し、なかつた事にしていく悪魔の羊。親指と中指を合わせ弾く、ただ無言で繰り返される無作為の穿孔処理の最中、大きなシャウトが耳に届いたが……ファルセット全開のその悲鳴はもうアイギスには聞こえない。

ランダムに廻りを均していく、叫んだ相手が穿たれたのか、未だ生きているのか、そんな事も思考せず唯無心で穿ち尽くす……しばらくしてから静かになる辺り、襲ってきた相手の声も、小さく聞こえていた秋の虫達の輪唱も。何も聞こえなくなった空間。

その中央で佇む穿孔者。

「偶には好き放題にするのも良いものですね、均した結果が見えないのが残念ではありますが」

鬱蒼とした雑木林から、ちょよとした広場になってしまった場所で口にされた独り言。

満足気な声で語り、再度聞き耳を立てると、奥のほうでパサツとナニカの落ちる音がした、まだ生きていたのか、しぶとい。笑いながら音の方向を見るが、いるだろう相手からの声などは聞けず、音の原因だけが落ちていた。ソレに近寄り摘み上げる。

「布? 服? 帽子でしょうか? それなりに騒ぎましたが帽子が無事にある、なら本体も何処かに……まあ、いいでしょう。先を急ぐ事

とします」

雑に掴み上げたそれを指先で回す、クルクルと回して時折ふわりと浮かせていた。その最中に鼻に感じた匂い、愛しい誰かの血の匂い。返り血なのか、触れた際に付いた血なのかわからないけれど、間違いなく覚えている吸血鬼の匂い。

それを嗅ぎ分け少し考える。

急ぎではあるが視界が開けない状態の今。

呼びかけてもスキマが開かない現状。

それらを里での話と結びつける。

行けば確実に天狗と事を構える。

私一人であれば如何様にもなる、してみせるが片手に抱いたお荷物が少し邪魔で、彼女の安否まで気を回す余裕はあるだろうかと少し悩む。白狼程度ならなんとかなるが烏天狗、里での話に出てきたあの記者辺りと出くわせば無事では済まないだろう……。であればと、見えなままに歩む先を変えたアイギス。向かう先は荒事の匂いがする方向、愛おしい者が血を流し、争っているだろう方向へと行く先を変えた。

いるのはきつと異変の最中、そちらに行けばあの友人も、場合によつては式もいるのだろう、ならば無理を推して進むよりはまだ安全策か。と、珍しく安牌を選び、地を蹴る。

その匂いを風に乗せ届けた誰か、気を失った夜雀を抱え、纏う風に自身の匂いとシャッター音を散らさせた天狗がいた事などには気が付かず、渦中へと進んでいった。

## 第五十九話 奇想曲に惹かれ

夜に生きる雀と夜に溶け込む羊が出会い、少々の小競り合いをしていた頃、別の場所も明るく、騒がしくなり始めた。地名で言えば迷いの竹林。幻想郷のほぼ中央に位置する魔法の森から少し南下した辺り。ここが今一番賑やかで、今晚一際美しい場所になっていた。

いつもの夜であれば外部の者が寄り付くような場所ではないこの竹林。

通常見られるのは地を駆けまわる兎や、それを束ねる兎の妖怪、後はこの地に住み着いているらしい白髪頭の少女くらいで、聞こえる音も竹の葉が鳴らす時雨音ぐらいしかないはずだが、今夜の竹林は迷いなく煩いと言いつつ切れた。

「姦しい原因も夜空がきらびやかになる原因も両方が少女。」

紅白黒白の人間二人が、共に動く紫色のスキマや七色の人形遣いと肩を並べて争っている。

その内の前者、巫女とスキマ妖怪が弾幕を放ち追いかける相手、それもまたトゥトンカラーの少女とその主人のようだ。丈の短い青白の給仕服と闇夜に目立つドレスを靡かせ、4人共に言葉と弾幕を放つていく。

「いい加減諦めたら？ あんたらが動きたびに、時刻が止まっちゃって困るのよ」

「月を止めている妖怪を連れて言う事ではありませんわね」

札も針もバラ撒いて敵に向かって迫る楽園の素敵な巫女、博麗霊夢。

その札を裂き払い、向かってくる針に対してはカチリと愛用の銀時計を鳴らし、一瞬で姿を消して避けていく紅魔館のメイド、十六夜咲夜。

互いの弾幕が届かないとわかると、霊夢はお祓い棒を握り締め、咲夜は札を払ったナイフを握り直し、近接線へと移行していく。キンキント、木の棒らしくない音を立てて咲夜のナイフを裁く霊夢、そのまま地面に降り立って、付かず離れずに受け攻めを繰り返す。気まぐれ

な争いの音をかき鳴らし、竹林の奥へ移動しながら剣戟を響かせ姿を消していった。

「あらあら、瀟洒なメイドさんだというのに理解されていませんのね、私は夜を動かなくしているだけですわ。それに、吸血鬼ならお月様が沈まないほうが嬉しいのではなくて？」

争う二人の近くで睨み合う二体も同様に小競り合いを始めていた。

直線で夜空を奔り、輪郭をぼやけさせる速度で動く吸血鬼の攻撃、夜を裂く勢いがある爪も溢れる魔力から撃たれる弾幕も、全てをスキマでいなしていく境目に潜む妖怪、八雲紫が先に口を開く。対する者が月の魔力に最も影響されると理解して、それが続けばどうなるのかもわかりながら争う相手に軽やかな口をきいている。

「普通の月夜であれば悪くないが、混じるモノのお陰で落ち着かなくなってしまうた可哀想な妹がいてな。月にはそろそろ沈んでもらってこの夜にも終わってもらわんと……痲癩が酷いんだよ」

言われた売り言葉に乗らず、一つの勢力を纏める当主らしい冷静さを見せながら言い返したのは紅い悪魔、レミリア・スカーレット。

物の理を無視するような鋭角な飛行から、激しい連撃や血の色に似た無数の弾幕を放つも全ていなされている……けれど頭は冷えたまま、手の平の上で踊らされている事がわかりながらもどうにか打破すべく、片手に現した天球儀を回しながら攻める。

「痲癩が酷いならあやして差し上げては？ 異変には私達が当たります、引き上げて可愛い妹さんを構ってあげたら宜しいのですわ」

「いつかのように貴様があやしてくれても構わないのだがな、まかり間違えば壊されそうで怖いかな？」

——今は子守をしてくれる相手もいないのだから——

——あいつとは違って貴様は壊れたら終わりだろう？——

語り合う二人の思考は別だが、ちらりと脳裏に浮かぶ相手は同じ。

悪魔の妹が身に宿す『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』を身に受けても終わりを迎えない悪魔、終われない羊の事を思考の端に浮かばせつつのガールズトーク。

それぞれが軽口を叩き合うと次には別のものが叩かれ、打ち鳴らさ

れる。

次の攻め手は紫からの手で始まる、開いていた扇を閉じて手の平をパチンと叩く。

それを合図に周囲に大量のスキマが開かれ、内で蠢く瞳から無数のレーザーが照射された。

高々と伸びる竹を横に、縦に、斜めに割いて、地面も割り進んでレミアを包囲していく……が、妖気の光線がレミアの身体を断ち切ると、分かたれた幼子の下半身が大量のコウモリに変化し、別の場所へ元の姿へと戻った。

紫への攻撃はスキマに阻まれ通らず、レミアへの攻め手も空に上る満月のせいではほとんど無意味という状態。互いに攻撃しても無駄だとわかりながらも異変で出くわした者同士で、互いに解決に当たる二人だ、決着が着くまでは止まりそうもない。

「その程度だったか？ 屋敷の地下を荒らしてくれた貴様の式の方がまだやり手だな」

「小さな体とお口ですのに、あまり言い続ければ満月の吸血鬼といえど減って無くなる事もありましたよ？ そうやって背伸びしたいなら誰かのようなヒールでも用意すべきね」

「フーン・ 貴様達とは違って500歳程度の若輩だ、無理して背伸びでもしないと年増に肩を並べられんのか」

倒せないなら別の部分で折るしかない、紫は当然として対峙するレミアも舌戦に対応していく。力の差は当然にある。種族としては高い位置にいる吸血鬼ではあるが、レミア自身が言う通りまだ500年生きた程度の若輩者で、何年生きているのかわからない大妖怪を相手取るにはまだまだ経験不足といえる彼女。

紫からは背伸びと評されたがまさしくその通りで、実戦らしい実戦を経験していないレミアである。身体に対して大きな翼を精一杯広げ、態度も口も大きく見せるが、笑ったままの紫には効くどころか逆効果で、それもすっぱりと返される。

「上を目指しての背伸びは良い、それでも中身が伴わなくては意味が無い、なんて言われそうね」

「グッ！ わかったような口を聞くなあ！」

煽り負けたレミリア、自身でも理解していた部分を突かれ思わず吠える。

その声を聞き、扇を閉じて笑む紫。

わかりやすい、そしてそれが可愛い。

友人が愛する部分はきつとこういう素直さなのだろうなと扇の奥で思案しながら、再度スキマから激しいレーザーを奔らせる。その流れに逆らい詰め寄る吸血鬼、霧に変じたりコウモリに姿を変えたりと、搦め手も出来るはずだが煽られそこまでは思い至らなかった。

レミリア自身は持ちうる力とセンスでカバー出来ると考えているが、実際は埋めきれないほどの差がある二人。方や紫といえばレミリアが生まれる前から存在し、幾度と無く争い、そうして一つの世界を作り上げるまでになった古強者で、今では賢者と呼ばれる者だ。

一方のレミリアとすれば、外の世界にいた頃、屋敷に狩りに来たヴァンパイア・ハンター達との戯れや門番・盾役との手合わせ、過去の二度の異変くらいしか経験実戦を積んでいない。

強大な力や卓越したセンスがあり、そこからいくら背伸びをしようとも、圧倒的に経験値が足りていない彼女の爪は紫には届かなかった。

それでも全力でぶつかる紅魔の現当主、離れて争う従者の姿を赤い瞳の端に映して、あちらは巫女といい勝負をしているのだから主として踏ん張りどころだと、気概だけでは負けないようにやる気を赤い槍と化して現し、正面を切った。

「それも背伸びかしら？ 爪といい槍といい荒々しいです事。威嚇に頑張る小熊ミンシャのようね」

「小熊でも今時期は怖いものだ、冬眠するなら知っているだろう？」

そうね、という紫の眩き。

それを聞いたのか、聞かれなかったのか、分からないが言い切られると動き始める吸血鬼。真っ赤な槍を頭上で回し、赤い輪の軌跡を描いてから紫に向かって突貫する。話している間に他の攻め手も思いついたレミリアだったが、自身が一番得意とする、一番最初に褒めら

れた手で対峙する大妖に向かい突き進む。

動きを見ている紫の方も、動きまで誰かさんのようだと笑い、笑みを扇で隠して待つ。無軌道で飛び回り、槍の色合いを夜空の線として進むレミリア、一度高度上げて突っ込む。狙いは紫が余裕から広げたままの傘、スキマ妖怪から見れば当然死角となる辺りから肉薄する。集中、研ぎ澄ませて槍を振るうが、ソレは唐突に横から現れた紫の傘で阻まれた。

二本目、弾幕ごっこ用ではなく本腰での戦闘に耐える傘を携える者は紫の式、無言で現れ主を守る忠実な九尾の狐が攻め手を阻む。

「本当に！ この地にある傘は何なんだ！」

「さて、何の話でしょう？ 藍は知っています？」

「私にも覚えがありません」

「ツチ！ 主従でからかうな！」

両手で握り締め振った神の槍、それ容易く受ける八雲藍。

あの花の日傘といい、このスキマの傘といい、自分の槍を軽々と受け止めてしまう幻想郷の傘に向かってなんなんだと、当然の愚痴を吐くレミリア。

言いたくなるのもわからなくもないが、レミリアの争った相手が二人共規格外なだけで、実際は普通の傘もあるし、然程強くもない傘の妖怪もこの地にはいる。

「さあ、いつまでも構っていただけませんか、こちらは終わりにしましょう」

ギリギリと傘に押され始めたレミリアと、奥で争う相棒を見比べてこちらの終いを告げた紫。

呼んでいない藍が姿を自分から見せた、それは何かしらあったという事だと推測し、遊んでいる暇はなくなつたと結論づけたようだが：：藍自身は竹林以外の場所はそれぞれ問題がない、そして抑えに使う予定だった相手は間接的にだが動いてくれている、といった報告をしに来たついでだ。普段の紫であればそこも理解出来そうなものだが、時間が惜しいせいか、少し結論を焦っていた。

「藍」

「御意」

受けていた傘の角度を変え、射ち合っている槍を滑らせるように誘導する藍だったが、槍の切っ先が傘から離れる寸前にレミリアが槍ごと回り、藍を弾く。

藍の手は以前に白玉楼で見せた黒羊の手、あの時対峙していた剣客には通じなかったが、実戦経験の少ないレミリアであれば十分に仕える捌き方だと選んだようだったが……レミリア自身もこれは体感して覚えていた、幾度と無く捌かれた動き、しかも相手はもつと酷い、笑ったままで行ってくる相手。冷めた面で捌けると考える藍よりも、ゴリ押しで捌いてくるアレよりはやりやすいと、当然のように捌き返した。

が、あの時とは違って戦う相手は一人ではないと、すぐに思い知ることになった。

弾かれ離れた藍の影、そこで笑むはスキマの主。声なく、瞳だけで笑い存在を思い出させると、レミリアの身体を縦に裂くようにスキマを開く。

「先ほどで落ちておけば楽が出来ましたのに。今は急ぎなの、御免遊ばせ」

自分に対しても、レミリアに対しても言い放つ。

藍に負け、素直に落ちていれば境界を操られる事無く撃墜されるだけだった、けれど愛する式を捌いた事により紫の対応が変わった。ちよつと遊んで、構って終わる幼子から、自分の式を弾き返せる敵、紫自身が手を汚してもいい敵だと、そう認識してしまった事で、静かに開かれたスキマがレミリアを両断した。

竹の音と誰かの遠吠えを背に落ちていく吸血鬼。過去の異変で上手く立ちまわってくれた礼もある、それ故殺しはしない……が、今はただの邪魔者で、好きに動かれては困るくらいの相手だ、動けない程度にキツ目の折檻を試みさせた。

「藍、報告を……」

対戦相手が沈むと同時、すぐに従者を呼びかける。

遠くで争う巫女達から届く奇想的な剣戟音と、別の場所で打ち鳴ら



される刀の音、それくらいしか聞こえなくなった竹林で紫が静かに口を開く。弾かれた藍に向かいスキマを開いて距離を寄せようと、余裕のある優雅な動きで左手をかぎしてピンクのリボンを2つ浮かばせた——瞬間、その手が赤い槍によって貫かれ、切断される。

「確かに仕留めた、そう思っていたのだけれど……やはり月夜は元気なのね」

切り飛ばされた左腕をスキマで回収し、そのまま繋げて何事もなかったように振る舞う。二度ほど握りこんで切り飛ばした相手、先に地上へ落ちていった上半身だけで残るレミリアに、冷ややかな目線を落として語る妖怪の賢者。

「月下の吸血鬼を舐めないでもらいたいな……」

紫から発せられる冷たい視線だけで並みの妖怪なら動けなくなるというに、動かなくなるどころか饒舌に言い返して血を吐く夜の王。先ほど争っていたのはレーザーで裂かれた半身だけだったらしく、こちらは戻さずに敢えて残っていたようだ、手元で回っていた天球儀もこちらの動きを悟られない運命を掴むための物であった。幼いながらも夜を統べるノスフェラトウ、その力もセンスもやはり偉大であった。

「紫様、ここは私が抑えます、先を急がれては」

「後顧の憂いがないように、ね。手段は任せます」

隣に寄せた藍の進言。尾を揺らして主の頬に触れ合わせ、そこから現状の報告を済ませると、この場は任せて先へ進もうと判断した紫。

それに向かつて手を伸ばすレミリア。残る半身にスキマで絶たれた箇所以外の身体を集め、再度姿を成し、対峙する藍を置き去りにしようとして翼を開いて夜に舞う。けれど、広げられた九尾に妨げられてその視界は埋まってしまった。

「邪魔をするか狐、貴様は主の命だけ聞いていろ、忠実な下僕なのだろう?」

「後顧の憂いを断てと仰せつかったばかりだ。それにだ、時には主に進言するも家臣の努めだろう? そういった臣下はいないようだな、紅魔の主殿」

「……負けた私はなんと言われようと構わんが、身内まで小馬鹿にされては癪だ！ その口、この場で閉ざしてやろう、雌狐！」

槍を回して構える吸血鬼、その切っ先は僅かにブレている。

身体に違和感を感じないが、この震えはなんだろうか？

自問自答する中で、一つ気が付いた物があつたが、そこに辿り着く前に藍の執拗な攻撃が始まる。伸ばされた九尾を鞭のように奔らせ、時には狐火をバラ撒いて、槍で尾を裁くレミリアを焼いては、焰を払う吸血鬼を打ち据える。

再度地に落とされる夜王、この地に来てからは傘持ちに泥を付けられてばかりだと内心で悪態をつき、槍を支えに立ち上がる。

「どうした？ 先ほどのは武者震いではなかったのか？……操られた身体を戻したのは悪手だったな、レミリア嬢」

藍が口にしたのがレミリアの身体の答えのようだ。

歪とはいえど魔を帯びる満月、その力を授かりほぼ無敵の身体となつている今のレミリアだったが、あの時操られたのは単純な身体の繋がりでだけではなく、吸血鬼としての『今』の月との結びつきを断られた部分もあつた。つい先程までは浴びる月光から無尽蔵に得ていた魔力、それに任せて全力全開で力を振るっていたが、今空に浮かんで止まっている月からは何の恩恵も感じられない。そうして使った分の魔力も取り戻せず、焼かれ打たれて消耗していく。

手にしているモノも、先ほど紫に投擲した槍や、今現している獲物の分で最後までいい。月との繋がりを断たれるなど未だかつてなかった事で、それ故調節など出来ようもない吸血鬼、ふらふらと立ち上がるだけで精一杯な姿を見せてしまう。

「もう寝ている。紫様の腕を落とした力は評価してやる。今後もこの期待に応えてみせろ」

「寝められたらしいが……完全に上からで気に入らん！」

「ならばどうする？ 抗うか？ その気概ごと墮としてしまつても構わんのだぞ？」

無音で蠢く四本の尾がレミリアの四肢や首を捕らえる、ギユツと、地が止まるくらいの勢いでそれぞれが縛り上げられると、重さを感じ

ないような動きで持ち上げられた。

そうして残りの尾でレミリアの頬や内腿を薄く撫で這わせた後裂いて、金色の瞳が満月のように輝かせるとソレを指で取り啜えた。先に伝えた言葉と今の姿勢からレミリアが想像するモノ、ソレはいつか小悪魔から聞いた甘美で淫猥な話。思い出すだけで頬を染め自分の身体を抱きしめた小悪魔の顔を思い出し、主として手籠めにされてなるものかと藍に向かって血反吐を吐く。

その血が藍の帽子に掛かる前に、静かな竹林で聞けなかったパチンという音が聞こえた。

忽然と消える四尾。唐突に自由を与えられたレミリアが落ちかけるが、残りの尾で拾い上げ再度拘束する八雲の式。聞き慣れた音がする方向へ輝く瞳を向けると、こことは逆の方向へ向かったはずの者が、枯れた竹の葉を踏み鳴らす音がした。左手には式の式を、右手には先ほど拾った帽子を携えた悪魔。髪も角も穿たれ変に欠けた姿、頬には目から続く血の跡を残したアイギスが陰りの奥から姿を見せる。「好ましい匂いに釣られて来てみれば、どういった状況なのでしょうね。ご説明頂けますか？」

耳を跳ねさせてから鼻を引くつかせた彼女、普段使いの変わりない声色問いかけた。藍がいるらしい方向へ顔を向け、藍とは違って一切の光が見られない瞳を向けて、この場にいる二人に問う。

「……妖怪の山に向かったはずでは？」

「向かっていたはずなのですが、見知らぬ方に襲われてしまいました。さすがにこの状態で天狗と小競り合いは手間がかかりますね」

この状態と、戻していない自身の身体を見せる。

甲から先のない足や、夜雀の爪が僅かに届いていたらしい縦に裂けた襟元などを強調し、最後に全く汚れていない上着、それを着ている橙を少し持ち上げて見せた。景気良く暴れた後にしては綺麗だが、さすがに手伝いの件までは忘れていない。

「それでもどうやってここに？ 入ったら迷ってしまうらしいが？」

「彷徨う事には慣れておりますので、さしたる苦勞もございませんでした。それに目印代わりの匂いもありましたので、それを頼りに向

かつてみたのですよ、慣れ親しんだ匂いなら追うのも容易いだろうと  
考えまして……読み通り、どうにかお会い出来ましたね」

二人からの返事に答え、持っていた帽子を指先で回して放る。

厚く積もる枯れ葉に投げられ乾いた音を鳴らして落ちる羽飾りの  
付いた帽子。

それはレミリアとアイギスには見覚えのない物だったが、藍には覚  
えがあるようだ。

「夜雀か、襲われたのならば……今は見えていないのですね？」

「仰る通りで。夜雀という種族の方でしたか、ウツプンを晴らすと  
襲ってきてくれましたね、中々に素敵な方でした」

「見えない？ どういう事だ、雌狐」

「そういった力があるというだけだ、無駄口を叩くな」

キュと閉まる首の拘束、声にならない声と吐息を漏らすレミリア  
だったが、その尾もすぐに穿ち断たれる。見えていないという割に狙  
い通りの部分を穿つアイギス、鼻と耳は健在で、ある程度の狙いは付  
けられるようだが、この辺だろうといった大凡の場所しか狙えず、そ  
の証拠にレミリアの方翼も尾と同時に穿たれ消えた。

「私は答えましたが、ご説明しては頂けないのでしょうか？」

「異変解決に当たる中遭遇して、今し方……負けたところよ」

「御当主の話す通りです、紫様の邪魔となった為私が……」

「潔く負けを認めたのであれば勝負はついたように思えますが……開  
放しては頂けませんか？」

「それは……出来ません」

「出来ない……そこに繋がる事でも仰せつかったと考えますが、それ  
で宜しいでしょうか？」

アイギスからの問い掛けに頷く藍。

内容は聞かない、場合によっては聞いても答えてはくれないか、答  
えられても飲めない命を受けている場合もある為、何かしらの命を受  
けたのかどうか、そこだけを確認したようだ。

こうなると頑なで、紫の言葉以外は聞かない忠実な下僕とる。欲求  
を満たす為抱くか、または抱かれてもいいと思えるくらいの友人でも

あり、臣下のあり方としても褒め称えていい相手だが、対立すると面倒な手合である……が、今はアイギスにも手札があつた。左腕で抱きかかえる橙を持ち直し、両手を掴む形で釣り上げて、自身の顔の側に身体を持ち上げる。

「ふむ、では交換致しませんか？」

「交換？　それは……」

語りながら空いている手を身体に這わせる黒羊、橙に着せていた自分のジャケットを開けさせると、あらわになるのは虫食いだらけで素肌の見え隠れしている黒猫の身体。

その開いている脇腹に口を添え、右手は内腿からスカートの中へと進ませる。

「邪魔だと仰る藍様と同じく、私にも邪魔な者がおりまして。この者がいるせいで片手がふさがってしまい……邪魔なのですよ」

瞳に少しの怒りと動揺を宿すが話さない藍。

今の今まで大事に預かっていてくれた式、毒気に倒れた姿は見たが一緒なら大丈夫だろうと預けた相手のはずが、今になって正しく人質として使われてしまう。

ここで放っておけばどうなるかわかる、自身がそうしてきた事がある故にすぐに理解は出来たが、口にはしたくない傾国の美女。

「趣味が悪い言い方をするな、アイギス」

藍に代わり宙吊り仲間のレミアアが何かに気が付いて問いかける。

わざわざ言葉にしなくとも三人共理解している事、放っておけばこの後でどうなっていくのかわかる内容をわざとらしく噛い、二人、特に藍に向かって語る悪魔。

「趣味が悪いとは酷いお言葉にございます、こういった相手を好む吸血鬼が何を仰るのでしょうか。つれない事をおっしゃらないで下さいまし」

本心で楽しんでいる、そんな声色で語りながら虫食い部分を穿ち広げ、曝け出された小さな小山と薄ピンクへ向けて舌を這わせる。

舌先が僅かに触れるか触れないかすると、アイギスの吐息が先端にかかる。

うなされる橙が小さく揺れた。

その位置で一旦動きを止めて、淀んだ瞳と耳を藍のいる辺りに向ける。交渉に乗ってこないのならこれから正しく進めていく、そのような事でも言いたそうに、先端から僅かに外れた部分を舐めた。

「見ていていいのか？ 私よりも楽に堕ちるぞ？ 破瓜もまだなんだろう？ 覚えて癖になっても知らんぞ？」

人質でありながら饒舌に、偉そうに語り煽る500歳児。語る己も同じような子供だが、彼女も悪魔で堕とす側の者である。そういった事に対しては橙よりも知識も耐性も持ちえている、それ故の余裕とそれ故の煽りであった。

「…分かりました、応じます」

語りながら、尾を動かしてレミリアを差し出す。アイギスの手元にも動かされるとゆるりと捕縛が解かれた、そのまま橙に向かい尾を伸ばすが、交渉相手に渡す前に自分の上着の前を止め、晒していた部分を隠してから返す羊。

そうして抱く相手を入れ替えると、藍に向かって口を開く。

「橙様を回収されてから行えば宜しかったのに、藍様にしては迂闊な動きでしたね」

言うに事をかいて、といった顔で見上げるレミリアだったが、それは言わずに唾きを飲み込むだけであった。橙に舌を這わせていた時よりも酷い笑顔、紅魔館内では瀟洒に笑う事しかなかったアイギスが、レミリア達には見せなかった悪魔らしい笑みで友人に向かって嗤いかけている姿。もし彼女の言う通り橙が先に回収され交渉する術がなかったらどうなったのか、この笑顔からは確実に血腥い事になっていたのだらうとレミリアは確信する。

長い付き合いのある八雲よりも自分を取る、それはありがたいとは思ふ。けれどそうなった場合に最後はどうなるのか、そこまで考えるとしたら少しだけ恐れを覚える吸血鬼。そういった事を覚えたのは橙を預かった者も同じらしい、苛立ちを瞳に込め直して見つめ、いや、ほとんど睨みつけるような形で顔を合わせ語り合う。

「貴女は…本当にわからない方だ」

「わからないなどと、子守も今も本心ですよ？ 単純な理屈です、物事には優先順位というものがあるのですよ。気まぐれで手伝いを申し出たわけではございません」

藍に問われ返答する中、レミリアを抱く力が強くなる。

普段は妹ばかりを甘やかし、姉に対しては然程関わらない彼女ではあるが、万一が感じられる場合となれば誰を敵に回しても取り返し、今の様に抱き上げるのだろう。例え相手が気を許す友人や、笑いあえるような相手だとしても天秤にかけるまでもなくこの吸血鬼を選ぶ黒羊。本人達にそうされる事を拒否されてもきつと強引に抱き上げるはずだ、それこそ死に続けても。

藍が命よりも式を選んだ事ですんなりと終わった人質交換、そうこうしている間に人間同士の小競り合いも終わったようで、互いに傷だらけになりながら、何やら仲良さそうに文句を言いつつ近寄ってくる二人、と一体。

二人よりも先に藍と合流した紫が、その場の三人それぞれに向かい口を開いた。

「困るわね。どうにか扱えていると、そう聞いたはずなのだけれど？

…藍？」

「見込み違いでございました、返す言葉もございません」

藍は見込み違いと語ったが、紫の中ではまだ予定の内であった。

異変と知れば解決には動かないアイギス。

頑なに紫の定めたルールを守り、素直に依頼を出しても断られるのは承知の上で、それでも異変の最中には引つ張りだして置きたかった、そこから思案しての対吸血鬼戦であった。

本来なら共闘できる相手のレミリア、争わなくとも済む相手と敢えて争い、アイギスの想う者をそれなりに傷つけければ絶対姿を見せるというわかりやすい読み。一度スキマから姿を確認させ、紫自身も動かざるを得ない大きな異変ともなれば何かしらで関わってくる…：そうしてその後荒事の雰囲気と月の高揚感があれば、気まぐれで他の邪魔者と戯れる事もあるだろう、それが露払いにでもなれば事が早い、というのが今晚の賢者の狙いらしい。

さすがに藍の式を犯される可能性までは考えなかったが、仮にそうなると思いついても実行しただろう。それくらいに今晚は真面目な異変で、紫ですら犯人が読み切れていない異変なのだから。

「そう言うなスキマの、式風情で扱えるならこの場でこうしていないだろう?」

扇の奥で嗤う賢者、頭を垂れる従者、八雲の二人がこの場の状況を話しあう中、腕の中の幼子が横槍を入れる。月との繋がりは断たれたがさすがに深夜、もう暫くすれば自身で動ける程度には回復するはずだが、強い拘束から逃げるにはまだ力が戻りきっておらず、抱かれたまま二人を煽る。

「大事そうに抱き上げられて言う事ではありませんわ、本当に口の減らないお子様なこと。アイギスもそうは思わない?」

「思いませんね、そういった背伸び具合まで好ましいのですよ。この気持ち、わからなくもないでしょう?」

右腕だけで抱いていたレミリアの後頭部に左手も回し、自身の身体に押し付ける。

扱い方から大事な者だとわかるようにして、こうする気持ちもわかるだろうと九尾の揺り籠にいる橙と尾の主を眺めてから、スキマの主人を見つめる。

視線に促され自分の従者を見る紫、表情や態度こそ冷静さを見せたままだが、そうする事で動揺を隠しているのだろうと察する事も出来た。良き友人だが腹の読みにくい悪魔、そんな相手をまるつきり信用して預けるからこうなる、と、藍が下げたままの頭に手を置いて軽く撫でた。

「そうね、わからなくもないわ。藍、まずはその子の治療を……その後は一緒においでなさい」

「畏まりました」

「であれば我が家を使って下さいまし、ヤマメに声を掛ければ手助けもしてくれましょう。私からのお願いと伝えてくだされば、吹っ掛けられる事もありますまい」

スキマを開いて指示を出し、素直に従う八雲の主従。



沈んでいくその身体にアイギスからの気遣いがかかる、先ほど脅しに使った相手を気遣うなどおかしな話だが、事が済んで役割を終えた者、良い手札となってくれた橙にはそれなりに感謝しているらしい。藍からすればたまったものではないが、ソレが手っ取り早いとわかる上にスキマの先もどうやら桶屋、彼女には選択肢などなかった。

「……お気遣い感謝、では」

息遣いの荒い式を抱き、表情見せずにスキマを潜るもう一人の式。二人が消えていったのを見送ってからレミアアの頬に自身の頬をすり寄せ、小さく、無事で何よりだったと呟くアイギス。声色は先ほどと同じだが、表情は見慣れた淑やかさのあるもので、だからこそソレが少しコワイと感じた吸血鬼。

吸血鬼の感情を腹に感じて、怖がる余裕が出来たならいいかと地に降ろした。幼い吸血鬼を手放すと、小さな手に別れの口吻を済ませ、人間組が合流する前に再度闇夜に消えていく黒い悪魔。

皆の視界から消える途中、耳元で開いた小さなスキマより『放っておけばその目もあの子もすぐ<sup>レミアア</sup>に戻る、そしてあまりからかつてくれるな』と助言と苦言を同時に聞いて、あれは本心でからかつてなどいないのに、そう考え一人口角を釣り上げ進む。

足を運ぶは竹林の奥。

未だ剣戟と魔砲の照射音が聞こえる場所へ、死の匂いまでも感じられる場所へと笑んだまま消えていく。次なる相手は誰か、次こそは好ましい争いをと、関わらないと考えていた事は忘れた彼女。近くで感じられる血湧き肉踊る雰囲気惹かれ、期待しながら闇に溶けていく。

## 第六十話 吠える孤独な獣、忌避すべき相手と出会う

けたたましく鳴る音、ランダムに打ち鳴らされるは祭りの鳴り物のような音。

地形柄斜めに生えている竹が強く吹き荒れる風に撓らされ、ぶつかり合いながら響かせる音だ。

この風に乗るのはほとんどが弾幕からなる衝突音。この場で争う少女達がそれぞれを示す弾幕を撃ち、別の場所でも始まっている争いと同一ような音を周囲に響かせていた。

一番派手に弾幕を放つのは、器用に箒に立ち乗りし、速度を緩めずに対戦相手を追いかける普通の人間の魔法使い。霧雨魔理沙が、ユルユルと動く普通の亡霊の姫に向かってスペルカードを宣言して、力の限り魔砲を放った結果からの風と音。

耳を劈かんばかりに重い魔法の音と竹の音、それに無数の人形達が構える槍や剣の剣戟音と、人形達と剣舞を踊る庭師が立てる金属音までが周囲に響く。

「ああもう！ 異変の時は動かなくても当たらなかつたし、動かれても当たらないなんて相変わらずズルいぜ！」

弾幕に声がかき消される中の悪態、というか厭味を追う相手にぶつける。

当たらない弾幕に代わり言葉を当てる相手は、前回の異変で首謀者を務めた華胥の亡霊、西行寺幽々子。既に一枚目のスペルカードは宣言し、それを軽やかに避けられた魔理沙が苦い笑顔で追撃していく。今宵連れ歩く人形遣いの色合いに似た青い魔力の弾頭、鋭角で突き刺さるような弾幕を真っ直ぐに、幽々子に向かって真っ正直に放つていくが対する相手はひらりと避ける。

「撃たれたから動いているのよ？ それにあの日の事は私も覚えてないの、だから言われても困るわあ」

避けながら言葉を返す幽々子。

まるで自身の描く反魂の蝶々を真似るようにひらり、高速で飛び込んでくる魔理沙の弾幕を緩い動きだけで躲していく。幽々子からす

れば決して速い動きではない、単純に無駄のない動きをしているだけで、魔法使いの弾幕はいとも容易く過ぎていくだけとなる。

「動くのは私達だけでいいんだ。お姫さんだつてんなら動かないのが決め事だろ！ 忙しく動くのは私みたいな普通の人間や、従者だけつてのが相場だと思っうぜ！」

いくら撃つても躲される、もう少しで当たるかもという弾幕は近くを翔ぶ従者の弾幕により断ち切られる。姿を見せながらも自身の弾幕を魔理沙に向かつて放たない幽々子。

先に魔理沙が言い切った『動く撃つ！』という言葉を冗談交じりに返すだけで、彼女自身は避けているばかり、放つたとしても明後日の方向に蝶を飛ばすだけだった。

そんな亡霊姫に向かい、小さな刃を光らせた人形からも弾幕が奔る。

が、それらの弾幕も放つた人形毎庭師の二刀に切り伏せられた。

「何人なんびとたろうとも、幽々子様に寄らば切る！」

バサリと切り伏せた人形に向かい口上を述べ、正面を切るは半人半霊、魂魄妖夢。

祖父から譲り受けた刀、白楼剣をキラリ、月夜を反射させる。

「上手に言うわね」

操る者達が切られたというのに慌てない女、静かに返すのは七色の人形遣い。

断たれた人形達が落ちていく様を見て僅かに眉を動かした。

そうして瞳の色を蒼から金へと変えていく、アリス・マーガトロイド。

「おいおい、アリスまで馬鹿にしないでくれよ、また傷つくぜ」  
この場にいる唯一の人間がついた悪態。

それが場に響くと魔理沙以外の三人全員が少しだけ笑った、言ったアリスは洗練された返し、組んでいる未熟な魔法使いに対する黒さも少しだけ交えたジョークのつもりで笑い、それを正しく理解している幽々子も同じく、上手に立場を入れ替えて言うものだと笑った。

最後に残る寄らば切るを茶化された妖夢だけが二人とは別の意味

合いで笑っていた、前回の異変では後れを取った魔理沙相手に傷つくと言わせた、それが嬉しく思わず笑んだ。

「では、次はこちらから……参ります！」

一番最初に真顔に戻った者、鋭い刃物を振るう剣士が言葉と共に動き出す。

狙う相手は好敵手、遅れを取りいつか借りを返すと誓っていた相手、春雪異変では身を焦がしてくれた魔理沙に向け、その切っ先と焦がすような思いを向けて空を切り、心意気を飛ばす。

振るわれる剣閃と全く同じ弾幕が空に現れる、一瞬のタイムラグの後で半霊からも同じような弾幕が飛び、二方向から魔理沙を狙うが、その剣閃は難なく躲され、代わりに赤いレーザーが妖夢に向かって照射された。

「さつきから、邪魔ばかり……横槍無用！」

邪魔した相手に向き直り、邪魔をするなど手を背に回す。

振るっていた白楼剣を鞘に収め、柄頭に目立つ白い房を揺らすもう一振りに手を掛けた。祖父のように腰には佩はかず、背に背負った鞘を引いて、腰の辺りにずらすと、鞘の先に見えていた一輪挿しが背に隠れる。

「邪魔ばかりって、魔理沙の邪魔をしているのは貴女じゃないの？」

「半人さん？」

「むう、減らず口を言わないで下さい！」

「揚げ足と言うのよ、これは」

クスリ、そんな声が漏れそうな顔がアリスの横に浮かぶ。

言い返した本人は涼しい顔から全く変わらず、代わりに操る人形達にあざ笑うような表情を作り見せる。そうして瞳だけを金に輝かせ、他の人形よりも一回り大きく、最も愛している人形に手をかざした。

そこから放たれる魔を帯びた光、竹林の夜を彩るような美しい魔光が人形より発射される。それを受ける妖夢は刀を構え断ち切り迫る。一気に詰め寄ると袈裟から斬り掛かり刀を振り下ろす。

が、その剣は振るわれる前に弾かれた、青くたなびくスカートから伸ばされた足が、鐔を蹴り上げいなしたらしい。魔法使いだというに

体術もイケるアリス、指は人形を操るのに忙しいが、その足にもそれなりに自信があるらしい。

攻め手弾いての攻防、互いに引かない連れの者達。

妖夢には荷が重い相手に見えるが、眺める主は焦らない。

「あらあ、あつちの光線も綺麗。魔法使い同士お揃いで、仲良しなのね」

余裕綽々、そんな動きと言葉遣いで追手に語る亡霊の姫。

大量の星形弾幕や、通常弾に追われながらもゆるゆると、舞い散る花卉のような動きを見せて避けていく、こんな態度で受け流されて対する魔法使いは興奮しっぱなしだ。見られていないわけではない、避けるのだから見られている。けれど、別の争いを眺めながら躲されて、あしらわれているとまるわかりの状態。

さすがに気に入らないと、本腰入れて愛用のマジックアイテムに魔力を込めた。甲高い音と眩い光が魔理沙を包む、後は垂れ流すだけとなると、帽子にしまうスペルカードを取り出し、チラ見せした。

「いい加減、私だけを相手にしろってんだ！」

光と共に奔る轟音。

辺りの竹を焼き払い、狙う幽々子も焼き落とそうと片目を瞑り動きを追う。

薙ぐ閃光がもう少しで届く、そんな中パチンと音がなり、魔砲の威力が殺される。

「そうねえ、あつちはあつちで楽しそうだし……そうした方が手っ取り早いかもしれないわね」

扇を閉じて向き直る、魔理沙の魔法と干渉した自身の力が漏れ出て、目に見えるような状態で。

そのままでくると回ってそれを撒く、蝶が飛び鱗粉を撒くように自身の回りに操るモノを漂わせる幽々子。誰かのような音を鳴らし、迫る力を殺した扇を再度開いて魔理沙に向けた。

そうして先に光が灯され、今し方人形遣いが見せたような美しいレーザーが、扇の骨の数と同じだけ発射された。冷たい光が魔理沙に迫る、一本にでも触れれば勢いを殺されて落ちる、それがわかるくら

いの冷ややかさが目に見え、黒白の心中を冷たくしていく……それでも魔理沙の熱は冷めず、八卦炉を箒の穂に埋め込むと、柄を握って力を込めた。

発射方向を真後ろにして流される魔光、その勢いを利用して、幽々に向かつて突貫する黒白少女。反魂の蝶をアチラコチラに飛ばし、攻め手はそれ以外の緩いモノしかしてこない相手に向かい、奥歯を噛んで突っ込んだ。

く少女達遊戯中く

それぞれの笑い声が静まると再度動き始めた少女達。

苛烈に攻める黒白と、華麗に捌く亡霊の姫。

召喚した愛する手駒達を再度幽々子に向ける人形遣いに、それを断ち切る半分庭師の半分剣士。思い思いに動いては美しい月夜を更に彩っていく四人。その全員を静かに、息を殺して眺める者が竹林の影に身を潜めていた。

暗い中に目立つピンクのワンピース、胸元からは愛用の人参型の飾りを垂らし、それを握って荒事の流れを見つめる者……それは今夜の異変を起こした側の者で、正しく四人の敵であった。

「解決に来たのか、争いに来たのか、あれじゃわからんね。その御蔭でウチにたどり着いてないってのがまた皮肉だが……悪い流れじゃないな」

ニヤニヤ、幼い身体に似合わない笑みを見せる妖怪。

嗤う度にふかふかの垂れ耳を揺らして、もっと争って潰し合ってくれと願う兎、名を因幡てる。

身を潜めて笑い声を立てるなど愚かな行動にも思える、けれども彼女の場合は何の問題もなかった。ここは彼女の庭であり、同時に自身の物だと主張するほどに慣れ親しんだ場所だ。ここまで迷い込んで来た四人、顔を合わせてからすぐ争い始めるような四人をまく事など、彼女には造作も無い。

「さっさと潰し合ってくれよ、あたしやそれを待ってるだけでいいんだし」

ケラケラ笑う妖怪兎。

先程から亡霊の姫や人形遣いの二人とは目が合っているが、攻め立てられはしない。

自身の持ち得る能力により運が良いから、というわけではなく、幽々子とアリスの二人は竹林にいるという兎の話を知っていて、敢えて手を出さず、姿が見えるギリギリのラインで争うだけで抑えている。場所から敵、それはわかっているが二人共に狙いがあり、それ故性格の悪い狡猾兎は見るだけとしているようだ。

アリスはその兎の性悪さから、何か手を出されたらすぐに対応出来るようにだけして、まずは一番厄介な幽々子を落とす考えでいた。出会いから攻めてこない相手、自身もそうだが実力の殆どを隠すように手の内を見せない相手。こういった手合は手強い、と、己自身も本気を出さないアリスらしい思考の元動いている。

それに対して幽々子は別だ、彼女の場合は単純に兎に動いてもらいたくて、近寄っては離れてを繰り返している。相手は年季の入った妖怪兎。詐欺師と名高い神話のう詐欺だ。そんな相手からの手を待つよりは、何もさせずに操る死の匂いを僅かに嗅がせて、あわよくば引いた所で道案内してもらおうと、少し近寄っては操る能力を程々に漂わせ、巣に帰れと促していた。

仮に逃げずに死んでもいい、当たらないようにはしているが、長く近くになれば確実に蝕むだろう死の蝶々。てゐの近くを舞っては、大きく伸びる竹を殺していく反魂蝶。

青と赤の鱗粉を撒くその姿は美しいが、それでもてゐの身体を動かすには至らなかつた……

が、耳だけはピクリと跳ねる。

また別の相手が原因ではあるが。

「元気に盛っちゃってまあ……ちよつと近いね、少し動くべきかな？」  
跳ねた垂れ耳で聞いたのは遠吠え。

空で踊る少女達が囁し立てる音とは別、四人よりは遠い位置だが吠えた相手の足を考えればすぐに辿り着くくらいの距離、今彼女と出会うのはちとマズイ、そのような思考で四人から一旦離れようとしたう詐欺だが、少しばかり遅かつたらしい。

振り返り僅かに進むと嗅げる匂い。

血を好み肉を好む肉食獣の匂いを、その鼻に嗅いだ。

「ああ、いたわあ」

匂いが強まると声も聞こえた。

上ずった、欲情に狂ったような声が、姿を見せた女から聞こえる。

がさりと落ち葉を鳴らし、手を掛けた竹に深く鋭い爪の跡を残した相手、てゐの仲間、というか師匠と呼んでいるらしい者がお月様に細工をしたせいで、色欲から食欲から留まらない月の眷属が現れる。

「可愛い可愛い兎さん、貴方にお願ひがあるの」

「なにさ、喉に骨でも詰まったかい？ それくらいなら取ってあげるからウチに来なよ、影狼」

腕組みし、胸を張る兎。

小さな身体でふん反り返り、何かを願う相手の名と軽口を吐く。

それでもその言葉は聞かれたのか、聞かれていないのかわからないような有り様。

口調だけは会話が出来るような雰囲気の子。

今泉影狼という狼女だったが、どうにも兎の売り言葉は聞こえていないようだ。

返事代わりに竹を裂き、がなる。

「もう耐えられないの……もう、耐え切れないのお!!」

裂いた竹の端を少し、いや、随分と毛深く見える指先に刺したままてゐへと駆け出す。

数歩で間合いを詰めると地面ごと、てゐのいた辺りを切り裂いた。五本の爪痕が地面に描かれるが、裂かれるはずだったピンク色のワンピースは布切れすら残していない。

どこに行ったのか、尋ねるように遠吠えをする影狼。

大きく天を仰いで咆哮すると、隠微な赤を宿す瞳に、背の高い竹を蹴りこみ激しくしならせている兎が映り込む。

「狼相手なんて簡便だね、一人で慰めたらいいウサ」

ニシシと嗤う顔がブレて伸びる、撓る竹からミシリと鳴ると一気に飛び去っていく竹林の覇者。



先ほどまでの少しずつ距離を取るような動きから一転、一瞬にして夜の竹やぶへと消えていった。ここで出会ったのが影狼でなければ素直に走り去ってまくか、周囲に配したトラップにでも掛けてから移動しただろう妖怪兔。

ここは彼女の庭であり、彼女の仕掛けた悪戯がそこら中にある罠籠のような場所だ。

だがこの狼女も竹林に住む相手で、てる程ではないがこの地を知る者。

そんな相手から逃げるのに走っては手間がかかる、こいつに時間をかけているほど余裕はない。余計な連中がいつまで争い続けてくれるか分からない為、今は強硬策を取り、狼女の手から脱したようだ。

一人残された狼女。

再度大きな叫びを上げて、両手で身体を抱きしめる。

自分が着ているドレスの胸や脇腹部分に爪を食い込ませ、血が流れるのもわからないくらいに力を込めていく。兔に言い逃げされての自傷行為、もしくは激しい自慰……では無く、僅かに残る理性の部分でどうにか落ち着こうと必死のようだ。

傷つけた事で多少は戻る自我、それでも浴びせられ続ける月の魔力、そのせいで高ぶる心が抑えきれない影狼。今まで以上に悲痛な、甲高い遠吠えを轟かせて、顔に色気を灯していく。

同じく月に影響される吸血鬼や白鐸は冷静で、理知的さを残したまままだというに、何故彼女だけがと思えるが、それは種族として変じてしまう部分と、白鐸よりも大分年若いという部分が作用する。彼女は少し前まで外の世界にいたニホンオオカミの妖かしであり、外で絶滅する流れから幻想郷に来た、いわば妖怪世界では新参である。

幼い見た目だとしても500年程生きている吸血鬼姉妹や、そこまでの年を重ねているのかは分からないが年配の気配漂う上白沢ウーハクタクのよ  
うに、月の魔力に抗える程彼女は年を重ねても、力を宿してもいなかった。

また轟く泣くような叫び、その遠吠えを聞いた者が、声に釣られて

現れる。

咆哮から竹が細かく揺れる中、この月夜でも揺らがない相手が歩み出てきた。

「痛々しいお声、ライカン・スロープですか。幻想郷にもいらしたのですね」

影狼が現れた時のように竹に手を掛け話す者。

この魔力を心地良いだけだという悪魔が、身を振る人狼に向かって話しかける。

が、言葉は返つてこない。代わりにその爪と牙がアイギスに届けられた。満たしてくれそうな獲物を逃した事がよほど辛く悔しかったのか、無言で、眼の色だけを輝かせて迫り、羊の身体に狼の爪を食い込ませていく。身体の前側を縦3つに抉られた見えぬ羊、血飛沫を飛ばしよろめくと、そのまま首筋に牙を突き立てられて押し倒される。

裂き、露わにされたアイギスの身体、首を啞えられ強引に振るわれ、滴る血をそこいらに撒き散らされる。そうして血塗れになった左胸に腕を通してそのまま引き裂いていく狼女。クチャリ、生々しい音を羊の首から立てて牙を抜き、別の場所から抜いたモノを握り血肉を味わう。少し咀嚼し喉を鳴らすと天を仰いで数度目の咆哮。

食い慣れない、が、好ましい味を覚えての興奮と高揚感からの叫びを上げ、上気したまま、続けて縦に開く腹に顔を寄せるが、仕留めたと思つた獲物が血を沸き立たせ、吐き出しながら語る。

「…困りますね、ここでも立場が逆です。腹を裂かれるのは狼さんですのに」

先に預けた猫、あの者が襲われていた映像を例えに、自身の臓腑を啞える狼の頭を掴む。雑に掴んだその長い髪を持ち上げ、自身の腸を千切りながらも強く握り持ち上げる。そうして片手だけを振るい、太い竹が続く辺りにぶん投げた。

韌やかな竹に打ち付けられて犬のような悲鳴を上げる影狼、背を打ち息を吐くと、啞えていたモノも離してしまう。撓った竹の反動分だけ体も跳ね動き、再度アイギスの方へと飛ぶと、中身を垂らして立ち上がる彼女の高いハイヒールで腹を蹴り抜かれ、歓迎される。

「さて、怖い怖い狼さん。私の味は如何でしょうか？ お口に合えば恐悦至極なのですが」

少し揺れて立つ彼女、本気ではなく加減している黒羊の物言い。

妖怪同士の争いは小さな幻想郷の死に繋がる、そんな友人のお小言を思い出してしまい、このまま仕留めてしまいたい気持ちを抑えての問い。語りながら足を捻り、深く突き刺しているヒールを振る。これで止まるか逃げるかしてくれれば要らぬ加減をせずに済む、出来ればそうなるてもらいたい……もらわないと、ルールを破りそうで困る。

数千年前に追われ、食われかけた経験からあまり好きではない狼、それに食われてしまった事でご機嫌斜めになり始めた元羊が、刺したヒールを抜いて首を掴む。

「美味しいわ、とてもオイシイ。貴女、何？ わからないけど、なんだろう？ そうか、きつとそういう相手なのね？……だから煩いのよね？……もつともつとって囁くの……貴女で満たせつて、そう囁くのよ、私の本能が！」

抜かれた腹から血を流し、首を捕まれ指が食い込んで歯を剥き、尚叫ぶ。

褐色の指の第一関節が埋まる自身の首、わざと立てられていない爪が刺さろうと耐え、に両手を添えて強く握り返し、その狼の爪を突き立てる。ミシリと腕から音がして、これで解けると笑むけれど……

「お口に合ったならば何よりですが、叫ぶほどに囁かれていますは辛い事でしょう……良ければ私が気を紛らわせて差し上げますよ。代金代わりにそうですね、いい声で鳴いて下されば結構、満足しましたら逃がして差し上げますので、しばしお付き合いを」

追い込まれながらも諦めない、それどころか嗤う相手。これで狼でなかったら好ましい相手だが、狼女だという事実までは覆せない。勿体無い手合だなと握るその手に力を込める。

触れているのだから穿ち、掘り返せば一瞬で終わる状況。だがそうはせず、ゆつくりと調理するように空いた左手で腹の穴を抉り、その穿孔跡を広げていく。そうしてそこから溢れてくるだろう自身の糧を求める彼女。口の端から垂らす血を舐め、それを唇全体に伸ばして

いくと薄く微笑み得物を見つめる。

アイギスの腕から鳴った音が影狼の首からも小さく聞こえ、深い息を一度吐いてからは最早叫ぶ事も出来なくなった狼の喉。もう少し力を込めれば息もしなくなるだろうが、ギリギリの線で止められて、意識を落とすことも出来ず、満足に呼吸も出来ないでいる影狼。瞳の端には薄い涙も見えるようになってきたウエアウルフ。

そうして足がつかない程度に持ち上げられると、先ほど貪った腹に向けて足をバタつかせ蹴りこむが、開いたままの腹を蹴られるも力を緩めず、釣り上げたままの悪魔……すっかりと立場を返して、食われた中身を戻すのには十分なくらい糧を得たと笑う。

それから僅かな静寂の時間、吊るす獲物の動きも、声も静かになり始めた頃。

伸ばし、捕らえている羊の腕の肘部分に数本の矢が刺さり、そのまま抜かれ断たれた。

「横槍？ どな……」

矢の飛んできた方に向き直り問う、がそれ以上はアイギスも会話出来なくなった。

質問をしたというのに返ってきたのは鋭く奔る矢。

腕に続いて首にも何処から飛ばされた矢が突き刺さり、影狼とは別の理由でアイギスの喉も閉ざされた。持ち上げていた相手も、地に伏せる前に足や肩を撃たれ、その勢いから離された。

ドコのダレが邪魔を？

得物を奪った相手を未だ見えない瞳で睨み鼻を鳴らすが、周囲に漂う自身の血の匂いが邪魔で、相手の特定までは出来なかった彼女。次いで射られた膝から落ちて沈むが、高さや姿勢が変わっても続く矢は彼女を襲う。

両肩や残っている片膝・肩肘、関節の継ぎ目と言える部分全てに突き刺さり、まだ繋がっていた左の腕や膝は関節から先も同じように打ち抜かれ、切り離された。動きを制限されては致し方なし、と、残る右足で足元を穿ち掘り起こすと、敵だろう相手から姿を隠す。

それでも攻め手は終らずに、窪んだ地面全てを埋め尽くすよう、放

物線を描く矢の雨が降り注ぎ、その全身に浴びた。

ぴたり、静かになるその場。

近くの空では未だ四人が争う音がする。その喧騒とを聞き分けて、矢を放った獲物が絶命したのを感じると、新たに現れた誰かは、見せてすらいなかった姿をあるべき場所へと向けていった。

そうして静けさが強まると、音を立てずに復活を果たすアイギス。全身を瘴気と化し、黒い渦となった中で一人佇み、取り戻した視力で見つめ、鼻を鳴らす。

「茶々を入れてくれたのは薬品の臭いを纏う誰か、覚えのない匂いなら……場所柄異変に関わる者、でしょうか？」

すつかりと見えるようになった瞳、焦点の合わさる位置にはつい先程射抜かれた矢の羽がある。

そこから嗅げるのは嗅ぎ慣れない匂い。

刺激するような強いものではないが、清らかさや透明さが乗るような匂い。

それを嗅ぎ分け望むは奥地、暗く茂る竹葉の奥。

なんとはなしに首を擦り、淑やかに笑んでそちらを見つめる黒羊。

その視界には先に別れた者が操る割れ目が開く。

迎えに来たとしても語りそうな瞳達が睨む羊の瞳を見つめる。

今は仕事中でもないというのに、またか、一言呟くとすぐに進み出す。

視力を取り上げられ、つい先程は獲物まで取り上げられたアイギス。

表情はいつも以上に淑やかな顔色、それ故本格的に機嫌を損ねたとわかる状態のまま、スキマの主に似た笑みを浮かべて、胡散臭い空間へと身を投じていった。

## 第六十一話 囚われた兎

四組の少女達が楽しく弾幕遊びに興じたすぐ後の事。

争っていた四組の内の、一応の決着が着いた二組が、突然に現れた日本屋敷の前にいた。

ツートンカラーの少女が三人、紅白、黒白、青金と、それぞれのカラーリングを身に着けている少女達が二手に別れ、屋敷の周囲を彷徨っていた。建ち方や雰囲気から、ここが異変の中心地だとわかる、だというのに中には入らず周りを飛び回るだけ。

小さな明かり取りや締め切られた障子を睨み、中を伺うように覗いたり、どうにか侵入しようと少し高度を上げてみたりしているが、入ろうとする度に何かわからないものに阻まれ、反発するような動きで弾かれる三人。

遊んでいるようにも見えるが、一体何をしているというのか？

「あ？」

「お？」

最初に声を発したのは紅白。

連れ歩く八雲の主従を正面玄関に置き、あいつらは前から侵入、自分分は後ろから挟んで中に入る……という体で動き、隙あらば一人で突っ込んで異変をさつきと終らせようとしていた巫女が、自分の利き腕側から回りこみ屋敷に入ろうと進んでいた。はずだった、真っ直ぐに向かっていたはずなのに、別の相手、逆の右方向に進んだはずの魔法使い達と顔を合わせていた。

「なんであんたらが前から来んのよ」

「霊夢こそ、なんでそっちから来るんだ？」

「これは、こうなるように仕向けられているって事でしょうね、堂々巡りか」

顔を寄せ合って文句をいう人間少女達。

二人して、なんでお前がそっちからとわかりやすい文句を吐いている中、一人冷静さを見せる魔法使い、アリス・マーガトロイド。先を飛んでいた連れ合いの少女、霧雨魔理沙の進む軌道を見つつ、何か可

笑しいと踏んではいたが、こういう事だったかと気が付いて一人頷く。

「仕向けて……面倒臭いなあ、さっさと首謀者のところにいかせなさいよ」

「真つ直ぐに行ってもダメだったな、どうするんだ？　上にでも行ってみるか？」

「それで地面の下に出たら嫌だわ」

「違くないな、なら……何かないか？　アリス？」

「こういう事は私よりも向いているのがあるでしょ？」

問われたアリスが魔理沙に言い返し、霊夢を見る。

顔に面倒だと書いている巫女さんが魔法使い二人に見られると、あいつらを使うのも面倒臭いけれど、こうしてグルグル回っているよりは面倒がなくて済むか、なんて下心というか、近道を求めて名を呼んだ。

「紫、こっちはダメっぽいわ」

「でしようね、行く前にも多分入れないって言ってあげたのに。兎も角一度戻ってらっしゃいな」

霊夢が虚空に向かって話しかけると、そこに開く小さなスキマから、反対側に待たせている相手の声だけが返ってきた。

窘めるような口が聞こえて、思わず舌打ちしてから飛び立つ紅白。その後を追って魔法使い達も動く。戻りは問題なく戻れたようで、正面玄関前でスキマを開く妖怪とその式の近く、裏を取ろうとしていた三人が合流する。

「おかえりなさい、やっぱりダメだったでしょう？」

「うるさい、いいから早くどうにかして」

「そうだけ、呼び戻したんだからどうにか出来るんだろ？」

僅かに首を傾げ、戻ってきた者達に語りかける紫。

よく見られる扇越しの顔で挨拶ついでに確認すると、先ほど窘められた巫女からは文句が、一緒に戻ってきた魔法使いからは問いかけが飛んできた。

すると背後で待つ九尾の式が僅かに尾を揺らす。何も出来なかつ

た人間風情が主に対して偉そうに、そんな思いが伝わる動きだったが、それを制するようにふわりと浮かぶ人形と、開かれるスキマ。

「それが私でもダメなのよね、入れなくはないのだけれど」

「あん？ どういう事よ？」

「入って進んで、中の誰かさんを倒せば終わるだろ。なら入れればいいんじゃないのか？」

曖昧な物言いのスキマ妖怪。

入れるけれどダメとはどういう事か、よくわからないからさっさと話せ、霊夢と魔理沙からはそんな物言いをされているが、残るもう一人のツートンカラーは別の事を口にした。

「そういった魔法、もしくはは能力が行使されている。いえ、行使され続けている。だから侵入する為の境目を開いてもそれは閉じてしまう。そして術者を止められたとしても、その術が止まる事になるのか読めない、そんな所かしら？」

「ご明察よ、人形遣い。こういった力なのかはわかりませんが境界を弄んでもすぐに戻ってしまうの、まるで変化を嫌うように二元通りに、ね。それが中には入れるけれど終わらない、終らせる事が出来ないと考えてる理由」

「なにそれ、異変なら首謀者を倒しておしまいでしょ？」

「それは幻想郷にいる者が起こした場合に限ってなの、今夜は少し違うわ、まだね」

「ん？ 幻想郷にいるからこそここで異変が起こせたんだろ？ 言ってる事までよくわからないぜ？」

「最後まで聞きなさいな、幻想郷の事であれば私にわからないことはありませんわ……だというのに、この竹林にこんな屋敷があると私は知りませんでした、つまりはこの屋敷はまだ幻想郷に馴染んでいない、それ故今までの異変とは少し違っているのよ」

「管理人が知り得ない場所は幻想郷ではない、と。無理がある物言いだけど、実際知らず入れずなのだからそれでいいわ、そこは」

紫の説明にアリスからの補足、その2つを聞いて尚わからない二人。



正しくは諦めたのか、正確に理解するのが手間だからこれ以上はもういいやと、ある意味で開き直って屋敷と紫を交互に眺めるだけにした異変解決コンビ。

御託はいいからさっさとしろ、そんな仕草をとって見せるとスキマに映る誰かが現れる。姿を見せた瞬間から、いつもよりも明るい笑みで、普段よりも明るい声色で、ぱっと見は上機嫌な黒羊。

「これは皆様お揃いで、出待ちをされるなど嬉しく思えますね。急なお呼び出しでしたが、悪くないものです」

ニコニコと、場にそぐわない顔で語るアイギス。

少し前に顔を合わせた時はもう少し落ち着いていたような、と、語らぬ藍は感じているが、呼び出した張本人は何も言わずに扇で屋敷を指すのみ。

「げ」

「アイギス＝シーカー？ 何故ここに現れ……呼び出したの？」

何か嫌なモノを見た、そんな事を一言で表す魔理沙は兎も角として、当然浮かぶだろう疑問を述べるのもう一人の魔法使い、アリス。最初は不意に出てきた相手に問いかけようとしていたが、雰囲気からアイギスではなく紫に問う。彼女は一度顔を合わせたただけだがあの時とは纏う雰囲気が違う、アリスの住まいを訪れた時にはもつと落ち着いた手合だった、今のような、あからさまに機嫌を見せるような事はなかった羊。

これは少しおかしいと感じ取り、そちらには触れずに召喚者に聞く……がパチンと鳴る音がすると、視線はそちらに向けられてしまう。「ここで語らうのも良いのですが、先約がありますので私はこれでは、失礼致します」

急に来てはいなくなる悪魔。

紫の扇が指している先、永遠亭の正面玄関を穿ち、くり抜くと、一人で中へと消えていく。

何しに来たのかと見ている者達の中で一人、紫だけが読み通りだと小さく頷く。

あるモノ、境界は弄んでも元に戻ってしまう。

ならばその部分を削り抜いてなかつた事にしてしまえばどうか？  
そういつた思い付きから急に呼び出し、読みは見事に当たったが、友人の今の表情が何を原因にしたものなのかは読み切れないでいた。あんなに楽しそうで、あんなに薄気味悪い笑顔のアイギスは見た事がない。

八雲紫はアイギスを幻想郷に引つ張りこんだ張本人であり、この地では一番付き合いが長い者だ。藍も同じく時を過ごしているが紫に比べれば関わり方が少し薄い。それ故他の者に比べればある程度の予想は出来るが、そうした考えを巡らせる前に屋敷の中で争う盛大な音が紫の頭に響いた。

「さあ、ノックも済んだようですし私達も続きましょう」

それでも笑みを絶やさないう紫。

既に入り口は開いた、ならばここはもう敵地であり未開の地だ、そんな所で突かれるような姿を見せるほど甘い妖怪でもない彼女。期せずして露払いとなった友人に少しだけ感謝し、出来ればここだけですつきりして欲しいと願いつつ屋敷の廊下に歩を進めた。

先に消えた悪魔、奥にいるだろう獲物を横取りしてくれた葉臭い相手を狙うアイギスが鼻を鳴らして消えた後を、彼女に続いて屋敷内へ侵入していく少女達。神妙な顔で内部を伺う皆の中で一人だけ笑う紫の事を、付き従う式は眺め、進んだ。

く少女移動中く

さらさらと流れるような音に包まれる場所。

この鳴り物は周囲の竹、その葉音、それだけが鳴り聞こえている。自ら迷い込んできた少女達がアチラコチラで弾幕遊びに興じ始めて、本当なら同じ竹林にあるこの屋敷もその戦闘音が響いていて当然。だが、この屋敷の空気からはそういった争いの音はしない。聞こえてくるのは屋敷の廊下を歩む誰かの足音くらい、音の主が向かうのはこの建物の奥まった辺り。

周囲の景色を描いたような、雅な竹が描かれた襖を開き進む少女。少し前には描かれている竹を強く撓らせて逃げるための手段とした兎の少女が歩く。

「何人くらい来ると思うよ？」

歩きながら語る兎の妖かし、因幡てゐる。

話しかけた相手の顔を見上げ、この屋敷に足を踏み入れられるのは何人かと尋ねる。

「何人でも構わないわ。ここに侵入する、ここを荒らすというなら、私は……」

ちよつとした遊びだというように、茶目つ気のある声で話しかけてゐる。

竹林で逃げ去つた時と同じく、白い歯を見せて笑う。けれど、語る相手の反応は遊びからはかけ離れたもので、てゐとは違い、淡々と返しては、右の手首を左手で握り締めたりしている。

着ているブレザーの袖に深いシワが寄る、それ以上力を入れれば袖のボタンが飛んでしまいそうな程の硬さが、その仕草には見られた。

「私は？　なんだって言うのさ？　死んでも阻止するとも言うか？」

これだから軍人ってやつは……もつと気楽に考えたらいいんじゃないかねえ、鈴仙」

覚悟に近い言葉を言つた相手、自分と同じく兎の耳を垂らす、鈴仙と呼んだ少女に向かつて、悪態とも取れる言い草で話す小さな兎。先ほどの、遊び心いっぱいといった声色のまままで話かけているが、軽口を吐かれた鈴仙の態度も悪戯兎と同じく変わらない。

「気楽につて、ここは私を拾ってくれた場所なのよ、ここがなくなったらもう行く場所がないの」

「それなら心配ないさ、姫様も師匠も絶対になくなるらないウサ。ついでにこの屋敷だつてなくならないような名前なんだから、心配するだけ無駄な事だよ」

でも、と言いつつ手に力が入る鈴仙。

立てていた右手の人差指が僅かに内に入り震える。

覚悟はある、恩もある、そして並の相手なら蹴散らせるくらいの腕もある。この屋敷に拾われる前は別の地で軍畑にいたのがこの鈴仙だ、日和つたこの地の妖怪程度なら私の経験と能力でどうにでも出来る……はず、と考えた頃、思わず手を震わせた。

「格好つけて震えてちやダメだね、格好がつかないよ?」

「うるさい、これは武者震いよ」

否定したが、これは武者震いではない、これは唯の恐れだ。

鈴仙自身にもその自覚はある、敵を恐れ逃げ落ちた過去、苦い経験からくる身震い、この屋敷がなくなればもう逃げる先がない、ならば全力でここを守らなければならない。

だというのに止まらない……戦えるのか、また私は逃げてしまうのではないか?

そんな考えが頭の中を占めていく、が、小さな手が触れ、震えを抑えてくれた。

「心配するなら自分の事だけにしときなつて、あたしやそうしてるよ」  
「てゐ、あんたは……それでいいの?」

足を止める兎、そうしてもう一人の手も離れた。

暖かだった小さな手が離れると、また握り締める力が強くなってしまい、少しだけ右手の血色が悪くなったように見えた。何をそんなに思い詰めているのか、鈴仙の心情をわかった上で尚問いかけるてゐ。返ってくるのは先の言葉に似た物言い。帰る場所が、と言いかける鈴仙だったが、それは被せられ、長く続く廊下に消されていった。

「そうやってなんでも背負うから重さに負けるんだつて、心配ない連中氣遣つたつて仕方ないつての。鈴仙やあたしはあの二人とは違うんだから、そつちにだけ気を配っておけばいいのよ」

立ち止まったままの元軍人、そのすぐ横に戻ってきて、ペシンと軽く尻を叩く。

軽やかな、てゐの態度に似た音色が廊下に響く。そうしてから数秒経つとやっと歩を進めた鈴仙、先程までの張り詰めた雰囲気は少しだけ薄れた顔で、それでも固い決意は覗かせたままで。

一人進むその背を見送る悪戯兎詐欺、並び歩いていた先ほどとは立ち位置が変わるが、それは心情も立ち位置通りに別に向いているからであった。事実彼女は屋敷の者達に対して心配はしていない、一緒に住んでいる事からなにかしらの情は感じている、けれども鈴仙のように守るだとか、今度こそ逃げないだとか、そういった硬い心は持ち合

わせていなかった。

実直に思い込むのも強さではある、が、それは崩れると脆い。それを知っているのがこの年経た兎詐欺であり、それ故過去を振りきれずに立ち止まる事が多い同居人に対しては、先ほどの様に尻を叩く事も多かった。

「そうだ、鈴仙、ちよつとだけ教えておいてあげるわ」

廊下の角を曲がりかけ、その肩と背中くらいしか見えない相手に投げかける言葉。

今度はどんなお節介が飛んで来るのか、思わず足を止めた鈴仙。

今夜の敵の情報を知っているのなら全て渡せ、そんな思いを真つ赤な瞳に込めててゐるを見返す。

「外で観てきた事なだけどさ、ここに向かってくる連中は大概二人組だったんだ」

「さつき聞いたわ、それ。三回目よ」

年寄りが語るような繰り返し、既に二度ほど聞いている話がされる。

相手は人間と妖怪が組んだツーマンセルで動いている、一部半分人間も混ざっているが、目に付く四組の内三組は人妖でのコンビだと聞いている為、半分も人間なら一緒に考えても問題無いだろう。

そう考えたのが一度目、二度目はそいつらが綺麗な弾丸を放ちながら、争いながらもこの屋敷に向かっているという事だった。互いに争い消耗してくれている、これは鈴仙にとって都合が良く、悪い情報ではなかったが、それだけであった。

相手が何処の誰であろうとこの屋敷、永遠亭を落とそうとする者なら容赦はしない。

唯一屋敷の外と接点を持つてゐるから仕入れたこの地のルールを破る事になったとしても……と、そんな引き締まる思いが顔に込められる。

「まあ聞きなつて、そんな連中ばかりだったならあんたの能力でどうにでも出来るんだろうさ。でもね、中には一人で行動してるのを見るみたいだ、そういう相手には近寄らないほうがいい」

既知の情報ならいらないと、廊下を鳴らし始めた鈴仙だが、後半の部分が引つかかり歩みを遅くした。そうして少し距離が開くと立ち止まり、頭の上でしなだれる耳を語る兎に向ける。てゐの耳は天然物だが彼女の耳は今ではただの飾りだ、音を聞く為の器官ではない。それでも向けてしまったのは新たに追加された情報に疑問を持ったからだろう。

「どういう意味？ 一人の方が御しやすいんだけど」

「だから聞けって。こんな月夜に一人歩きをするような輩なんだ、どんな奴かわかるだろ？」

「手強い、って事でしょ？」

「違うねえ、そういうのは怖いのだよ」

「怖い？」

話しながらわざとらしく震えた口達者、両手で両肩を抱いてブルブルと、少し前に竹林で出会った狼女がしていたような仕草をしてみせる。まるでその場を見ていたかのような真似で、実は逃げていなかったのかと思えるほどだが、この兎詐欺は実際に逃げ切っていた。

これは従える兎から聞いた話を元に再現し、見せているだけだ、体も、フカフカな耳までプルプルと揺らしあの狼は怖かった、そうとられそうなジェスチャーを続ける兎。しかし、伝えたい相手というのは狼女ではなく、その場にいたもう一人の事らしい。

「連れ合いがいれば互いにカバーしたりするもんだらう？ それが一  
人なら？」

「隙ができ……」

「これだから軍人さんは、セオリー通りに考え過ぎだ、頭が硬いウサ」  
「余計な事はいいから、何が言いたいの？」

「一人って事は自分以外気にかけないで済むって事さ、それにアレが  
あたしの知っている話通りの妖怪なら、仕留め……」

語る途中で揺れるうさ耳、今度は揺らしたわけではない。語る側の耳も、聞いている側の耳もしたたかに揺れている事から、この屋敷自体が僅かに揺れ動いているとわかる。

住まう主の力を受けて外部とは切り離されているこの屋敷、本来な

らば不変の屋敷となっていて揺れる事などは有り得ない。そうした変化を感じ、おやおやと笑う年長の兎と、真っ赤な警戒色を瞳に宿す若い軍人兎。

「振動?……まさか、侵入者?　ここを揺らすなんてどうやって……」  
浮かんだ疑問を口にした鈴仙だったが、言い切る前に走り始めた。侵入する為の手段を考えている暇はない、済んでしまった事は取り戻せない、そんな思考回路が動き前傾姿勢で屋敷の正面へと駆けていく。

その背を眺めるもう一人は、再度微笑み、悪態をつく。

「だから気張り過ぎだつてのに、月産まれつてのは面倒な事ばかり背負い込んでしょうがないウサ……お師匠様もそうは思わないかい?」

先に動いた元月の尖兵を評する、地上の兎の纏め役。

一人になったというのに誰かに向かって話しかける、すると返ってくる言葉。

「一枚噛んだのだから貴女も働きなさい、てゐ」

空に浮かぶ月のように美しく、輝きを放つような声ではあるが感情をまるで感じさせない声色でてゐに語りかける女。

口ぶりは穏やかな雰囲気だが、この口調に込められたモノは脅しや命令に近いモノで、有無を言わずに他者を納得させる凄みが含まれていた……けれど、相対する兎は慣れたもので、その意図に気づきながらも動かず、それどころか軽口を返していく。

「斥候は務めたし、知っている事も大体話したわ。これ以上何をしろつてのさ?　戦えつてのなら簡便よ?　あたしやただの兎さんで、か弱いんだから」

あんたらとは違ってね、と、続く言葉は言わずとも伝わったようで、そちら方面では期待していないから大丈夫、なんて返事がてゐの耳に届いた。それならばそれ以外ではまだ期待されているのか、話す事などもう残っていない、そんな顔で師匠と呼ぶ女、八意永琳の顔を見上げる。

「聞き足りないって顔をしてるよ、話し足りない事なんてあったかい

？」

「竹林で見たあの妖怪達の事よ、他の連中の事は聞いたけれど、アレらについての報告はなかったわね。あの者達は何者だったの？」

「ああ、影狼達の事か」

「名などは省略しても構わないわ、私が知りたいのは何故話さずに隠したままだったのかという部分よ。この地の者が竹林に踏み込んだら報告しろと、私は伝えたのだけれど？」

静かに問う永琳。

何故隠蔽していたのか、隠していた内容自体は気にかげず、その部分を問いかける。中身については、イマイチ信用し切ってはいないてゐるの動きを読み、自身が自ら動くことで確認する事は出来ていた為どうとも思っていないかった。

あの場にいた二人の内一人、報告になかった狼女の方は虫の息で深手を負わされてもいた。それでも妖怪で、月の眷属といえる狼女なら少しすれば動けるようにはなるだろうが、本来獲物であるはずの羊に追いやられ、瞳に涙を浮かべるほどの状態ともなれば内面での復活はないだろう。

残るもう一人、嬉々と隙だらけでいたところを撃ち抜いて絶命せしめた相手の方も、アレが誰だったのかとは聞かない、自身がトドメを刺した相手だ、終わった相手の事まで思案するほど今晚は暇ではなかった。

「そうだね、そう聞いているよ。だから言わなかったってだけウサ。影狼は元々竹林にいる、もう一人はこの地の者ではなくなっちゃったって話だよ」

「貴女にしては齒切れの悪い言い方ね、まるで知らない相手だと言いたいみたい」

「実際詳しくないからね、厄介者だつて事だけ知ってるわ」

「厄介者ね、どう厄介だったのかしら？」

「なに、やたらねちっこいって聞いててね、師匠達みたいにしっこ……」

会話の最中に感じる再度の揺れ。



てゐるの耳が僅かに動く程度の小さな物だが、永遠に変わるはずのない屋敷が二度も揺れ動いた事で、話していた二人の顔色が変わる。人間は触れれば指がひりついてしまいそんな表情を見せてから、屋敷の奥へと消えていった。

残された兎も、珍しく真剣さを瞳に宿して駆ける、向かう先はもう一人の兎が進んでいった方向、永遠亭の正面玄関。少し前に駆けていったもう一人の兎を、思い詰め過ぎて夜明けの晩にドジを踏むなよ、と普段は見せない老婆心を覗かせながら、攻め入られ、今や逃げ場のなくなった鳥籠のような屋敷の中を走った。

## 第六十二話 狂気の瞳に宿すもの

ミシリ、鳴るのは廊下の板。

一点に体重の掛かるハイヒールに踏まれ、先程から軋む音を鳴らされてる床。どこまで続いていそうな永い永い廊下に、点々と続く赤い染み。ソレを追い掛け視点を上げると先で佇むは侵入者。片手にはポタポタと赤い液体を垂らすスコップを、もう片手には兎の付け耳を着けられた妖精だったモノが握られている。一人先行し屋敷の奥へと進む黒い羊、先程から襲ってくる妖精達を処理しつつ、いつかは到着するだろう薬品の匂いの大元へと向かい進んでいる。

「拍子抜けもいいところ、これでは冷め切ってしまいそうです」

持っていた四肢のないモノを放る、クチャリ、音を立てて転がるソレ。

わざとらしく前に放り、わざとらしくソレを踏み抜くアイギス。

もう息のなかったような相手からは何も届かず、それもまたつまらないと言わんばかりに踏み抜いた足を軽く捻った。爆ぜて霧散する妖精、サラサラと身体を消していき、一回休みに入っていくと、同胞がやられた仕返しに来たらしい、他の妖精が弾幕を放ち始めた。

「妖精といえど綺麗なものですね、お付き合いですくないのが残念なくらい」

放たれる青や赤の球体、暗い廊下を彩る弾幕が黒い悪魔に降り注ぐ。

けれど当たる前に指を鳴らし、場合によっては手をかぎして、近寄るそばから穿ち、消していくアイギス。近間にいる相手に向かって駆けては掴み、握り、稀に獲物で叩き切る。

一体仕留めては次、次、次。

少しずつ数を減らし、廊下を埋めていく弾の膜が薄くなっていく中を、馳せる。

最早戦いではなく処理に近い動きで敵対者に迫ると、弾幕を放ちながら後退していくうさ耳妖精。撃つても撃つても止まらない相手、弾幕ごっこだというのに被弾しても止まってくれない羊が、時偶に腹の

辺りを撫で擦りながら逃げる妖精の後を追う。

逃げ遅れた一人、最後まで弾幕をバラ撒いていた妖精に向かつて微笑みながら右手を伸ばす……が、その手は触れずに床を転がった。

手首から先を弾き、断ったのは弾丸。

赤い閃光を引いて、暗がりには線引く弾丸が、アイギスの右手を奪い背後へと抜けていった。

「一射目ヒット……右腕部損傷、確認………続き、二射目」

侵入者の腕を断ち切った者が呟く。

誰にも聞こえない音量、己にのみ聞こえればいくらかの呟きを一人静かに吐き捨てる。

永く続く廊下の先、何も見えないような暗闇の床に寝そべり、右手を真つ直ぐに伸ばしている者が、左手を右腕の肘に当て、狙う。

闇に目立つ、紅く発光する瞳を薄く開いて、遠くに見える黒いシルエットに向かい、人差し指を突き付け中心に捉えると、第一関節から折っている中指の第二関節を折り曲げて、トリガーを引いた。発射とともに迫る銃弾、初速から敵対者まで変わらない速度で飛んでいくソレが、狙い定めた相手の額を突き抜ける……前に携えているスコップの腹で弾かれ、脇の襖を抜いていった。

「二射目は防がれた……ターゲット……移動開始、真つ直ぐにこちらへ来る、か」

確認するよう、己に確認させるように語る妖怪。

長距離狙撃から索敵・分析など観測手役までを一人でこなした名狙撃手が場況判断を行い、今取れる最善の行動をしようと静かに寝転んだまま横に転がると、その勢いを利用して襖を抜いて立ち、走り出す。わざとらしい足音を立てて進む兎、輝く瞳もわざと見せて、自分はこちらだと侵入者を釣り出すような動きで屋敷の何処かへ姿を晦ました。

「姿は見られませんでしたが、お誘いが下手な御方のようですね……そうちらつかせなくとも、追う事に変わりないというのに」

あからさまに罠だと知れる動きを見せた元軍人、その姿は確認出来なかったが、立てられた音はしかと聞いている元棺桶職人。

兎が引いた方向、屋敷の奥からは左に逸れた廊下の何処かを睨み、落とされた腕を回収せずに、軽く蹴って向きを変えただけ。そうしてから新たに腕を生やし、奥と兎の進んだ方向を見比べる。

「さて、奥からも匂いますが、今し方引いた御方からも臭います……果たしてどちらが本命なのか。考えても埒が明きませんし、まずは近場から明け放つて参りましょうか」

少し冷えたが未だ饒舌、つまりはまだまだご機嫌斜め。

横取りされた恨み、晴らさしておくべきか、そんな心情で兎の消えた先へと動き始めるアイギスが、指を鳴らしてカツカツ進む。

月も星も出ていなくとも見えるはずの暗がりが見えない、それならばここには何かがあると、ソレを穿ち掘り抜いて。数枚の襖を開けても続く同じような部屋、それならばここにも何かがあると穿ち、掘り返して。

そうして用意された罠も気が付かぬまま、何もなかった状態にしてゆっくりと獲物を追う。

その最中、仕掛けたモノが反応しない事に気が付いた相手が、三度目の射線を描く。

アイギスが進む先で待ち構えていた屋敷の兎妖怪、鈴仙・優曇華院・イナバ。

発射した弾丸がアイギスの右足を撃ち抜き、そのまま突き抜けていったのを確認し、再度の場況確認、見たままを述べようと薄めていた瞳を開き、場を読むが……

「三射目ヒット……右大腿部貫通……ターゲット沈……黙？」

見ている相手は確かに右足を失っている。

だというのに倒れない、単純にスコップを支えに立っているだけ、そのはずだが、姿を捉えた鈴仙にはそうは見えていないらしい。

「なんで倒れないの？ 痛く、怖くないの？」

放っておけば倒れる、妖怪がこれくらいで死に至るのかはわからないうが瀕死か、出血多量からの麻痺くらいにはなるだろう、経験則から相手の侵攻を止めるだけなら四肢のひとつふたつを落とせば十分。そんな判断を下し、動いていた軍人兎だったようだが、読みは外れ、退

治する相手は倒れないどころか打ち抜かれた事すら気にせず、啜い、語る。

「何故と申されましても、この程度ではまだまだ足り得ないのでですよ、兎さん」

松葉杖代わりのスコップを持ち上げ挿し直して、床に突き立てながら足を戻す。

語った言葉の意味を見て分かるように示し、このくらいではまだまだ止まれないと、視線をアイギス一点に止めてしまった鈴仙に語りかける。一瞬だけ沸き立った黒い瘴気が晴れ、何事もない姿に戻った羊が見られると、言葉ではなく銃口である指先を相手に向け、構える兎。「沈黙、ですか。私からは聞きたい事がございますのに、こういった会話にはお付き合ひして下さらないようですね」

突き付けられている指に向かい、自身も合わせた指を突き付ける。妖精達に邪魔をされながらもたどり着いた相手、自身の獲物を横取りしてくれた匂いと同じ匂いを身に纏う相手に向かって啜いかけ、相手が動き出す前にその指を打ち鳴らした。

音と共に穿たれて消える鈴仙、語る舌は持たないと見せてくれた相手であればこれ以上構う必要もない、追いかけるべき匂いの原因はまでもう一人はいる。であればここで遊んでいるよりもそちらへと、そうした思考の元に打ち鳴らされた指。

その指が、消えたはずの相手が放つ銃弾に打ち抜かれ、左手首ごと弾き飛ばされた。

「消えた?・・・いえ、また見えないような状態にされているだけでしょうか?」

飛ばされた手首を眺め、戻し、ポツリ呟く。

今のアイギスに鈴仙の姿は捉えきれていない、それも致し方無い事だった。

彼女は既に鈴仙の能力下にあったのだ、鈴仙が二射目を済ませ移動を開始した際に見せた瞳、あれは釣るための餌であると同時に、自身の能力を発動させる為の準備動作でもあった。

この月兎が持ち得る『物の波長を操る能力』の力により、今の彼女

はアイギスとは存在している位相がズレている。攻める一瞬だけは位相を揃えねばダメージを与えられない為姿を見せ、それ故居場所を嗅ぎつけられているが、気づかれ攻め落とされる前に再度位相をズらす事で、アイギスからの攻撃を実質無効化していた。

消えては現れ、一方的に攻撃を放つ兎。

こうして一方的に責め立てられるのは好まない、が、それでも焦りは見せないアイギス。弾の飛んできた方に向かっては、右手に持ったスコップを振り上げ駆け出す。一見する限りは何もない空間、それでも攻撃が放たれただろう場所に向かって走り、その周囲の床ごと叩き割る勢いで獲物を叩きつける。弾け飛ぶ床板、壁や天上に向かって大小の木片が飛び刺さる。当然爆心地にいる悪魔の身体にも多少は刺さるが、多少の切り傷程度は怪我のうちにも入らず、そのまま勢いが衰えることなく、辺り構わず破壊の限りに逸る。

そうした最中に飛んで来る兎の弾丸。

振り上げられている右腕を狙い発射されたそれは、腕には当たらずに、動き続けるアイギスの角に弾かれ霧散した。

「次はそちらですか？ どういったお力なのか存じ上げませんが、一瞬だけ見えたり消えてしまったりして、お忙しい御方ですね。何故貴女様が見えないのか気にはなりますが、お話しては頂けないようですし、このまま捜し物を続けると致しましょう」

口を開いている間にも飛び交う弾丸と、僅かな瞬間だけ見える姿と匂いを頼りに走る黒羊。

このままやり合っているのは埒が明かないように思える争い、だったが、この均衡は少しずつ崩れていく、そして、先に崩れたのは優勢に見える兎であった。

——おかし——

ズレた位相の中眩き、眺む。

ほんの少しだけ攻め手を緩めて、アイギスに叩き割られた床を見る。ここは不変の永遠亭だ、住まう主の力によって永遠の魔法が掛けられた変わらぬの屋敷。だというのに叩き割られた床は戻らず、くつきりとした穴を開けたままで戻らない。

これはなんだと考えるが、彼女もアイギス同様相手の能力を知らない。そこにあるのであれば何でも穿ち、掘り起こしてなかつた事にする力を知らない為、今日の前で起こっている事がわからない。けれど他の部分ではわかっている事があった、このまま続けていけば被害は広がるばかりだと、そう理解していた。

——やらせない——

ここは守る、敵も倒す。

それが出来ずして何が軍人か、過去を引き摺ったままだからこそ強く感じる責任感。

実直に思い込む強さ、もう一人の兎にそう評された心のままに、ヒット・アンド・アウェイから一転、攻勢に出る灼眼の少女。気概を変えると得物も変わって、真っ直ぐに伸ばしていた指を畳み、強く握りこむ。

そうして次の手を待つ後手の羊に向かい馳せ、その拳を腹に当て、真っ直ぐに突き上げた。

強い気持ちの宿る瞳で睨み、渾身の力が籠もる拳を振り上げ、撃ち抜く。

それが腹部に触れた事でアイギスも感知するが、鈴仙の拳と自身の身体の間に入って入った悪魔の手も、拳から放たれた無数の散弾により散らされた。

黒羊の腹から背に抜けた、月の魔力がノツた散弾が派手に飛び出す。

羊の血糊と兎の力が廊下にばら撒かれる。

そうしてアイギスの背を爆ぜさせて、土手つ腹には大きな風穴を開ける。

迷いのない一手を撃った手、勝負を決めた震える右手。返り血を浴びたその手を左手で包み、次の相手はと思考を切り替えかけた時……仕留めたと確信したその時に、包む左手が一つ増えた。

「やっと捕まえました」

ニコリ微笑むアイギス。

腹にデカデカとした穴を穿たれて尚嗤う相手、尚死なない相手。

こいつはなんだ、そう考える鈴仙の頭は一気にブレて床で跳ねる。握られた手を振られ、全身を床に向かって打ちつけられたのだ。

頭を打ち思考が止まる。

背を打ち、一瞬呼吸が止まる。

そんな中、今がどうなっているのか、どうされているのか、息が止められた事で怯み、回らない頭で考えこむ鈴仙だったが、強い衝撃を再度身に覚えるとすぐに思考を取り戻す。てゐが言いかけたのはコレだったのかと、仕留めたと意識を入れ替えた、油断した瞬間が怖いという事だったのかと一瞬で理解した。が、その結論に至るのは少し遅かったようだ。

鈴仙の頭が床で跳ね、身体が壁で跳ね返る。

派手な音を立て打たれる。

打楽器のように叩きつけられる。

ソレが続く。

止まらない。

止められない。

抗おうにも両手は未だに掴まれたままで使いものにならない。

足は振り回されて、壁や敵を蹴るところではない。

頭を打つ度にブレる思考と意識、背や腹を打ち付けられる度に止まる呼吸。

延々とそれが続く。

すつかりと静まる兔、息はあるが呼吸は途切れ途切れ。

意識はあるが、思考回路までも途切れ途切れという状態。

腕も足もだらしなく伸ばすだけ。

そうやって、やっとアイギスの動きが止まる。

「静かになって頂いたところで、さて、美しい兔さん。少しお答え頂きたいのですが、貴女と同じ匂いを纏う者はどちら様で、何処にいらつしやるのでしょうか？　ここでお話くださればこれ以上は致しません  
が、あまり強情だと別の方法に切り替えてでも聞く事になりますよ？」

左手で握る部分を拳から頭に変えて、長い紫の髪と耳を雑に纏め、



右手は頬に添えて問う。

憎き横取り相手、こちらの兎も面白い搦め手を仕掛けてくる相手ではあったが、竹林で横取りしてくれてアレはもつと冷たい、躊躇のない者だった、そのはずだと脳裏に浮かべて問いかける。

それでも何の返事もない、意識でも飛んだのかと右手の爪で唇の端を薄く裂いてみる悪魔。ピクリと揺れる口の端、そうして垂れる赤い一筋、ソレを舐め取り嗤ってから再度問う黒羊。

「話せませんか？ やり過ぎてしまいましたか？ それとも兎らしく別の方法にご期待頂いているという事でしょうか？ どのようなのです？ 意識はあるようですし領くなり、視線で知らせてくれるなりすると……」

止まらない脅し、饒舌に述べながら鈴仙の顔を眼前に持ち上げる。似ているがもつとドス黒い灼眼に光を灯し、視線を重ねて聴き込んでいくが、鈴仙の瞳に僅かな明かりが灯ると、その口は途端に押し黙ってしまった。

アイギスがベラベラと語っている間に少しは回復したらしい鈴仙、彼女も戦場に身を置いていたものだ、こうした、よく言えば取り調べに近い事は訓練でも実戦でも経験しており、多少は慣れていたようだ。それ故今のよう目が合うのを、チャンスが来るのをじつと耐え待っていた。

兎の瞳に宿るは明かり、ソレは能力の一部にある狂気。

相手の感情にある波長を弄び、感情の揺れ幅を好きにいじれるというもので、今はどうかこの場を逃れる為に加減を忘れ、気をどうするか指定もせずに放つたらしい。

ドサリ、落とされる兎。

そうしてから動きの見られなくなったアイギス、これは気でも長くなつて穏やかになつたのか、それも取れるがそうではなかった。

落ちた兎が逃げようと少し動く、その瞬間に蹴り上げられ、奥の襖をぶち抜いて消えた。

能力が効かなかつたのか、などという事はない。

今の彼女は間違いなく鈴仙の術中にあつた、ただかかり方が少しば

かりマズイ方向だったただけだ……気が伸びたのではなく逆、短気を通り越して一時の狂気に染まっただけだ。

先の行動も目に付くモノを攻撃しただけだ。今の彼女の瞳の中で動く相手は全て敵、自身の獲物を横取りする恨むべき敵だ、そのように認識するようになっていただけ、単純である。

自身が蹴り飛ばしたせいで手にかけるべき相手がその場からいなくなる、そうわかると動くアイギス。何処まで飛んだのかわからない鈴仙を追うように、暗い奥へとつま先を向けるが、放たれる反時計回りに翔ぶの弾幕と、やたらと赤い多量の弾幕に視界と聴覚を奪われて歩みを止めた。

そうしている間に回収される鈴仙、その瞬間に恨めしい匂いが強まるが、視界に続いて聴覚まで奪われては追うに負えず、飛んでくる弾幕に向かって指を鳴らすだけとなった穿孔の黒羊。眩む瞳と痛む耳が戻ると、奥には進まず入り口へ、入ってきた方向に向かって歩いていく。

これも単純で、どこまで続くかわからない奥へと行くよりも、戻れば誰かがいるのを知っているからだ。廊下を滑っていった兎が誰かに回収され、いなくなった事で戻る理由は更に強まり、カツカツと歩く。

虚ろな瞳を暗闇に輝かせ、笑みだけは変わらない矛盾した姿で、一人静かに後ろへと進む。

く 黒羊反芻中く

自身が描いた赤、妖精だった赤色をバックに、少し戻った辺りで出会った相手。

それは胡散臭い友人でもその連れ合いでもない、かつて推薦した相手でも、いつかは手合わせしたいと考えている人形遣いでもなかった。

彼女達はアイギスに続いて屋敷に押し入り今頃は何処か別の廊下を迷っている、そうして今出会うのは……それぞれが争い多少の差はあれども消耗している四人。

紫とは別の友人とその従者、そして抱きしめるべき相手とそのお抱

えであった。

## 第六十三話 求め彷徨う旅人 く上く

静かな屋敷での小競り合い。

先立って一人侵入した羊、彼女が兎に問いかけていた時間帯。

丁度そのくらいの時刻に、少し遅れて屋敷に侵入した四人。

先頭を進むのは一番小さな体軀をしながら、一番態度の大きな少女。和風な作りの屋敷にはそぐわない洒落たドレスを身に纏い、自身の背丈よりも広く大きい皮膜の翼を広げ、現れるうさ耳妖精に向かい魔力を放ち雑魚達を落としていく。

その後続くのは先頭のお嬢様に仕えるメイド。

こちらの者も格好は景色に似合わないが、立ち振舞は心から仕える士族のような姿勢が感じられ、列の先頭よりはまだ見られる姿で、撃ち漏らしのカバーに回っている。

眼光の鋭いメイドの隣には、眼力では少し劣ってしまうが、背負う獲物の鋭さや動きの機敏さでは負けにくいくらいの少女がいる。あちこちに目配せしながら、後に続く者に向かう流れ弾を一刀のもとに切って捨てるを繰り返す。

そんな三者の後に続くのは、一人だけ少し遅れて進み、前を行く三人全員を視界に捉えて動く亡霊の姫。張り詰めたモノが感じられる前者達とは違って、一人だけ緩い雰囲気を纏い、その空気に似た蝶々を一羽二羽放つてはゞの弾幕としていくお姫様が、ポツリと呟いた。「中々追いつけないわねえ」

誰に、と問われればきつと先にいるはずのお友達にだろう。

別ルートで進み、誰かの残した右腕を見つけ奥を指している友人の事を案じる。今頃は先に争って、戦う前から薄汚れている月の兎が気付く薬漬けとなり対峙してるはずの誰かを思う。

だが、そんな事は口には出さず、抽象的なままで語る亡霊姫、西行寺幽々子。

アチラを心配するよりは今この場にいる若手三人を見ている事に忙しいらしい。

妖夢一人のカバーならなんという事もないが、他の二人は慣れない

相手だ、従者の方は姿を見た事がある気がするが、主の方は今日が初対面である為、どういった手合なのか読み切れておらず、カバーするにも撃ち漏らしを殺す程度で留めていた。

「幽々子様が真面目に戦って下さればもう少し早く来れたのに」

「さっさとやられてくれても早く済んだ気がするわよ」

三人の背中に向かって投げ掛けられた言葉であったが、返事は仕える者達からしか返ってこない。仕える主の言葉に対し先にぼやいたのは魂魄妖夢、そんなぼやきに対して、早く動きたかったのならさっさと負ければよかったのに、と返す十六夜咲夜。ここに至る前に起きた四人での弾幕ごっこの事をネタに返しつつ、雑魚妖精には弾幕を返していく二人。

互いに一言ずつ口になると、咲夜は左腿のキャットギターで光るナイフに、妖夢は背負う一刀の柄に、と、それぞれが自身の愛用する獲物に手を伸ばす。

そんな姿を見比べて一人微笑む最後尾。

「そうやってすぐにいがみ合うから先に進めないのよねえ、困るわあ」  
厭味のない笑い顔で二人に対して言い切る幽々子。

語る内容は顔とは真逆で皮肉めいたものとしか聞き取れないものではあったが、そこにはまるで気が付いていないような、毒気の抜け切った顔を見せる。

着ている和服のような着物はこの屋敷に一番似合うというのに、纏う雰囲気は四人の中で一番似合わない物、異変の最中だというのに真面目さが全く感じられない空気。

その空気に耐えかねたのか、先頭で静かにふんぞり返っていたお嬢様が動きを見せた。

が、動いたと言うよりは止まったに近いか。

正面。

真つ暗な廊下の奥。

そこに佇む見慣れた相手を見つけ、声を掛ける前に異変に気が付いて、一瞬でふざけていた気分から真剣なやる気、殺気混じりのモノにアテられて、思わず立ち止まってしまった。

「あれは……」

よく知る相手、先の隙間戦では介入し、割って入ってきた相手がそこにはいた。

道中に見られた赤い染み、弾幕ごっこではあまり嗅げないはずの匂いを纏う姿で佇む黒羊。レミアアの声を耳にすると、おぼろげな瞳に光を灯して、嗤った。

「アイ……」

飛行速度を少し上げ近寄ろうとしたレミアアだったが、羽ばたかせる為の翼は断ち切られた。

引きずるように手にしていたアイギスのスコップが放られて、中程から切り分けたのだ。

不意になくなった翼、グラリ、傾く吸血鬼の身体。

唐突過ぎてなにかあったかわからないが、落ちる最中で考える。

古くから知っている羊から攻撃された。それは当然わかる。

けれど、問答無用で落とされたのは何故か？

嗤ったまま、竹林で藍に見せたような笑顔のまままで攻撃されたのは何故か？

それらに引っかけり廊下の床を舐める寸前にまで落下していたレミアアを支え、翔ぶのは従者。

「お嬢様、油断召されてはなりません」

左の腕で主を支え、右の指で挟んでいた銀のナイフを数本飛ばす咲夜。

それら全てが再度手にしていたスコップに弾かれ、床に転がる。

キンキンと剣戟に近い音が響くと、もう一人の従者も長い刀に手を構える。

「お前達、何を……」

「何、とは？ 見知った方ではありませんが異変の場でお会いして、攻撃されたのですよ？」

「その通り、なんで攻撃されたのかはわかりませんがそこは……斬つて知ります」

どうやら思考の切り替えは従者組の方が早かったらしい、二人とも

守るべき相手がすぐ近くにいるからか、攻撃された瞬間から視線を変えてアイギスを見る。

普段覚える恐れも忘れ、青い瞳を僅かに赤らめさせる咲夜。手合わせの時のそれよりも冷たく、今構える楼観剣の切っ先にも負けない冷えた視線でアイギスを貫く妖夢。

少女二人の見せた戦闘態勢、それを眺めて致し方なしと、断ち切られた翼を修復し槍を構えたレミリア、一瞬で姿を戻した事から操られた境界も既に元に戻っているらしい。

若手三人がやる気を露わにすると、最後尾のお姫様が調子に乗って指揮を執る。

畳んでいる扇を平手で軽く打ち鳴らし、それから敵対者、戦闘態勢の三者を見つめて嗤うアイギスに向けて指し、薄紅色のレーザーを放った。

キツカケが宙を奔ると動き始める少女達。

「いぎー」

主の上げた狼煙に続き、先陣を切ったのは妖夢。

スペルカードを取り出して、宣言するとすぐに姿を消した。

——人符『現世斬』

一瞬であれば天狗よりも早い、どこぞの烏天狗にそう言わしめた速度で迫り、低い姿勢から水平に薙ぐが……いつ抜き放ったのかわからない、美しい桜の剣閃だけが見えるその居合は片腕を犠牲に止められる。

左腕の先から二の腕までを裂き、止まってしまう楼観剣。

ダラダラと垂れ流れるのもわからないのか、血を流す血管が浮き出すほどの力が裂かれた腕に込められ、食い込んだ位置から引きも押しももしくなつた刀。

「避けない!?!…なんで!?!」

切れぬものなどあんまりない剣術で断ち切れない上に避けられもしなかった、その事に憤り、思わず妖夢の声が漏れる。その声を耳にして嗤うアイギス、捉えきれないなら向こうから来るのを待つ、ただそれだけの事をして結果読み通り捕まえられた、そうして新たな獲物

が手元に来てくれた事に喜び、嘲笑う。

声の漏れない表情だけの笑いを見て、現時点で楼観剣をどうにかするのは諦めた妖夢。ならば、と、もう一刀に手を伸ばすが、手合わせでもない場で退治する相手が間合いにいる最中なのだ、アイギスが待つてくれる事などはない。白楼剣が抜かれる前に掲げ上げられたスコップが真っ直ぐに振り下ろされる。

耳に痛い音が周囲にこだまする、抜き放つ事は叶わなかったが、刀身を半分ほど引き抜けた白楼剣がスコップを受け、その金属音が場を搔き鳴らす。

「ぐ、ぬ…：：：厳し…：：：」

両者の獲物に力が込められる。

数秒は拮抗してみせたが、ろくに保たずに膝を折り始める剣士。

多少の加減をしていた暇稽古つぶしなら兎も角、今のアイギスは術中に落ちたままの状態だ、言うなれば箍のない吹っ切れてしまったような状態。そんな相手の押し合いに付き合えるほどこの半分幽霊はたくましくはなかった。

みるみると折りたたまれる妖夢、跳ね除ける事も、その場から脱する事も出来なくなり、後は押し切られるだけとなると、横槍が入ってきた。

「上出来だ、魂魄妖夢」

割って入ったのはレミリア、灼灼とした赤を左手にし、大きく振りかぶった。

——悪魔『レミアアストレッチ』

考えただけで今はまだスペルカードとしては用意していないけれど、足を止めている相手に対して放つのなら絶好だと、長いタメの後、その手を大きく薙ぎ払う。

妖夢が起こした音よりも数段喧しい衝突音が鳴り響き、アイギスを刻んだ音にしては大きすぎる音が暗い廊下を通り過ぎていく。

それは羊の角と悪魔の爪の衝突音。

アイギス相手に長期戦は不利、ならば早々に決着を、それこそエレガントさを捨てても。と、溜め込んだ魔力に勢いを乗せた爪を奔ら



せるが、角を欠けさせただけで安々と弾かれ、衝撃から身体を大きく開いてしまう。そこに飛ばされるのもまたアイギスの角、一瞬にして数本が現れ、回る。

空気を裂く金切声が響くスコップが、弾かれた吸血鬼に向かって放たれる。後退しながらソレをさばくレミリアだったが、その爪は回転する刃を弾く度に欠け、折れていく。こちらもアイギス相手に本気の戦いなどはした事がない。手合わせと称して稽古をつけてくれていた頃はどれほど加減されていたのか、それがすぐに理解出来るくらいの勢いで月夜にある吸血鬼の爪を折り、捌ききれなくなったレミリアを両断する。

「お嬢様!？」

真つ二つの主に寄り添い、時を止めて一度離れる咲夜。

また獲物が奪われる、それはたまったものではないとアイギスが追う姿勢を見せたが、意識がレミリアに向いたからか、妖夢の受けるスコップに僅かに緩みが生まれた。

ソコを逃しはしない剣士。

——転生剣『円心流転斬』

視線を外したアイギスを見上げて妖夢の二枚目のスペル宣言。

宣言後、低い体制のまままで白楼剣を更に低く構える、そしてその位置から円軌道を描いて切り上げる、はずであつたが、そのスペルは不発に終わる。

力業で振られたスコップが、妖夢の足元をぶち抜いたのだ。

踏ん張る床が吹き飛ぶ。当然爆心地にいる妖夢にも、アイギスにもその被害は及ぶ。

飛び散る床の破片を避けるように一瞬だけ目を瞑る剣士、隙を突いたはずが立場が逆転する。作ってしまった僅かな隙、その刹那の時間に、破片など気にも留めないアイギスから手酷い一撃が放たれた。左腕を軽く引いて妖夢の身体を寄せる、そうして肉も骨も絶たせた上で捕まえて、腹を蹴り上げそのまま壁に押し付け、めり込ませていく。

深々と刺ささる踵、そこに深い息と逆流してきた胃液を吹きかける

妖夢は見ないまま、別の辺りというか、どこを見ているかわからない、ぼやけた瞳のまま上の空を眺め口を開く。

何も語らないアイギス、二人を相手取り楽しいのか、姿を見せて初めて口から吐き出したのは高らかな笑い声であった。呻吟しんぎんする妖夢の声にミシリと、ナニかが軋む音が混ざると、次には正しく言葉を吐いた。

「逃がさない……私の……」

それは小さな独り言。

両断されたレミアアや、自分の方が騒がしい妖夢には聞こえていない声……ではあったが、主が修復するまでのカバーに回ろうと、銀の短剣を逆手にし、迫っていた咲夜には聞こえていたらしい。屋敷で聞く声色とは違った、何かが混ざったような濁声を耳にしながら、力チリと時計の竜頭ステムを押す。銀時計の蓋、ハンターケースがパカリ開くと訪れる、咲夜一人だけの時間。

「私の……なに？」

一人の世界で僅かな思考。

聞いた言葉は何だったのか？

疑問に近い物言いにも聞き取れたが、それは何故か？

まるで相対する相手が誰かわかっていないかの言い様だが、こうなっている原因までは今の咲夜にはわからない。

思案する間に閉じていく愛用時計のハンターケース、これが閉じ切れば止めた針が動き出す。考えは纏まらなかつたが主の為ここは一且距離を取る、そう結論付けた従者が止まる世界にあらん限りのナイフをバラ巻き、静止する銀世界を敷いた。

同時に咲夜だけの世界が終わる。

「お嬢様、今は御身体を」

時が流れ始めるに同じく、アイギスの姿が黒から銀一色に変わっていく。

その最中、2つに分かたれた主にまずは修復を、と咲夜が促した。それに対し、両断された身体をようやく戻し始め少しだけ縦にズレた唇で、この程度、と、減らず口を吐いているレミアアだったが、屋

敷に入る前にはあのスキマに続いて亡霊姫と争ったのだ、それなりに消耗しているらしく、再度銀時計が開くの見ている事しか出来なかった。

止まった時間の中で放ったナイフを多少回収し、主の背中に取り付くメイド。静止した世界からの帰還と同じタイミングで主の身体を押しつけて、敵対するアイギスには靱やかな足を蹴りこんでいく。狙う先は未だ刺さったままにある楼観剣の柄頭、白い房が汚れるのも気にせず蹴り飛ばし、刀を捻じってアイギスの腕を、身体を捻る。

「う……あ……」

「邪魔だ！ 半人前！」

少し緩み、開放された妖夢が力なく前に揺れる、と、姿を取り戻したレミリアが拾い上げた。

急場の共闘者が主に拾われ、揃って下がっていく音を背中に一人残り攻めるメイド。

回収出来た分のナイフを投げ放ち、暗い空間にナイフの檻を作り上げる。

そうして囲いに追われた羊に向かい、逃げ場を潰してからカードを一枚取り出し、放った。

——傷符『インスクライブレッドソウル』

逆手のナイフを強く握り、軌道がわからないくらいの速度で振り、刻む。

目にも留まらぬ速度で切り刻まれる黒羊、盛大にアチラコチラを切り開かれて褐色よりも赤い部分が多くなる。まるで咲夜が見ていた挿絵の姿、紅魔館での読み聞かせで眺めていた赤い羊の姿が目に見える。そうして思い出すのは挿絵だけではなく、その時語られた内容。

殺さなかつたではなく生かしていた、そんな話の内容と、今の争いの場を思い出す。

相手が終わらない悪魔相手だから気にかけていなかったが、これも一応は弾幕ごっこ。であればキツチリとしたトドメを刺すのは……ましてや相手は主の大事な方で、今は何かおかしな雰囲気でもある。それなら動けない程度に傷つけ時間を稼ぐか、そうして甘さを見せ

た咲夜にしつぺ返しが向けられた。

身を散らしながら動くアイギス。

傷が広がるのも見えないような動きで片腕を上げ、スコップを真っ直ぐに咲夜に向けて切っ先を向ける。ナイフを奔らせた勢いからか、僅かに浮いて、次の手に移る前に一瞬のラグがあるメイドに向かいそのスコップを真っ直ぐに突いた。が、細い身体を翻し突きはどうかか躲される……が、次の手は読めていなかった。

スコップの刃先が左右に開く、いつかフランドールの身体を両断したように、酒場の鋏のように両側に開いて躲した咲夜の身体に伸びていく。

再度懐中時計の竜頭に親指を掛けた咲夜だったが、指が押し切る前にアイギスの指が視界に入る。重なって見える親指と中指、押すのが早いのか、弾かれるのが早いか、悩んでいる間に四色の蝶の群れが羊の身体を押し流した。

群れの放たれた方向へ引いていくメイド、扇を開き口元に添えている幽々子と合流すると、幽々子が片目を素早く瞑り開き、見る相手を変えた。

広い廊下の一角を埋めた蝶の群れが、乾いた指の音と共にかき消される。

その音の奥から現れるのは当然アイギス、妖夢に裂かれた腕や、咲夜に刻まれた傷口から血と瘴気を漏らし、それでも倒れずに立ったままの彼女が幽々子の目に映る。

「聞いてはいたけど、本当にタフなのね……参るわ」

賞賛ではなく呆れ、妖忌や妖夢との手合わせを何度となく見ていた西行寺のお姫様だったが、実戦でアイギスと睨み合うのはこれが初めてだ。紫や藍からは愚直で真っ直ぐ、そしてやたらとタフで頼りになる、そうは聞いていたけれど、いざ敵対するとそのタフさが厄介だと呆れ、気を入れ替えた。

今迄見せなかった真剣な表情、亡霊らしい冷えきった顔で、友人であるアイギスを睨む。と、傷を戻しきれていないアイギスが何かを口にする。

「……邪魔……何の邪魔を……奪われ……奪ったのは……ダレ？」

ブツブツと、焦点の合わさらない目で呟く悪魔。

反魂の蝶に蹂躪され、身体の部分部分に終わりを迎えているアイギスが、ダレに対してなのかわからない事を口にして、頭も体も歪に傾いたままで、最後に話したダレカの姿を探す。

先ほど両断した者。その後すぐに修復し槍を構え直した者。

血の色をしたエモノを片手に、腹を抑えて苦痛に顔を歪ませた、アイギスの獲物を抱えたままのレミリアを正面に捉える。

——奪ったのはアレ——

——憎むべき敵はアレ——

何かを口にしては完全に死んだ左腕を強引に引き抜き、襖や壁に赤い放物線を描く黒羊。

断ち切った部分からは黒い瘴気を垂れ流し、それを纏っては少しずつ腕や欠けた角を戻して、目の前にいる相手を見つめた。

——この匂いは、あの槍は——

——今、目の前にいるのは——

——あの姿は……

言葉にならない声、読唇術が使える者でも読み取れないくらいにしか動かされなかった口で言った言葉、それを吐き捨て失った部位を取り戻すとふらつくアイギス、重たい角が戻ったからか、頭も体も揺らして佇む。

普段であればこの程度なんという事はない、障害にもならない程度であるが、今ばかりはいつも以上に復元能力が低い状態にあった。それもそのはずだ、こうしてくれた相手は死を操る幽々子だ。終われない悪魔に対して放った反魂蝶、それに宿るのは全てを等しく終わらせる力。

何度死んでも蘇る相手、一見する限り生死の堺がないようなアイギス相手であろうと、この場において生きている者、生命活動をしている生き物であれば、幽々子の能力は有無を言わずにソレを殺す。

それでも死なず未だ健在なのは、死にもせず生きもしまま彷徨う矛盾を内包した存在故だろう。そんな矛盾した悪魔が愛すべき者

を傾いだ視界に入れ、足りない何かを求めるように狭い廊下を彷徨い歩く。

「どうした？ 何を言っている？」

立ち止まるアイギスに向かって問いながら、片手に持った荷物を投げけるレミリア。

放られた荷物が漂う半身に回収されると、幼さの残る瞳を細め、別のナニカを見ているアイギスに問う。

今し方漏らした独白はしっかりと聞こえた、奪ったとはなんだ、目の前にいるのが誰なのか、と、言われた事に対して問い返すが、アイギスからの返事はない。

出合い頭の攻撃からして明らかにおかしい。手ほどきではない、実戦で彼女と退治する事はレミリアも初体験ではある、が、今のアイギスには妙な違和感を覚えて仕方がなかった。

そして、それは亡霊の友人も感じていたようだ、レミリアの呟きに答えるように、扇の奥から言葉が返ってきた。

「今日は無口ね、何か嫌な事でもあったのかしら？」

幽々子の口から一言漏れる、レミリアの感じている違和感もこれであつた。

一度始まった争い、だというのにあまりにも静か、あまりにも消極的なアイギスがレミリアにもおかしな状態にあると写っていたようだ。先程の幽々子の物言いも、対峙する黒羊にも聞こえるよう言ったはずなのに何の反応もない。

倒すべき敵、蹂躪しようとする相手であろうと淑やかに笑み、会話を返すのがレミリアの知るアイギスだ、だというのに今の彼女は何も言っていない。いや、語るどころか、何も聞こえていない、見えていないといった状態で近寄る相手に手を伸ばすのみだ。

「気に入らん」

一言吐き捨て現す神鎗、石突きを床に打ち立てて、大きな音を鳴らすと共に、レミリアが胸を張る。小さな身体を精一杯伸ばして、色々と込められた槍を握り締めると、向かってくる相手、今までは守るべき相手としか見てくれなかったが、今現在は自分を見てもくれない相

手に言い切った。

「何があったのか、本人に問おうか」

「お話出来る雰囲気じゃないわよ?」

「亡霊姫の話す通りかと存じますが、お嬢様?」

レミリアが槍を構えると、残る二人も構えて見せた。

けれど、そのナイフや扇の前に真っ赤な槍が突き出され、横槍を入れるなど示される。

「雰囲気など知った事か、私が聞くと言えば聞くんだよ。私に傲慢であれ、不遜であれと言ってくれたのはアイギスだ、ならばそうするだけだ!」

半歩後ろにいる二人の前で、大きな翼を開き、吠える。

小さく鋭い牙を見せ、見慣れない姿でいる羊を睨む。

この変わり様はなんだ?

何かをされた程度でこうまで在り方を変えるなど、らしくない。

誰に対しても我を貫き通すのがお前だろうと、手にした槍を握りこむ。

饒舌に語り、瀟洒に笑んだまま他者を蹂躪していくのがお前だったはずだ、常に変わらぬ姿でいたのに……私にはそう言ってくれたのに、今の己の体たらくぶりはなんだ、この場にながら何処か違うところを見ているような、虚ろに彷徨っているなさけない姿はなんだと、握る神鎗に憤りや怒りを込め、攻める。

「らしくないな! 普段の姿は何処に置き忘れてきた? 貴様は今何処にいる? 誰の前に立っている?」

振られる槍に、言われる問いかけ。

それを受けきるスコップ持ちは無言、そして無心に近い。

心ここにあらずといった様子で、雑に、力業だけで動き払う黒羊。そこには普段の姿はなく、見られるのではないモノを探し求めて彷徨う旅人のような姿だけ。

そんなアイギスの姿がよほど気に入らないらしいレミリア、耳に痛い剣戟音を振るう槍からかき鳴らし、衝撃から飛び散る魔力の火花で目にも痛い閃光が立つ。

赤々としたレミアアの槍と、黒々としたアイギスのスコップから爆ぜるように流れ出す魔力。両者共に本気で殺すつもりで獲物を振るい切り結ぶ、そうした中で一度離れ、飛び立つ吸血鬼。

開いた翼に紅魔の主のプライドを乗せ、携える槍には憤怒を湛えて、全力で宙を奔ると、壁や床から伸びる白い線と化した。他者の入る余地が無い程の動き、咲夜が手を出そうと時を止めても、全周囲に伸びる線として止まってしまいそうな速度で駆けるレミアア。

翻弄し、アイギスの視界からその姿を振り切ったと確信した吸血鬼が頭上、屋敷の天井を強く蹴り、今、迫る。



## 第六十四話 求め彷徨う旅人 　　（中）

訪れる者などいないはずの迷いの竹林、その奥に構えられる日本屋敷、永遠亭。

半刻前くらいまでは世界から切り離されたような静けさしかなかった邸内、聞こえても笹が風でこすれ合う音しかしないようなお屋敷内が、今は随分と騒がしい。が、ここ、屋敷の最奥は未だ静寂に包まれている。

それほど広くはない和室、部屋の隅に詭えられた床の間に何か綺麗な、七色に輝くような盆栽が一鉢飾られているくらいで、それ以外は一箇所だけ空いた月見窓と、焚かれている和の香りだけが部屋の飾りとなっている。かつて屋敷の主が過ごしていた頃の流行り、42種類もの香りから選び自分にあった香りを炊いて、住まいも己も香らせるそれが部屋内に満ちていた。過去の流行りよろしく、ここで焚かれてあるものも数種類が混ざっているが、一番強く鼻に感じられるのは優美な香り。まるでこのお屋敷の主を表現するような、優美さで何もかもを隠してしまう雰囲気、漂う香りからは感じられた。

そういった雅な隠者の香りが満つる和室に、それぞれが佇んでいるだけで装飾となりそうな者二人が座り、語らっていた。

「入られちゃったわね、騒がしくなりそう」

部屋の主らしい位置取りで座る者。

両膝は部屋の正面を向いているが、そのまま仰け反り捻って、床の間に飾られている盆栽に手を伸ばしかけている黒髪の少女、話し相手であるもう一人とは視線を重ねずに語る。

「すぐに排除するわ。何も問題はない」

後ろを向いたままの黒髪、状況から鑑みればあまりにも気楽過ぎる声色に向かって真剣な視線、空を切り裂く<sup>やじり</sup>鍔を思わせる眼差しを向け、問題ないと返す女。その傍らには血で汚れた白衣と、何かを包んだような、白衣よりも少し黒ずんだ赤で濡れる風呂敷包みが見られた。

「ならいいけど、そういえばイナバは大丈夫？　結構な怪我をしたと

聞いてるわよ?」

「それも問題ないわ、今頃は和らいだ痛みを我慢しながら走り回っているはずよ」

「治して、ではないのね」

「和らげて、よ」

語らう二人、その内の艶かしさに満ちる黒髪を目立たせる方が返答を聞いて少し動く。

忘れてと言われ、ソコに対して引つかかったようだ。立ち上がったも床についてしまいそうなほど長い髪をかき分ける。そうして上級の墨も霞む黒の内より美しい顔が垣間見えた。

男が見れば一目で落ちるような、艶やかさと甘美さを備えた女が、軽やかに笑む。

「弟子に対して冷たい言い草なんじゃない? 永琳?」

見えた口元を袖で隠し、その裏からクスリ、漏れる声。

潤んだ瞳を僅かに細め悪戯に嘲笑う美女、声と共に瞳からもどこことなく意地悪さが漏れて見えるが、それすらも彼女の美貌を引き立てる物にしかならないくらい。

差し込む月光を薄く浴びて、宵の輝きを放つ黒髪とお召し物。飾りなどない、必要ないほどに気品立つ女、屋敷の主である蓬萊山輝夜に對して、着衣から匂わせる薬品の匂いを流し言い返す相手、八意永琳。「あの子はそう呼んでくれるけど弟子として取った覚えはないわ、それに、私や輝夜とは違ってあの子は唯の月兔だもの。変に治療するよりも動ける程度に処置するだけがいいのよ、痛みがあれば無理もしないだろうし、陽動程度で動いてくれた方が時間稼ぎにはいいわ」  
「どうせなら麻痺させてあげればよかったのに」

「それでは痛みがわからない、引き時を誤りかねないわ」

入れられた茶々にも淡々と返す永琳。

輝夜、この永遠亭の主である蓬萊山輝夜から言われたように痛みを麻痺させれば和らげるよりも良い動きを見せてくれるだろう、あの元軍人はそうしてくれるくらいに屋敷に對して恩を感じている、それを知っている永琳だったがそうはせずにはいたようだ。

引き時と口にする輝夜が微笑んだ。

例えるなら小さな子どもが親に悪戯をしたような顔、引き際まで考えてあげるくらいに可愛がつているというのにそれでも素直に弟子とは言い切らない、そんな永琳が少し可笑しいらしい。

「……余計な冗談はやめて、取り敢えず貴女は部屋から出ないように」  
聞こえる小さな笑い声を消すように、同じく小さな咳払いをして、話の筋を変えると伝えた師と仰がれる者。

言い切ると荷物を両手それぞれに抱え立ち上がる、が、その背中に声をかけられる。

「変ね、始まる前よりピリピリしてるわ」

長い銀髪を纏めたおさげが揺れた。

輝夜の言葉を受けて思わず止まる。

「想定外が少し、ね」

「その事ね、血腥いけど……なにかしら？」

足を止めた従者が握っている荷物を揺らしてみせた、先に揺れた髪とは別に揺れるソレ。

揺れたからなのか、少しだけ匂いが漏れると、ツンとした鼻先を鳴らし、中身を言い当てるように見つめた輝夜姫。何かに興味を持つと手に入れたくなるのが彼女であり、それは物だけとは限らない、こうなると理解されるまではしつこいと知っている従者、仕方がないといった顔で荷を解き、答えを見せた。

「腕？ イナバの物にしては……」

「侵入者の腕よ、優曇華をあんな風にしてくれた相手の落し物」

「ふうん、そんな物を拾ってきてどうするのよ？」

「気になる事があるのよ」

「気になる事、ねえ。それって興味を持ったという事よね？……珍しい事もあるのね」

楽しげに笑うお姫様。

この地に隠れ住み始めてからこれほど楽しげに笑うことなど数えるくらいしかなかった、一度目は竹林の主と出会い、その性格の悪さを体感したことで楽しげに笑んだ時。そして二度目は月から逃げて

きたという脱走兵を匿うと決めた時だ。

一度目も二度目も、過去の行いから輝夜と自身以外に興味を持たずにいた八意永琳が、珍しく他者を受け入れ引き入れるという事態に出くわす場面となったのだけれど……そういった、ある種人間らしい変化を見せる事が、輝夜には面白く、同時に少し嬉しいものでもあった。

「興味といっても研究対象としてよ？ 研究も0からではなく応用から入れそうだから、それほど難しくもないわ」

「応用……『ソレ』って私達と同じような存在の腕でしょう？ 永琳自身から得られたモノを応用するだけでも？」

輝夜の視線が同居人の顔から手に、開かれている包みへと映る。

一目見たから気がついたのか、感じられる力から感づいたのか、はたまた永琳が興味を持った事からなんとなく察したのか。どれにせよ、その腕の持ち主が自分たちと近い在り方、終わりを迎える事が出来ない存在だという事はわかったようだ。

輝夜からの問いかけに少しだけ感心し、小さく頷いてから返答を述べる、月では頭脳そのものだと言わしめた者。

「確かに近い存在なのだろうけど、正確には私達じゃないわ。どちらかと言えばそう、あの仙霊に近いのよ」

「あの？ ……ああ、しつこく月の都を攻めてきていたあれ？」

「そうよ、何度退けても滅ぼせず、きっと今でも狙っているだろうあの狐さん……この腕から感じるモノは私達蓬莱人よりもあの女に近いわ」

「ふうん、という事はその腕の持ち主も？」

「当然そうだった手合でしょうね。月を離れて随分と経つけれど、今更似た物を相手取るなんて、厄介極まるわ」

それでも何かあるんでしょう、そう言いたげな笑顔の輝夜に、当然だと言わしめん表情を見せ、和室を離れていく永琳。ピシヤリ、襖が閉められると今の今迄過ごしていた部屋が遠くへ、何処までも続いていくような廊下の果てへと消えていく。

物理的に離れたわけではなく、あの兎の能力により波長が乱れそう

見えているだけだが、彼女が健在である限り、死んで能力を解除でもしない限り、その実情を知らぬものは惑わされ続ける事になる。故に師は弟子の引き際を考え、主はその身を心配するような素振りを見せていた。

「在り方が似ているのなら試すにはちょうどいいわね」

血塗れの白衣と包を手に、一人歩く永琳のボヤキ、誰でもない自分に向けての言葉。

指を折りブツブツと、化学式のような、薬品の配列を述べる組成式のような文言を口にし、笑う。その雰囲気からは弟子を処置した医者というよりも研究者、昔から考え試そうとしていた新薬をついに試せる機会を得た事に喜ぶ笑みに思えた。

輝夜に珍しいと評された雰囲気を白衣と共に纏い、歩を進め、自身の私室と呼べるような部屋へと向かう。永い廊下だというに、ろくに歩かずに着いたそこは色様々な薬品が並び部屋。あの黒羊が憎む匂いが充る一室だった。その薬品類が並ぶ棚を眺め、一つ頷くと、鈴仙と共に回収した腕を抱え、数種類の薬品を白衣のポケットに乱雑に詰め込んだ。そうしてそのまま奥へと進む月の頭脳、暗い屋敷の中、更に暗い部屋の奥へと、その薄笑いを溶けこませていった。

く新薬配合中く

静かなる奥屋敷とは別に、正面玄関から繋がる廊下は随分と賑やか。

静寂に包まれていた屋敷の雰囲気を壊した原因、それは3つ。

1つは奥へと進む巫女と賢者のコンビが屋敷の兎と争う音。

激しくばら撒かれる銃弾型の弾幕を緩く避け、お返しと言わんばかりに針を放り返す巫女。

それに続いて、使役する式を操り、主従でのじゅうたん弾幕を放つてカバーに入る賢者。

二人の猛追が激しく、少しずつ下がりがながら、師匠に案じられた身体を、少し無理をして動かし、徹底抗戦の構えを解かない元軍人兎、それらが争う音が響く。

一箇所目の騒乱はそうやって少しずつ動いている、が、それに続く

別の騒ぎは一つ所ところから全く動かなかった。屋敷の奥へと消えていく銃撃戦の音と重なり、消すように、屋敷の別の方から掻き鳴らされる剣戟の音が耳に痛い。

繰り出され、打ち鳴らされる槍撃。

赤々と輝く刃先が迸り、容赦のない勢いで石突きが穿たれる。

無数と言える攻防が争う二人の間で奔り回っていた。

残像が残る程の速度で動く吸血鬼と、それを歪な姿で迎え撃つ黒羊、二人の争いが止まらない。

傷つき戦線から下がった庭師、それを抱え引いたメイド、二人を守るように前線との間に身を置く亡霊の姫が、手を出せずに見守る事しか出来ない状況の中、苛烈に攻める側が動く。

愛用の槍を振り回しては、全力で投擲し、再度成す等、考えられる全ての攻め手を披露していくレミリア。時には身体を霧と化して晦まし死角から詰め寄り、時には実態のまま突貫して攻め抜くも、効いているのかいないのかわからない、臆げで、笑んだままで受け、捌き切って見せるアイギス。そんな二人の争い、本気で仕留める勢いで躍るように戦う者達を、同行する者達が見つめ続ける景色が暫くの間続いていた。

「いつまでも呆けているなよ、アイギス！」

それらの視線を浴びて再度翼を翻す吸血鬼が小さな形なりに似合わぬ声量で叫ぶ。

声と共に槍を放り、その後ろから自身も翔ぶ。

全てを貫き通す勢いを見せる槍がアイギスに迫る。されど何事でもないように静かに、構えているスコップを軽く傾けるだけの羊。二人の得物が一瞬触れ合うと直ぐ様に片方が突き抜けていった。なんという事はない、アイギスが刃先のアールを利用して向かう先を僅かに逸らしたのだ。吸血鬼の全力を受けず、方向を少し変えるだけで安々となかった事にした黒羊、こういった小さく、無駄のない躲し方は単純な場数の差からくるのだろうか。

しかし追隨するレミリアの勢いも死ななかつた。

安々と防がれたレミリアの一撃だったが、追撃してみせるレミリア

は速度を緩めず、表情に焦りの色もないが、その顔は翼によって隠された。対する相手に向かつて一直線に宙を駆け抜け、身体を捻る。大きな翼で身を包むと、激しく回転した。

大きな弾丸、高速できりもみ回転する吸血鬼は最早一つの弾丸と化した。が、それすらもアイギスに受けられてしまう……が、受けたスコップから弾かれる事も、回転を止められる事もないままにレミアがアイギスを押し始め、受け止める相手毎、上昇し続ける。

——夜王『ドラキュラクレイドル』

未だ名付けても、カードを用意してもいない業<sup>わざ</sup>だが、レミアが名付けたとしたならこうなるだろう。全身からぶつかり、受け止められた幼き赤き弾丸がスコップを押ししていく。

相対する黒羊は沈黙したままでそれを受け、押される中で少しずつ身体を斜にずらしていく。力業、普段見せる真正面から蹂躪するような争い方ではなく、無駄のない動きで再度躲そうとするも、そうはさせないレミアが動く標的の芯から外れない。

暫くの拮抗の後、受け続けていた側の得物が限界を迎え、貫かれた。いい加減に目を覚ませ、スコップをぶち抜いた弾丸から衝突音よりも大きな声が発せられる。

怒りと呆れが混ざった少女の叫びが、衝撃とともにアイギスに届く。

届けた先は角、固い羊のアモン角目掛けて一意専心と突き進んだレミア。

空気を震わせる、甲高い振動が辺りに響く。

打たれた頭から吹き飛び、奥の襖を抜いていく黒羊。

立ち上った埃がレミアの螺旋運動に巻かれ大きく渦を巻き、中心部に集まると、尖らせていた、先端の千切れた翼を広げ、空中で静止した吸血鬼に散らされた。

「やった、のでしょうか？」

「あれくらいで仕留め切れるなら、紫が頼りになんてしないわ」

激しく舞い上がった埃が消え、飛び散る屋敷の破片も地に落ちた頃、一部始終を見つめていた咲夜がポツリ呟く。独り言のつもりで

あつたが、同じく隣で眺めていた幽々子からあの程度で終わるはずがないと、全否定の言葉が返された。

それを肯定するように飛んでくる、緋色のスコップ。

空を裂く回転ノコギリが籬の外れた熱量を帯び、赤さよりも白さが目立つ状態となつてレミリアに向かい放られた。

それを中空で、アイギスの姿を待つていたレミリアが捌き、受け流す。

一本二本、四本八本と、倍々で飛んで来る猛炎。

数の少ないうちは現した槍で捌く事は容易だった。

寧ろ余裕すらあり、耳に痛い金属音を無視して、そのまま前進する姿勢を見せたレミリアであつたが、十数本から数十本ともなると流石に弾ききれず、押し返され、炎の中へと身を沈めていく。

「お嬢様!?! 今参り……」

「邪魔をするな! 手を出すくらいなら先に行け!」

姿を消した主、さすがにこれはと呼び掛けるメイド。すると声だけがどうにか返つてきた、激しく揺らめく火中から言われた『待て』と『進め』その声に向かい一步踏み出した紅魔の忠犬だったが、再度邪魔だから離れると命ぜられ、否応なしに足先を別に向け、飛んだ。

僅かな時間立ち止まり、隣に並ぶ幽々子を一瞥してから先へと進む瀟洒な従者。

自分にも迫る鈍い刃物を睨み、銀時計の竜頭システムを押しこむ。

当然訪れる咲夜だけの世界。

止まった時の中を進み、一人先へと飛び消えていく。

忽然と消えた身内の匂いを嗅ぎ、この場から逃がす事には成功したと少々の安堵が見えるレミリア、彼女の言う通り寄れば邪魔、というわけではない。

吸血鬼を包囲する炎は悪魔の燈火だ。それも気が触れているような、加減などまるで感じられない勢いで燃え輝く炎なのだ。そんな物に近づき、長く当たり続ければ肉体だけは只の人間である咲夜など保つはずもない。来るなど言い切った吸血鬼自身、月夜の魔力を迸らせて焼けていく身体を修復・復元し続けなければ、日光を浴びた時と同



じように灰燼に帰すかもしれない……それでも長時間触れていれば、いずれは焼け落ちてしまうだろう。

この炎の壁から抜けるには？

打開する策を案じ周囲を炎の壁を見渡すが、視界に映る火勢は衰えるどころか増していくばかり。このままでは自分もマズイが、今も気に入らない面つらでいるだろうアイギスを放置し逃げるなど、偉大なる夜王としてのプライドが許さない。

ならば……抗う事は叶わなくとも、あの黒羊を普段の姿に戻すにはどうすべきか？

それを探る運命の輪が、レミリアの手中で回り、ほんの少しの未来さきを見せた。

「そうか、先ばかり気にしていたが……年寄りには昔の事の方が気になるものだったな」

焼かれ、千切れる翼で身を包み、顔や身体だけは守る少女の独白。幼い手の平の中で回る輪が写したモノ、それは未来ではなく過去の姿。

レミリアがまだ生まれて間もなかった頃の映像、姿形こそ今とそれほど差がないが、輪に浮かんで見えるビジョンには、現在よりもほんの少し幼稚さが強い自分。必死な形相でか細い愛槍に振り回されているレミリアと、彼女をあやすように槍を受け、笑んでいる黒羊の姿が映る。

あの頃も今のように弾かれていた。

床に這い蹲り睨む度に微笑まれ、その攻め方ではなりませんと窘められていた。あの時も今のように一対一で争い、傷つけられては手を伸ばされた……であれば。

余裕などない状況にも関わらず緩む頬。思わず見せた刃のような齒。楽しげにチャンバラを繰り返す自分を見て、そこから一つ思いついた事があったようだ。

炎の内より漏れ出る少女の高笑い、大きく禍々しい夜の王の魔力。

「今までの借りを返すぞ、血は飲まないでやるからさっさと帰ってこい！」

今夜一番の鬨の声。

身を焼く炎を押し返す勢いが、声にも、溢れ出る魔力からも感じられる。

両手を広げ身を焦がす羊の焰を払い、そのまま紅い魔力を垂れ流し、レミリアの周囲が一瞬で鎮火していく。

露わになった吸血鬼の姿。

焼け焦げ、美しいとは正反対の身形に思えるが、自身の血で赤く染まった白いドレスも、白い皮膜の翼も、白い肌やドレスに映えて不気味な美しさを醸し出していた。

そんな肢体を伸ばし切る、全身がバネ、そう表現できるほどに身体を逸し、広げた両手を奥で立ち止まる黒羊に向け、払い抜く。振り切った勢いに乗り猛然と奔り出す吸血鬼の力。赤く煌めく運命の鎖。それが廻るアイギスの得物を捉え無力化しながら、その場ごと縛り上げていく。

「捉えたー!」

相対する黒羊の姿が見えなくなるくらいに広がった鎖が、声と同時にレミリアの左手が握られると、一瞬で収束し、中心にいる相手を拘束する。

確かな感覚を手の平に覚え、握りつぶさんばかりに力を込める。捕縛されたアイギスの四肢が血飛沫となってもおかしくないくらいに締まった。レミリアの鎖に巻かれ、露出している頭部以外を紅く染める黒羊。これで止めきれなければ自分には無理だなと、後先など考えず、最後の一手をここで投じた。

血を滲ませる左手は固く結んだまま、右手にも血の色合いの槍を手にし、再度大きく反り返る。

か細い幼子の腕からミシリ、筋組織が断ち切れるような音がすると、全身全霊の一撃が投擲された。

——必殺『ハートブレイク』

空気を巻いて、縛り上げる鎖をも貫き進むグングニル。

切っ先が狙い通りの場所に触れると、一瞬で穿ち、抜いていく。

アイギスの硬い角を削り取り、何処までも続いて見える廊下の奥へ

と消えた槍。

込められた魔力が紅い線となり、視界から消えると、捕縛している鎖が絶たれる。

それを機に時間差で揺れる二人。

「く……お」

先に声を上げたのは優勢に見えた側、凌ぎきり、反撃してみせたレミアであった。

伏せる最中に見えたのは穿たれ、綺麗に風穴空けられる幼子の胴体。

角を抜き、頭の半分を射抜く事に成功するも、捕縛が解けた瞬間、アイギスからのカウンターが打ち鳴らされていたらしい。

しかしレミア自体にダメージ事態はそれほどない。彼女自身が何度も見て、幾度も体感している穿たれる能力なのだ、この穿孔を傷だと認識すれば死に至る可能性もあるかもしれないが、穴が空いただけと意識すればそれは唯の穴、身体の一部が欠損しただけである。

それを知っている故に肉体へのダメージとは成り得ていない、が、別の部分ではショックが大きかった。自分では届かなかった、見定めた運命には辿り着けなかったと、フラつきながらも未だ倒れずにいる黒羊を睨みながら、膝から沈む。

「アイギス相手に立派な姿だったけど、どうやらここまでね、紅魔の主。戻りそうにも、止められそうにもないし……仕方がないわ」

従者である庭師も、多少の縁から連れ添っている吸血鬼も戦闘続行出来るかといえれば苦しい姿。彼女に連なるメイドも、劣勢にある主から命ぜられ、普段見せない慌てたような姿を見せてこの場から消えていった。残るは幽々子ただ一人、それ故の『ここまで』という物言いだ。……この言葉は負けや諦めを意味してはいない。

「恨みには慣れているって言っていた気もするし、私を恨んでくれてもいい。後でごめんなさいするから、許してね？」

フラフラと、少し歩いては触れる部分を穿ち、自身の掘り返した穴に躓いてふらついているアイギスに、冷ややかな声と目で語る幽々子。背には大きな扇を背負い、今は本気で動くを示す。

自分が起こした異変の最後で見せた大きな扇、反魂の蝶で形取られたソレを背負い、幽々子の肌に似た青白い弾幕を全周囲にバラ撒いて、ふわりと浮かび前へと進む。見た目からはそれほど勢いを感じられない弾幕、派手さもなく、威力も同様に見受けられない、けれどその静けさこそがこのスペルの怖さでもあった。

——死符『醉人の生、死の夢幻』

酔っぱらった者が生きながら夢を見ているように曖昧なままで死ぬ。

語源となった『醉生夢死』という四字熟語の意味に幽々子の持ちうる能力を宛てがい、特に何もしいまま死を迎える事になるスペルカードがこれだ。

無論弾幕ごっことして遊ぶ場合は内包されている死出の力は込められていないが、今ばかりは話が別である。殺らなければ殺られる、幽冥の住人たる自分達は既に死の先の住人だが、若い二人は未だ浮世を生きる者だ、彼女達を守りアイギスを止めるには、一度滅してしまふのが手っ取り早い。

全員を無事な姿で、生かしたままアイギスを止める。

それは最早無理だと察した幽々子が、そう出来ないなら得意な分野で止めると、本気で仕留める方向に思考を切り替えたようだ。一度死ねば今のような、おかしな姿でいる友人も頭を冷やして目を覚ますだろう。半分以上は願いに近い考えも思考の端にあるようだが、手段を選んでいられるような状況や、相手でもない事も、幽々子にはわかっていた。

放たれる弾丸が触れる。

触れた回転物、飛んできていたスコップの勢いが死ぬ。

次々と落ち、止まる。そうして邪魔な浮遊物は死に、代わりに別のモノが空間を支配した。

場を埋めるは蝶。

幽々子の背負う扇が割れて、そこから無数の蝶が飛び立ったのだ。

羽ばたきには眩い鱗粉を、その鱗粉には静かなる死を乗せて飛ぶ蝶の群れ。

放たれた紅色の蝶がゆらりと舞い、それに続くは夥しい数の金色の蝶。動き方はゆっくりと、それでも捉えた標的を外す事なく円軌道で揺れ飛び進み、終わりを告げる蝶の群れが終われない羊の悪魔を飲み込んでいく。

群れに埋もれ沈むアイギス。ゆっくりと飛び交う蝶に誘われ、指先や足先など、身体の末端から黒い瘴気を漏らし、薄れ散り始めた。

終われない悪魔の一時の終わり。

滅多な事では死に切れない悪魔が死ぬ瞬間、それを冷えきった瞳で見つめる幽々子と、槍を支えに片膝立ちでいるレミリアが見届ける。

「アイギス……」

漏れ出た瘴気が消える寸前、不意にレミリアの口から漏れた名前。

それに反応したのか、消えていく腕を、崩れていく指先を、名を呼んでくれた相手に向かい伸ばすアイギス。事切れる瞬間を迎え、あの兎から与えられた狂気も瘴気とともに霧散したようだ、隳げだった瞳にはよく見る落ち着きが灯っている……が、その灯りは存在と共にどこへなりとも散っていった。今までの彼女からすればあまりにもあつけない散り際に、死を届けた幽々子自身、あの程度で消滅するなど、と、眉根を寄せる……が、消えたアイギスがその場に姿を見せる事は二度となかった。

一度消え失せても、誰かに想われ、呼び出される限りは何度となく蘇る悪魔ではあったが、肉体自体はレミリア達とそう変わらない。許容範囲を超えれば一旦は消えるのが必然ではあるのだが、初めて目にする黒羊の最後に、もう遅いとわかつていても手を伸ばし、ナニ力を引きとめようとせずにはいられなかったレミリアであった。

## 第六十五話 求め彷徨う旅人 〔下〕

上った月が止まったままの幻想郷。

終わらない満月の夜は騒ぎの一夜となり、終わる兆しを見せず。

異変の中心である屋敷も、月からこぼれ落ちる魔力が満ちる外も、どちらも未だ賑やかな。

屋敷内では弾幕が爆ぜる音が響き、外ではアテられ、我を忘れて暴れる者達が僅かながらに始めてしまったようだ。が、異変の最中にいる者達は敵も味方もそれどころではなかった。

この異変を解決しようと現れた者達は、紅い瞳に惑わされながらも少しずつ前に進む事を選び、前進を阻もうとする側は、行使される術式を守り通し、この永遠亭を侵略者から守ろうと必死に動く。

そんな両者が争う最中にただ一人、酷く個人的な理由で屋敷を訪れ、最後を迎えた者が、残っていた身体の一部を元に再誕しようとする動きを見せる。

カタリ、動くのは薄明かりの中で光る台の上。

消毒された銀色、幻想郷ではまず見られないだろう金属で作られた作業台が月明かりを反射している。台の端には様々な器具や試験官などが並び、奥にある大小様々な機材には波形が揺れる立体映像が浮かんでいる。その中央。機材のセンサーが向けられている実験台の上で、残り僅かな血を滴らせ、消毒されたスペースを侵していく悪魔の腕が揺れる。

銀の差し色となった赤が少しずつ広がり、端の方から黒いモヤとなりまた腕に戻る。その工程を繰り返し、前腕部から指先までしかないソレに集り、纏まっていく。

「そう、貴女はそうやって『戻る』のね。やはり私達とは違うモノだったわ」

その動きを静かに見つめる者が一人、揺蕩う瘴気の流れを論じる。

顔には明かりに似た笑みを貼り付けて、纏う雰囲気には、師と呼ぶ兎が放つ力に似た風合いを乗せて。音のない部屋の中で、たった一人だけの声が通る。

「このまま待つていればいずれは全身を取り戻すのでしょね、あの狐もこんな風に復活を果たすのかしら？」

ふと浮かんだ疑問を口にして、少しずつ体組織を延長していく黒い腕に語りかける。

返事などないのはわかっている、過去何度も争っていたあの仙霊と関わりがないという事も、なんとなく察している。それでも語りかけてしまうのは、感じるモノ、誰かに対して向けられている『恨み』を元に成った者達が似ているからだろう。

久しく現れなかつた楽しい研究対象、月の頭脳と評され、知らぬものなど何もないような状態となつて長いこの女、八意永琳。彼女が知らぬモノの在り方を目にし、実際に触れられる機会を得て、楽しそうな声色でブツブツと呟き続ける。

「本当ならもつとゆつくり見ていたいのだけれど、余裕がないのが惜しいわね。折角の機会でも研究に充てられる時間がないのでは意味がない」

勿体無いわね。

静かに再生を続ける黒羊の腕と、それを見続ける事が出来ない状況の二つに対し一言吐き捨てて、蠢く腕から別の物に視線を流す永琳。

視界に入れた二本の試験管、それぞれが彼女の着込んでいる衣服のような赤と青の二色に染まり、管の内でゆつくりと微睡むように流れている。それらを手に取り、二つの中身を別の一本へと注ぐ。合わせる二色、一旦は混ざり合い赤みの強い紫色へと変じるが、持ち上げ軽く揺すられると、赤さが薄れ、深い青一色、となつた。

「貴女の生まれた辺りだと *azul* *oscur* とも呼ぶのかしら？ 羊だという話なのだし、この国の生まれではないのでしょうか？」

未だ腕だけ、それでも肘から二の腕にかけて復元し始めている悪魔の腕に向かい語りかける。

返答などあるはずもない、意味のない行為だと自身でも理解している科学者ではあったが、こうして少しでも触れ合えば、薬での効果以外にも何か知る事が出来るかもしれない、そういつたなんともない思

い付きを不意に口にしてみただけであった。

当然なんの結果も得られず、やはり無駄ね、と漏らしてから、口元を少し上げ元の作業に戻っていく。

「想定上ではこれでいいはず、後は臨床実験をしてみればわかるわね」  
出来上がった物を眺める、思慮深さの宿る瞳を僅かに細めた。

薬を手にする左手とは逆側の口角を僅かに釣り、試験官の中身を細長い実験器具、目盛りのないピペットで吸い取ると、広がる血溜まりに数滴垂らした。ポタリ、垂れ落ちた部分から霞んで生きていく紅い水溜り。

予想では垂らした分だけで血溜まりを這い、本体にまで侵食する薬が腕を無に帰すはずである。そうはならなかった事に別の意味で目を細くし始めた八意永琳だったが、聞き慣れた銃撃音が遠くから近くへ移ってきている事に気づき、残りでどうにかする事とした。

「読み通りの作用とはならなかったけれど効かないわけではない、か……本当に、もう少しだけ時間があれば詰められるのに、厄介極まるわ」

結果を見聞し、すぐに別の方法へと移行する。

残る薬品を試験官と同サイズの注射器へと吸い、移す。無色透明な注射筒が、美しくも冷たい紺色で染まっていく。全て吸い上げ押し子を押し込み、筒内に残った不純物である空気を放出すると、動脈と見られる辺りから投与した。

針先が刺さる。同時に握りこまれる手の平。何かに反抗するよう  
に強く、指が折れ爪が手の平に収納されるくらいに握りこまれた後、  
拳の輪郭から静かに霧散し、消えていった。

「また会いましょう。縁があれば、ね」

柄にもない別れの言葉、言われた相手は実験器具以外何もなくなつた台。

その盤上を指先だけで撫で、去る。

薬の効果が想定通りなら、投与した相手があつた月を狙う仙霊と同じ存在であるなら、今投与した試薬の効能によれば、この世で再誕する事などはなく存在自体を抹消する事が出来るはず。そこから最早再



会する事は叶わないとわかっていながら、久しぶりに出会えた興味の対象に、縁があればと声をかけて部屋から消えた。

自身は既に円環の理から離れた蓬莱人だというのに縁など、ない願いを口にしたのは、今夜の月を浮かべた彼女自身も月に影響され、浮つきやすくなっているからだだったのかもしれない。

そうして騒ぎの舞台は動き、終幕へと進んでいく。

幕引きは屋敷の奥、異変の元凶である彼女が少女達と出逢う事でめられる。

幻想の結界を支え、この地を司る二人の人妖を始めとしたコンビ。隙あらばこの屋敷からも知識を得ようと企んでいる、禁呪の詠を唱える魔法使い達。

そして、現世と離れて久しいが、管理する幽冥の世が騒がしくなつては困るあの世の住人達。

それぞれがらしく行動し、異変の解決に向けて争った今晚、永い一夜はもう時期に夜明けを迎えようとしていた。終わりとならず始まりとなつてしまったのは、紅い屋敷から訪れていた二人くらいか。異変の解決よりも別の案件に向き直してしまった彼女達、紅魔の主従は夢幻の如く消えた誰かを呼び戻す事を第一とし、異変の場からは姿を消していた。



厚い雲に隠れ気味の月を見上げ、飛ぶ少女。

視線は薄明かりを浴びる地表や、そこから続く稜線を向いている。

キョロキョロと辺りを見回して、何かを探すような仕草と表情を背負う七色の明かりに照らしながら、結界で区切られた夜空を一人彷徨う。

あの賢者が箱庭だと評した地、世界と言うには狭く、彼女一人が手探りで物探しをするには十二分に広い地、幻想郷。

飛び、動き、止まる。

それを繰り返す姿を見るに、今夜も探し物は見つからないようだ。探しまわって飛ぶ最中、欠けた月が完全に雲に隠れる。それに気がつくど流星かと思まごう速度で空を駆ける子供。もうすぐにも降り出すかもしれない今晚のような天気でも飛び立ち、必死な形相で少しずつ搜索範囲を広げる吸血鬼ではあったが流星に雨はマズい。どうにか降り出す前に住まいに戻ろうと足を速める。

「あー！ 降り出しちゃった？……でも、雨じゃない？」

凜とした空気に心持ち冷やされ、赤く染まった頬に冷たいものが当たる。雨。苦手な流水が降り始めてしまったと少し焦る彼女だったが、灼けるような痛みは感じず、触れた部分がほんの少し熱いと感じ取れただけのよう。

今頬に触れたのはどうやら雨ではないらしい。視界にチラチラと半透明な物が映り込み、それと同じ物が彼女の回りにも落ち始めた。

「雪、じゃない、雹ひょう？……なら大丈夫だけど、でも……」

見通しづらくなり始めた空の中止まる。

気がつけば随分と進んでいたようで、先程まで見えていた湖畔は遠く小さく、逆に鬱蒼と茂る魔法の木々は大きくそそり立つように見える。

このまま雹として降り続いてくれれば然程問題はない、帰宅した後で無茶をしようと叱られるだけ、最悪の場合は魔法の森に降りて雨宿りでもすればいい。迫る危険を無視するように、懸念部分についてはどうとも考えないようにした彼女。ポツポツと手の甲や首筋が熱いが、それよりも探したいと、雪解けの流水に焼かれる肌よりも内情を熱くする……が、再度動き始める前に、迎えの者に見つかってしまう。

「やっと見つけた、こんなところにいましたか、妹様。さ、お天気も崩れてきましたし、今晚は私と帰りましょう」

「イヤー！ まだ探すの！ まだ大丈夫だもん！」

「お気持ちも、大丈夫だというのもわかりますが、今はまだ季節の変わり目を迎え始めたばかりです。今は雹ですが、いつ雨に変わってもおかしくないんですよ？」

「でも……探すの！」

迎えに来た従者。

本来ならば屋敷の門から離れられない状態にある守護者が、傘を片手に主を諭す。

探すのだと、口調強く言ってきた妹君に向かつて参つたな、と呟き、少しだけ苦く、それでも包み込むような穏やかな笑みを浮かべて手を差し伸ばす。暫しその場で留まる二人だったが、荒れている気性を示すように、ランダムに輝く翼に酷く熱いモノが触れ、濡れると、嫌々ながらに手を取る吸血鬼であった。

抱きかかえてゆつくりと、降り始めてしまった雨に濡れぬよう、大事な者を濡らさぬように、幼子の頬を寄せて抱える従者。抱かれる者も赤く長い髪と、揺れるおさげをそれぞれの手に握りしめて、雨に打たれてしまわぬように身を縮こませる。

これで相手が黒髪の黒いスーツであれば抱えられる主が外に出て探しまわる事になどなっていないのだが、幼い吸血鬼の求める相手は、一月ほど前の異変で姿を消してから誰の目にも映らずにいた。

自身の守る門へと降り立ち、そのまま正面玄関へと進む守衛。

静かに開けると、中に仁王立ちする姉。

「フラン!! こんな天気にも出るだなんて! 今夜は降り出すとパチエも言っていたじゃない!」

降ろされず抱かれたままの妹を叱る姉。無事に戻れたのだし今日は、とあやす美鈴の声を敢えて聞かず、強い口調でフランを叱る……けれど何も返事はなかった、美鈴の肩に顔を埋め、無言のままにいるフランドール。

「お願いだから、屋敷で待っていて……貴方にまで何かあったら私は……」

先とは一変した弱々しい声、不遜さや高慢さは何処かに置き忘れてきてしまった、そんな雰囲気にはか思えない紅魔の主の声色。それを聞いて顔を上げ、視線をレミアアに向けたフランドールが、姉の優しさに気が付きながらも言い返す。

「だって、みんなが探しに出ても見つからないんだもん!」

「だからといって雨の中に出るなんて、無茶し過ぎだつて言っているの！」

姉の声よりも大きな声で言い返したフランドールだったが、レミリアはそれすらもかき消すような音量で返していく。本気で怒っている、叱っているというのがわかる声で、表情で。

昔は一方的に押し付けるだけだった姉が、妹の動きを認めソレがダメだと叱る姿。以前に比べれば随分と姉妹らしい姿にも見られる。フランドールに対して真つ向から感情を露わにするレミリアが珍しい、そんな事を考えていた美鈴だったが、そこから気が抜けて力が緩むと、肩から飛び立ち、玄関ホールで翻るフラン。

「言っただもん……私が泣いたらすぐに来るって言ったのに！ 部屋で泣いても来てくれないだもん！ お姉様は待つてるだけで探しにも行かないくせに！ そうやって偉そうな事だけ言つて何にもしないくせに！」

いつも以上に赤く見える目、その端には苦手な流水を貯めて、言いたい事を吐き出してから、フランドールは屋敷の奥へと飛び消えた。

先ほどの流れ、妹を想って然りつけた優しい姉という姿からすれば、ここは追いかけてあげよう、というのが運命だと思えるけれど、言い切られたレミリアはフランドールを追いかける事はなかった。否、追えなかった。

「ご苦労だった美鈴、また無断で出てしまった時には頼む」

「それは言われなくとも……お嬢様こそ、ご無理をなさらないでくださいよ、今喧嘩したらどうなるかわかってます？」

「わかっているわ、それでも私はあの子の姉なの。余計な事はいいから持ち場に戻って瞑想するか……目を盗んで探しに出るかしないかい」

何処かに置いていた高慢さを拾い上げ、身に纏ってから臣下に命ずる屋敷の主。

言い切ってからゆっくりと壁に手を付き歩き去る。小さな手をこすり、広げている翼は飾りだと言わんばかりに二つの足で地下へと向かう。その背を見送る美鈴だったが、今日は姉妹喧嘩にならないで良かったと、たわわな胸を撫で下ろした。

前回の異変で羊に穿たれ、掘り起こされた部分は、埋め戻される事がないままに消えていかれてしまった。それ故今のレミリアはポカリと穴が空いたままだ、表面上は普段と変わらない幼女姿だが、中身は穿たれ空洞のような状態。穿たれて彫掘り抜かれた魔力も当然戻りはせず、掘り返した本人が埋めない限りは今のよう弱々しいままでいるしかなかった。

レミリアが穿孔跡を地力でどうにか出来るくらいに育てば手はある、と屋敷の魔女は言っていたが、そうなるまでに何千年かかるのか……あの悪魔が絡むと毎度賑やかだなどという考えの裏で、好まない賑やかさはいらないと、いない誰かに対して悪態をつき、言われた通りに探しに出る美鈴だった。

く門番警ら中く

静かに泣く妹が自室にこもった頃、その道すがらにある大図書館でも湿っぽい話がされている。

会話の場にいるのは三人。だが、一人は静かに佇み、話し合う二人を見つめる形。

その口や指を動かしている側、重く大きな一枚天板が目立つ机に腰を下ろし、そこに開かれている書物に目を通す屋敷の主と書庫の主。地下の主はキチンと椅子に腰掛け難しい顔で読み読み耽っているが、上の主は前述通りの姿で文章を追いかけている。

「未だに呼び出せないとは、どういう事なの？ パチエ？」

机を尻に敷く者が、書庫の主に問いかける。

座り位置通りに上から、何故出来ないのかと聞いているが、それが聞こえていないように流して書を読む七曜の魔女。ペラリ、ページを捲っては関連する部分を暗唱していた。

「まだ待っているの？ 随分待たされている気がするんだけど？」

レミリアの視線が本から図書館の奥へ、何かが置かれた床板部分へと流れる。

紅魔館でも赤い部分が少なく、色とりどりの書物の背表紙や、本棚の焦げたような茶が多く見られる空間の中で、新たな色合いとなつてゐるそれは黒い棺。作りこそ簡素なものだが、蓋に六芒星が描かれ、

継ぎ目からはやたらと紅魔館らしさを放っていた。漂ってくる匂いも材料となった木の匂いよりは紅魔の赤、縁や継ぎ目より漏れる血が、書庫内で香っている。

「私にもわからないのよ。何故呼び出せないのか？ 供物も手順も間違っていないはず、だというのに召喚に応じて下さらないとは……」

どういう事か、そんな顔のパチエ。言い喋みレミリアの見つめる先を追う。

二人の視線が重なる場所には、手順通りに置かれた物。あの黒羊が長く取り扱い組んでいたような棺が横たわり、中には少し前まで生物として動いていた羊の生首が落とされ収められていた。

「本当は焦らしているだけなんじゃないの？ それとも私が頭を下げる姿を眺めていたのか思ってる？」

パチユリー自身も彼女を崇める側の者だ、焦らすなど心にもない事だとレミリアにもわかっている、それはわかってはいるが……騒がしかった竹林から戻り一月弱が過ぎた今、妹の事も自身の事もあり、僅かながらに焦れていた。

わざとらしく皮肉を言って、下げ慣れた頭から帽子がズレ、落ちる。屋敷に戻った翌日から今のように誰か、幻想郷では見られない贄の羊を外から得る為に、外の世界からモノを引き入れる事が出来る相手に頭を下げていた。

「当たらないでくれる？ 私にもわからない事くらいあるの」

「当たってなんて……いるわね。すまなかつたわ」

主からの謝罪に対し、謝るくらいなら最初から質問だけ言ってくればいいのよ、と、皮肉交じりで言い返す魔女。

数百年を共に過ごす友人らしい会話をし、その流れで会話も進む。

「で、頼んだ事についてはわかった？ そちらもパチエにはわからない事つてやつに含まれるの？」

全て語らずとも伝わる、そうなるくらいに会話し、時を過ごしてきている二人。

そのうちの質問者、机に座る偉そうな少女の側から、今現在でわかってる事はなんだと冗談めかして問いかける。どうやらレミリ

アは再召喚の他にも別の事を調べさせていたらしい、その調べ物の進捗状況はと、動かない大図書館の主に問う。

「これらがそうだった理由よ、客観的に見ればなるほどと思えたわ」  
トントン、指を机につく。少しの仕草で開かれていた本が浮かぶ、いつかパチュリーが咲夜に読み聞かせていた書物が、生き物のように羽ばたき書棚へと独りでに戻っていった。

あの本はいつの間にかこの大図書館に流れついてきていたらしいが、その本が何に関わるのか？

欲しかった答えとは結び付かない返事に、目を細めるレミリア。

夜に輝く赤眼が細まると、述べた側がついていた指を動かし、折る。手招きのように、不健康な指先を折って見せると、奥の棚から一冊の本が追加された。

「正確にはこの本が原因ね、もっと詳しく話すのであれば本に記載されている内容に問題があった、という事でしょうね」

「記載とは？ 回りくどいのはやめて、万全でもないんだから」

「ああ、本調子ではなかったのよね、悪かったわ。簡単な話よ？ さっきのあれは外の本で、あの方の有り様もらしく記載されているけれど……こちらの『幻想郷縁起』にはあの方の正しい在り方は記載されていないの」

ペラペラと捲れるページ。

パチュリーが中空を掴み、払う仕草をすると、あの胡散臭い妖怪や屋敷の外を彷徨っている闇の妖怪などのページを飛ばし、話題となった黒羊の記載部分が開かれる。

そのまま指先を払いレミリアの前に移動される紹介本。パチュリーの動きを見ていたレミリアに、この辺りを読んでみなさいと、文章の上に薄い発光系魔法をかけ、促す。

「何度か死んだ、が、異国人らしいジョークだろう、ね……これは、笑い話にされてしまえばそれは実状ではなくなる、という事でいいの？」

「推測だけど、そういう事なのだと考えられるわ」

「……しかし、本当にこれだけ？ その程度の事であつさり死ぬよう

になると思う?」

「ねえレミイ? 『その程度』と言うけれど、貴女も小雨が降れば出られないし、ちよつと日を浴びれば火傷もするでしょう? 種族が変われば色々と変わるわ、雨に濡れ、日光を浴びるなんて私からすれば『それだけ』の事よ? あの方に例えるならそうね、そうあれかしと崇められればそうなる、記載された部分が真実だと認知され、そのように思われればそうなるものなのよ、きつとね」

それでも腑に落ちないのは、昔から死なず終わらずの姿を見ていたからだろうか、パチュリーの答えに対し頭を傾げて返すレミリア。

理解出来ていないわけではないが、些か信じ切れていないという様子の吸血鬼。普段のレミリア、穿たれ弱っていない状態の彼女であればこれくらいで理解するはずだが…思考力まで落ちているのか、もしくは信じたくないのかと、魔女が更に気を回す。

『例えるなら、貴女に取って天気雨の中傘も差さずにいる事と同義になる』と、わかりやすい例えを述べ聞かせる。すると、暫し黙った後で納得するように、させるように青白い顔を少しだけ前傾させた。

そうして落とした肩に気も乗せて、言い分はわかったから後は頼むと語るレミリア。

返事は待たずにそのまま地下へと降りていく。

寝ると言いながら妹の部屋に向かうなど今までは考えられなかった事だが、引きこもりの妹が誰にも告げずに部屋を抜ける事が増えてしまった為に、監視という名目を立て、一緒に眠る事が増えていた。

妹の小さな泣き声が聞こえてくる地下に消えた姉、それを見送り再度思案する魔女。文字を追っていた指を本の挿絵に伸ばし、描かれる悪魔の姿を一度撫でてから、深くため息をつく。

「外に出るようになった、姉らしくもなった。いなくなった後でというのが皮肉に思えるけれど、本当はそういった姿を見ていたかったのではないのですか?」

表紙に描かれる六芒星を見つめ漏らした声。

引きこもりは外に、無理をしても探しに出るようになった。



そんな妹を、今まで過保護に囲うだけだった我儘な姉は窘め、姉として、目上の者として接するようになった。どちらも良い変化と言える。けれどそれを眺めて褒める相手はいない。

「何処で何をされているのでしょうかね」

不意に聞こえたメイドの声。

使える主は眠りににつき、この場を去っても良い状態だがそうはせず、パチュリーの独り言に対して返答のような事を述べる。

「……なるほど、そういう事もあるかもしれないわね」

世間話やその場の流れを組んだ質問、咲夜が話した事といえはそのようなものだろう。

空気を読んで主の友人へと返した、それくらいの事だったのかもしれないが、深く考えずに言われた言葉からパチュリーには別の考えが浮かぶ。手元にある本から奥、連なる本棚へと流てる魔女の瞳。見つめる先には何があるのか？

「そういう事、とはどういった事ですか？」

「他で召喚され現世に姿を現しているかもしれない、そういう事よ。別の場所に既にいる、そう考えれば召喚に応じない理由にもなる」

「呼ばれているという事は伝わらないのでしょうか？」

「伝わらない事もないのですが、実際どう伝わっているのかわからないからなんとも言えないわ。それでも何かしらのアクションは届いているはず、だというのに何のリアクションもない……出来ない、もしくはしているが目に映らない、といった場合も……」

視線の先にいるだろう相手、姿こそ見られないが書庫内の何処かで整理という名のサボリをしている小悪魔を脳裏に描き、別の相手の事を論じる。

これも独り言の一貫ではあるが、思い浮かべた疑問を口に出し、己に言い聞かせることでそういった可能性も考えるべきだと、知を貪る種族らしく一人で思考の海へと潜行していくパチュリー。色々と案を浮かべては直ぐ様否定し、ああでもないこうでもないと思痴だけを吐き出していく。

そんな思痴が聞こえたのか、遠くにいたはずの司書が、主の視界に

入り込んでくる。

目の上のたんこぶが消え、気が浮く程に楽しい。それを姿で見せるように揺れる二対の羽。

屋敷の主を筆頭に、普段賑やかな紅魔館我が家が余計に騒がしい今。

このままの状況が続くようでは静かに本の世界に浸る事も難しい。姉妹にしろこの使いっ走りの悪魔にしろ、窘めてくれる相手がいな  
いと悪い意味で煩いまだ。

やはり戻ってもらわねば困る。

静寂を欲する書庫の主は一人ため息をつき、手元にある素敵な幻想  
郷ライフを、という見出しに目を落とした。

く出張する桶屋く

## 第六十六話 悪魔、召喚される

暗い。光といったものが完全に遮断された空間。

夜に生きる者でもなければ視界を得る事など出来そうにない空間に、何か動く影があった。

カサリ、何かの物音を立てて、静寂を消しては動く何か。

その何かが近くにあったのだろう。蝋燭に火を灯す。

ポワリと、揺れる灯りに照らされて浮かんだモノは人間、背格好から若い女のような。トレードマークらしい黒い帽子を目深に被り、どういった顔つきをしているのかは何えない状態の女。

それでも歩き方や立ち姿には若々しさが見られる辺り、彼女の事を少女と呼んでも差し障りはないだろう。が、肉体的に若いというだけで精神的には未だ幼いままかもしれない、蝋燭に照らし出される空間の一部分には、一つの物事に特化した書物が渦重なっていて、整理整頓とは無縁に思えるヤンチャっぷりがある。

その本類の一冊、棚から取り出され机にばら撒かれてる内の一冊で、中途半端なページで開かれている物がある。中を読み取れば、それは古い古い書の一つらしく、書かれている文字は日常会話で話されているような見知った文字ではない。知る形に例えるならπや%といった物が近いだろうか、雰囲気から何処か、この国ではない場所の古い言語らしく思える。

そういった文字が記載された書を手に、何やらブツブツと呟く少女。

羽織っているマントを揺らし、表紙に六芒星の描かれた書物に向かって語りかけていた。

「ふむふむ……」

書かれた文字に指を這わせ、頷きながら室内をうろつく。

十歩も歩かずに反転する様から、この部屋の狭さが伺えた。何度か左右に揺れ動き、また反転しようとした時にガツン、何かを蹴飛ばし

たような音が響く。

「いつ……」

どうやら何かにぶついたらしい彼女。

『い』だけを発声して、それから叫び声の代わりに深い深い息が吐き出されるだけ。

耐えられないのか小さく蹲ると、被っていた帽子が傾きパサリと落ちた。それでも痛みの方が重要らしく、火が立つ勢いで擦られる白魚のような足、その脛。履いているプリーツスカートから曝け出した瑞々しい肌には、一箇所だけ青くなってしまいそうな衝突跡が出来てしまった。

「ああもう！ 椅子を出しっぱにしたのは……私か……」

暫くさすり続けた事で余裕が出来たのか、口悪く己を罵りかける。

自分のせいで生まれてしまった誰かに向けた怒りをぼやき、片足ケンケンで壁へと進む。

パチン。スイツチひとつで暗闇が死に絶え、代わりにかけている眼鏡のフレームと同じ色になってしまった瞳から、薄つすらと雫が生まれた。

「あくあ、雰囲気作りなんてするんじゃないわ、最悪」

多少は引いたがまだ痛いらしく、ケンケン飛びからちよつとだけ引いて歩くような動き、その最中にまたも吐かれる愚痴。言ったところで返してくれる相手などいないというに。

それでも凝りてはいないのか、すっかり明るくなった部屋の中で本の続きに目を通す。点った蛍光灯の灯りに照らされ随分と文字が追いやすくなり、足元も見えるようになったのだが、コチラについては懲りたのか、彷徨くことはやめたらしい。

「いよっし！ 気を取り直していきましょ！ 今回こそ封じられた秘密を暴くのよ！」

立ち止まり書を眺め、そのまま視線を周りに流す。

周囲には『オカルト』や『神霊特集』『怪奇譚』など、ジャンルの偏った本が壁のように積まれていた。窓もある部屋のようにだが、出入り口であるドア部分『倶楽部員大歓迎！ 見学、体験いつでもどうぞ！』と

書かれた引き戸以外には開閉しそうにない。

その戸を背に、やる気を見せた少女が唱える。

「エロイムエツサイム、エロイムエツサイム、我は求め訴えたり……いや、エロ<sup>神</sup>ヒム<sup>様</sup>じやないはずだし、エコエコアザラクの方？ うくん、ラテン語で召喚ってなんて言うんだろ？ 辞書も借りてくれば良かったかな？」

読んでいたつもりの書に話しかける、開いている本は言われた通りラテン語で書かれており、現代に生きる彼女にはおいそれと読めるものではなかった。けれども彼女は諦めない、悩みながら別の、何処かで仕入れた呪文も取り敢えず試してみるらしい。

赤みの引いた瞳を閉じて『タツカラプト ポツポルンガ プピリツトパロ』と、両手を仰ぎ唱えたかと思えば『カイザード アルザード キ・スク・ハンセ グロス・シルク』などと、何から知ったのかわからない呪文を口にし、片手で羽織るマントを翻らせた。

バサリ、跳ねたマントが重力に負ける。

何かに期待する顔で書を眺め続ける彼女であったが、欲しい変化は書にはなく、背にした引き戸から訪れた。

「あ、やっぱり部屋にいた。逃げないでくださいよ、おかげで先輩の仕事まで押し付けられたじゃないですか！」

開け放たれた戸、そこに立つのは同じく少女、腕には実行委員という腕章をピンで止めて、表情はやや疲れ気味といった様子だ。先輩と呼んだ女の子と同じ、董色でチェック柄の格好に身を包む女子が部屋へと入り、詰め寄っていく……けれど、呼びかけられた側は拗ねたように返事をしない。

「もう！ 逃げた上に無視までしないでくださいよ！ ちょっとは先輩らしいところ見せて下さいよ！」

「いつも言ってるでしょ、先輩って呼ばないでって。昔みたいに董子ちゃんって呼んでよ」

同じ制服の、マントや帽子などオプションパーツが搭載されている方が、言い寄る後輩に返す。

疲労感の浮かぶ後輩とは真逆で朗らかな笑みを見せた。住まいが

近く小中高と一緒にの二人、それ故に年子の姉妹のような感覚でいる彼女達だったが、姉の方が中学校に入ってからは後輩の方から少し距離を取られていた。距離とは言ってもただ呼び方がかわっただけではあるが。

それでも、仲良くランドセルを背負っていた頃は童子ちゃんと呼び、何処に行くでもついて来たのに、と、少し昔を思い出し、それを語って話を濁した。

「それによ、私は逃げたりしてないわ。そもそも逃げなきゃならない事に覚えがないもん」

濁した言葉に引っかけかり、僅かながら勢いの弱まった追求。

ここは畳み掛ける時だ、そんな顔で逃げたりしないと行って逃げようとする童子だったが、それほど上手く事は運ばないようだ。昔ではなく今の話に戻ると、そこをつつかれる。

「何言ってるんですか、委員会放り出したくせに」

「委員会？　って、なんだっけ？」

「……もしかして忘れてました？」

「なんかあつたっけ？」

「はあ……もういいです、話は決まったので」

ガクリと落ちる少女の頭、飾っている蛙モチーフの髪飾りが揺れ動く。

その頭頂部に先輩、宇佐美童子の笑い声がぶつけられる。ニヘラと笑ってごめんごめん、謝りながら近づいた。そうして落とされた頭を手を置いて、軽やかに撫でくりながら、また高らかに話し始めた。

「しかしあれだね、早苗ちゃん、来てくれたって事はようやく入部する気になってくれたのね」

「入りません、先輩を探しに來ただけです。それに、クラブ活動する時間なんてないって知ってるじゃないですか」

「忙しいって言うの？　家の手伝いで忙しいって言うほど人來ないじゃん、早苗んち」

「確かに参拝客は來ませんが……って、うちの事はいいんです、放っておいてください」

これから忙しくなるのは先輩なんですし。

言葉尻にそう付け加え、先輩、宇佐美董子の全身を眺める後輩少女、早苗と呼ばれていたこの少女東風谷早苗が近寄り、マントの端を掴んだ。

「何よ?」

「忘れてたのに準備はしてたんだなって」

「準備ってなんの事?」

「あれ? このマントとかその帽子とか、文化祭の出し物用じゃないんですか? 先輩の出した企画、通りましたよ?」

「企画? って、そっか、委員会ってそれかあ」

「です、自分で文化祭の企画出したんだから覚えててくださいよ。学校でハロウィンしたいって言い出したの、先輩なんですから」

掴む布切れの端をヒラヒラとさせ、私は何の仮装をしようかな、といった顔つきの早苗。先程は叱るような表情で語っていたが、今は楽しそうで年齢よりも少し幼く見えるような笑顔。

そんな笑みを眺め、董子も微笑む。学校で会う事も多くある、放課後一緒に過ごすことも偶にある、それでも今のようない笑みを見るのは久しぶりで、それが年齢分だけ嬉しいようだ。

「早苗はあれでいいじゃん、ほら、あのあれ」

「なんです? あれとかあのとか」

「あの、ほら、早苗ん家の、蛙のお化けみたいなのいるじゃん」

「お化けって、諏訪子様はお化けじゃなくなつて神様ですし、お母さんでも蛙でもないですよ」

「ちがうの? 見えてた時はいつもそんな格好でいたじゃん」

董子の冗談にむうと膨れる早苗の頬、綻んでいたかと思えば今度は丸くなった。

言われた神様らしい蛙のように膨らませた頬で、ケロケロと笑う董子を睨む。

蛙ではないと否定しながら、それでもソレらしい姿を見せる早苗だが、彼女は実際に蛙に似た神様、正確には古い祟り神だがそこは割愛するとして、その祭神様の遠い遠い子孫なのだ、血筋を鑑みれば多少

は似ても仕方がないのかもしれない。

「確かに、今も起きた時にはカエル座りでいらつしやる事が多いんですけどね……」

「最近起きてこないんだっけ？ 私には随分前から蛙っぽい姿が見えなくなっちゃったんだけど、まだ健在なんですよ？」

丸かった頬が萎むと、早苗の雰囲気も若干萎む。

早苗が住む神社の祭神がバカにされたから、話のネタにされたから気落ちしたという感じではなく、それよりもっと暗い、深刻といった雰囲気は少しずつ顔に浮かんできていた。

それを払拭しようと、明るく、冗談めかして問う董子だったが言った彼女自身も多少気にはしているようだ。子供の頃、早苗の住む守矢神社の境内で遊んでいた頃は今よりも純粹無垢に神様やお化けの存在を信じていた、そしてあの頃は董子にも守矢の祭神が見えていた……が、成長し常識を身につけ始めてからは段々と見えなくなり、今では完全に見えないようだ。

それでもまだいると、健在で消えてはいないのだろうと、期待も込めて問うが……

「偶に起きてご飯って言うてきますよ」

「なんだ、元気なんじゃない」

「でも、偶になんです。昔みたいに毎日起きておはようって言うてくれなくなりました」

意気消沈。そうにししか見えない早苗。これは大失敗だったと、浮かばせていた苦笑いを引きつらせる董子。なんとも気難しい空気が部屋内を流れる、このまま無言が続けば更に気が滅入る、そんな事くらいはわかるこの部室の主、秘封倶楽部初代会長兼唯一の倶楽部員だが……こういつた時になんと言えれば流れを変えられるか、まだ若い彼女にはちよつとだけ難しい問題だった。

そんな静かな空間にパチン、手を打つ音が響く。柏手を打ったのは神社住まいの女の子、すっかり暗くなってしまった空気を打ち払うように鳴らし、話題を明るい物に切り替える。

「うん、忙しくなるし考え事はやめましょう！ それです、先輩、後



は何をするんです?。」

「何って? 何?。」

「え? 仮装して、それから何かするんじゃないんですか?。」

「いや、そこまでは考えて…:ただ皆で仮装して練り歩いたら面白んじゃないかなって思っただけで。ハロウィンってそういう行事でしょ?。」

元を正せばその年の収穫を祝ってみたり、その地の悪霊を追い出すなど宗教的な意味合いが強い行事であったのだが、彼女達が生きる現代においては子供たちが魔女やお化けの格好に扮して各家庭を周り、お菓子をねだるといふ、宗教色の薄れたお祭りめいた行事となっている。

董子の考えていた物はそのうちの後者である。壁を埋める本棚、更にその棚を埋める本のどれかに載っていた百鬼夜行、京都の蓮台野にあるという冥界の入口から連なり出てくる怪異の行列を真似た事がしたいという、言うなればただの思い付きであった。それ故に練り歩ければそれでよく、寧ろそれ以上の考えなどこの女子高生の頭にはあるべくもなかった。

「あの、本当になんにもないんです?。」

「ないわ、ほんとに、なんにも」

「企画、通っちゃいましたよ?。」

「そうみたいね、どうしよっか? 喫茶店でもやる?。」

「文化祭だからって、そんな安直な」

「いいじゃん、コスプレ喫茶だよ? きつとお客さんいっぱい来るよ?。」

それでも首を縦に振らない早苗。

出された案が気に入らないという感じは見受けられないが、ここで素直に受け入れればこの女はまた忘れたり、逃げたりしそうだと、昔から知る姉代わりの事を考え敢えて納得しないでいた。

「とりあえずです、これから実行委員の会合があるんで行きますよ」

「私も?。」

「当然です! 企画だけ出して投げっぱなしとか絶対に許しません

！」

でも、私今ちよつと忙しいんだけど。

最後に言ったその言葉は聞かれず、制服の襟首を掴まれた董子。亜麻色の後ろ髪に隠れた襟を握られて、そのまま引きずられるように部室から連れ出されていく。けれど素直に出て行く倶楽部会長ではないようで、少しの抵抗代わりにわざと帽子を落としてみせた……が、その手は早苗には通じなかった。

落し物をした、そういつた言い訳も先と同じく寝耳に水。キツチリと外に連れ出され、部室のある校舎の別棟から、文化祭実行委員会用に充てがわれた本棟の教室に移動した後で、私が代わりに取って来ますと、早苗一人部室へと戻るのであった。

く少女移動中く

二人が賑やかに移動した後、静かになった部室内。

主である人間が部屋を去り、その際に点けられた蛍光灯は消され、すっかり暗さも取り戻していた、はずであったが……消えた灯りとは別の光が小さな物音と共に室内に現れ始めていた。

見える明るさは赤、血の色合いよりも黒く、それでも赤色だとわかる濁った紅の色が、机に出しっぱなしにされていた物から漏れ出る。それは書物。ラテン語で書かれた本の表紙が、描かれた模様そのままに薄く輝き、揺れ動いていた。

それから静かな部屋に一つだけ灯る赤と振動音、それらが段々と大きくなる中、この部屋に荷物を取りに戻ってきた者が近寄ってきていた。

「全く、ホント忘れっぽいんだから困っちゃうわ、董子ちゃんには」  
廊下の奥、曲がった先辺りで言われた独り言。

本当に困っているというには明るくて、少しだけ楽しそうな声色がゆつくりと戻ってくる。このまま戻れば部室内で起きている異変と出くわすだろう、が、それほど綺麗に事は運ばない。

進み、部室に手を掛けて一度動きを止める早苗、何やらポケットを弄り探す仕草を見せて、声は出さずに『あ』と、可愛い唇を小さく開いて来た道に戻っていった。鍵を預かってくるのを忘れてしまった

らしい。

踵を返し戻る早苗。

戸一枚隔てた中では魔力の満ちる黒い瘴気が巻いていて、もし吸い込めば体調を崩すなり、場合によつては死に至る事もあったかもしれないが、ここで入らずに済んだのは偶然か、それとも持ち得る人外奇跡の力故なのか、誰にもわからない事だろう。

そんな奇跡的なすれ違いを他所に、誰もいない部屋で、渦巻くモヤが形を成す。

まずは高い位置にある頭から形取られ、本来反射する陽光すら吸い込んでしまいそうな黒髪からは、大きな大きな巻き角が生え伸びた。続いて褐色色の肌が見え、その小麦色が真っ黒なスーツ姿を纏つていく。

全身が見慣れた姿、あの永遠の屋敷で消えた者の姿となると、最後に顕現された高いヒールがコトリと響く……同時に扉からも似た音が鳴り、閉ざされた入り口がガラリ開かれた。

「帽子、どこだ……ろ……う？」

引き戸を開けながらのボヤキ、独り言のつもりだった早苗が、部屋の中央に立つ何かに気がつく。

落とし物を探すように床を見ていた緑の強い瞳、その端には黒いスーツの裾と、やたら高いピンヒールが見えた。

「お呼びいただき恐悦至極、ですが……お呼び下さった方ではないように感じられますね、それにココは一体どちらでしょう？」

低めの声色で交わされた挨拶、それに含まれるのは召喚者は何処かという問い。

ついでに場所も聞かれているが、一度に多数の質問は今の早苗には答えられないらしい、床の板目を見ていた視線は見知らぬ誰かの顔に向いているが、色々考える事が出来てしまったようで、質問に答えるどころではないらしい。

鍵はしていたはず、誰？

呼ぶって何？

見た目日本人じゃないし、ALTの先生かな？

でも、日本語上手だし、角付いてるし……あ、角ってハロウィン？  
それなら董子ちゃんの知り合いかな？

今の早苗の頭の中を書き起こすならこんな状態。

どうにか理解しようと、よくわからない事を言ってきたこの外国人を見つめ考えているが、いくら考えても答えは出ない。当然だろう、早苗の考えられる答えの内にはこの者、書から呼び出された黒い羊の悪魔、アイギスはいないのだから。

固まり考える女子高生、それを眺め返事を待つスーツの麗人。

幻想の地で一度滅し、現代に呼び出された悪魔と、後に幻想の地にて異変を解決して動く風祝が、なんとも言えない微妙な形で出会いを果たした瞬間だった。

## 第六十七話 悪魔が見る少女の現風景

ペコン。

すっかり明るさを取り戻した一室で軽やかな音が響く。

無機質で軽い音は冷えたスチール缶から発生していた。

机の上にはプルタブが切り取られた細長い缶が置かれている。

ソレを手にし、口元に運んでからすぐに置いたのは、今し方この飲み物を教わった者。

少し前までは黒く厚いカーテンに覆われた部室、旧校舎の旧視聴覚室を強引に奪い陣取った秘封倶楽部の現部室内で、久方ぶりに外の世界に姿を見せた悪魔がソレを口にした：：が、一口飲んで無言で缶を置き、見つめている。どうにも甘すぎて口に合わないらしい。

缶の縦方向に対して横向きに『coffee』と書かれた文字を眺め、今時の珈琲はこれほど甘ったるい物になってしまったのか、これならばこの国を訪れた時に飲んだアレのほうがまだマシだ。そんな事を顔に書き、対面する相手へと見つめる先を変えた羊。

視界に入れた相手は人間、その顔、というか頭。

アイギスが長く過ごしていた世界の外にいる人間、言うなれば現代人というべき者である。

向かい側の椅子に腰掛ける彼女から手渡された黄色地に黒波模様が目立つ缶を置き、小さな咳払いをして、見つめてくれるだけで言葉を交わさない相手を眺む瞳。それは赤黒く濁り、この世のものとは思えない色合いを讃えているが、その目に映る少女も、何処と無く浮世離れしている髪色をしているように見えなくもない為、ついつい視界に入れてしまっていた。

例えるならば、芽吹いたばかりの新緑に影を指したような髪色の少女。

ぱっと見た風では黒髪だが、日光を通すと緑が透けて見えそうな、言葉通りの緑髪を背に流す少女。真っ直ぐでツヤのある髪を背に流し、左側の一房を真つ白な蛇という珍しい髪飾り、愛してやまない方々から頂戴した物で纏め、揺らす彼女も見られている事に気が付

き、手にしていた缶ジュースを机に置いた。

中身の無い金属音が小さく室内に響くと、顔を合わせ差し入れを手渡してから続いていた無言の空間がやっと崩れた。

「どうも……初めまして」

「はい、お初にお目に掛かります」

早苗から探り探りなご挨拶が言われ、座ったままでアイギスが軽く頭を下げる。

大きく目立つアモン角が対面の少女、東風谷早苗の視線に嫌でも入り込む。顔を見合わせた瞬間には作り物、ハロウインに被せて行われる文化祭用に購入した物でも付けているのか、などと考えていた早苗だったけれど、明るくなつた部屋内でマジマジ見ると作り物には見られない。

「えっと、いきなりなんですけど、ちよつと、色々聞いてもいいですか？」

「お答え出来る事であれば……後ほど私の質問にもお答え頂けるのでしたら、お答え致しますよう」

出会いからまだ十分弱の二人。

だのに唐突に聞いてもいいですかと、直球勝負で話を振ってくる早苗。流石に失礼かも、そんな頭はあれど突然現れた見慣れぬ相手、よくわからないが、なんとなく良くないと感じる雰囲気を持つ相手に対し、警戒代わりに言ってみようだ。

最初は董子の知り合いかと考え、向い合つて、取り敢えずのコーヒブレイクを過ごしてみたようだったけれど、一息ついて冷静になつてからはあからさまに怪しいと、彼女に宿るナニカが告げてくれたらしい。

「じゃ、あの、A L Tで来日してたりとか、します？」

挨拶を済ませての質問。

全く知らない相手だが、もしかすると、万が一にもないだろうが幼なじみの知り合いかもしれない相手、そんな彼女アイギスに対して取り敢えずの挨拶を交わし、次いで浮かんだ疑問を述べる。

少しだけ肩を竦めて、そうじゃないんだろうなどと、漂う雰囲気や流暢に話される日本語から理解しかけている早苗が、探るように話しか

けた。

「ALITとは？」

「英語の先生だったり、します？」

今現在ののように、過去には幾度も呼び出され、その度に力や知識と  
いったモノを欲した輩がいた。そういった信者に近い者達に対して、  
見合う力や知識を押し付けて、その場で報酬というか糧として美味し  
く頂いてきたのがこの羊の悪魔である。

今回も類に漏れずそのようになる。なるはずだったのだが、今すぐ  
にそうなる事はないようだ。

それもそのはず、今の彼女は腹も心も満ち足りていて、十二分に満  
足しているからだ。

ここに呼び出される前までは鉄火場にいたはずの彼女。鼻に付く  
薬の匂いを追って兎と戯れていた、そこまではしつかりと覚えてい  
て、その後の記憶が曖昧だが、気分は曖昧どころで晴れやかだった。  
乱れた記憶に残っているのは愛する吸血鬼と争ってそれが心地良い  
じやれ合いになった事と、その場にいた、今までは歓談しかしてこな  
かった友人にトドメを刺された事だけであるが、それが非常に楽し  
く、同時に強く育ってくれた事が嬉しいらしい。

争い、滅してくれた相手に向けて感じる気持ちとしては歪んでいる  
が、滅ぼされては呼び出されてを繰り返している悪魔からすれば歪み  
のうちには入らないのだろう。

「ないですね。授けると、呼び出した者達からは多々言われ続けてき  
ましたが、物事を教える立場にはございませぬね」

穏やかな物腰で返す羊、聞かれてもいない事まで言い返している辺  
りに機嫌の良さが伺える。

前述の内心から上機嫌というのもあるが、話に付き合う理由は他に  
もあるようだ。その理由も至極簡単、呼び出された場所には召喚者が  
いなかったというのが一つ、そして変わりにいたのが美味しそうな少  
女だというのが二つである。

前者についてはいないのだから仕方なしと、今は頭の隅に置くだけ  
のようだが、後者に向けては、見た目も良く、何かしらを身に宿して

いる事が髪色や、嗅げる人以外の匂いから察した黒羊が、墮としてしまえば面白くなるかもしれない人間だと感じているらしい。

多少慣れ合い、心の端にでも取り入る事が出来れば人の子を墮とす事など造作も無い、が、並ぶ本や室外から聞こえる他の話し声等から、呼び出し先が見知らぬ地に成り果てた日の本の国であると察した今は、この地の少女と少し語らい情報を仕入れてから動こうとしているようだ。

「やっぱり、そうですね……じゃ、その頭のつて……本物？」

「角ですか？ 間違いなく私の物ですが、気になるのでしたら触れてみますか？」

前傾するアイギスの頭。

気になっていたものが少しだけ近寄る。

そうなっても動かなかった女子高生の食指だったが、微かな笑い声がアイギスから漏れ、再度なんなりとどうぞ、と聞こえた後で好奇心に負けたようだ。

恐る恐る伸びる早苗の手、中指の先だけで微かに触れ、右巻きの羊角を薄く撫でた。

その動きと触れ方に囁くような笑い声で返す黒い羊。

「あ、なんかダメでした？」

「いえ、殴られる事はあれど、繊細に触れられる事などありませんでしたので、少しくすぐったいだけにございます……中々どうして、こういった触れられ方も悪くないものですね」

おっかなびっくり触れる早苗にアイギスが微笑みかける。

種族柄、魅了といった事が出来なくもない悪魔の微笑みが見えると、それに促され少し気が緩んだのか、少女の顔も僅かに緩む。表情が和めば空気もそれに見合った物になり、少しずつではあるが早苗から緊張感が抜けて、年頃の女子らしい活発さが動きを見せ始めた。

最初は撫でるだけだった指が摘んでみたり、巻きに沿って爪を沿わせてみたり。巻きの根本に生えた黒髪に触れば、くせ毛のふわっとした感触を楽しんでみたり、奥から頭を出した耳に驚いてみたりと、小さな事でテンションが上がっていく。



そんな相手を窘める、つもりはないが話が進まないの、ここいらで切り上げる事にした羊が笑んだまま問う。

「堪能して頂けたのなら嬉しいですが、そろそろご満足して貰えると尚嬉しいですね。このままでは話も進みませんし」

「え、あ、はい。ごめんなさい、もう大丈夫です」

何がどう大丈夫なのか、テキトウで悩ましい事を口にした現代っ子。

その顔にはもうちよつと触れてみたいと書いてあるように見えたが、挨拶代わりの触れ合いはここまでと目を細められ、考える先を変えていった。

「では私から伺ってもよろしいでしょうか？」

よろしいです、気を入れ替えるように纏め髪を撫で、見つめる早苗。流れからいいと返してみたようだったが、その実彼女にも質疑が残ってはいた。

触れて確かに感じたモノ。動物でも人でもない異質な感覚。どちらかと言えば住まう神社におわす二柱に近い側の感覚を触れた指から感じ取っていた。少しだけ雰囲気に酔い遊んでいたが、彼女自身も人間の枠組みから少しだけ外れている者だ。今は自覚こそないが、実際に取り触れれば異質さを感じ取る事くらいは出来るのだろう。

少女が見せるハの字眉と愛想笑い。

人外と知った相手から何を聞かれるのか身構えた、この表情にはそんな姿勢が含まれるのだろう、それくらいはアイギスにも読み取れなくもないようだが、そこまで気を使ってやるほど二人に親交などはない。故に聞きたい事だけを聞くつもりのようなのだ。

「まずはそうですね……」

笑んだまま、いつものように表情だけは穏やかなアイギスが語りかける。

対して笑う少女の顔に、苦々しさが混ざっていく。

ざっくりと、何を聞かれるのか？

雰囲気からは会話の出来る相手だけれど……少しだけ考え、思い出し、見る。

横目で見たのは古い洋書、この悪魔が入っていたという書物をちら見してこれからどんなお話になるのかと、腿の上で揃えている右手に少しだけ力が入り、スカートに皺が入る。

「そう緊張されずとも、大した事は聞きませぬよ？ 困らせるつもりもございませんので、落ち着かれては如何でしょうか？」

全校生徒の前でスピーチでもし始めそうな早苗に微笑みかけ、少しほぐそうと話すアイギス。

左手はこういった時に見せる癖なのか、おさげを纏める蛇のアクセサリーを自然と撫でている少女に伝え、微笑う。

言われると、少し可愛い顔をした白蛇を一・二度撫でていた左手を膝に、両手を揃えて背筋を正した。そんな姿を見て、ようやく話が出て来そうだと口を開きかけるが……悪魔の唇よりも先に部室の扉がバアンと鳴った。

「早苗ちゃん、おっそいよ！ いつまで待たせるの!? って、誰？ 外国人？ ああ先生か、帽子は……あつたんじやない、もう！ 見つけたならすぐ戻って来なよ！ お陰で会議が進まないよ！」

一度アイギスを見るが、すぐに早苗に向き直し聞く女子高生。

拾われ、机の端に置かれた帽子に気付くと手を伸ばし取ろうとするが、手にする前に動きを止められる。勢いよくまくし立てたて彼女を止めたのは早苗の呆れ顔と指、人差し指で差される方にもう一度視線を流す。

「何？ 先生がどうし……ん？……んんん!？」

二度見してから唸る童子、取り戻した帽子を取り、斜めにした頭に乗せ、一人騒ぐ。

一通り唸ってから、こいつは誰だ、いつからここに居るの、等と早苗に聞いているが、正しい答えは当然返ってこない。

返事がないと余計うるさくなる年頃の女子。

静かだった部室が賑やかになる。一人増えただけで随分と騒がしい。背負うマントはひらひらと、目元と口元は二人の間をキョロキョロと。見た目から忙しい少女が驚いたままでアイギスに近寄り、角に触れたり、顔を寄せて目と目を合わせる。

「うん、違うね、今期の先生はアングロ・サクソン系っぽかったし……っていうかその、角！ 角！ その目も！ あれ!? もしかして、本当に召喚出来ちゃったの!？」

覗きこむ董子の眼鏡にアイギスの目が反射し、映り込む。

それほど強制力はないのだろう、変に歪んでしまったり、伸びてしまったりはせず、綺麗に淀んだ赤の瞳が反射した。

「はい、召喚に応じ参上しました。一介の悪魔にございます。以後お見知り置きを」

ニコリ、久方ぶりの営業スマイルを見せる黒羊。

ぱっと見た雰囲気は気安くて話しかけやすそうな笑顔、商売人が客に見せる下心満載の笑い顔といった風合い。そんな顔のまま存在を伝え、返答を待っているが……召喚した側からは喜びよりもなんと  
いうか、困惑満載の反応が伺えた。

「あく、あのさ、本当に来ちゃったの?」

バツが悪い、亜麻色の髪を雑にかく少女が仕草で語る。

対してはいと、一言に言い返すアイギスであったが、ソレにも苦笑いで返す召喚者、宇佐美董子。

彼女がこんな顔になってしまっても無理はないだろう、あのくらいの事、どこかのマンガやアニメで聞いた言葉を唱えたくらいで本当に召喚出来るなど夢にも思っていなかったのだ。

「えっとね、呼び出しちゃった私が言う事でもないんだけどさ……あんな漫画の呪文でいいの!? それでいいの!? ねえ!？」

何かに憤る女子高生が騒ぐ。が、それで構わないと言い切られ、更にやかましくなった。

もうちよつと悪魔としてのらしさを持ってだとか、あまりにあっけなさ過ぎて暴くつもりが拍子抜けだとか、自分に都合のいい事を喚く。

聞く限り、召喚出来ると考えてはいなかったが、どうやら秘密を暴くつもりもあつたようだ。

古本屋で見つけた悪魔辞典っぽい書物。古書と呼んでいいレベルのそれに描かれたアイギスの挿絵を見て、悪魔なら山羊だろ、羊ってなんだよ、面白いなと気に入ってしまった、慣れない短気アルバイトま

でして買ったのだから多少は苛立っても致し方無い事であった。

それから暫くの間、ピーピー文句を吐き続ける童子。

目にも耳にも喧しい女子高生、言われる文句に対し途中で言い返そうと口を開きかけるアイギスであったが、何かを言い返そうとする度に新しい文句が投げつけられ、返そうにも返せないような空気に場が包まれていく。

こうなってしまうっては情報を仕入れるどころではないが、だとしてもアイギスには手が出せない状態であった。騒がしい相手は呼び出した召喚者である。呼ばれた悪魔からすれば煩いと窘めたり、場を離れるなど無碍にしたりも出来ない存在である、契約を果たし仕事を終えるまでは。

致し方なし。

先ほどとは別の苦笑いを浮かべる早苗を視界の端に捉え、瞳の中心には喚く召喚者を収めながら、穏やかな笑みのままで文句を聞き続ける悪魔が少し思う。あちらの世界でも、こちらの世界でも。昔も今も、青々しい少女が騒がしい事に変わりはないのだな、と、笑顔の裏で何かに納得していた。

く少女喧騒中く

賑やかな学内とは打って変わって静かな建物。

その手前で一台の車が数秒止まった後、Uターンし、去っていった。

背が高く、ルーフにはボードキャリアを搭載した一台の自動車が先を曲がり姿を消す。

雪を楽しむには少し早い今時期、きつと彼らは今期の下見にでも来て道を間違えたのだろうか。強めにアクセルを踏み込んで遠くに望める山方面へと、賑やかなエンジン音を鳴らし離れていった。

この場所を訪れる者は少ない。

昔は多くの人が訪れ、頭を垂れては願を唱え、時には童子どもの格好の遊び場となっていた人の集う場所、集うべき場所だった……が、今では日に日に廃れていくのが目に見える場所である。

今のように、極々稀に誰かが来訪したとしてもこの建物を目指しての来訪ではない、偶々入り込んでくる連中の大概は先のような雪目当

てのスキーヤーか、スノーボーダー。秋めく今であれば近くの野山に  
自生する山菜や紅葉目当ての連中ぐらいだろうか。

そういった連中、遊興を求めて来た若者連中にも一応見られる  
が、この建物がどれほどに立派なお社に見えても、同じく立派に  
そそり立つ御柱が目に残っても、立ち寄って参拝しようとはしな  
かった。

造り自体は大層立派だが、ここは人の気配がしない神社なのだ。

一人娘が頑張り、日々掃き清めているがそれでは賄い切れず、参道  
の端々は苔生して滑りそうなほどで、本殿で目立つ注連縄にもほつれ  
た部分が見られるような場所なのだ。そんな所、評するならば人々か  
ら忘れられてかけている神社、こんな所に他所から遊びに来ただけの  
人間が興味を示すことなどはなかった。

誰もいない参道に葉が舞う。

細く、力強さの感じられない風が木の葉を散らす。フワリ舞った紅  
葉樹の葉が散らかると、誰もいなかったはずの神社に人影が見られる  
ようになった。

「今年も嫌な季節が来たねえ」

一人語る影。

現れた位置から少し歩いて、木々の間から姿を見せる。

逃げるように去っていった車の方向を眺めるその影は女性だった。

日の入りが早くなった神無月の日を浴びて、紫がかかる髪を薙ぐ風に  
靡かせる女性。

その背中にある、本殿に見られる注連縄と同じような、神錆びたよ  
うな縄から伸びる紙垂も、髪と同じく揺らしている。

「来ないなら来ない、そうしてくれた方が諦めもつくんだが、この季節  
は嬉喜びさせられるから嫌だね」

続く独白。

言い切ってから嫌だ嫌だと、自分に向けての愚痴を吐く。

誰が聞いているわけでもないのにボソボソと、組んでいる腕を僅か  
に緩めて。

「また文句かい？ 諦めが悪いなあ、神奈子は」

誰かの話声。

姿はない、が、口振りから独り言を聞いていたらしい。

愚痴を吐いた女、この神社に祀られる、本来であればこの社におわす祭神として人々に崇め奉られて然るべき神に対して気安く、まるで家族に言うような声色で、あつけらかなと言いつ返し返される声だけが聞こえた。

「ただの愚痴さ、覚悟は済ませているよ。それよりも今日はどうしたんだ？ 早苗ならまだ帰ってこないよ、諏訪子」

姿なき相手に語る神。

見えない者相手に語る事も神であれば容易いのだろうが、今の会話相手は見えない者ではなく、今は見えなくなってしまった者だ。

返事を寄越したのはこの神社に祀られるもう一人の祭神であり裏の祭神である、洩矢諏訪子。元々は彼女が正当な祭神であり、神奈子は別の地より来た神ではあるのだが、それは今必要な事でもない、割愛する。

「帰ってこないだけならいいんだが、どうにも悪い予感がしてね、何かに起こされたのさ。お陰で気分まで悪いよ」

「なら二度寝するなりしたらいい。帰って来たら起こしてやるから、その後で久々に卓を囲もうじゃないか」

「そうなればいいねえ……帰ってこれない、にならないけりやいいんだが」

「それは、どういう意味だい？」

「さあ？ 明確な相手まではわからんが、あの娘は良くないのに触れたみたいだ。こいつは今時珍しいね、真つ黒なモノを腹に貯めこむ輩なんていつ以来だ？ あの気に入らない妖怪が姿を見せた時以来か？」

「胡散臭かったあいつか、あれも腹に一物どころじゃない様子だったが……なんだい、そんな奴がこの現代に残っているってのかい？」

誰かを思い出し、話す二柱。

話題の妖怪がこの神社を訪れたのは今より数年くらい前、早苗が小学校に上がるか上がらないかといった頃合い、この二柱が口にした

『覚悟』を済ませてすぐくらいの事だったようだ。

口に出すと思い出される夜。

これまで過ごしてきた毎日と変わらない、何の変哲もない夜に、あの妖怪は降りてきた。

言われた通り胡散臭い笑みで、その顔を扇で隠して。

く二柱想起中く

## 第六十八話 神、錆びた戦場にて

それは彼女達からすればなんでもない一日だった。

完全に暗くなりきれない夜が過ぎ、昔よりは霞がかって見えるようになった日が昇り、境内からは餌を食む小鳥の囀りが聞こえてくる朝、よくある朝。いつかの終わりを迎えるための一日が始まっただけのはずであった。

そういつたよくある朝を迎えた者。

この建物の中で一番早く目覚める女が、寢床から起き上がる。

気怠い半身をどうにか起こし、整った口を大きく開くと、神聖な白蛇のような指を添えてあくびを隠す。一緒に住む二人は未だ目覚めていない、それでも食事中の爬虫類みたいに開けた大口は少し下品だと考えていて、誰にも見られはしないが隠した。

「晴れたかね、いい天気だ」

少し寝ぼけた眼を擦り、閉めきった障子を見る。

透けて見える日差しは明るい。口にされた通り、外はいいお天気なんだろう。

これならあの子も楽しんできそうだな、そんな事を頭に浮かべ、一人笑って起き出した。脳裏に誰かの笑顔を思うと、寝起きというのが嘘と言えるくらいの勢いで立ち上がる。それから着替え、朝の日差しのような金の御髪を緩く纏めて、気合を入れた。

「さて、ちやつちやと作るか」

独り言を漏らし台所へと向かう彼女。その足は軽い。

軽快に、それでも軋む廊下を気にして静かに進み、洗顔などの身支度を済ませると、年季の入った包丁片手に仁王立ちする少女。どうやらここが入れた気合の見せ場所らしい、長く垂らす袖を絞り腕まくりまでを流れて済ませ、テキパキ動き始めた。

シンクの端で薄く浮かぶ錆など気にせず米を研ぎ、濡れる手を蛙の大きなアップリケが目立つエプロンで軽く拭く。炊飯ボタンを押すと同時、流れるように動いて、黄ばんだ冷蔵庫へ手を伸ばす。色あせたカエルのシールが多量に張られた扉を開き、数個並ぶ卵から2個取



り出して溶くと、火加減を見もせず綺麗に黄色で焼き上げた。サツと切り揃え、薄く湯気が立つ卵を眺め、小さなお弁当箱につめていく。

「今日はどうするかな？ この間は……なんだったっけか……」

作業中の独白。

卵焼き二切れとプチトマト、彩り代わりの茹でたブロッコリーがちよつとだけ並ぶ弁当箱を見ての眩き。漏らしたのは何かを思い出すようなお小言だったが、残念ながら考えていた事は思い出せないようだ。

その後も数分悩んでいたようだったが、悩む間でも時は進んでしまふ事は思い出せたのか、すぐに動く。冷蔵庫から赤いウインナーを取り出して何も考えず切れ込みを入れ、さつと湯で上げて切れ目を花開かせると、チョココンと置いた。

「悩んだ時はこれだな、やっぱり」

空いていたスペースに座るタコさんと一方的な会話。

黒胡麻であしらわれたつぶらな瞳から間違いないという返事を聞くと一人頷き、愛用されている、柄でカエルさんが笑う小さなフォークを巾着に入れて微笑んだ。後は炊き上がった米でおむすびでも握って詰めればお終いだ、そのお米も後少いで炊きあがりだろうし、そろそろ二人を起こして朝餉にするかと、母のような姿で動き出す。

来た廊下を戻って、先の角を曲がれば弁当箱の持ち主の部屋となる。丁度その辺りまで歩んだ彼女だったが、部屋の中から何か声が聞こえたのでふと立ち止まった。

「ほら起きな、早苗？ 朝だよ」

「……ん……さなえはも……食べら……お芋さんでお腹いっぱい……」

「それはこれからだろ？ 早く起きないとお芋掘りに遅れちゃうよ？」

聞こえてくるのはこんな声。

起こす側の声色は穏やかで優しい。

大昔、この地に攻め入って来た頃は太く逞しい力強さばかりが目立っていた声の主、八坂神奈子だというのに、一時期は気に入らな

かったこの社の御柱のような存在だったというのに……今発している声からは包み込むような包容力くらいしか感じられない。

「誰に似たのか、あの子も寝起きが悪いからねえ。うちの祭神様でも苦戦するか」

そういったやりとりを聞いて一仕事終えた彼女、洩矢諏訪子がケロケロ笑う。

昨晩は一緒に寝た部屋の二人。寝る前からテンションが上がりきっていて、すんなり寝付く気配がなかった早苗をどうにか神奈子が宥めて寝かしつけたようだ。夢に落ちる間際まで、明日雨が振つたらどうしよう、一緒にてるてる坊主を作ってください、そんな風に騒ぐ声が諏訪子の耳にも届いていた。

暫く賑やかだったけれど、私がどうにかしてあげるから大丈夫、という祭神の神託を切っ掛けにはしやぐ子供は眠りについたらしい。それでも早苗を宥めるのは中々に大変だったらしく、寝かしつけた神奈子もそのまま一緒に寝てしまったのだった。

そんな昨晩を知る諏訪子の軽い笑い声が朝の社を抜けていくと、頑張つて夢の中から掘り起こそうとしている神奈子から、諏訪子助けて、なんて声が返ってきた。

「やっぱりに手にも負えないのか、先が楽しみな子だよ、本当に」

聞こえてきた救助の声も笑つて、この社の崇り神が起きない娘を起こしにいった。

く少女起床中く

「では、やさか様、すわこ様。さなえはいつてまいります！」

炊きたてのご飯をたらふく食つて米にも負けないツヤツヤ顔の子供。この春に小学校に上がったばかりの早苗が言うにはおおよそ子供らしくない、丁寧な挨拶が狭い勝手口内で響く。

形に合わない言葉遣いと感じられるけれど、コレは同居する神からこう言えと仕込まれたわけではなく、極偶に訪れる歳を召した参拝者の言葉遣いを覚えそれを真似ているだけだ。

他人の真似事などして、と、親がいるなら躰けるべきなのだろうが、親代わりとなつて二柱は気にしておらず、寧ろ綺麗な言葉遣いを正す事はなくそのままにして愛でていくくらいだ……見ようによつては幼子らしい背伸びとも取れるので、ここは放っておいても差し障り無いだろう。

事実、背伸びをしているのは言葉遣いだけで動きの方はまんま子供である。

幼い手に握られた可愛い巾着は詰められた弁当の重みで揺れていて、その揺れに小さな身体は負けているし、挨拶を言い切つて駆け出す姿は風の子と呼べる勢いがある。挨拶と同時に下がる頭。勢い良くペコリ。出掛けに見せた頭頂部の後ろには真つ赤なランドセルが見えたが、今日はそれは要らないだろうと言われリュックを手渡されると、はにかみながら背負うものを入れ替えた。それからすぐガラツと勝手口を開け放ち、少し走り出して、何かに気がついたのか一旦戻つて戸を閉める幼女。

「慌てないで、気をつけて行つといで」

「土産はいいから、楽しんできなよ」

戸にはまる磨り硝子越しに見える姿、それから届く、はくい！

返事は少し離れた位置から聞こえた。今朝も変わらず元気に出て行つたな、と、お出かけの挨拶を済ませて走り出していた早苗の背に向かい、神奈子が手持ちを打ち鳴らす。

迎えに来ているはずの近所に住む眼鏡っ子と早苗の背中、今頃は手でも繋いで歩いているだろう方面を向いてカチカチ、両手に持った火打ち石から小さな火花を飛ばすと、これも諏訪子に笑われていた。

「見せたくないならやらなきやいいのに」

「安全祈願だ、やらんわけにはいかん」

「それならちゃんと教えたらいいのさ、あの子ならわかりましたつて言つてくれるよ……」

面の祭神の手に収まる石、使い古された瑪瑙めのうを見つつ笑う裏の祭神。朗らかな一笑いを済ませ悪戯な舌を覗かせると、笑われた方は少しだけ気まずそうな顔で言い返す。

「そうしたら早苗もやるって言うだろう？　火遊びするにはまだ早いよ」

「確かにそうだろうけどさ……過保護だねえ」

「気合入れて弁当作る誰かに言われたくないなあ」

互いに軽口叩き合う二柱。

言うだけ言ってから顔を見合わせて笑む。今見せている顔も朝と同じく穏やかだが、早苗が住まいを離れた今は、どこか達観しているような笑みにも思える。

「しかし火遊びか、そんな事を覚えて、叱って……叱るような頃までいられるかねえ」

「いられるさ、孫を見るまで私は消えん」

「お、強気だねえ諏訪子……孫なあ、何年先になるのやら」

「なに、すぐだよ。早けりや後十年、遅くても二十年先には見られる。それくらい、私達にとっちゃ待つうちに入らないだろ？」

だから大丈夫。自分に言い聞かせるようにそう言っつて、先に奥へ戻る諏訪子。

自問自答に近い質問を投げつつ振り返り、背を見せると小さなあくびをしながら住まいの影へと戻っていった。早くから台所仕事で動いていたから眠いというわけではない、神社として、神としてうらぶれて久しいこの者達と場所である。ここを訪れて信仰心を届ける人間がめつきり減った現在では彼女は長く起きていられない。人に想われて力を得るのが彼女達『神』あり、今のように殆ど忘れられてしまった状態では常に現世に留まるような事は出来ない、が、早苗がいる間だけは過去の貯金を切り崩し、はつきりとした姿を見せているらしい。

「違くないが、貰い手がないって事は考えないのかい？　泣かせるような変な男に捕まる事もあるかもしれないよ？」

神奈子が消えた姿に返答をする。

身内可愛さが多分に混ざる親神から見ても早苗は可愛い。春の陽気に透ける髪も、夏の日差しに汗ばむ顔も、秋の日暮れに見せる寂しい後ろ姿も、冬の寒気に吐く弱々しい息も、その全てが愛らしいと言

えるほどで、そこから先を思えば貰い手がないなんて事は考えられない。

けれどあの子は素直すぎて……その素直さを忘れず今のまま成長すればいずれ誰かに騙される、そうなった時の相手が恋中の男で、泣かされるような事があれば、と、まだまだ心配するには早過ぎる事を口にする八坂の祭神ではあったが……

「そんな男が来たら全霊で以て崇ってやるさ、うちの子を泣かした己を恨むがいいってな」

余計な心配を推し進める神社の顔に、消えた裏の顔から返事が届く。送り出した子がいた間には聞かれなかった、とても落ち着いて、酷く冷め切った声色で語られるお返事。

推測だが、神奈子が考えた通りの状態となれば諏訪子も今言った通りの行いをする事だろう。あの子が泣くのならその原因をどうにかする、諏訪子が諏訪子らしい力でもって、全力で相手に対してナニカを行うだろう。けれどそうなるまで後何年もあるのだからと、今の二人はこの会話を冗談と捉え、笑って流していた。

そうせねばならなくなる夜が、今晚訪れる事など知らずに。

く二柱談義中く

烏が鳴き出し、朝出た童子が戻った夜半。

『早苗は頑張りました、それで甘い香りのお姉さんに褒められました』  
『でも董子ちゃんもつと頑張っていて、先生でも抜けなかったお芋さんの弦を引っこ抜いてました、ちよつと触っただけなのにどうやってんだらう?』

なんて、一人娘が持ち帰った土産話を夕餉と共に楽しんだ後。

夕食を作った誰かと、芋を食い過ぎてやや胸焼け気味な誰かが、本殿から正面に伸びる廊下に腰を下ろして話し込んでいた。聞く限り、今晚の話題は食事時に話された事のようにだ。

「楽しんできたようで。朝から頑張った甲斐があつたね、諏訪子」

「そうだね、いつも思うが空っぽの弁当箱が返ってくるってのは気持ちがいいもんだ」

代わりにリュックは重たかつたね、そういう神奈子が苦笑する。

ただいま帰りました！戻ってきた早苗の顔は土一度で汚れて洗ったような顔をしていて、鼻の頭にはトランプ柄の絆創膏が貼られているくらいだった。背負うリュックはパンパンで、本人から何も聞かなくとも頑張つて、楽しんでできたのがわかる姿だったようだ。

帰ってきて夕餉を食べ、土産を話して風呂に入り、夜の帳と共に寝た、元気で愛しい子を想う二柱。

「それにしてもあの眼鏡っ子だね、ただの近所の子だと思っていたが早苗が驚くような力があつたとはね」

「素養があつただけで表立つ事もなかつたんだろうよ。年中早苗を見てくれている子だ、強まり始めた早苗の力に引つ張られて表に出てきたのかもしれない：：今迄のようにまた遠ざけるのかい？」

山坂の神が少し真面目な顔を見せ、問う。

遠ざけるといふのは物理的に距離を取らせるといふ意味だ。直接産んだわけではないが早苗は諏訪子の子孫に当たる、言うなれば神の血を引く者で、成長の仕方を間違わなければ現人神となり、人心を纏め崇められる存在にもなれる。なれるはずだった。

けれど今現在そんな流れにはなっていなかった、二柱がそうしようと考えていなかったのだ。神が神として必要とされなくなった現代において、愛する娘を態々生きにくい立場にするつもりがなかったからだ。今の早苗は人として暮らし、人として笑っている。その姿は幸せな姿に見えて、それを壊してしまう事を二柱は恐れ、避けていた。

それでも回りからの影響は大きなモノがあり、中には早苗が触れ合えば神としての御力に目覚める切っ掛けになり得てしまう事もあつた。そういつた超常めいたナニカを見つけては、早苗と関わる前に崇りの御業を用いて遠ざけてきた諏訪子だったようだが。

「そうするには遅すぎる、今更そんな事をすれば早苗が泣きやまなくなるからね。それにだ、あの子一人にならないとわかつたんだ、それならそれでいいさ」

「董子といったか、あの子まで神として成り上がるとは思えんが：：気がつけなかつた私達が語る事ではないね」

「そうだよ、神さびた私達では読み切れない事も多くある、多くあるよ

うになつてきたんだ。ならばは若者次第つて事にしてもいいじゃないか」

「然もありなん。神さびたと言えはだ、他の連中の話も聞けて思い掛けない土産話だったねえ」

「ああ、意外としぶとかつたみたいだね」

美味しいご飯を頬にくつつけながら楽しそうに話し、今では同じく楽しい夢の中にいるだろう早苗の顔を思い出し笑っていた二柱であったが、話題の中心が愛娘から土産話の方へとズレると少しだけ表情を変える。

いい話だったと語った諏訪子は昔を思うような顔に、聞いた神奈子は誰かを思い出すような、昔を懐かしむような顔になっていく。

「ふむ、諏訪子もそう考えるか」

「早苗が見た者だ、間違いはないさ。それでも未だ健在だったとは……秋のは意外と信仰されているのかもしれない」

「社はないと聞いているが……この国は今でも農耕が盛んだし、もしかすると今の私達よりも信仰されているかもしれないね」

「それはないんじゃないかな？ 気がついたらすぐ消えたという話だ、強く信仰されたままだったのならもう少し違った現れ方をするもんじゃないかね？」

「かもしれないが無事ならそれで十分な事さ……姉も健在なのかねえ？」

真面目な顔になると口される内容も顔つきに似たものになる。

静かに語られるのは他の神様についてのようだ。

早苗が見たというのは秋を司る豊穰の神の事だろう、芋掘りなんてまさにあの妹の為にある行事なのだから。そんな催し物に早苗のような人よりも神に近い者が混ざっていれば気にならないわけもない。もう一人くらい人外に近い力を宿した者もいた遠足だったのだし、信仰という力を失い、消えかけている神様が釣られて顔を出してもおかしい事ではない。

「だといいいねえ。今朝も思ったが最近はこの事を考えてばかりになつたなあ、切辛い世になつたものだ」

「この地を奪っておいて世知辛いなんて、どの口が言うんだか」

「然もありません。諏訪子に窘められるとは、私も焼きが回ったか」

全くだ、頷く諏訪子と苦笑いの神奈子。

それでも今朝の話を思い出して破顔する。まだまだ終わるつもりはない、暮らしにくくなってしまうけれど、あの子の成長を見届けるまではこの世で頑張るつもりだ。二人だった。だったのだが、唐突に声が増える。

「でしたらもう一度世渡りされては如何でしょう？　今なら招待状付きでご案内致しますわ」

増えた誰かの第一声。

忽然。そのようにしか言えないタイミングで聞こえたその声は今のような景色、背の高いビルから漏れる灯りのせいで夜になりきれない夜に似合いの、非常に曖昧で胡散臭い声に思えた。

そんな声の主は二人の視界の中にいない。姿は見せず誘いの言葉だけをかけているようだ。

「姿も見せず盗み聞きか、趣味が悪いな」

「我の社に入り込む者、誰ぞ？」

誰かの誘いが聞こえても動かない二柱。

縁側に腰を降ろしたまま、それでも態度だけは変えて。柔らかだった今までが嘘のように、大昔恐れられ敬われて頃の声で見えない何者かに語る。

「こんばんは、そして初めまして。まずは夜分に訪れた事をお詫びいたしますわ、明るい時間帯は苦手です」

神からの問に答え、姿を見せる。

正面、二柱の視界に入っている鳥居に腰掛けて、立ち位置だけは上にいるよう場所で脚組みしている女。長く伸ばした金髪は今晚の月明かりに似ているが、照らされる格好の方は不吉な朝焼けを思わせる紫色のドレスに、朝の日差しを避ける為の傘を差すといった様相で、明るい時間が苦手なんて言葉を否定しつつも肯定するような、朝と夜両方が感じられる姿。

それでも口振りは穏やかで、相手の事を考える気遣いまで伺える



……ように見える。

「詫びなぞいらん、私の社に何用か？」

夜のご挨拶を受けた者、この神社の主である神が返す。

丁寧さの見える初対面の挨拶に対して完全に上から目線で言い返していく。実際に天上におわした経験のある彼女だ、突然訪れた女に見下す目線で語っても当然ではある。

「何用と仰られましたも、すでにお伝えしておりますのに」

薄笑い、そんな顔のまま返事をした女。

力強い腕を組み、目を細めている社の祭神からの問いかけに対してもう言ったと返す。その物腰は柔らかだが、言葉に含まれる物には非常に嫌らしい味がしそうだ。

「神を煽るなど不届きな輩であるな、神罰を恐れていないと見える」

「怖い事などありませんもの、罰せられる事など何一つしておりませんし。今はまだ」

「……大根役者だねえ、わざとらしさが見えすぎてあからさまに胡散臭いよ？ 妖怪ならもう少し化かすなりするか、芝居でも習うかしちゃあどうだい？」

「そう言われる事にも慣れておりますので必要ありませんわ。後半も身内で間に合いますわね」

「身内ね……そうか、貴様が」

誰か、言い切る前に怪しい女が動く。

組んでいた足を組み直し、左足から右足を上にしながら愛用の扇を取り出した。そうしてそこから当然の流れで口元に持っていき開く。座る二柱の視線から丁度瞳だけが見えるよう、普段よりも少し低い鼻の辺りを隠して笑う女、八雲紫。

「あらあら、二柱に存知上げられているとは嬉しい限りです事。宜しければどういった知られ方なのか、お話頂きたく思いますわ」

「狐を連れた雌狐。一介の妖怪の身の上で神の御業を自分の行いだと言いつ切る輩。夜の帳に隠れて笑う者。なんにせよ胡散臭さが纏わり付いて離れないと聞いているよ、八雲紫」

「お名前まで、感激ですわ。ですがその前の部分が酷くて、傷ついてし

まいそう」

言い切つて俯く紫。

大袈裟な動きで目元に手を寄せる。それから白い手袋を嵌めた指先を添えて静かに泣いているような仕草をしてみせるも、顔を合わせている二柱には全くと言つていいほど効果がなかった。

それどころかコレも煽りと見られたようだが、実際扇の後ろでは整った口を歪め、口角を上げているのだから間違いなく煽りで正しい。神さびたとは言つても神は神、見る目は濁っていないようだ。

「本当に趣味が悪いな、下手な芝居はいらんと言つただろう？ 本当に何をしに来た、神を隠しにでも来たか？……だというのならソレらしく歓迎してやるぞ？」

話し合うだけだった三人の中で先に噛み付いたのは諏訪子。

神奈子に諫められつつも手を払つて立ち上がり、鳥居を睨むと、薄く透けた大きな大きな手と足を地面から生やし、伸ばしていく。臙げな輪郭から黒く濁った陰気を漏らす手足。

そんな大きな肢体を眺め、この程度造作では、と、笑みを変えない紫。

今まさに襲わようとしているのに笑つたままなのは余裕の表れからか、それとも。

「長脚長臂、久しぶりに見ますわね」

目を細め、貼り付けた笑みを更に胡散臭い物に変えて紫が語る。

笑顔を絶やさなかった理由は今見えている手や足、これらに対してであった。古くは、山に棲み人を襲つては喰らい海を進んでは波間を行く船を襲つていた怪異だとされる手長足長様、別名長脚長臂ではあるが、時が流れた今では手名椎・足名椎てなづち・あしなづちという神と混同されている事もある曖昧な存在である。

それを人に崇められ神社に祀られ今では忘れられた神が操り、人に恐れられ疎まれながらも未だ現役で生きる妖怪に差し向ける事が愉快で堪らないようだった。曖昧な自分に放つのが曖昧なモノ、これは思っていた以上に冗談の通じる神だと、皮肉まで利かせる事の出来る敏い相手だと、嫌味な顔で妖怪の賢者は笑う。

「残念ながらそつちじゃないね」

「どちらも同じでしょうに、曖昧なモノを呼び出しますのね」

「そういった噂の絶えないお前に見せるには悪くない……だろ！」

語気強い神の手がパァンと鳴る。

夜の静寂を切るような柏手が打たれると同時に、荒々しい神遊びが守矢神社の境内で始まる。

## 第六十九話 あゝ古い神よ、新古の地にて

片田舎というほど廃れてはいない。

けれど発展した大都会と言い切れるような場所でもない。

暮らす人々も多くも少なくもなく、特筆すべき物など未だ残る雄大な自然くらいしかない。言うなれば都会と田舎の境目、境界線のような立ち位置がこの町であり、そんな町並みに溶け込み今や忘れ去られようとしている場所がある。

周囲の立地も海には面していないかわりに険しい山に囲まれた谷間の盆地で、人が居着くには些か不便な土地ではあるが、この国の中央辺りに位置したこの地は古くから人の往来が多くあり、それ故住まう者もそこそこにいた。

何もないような場所になぜ人が居着くのか？

それは訪れる人々にも居を構える人々にも目的というか目当てがあつたからだ。来訪者や住人それぞれが目当てにしたソレは偉大な神の御力。昔々の人々が崇め奉り、その御威光を求めた相手がこの地にいたからだ。

それがこの地に建つ社の裏の祭神様。

廃れかけた神社で今一人の妖怪と対峙している古い神、洩矢諏訪子である。

人が神から離れ科学を信仰し始めた今こそ『忘れられたモノ』『忘れられかけているモノ』程度の存在に成り下がり、この地の語り部が語る内の一柱程度の力しか持ち合わせていないが、遠き過去にはこの地を恐ろしい力で纏め治めていた神様だ。大元はこの地の自然より発した自然霊だとか、自然物に宿っている精霊が力を得た者だとか、色々な話があるようだが現在の彼女は土着の神の頂点として在り、祟り神として消えかけている状態である。

大半の力を失い消えていくのを待つだけ、そんな状態にある神様だが、今晚見られるその御姿は久しく見せていなかったかつての在り方、土着神の頂点らしい恐れに満ちた有り様となっていた。

こうなつた原因は前述した妖怪、恐れられる神がその畏れを現し成

しても焦りを見せない女のせいだ。

神遊びの始まり、それを告げた諏訪子の柏手かしわてを聞いても動かない。社で語らう二柱に姿を見せてから同じ姿勢のまま、日傘の柄を回しながら。時折扇で髪をなびかせながら。高く立派な鳥居に腰を降ろしたまま動かない八雲紫のせいで恐ろしい神としての姿を再度見せていた。

その態度や表情、立ち位置から、高慢な者で気に食わない、偉大な神として名を馳せた我らに対して不届きな姿勢を貫いたままで気に入らない。と、洩矢の祭神が顔に出すには十二分な姿のまま紫は笑っているだけであった。

そんな笑む妖怪に神の一手が迫る。

語らうだけにあつた静かな夜を揺らすように、地上より伸びる二本の腕足が鳥居の上で動きを見せない紫に向かって伸びる。先に妖怪少女を襲ったのは腕。巨人の腕と呼んで間違いないサイズの両腕が紫目掛けて打ち下ろされる。紫の座る鳥居もぶち抜いて境内の石畳すらも瓦礫に戻す、そんな勢いの見られる両手が不届き者を叩かんとする……が、襲われる妖怪は驚きもせず顔色も変えず、近づくと平手を見上げ口を開くだけであった。

「立派な手の平ですわね。これほど大きなモノを操る余裕がありとは、消えかけの神だとは思えませんわ」

「好きに言うがいいさ。その口いつまで聞いていられるのか、私が見聞してやるよ！」

紫が煽りのような物言いを呟き諏訪子が返答する。

互いに言い返すが、今まさに潰されかけている紫の方が口にした余裕を持っていると、二人の顔色から伺い知れた。方や未だ存在したままで扇の奥で嘲笑う者。方や新たに増える事はなくなつた貯金をはたいてどうか神らしく見せてい者なのだ、本当に余裕があるのはどちらなのか言わずとも知れるだろう。

そうして神を嘲笑う者がニイと頬を緩め、近く大きく見えている手長の平手を見据えて眼前に扇をかざす。迫ってくる巨人の掌と合わせるように伸ばすとそのまま軽く空を撫でた。すると現れる二対の

リボン、宙に浮く二対の紐が夜風に揺れると空が割れ、そこだけに異様な空間が広がっていく。開いたスキマを見つめ一瞬目を細める諏訪子だったがそれでも手長の勢いは緩めず、振り上げた力のままに紫を打ち滅ぼす：：つもりが、紫の扇がツイと動かされるだけで、地を揺らすはずだった神の一手は開かれた裂け目へと消えていった。

手長が消えて一瞬静まる境内、だが攻め立てる側の気概が鎮まる気配はない。攻め手を失った神が静寂を打ち消すように再度手を合わせる、響いた神の両手に動かされるのはボヤけた輪郭と透ける肌をした足。先に消えた手長様に同じく、足長様も紫に向かい歩を進めた。透けてぼやける実体の無い足が地を蹴る。

石畳が軋み揺れ響く。

そのまま踏み潰さんと高く上げられた足が鳥居諸共紫を踏み抜こうと降ろされる……

——けれど紫は動かなかった——

こちらでも変わらず笑うだけ。

扇で笑みを隠したままで、落ちてくる足の裏を眺め、笑むだけだ。

「神と争いその余裕、益々気に入らん」

笑う少女に発せられる神からの託宣だが、紫にはありがたい託宣というより気にかける必要のない御託にしか聞こえていないようだ。扇の奥で薄まる瞳、淡く輝く紫の瞳が見えなくなりそうなほど細まる。神に攻められど変えない、変わらない態度に表情。

対峙する諏訪子が吐き捨てたようにその顔からは確かに余裕が感じられる。それは紫のよく見せる胡散臭い笑顔であり諏訪子には嘲笑う表情としか感じ取りようがないが、そう見えても当然だろう、紫の笑みは余裕やゆとりからのものではない。

笑む理由は只々可笑しいから。

かつては神として王として、一国を収め土地の眷属をも服従させて君臨した洩矢神が突然訪れた自分に対し攻撃するも無駄に終わる姿が滑稽に映るから、どれも届かず手をこまねいている姿が酷く滑稽で可笑いからだ。

「余裕と仰られましたが、何か思い違いをなさつておいでね」

「思い違い？ 妖怪風情が何を言うのか、思い上がりの間違いだろう？」

今にも自分を踏み潰さんとする脚を眺め紫が吐息とボヤキを薄く漏らすと、諏訪子は言い返したがその後の返答はなかった。

代わりに諏訪子へ届いたのはまたもや気に入らないもの、常人であれば聞こえないだろう音量で放たれた紫の笑い声だ。クスリ、開いた扇の軸より漏れた声は確実に諏訪子に届いた。その笑声しょうせいに舌打ちで対こたえる神社の祭神だったが、紫の声が扇のスキマを抜けるとその先で手長を飲み込んだ亀裂が現れ、迫る巨人の足の裏を飲み込み何処かしらへと隠してしまった。

掻き消えた手長と足長。

場に残るは巨大な手足を操りけしかけた神と二人のやり取りを見届ける素振りの神、それと今までよりも少し柔らかい笑みを見せる紫。

諏訪子の見せた攻め手を潰した、それ故余裕の表情を見せているのか。二柱の考えはそのようにあるがそれでも紫は表情を変えただけで何をするような事もなかった……いや、笑っていただけの女もようやく動くらしい。二度の神罰を防いで見せたスキマを閉じて二柱の前にフワリ降りると、雨でもないのに差していた傘もたたみ、同時に扇も閉じて見せた。

望まれぬ参拝者が動く空気も動く。

攻めた神とそれを捌き切った妖かし、両者の距離が近づくと静まりひりつく境内の空気。肌に刺さるような空気と共に静かな夜が場に降りてくる。

けれどその静寂はこの争いを見ていたもう一人の神、八坂神奈子が口を開く事により破られた。

「スキマの、なんのつもりだ？」

「さて、なんの事でしょう？」

「その態度よ、抗う素振りも見せず笑むだけしているのは何故だ？ 何を企んでいる？」

境内に座ったまま、片膝立てた神奈子が問う。

大きな力を未だに保持したままにいるスキマ妖怪。ところによっては神隠しの主犯などと呼ばれ、実際に神を隠し葬る事すら出来てしまえそうな手合に向かい直球で問いかけた。

言い切った後で諏訪子に睨まれていたが、軽く首を振って声なき返答を済ませる。問うたところで素直に聞いて答えを述べるような相手ではない、諏訪子が言いたいのはそんな事でそれくらいは神奈子も察している。けれど今までの流れから小さな違和感を覚えていた神奈子は敢えて真正面から問うたようだ。

「酷い仰りようですわね、企みなど何一つございませぬのに。それに私は既に要件を伝えておりましてよ?」

「何を…招待状というやつか?」

「然様ですわ、八坂の神。私が姿を見せたのは貴方様方を楽園へご招待すべきかと考えたからですわ。それ以外で思う事などございませぬのよ?」

「楽園だと?」

紫が再度の招致を告げる。閉じた扇を再度開き、その企み顔を隠して。

不審な笑みを貼り付け直し貴女方もご一緒に如何かと、白い手袋で隠した手の内を見せつけ誘う。だが、そんな態度は全て無視されたようだ。話を振った神奈子が紫の手を払い耳馴染みのない単語を聞き返す…：けれどここで開かれるのは紫ではなく、もう一柱の口。

「貴様の手がけた地があるらしいな、消えていく者達の楽園だったか? 現の世では生きられなくなった、保たなくなった連中の最後の拠り所だとか、忘れ去られた妖かし共の隠り世だとか、そう呼ばれる地があると聞いた覚えがある」

失われた者の楽園、作り上げた紫が述べるならこう言うだろうが、諏訪子が語ったものでもそれほど差異はない。故に紫は否定はしない、少しの訂正はするようだが。

「諏訪子、お前……」

「隠り世はまた別に存在しますがソレはソレとしまして。私だけでは



なく幻想郷まで存じ上げられておいでとは重畳の至りですわね。土地を離れる事のない神の耳に入るなんて、宣伝などはしておりませんが私が知らぬうちに広まったのでしょうか?…それとも」

否定すべき部分は否定して、紫はそのまま饒舌多弁と繋げる。語りつつ今晚見せた笑顔の中でも一際嫌な顔をする、してみせて、何かを言いかけるがその言葉は神奈子の問いに遮られた。

「勘違いするな神奈子。私も覚悟は済ませているんだ、今更長らえようなどとは思っていないよ」

「ならば今の物言いは——」

「聞いただけさ。小耳に挟んだ話で何時だったかは定かでないがね、あの姉妹の姉がそんな地に向かった話を思い出しただけだよ」

神奈子の物言いに被せてそれ以上は言わんでいいと、発せられる言葉が潰れていく諏訪子。

語らう神々の声は固い。口にされた覚悟というのもお硬い文言であるし神の口らしくそうなたただけともとれるが、それでも覚悟と発したのは神であり、覚悟は神を祀るこの神社の巫女、正確には後に風祝となる一人娘の為で本来の神口とは多少変わってしまうが。

「お姉様……磐長姫様いわながひめでしたら幻想郷で過ごされておいでですわね、毎日狼煙を上げて存在を誇示されておられます。姉妹神といえぱつい最近では秋の姉妹もいらして、いえお迎えにあがりましたのよ?」

「秋の? 妹はまだ存在していると聞いたが?」

「そのはずだな、見たという話を聞いたばかりだ」

過去には高くそびえる富士よりも高かった八ヶ岳、今では幻想郷でそびえる妖怪の山となった場所。そこに住まうのは話から読めた人物だろうその地に移住する事になった姉神様。彼女の事を紫が伝え、ついでにの形でまさに今日幻想郷へと向かった秋神も話す。

するとそのついでの方に守矢の二柱が引つ掛かる。紫が語った秋の神は彼女が姿を見せる少し前に二柱が話していた者であり、遠足から戻った早苗が姿を見たと言った相手だ。未だこの地にいるはずの者で、稔りある行事がある限りは消えずにいられる相手のはず。

であればと、二柱の疑惑の眼差しが曖昧な妖怪に向けられる。

「豊穰を司る妹君はどうか神としてご顕在あそばされていたようですが姉君は弱々しいお姿で……私がお迎えに上がった際には消え入る寸前、今にも神上がりされる気配にありましたわね」

注視されると紫は語り始める。

懐疑の眼差しを向けたままに在る二柱に向けて、今日姿を見せたのにはこんな理由があったのだと伝わるよう少し大袈裟に、身振り手振りを交えながら続きを論じる。

「姉君も僅かながら残る信徒の事を案じて悩まれたようですが、最後には妹君に付き添われて本日めでたく幻想の地に」

柔らかに、明らかに何かを含んだ顔のまままで語る妖怪。話を聞く二柱は僅かに目付きを強めているがそこに含まれた御心など気にせず、紫は続きを語る。

話の内容から消えていく秋の神を紫が誘い手引したような言い草に聞こえるが、実際は消えかける瞬間に姿を見せて、何もせずに忘れ去られてしまうくらいなら新天地で神として在られてはどうかと軽く語っただけである。

実りの神が紫の作った箱庭に収まれば人間の餌餌が増え、紅葉を彩る神が土地におわせば住人の心にも季節を愛でる余裕が出来る。そうなれば感情の起伏も激しくなり、そういったモノを食す連中の食事にも困らなくなる。そんな流れが出来上がればこちらの世界では消えていくだけだった二柱も神としていられ、幻想郷も潤うだろう。愛する庭が豊かになる、第一に考えるのはその事だろうが新たに迎えて住人となった神に対しての心も彼女の暗い腹にはあるのかもしれない。

「なるほど、貴様が現世に姿を見せた理由はそれか」

「静葉はそこまで弱ったか……穰子も今日見せた姿が現し世での最後になつたかい」

「ええ、そのようで……本日はそのお誘いの帰りに足を運んでみただけですよ?」

頷く二柱に合わせる紫、けれどこの場では腹の中身まで決して語らない。

見せる顔は変えずに語る振る舞いは、浮かべた余裕そのままです。

の手の内を語るだけで、訪れた腹黒い商人が上客カモの会議室で旨い話を勧めるような、軽々しい語り姿とでも言うべきか。

「宜しければ二柱もご一緒にと、そんなお話の為に今夜は何つてみたのですが……如何でしょう？」

饒舌に語る紫、押し売りの文句を神に届けると閉じた扇を開いて煽ぐ。

先ほど二柱が語った雰囲気からまずあり得ない、のってこないと理解しながら煽るように問いかけるが、語りかけた内の片方は返事もせずに姿を薄れさせて霞み、消えていつてしまった。

「あらあら、祟り神様のお姿が」

荒事の最中に同じく、柔らかで嫌味な笑みを見せる紫が消えていく神に問う。けれど問うた神からの返事は何もなく、代わりに残る一柱から返事が届く。

「白々しいな、八雲の」

やや目を細めて、強い眼差しの神奈子が返す、

一人残った神奈子から放たれた言葉は言いがかり、もしくははやつかに近いものだ。ただでさえ招いていない参拝客を相手にして機嫌を傾けていたようだが、諏訪子が姿を消した事で残された神奈子の雰囲気は更に重くなったらしい。組んだ腕の力強さからは薄つすらと憤りや怒りの気配が見え隠れする。

「何の事やら、見当もつきませんわね」

それでも暖簾に腕を押す姿勢を崩さない紫だったが、その姿勢も含まれる心にも多少の変化があったようだ。少しだけ俯いて、神奈子に表情が見えるか見えないかという角度に傾ぐと仄かに声を漏らす。

漏れ出た嘲笑に乗るモノはこの先の話の流れ。諏訪子が紫に向けて放った手長足長は祟り神の元には戻らずに隙間へと消えた、拝まれなくなった神が僅かな貯蓄をはたいて現した手足を私が隠した事で貯金の払い戻しがされなかった、小さな事ではあるがそれは弱る神からすれば大きな損失であろう。そこから鑑みるなればこの地の神もきつと……と、含む笑顔に心情を浮かばせてみるも、覗きこむように

顔を伺う八坂の神からは紫の読みにはなかつた言葉が吐かれた。

「その言い様にその顔、益々鼻につくが今の我らに……いや……」

途中まで言い掛けて押し黙る神奈子。

聞いていた紫の顔色は変わらないが何か引つ掛かるのか、悪戯な視線を神奈子に投げかける……けれど、一睨みされるだけで終わりのようだ。少し前に口にされた秋神が司る紅葉よりも濃い、今まさに顔を出し始めた太陽のような臙脂色の瞳に紫色の女が映る。

「……言い淀まれるとは、何かございまして？」

「何事も無い、争う気が無いのならもう去れ」

口をつぐんだ神奈子に伺いを立てる紫だったが欲しい答えは返つてこないようだ、代わりに届いた返答は立ち去れという拒否の姿勢だけ。

それもそうだろう、守矢の二柱には紫の誘いに乗る理由はない、寧ろ誘いなどただの方便で実際は消えていくだけの我らをあざ笑いに來ただけだと、その程度に捉えているのだろう。ふと見せてしまいそうになった弱気な部分『今の我らには貴様と争うような余裕はない』と、先に言い淀んだ言葉の後に続けそうだった言葉は飲み込んで一言、立ち去れと、神奈子はそれだけを話し踵を返した。

「……わかりましたわ。お話頂いている間に彼は誰時かたれどきといった頃合いとなりましたし、朝日が訪れる前に御暇いたしますわね……」

振り返り、そのまま神殿へと歩んでいく神の背中。その後ろ姿に紫が語りかけるが、その声は届かないと言わんばかりに神奈子は歩き続ける。まるで今晚は何事もなかった、そんな空気を纏っているような、すっかりと静まり返った神社の境内で二人の距離が離れていく。

今日の出会いはこれまでとそんな雰囲気に見えるけれど、歩き去る神の背に紫から吐き捨てられた言葉が刺さり、それが神奈子の足を止めた。

——他者の心を糧に生きる者が覚悟とは余程の事なのでしようね

——そのお覚悟がいい方向だけに作用する事をお祈りしますわ——

——いえ、ここは頼んだほうがいいのかしら?——

紫の口上に神奈子が振り返る。

そのまま何か言い返すつもりで口を開きかけるが、嫌味を吐き捨ててくれた相手の姿は殆ど消え失せていた。神奈子が最後に見たのは全身を隙間に沈めていく紫の顔半分だけ、頬に手を添えて柔らかく笑う顔の半分だけであった。

神奈子と目が合うと態とらしくクスリ、小さな笑い声を漏らして完全にいなくなるスキマ妖怪。

「……他者の心を弄ぶ輩に言われる筋合いなどないわ」

一人境内に残された神奈子が愚痴を漏らした。

誰もいない、神奈子一人だけが残されている境内を小さなボヤキが抜けて消えていく中徐ろに手を合わせ軽く叩く。パアン。静かな景色に邪気払いの柏手が響く、同時に神奈子の姿も風に巻かれて消えていった。

こうして誰もがいなくなり、暫くするといつものように日が昇り朝が訪れた。静けさも暖かさもいつものような朝。神と妖怪が戯れていた昨晚とは打って変わって、本当によくある朝。

いつもの朝と違いがあるとすれば、毎朝神社の幼子が目覚める前に起きて朝食の準備をしていた神が今朝は姿を見せなかった事と、この日を境に二日おき三日おきと目覚めなくなっていくようになってしまった事だろう。

## 第七十話 顕現するオカルティズム

日の入りと夜の入りはいが交差する時間。

沈む太陽より発するオレンジ色の光が空の青と混ざり紫がかかる色を見せる頃、陽光の暖かさよりも月光の冷やかさが目立ち始めた現世に少女が息を漏らす。

小さな吐息、後一月もすれば白むだろう溜め息。僅かに開いた口と同じサイズの熱を帯びたこの吐息は少女の持つ電子機器にかかり、画面を曇らせて、すぐに晴れた。

けれど、一瞬滲んだ液晶画面に反射している顔は晴れない。いつも明るく樂觀的な面の強い少女らしくない、陰りのある顔。対面を走り抜けていく自動車のヘッドライトに照らされ、時折明るく見えるその顔は、今の時間帯を取り込んだように暗く、陰っていた。

見つめる画面には彼女が唯一親しくしている相手の名前が表示されておられ、並んで文章も書かれているようだ。液晶から漏れる無機質な灯りを愛用メガネに反射させ、その文字列までもレンズに投影させて望む先。そこで鏡文字と化しているモノは暫く前に彼女が入力した『まだ残ってるの?』という問いかけと、横で表示されたままの『未読』という文字群。

この文字列が彼女の溜め息の原因。学校の正門を過ぎてすぐ、部室で別れた後輩に宛てたメッセージは未だ相手に読まれていないらしく、眺めていてもその表示は消えないままで、スマートフォンの画面は暗くなるだけであった。

「まだ学校かな?…:あ」

夕暮れ時を過ぎた今らしい雰囲気画面を見つめていた彼女だったが、ピコン、機械音が鳴ると顔に一筋の光が差す。彼女を灯すとものは電子機器が発した小さな灯りあか。青白い光とともに鳴った機械音もそのスマートフォンから発せられたようだ。暗みの強くなり始めた町並みの中、僅かに頬を緩ませる少女が画面をなぞると、明るく輝く液晶画面。

宛がう中指一つ、横に流す。画面も同じく横に流れる。

浮かび上がるのは未読の消えた画面、見たかった文字列の隣にはデカデカとしたカエルのスタンプが左から右に走っていく姿が映り、その勢いはあの子がよく見せてくれる勢いと似通っていて、それが少女の頬を緩くさせた。

「これから帰るのね、私達は先に帰ってるよつと」

眩きに似た文章通りに少女が指を流すと、帰るカエルが忙せわしいスタンプの斜め下に飾り気のない文字だけが追記された。いつもなら凝った返信、一目見て気に入リダウンロードしたパンダのスタンプを入れ込んで可愛らしく飾り立てたものを送っているが、今は手短に、伝えたいものだけを入力したようだ。

暫くそのまま眺めていると新たに入力したメッセージの未読表示も消える、どうやら会話の相手もメッセージを確認したらしい。未読が消えたのを確認するとこの子も一度画面から目を離したが、何か忘れていたのかまだ光ったままの液晶に視線を戻し、指を這わせて操作し始めた。画面には明日の天気やメール・ニュースといった表示もあるが、彼女の用事はそれらではない。

中指で画面を縦に弾く。開いたウェブサイトが一番上にある空欄に触れ、タップする。画面の端を今日のトピック・ニュースが流れていく中、その文字列が流れていく速度を追い越して空欄を埋める少女の指。

「まあ、期待はしてないんだけど」

緩めた頬を直し、真顔に近い表情で指を当てて弾く。

スルスルと流れる画面には打ち込んだ検索ワードが色々と並び、そこに表示された結果を流し読みし始めたようだが、どれを読んでも彼女の表情に変化は現れなかった、望む答えは明記されていなかったらしい。画面の端に残る『人間 超能力』『人間 魔力』などの、常に表示される検索履歴を睨む目には冷ややかなモノがこもっている。

「引っ掛かるわけないよね、やつぱり。深く探るならちゃんとした物読まないダメかなあ……いつその事コレ翻訳した方が早い?……そうなるよまた出費が……今年の年末も早苗ちゃんここでバイトするのはヤダなあ」

小さな愚痴をこぼしながら自身の脇、繋がる手元、手提げ鞆へ視線を投げていく。脳裏に浮かべたのは年始の頃。近くの神社の巫女装束を借りて纏う己の姿、唯一の友人と揃いの姿で少ない参拝客の相手をして自分の姿を思い出す。二人並んで微笑む姿を思い出せる事から、手伝う事自体は吝かではないようだが……

「あの格好寒いんだよね、可愛いけど」

バイトが嫌な原因を思い出し、呟く。

そうして浮かんだ過去の自分を軽く笑い、それから現在見ている先へと考え事を変えていく。今見る鞆の中には部屋で開いていた古い本と、そこより呼び出した悪魔の名刺が収まっていて、先程の調べ物もソコから繋がるものらしい。ブツブツとつぶやきながらも忙しく、開いたウエブページを閉じてまた別の検索ワードを入力していく。

次に表示されたるは今気になっているもう一つのワード『悪魔羊』

検索ボタンに触れる前、予測検索の段階で『もしかして 悪魔 山羊』と出てきたが、それは無視して一つに絞った言葉を検索エンジンに問い合わせてみるも、こちらも先と同じで望ましい結果は出てこない。

唯一気になったのは予測に現れた『羊 従順 神のシンボル』という検索候補くらいだが、この検索結果は一瞬開かれた後すぐに画面から流れていった。態々開いて見たのは少し気にかかっただけで、現状を打破するものにはなり得ないとわかったからだろう。

興味が惹かれない。参考にならない。

どれも使えない。役に立たない。

色々も含む顔で次の検索ワードを考える彼女だったが、操作するスマートフォンタッチ音以外が不意に耳に届いたせいで、今の今まで軽やかに滑っていた指は完全に止まってしまふ。

「歩かれるのでしたら前を見て歩かれた方がよろしいのでは？」

画面を見つめたままの少女、その後頭部に声がかかる。

少女の指を止めたのはこの声、聞き馴染みはないがやたらと耳に馴



染む、馴染んでしまう声。

女性にしては低め、そして人にしてはひどく暖かで甘く、馴れ馴れしい。取り上げるならそういったものが含まれる声色。

「先程から手元を見つめたまま、何をされておいでで？」

話しかけてきたのは人ならぬ者。

歩きスマホで進む女子高生の裏手より現れ、手元を覗きながら問うている。

口にされた内容こそ至ってよく在るものではあるが、声質だけに注視し聞き取ればその甘さや温かみに溺れたくなるような、素直に聞き入れれば簡単に誘われてしまいそうな甘美な悪魔の囁きが少女の背中側から届くが……

「なんでもない、気にしないで」

「ですが——」

「いいから、他の人だって同じように歩いてるでしょ、こっちじゃこれで普通なの」

甘さを払うように辛口を被せて返す女子高生。

振り向きもせず、ほら、とスマートフォンで促した。

確かに、彼女が言うように周りを歩む者達の中にも同じく画面を見つめて歩く者が多くいる。

そんな人間達を一瞥し、手元だけを見て歩くとは暫く見ないうちに人間は器用になったのか、それとも種族毎そう出来るような力にでも目覚めたのかと頭を傾げる悪魔だったが、自分達が向かう先、並ぶ予定のバス待ちの列に他の誰かがぶつかっていくのを目にし、そんな事はない、何も変わりはないさそうだと思いついて直していた。

そうやって周囲、見慣れないビル群や周りを見ていた羊に声が掛かる。いつまでも余所見していないでこっちを見ろと。自ら促しておきながらあちらではなくこちらと我が儘であるが、その言いつぶりは現代の女子高生らしい奔放さも伺える。

「あとさ、その話し方もどうにかなんない？ 学校の先生みたいでなんかヤなんだけど。ていうか貴方って外国の出なんでしょ？ なんてそんな硬っ苦しい感じなの？」

外国人ならもつとフランクにいこうよ、その方が私が楽なんだから。

校舎を離れてから初めて見る召喚者の顔にはこう書いてある。けれど人ではないアイギスからの返事はこうである。

「努力はしてみますが、地元でもこちらの国でもこの口調のまま永く過ごしておりますので、その願いが叶うかはわかりかねますね」

バスを待つ行列の最後尾に並び話す現代人、気安く語る相手は隣に立つ古い悪魔。並ぶ姿と聞ける言葉を見れば大人と学生が話し合うだけと映り、違和を感じる事もないが、列を成す他の人間達からは二人の会話を少しだけ気にしている様子も感じられる。

二人の見方を変えれば、褐色に赤眼で流暢な日本語を話す外国人に対してズケズケ言い放つ高校生といったところ。発展した大都市でもないこの街ではこの絵面が目立って見えるらしい。それでも、横目で見るだけで何かを言ってくるような気配はない、そうしてその部分が気になる悪魔。

「こちらに住まう者達は他人に関心を持たれない方が多いようで。なんとも、面白くない」

「同意するわ、お陰で過ごしやすくもあるんだけどね」

周囲に聞こえる声量で話す二人だが、聞かれても何を言われるでもなかった。

周りの人間達からすれば態々言い返すような事でもないのだろう、列に並ぶ者達の中に悪酔いしているものでもいれば変わったのだろうが、学校や仕事場から出てきたばかりの者達しか見られない列の中にそういった者はいなかった。

それでも無言の視線は発せられているようだ。

皆の目線は特に背の高い方に向けて。

小麦色の肌自体はこちらの世界でも珍しくない、だというのに感じる視線。

「ジロジロ見なくたっていいのにな」

見られている悪魔の顔から他所へ目を流し話す董子。夜の帳に薄く灯るアイギスの灼眼、悪目立ちしてしまうソレから目線を逸らし、

一人なんでもない事だと語る。

カラーコンタクトレンズにしては鮮明に光る瞳は気にされても致し方ないかもしれないが、アイギスを見やる横目は目が合う側から逸らされるばかり。

確かにこれでは面白くないだろう、どうせなら彼女の最も目立つ物、頭部で主張しているはずの角でも見ていればアイギスが気にする事もなかったのだろうが、こちらは既に対策されていた。

『ソレ、目立つからさ、ついてくるならどうにかして』と、部室を出る前に少女から注文を受けていたようで、今はアイギス自身が角を穿つ事で見えなくなっているようだ。

学内では幸いにも気にされなかった、というより部室のある旧校舎に残る人自体が少なかったため董子自身気が付かなかったが、誰かの視線を浴びたくない女子高生らしい先手は他者と絡まないせいか読みが浅く、配慮は少しばかり足りなかったらしい。

「なんだっけ、所変われば品変わるって言うんだっけ？ その程度の事なのね。あ、So many countries so many customsって言えば貴方にも伝わる？」

態とらしく声を張る董子、アイギスだけに目配せしてからサラリと口にした。少しの間を置いてから得意気な顔でunderstand? と言いつち、小声で、こういう時ってall right? だったっけかな、まあいいやと、拙い口調で発する少女。

彼女が一言発するだけで周囲の視線はなくなった。二人の会話から聞こえた地元や国、それとスーツ姿の褐色女の見目から、なんだそういう事でそんな相手だったのかと、周りが推測したらしい。気になる視線が連れから剥がれるとまたスマートフォンに視線を落とし、電子の世界へ潜っていく女子高生。

「……よくわからない御方だ」

見られている感覚が消えてすぐ、柔らかに瞼を閉じる羊、そうして声なき声で漏らす。

口にされたのは少女の評価、少しの言葉で場の雰囲気を通して有耶無耶にする手口を褒め、同時に浅い読みに対して評し、瞼の奥には別

の紫色を纏う者の姿を描く。

姿形がまるで違うあの妖怪少女と眼前にいる人間少女を同列に見る事など有り得ない。

あの隙間妖怪に同じく、童子からも得体の知れない何かの力を感じてるが、この女子高生から感じられるのは力の片鱗程度、比べるに値しないと理解出来ている。

けれど、二人のどちらともこの悪魔から見れば雇い主や召喚主という仕えるべき立場にある者だ、形なりや力は気にせずやり口だけを見れば少しは似通って見えてしまう事もあるようで、故に気にかけてしまっても不思議ではないのかもしれない。

「あ、来た来た、あれバスに乗るわよ。切符の買い方は教えた通りね、大丈夫？」

「はい、ご心配なく」

二つ返事で答える羊。

素直に返す仕草は検索結果に出てきた従順な姿にも見えるが、そうは言ってもだ、主とはいえ相手は人間、アイギスにしては少し気安さが強く感じられる。けれど似合わないわけでもない、仕える相手に大して口で言い返す事はあるが従順な姿も見せる彼女なのだ、それに今の彼女は童子の中にもう一つ気に入る面を見つけてしまい、存外悪くない気分にあるのだから。

バスの乗り方についてもそうだが、先に話されている文言『話しかけるな』『気にするな』といった言いつぶりをアイギスはいたく気に入っていた。自らが召喚した畏怖すべき悪魔に対して気軽に言葉を吐く、それが存外面白いらしく悪魔の琴線に触れてしまったらしい。

過去に私を召喚した人間の中でこれほどまでに気軽な者はいなかった。それぞれが己の野望や欲のために過剰な力や叡智を授けろと願ってくる事はあったが、先のような、呼び出した側に対して口調を変えろといった可愛い願いや心配などを口にした者はいなかった。

自己紹介代わりに別の世界や過去の話を少し聞かせても、恐れも見せず逆に興味を持ったような素振りすら見せる人間。話を信じられないわけではないわけではないが真に受けている様子もしない、それ故によく

わからないと、思ったままに口にしたらしい。

なんの為に私を呼び出したのか？

悪魔を呼び出しておきながら力も叡智も求めず、他愛もない話にだけ気乗りしてくる召喚者に少しの興味を持ち始めた彼女。この人間は何を狙っているのかと、求められない事に大して少しの不満を募らせながら、底を見せないように頑張る少女を追って、その姿を車内に溶け込ませていく。

少女達移動中

閑静な町並みを抜けた辺り、長い坂の続く静かな街の外れ。

バスを降りた二人が歩くのはそんな道、日の落ち切った宵の道。

歩む通りをそのまま山側に向かえば廃れた神社が見える往來を、偶に通る車の音や、近くの民家から聞こえる小さな生活音をBGMにしながら二人歩き、立ち止まる。

足を止めたのは集合住宅の前、慣れた仕草の少女が共同ホールに入り、タイミング早く開いた自動ドアを抜け進んでいく。少女が角を曲がると、見慣れない建物内を眺める悪魔もその後を追いかけていった。

「ただいまっ」と

6Fで止まったエレベーターを降りてすぐ。近くの玄関扉をくぐり抜け帰宅を知らせるが、おかえりの声は聞こえない。けれど声の主は気にせず進むだけで、ローファアを脱ぐとそのまま歩み手をかざした。数度の点滅の後に暗かった室内に光が指す、董子の手が感応式のセンサースイッチに触れたのだろうか、無機質で飾り気のない灯りが二人を嫌味に照らす。

「入って構わないよ」

光沢のあるローファアを脱ぎ散らかした少女が、進んできた廊下方面に声をかける。

緩い癖のある髪を纏めたりボンを解き、振り向きもしないまま背後に語りかけるが、その声は相手に届いていないらしい。

家主の招待に乗らなかつたに羊の目は廊下を進んでいく少女の背中を過ぎて、見慣れない家屋の中に配られているようだ。シンプルな作りのシューズケースに少しの小物があるだけの狭い玄関、取り立てて述べるような物のない中でアイギスが視界に収めているのは壁や今し方董子が脱いだローファー付近のようだが……

「器用な御方、でもないか。靴は直されないのだから……しかし、様相こそかわりましたが土地は変わらないのでした、であれば様式も変わらぬままで当然ですよね」

明るくなつた玄関の壁には灯りのスイッチらしきもの、目を流しながらソコも気にしつつ、後半は別物、上がり框のない廊下について述べる。

脱ぎたてで、ハの字に並ぶ焦げ茶色のローファー。

可愛いリボンがポイントの、年頃の娘が履くようなミュール。

膝を隠す長さで、足を通せば暖かそうな少し踵のある革のブーツなど。

足元にはそういった女性用の靴が並び、そうした履物を見て、街並みや人の姿に変化はあつたけれどやはり靴は脱ぐのだなど、廊下の床に感想を吐いていた。

作りこそ和風建築ではない住まいだが文化面では洋式になつていない現代の日本家屋、和と洋が混ざつたある意味で曖昧な仕様に見えるけれど、その混ざり具合が両方の国で長らく暮らした者にすれば案外楽しいものとして映るのかもしれない。

そんな、少し楽しげな悪魔の呟きは家主にも聞こえたらしく、入るならお邪魔しますくらい言つたら、と、新たな光源の灯る部屋から声だけが届かせた。

「あ、やらかしたかも」

片足立ちで靴下を脱ぐ女子高生が、あ、と振り返つた。

指定ソックスを摘まみ、愛用している帽子や靴も流れで放りながらやらかした先を眺める。

振り向くタイミングに合わせてファサリ、三人掛のソファーに置かれた鞆の上へ、狙つたように帽子が着地した。手慣れた流れで放られ

た荷物が柔らかかなL字型のソファを僅かに沈ませると、少女から問いかけが浮かび上がる。

「ちよつとお？　ねえ、私鍵閉めたっけ？」

董色のベストに並ぶ三つボタンを外し、喉元のループタイを緩めながら聞く。

逆さのベルに十字架が連なるような、どこか宗教めいた形のタイを緩めつつ廊下に向かって話す少女、どうやら玄関の鍵を閉め忘れてたらしい。

「どの部分を確認すればよろしいのでしょうか？　錠前も門も見当たりませんで、わかりかねます」

願われた施錠確認を叶えようとする声が玄関より聞こえたが、その願いは叶いそうにない。返答しながら鍵を探しているようだが、アイギスにこの家の鍵を見つける事は出来ないだろう。

彼女が知る鍵といえは長く過ごした吸血鬼のお屋敷で見られる門や、一時の雇い主となった妖怪が提供した充住まいで使われる蝦錠、他には経営する店舗に置いてあるだけの心張り棒くらいで、今の時世には似合わない古い形ばかりだ、取っ手の上にある小さなツمامミが指示された鍵だとは気がつかない。

暫く探すがやはり見つからないらしく、仕方なしと玄関横のシューズケースに手を伸ばす。扉を物で抑えるのも施錠の一つではあるはずだが、流石にそれが動かされる前に住人が動くようだ。ガタ、と、玄関先の物音を聞いて一つため息をする少女。眼鏡の奥に面倒臭さを湛えて戻ると、仄かに灯る赤黒い瞳と目が合った。

「なにやってんの？　それよ、取っ手の上とその上のやつ。摘んで、横に倒して」

「こちらですね、畏まりました」

「チエーンも掛けておいてね」

「それはなんとなくわかります、ここに通せば宜しいのですね」

家主が目配せするとカチャ、カチャ、カシャン。リズムよく施錠される。

戸締まりが済むとリビングルームへ戻る董子。

シユルリ解いたループタイを片手に、そのままブラウスの袖口と襟元にあるボタンも外して軽い伸びをした。定められた煩わしい姿から開放された事を示すように両手を軽く上げ、その姿勢のまま振り向くと、玄関先で立ち止まったままの客を見つけた。

「上がらないの？ ああ、靴は脱いでよ？」

声がかかると動き出すアイギス、では失礼と断りつつ高いヒールを揃えて上がり込んだ。

普段であればカツカツと、蹄のような足音を立てて歩く彼女だが今は素足、木目調の廊下からヒタヒタ鳴らして姿を見せる。

「ようこそ我が家へって言うておくわ、一応ね」

「あらためまして、歓迎ありがとうございます」

二人で対面する形になると、家の住人から言葉だけの歓迎が伝えられた。口にされた一切の心が籠っていない歓迎に対して、普段よりも軽い頭を深々下げて感謝を述べる。

形だけの挨拶が済むと、『後は好きにして、目立つ頭のやつも戻していいよ』と、そう言い残し董子は隣部屋へと歩いて行ってしまった。

すぐに戻ってはきたものの、手には大小二つのタオルと着替えらしい服が見られ、その手荷物を持ったまま彼女は廊下へ歩き去る。向かう先にあるのは水回り、荷物から察するにまずは汗を流す事にしたようだ。バタンと、軽金属の折り戸が軋む音がした。

「好きにと仰られましても、ね……」

家主が消えた先を見つめてつぶやく。

ない角を撫でるように手を伸ばしそのまま下げ、揺らす黒髪に手櫛を通して悩む黒羊。

好きにしろと言われたが何をするつもりもなさそうな表情、というよりも初めて訪れた家で周りには見慣れない電化製品が並んでいる空間では何に触ればどうなるのかもわからないようで、下手に動いたり触れたりする気にならないらしい。

暫く佇み待つが董子が戻ってくる気配は感じられず、僅かに聞こえる鼻歌からは手早いシャワーではなくゆっくりとしたバスタイムの雰囲気だけが伝わってきた。致し方なしとリビングルームの壁際に



並ぶ本棚の前で佇む。

「オカルト・都市伝説・魔導関連に聖書の写本、他には方々の神々が載る書物と、やはりそういった物がお好きなようです。小説や雑誌を除けばあの部屋と変わらないラインアップですが……ESPとはどういうものでしょう？」

——触れずに灯りを点けるだけとは思えません——

董子が見せた僅かな力から勘ぐりつつ部屋内を見回すアイギス。

眩きながら、いつの間にか消えていた玄関の灯りからリビングルームまでを見やり、再度本棚に視線を落とす。部屋の主役になっている大きな棚には床から天井までが書物で埋められついで、並ぶ種類は部屋で積み上げられていた物と同じジャンルばかり。違いがあったのはESP、人の操る密なる力について纏められたファイルが日本書紀や古事記といった、この国の神を記した書物と同じ棚に数点混ざっているくらいか。

「……千里眼、透視に念写。この記載からしますと山の白狼天狗に似た力？……よいか、戻られたら伺ってみましょう」

不意に目についたファイルを取り、中身をぎつと読み解く。

内容は一人の女性について。千里眼だと持て囃された誰かを董子が調べ纏めたものがファイリングされていたが、そのファイルはすぐに閉じられた。聞き慣れない力の名称が気になっただけで中身についてはそれほどらしい。

そうして視線を戻し、並ぶ背表紙に指を這わせ、流し見て、一つの棚を注視する。視線の先には飾りの小物代わりにでも置いてあるような、封切られ、開いたままの箱からこぼれるカードの類。

「数年ぶりに目にしますね、幻想郷で見かける事は殆どありませんでしたし……いえ、こちらで使われ続けているからこそ見なかったのか」

おもむろに手を伸ばし、懐かしむ顔つきを見せる。

全く見なかったわけではない、紅魔館に住まう魔女が幼いメイド見習いをあやすのに遊びと称して占って見せていた事はある。が、見たのはそこくらいで他の場所で見かける事はなかった、幻想郷で占<sup>ほく</sup>なる

占術といえば易や風水が主流であるし、直接話して御神託を頂戴できる神々もおわすのだから、流行る事などはなかった。

「丸柄やバツ柄も混じっているようですし、これらは新しく追加されたアルカナ……いえ、そこよりも、これらに残るモノは……」

手にしているのは運命の輪や悪魔といった見覚えのあるタロットと別の種類。

それら見慣れたタロットカードに混ざる、丸やバツ、波模様の描かれたカードには董子より発せられる力と同質のモノが残っている。魔力や妖力といった見知った力とは違うソレは異能な物に違いないはずだが、アイギスから見てもこの力の残滓ざんしに思い当たるものはないかった。

けれど長考はせず、こちらも主に問えばよいかと、手放したタロットと共に意識も別の者へと向けた。思考を改めると視点も変えて、手にしたままのファイルを捲り始めた。

風呂に読書に二人が向かい、空いてしまった僅かな時間。

この隙間な時間を利用し、少し振り返っておくでしょう。

それは少し話を遡る事になる。

董子が会長を務める倶楽部『秘封倶楽部』の部室で顔を合わせた二人、本当に呼び出せるとは思っていなかった女子高生と呼び出された黒羊。会話のスタートこそあんな呪文で出てくるな！ という文句から始まったものだったが、言いたいことを全て言い放ち肩で息する董子が落ち着く頃には穏やかなガールズトークとなったようだ。

話の内容としては互いに情報交換をすませた程度だが、それだけでも存外悪くない語らいとなったらしい。董子は知りたかった事、この世ならざる者が本当に存在する事を知り、アイギスは得るべき今現在の状況などを仕入れて、各々が一つ納得出来た頃合いに、そろそろ放校の時間だからと帰路についたのが今までの成り行きである。

このタイミングでアイギスから自身の在り方、主に悪魔としての契約云々も話題として出されているが、今はまだ仮契約、契約書に判を押す前で止まっているようだ。

アイギスの場合には魂を代償とする固い契約というよりも、互いに納得して結ぶ商取引に近い形だと話されてはいるが、流星に信用されないうらしく、呼び出した手前同伴は許したがそれ以上の関係性にはなっていないらしい。

さて、足早に語ったせいで細かな部分を割愛したがその辺りを語るのはまた後程になりそうだ。洗面所方面から一度聞いた軽やかな戸の音がした、軽合金で出来た風呂場のドアが開いたのだろう。となれば風呂上がりの娘が戻ってくるはずだ、二人が顔を合わせればまた何かしらの会話が始まるのだろう、今はそちらに耳を傾けるべきだ。

「あつつう、水浴びてから出てくればよかった」

火照る董子が大きめのタオルを被り、羽織る予定にあつた薄手のパーカーと眼鏡を両手に戻る。

季節は秋を迎えているが日の差す時間帯はそれなりに暖かだった今日、日中誰も居らず締め切られたままの家は昼間の名残を内包したままで、火照った身体にはすこしばかり暑いのだろう。着ているキャミソールからはみ出した素肌には淡い赤みと薄い汗が見え、柔らかかそうな生地の手ショートパンツより伸びる足にも健康的な色味が浮かぶ。湯上がりでトレードマークこそかけていないが、今かければレンズが曇りそうな雰囲気である。

「なんで立ち読みしてんの？ その辺に座つたらいいのに」

リビングに戻ったほてり娘、帰り道に立ち寄ったコンビニエンスの袋に手を伸ばすとペットボトルを取り出しキャップをひねる。片手を腰に当て、歩きながら飲みつつ、そのまま流れて窓を開けると、吹き込む柔らかな夜風を身に浴びた。年頃の少女が油断した格好で窓辺に立つなど不用心だが、見られる景色は山の湖へ向かう上り坂があるくらいだ、特に問題もないのだろう。

そうして首や肩に張り付く濡れ髪を被ったタオルで纏め、見た目からリラックスした様子を見せると、気だるげにソファへ向かい横になった。

湯あがり娘が落ち着くと、促されたアイギスも同じソファに腰を下ろすが二人とも座るだけ、揃いはしたものの何も話しはしない。方

や火照る身体を冷ますように摘まむ胸元をパタパタさせ、もう一人は開いたままのファイルに視線を落としている。

「興味あるの?」

この静けさを破ったのは董子の声。

ペットボトルの飲み口を唇に添えたまま、纏う雰囲気通りの素振り  
で問う。

「この人間自体にはさしたる興味もありませんよ、貴方様がお調べになる理由には惹かれますが」

尋ねられたがアイギスは顔を上げない。

董子の視線がアイギスではなくその手元のファイルに向かっていと気づいているのだろう、話題にだけ切り返し、そのまま会話は続いていく。

「気がついてないフリしなくてもいいよ、別に隠してないし、隠してもムダっぽいしね」

くつろぐ少女が目を細め、テーブルのビニール袋を睨むと、一瞬間を置いて袋が動く。

弱々しく動き、下がり、中に入っていた今夜の夕食がチラ見えた。僅かな動きではあるが念じた物を動かした董子、人間が操るには異質な力なれども、その力のはか細く弱い。が、今の彼女にはこれが精一杯、薄く軽いビニール袋を動かしたり、放った帽子の軌道を誘導したり出来る程度のようなだ。

「ねえ、これってやっぱり魔法なの?」

「結果だけ見れば近いのでしょう、ですが我々が操る力とはまた別の御力にございますね」

「その……我々ってさ……」

「作用については同義となりましようが、そうですね、詳しく分類するならば我々に宿る魔力や妖力とは違ったモノにございます。言うなれば人の内より湧く力、我々に宿るように、人にも宿る超常なる御力といったところでしょうね……御学友から感じられた神力とも違った御力にございますよ」

濁した質問ではあったが返事の中に正解はあった。

淡々としたアイギスからの返答、その中の『我々』に含まれて欲しかった後半部分を聞いて、董子は小さく頷く反応をしてみせる。

「そっか、やっぱり早苗ちゃんのやつとも別なものか」

「あの方からは神が操る力と同質のモノを感じました、ですがマスターから感じられるものはまた別、私にも覚えのないものにございますね……仲良くお揃いがよろしかったので？」

「別にそういうんじゃない……ただ、同じだったら色々聞けたのかなって思っただけ」

言い流しながらアイギスの手元で閉じられているファイル、そのページが勝手に捲られた。手元の覚束ない赤子がつまんだような動きで数枚、パラパラ動き、止まる。

董子が己に宿った神秘なる力を操ったようだ。

開かれたのは羊が立ち読みしていたページ、アイギスが再度目線を落とすと董子が口を開いた。

「百年くらい前の話よ、些細な催眠術を切っ掛けになにかに目覚めたって人がいたの。そのスーパーな力でお姉さんのお手伝いをしてる時だったかな？ 世間に目をつけられてき、色々話が膨らんで、一躍時の人になったんだって」

董子が話すのはファイルに閉じられた誰かの秘密。

切っ掛けからその後までを話しているが、空で語れるほど熱を入れ込んでいるのだろう、アイギスが指を這わせる文章を掻い摘んで語れば今のような物言いになる。

「病気になった人の病巣を透視したり、手をかざして治療してみせたりしてね、結構当たったし治ったりもしたんだって。で、そんな評判はすぐに広まって、最初はスゴイと持て囃されてき……でも、最後には世間から叩かれて……」

寝そべったままの董子が語る。

見慣れた天上を見つめ、片手をそっと視線の先へ、もう片方は力なくソファアの縁より垂れ下げて。その姿は諦めを覚えた者が持つ雰囲気。もうどうにでもしてくれと、生きる事を放棄した実験動物のようにも見えてしまう。

「叩かれて、死にましたか」

言い淀んだ部分を含み、代弁するアイギス。

記事を追っていた指を止め一言述べると、アイギスの手元から見慣れた天井へと視点を変えていた董子が、伸ばしている左手の指を重ね、弾いた。

「そ、自殺しちゃったんだって」

灯る電灯を眺めていた董子。

素っ気無い声で答えを語りながら、体毎横を向き、背中を丸めた。

開け放ったままの窓からそよいでいる夜風に少し冷やされたものもあるにはあるが、今冷えているのは肉体よりも内面だろう。僅かではあるが自分にも超常的な力がある。それはまだ弱々しい力ではあるが、これがファイルの女性のように広まれば、広まってしまえばどうなるか、そうなった時の私は何が出来るのか、どうされるのかと、近頃考えるようになったらしい。

今の時代に不思議な力など有り得ない、信じられるはずもない。公になったとしてもネットの隅で一時の話題になるだけでそれほど恐れる事もないはず、危ぶむ事もないはずだと感じる心もあるけれど、いざ己の事となると深刻に考えざるを得ないようだ。

「世間のバッシングに耐えられなかったって説もあるし、金銭的なトラブルが理由だって言う人もいるわ……」

「よくある事、昔から変わらずある事にございますね……浮かない顔色から愚察致します所、主様も同じ道を選んでしまうかもしれないと、そのように案じておられるので？」

「そんな事は……彼女の行動自体はどうでもいいのよ、彼女は彼女で私とは違うんだから」

董子からすれば調べ上げた過去の歴史、紐解いた歴史から考え浮かんだ悩みだが、アイギスから見れば過去に見てきた人の行いとそう変わらない。一時は持て囃された、その部分に多少の違いはあるものの、董子が危惧するものはアイギスがいつか眺め蹂躪した魔女狩りとなんら変わりのない事に聞こえる。

そうしてその後、魔女として狩られ焼かれていった者とファイルの

中の彼女を擬えて悪魔から問いかける。

「左様にございます、否定され死を選んだ彼女と貴方様には違いがございます」

「言い切るのね……その違いってなに？」

「なに単純なお話です、彼女の傍にはソレを理解出来る者がいなかった。ですが貴方様のお側には私がおります」

語りながらパチン。

アイギスが指を鳴らすとその音に惹かれたのか、何かをしたのが気になったのか、董子は身体を起こす。と、同時にもう一度聞こえる指の音。

軽々しい音がリビングに一瞬響いて掻き消えた。

惹かれたその音を探すように董子が目配せすると、すぐにその元凶と視線が重なった。眼と眼が合うと笑うアイギス、出会いから浮かべていた営業スマイルよりも幾許か悪戯な雰囲気混ざる笑みを見せた。

「披露しておりませんでした、私にもそういった力がありました」

「でしょうね、本から出てくるようなファンタジーな世界の住人なんだし、なんかあっても不思議じゃないわ」

「丁度いい話題となりましたし、そのファンタジーな力を少しだけお見せ致しましょう」

態とらしく掲げられた手先、さながら営業マンが自社の推しを知らせるように伸ばした手指には少女の視線が注がれる。董子の気を引くための動きはその効果を表したようで、アイギスの思惑通りに視線を奪う事が出来た。そうしてここから魅せるのは口にした通りの事、アイギス自身が持ち得る力。

「え……えっ？」

けれど何事も起こらない、アイギスも掲げた指を弾くのみでそれ以降の動きは見せない。

見せると言った割に何事もない、それについて問いかけようと董子が一步踏み出し、何もおきないじゃない……と話す前に何かが起こった。つい先程まで見つめていたファイル、アイギスの手元で開かれて

いたファイルが蝶々のように羽ばたき、董子の周りを飛び始めたのだ。

「なにをしたの!？」

「大した事は何も、それでも答えろとおっしゃるのならばそうですね、タロットにある私の姿らしい事をしたとお答え致しましょう」

間の抜けた声を上げ、目を泳がす董子と、一点本棚を見るアイギス。慌てる少女、右へ左へ忙しく流すその目には複数の本が浮かびそれぞれ舞うように動き回る光景が映っていて、アイギスの視線を追うどころではないようだが、アイギスは答えた通りの行いをしてみせただけである。

棚の上に置かれたタロットカード、その中に見つけた悪魔の絵柄は逆さまに置かれていた。逆位置の悪魔が意味するものは『誘惑・束縛・悩みからの解放』といったもの。現状とソレをなぞらえば、己の内にあるモノを思い悩む董子を開放させようとした、と、そうも見られるが：：先のファイルを切っ掛けにして他の物も色々と動き始めた今、書物に続いては置いてある小物、カードの類がリビング内で広がり、冷蔵庫や廊下との仕切りドアやらが音を立て始めた今は、気が晴れるどころか、慌てて騒ぐ少女の姿しか見られない。

「これが貴方の力？　ならわかったから、散らかるからやめて、やめてってば!」

「やめろとは？　何を仰られるのやら、この現象についてでしたら私は何もしておりませんよ?」

軽快に開閉する扉を眺めながらやめろと、語気荒くする董子だったが、その姿はキッチンの蛇口から溢れた水流に阻まれ見えなくなる。

それでも漂うのは水だ、声は問題なく通り聞こえるはず、そのはずだがもう一度やめろと命じる董子の声にもアイギスは応えない。悪戯な笑みを浮かべ召喚者を見守るだけ、巻く水流と軽やかに舞うカードの渦に飲まれるマスターを眺め声なく笑みを見せるだけであった。

初めて見る態度、商売人が客に見せる営業用の顔ではない、魔の者らしい嫌味さが多分に含まれた笑顔に苛つきを覚えた董子がアイギスを睨む。



すると渦を巻くカードや水の流れに別の指向性が生まれた、少女の回りで緩い渦を描いていた者達が鋭い螺旋に変わり、その刺々しい先端が微笑む悪魔に向いたのだ。

そうなつてから漸く動く黒羊、悪感情が逆巻く水の槍に右手をかざし、指を鳴らす……途端に消え失せる玉散る刃。

「私が操る力はこのようなものにございますれば。今見られる現象は私の手によるものではございませんよ」

「ならこれは——」

「覚えがございませんか？ そのような事はないはずです、ご自身でも理解されておいででしょうか？ この場で起きている全ては貴方様ご自身の御力によるものだと」

「……私？ 私の方？ でも、それでも……」

でも、と言い掛けた董子だが、そこから続く言葉はない。

何か否定する言葉を言うつもりだった、けれど何も言えなかった。

アイギスに言われずとも頭の何処かで理解してはいた、今日の前で起こっている現象が己の持ち得る力、いつからか芽生えていた超能力によって引き起こされたのだという事も、今までよりも高い理解度によって感づく事が出来ていた。

しかし頭が回るおかげで腑に落ちない事にも気がついた。

それでも、と納得出来ないのは自身の力にしては強すぎると理解してしまつたからだ。私の力では壁のスイッチに触れずに電気を点けられる程度、薄いファイルのページを捲りあげられる程度だったはず、小さく軽い物を動かすくらいなら兎も角思考速度をあげる事など出来ないのだと、別の部分で己の力量を知っているからだ。

そうやって納得出来ない部分について悩みかけた董子だったが……

「先のお話の最中に一つ思いつきまして、紹介ついでに出会いの記念品を送らせて頂きましたが、お気に召しませんでしたか？」

「貴方の魔力を押し付けた……ってわけじゃないわね、これは私の力で動いているんだから」

気に入らない顔つきはしていない、その年頃の女の子にはおお

よそらしくない、落ち着き払った気配すら見せて言い返す董子。

アイギスから送られた記念品、それは些細な切っ掛け。お話の流れから察した悪魔が自身の力に悩む現代人の枷を穿ち、力を発するリミッターを失きものとしたようだ。董子の心にあった枷、神秘なる力を恐れ、開ける事を戸惑って深く沈めていた扉は、今強引に開け放たれた。いや、穿たれ、大穴を開けられたというのが正しいか。

アイギス自身がこの国を訪れた際にもプレゼントを押し付けられた、それを真似て小さな記念品代わりに門戸を開いてみせたようだが、この少女はアイギスのように受け入れられるのだろうか？…その答えはすぐに話された。

「それでもいきなり過ぎて——」

「唐突な事など何もありませぬ、今の状態は在るべきモノが在るべくように成ったまでの事。そもそも悩む必要などないので、貴方様はその御力を受け入れておりました、自然に、生活の流れの中で表すほどに受け入れていたのです。であれば思い悩む事など何もないですよ」

董子の言い掛けた文句はアイギスに遮られた。

そして続く悪魔の持論はこう、考える必要などないといった内容。それも、受け入れるという問題ではないものであった。

それもそうだろう、アイギスから見れば悩む事でもない。既に手している力、自身の思うままに操れる力について惑うなど有り得ない、気に病み、深く案じるまでもない事だからだ。

身に余るような大きな力があればこまねく事くらいはあろう、事実アイギスが愛する吸血鬼は自身の能力を操りきれず、産み落としてくれる母親を破壊して世に生まれた、凄惨な生誕を迎えた妹はそれをトラウマに抱え生きていた頃もあった。

だが董子の場合悩むまでもない、誰に影響を与える事も出来ない弱々しい力しかなかったのだから悩むに値しない、というのが語らなかつたアイギスの本心である…故に先のような行いをしてみせた。悩むのならば真っ直ぐ悩めるように、身に宿る全てを知り考える事が出来るようにと。そんな考えで見えていなかった、否、見えていたが

開ける事を恐れていた扉を強引に開け放ったのであった。

「だからってー！　こん……あ……」

アイギス相手に冷静さを見せた董子でも流石に興奮したのか、詰め寄り手を伸ばした……瞬間に女子高生の鼻から赤い筋が一筋漏れ、そのまま前に倒れ込むが、テーブルに顔面から突っ込んでしまう前にアイギスに支えられる。

そうして意識を失う少女、悪魔の腕で静かに眠る姿は約定により魂を奪われ息絶えたようにも見えらるが、今は気を失い倒れただけ、突然溢れ出した自分の力に飲まれる前にストッパーが働いただけである。

こうなったのも唐突に感じられるが、つい先程までは只の人間に毛の生えた程度の存在だったのだ、そんな女子高生がなんの構えもないまま籬たぶを外されれば制御する事など出来ようもない。けれども力に飲まれ暴走したりはしない、アイギスが外したりリミッターは彼女の能力にかかる部分に作用するものだ。今動いた別のリミッターは彼女の生命に関わる枷だろう、慣れない超能力に任せていれば自身の命が危ないと、董子が人として持つリミッターがそのように感知、作用して意識を失ったのだろう。

「上手く扱えるようになるか、潰れて死に絶えてしまうのか、それは貴方様次第。出来るならば前者となり、我が期待に応えて頂きたいものですね」

抱く少女に語りかけるアイギス。

主の顔を汚した血を指で拭い、赤く染まった人差し指を舐める。

仕える主の味をみて穏やかに微笑むその姿は非常に胡散臭い。例えるならば、かつてアイギスに言語のプレゼントを押し付けた妖怪が得意とする表情に近いが、あの隙間ほど器用でも奸計に長けているわけでもない羊は笑みの奥に企みなどはない。

彼女の腹にあるのは、腕で眠った人間が見せてくれるはずの今後。

燻ぶる現状を打破し、案じた未来に向けて思い切った行動をして欲しいと、召喚者の力の目覚めを早めた逆位置の悪魔は想う。

## 第七十一話 神は悩みの風を吹かす

少し角度を上げてみれば視界に収まる赤や黄色。

昏れ始めた山木が魅せる秋の賑わい。

よくよく見れば今はまだ力強い緑がところどころに残っているが、過ぎた季節の残滓はもうすぐにやってくる本格的な寒気に蹴落とされ次第に減っていくだろう。そうして緑がなくなると一瞬の隆盛にはしやぐ暖かな葉が主役となるが、そうした紅葉も時を待たずしてはらはらと散っていく。

大昔から続く景色の移ろい。

それは遙か彼方、神代七代の時代に契を結んだ神が安定せず揺らめき続ける大地を穿ちこの国の元をお創りになられてから始まった事であり、そうした自然の営みは間もなく地に馴染み、文字通りごく自然的なものとなった。

昔も今も、この国に住まう者ならば誰でも、どこにいても感じられる物。文化の芽が華開いた現代社会においても大地の変化は常になり、少し視点を定めれば美しい情景が見られるはずだが、今を生きる人間達の多くは一時の話題とするのみで心から愛でようと、感謝しようと考える者は本当に少なくなった。

地は移り変わるもの、四季は巡って当然と考えられるようになった現代。

向けられるべき自然への信仰心は薄れ、消えて。

移ろう季節は天からの授かりものではなく、今やイベントの1つとしてしか捉えられなくなった昨今の人の世。

そんな今世にて、情景も見ずに視線を落としている者、一人。

かつては豊葦原中国を支えるように聳えていた大きな柱、今では境内の中で朽ちかけ自然に帰ろうとしているそれを遠くに背負い、本殿のその中央で信仰と共に消えかけている神の姿があった。

「万象一切紐付いて成る、か。また新たな理が顔を出したようだね」  
冷える神殿の床から僅かに浮かび上がり、あぐら姿勢で手元の文字を追う。

手にする文字群、昨日の学校帰りに娘が買ってきた新聞の記事を眺めてぼやくのはこの社に祀られる神、八坂神奈子。

読み上げた文章は近年信憑性の増してきた学論の一つ。

概要を語るなら、物質の最小単位は粒子ではなく一本の紐であると論じているか。

人では認識出来ない須臾の世界に広がる紐たちが結びついたものが物質であり、それらはどのような力場においても一つの物として繋がりが統一されるもの、されるべきものなのだ。と、そういった観点から論じられた解説文である。

論自体はさほど目新しいものではなく過去の学者達も唱えていた説ではあったが、ここ数年の内にまた名前が上がるようになってきていて、今になり世間に再認知され始めたようだ。

「超統一物理学は新たな自然法則として受け入れられるか、ねえ。これは論調からすれば発掘になるのかね？……どうにせよ人の進歩はめざましいものだな、このような論が世に通ずれば我らの肩身など益々失せてしまいそう……」

いや、既に殆どがないようなものだったね。

そう言い切った後で小さく、軽く笑い、紙面から顔を背けるように寂しい独り言を呟いて、正面に見える参拝路へ視線を投げた。

古くは名にし負う守谷の社と馳せたこの地も今は訪れる参拝者など殆どおらず、静かな境内では枯れ葉と小鳥が賑わいを見せるのみ。そうして音なき境内を儂げな表情で見つめた後に、今日も今日とて澄み渡り事もなく広がる空に至るよう、山の神が顔を上げた。

「今日は話し合いと言っていたか。文化祭の会合との事だが今日もそれだけで終われば良いが」

神社の住居スペースに神奈子が聞き耳を立てる。

うつすらと聞こえる生活音は台所方面から。リズムカルに何かを刻んでいる音と、コン口に掛けられているだろう鍋の湯が湧き、火が止められた音が薄く流れる。

天を照らす太陽が登り少し経った今だ、これらは一人娘が学校へ出る前に毎日欠かさず行われている神事『日供祭』もとい朝餉の準備の

音だろう。

火を止めて御御付けの味噌を溶いて、後は器によそうだけになると敬愛する神を呼ぶ声が聴こえ、それに応えて社務所に向かうのが今の神奈子のお決まりであった。

「八坂様〜！ 諏訪子様〜！ 朝ご飯ですよ〜!!」

噂をすれば届く声、毎朝変わりなく呼ばれる二柱の神名<sup>みな</sup>。幾分後者の名前が強く呼ばれるも返事を返すのは先に呼ばれた神のみで、もう一柱からの反応はなかった。

けれどお声掛けした娘に気にした素振りはなく、慣れた調子で卓に皿を並べていくのみ。

今は声を返してくだらないが消えてしまったわけではない、深い眠りの中にいて気がついていないだけ、日によっては時間をずらして目覚めてくる事もあった為諏訪子の分も欠かさず用意し呼ぶようにもしている、これが早苗の朝の決め事らしい。

事実諏訪子は顕在で未だ神としてこの社に存在はしている、だがその姿はここ数日の間誰にも見られていない。と、こちらを掘り下げて語りたいが今は他の面を見ていこう、この間に食事の準備も出来たようだ。

「おはようございます！ 八坂様！」

「おはよう早苗」

朝らしい食事が並ぶ卓に祭神が鎮座すると元気の良い挨拶が始まる。

これから向かうだろう学校の制服にエプロン姿の早苗が笑顔と共に語りかけると、穏やかな声と尊顔を見せる神奈子。二人で着くには少し大きな卓に腰を下ろして、今日の天気予報を知らせていたTVを一旦消すと神眼を閉じ、唱和し始めた。

「鎮座、一拝一拍手……たなつもの」

「たなつもの」

「百<sup>もも</sup>の<sup>もも</sup>木草<sup>きくさ</sup>も天照<sup>あまてらす</sup>す 日の大神の めぐみえてこそ。 さ、頂<sup>み</sup>こうか」

「はい、頂きます」

神の唱和に合わせて顎が引かれ、柏手が打たれる。

そうして続いた一節が静かな食卓で流れた後、消されたTVが点り  
楽しげな地元の催し物の知らせが流れ始めると、社の日供祭あきごはんが始まっ  
た。暫し無言で食べ進め、ある程度満ちた頃神の眼が液晶に向かう。  
合わせられている局はこの地方限定のローカル局らしく、今時期のこ  
の地域で一番の賑わいを見せる場所をレポーターが歩いていた。

「ああ、もうそんな時期なのかい」

「明日みたいですよ、駅前を通りも賑やかでした」

流れる画面を見る二人がそれぞれ感想を述べる。

それはこの街で数年前から始まった人間の催し物で、通りに並んで  
商う酒屋が日を揃えて騒ぐイベントが開かれる。画面にはその準備  
に追われる店の者達や街道で見物する人らの賑わいが映し出されて  
いた。

「プリンで良ければまた買ってきますよ」

「諏訪子が喜んだあれか、そうだね、よろしく頼むよ。出来れば酒も願  
いたいところだけど」

「今は売ってくれなくなっちゃいましたからねえ」

「そうだねえ、正月の奉納品を一人で空けるだけが私の楽しみになっ  
てしまったなあ……早苗が小さかった頃は頼めたのにねえ。家の買  
い出しすら気軽に出来なくなるとは、本当に世知辛くなったものだ」  
見つめる先を同じにした二人の会話。

早苗は丁度写り込んだ酒蔵が仕込む人気商品を話題に、神奈子の方  
はそれを踏まえての語り。

まだ早苗が幼かった頃はメモ帳片手に店に行き四合の酒を買う事  
も出来たけれど、早苗の見た目が大人と見紛うくらいになった今はそ  
ういった買物物を気楽に頼む事も出来なくなっていた。

昨今の情勢や新たに敷かれた法の元生きているこの世界、そこに住  
む者としては致し方ないと感じつつも、少しのボヤキは出てしま  
う神。

「お正月ならちよっとくらいは……後5年くらい待っててもらえれば  
お相手出来るようになりますから、それまで我慢してくださいね」

「ほう、私の相手を早苗がねえ、お猪口一杯で酔ってしまうようでは相

手とは言えないよ?」

「それはその……精進します! はい!」

お屠蘇の一口で顔を真赤にする娘、彼女を見つめて微笑む親。

日常を笑い合う二人の会話は親の目線の先にあるものにより終わる。

「まあ、期待しないで待っているさ。それより時間は大丈夫かい?

今日は早く出るんじゃないかなかったのか?」

「あ! 本当だ!」

朝餉よりも話題に注視していたからか、早苗が考えていたよりも時計の針は進んでいた。

神奈子がそれを示すと、風もないのに髪を左右に靡かせる早苗。

時計とテレビ画面、それから卓の食器を見つめて、大急ぎで残りの食事をかきこんでから手を合わせる。と食器を片付けるつもりで立ち上がるが、それは私がやっておくから早く出なさいと、対面の神より託宣を受け手を向ける先を変えた。

揃えて置かれた箸や米粒一つ残っていないお茶碗から食卓の側に立て掛けておいた学生鞆を見つめる早苗、一瞬考えた後で脱いだエプロンを雑に畳んで茶箆筒の上に置くと、鞆を手に取り立ち上がった。

「焦らず、気をつけてな」

「は、はい! すみません! 行ってきます!!」

「行ってらっしゃい」

神奈子の送り言葉を背に早苗は駆け出す。

老朽化が目立ってきた廊下をドタバタと軋ませて、姿が見えなくなつてすぐに、今日はちよつとだけ遅くなるかもしれないと言いつつ、ぴしゃんと戸を鳴らし出ていった。

その騒ぎを聞き届けて一人微笑む八坂の神。娘が出ていった廊下から目線を変えるとよく見る姿勢、片膝立ちの堂に入る姿で一人画面を睨む。

そうして見る先が変われば思考も表情も変わる。

先程まで浮かべていた秋空のような顔から冬場の曇り空のような、少しだけ陰りのついた御尊顔に色を染め直し、別の何かを案じる様子



が浮かばせた。

難しい顔で眺めるのは、清々しい空をバックにリポートしていた映像から昨今のニュースに切り替わったテレビジョン、明るい話題を垂れ流していた音声は神奈子の雰囲気と同じく、内容を暗いものへ変えていた。

映像を見ながら一人娘のシルエットを思う。

見送った時の口調こそ画面に映る空を降ろしたようなゆつたりとしたものだったが、今の表情やそこに含まれる心情の方はそれほど緩やかでもなく。藍天を司る神様にしては暗い空気、ハレ渡るお天気だというに、纏う雰囲気はケの模様。

「さて。思い過ぎことなればよいが、ね」

テレビ相手に語らい、注視する。

今流れているのは地方ニュース。

常であればこの周辺の出来事を小さく纏めた記事が多く先のような土地の催事について触れられるだけであるが、この数日は別の話題で埋まっており、それも神悩む原因の一つ。

『また一人増える被害者、彼らに接点はなし』

『住民の中には人らしき姿を引きずり歩く不審な女を見たとの証言も』

『一人で行動しない事、もし不審者を見かけたら避難して逐一情報を』  
情報を取り上げ述べるならこのような物になるか。

インタビュされる者の中には、この地で祀られている古い崇り神の災厄が云々と語る者もいるにはいるが、その部分を聞いた神奈子は今更に過ぎると失笑し、膝に置いた片腕の拳を固くするだけであった。

「早苗から聞く限り害為す相手ではない、態度や姿勢は寧ろ好意的だったと言ってはいたが、なあ」

なあと同時に動く神の御手、ゆるり伸ばされた腕は隣にいる親しい誰かに向けたように穏やかさがあるが、差し出されたその腕と声に返してくれる者はいない。

ここは神社の敷地内、彼女達を祀り奉る神殿の内であり返答をくれ

るもう一柱も現存されているはずだが、今ばかりは独言として流れ、液晶の中に浮かぶ小さな雲と共にどこぞへ消えていった。

「あからさまに怪しい者だったのならば早苗も危険視したのだろうが……見た目好意的な相手、親しみやすい姿で近寄ってくる者ほど危ないものだと気が付いたり……しないのだろうか」

続く独言は娘の事。

保護者達の育て方が良かったのか、住まう環境が良かったのか、或いはその全てが良かったのか。八坂の神が心を配る少女は誰に対しても素直さを見せる事が多い。極々稀に訪れる迷い子や、この時期に採れる山の恵みを摘みに来て道に迷ってしまった者でもいれば、住まう神社に祀られる二柱について説明しながら麓へ送る事もある。未だ残る少ない信者達と顔を合わせれば自ら挨拶し、お茶でも出して語らう事もあるようだ。

そういった人としての優しさ・甘さは人間としての美德であり、将来成り上がったはずの神として人心を得る為の術と成り得るけれど、今はそれが悩みの種になっているらしい。

「諏訪子が黒と言いつつ切った手合。今はうちの<sup>早苗</sup>子ではなく<sup>重子</sup>の娘に取り憑いていると聞くが……彼の者が現れてから巷が賑やかだねえ」

痕跡を残しながらも尻尾を掴ませない相手を評す。

そうして、この者も神隠しを嗜むとでも言うのかい？

どうなんだい？

と、見据える部屋に問う山坂の神。

されども返事は返ってこない、何かしらの言葉を返してくれる諏訪子は数日前に目を覚まし苦い思い出を語らつてすぐ、また深い眠りの淵へと沈んでしまっているようだ。

「今日もだんまりか……戦の最中に出会った相手ながらこうして姿が見えなくなると存外、寂しいものだねえ。表と裏、話し合つて決めたあの日からいつかはこうなるのかもしれないと予見する事もあったが実際目の当たりにすると中々……くるものがあるよ」

娘を按じる母の顔でいた神奈子に一抹の侘しさが灯る。

話しぶりから守矢の裏の祭神は既に消えてしまった、そう聞こえて

しまうかもしれないが今はまだ消えてはいない。それでも、かろうじて廃れずにいるだけで殆ど消えかけていると言つても間違いいではないだろう。

あの胡散臭いスキマ妖怪が現れた十年前、あの日を皮切りに諏訪子は一気に弱まってしまった、それこそ守谷の神域内である社や湖ですら姿を顕せなくなるほどに。

どうにか神としての在り方を維持出来ている神奈子が神の終わりを危惧してしまうほどに。

「懸念材料を知りながら気に病む事しか出来なくなってしまったか、私も焼きが回ってきたのかねえ」

不安材料は既に仕入れている、けれどそれを取り除けない。

そんな己を叱責するよう、膝小僧を強めに小突く。

もう少しだけ、ほんの少しだけでも神としての力が残っていたのならすぐに動いて払った、愛娘に降りかかりそうな火の粉は今まで払ってきた。だが現在の神奈子は己の神域を守り、領域内で神として在るのが精一杯に近い……故に感じる焦燥感だが、今朝は他にも案じる材料があるようだ。

「……この地で得られる信仰も僅か、今や雀の涙にすら劣るようになってきた。いよいよもって終わりも近い」

懸念するのは後の神上がりか、娘の今か、それとも黒と断じた誰かの事か。

変わりやすい秋の空によろしく、乾を司る神が一人顔色を変えていく。母かと思えば次は祭神、そうしてまた保護者の顔へと、コロコロと表情を変え忙しい神奈子。思い出したくなかった話の中にふと出てきた会話を偲び、湯呑みに残る茶へ視線を落とす。

漂わせる雰囲気からは荒々しい風神としての姿は見られず、およそ神奈子らしくない、似合いもしない老弱さが垣間見えるがそうなるも当然ではある。諏訪子にはほど近い終わりが見えているが、こちらの神も同じ神社の祭神で諏訪子と共に信仰を得る事が出来なくなってしまう者だ、弱っている事には変わりない。それが姿として現れているか内面に出でしまっているか、その違いがあるだけなのだか

ら。

「火遊びして叱って、それから生まれた孫を抱いて。その頃までは現役でおらねばならんが、僅かに残る信者が去いなくなれば我らも遠からず神上がりとなろうな……」

思わず入る拳の力、再度叩かれる膝。

そうして湯呑みの中にいる己を見つめ、ぼやき、短かな沈黙の時間が流れる。

薄緑色の水面を見つめる神奈子。

早苗が雑に閉めた戸から僅かな隙間風が吹き抜けていくと、それに合わせたように小さな水面に輪郭のぼやけた自身の顔が映った。それはまるで今現在の在り方を表しているように揺らぐ姿。

今までは気にしていなかった、否、覚悟を決めて受け入れていた終わりだが、今朝の神奈子には何故か受け止められず、無意識の内に風を抑え、水面から目を逸らした……

「昔のように、いや、昔ほどではなくとも信仰を得られれば或いは……」

逸らしはしたが一度は揺らいでしまった心、それは平静とはならず。

早苗が触れた相手のせいで苦々しい昔を思い出してしまったせい  
か、何もせずに放っておけば愛する一人娘の今後に何かあるかもしれないと、諏訪子のように存在が危ぶまれるような事になるかもしれないと。であればこのまま指を啜すすめるだけではマズイのかもしれないと、未だ顔すらわからない誰かの影が、過去に諏訪子と交わした覚悟を揺らす切っ掛けとなりかけていた。

「消えていく者達の楽園、もはや保たなくなつた者達の最後の拠り所  
だったか……幻想郷と言っていたな。妖々共スキマが跋扈するかような地  
であれば我らも昔のように……いやいや、何を考えているんだ私は  
……」

これ以上揺らぐ姿を晒しては諏訪子に笑われてしまう。

なればコレ以上はやめておこう。

弱い姿を晒していたがすぐに気を入れ替える祭神。

日ノ本の一柱としてこれではかっこうがつかんと、落としていた視線を上げ再度天井を仰ぎ右手を軽く延ばすと、再度口を開いた。

「朝よいに 物くふぶごとに 豊受の 神のめぐみを 思え世の人。ご馳走様でした」

食後の奏上を唄い、立ち上がる。

下の句だけを僅かに強く捧げた後、己の背を押すように強く風を吹かせると、前髪を揺らし、そのまま表情を隠して厨へ姿を消していった。

く祭神祈願中く

神が吹かせた風は山を下り、黄昏迫る町へ届く。

そうして何かに呼ばれたように少女が秋空を見やる。

靡く後ろ髪と巻いたマフラーを気にするように首元に片手を添えて、小気味よく鳴らしていたローファーを止め、自身の住まい方面を見上げた彼女。風に揺れ頬を撫ぜる髪をかきあげながら仰ぎ見るも、八坂の社で神が願われた願がんになぞ気がつく事はなく、なにか空耳が聞こえたようなと、少しだけ考えるような素振りをしただけ。

気のせいかな、すぐに考え直した少女は少しづつ見られなくなっていく木々の葉と似た、若芽のような長髪を揺らし、また歩み始めた。

磨かれた爪先の向く方面には地元のスーパーマーケット。

通っている高校での会議、近く始まる文化祭についての話し合いを終えた女子高生は今そこへ向かっている。それ程大きな店ではないけれどこれから向かう予定にある友達の住まいからも実家からも一番近くて、彼女が食料品や生活必需品を買う際によく利用している店だ。

「あ、玉ねぎ安い、帰りに残ってたら買っていきつと」

店舗前のワゴンセールに引っかかる女子高生。

立ち姿も若々しく見た目こそ学校帰りの制服姿だが口振りは主婦のそのよう、空からの買い物かごを肘にかけ、手はその延長の顎にある。そうして品を眺めていると店内からたまに見かける相手、今も数

少なく残る神社の参拝客を見かけ、小さな会釈をした。

それから互いに会話なくそのまますれ違う、つもりが相手の体は止まったまま。老婆の目線は少女が下げた頭に向いていて、何か見慣れぬものでも見ているように感じられるが見られる側は気にもせず、自動で開いたドアを抜け中へと進む。

「うくん、何がいいかな？ お粥作るならとりあえずご飯と卵と、風邪なら葱が効くんだったけ？ まいつか、後は……果物かなあ？」

まだ埋まらぬ買い物かご片手に、もう一方には学校指定の鞆を下げて、訪れた店内で暫し悩む。

葉物野菜の棚と季節の果実の棚を歩き来すると、使い込んだ跡の宿る取っ手の留め具部分で、実家で配布している御守りが揺れた。

「何がいいかな、バナナ？ 柿とか美味しいんだけど自分で剥いたりしないだろうしなあ」

自動ドアを抜けてそこから中々進めない。

みずみずしい野菜と並列する果物達の前であれこれと目移りさせて、並んでいる食料を手にとって戻っていて、どうやら決めあぐねている様子。

「私なら桃缶で決まりなんだけど……あ、あれでいいかな」

幼かった自分が病気で寝込んだ時は大概桃の缶詰だった。普段穏やかな保護者達が少しばかり慌てて、それでも優しい表情でパカんと開けて一つ口に運んでくれた。

そんな微笑ましい昔を思い出しながら見つけたカットフルーツと、並んで置かれたキウイフルーツに手を伸ばす。意識せずに手前の鮮やかな緑の果肉が瑞々しいものに手を伸ばした彼女だったが、昔を思い出したせいかわ、最近はまだあまり姿を見せてくれなくなった神の御髪に近い果肉の物を籠に入れた。

「こっちのが甘そうだし、董子ちゃんでも半分に分るぐらいは出来るよね」

これから会う予定、いや押しかける相手の顔を思い小さく口角を上げた。

風邪を感染すから治るまで来なくていいよ、董子からは事前に連絡

を貰っている早苗ではあったが、ただの風邪で態々連絡までしてくれる事自体が珍しい為今回は余計に気になってしまい、抜き打ちでの押しかけ看病とするようだ。

董子が独り暮らしを始めてからまともな食事をしていない、と言つてしまうのは些かあの娘に失礼か。それでも出来合いの弁当やお惣菜ばかりを買い食いしている事は早苗も知っている、そうして今行けば『来なくていいのに、早苗ちゃんは心配性だなあ』と、照れながら言われ、部屋に上がる前に押し返される事もなんとなくわかつてはいる、だが……

「大きくなつてからお部屋に入れてくれなくなつちやつたけど、さすがにね」

——友達が何日も休んだら心配くらいするよね

追いつ返されるとわかつていながら向かう理由はこれだ。

今日より数日前の週頭、霊能サークルと銘打たれたあの部室の入り口で別れてから週末の今日まで、董子は学校を休んだままにいる。

休み始めた初日に本人から風邪を引いたという連絡はあった。普段使いの軽いメッセージで教えてくれたから早苗も気にしていなかった、季節の変わり目を迎える今時期だ、早苗自身経験している事でもあるし風邪くらい誰だって引くものでそれだけなら心配などしないが、流石に週の頭から終わりまで休み続けたのなら、友人として多少の心配くらいはするだろう。

実際の董子は風邪の熱に浮かされておらず、別の理由、それこそ風邪よりも厄介な者の仕業で浮いていたりして、それ故休まざるを得ない状況なのだが、早苗がそれを知る由もない。

「そうだ、あれから一緒に帰つたつて言つてたけど今も一緒なのかな？ それなら看病とかしてくれてるかな？ してくれてるといいなあ」

あの人なら我儘な董子ちゃんでも抑えてくれるだろう、少しの会話しかしていないがなんとなくそんな気がする。と、今董子とともに過ごす誰かに向けて早苗が小さな願いを唱える。

そうやつて一度思い出すと更に出てくる今週の出来事、別れたあの

日に聞いたあの悪魔の事も気になってくる。今も一緒にいるのなら多少の看病くらいはあるかもしれない、そんな考えを巡らせ願も掛けだが、冷静に考えればそんなはずはないと言い切れるだろう。

相手は人外で人に仇なす事ばかりが知られていた羊の悪魔だ、人を墮とし邪へと誘う者が看るはずはない。常人なればそう考えて当然だというのに早苗が前向きに考えてしまうのは彼女自身が祟り神に看病され、愛されて育った故か。他の者達から見れば畏怖すべき存在である神社の祭神だったが、早苗からすれば愛してくれる母のようなもの、そういつた相手に育てられれば今のような発想に至る事もあるのかもしれない。

「羊さんは何食べるんだろ？ コーヒーは飲んでたから私達と変わらないのかな？・・・草？ レタスとか好きかな？」

最後にそう言って売り場を離れていく早苗。他に必要だろう物を求めて、一瞬思い出した昔話の中で嗅いだ香り、レジ近くから漂ってきた甘く香ばしいお芋の香りに釣られるように歩きながら、見舞いの品を集めていく。

く少女物色中く



## 第七十二話 明け始める神秘

点滅する無機質な緑色、定期的に光るそこからは微風が流れている。耳に入る風音はとても小さく、澄ませば聞ける程度であり、時に涼やかに、時には弱々しくそよいでいた。

浴びて心地良い程度の風を吐き出すソレは暫く前から快適さを届けてくれていたが、とある時刻に近づくとその快適さに揺らぎを見せ、代わりに小さな警告音を響かせた。

静けさで埋まる部屋の中、誰宛ともない機械音が鳴ると姿を変えていく室内の様相。暗がりには浮かんでいた緑色はオレンジ色へ変わり、流れていた風音も次第に消え失せていった。

対流していた流体の流れが消えると動きの死んだ空間が出来上がり静寂を迎える、はずだったが一番目立っていた物音が消えた為か、今度は別の物音が台頭してくる。

次に聞こえてきたのはカチコチと、すうすう。

床で寝そべる時計の針とともに聞こえてくるのは寢息。それは日も落ちぬ時間から眠っている少女の呼吸で、ベッド上の歪な丸みより漏れ出ていた。

平穏を貪るように上下する毛布からは先ほど止まった空調の風よりも暖かな生ぬるい風が漏れてくる。上掛けを揺らす彼女も、今でこそ静かに寝付いているがこうなれたのはつい昨晚の話で、この1週間の殆どは宿す力に振り回されてしまい、若女わかめの肌に悪影響を与える暮らしぶりとなっていたようだ。

どのような過ごし方だったのか、それは彼女の周囲を見てもらえればわかるだろう。唯一荒れていないベッド周辺には本棚に収まっていたはずの書籍が散乱していて、まだこの時間帯であれば明るさや暖かさを取り込んでくれるはずの窓もシャッターの封鎖がなされたまま。部屋の飾りも担っているシンプルなカーテンなどはその端が裂けていたりめくれ上がったままになっている。

まるで物取りにでもあつたような部屋。冴えない独り身の男か、或いは行けず後家の寡婦やもめのほうが似合いだろうその空間にあるベッド

で、住人である少女が小さな動きを見せる。寝返りに合わせて右、左、薄手の毛布が同期して動くとはみ出した端からずり落ちた。すると、丁度眠りが浅かったのだろう、それに応える形で彼女は目を覚まし、毛布より頭だけを生やす。

「あう……もう朝?……」

寝起きの第一声は腫れぼったい瞼を擦りながら。

そうして体を起こすと見つめる先へ手を差し出した。気怠げに伸ばされた指の先には寝具と揃いで備えられたサイドテーブルがあり、それはよくよく見なくともわかるくらい使い慣れた家具ではあるが、寝起きの彼女は敢えて意識を集中して手を伸ばした。

彼女の意識が強まると緩く伸びていた指達は丸くなる。その手がきゅつと握り込まれると備え付けられたランプが灯ともった。

そうして浮かび上がったのは乱雑な寝室。薄ぼんやりと映し出された室内を眺めてもう一度目を細める彼女だったがこうしたのは彼女自身だ、滅入る事もないまま視点を變えて、今度は左手も握り込み、別の目当てにも力を向けていく。

折りたたまれた手のひらの延長線上、テーブルランプの暖かな明るみには眠る前までかけていた眼鏡や走り書きが目立つノート、小さな青が点灯し続けている携帯電話などがみられ、そのうちの二つが手首を返す少女の動作に吸い寄せられる。

ふわり浮かぶと顔の前で止まる赤い眼鏡<sup>トレードマーク</sup>。空中で覚束ない動きを見せていたソレを掛けてから滞空するもう一つの浮遊物にも手を伸ばすが、目覚めから念じた通りに力を扱えた事で心が凶に乗りかけたのか、宙に留まっていた携帯電話は勢いを得て少女の顔面へ向かっていく。

「ちよっ! 待っ?! ……いたあっ!」

操り手が待てと命じるも止まらず、携帯電話は童子のおでこへ直進し、そこで跳ねた。着弾した物はそのまま跳弾となり、シーツの上を経由してすべり落ちると寝室のドア前まで走っていく。

滲む瞳でその始終を眺めていた少女は吐き慣れた息を一つ吐き捨てながら体と気持ちをもう一度ベッドに沈ませてしまおうが、目覚めた

意識までは沈みきらなかつたようで。やや仰け反りながらも姿勢を戻すと、背面に伸びてしまった華奢な首を揺らしてベッドに座り込み、痛めた額に両手を充てがった。

「うう……いったあい」

潤んだ瞳に新たな赤みをプラスしてぶつけた患部を撫で擦る。彼女からすれば慰めるだけの仕草だったつもりがやはり落ち着いてはいないのだろう、動かしたその手の所作ままに室内で散らかつていた物が動き、浮かび始め、寝室中に散らばっていつてしまった。

どうやら狙った得物以外にもテレキネシスが作用してしまったようだ。半泣きで室内を眺める住人の目に、躍る書物や羽ばたく衣類が写り込む。

「ま、待って！ 勝手に動かないでって！ お、落ち着いて！」

室内で遊び始めた物達へ強い口調で命ずる董子。

しかしその動きは止まるどころか強まるばかり。彼女の声など届いていないと言うように物達は回遊し、次第にその勢いを強めていく。

力を与えた張本人は確かに落ち着けと言いつたがその言葉を見せ、もとい逆転するかのような動きを見せる室内の品々。何故荒れるのか、いうことを聞いてくれないのか。自身の周囲で回る日用品や制服・学生鞆を思わず睨みつけてしまう董子であつたが制御が効かなくとも当然ではある。今落ち着くべきは飛び回るもの達ではなくこれを動かしている董子の方なのだ、自身の心の動揺が目の前で表現されていると認識し、そのブレを修正せねば彼らが止まるはずもない。

「止まってよ！ ねえってば！」

グルグル回る群体は声を荒げる主を囲み、そのまま姿を隠してしまう。取り囲まれて益々焦り、落ち着きがなくなる董子の思考。ついには溢れる物をしまふべき箆笥や本棚までもガタガタといい始め、棚や窓が鳴り出す始末。

こうなってしまうと董子だけではどうしようもないらしい、部屋の主の泣き出しそうな命令が周遊する物の間から聞こえ始める。

すると、聞こえた声に反応して閉めきりのドアが叩かれた。4度叩

かれすぐに開けられたドア、そこから現れたのは現在同居している悪魔。

「主様？…この物音は…なるほど、お目覚めから研鑽されるとは、殊勝な事にございますね」

「うっさいー」

姿の見えない女子高生と漂う浮遊物を交互に眺めるアイギスがこの状況を理解したような口振りで微笑むが、修練を褒める声は一言で散らされる。

悪魔の囁きを素直に捉えれば怒られる事ではないがそれを突き返すよう不機嫌を露わにした董子。それもそうだろう、蠢く壁の合間合間に見えるアイギスの顔には苦難を励ます以外も含まれていて、その笑顔には多分な皮肉が混ざっていると数日間の同居で既に知っていたからだ。

「貴方を構ってる暇なんてないの！」

「そのようで。単身で励まれる御姿に賛辞を送るべきなのでしょうが…僭越ながら芳しくないご様子と見受けます」

「わかっているならほつといてよー」

多少の落ち着きは見せたが未だ飛び交う物、規則的に飛び交う不規則な物体達の其間を縫って董子の叱責が飛ぶが、アイギスの顔は変わらなかった。

対照的な二人。片方は落ち着いて、もう片方は焦りの色がありありとわかる様子。普段の暮らしではもつと穏やか、関心事に当たれば少しばかり賑やかさが目立つ事もあった董子ではあるが常には目立つ事もなく、今のような大慌てな姿を誰かに晒す事もなかった。そうやって暮らしてきたのに今では声を荒げてしまうのだ、腹の一つも立つものだろうし、それを見られて笑われもすれば当たりたくもなるものだろう。

そんな癩癩娘を見守る者だが、こちらは変わらない顔で董子を見つめるだけかと思われたが雰囲気だけは幾分変えたようだ、嫌味の強かった笑顔にほどほどの優しさが含まれた気がする。

「その顔やめてよ、気分悪い」

「それはそれは、配慮が至らず申し訳ございません。ですが、嫌だと仰られるのでしたら笑われないうりになさればよろしいのですよ。私に悪態をぶつけるよりも他に関心を寄せなければならぬ事柄が眼前にあるのでは？」

八つ当たりに近い返事が董子から吐かれるもアイギスは気にしてない、それどころか長々と言い返す始末である。

今は焦りばかりが募ってしまい力が暴走している状態なのだ。董子本人は考えている、この力に流されず平静を取り戻して対処すれば荒ぶる超能力も落ち着いていずれば静まってくれれば、そんな仮説を立てたようだ。

そして、その読みは然程間違っていないが、実際はそこまで難しいものではなく、寧ろもつと単純で明快なものであった。

「そんな事……言われなくてもわかって——」

「然様ですか？ 現状を見る限りは——」

「貴女が横でうるさいから集中出来ないの！」

「騒ぎ立ててはおりませぬよ、私は少しでも主様のお役に立てればと——」

「ほんとにうっさい、もう出てってよ！」

たじろぐ董子の返答に煽り文句を被せるアイギスだったが、全て言い切る前に更に被せられその口は止められてしまう……しかしその煽りは正しく伝わったようだ。

出て行けと命じながらもどうしたらいいのか悩む董子が一睨みすると、彼女の意識が小憎らしい悪魔に向かうと同時に宙を彷徨う物達の角かどが微笑む羊の顔を向き、止まった。その動きは思考に彷徨う董子がアイギスに嫌悪感を向けたのと同じタイミングであり、口うるさい悪魔はこうなってくれるのを見越してわざとらしい嫌味を浴びせていたらしい。

今発現している超能力は元々が董子の内に存在していたものであり、彼女の場合はアイギスと出会う前から好きなように扱っていた力だ。唐突且つ強引にリミッターカットされたせいで見知っていた効果に大小の違いが現れてしまったけれどもその本質は何一つ変わっ

ておらず、本来であれば董子の念おもうままに扱えていいはずの力である。だというのに振り回されるのは単純に慣れないから。少し念じるだけで自身が考える以上に発現してしまう事に慣れず、己が宿す力に怯えている心象がそのまま乱れた力として現われてしまっているからだ。

「この数日間は見守るだけに努めて参りましたが：：八つ当たりなさる余裕は持ち合わせておられますのに、私に意識を向けている暇がありなら振るわれる御力を理解し、御することも容易くなされませんか：：」

少し溜めてから『面目も立ちませぬ』と言い切るアイギス。それは仕える主としてなのか、それとも一端の能力者としてなのか。どちらが真意かはわからないけれど慇懃無礼な態度には違いない。

そうできて当たり前という口振りには董子の怯えなど伝わっていない感覚があるが：：いや、表情に混じる穏やかさは強まっていて多少の伝達はしていそうではあるけれど、微笑む悪魔はそれを無視して、小さな空笑いと共に小言を述べるだけであった。

こうした力を操るに慣れきった立場にしてみれば手足を動かすことと変わりないのだ、身に宿る魔力や超能力などは本人から無意識的に発せられているもので、そう在ることに慣れてしまえば感覚だけで扱えていいものなのだと言いたいようだが、アイギスは理解している。そして董子も本当はそうあるべきなのだとはいいたいようだが、そこまで理解する余裕が今の董子にはなかった。

「そもそも操る事には慣れておられたのです、次はそれを応用するだけで済みますれば、集中などされなくとも扱いは容易かと」

一度慣れてしまったものを忘れるのは難しい、自転車に乗れるようになった人間が立ち漕ぎするなどわけないことで、逆に転倒することのほうが難しい。

それと同様とまでは言わないが、今の董子にとって力を扱えなくなるの方がかえって難しいと、アイギスの言い分はそうだったものようだが：：董子には上手く伝わらない。

それでも、言われっぱなしは気に入らない、何か言い返したくて仕

方がないと、アイギスを睨む形で伝えることからこの言い分自体は理解されているようだが、自転車を漕ぐつもりで大型バイクの速度が出してしまう状態に慣れるにはまだまだ時間が足りないようだ。

「やめて……」

「ですが——」

「もうやめてって！ 小言ばかりうるさいのよ！」

異能の先達に対し一言新米異能者がやめろと漏らすとなにか続きが言われかけたが、それは叫びでかき消された。どうにも、口だけが達者で行動がついてきていない部分を指摘されたのが董子の自尊心に僅かな傷をつけたらしく、アイギスの言い分は穿った見方<sup>煽り</sup>だけとみなされてしまう。

「こんな力！……あんた達みたいにさらつとできないのよ！ 嫌味ったらしく言わないでよ！」

「嫌味とは、誤解されておいでですよ主様。挑発するつもりなどございませぬし、私共としましてもそれぞれで最初から慣れている者達だけでは……しかしそう捉えられるのならばいいでしょう」

授かった瞬間から使い熟せた人外とは違う、肉体的にはただの女子高生なのだから易々とはいかない。そのように含ませて董子は言うがアイギスとて最初から慣れていたわけではない、こうしたことが出来る出来ないと判断する為に色々なモノを穿ち、試してきたからこそ今があるのだ。

「な、なによう？」

「煽りを煽りと捉えられるほどに今の貴方様は冷静なのですよ？ 常日頃と変わらないくらいに落ち着いておられはまずです」

「だからなに？ んもう！ 昨日までは指鳴らしてさっさと出てったのに、なんで今日は絡んでくるのよ!？」

「目の前の出来事についても同様なのだと申し上げているのですよ。今まではどうされていたのか、どうぞ思い返してみてくださいませ」

主命は聞かれるどころか聞き流され、最後に『さすれば自ずと答えが見つかるはず』と、言いたいことを言い切ってアイギスは右手を差し出した。静かに動いた指先は合わされて、その照準は董子の目線に

向けて真っ直ぐに伸びている。

この数日間、こうして荒れてしまった時にはアイギスが董子の意識を穿つことで部屋に静寂を取り戻していた。パチンと弾かれるだけで出来る静かな部屋、静かな少女。そうなって暫くしてから自分だけではどうにも出来なかった董子が目覚め、騒ぎ、凹み、引きこもると、そんな生活が二人の暮らしぶりになっている。

きっと今日もそうなるのだろう、アイギスに小言を言われてむくれる董子の頭にはそういったイメージが浮かんでいたのだが……今まではすぐに離れていったアイギスが指を鳴らさず居座るだけであることに何かを見出したのか、微笑む羊を睨んでいた董子の瞳に別のナカが薄く灯る。

愛用眼鏡の奥、厄介な悪魔を怨めしく睨みつけていた双眼に込めるのは……強い強い負けん気であった。

いけしゃあしゃあと言い切ってくれた黒羊の顔に獣が獲物を定めるような視線をぶつける董子。二人の視線が重なりこのまま睨み合うかと思いきや、董子はそのまま浮かんでいる物達へ視線を運んでいく。

超能力者<sup>テレパス</sup>の険しい瞳が一つ、二つ、物を貫くと舞っていた本や服、諸々の数々がゆっくりと制止、落下していった。

「そうです、そうした扱い方をなされば——」

「いいから黙ってて、口を挟まないで」

「……仰せのままに」

室内を見渡す超能力者に向けて皮肉なしの褒め言葉が聞こえたが、邪魔をするの一括が入り、アイギスの口は止められる。

主の声に合わせて下がる浅黒い右手と頭。

その立ち姿のまま暫しの時が流れると董子の視線より上に残るのは頭を垂れるアイギスのみとなり、賑やぐ部屋が静まり返った。

その空間の中、垂れる髪に隠れた悪魔の顔に向かって強気な視線が刺さる。

フンどうよと、赤みの差す額と頬にそう書いて見つめ返す董子。先程まで浮かべていた苦々しい顔つきは静寂の訪れと共に彼女の顔



から去っていったようだ。

箸が転ぶだけでおかしいお年頃らしく哀樂の差が激しい面持ちだが、今まで出来なかつた事をやりきれた事と口煩い悪魔を見返せた事はやはり嬉しく、思わず綻ぶ董子の顔。

「お見事にございました」

そんな明るい空気に面を上げた羊からの返事は素直さなど見せない、見せなかつた主を自然と讃えるものであった。

それを言えばこの主はまた調子に乗る、乗りやすい性格だということはこの一週間でなんとなく察していたが不意に浮かべて見せた幼氣な笑顔のせいか、アイギスからも不意に褒め言葉が漏れた。

「でしょー。本気出せばこれくらい余裕よ」

「なれど、この程度の事はすんなりこなしていただけませんと」

どうだ、見たか。と、董子が眼鏡を光らせる反応を見せるがそれは一瞬だけ、伸びかけた鼻と乗り上げる為の凶は続く小言に潰されてしまった。嬉々とした顔でいた女子高生の目に最近慣れてきたじつとり感が滲む：けれど、そうした目線高めの物言いは自尊心高めの女の子の反感に追加発注をするだけだったらしい。シンと静まった部屋の中、態度をツンケンさせた董子が口を開く。

「……でさあ、私言つといたよね？ 勝手に入つてこないでつて」

「はい、伺っておりますし、覚えてもおりますよ」

「ならば、それ拾ったら出てつてよ、それ」

「御自分で引き寄せては？ 折角の練習の機会——」

「今日はもう疲れたの、いいから、ん」

真一文字にした口から『ん』を発して黙る董子。

これ以上話すことなんてない、さつさと渡してとにかく出てけ。そんな気持ちの込める『ん』ではあつたが、アイギスはその願いを叶えないようだ。毛布を被り直した主に向かい携帯電話を差し出すと、偉ぶる少女を見つめながらそこに居座つた。

「なに？ まだなんかある？」

「はい。僭越ながら申し上げますが、お目覚めになられたのなら身嗜みを……洗顔か、せめて御髪を纏められるが宜しいと存じます」

佇むアイギスがサイドボードへ手を伸ばす。

灯るランプの側には董子が眠る前まで頭に巻いていたタオルと彼女が好んでいる色なのだろう薄紫色をしたシュシュがあり、それらを摘み、手渡した。

「また余計よ、そういうのは頼んでない」

「しかし——」

「しつこいのー！ 出来る事は自分でやるわよ」

身だしなみを整えよ、そのように差し出されたシュシュはもぎ取るように奪われた。文句を漏らしながら董子は豊かな髪をサイドで束ねる。

そんな姿を見ながら続きかけた悪魔の囁きだったが、こちらはしつこいの一言であっさりとは片付けられてしまう。同居し始めてから今までずっとこんな調子で交流している二人、後はアイギスが退室すればいつもの引き籠もり生活が始まるはず……であった。

だが、今日は最近の一週間とはちがう日になりそうだ。

自分で出来る事は自分ですると口走るも言い噤んだ少女。いつもならばこの後は無言のまま毛布を被り直すか、寝形のついた枕をアイギスにぶつけて再度の退去を命じるかするくらいなのだが、今日アイギスにぶつけられたのは少女の臭いが染み付いた物ではなく本人の言葉であった。

「わかったならさっさと出てい——あ」

退出の命は途中で言い淀まれた。

漏れてしまった『あ』

それを聞いていたのはアイギスと、携帯電話。

アイギスは数度の瞬きで何事があったのか気にする素振りを見せたのだが、もう一つの方は董子の心を揺らす何かを確かに映し出していた。数秒おきに光る携帯電話の点滅が少しだけ寄ってしまった少女の眼鏡に射し込む。

「……来なくていいって言ったのに」

額で携帯電話を受け止めた時よりも重たい吐息を一つ吐き、董子は固まってしまった。液晶には数時間前に送られたらしいメッセージ

が表示されていて、表示された返信時間と今の時間・守矢神社からこの家までの距離を考えれば早苗は今にも到着するようだ。

「何事で？」

「……早苗ちゃんがうちに来るって」

数秒の沈黙の後に漏らした、どうしよ。

そう言ったきり静まる主の声に対しアイギスが動く。

入ってきた扉を一旦締めて、ベッドでぺたんと座ったまま部屋を見回す董子に近寄ると、両目を瞑り軽く頭を振って見せた。けれどこれだけでは仕草の意味が伝わらなかったようで、寝癖娘が眼鏡越しに睨むと、自然な流れで耳元まで寄り、一言呟く。

「ご心配には及びませんよ」

「ん？ どういう意味？ 掃除でもしてくれたって事？ まさかね」

掃除された気配はない、それは荒れたままの室内が物語っている。だのに心配は不要だと言われ小さく考える女子高生。

一緒に暮らし始めてすぐに『余計な事はしないで』と、アイギスはその言い含められている。私の邪魔をしない・荒波を立てないなど他にも色々言われてはいたようだが、一言で表すなら先の命令一つになる。

そうした命令、この場合は提示された条件か、それらを飲むのならば代わりに家にいてもいいし暮らして使う設備も使って構わないと言われているようだ。

端から見れば一方的な約束だが断る理由もなかった為約束は守られている、故に掃除などしていないしそこは董子もわかっている、だからこそその疑問のようだが……

「はい、主様の言いつけ通りに。私は何もしておりませんよ」

「じゃあどうい——」

「言い換えます、心配する必要がなくなったと申し上げます」

「だからそれって」

「ですから既に手遅れだと、そう申し上げております」

白い額と小麦色の額が触れ合うか触れ合わないか、そんな距離で交わされていた内緒話は手遅れという単語を最後に終わった。

伝わりやすいように言い直した悪魔の顔には種族の気配が多分に薫る笑みが浮かんでいたが、部屋の主はその表情も気に食わない。言い切り、少しだけ離れはしたが変わらず手の届く距離にある悪魔の笑みに細めた瞳で睨みつけ、いいから答えを教えろと少女は訪ねる。

だが、胡散臭く微笑んだ悪魔は何も言わず視線を別のところへ向けるだけであった。

仕草に促され董子も視線を動かす。

すると、求めている答えはそちらから現れた。

タイミングよくドアノブが降りると、中を伺うようにゆっくり開くドア。その奥からは両手に荷物を持った誰かの姿。

「董子ちゃん？」

半開きのドア越しに生えたのは見慣れた友達の頭。

董子の懸念虚しく早苗は既に到着していたようだ。

「風邪はどうです？　っていうか、大丈夫？」

膨らんだビニール袋をぶら下げる早苗が荒れた部屋を見回しながら放った問いは体調・この部屋の荒れ具合・同居している人外、その全てに対しての問いかけであった。

数年ぶりに見る友人の住まい。

幼かった頃、董子が一人暮らしを始める前までは何度も上がり込んでいて仲良く遊んだり泊まっていたりもしていた、それこそ住まいの間取りや雰囲気及早苗の記憶の中に残るほどにだ……だからこそ、覚えていた風景よりも随分と荒んだ今の絵面に少し戸惑っているらしい。

ぐるりと室内を見渡し、董子で視線を固める困惑少女。そんな友人と見合った後、アイギスのタイを掴んで引き、小声で問うのは部屋の主。

「……なんで入れたのよ」

「手出しをするなと命ぜられておりましたので」

囁かれた質問に何くわぬ顔を見せるアイギス。

命じた董子からすれば誰かが来ても出るな入れるな、居留守でもつかってくれと含ませたつもりでいたがそう伝わりはしなかったら

しい……言われたアイギスも長く商売してきた身だ、本当ならそのくらしいの気配りは出来て当たり前だが今回は敢えて気を回さなかったようだ。何故かと問われてもアイギス本人にしか真意はわからない。が、先日には八雲、今日は他の誰かと、懇意にしている相手の面影を見てしまう主人に対して表した、小さなお節介焼きのつもりなのかもしれない。

「あの、お二人で何の話です?」

「いいの、なんでもないよ、早苗ちゃん」

イマイチ状況の掴めない早苗に気にするなど、深々とした溜め息と共に董子が返す。早苗は当然掴みようもない話でわからない顔を浮かべているが、董子も悪びれもしない言いつぶりに嫌な顔をして見せている。

そんな中で一人だけ微笑んでいたアイギスだったが流石に空気を読んだのか、ベッドに着いていた片膝と両手を離し、未だ覗き込む形でいる早苗と向かい合うようにドアノブへ手をかけた。

「? どこか行くんですか?」

「先程より再三出ていけと命じられておりますれば、その命に応えようかと。仲良しのご友人もいらつしやいましたし、このままお邪魔して水を差すのは気が引けますから」

「仲良し? あ、私のことですね! そういえばすっかり忘れてました、私、東風谷早苗っていいいます」

「これは、私としたことが気が付いておりませんで。私めのことは羊でも悪魔でも、なんなりとお呼びくださいまし」

不意に始まるご挨拶、ドアを挟んだままの自己紹介にアイギスの足が止まる。学校で顔を合わせ、会話も既に行っているけれど挨拶はまだだったことを思い出したらしい早苗が今更感を吹き飛ばす勢いで話し、微笑んだ。

さすがに今のタイミングはどうなのか、と思えなくもない。そして、その感覚はアイギスも感じているようだがその辺りは商売人だ、おかしな部分が多少あろうとも落ち着いて返答を述べていく。

挨拶と共に深く下がった羊の頭に習いを早苗もペコリ、同じく下が

るとフワリ、早苗の長く綺麗な髪が揺れた。爽やかな香りが湿気た室内を漂い、犯し、緩い空気を作っていく。

そうして出来上がった柔な空気感に耐えかねた一人が軽く笑って、喋り出す。

「二人して今更なにやってんの？」

「だって、学校で会った時は突然だったから忘れてたんですよ」

「でもさあ、今のタイミングっておかしくない？」

「いいんです！　ちよつとくらい変でも礼儀作法は大事なんです！

八坂様も常々そう言われてます！」

鼻で笑う女子高生と、鼻で息巻く女子高生。

幼少中高と付き合いの長い二人、幼い頃から早苗を見ている董子は早苗が時々抜けた事を言うのは知っている。けれど、常識に囚われないタイミングはさすがに笑えてしまったようだ。

さも当然と語る早苗を自然と笑ってしまった董子、つい先程まで焦りや憤りに忙しかったはずだが、顔を合わせるだけで途端に姦しくなるのはその年代のせいなのか、それとも気の許せる友人の顔をしばらくくぶりに見たからなのか、どちらにせよ董子が開き直るには早苗の到来がよい機会になったようだ。

「常々って、最近は出てこなくなっちゃったって」

「八坂様とは毎日お会いしてご飯も一緒に食べてますし、諏訪子様ともちよつと前にお会いしましたよ！」

「あ、そうなんだ。だってほら、ちよつと前に会えなくなっただって泣きそうな顔してたからさ」

「いなくなっちゃったみたいに言うのはやめてください！　まだまだご健在ですし、これからは私も頑張れるから大丈夫なんです！　まったく、そんな事ばかり言っているとまた叱られますよ」

緩んだ空気のまま続いていくガールズトーク。

自ら望んで友人を作ってこなかった董子や付き合う相手を選び好みされていた早苗にとって過去の情景は根強く染み付いているようで『また』と言うだけでどうなるのか伝わったようだ。

「ヤサカサマにスワコサマ……はて、聞き覚えのある御名前にござい

ますね」

語り合う少女達を余所に一人呟くのは年寄り。

話題に出たその名は何処か、いつか聞いた名前前で、記憶の断片ほどではあるが確かに覚えのあるものであった。

そんな呟き、声量は独り言程度のものであったが耳敏い少女達は聞き逃さず流さず、揃って本当なのかと質問をぶつけていく。

「渡来した頃に噂で耳にした程度ですが、鳥居と注連縄は大層ご立派で、御神体である御柱も神々しく聳えるものなのだと評判でした……話に聞いたあの神社はこの近くにありましたか」

江戸が隆盛を極めた時代に現れた西洋の悪魔、彼女が語るにその頃の守矢神社は既に日の本で名を馳せており、神社の膝元であるこの一帯だけではなくアイギスが訪れた出島の辺りにまで信仰は広まっていたようだ。噂を流した者達の中には神への信心よりも神の教えを体で説いて歩く巫女目当ての罰当たりな者達もいたようだが、善し悪しに関わらず八坂の祭神の名前自体は広く知られていたのだからそこは論じるべくもないだろう。

「そうそう、あの神社の神様って昔は有名だったんだよね」

「はい、大陸にもよく似た名前の神がおりまして。どの国でも似た名はあるのだなと強く印象付いている次第にございます」

「貴方の覚えてそうなのって他国の神様だよね、だったら……ああ、古代イスラエルのモレヤの神様かな？」

「そのような名前だったかと。少しのヒントでするりと出てくる辺り、博学にございますね」

「ちよつとは見直した？ でも煽てはいらないわ……こっちの神様は洩矢神で確かに名前も似てるけど、それだけじゃなくってさ、残ってる記録にも色々な共通点があるんだよね」

「ほう、それはどのような？ よろしければ御教示頂けると——」

「あ、あの、うちの神様で盛り上がってくれるのはすっごいありがたいんですけど……」

忽然と話された話題は気をよくし始めた董子の琴線に僅かながらも触れていたらしい。関心事には多弁な好事家らしく雄弁と語らい

始め、アイギスも一度は興味を惹いてくれた対象に対し再度の興味が沸いているようで深く聞く素振りを見せた……けれどその話題は残る一人、盛り上がりに乗れなかった神社の娘に断たれてしまう。「うちとは、もしや東風谷様は」

「そうよ、かの有名な守矢神社こそが早苗ちゃんちで、

話題の神様も早苗ちゃんのお母さん達に当たるのよ」

「それはそれは。しかし合点がいききました、東風谷様から感じられる御力の源は偉大な神であらせられましたか」

「そ、そんなに誉められても……今は人の出入りもなくなっちゃった神社ですし……」

実家の話題に幾分静まる早苗。流れからすれば胸を張りその名を知らしめてもいい雰囲気だったはずだが……言われ慣れていない実家の褒め言葉を聞いて体裁が整わないのか、しどろもどろな様を見せると、やきもきする気持ちを落ち着かせるように垂れ下げた左のおさげに手を添えた。

「私達が小さかった頃は縁日があつたりしてさ、お客さんも今よりもっと多くて、参拝するのに並んだりしたのよ。お母さん達も挨拶に来た行列眺めて嬉しそうに……って、あ、そだ、忘れてた。貴方も挨拶済んだみたいだしもう用事もないでしょ？ それならもう出てつてよ」

「もう……だからお母さんじゃないって何度も言ってるじゃないですか、八坂様も諏訪子様もうちに祀られる立派な神様なんです、冗談ばかり言つてると本当に叱ってもらいますからね！」

そんな早苗に董子からのフォローが入る。

実家から神社へ、スルリと話題の筋をずらすと早苗もそれに合わせて言い返した。暗い顔は似合わないからと意識して言ったのか、それとも流れで思い出したから口にしたのか、そこは長い付き合いの二人だ、言わずに伝わり目と目を合わせて笑い合うのみ。

明るい笑い声に乗るのは幼少の頃の記憶だろうか。

思い出の中にある神の顔は間違いない保護者面をしており、早苗のほうも天罰が下されるとは言わず叱ると今も言ってしまうくらい



だ、体面上否定したが祀り奉る神とその巫女という関係ではなく、己を愛してくれる家族と見ているのだろう。

「はいはい、ごめんなさ〜い。両方とも口煩いんだから内緒にしといて」

「謝るなら私じゃなくて二柱に謝って下さいね」

「でも早苗ちゃんだつて神様みたいなもんでしょ、神様の娘なんだし、それっぽい力を感じるつてそっちの悪魔も言ってるし。だから神様に謝ったつてことにして、ね？」

誰かが話せば被せられた姦しいトークは董子の冗談めいた謝罪を境に静まっていく。そうして落ち着いた室内に『んもう』と、早苗の呆れが満ちていくと共に無音が戻ってきた。

数分、いや数十秒だったかもしれないその静寂は各々の頭を整理させる時間として十分だったらしく、早苗は持ち込みそのままにある両手の荷物を預けにリビングへ向かい、董子は自室で髪を整え始め、アイギスは命じられた通り早苗の後に続いて部屋を出ていく。

「うわ、やつぱりなんにもない：：冷凍庫まで空っぽだ。私が来なかつたらどうするつもりだったんだろう」

先に部屋を出た早苗の声はキッチンから。買い込んできた食材をしまいながら冷気だけが詰まる棚を見つめてぼやいている。

「今はネットという大店があるようでそちらで購入すると話されておられました、なにやら上手くいかなかったようですよ」

頭を冷蔵庫に隠す少女に向けて黒髪の女が述べる。一人部屋から出てこなかった話題の人物は買い物くらい出かけなくとも余裕なのだとのたまってはいたが、少し体を動かすだけでふわりと浮いてしまつては荷物の受け取りどころではなく、僅かに備蓄され ていたレトルト食品やインスタント食品ですらなくなる状態となつていたようだ。

「なるほど、それで空っぽ：：あれ、それじゃ羊さんも何も食べてないんです？」

「いえ、私は外で済ませておりますので、主様ほど飢えた思いをしておりませぬ」

「ならよかったです！ あ、それですすね、一応羊さんのも……ああ！  
そういえばまだお名前教えてもらってないです！」

話ながら一度は閉じた冷蔵庫、その二段目を開けて手をつ突っ込む早苗から問いかけが始まる。いつまでも羊や悪魔じゃ失礼、いや早苗自身が呼びにくいとでも感じたのだろうか、名を教えたと語りかけられる。が、アイギスは何も答えず早苗の手元、正確には野菜室の陰や隙間といった辺りに視線を向けながら黙り、笑みを浮かべるのみであった。

「またも感じる微妙な気配。イエスにしろノーにしろ欲しかった答えは返って来ない。整った眉をいくらか困らせる早苗。」

何か変な事を聞いちゃったのかな？

もしかして名前がなかったり、変な名前だったりするのかな、人は感性が違ったりするのかもしれないし。

そんな懸念と気まずさを苦い笑顔に混ぜて髪を撫ぜると、それに合わせて聞こえてくるもう一人の少女の声。

「気にしないでいいよ、早苗ちゃん」

アイギスからの返事を待っていた早苗に違う相手から代わりが届く。

少しだけ整えた頭に携帯電話片手の姿で出てきた董子があいつは構わなくていいと、そんなことを言い始めたのだ。何気ない表情で色々と解った素振りな返答をする董子、まだまだ振り回されてはいるが人外の力に目覚めたこと自体は伊達ではないらしく、夜更けにアイギスの魔力が離れたり消えたりしている事には気が付いていて、どうせ今日も出掛けるんだろう、どこかでなにかをしてくるんだろうと、そういった読みで言い放つ。

「でも」

「いいから、それよりなに作ってくれるの？」

「卵とかは買ってきたんですけど」

「なら卵焼きね、早苗ちゃんちの味付け私好きなのよ」

口に残って董子が体も挟んでアイギスと早苗の間に割り込んでくると、この部屋には二人しかいないと言わんばかりに早苗だけと会話

し始めた。

そして、やや困り顔のシェフに通されたリクエストは卵焼き、二人が幼かった頃は神社の神がほぼ毎日焼いていたソレは今はその娘が自ら弁当に詰めていて、ランチを一緒にした際には度々董子に奪われている。

「あの、羊さんは」

「主様の仰られる通りに、そのお気持ちだけで恐悦に存じますれば、どうぞ御二人で。私などに気兼ねなさることなく」

董子の関心はなくなつたがもう一人は未だ気になっているようで、絡んでくる先輩女子の横から半分だけ顔を出した早苗がアイギスに問いかけた……けれど、アイギスは貼り付けた営業スマイルで淡々と言い切り、その流れのままにアイギスは出ていく。足早にリビング、廊下と抜けていき、住まいの外廊下で響いたハイヒールの反響音もすぐに聞こえなくなった。

「行っちゃいましたね」

「ね。ま、いいんじゃない」

「いいんですか?」

「いいのいいの、それよりお腹減つただけ。だから早く早く」

「ちよつ、ちよつと待って下さいよ!……ふふ」

「あ、なんで笑つた!」

「だって」

やり取りに思わず笑ってしまった早苗。どこを見て笑われたのかわからない董子が賑やかさを増して追求すると、今度は真っ直ぐな笑顔を見せて笑い始める。

部屋に通された瞬間はその荒れようから訝しんでいた早苗だったが、アイギス相手に気安く話しかける董子とそれを誂う会話を聞いて、態度を見て、なぜだか安心したようだ。

二人で上手くやれているのか、体調はどうか?

そもそも無事なのか?

訪れる途中にも若干の不安を覚えていた早苗だったけれど、考えていたよりも親しく見えた二人のやり取りや自分に対しても何も変わ

らない董子の様子を知り、この空気は私が実家で過ごしている時と変わらないものだと感じ取ったのだろう。相手こそ神と悪魔で別物だが、先の緩んだ雰囲気からは種族の壁などないように見えてしまい、安堵を得るに十分であった。

「あ、そうだ、折角だし夜食とかも作っちゃいますか」

「しつこいけど、誰の？」

「羊さんですよ」

「ほっときなつて、朝には帰ってきてるみたいだし」

「で、でも」

「さつきから『でも』が多いね。聞き分けの悪い子は私好きじゃないなあ」

「だって董子ちゃんが」

「だからつて『だって』でも駄目だよ……だったらそうね『どうせ』にしよう！ どうせ作るならお泊まり用のなにかにしよう！ ね、そうしよう！」

すっかりずれた董子の生活時間、朝に目覚める事もあれば深夜に起きる事もある。その逆転した生活時間の中で数度風呂上がりや帰宅したてのアイギスを見かけてはいて、その度に何をしてきたのか気にしてはいるようだが……

この界限で起きている事件、黒羊が現れたタイミングと同じくして流れ始めたニュースと、引きこもつてから覗く事が多くなった趣味関連の掲示板に立つ『増える行方不明者』というスレッドや『日本にもスレンダーマンがいた』なんてトピックを基に多少は怪しんでいるようだったが、真実を知れば後悔するかもしれないと考え、アイギスへの言及は未だ出来ていないらしい。

「でも……」

「ハア、また出た……だからあ、いいのよ。それよりさ、来なくていいって私言つたじゃん」

「だって、風邪にしては長引いてるみたいだったし、心配だったから……でも風邪じゃなかったんですね」

董子にじゃれつかれながら持ち込みのエプロンをかけた早苗が問

いかけるが、董子は苦笑いを浮かべるだけ。

あからさまに答えにくい、董子の顔にはそう書いてあるが早苗はそこはどうでも良かった。何故嘘をついたのか、それは部屋の惨状を見てある程度把握出来たし、それ以上に董子の無事を知れたことのほうが早苗は嬉しかった……

逆に、この場において複雑な心情にあるのは寧ろ董子のほうか。出来れば今は会いたくなかった、いや、もう少し力に慣れてから、せめて平静を装う事ができるようになるまでは顔を合わせるつもりがなかったというのが正しい表現か。

目覚めてしまった超能力を恐れられるのが怖い、得てしまった力で早苗や他の誰かに何かしてしまうかもしれないのが怖い。そういった心もあるにはあるが一番の恐れは誰かに知られれば周囲にバレる可能性が高まる、そうなれば過去の超能力者が辿った道と同じ道を私も辿る事になるかもしれないと、自分に対しての恐怖が強まるのが嫌だったようだ。

これだけでは早苗に対し打算的な思いを向ける董子と、そう捉えられてしまうかもしれないが、董子の名誉の為にそんな考えだけではないと伝えておこう。

昔から付き合いのある早苗は董子の異能を知っている、けれど知っているだけだ、事が起きてしまった場合の対応や解決策などは知り得ない。だからこそ、いざ何事かと成ってしまった場合に頼れるのは己のみだと董子は結論づけ、それ故に伝えず秘匿した、秘密を秘密としたままでいられるようになるまでは触れずにいるつもりだったのだと述べておく。

実態は目覚めを告げた悪魔の世話になりっぱなしではあったがこれ以上は話が逸れるので戻そう、隣んでいた少女の口が開くようだ。

「あゝ……うん、ちよつと色々あって、こんな状態なのよね」

こんな状態だと、董子が荒れたりリビングへ目配せしていく。

すると早苗も無言のままに室内を見回すけれど、早苗に驚きはなく普段見せる表情と変わらぬまま董子へ視線を戻した、その目には危惧していた悪感情もないようだ。早苗自身も両神の親心からその力は

封じられているが神秘なる力は確かに宿しているのだ、同じ時を過ごしてきた二人の間に悪意が目覚めるなど今更に過ぎることだろう。

そうして今の状況もドア越しに聞いた董子とアイギスの会話からある程度察しているようではあったが、本人から話されたのがいいきつかけとするようで、改めて確認するように早苗が問う。

「……これって羊さんじゃなくて董子ちゃんがやったんですね、幼稚園のお芋掘りの時みたいに」

「おお、覚えてたんだ……そうみたい、アイツが言うには私の中にあつたファンタジーな力を引つ張り出したからこうなつたんだつて。おかげで怪我はするし部屋は散らかるし外にも出られないし、もう散々なよ」

「なんか、大変そう」

「大変よ！ ぼんやりしていると身体まで浮いちゃうし。アイツは簡単だつて他人事みたいに言うけどさあ……早苗ちゃんだつて大変だつたりするでしょ？ そだ、こういうのつてコツとかないの？」

「今は八坂様や諏訪子様とお話できるだけだからそういうのは……わかんないなあ。でもいいの？ さつきからアイツつて、そんな言い方して」

「いいの、そもそも名前と呼んだ事なんてないし、アイツも気にしてないし、なんかあつてもなんとかなるよきつと。それよりさ、敬語なくなつたね」

「あ、そうでした」

「その抜けた感じも懐かしいなあ。ちっちゃな頃の早苗ちゃんを思い出しちゃうね。髪染めるのもやめたみたいだし、やっぱりそつちのほうが似合うと思うよ」

「え？」

「ん？」

言われて傾ぐ早苗の頭。

揺れる髪は過ぎた季節の色合いを強く匂わせる。

それは生まれたままの色合いであり、現代で暮らすには目立ち過ぎるからと早苗が知らぬうちに両神が秘匿した色。

董子は小さかった頃の早苗を知っているから気にならない、寧ろ似合うと話しているが、物心がつく頃には自身の髪が自然な黒髪に見える。早苗には、少しだけ不思議な感覚となってしまう。

## 第七十三話 妖羊跋扈

乾き始めた空気と重く沈んだ気配が深くに満ちる夜。

遠くを見れば明るく灯る電灯も、日々を暮らす人間達が奏でる喧騒もある。

だというのに、今夜は特に暗暗くらくらしい。もう直に満ちる月も高々浮かび、弱々しいが星々の煌めきすらも見え、季語に照らし合わせるなら良夜と言っても間違いいではない今宵。変哲のない夜にそう感じてしまうのは、月下を行く者達の中に一際暗い力を湛えた女が混ざり込んでいるからだ。

月の明かりに彩られ、赤みを増した紅葉樹の合間を抜けていく彼女。

未だ彷徨い慣れない現代で足早に向かうのは眼下にきらめく町の灯り。

あの後、若い二人の活気賑わう部屋を出て一人でどちらに向かったかといえればそれは山。つい今しがたまでは茂みを分け入ったすぐ辺りで赤銅色した木々と青さ弱まる雑草達をベッドに体を揺らしていたが、幾何かの時間が過ぎた今は過ごしていた山裾を離れたようだ。

「今頃は眠られたか、それとも語らい続けているのか」

目的地などないはずなのに真つ直ぐ下山していく彼女、踏み締める足元も次第に柔らかな山土から敷き詰められた砂利、ひび割れたアスファルトに切り替わる。そうして山と町の境界線上を越えて間もない辺りに姿を見せると、ヒールに刺さった枯れ葉を払いサクリからカツンに足音が変わる。それを皮切りに彼女は立ち止まり、無表情なままに月を見上げて呟いた。

それから一息、吐き慣れない落胆の息を吐き出すと、僅かに開いた口からは鮮度の良い血の香りとそれを運ぶ白んだモヤが見えたが、すぐに掻き消えていった。未だ凍えるほどの季節には至っておらず陽の光が降りる時間帯は薄着一枚でも過ごせる気候だが、日中に晴れ渡れば渡るほどその陽が陰ればよく冷える。今日のような空が高く澄んだ夜はよくよくに冷えて、おかげで一方的な話相手も夜に映える様



子だ。

「どちらにせよ戻るには早いか」

起伏のない声を夜風にのせて、時折腹部を擦りながらアイギスが町中を歩いていく。その眩きは出てきた部屋で過ごす二人、昔話に花が咲き、幼き頃を思い出すように同じベッドで寝たはずの女子高生達に向けてだろう。

「であればもう少し散策してもよろしいでしょうか、ついでにおかわりにありつければ上々……と考えますが、ね」

ほのかに顰む顔付から機嫌の悪さを振り払うように頭を軽く振り、そのまま首だけで振り返ると、来た道を眺む。案じる思いも視線と共に変わるが見返したところでもない、あるのは宵闇に染まった山肌とランダムに飛ぶ羽虫の飾りが目立つ街灯に閑静な通り。

それと、起きてしまった事件の現場に向かっていく赤々しいサイレンの波ぐらい。

「……今晚はこれまでと致しましょう、これ以上はどうにも——」

目立ってしまいますね、そう言い残して再度歩み始める。

山に向かって鳴り響くサイレンから遠ざかるように街灯並ぶ方面へと足を運び始めるが、なんでもない曲がり角にぶつかるとその足はまた止まった。意識する物などなかった交差点にひとつ、気になるものが出来たからだ。

「間食にもなりませんでしたね、困ったものです」

アイギスの足を止めたのはカーブミラー。

当然映っているのは見慣れた彼女自信だが、思わず見つめ直してしまいうくらいに今の姿が気になってしまった。

湾曲した鏡に映るその姿、それは随分と荒れている。昔から変わらない三つ揃いは無理矢理に剥がされたような跡が見え、頬や唇の端は赤く汚れている。長く続ける客商売の流れからこうした姿を見せることなど殆どない彼女なのだが、今のアイギスはらしくないくらいに乱れていた。

「失敗しましたね、私とすることが浅はかでした……」

鏡を眺めながらやれやれと手を伸ばし、顔に添える。

そのまますつと横に流すと頬や口端に残っていた鮮明な赤色は綺麗にするりと指先に移った。

「そもそもあの者を見習う事自体が間違いでしたか」

指に乗る誰かの血液を舐めて、己の唾液で光る指に語りかけながら無理矢理に緩められた跡が見られるタイを直すと、そのままシャツのボタンにも手を伸ばした。けれどその手は動かず。見れば、きつちりと留められるはずのボタンは台衿から前立てまで千切れた跡だけを残して失われてており、開かれたシャツから覗く赤々しい手形の残るブラジャーや胸を隠すものはないようだ。

「衣服だけ乱され、満腹感も心地良きすらも味わえないとは」

二度目の深い溜息を吐き出して破られたシャツや上着に自身の魔力を流し込む。出し惜しむようにゆつくりと身嗜みを整えると、彼女は最後のメにタイを締め直す。

さきほどまでの姿と今の物言いから鑑みれば『あの』とは紅い屋敷に住まう同族のことで、己が欲望に忠実な性悪小悪魔を習って墮とした人間獲物を今晚のディナーとしたらしい。淫魔に近い小悪魔と比べれば誘い下手なアイギスだが彼女も悪魔、人を墮とし喰らう者。食事と称して及んだ行為は過去にも経験しているし自分では得手の内としていたが：：久方ぶりに人を誘惑したせいか加減を間違えたらしく、惑わされた人間は己が発した色良い欲に振り立ったまま事切れてしまい、悪魔の腹を満たせるほど長持ちしなかったようだ。

「どうしたものでしょうね」

添えている手に隠された唇から思わず出た愚痴は、どうしたものか。

眩やかれたそれは今後の食事に対する懸念。

彼女が好み、欲するものといえは人の発する恐怖心だが、こちらの世界で食した人間からそういったものは得られておらず、饑さに悩む日々が続いているようだ。生まれた地や紅魔館で過ごしていた昔には、あの悪魔がまた暴れている、迂闊に関われば自分達も餌食にされると、そう考えて怯えた人間達が大勢いて、その連中から溢れる恐怖や畏怖を堪能出来ていた。そして、そんな食事法は幻想郷に移り住ん

でからも大して変わっておらず、現住する地底でも鬼や土蜘蛛相手に派手な喧嘩をしては、またあいつらが始めやがった・触らぬ悪魔になんとやらだ・クワバラクワバラだと、形こそ変わってもものの地底の住人から溢れてくるご馳走を味わえてもいた。そういつた経験からこちらの世界でもそのままのスタイルで食事でありつこうとしていたのだが、アイギスが襲ったところで化け物の存在を忘れて久しい人間達から化物に対する感情などは生まれず、散り際に光る恐怖の最中でさえも誰か他の人間に襲われたとしか思わない、思われなくなってしまう。

故に得難く、彼女の計画とは裏腹にその腹が満ちることはない。

その代案としての代用食、現代に生きる人間が昔と変わらずに持っている性欲を高ぶらせ、放たれる精を奪うことで日々を凌ごうと考えたらしいが、先のぼやきから鑑みればこちらの結果も同様なのだろう。仮にアイギスが好む他の楽しみ、血で血を洗えるお戯れでもあれば少なからず満足出来るところなのだろうが、生憎こちらの世界ではそれを味わうのは難しい。時間を忘れて立ち会える花の大妖怪や鬼、土蜘蛛といった喧嘩友達と並べる物がこの現世にいとすればまた話は変わるのだろうか。

そんな都合があったからこそアイギスの行動が大胆に、昨今のニュースで賑わうくらいになってしまったのだが、TV画面を賑やかにしている要因はアイギスだけではなく、別の誰かが関わっている形跡も僅かだが見られる。地元ニュースでは一様に被害者と流していたがそれはニュースらしい誇張が強い、彼らを正しく報道するのであれば行方不明者と伝えるのが正解となる。忽然と消えてしまった彼らの数はアイギスが手を付けた以上に増えている、この地の神はそれら全てを羊の仕業と考えていたようだが……この続きは後ほどしよう、暫し足を止め考えていたアイギスがまた歩みを戻し始めた、どうせ頭を回すなら別の方向にと、諦めと共に思い出した別件へと動くようだ。

ミラーに写った悪魔の背中が明るい輝きへと向かっていく。

満たされない彼女が腹を撫で擦りながら通りを巡り、角を曲がると

少しずつ変わっていく景色。舗装された山路からそこへと続く路地、路地より伸びる人の営みへと街並みが変わっていく……が、その途中、繁華街へと通じる道端に出ると彼女は足を止めてしまう。見つめている方面、歩む先から伸びてくる何者かの影に懐かしい匂いを感じたからだ。

「気ままにお出かけとは、私達が考えていたよりも満喫されているようですね」

立ち止まったアイギスに届く声、それは聞き慣れたものであった。落ち着きと色気の両方が同居する、例えるならばそんな声色の誰かが恐れもなく声をかける。

「……おや、何方に声をかけられたのかと思えば。普段着に感じられる冴えもよいですがそのような柔らかな洋装もとてもお似合いで、美しさに磨きがかかって見えますね」

声の主を懐かしみ、その姿をも懐かしむようにアイギスは語り、歩み寄る。

二人が並ぶと際立つ違い。細身のパンツスーツを着込むアイギスと比べれば華奢で柔らかなイメージが見受けられるもう一人。彼女が着ているのは季節の感じられるニット素材のワンピース、魅惑的な足をさらけ出す丈の短さや腰に回した太いレザーベルト、肩から斜めにかけて小さなショルダーバッグがその体の凹凸をより強調して見せている。

「お褒めに預かり光栄ですがこの姿に大した意味はありませんよ、こちらの普段着では目立ちますので少々化けているだけです」

本人はあまり気に入っていないのか、谷間を通り鞆に繋がる細い紐やベルトのバックルを指でなぞり、褒め称えたアイギスの視線を遮りながら片腕の肘にそつと手を添える話し相手。

目を引く体を隠すような楚々たる立ち姿で言い返したのは、あるはずの耳を隠し、本体よりも目立つ九つの尾までも隠した幻想の郷の民、九尾の狐、八雲藍であった。

「謙遜を、よい着こなしかと存じます」

「それは紫様の見立てが良かったからで……」

「その物言い。お姿に変化はございませんが藍様もお変わりないよう  
で」

「アイギス殿も変わりませんね」

一時は同じ主に仕えた二人が軽口混じりに久しぶりの再開を交わ  
す。

深々と下がる羊の頭を眺めほんの少しだけ目を細める藍。そこに  
あるはずの大きな角がないことに一瞬訝しんだようだが自身も目立  
たぬように見た目に細工をしていることからアイギスも同じと考え  
たのだろう、納得したような声で言い返す式。

これは余談になるが、先には狐として化かしているのだと藍は主張  
したがそれは嘘だ。使いを命じた主が『あちらに出るなら時代に即し  
た格好をすべきね、少しは御粧しをしましょう』と、予め用意してい  
た着替えを強引に押しつけて、困り顔の藍を愛でながら自ら着せ替え  
人形のように遊んで送り出したというのが真実である。

拒否する姿勢を見せるも脱がされ、着替えさせられた藍が苦笑いし  
ている間もずっと式の式を抱っこしつつ笑っていたスキマ妖怪。片  
腕は橙の腹を撫でつつスキマから洋服や小物のあれこれを取り出し  
て、可愛い手駒の唇に紅を引いたり目元に色を注してみたりと、結構  
楽しんでいたらしい。異変では真剣な姿を見せたあの妖怪の賢者も  
何事もなければ案外暇な生活、もとい時間に余裕のある暮らしをして  
いる。

話を戻す。

そうして返事が返ってくるとアイギスも頭を上げた。

気恥ずかしさが伺える狐と視線が合うとニコリ、日々の商売で培つ  
た営業スマイルよりも柔らかな顔を浮かべる羊。幻想郷の竹林で別  
れ別の世界で顔を合わせた彼女達、最後の会話は互いに愛する者達を  
賭けた交渉に近い脅迫だったはずだが顔を見合わす両者ともにわだ  
かまる素振りは見られない、それどころかアイギスも藍も柔らかな表  
情のままに会話を続ける。

「こちらの世界でお見かけするとは思っておりませんでしたね。し  
て、何用で？」

「使いを二三仰せつかつておりまして、買い物と各地を周りながら勧誘を少々」

親しげな顔で語らう二人だったが内容は少々、いや随分と黒い。

藍からの『使い』に浅い頷きで答えるアイギス、こちらで見かけることなど考えていなかったと何食わぬ顔で述べたがそこが黒い部分、日々の食事に困りながらも焦りを見せない理由がこの出会いであった。正確な時期までは考えあぐねていたがそのうちに八雲の誰かとは出会えるだろう、アイギスはそう踏んでいた。過去の付き合いから現世に赴き神隠しの名を借りて食料調達をしていると知っていた、ならばソレに似た行為を真似ていれば補充のついでに様子見しようはこちらにも来るのだろうと、その時に遭遇すればよいと読んでいた。そうした考えの元で過ごす中に見かけた隙間、早苗が開いた冷蔵庫の隙間に見慣れたスキマを見かけ、出張ったのが今宵のアイギスの動きである。

ここに付け加えるならば、幽々子の起こした異変や月の異変でアイギスに売掛ばかりを重ねている紫だ、借り受けているものを何かしらの形で支払わなければ今後アイギスを使いにくいと理解しているはずで、いつまでもそのまましておくつもりはないはずだ。そこで今の状況、アイギスにしてみればアクシデントに近い状態の今に恩を売れば積み上がる借金も楽に返上できる。その上そうした支払い方をすれば後腐れもないし断られることもないはずと紫ならすぐに思いつく。友人と呼びあう仲だからこそ考えつく互いの動き、どちらも打算的な面が強く感じられる気もするが方や商人でもう一方は買った側だ、こうした動きも勘定のうちにあつて然るべきであろう。

対して藍のほうだが、彼女も彼女でやはり黒だ。

勧誘と耳聞こえの良い物言いをしたが彼女に下されている命は人攫いのそれである。間近に起きた月の異変。幻想の結界を守護するコンピを筆頭に禁呪の魔法に長けた者達や幽冥の地より現れた者らの活躍により解決された永夜の異変だったが、あれは一夜の出来事で済んだとはいえ解決までそれなりに時間もかかっており、その間に人も妖怪も月の灯りを浴びる事になった。

見上げるに美しい大きなお月様、人からすればその程度であったが、夜に生きる者達の、特に弱々しい連中にとつては浸るに甘い月の魔力が心を躍らせるのに十分な毒となつたらしく、衝動に耐え兼ねた者は人も妖怪も無関係に襲つてしまい人間側にとつてはそれなりの被害となつてしまった。幸いな事に影響があつたのは小者ばかりで幻想郷の人間達が滅するような騒動とまではならなかつたようだが、中には腹が満たされようと襲う事をやめなかつた者もいて、そういった月に酔わされた者達のせいで幻想郷に生きる人の数もそれなりに減つてしまつていたのだ。

鼠や兎ほど旺盛ではないが放っておけば伴侶を見つけて勝手に増える人間達、暫く待てばまた元の数くらいまで戻るのだが今回は妖怪側にも人側にも傷ついた者が多く、人が産めよ増やせよと過ごしても元通りになるまでに結構な時間を必要とする。管理側としてはそれなりの早さでそれなりに増えてくれないと傷ついた妖怪の癒やしにもならないが時間がそうと許さない為に、色々と懸念した管理人がテコ入れ策として弄したのが藍の動き、外の世界での人攫いになる。

山深い自殺の名所や人の臭いのしない自然の奥底・最近では大都会の片隅や小さな駅のホームなど、こちらの世界で生きる事に疲れた者や誰かと関わる事に疲れ果ててしまった者達が身を投げ込みやすい場所に開かれたスキマ、紫が張り巡らせた罫と言うべきか、それに掛かった者の回収や場合によっては藍自らを餌にして得物を漁す（ぎよ）などをして、急ごしらえだが人妖のバランスを取ろうと試みていたのがこちらの世界の行方不明騒ぎの一つでもある。やり過ぎれば不審が募るが今は紫に変わつて犯人になつてくれている誰かがいるため、然程気にせず攫うことができているようだ。

「お一人で……藍様がこちらにいらつしやるのなら紫様もご一緒するものと考えていました」

「平時であればそうですね、私が毎回のウインドウショッピングに慣れるくらいには紫様もお見えになります……ですが今は手が離せず、代わりに私だけが出て参りました」

平静な往来で語らう妖かし達、片方は一瞬だけ呆れも見せたが平然

さは変わらない。

呼び出された悪魔ならともかく、今や存在を否定された妖怪が現世に現れて問題ないのか？

アイギスからの問いにはこうした部分も含まれていて幻想郷を知る者ならば当然に浮かぶ問題だが、この九尾、八雲藍ならば問題ないと言えよう。彼女は高名な大妖、暗躍するスキマの式であると同時に藍自身が大国を傾け封じられた文献が残るような金毛九尾の妖狐だ。そうした逸話も封じられたという現物も未だこの世で語り継がれており、本人が姿を消していたとしても簡単に忘れられるはずがない。

仮定の話になるが現れたのが藍ではなくとも、ある程度の自力を持った妖怪であれば問題には成り得ないだろう。化物を忘れた概念に満ちる現世に否定されようと真つ向から抗える者、己を個としていられるだけの力がある者、存在の否定を否定出来るだけの力を宿した者達であれば幻想郷の外でも妖かしとして活動することが出来るはずだ。

「代理、ですか？」

「紫様御本人が騒ぎの場に姿を見せていまして手が離せぬと、それだけの事ですよ。紫様は異変の最中におられますので」

「では前回に続いて妖怪が異変の解決に動いていると。月の異変から連続となりますと、何かルールの改定でもされましたか？」

頭を傾げ、問いかけるアイギス。

紫が認めて巫女の敷いた命名決闘法案には妖怪が騒ぎを起こし人が解決するものと記載されている。けれど前回に続き今回も妖怪、それも八雲紫自身が動いている事が約束に煩い者として引つかかったようだ。

あのルールは紅魔館が広め冥界の姫が更に流行らせた、その結果幻想郷で人妖が争うルールとして正しく広まり、終わりのない夜が続く異変でも破られはしなかった。元凶こそ紫に知られぬまま過ごしていた者達ではあったが、舞台となった竹林自体は以前より存在していた者達ではあったが、舞台となった土地で根付き始めたルール自体は兎を通して知っていた、そうしてそれに則り異変で争った。騒ぎの渦中には



幻想郷の危機と受け止め特別ルールとして人妖交えての動きとなつてしまった紫達だったが、解決された今に思えば人と妖怪が組む異例こそ両者の間にある完全な実力差を否定するものとなり、互いに美しさと思念を競う事になったのだとも言えるのかもしれない。

「そういうわけでもありませんが……失礼、言葉が足りませんでしたね。異変とは言いましたが今回は宴に近い状態になっていまして。なに、寂しがりな元凶が連日酒宴を開き騒いでいるのですよ。その者と親しい関係にある紫様もその場に混ざっておりまして、今頃はその酒宴の為の酒を集めながら皆を誘い歩いておられるはずですよ」

返事を待つアイギスに藍からの回答が語られる。

紫は結構な人数に声を掛けた。

呼びつけておいて酒が足りなくなると格好がつかない。

だから藍が買物に出された。

少しだけ苦笑して語った藍の話を要約するところなる。話を聞くだけでは異変というよりも祭りに近い状態になっているようだが、話していた藍の顔には異変を危惧する素振りもなく、幻想郷の管理者が言う通り異変の形を借りた荒々しくも賑やかな催事程度と見られているのだろう。

「なるほど、その騒ぎで振る舞う酒の仕入れにいらしたわけか……異変も、首謀者はあの鬼で凝りもせずまた萃めていると、今回の流れはそうしたものですね」

「鼻の良さは健在ですね。はい、以前は地底の者を集めるだけでしたが今回は人妖怪関わらず集めている様子」

「二度目は正しい異変となりましたか、なんとなくですがあの鬼のらしさが感じられますね」

「嘘を嫌う鬼らしくない姑息な面も見られますがあれも正真正銘の鬼ですからね、素直な一面も持ち合わせているのですよ」

手段が気に入らず一度は争った相手だが喧嘩の場では良き手合いとなってくれた。

その部分では伊吹萃香に感謝している黒羊、今は素直に褒めていく。

「でしようね、あの種族の拳は愚かなほどに真つ直ぐで好ましく感じられますれば。しかしあの紫様が遊びの場に混ざるとは珍しい事もあるものだ……何か狙いが？」

「さて、そこは分かりかねます、知つての通り思慮深い御方なものですから」

私では読み切れない、そう言いたげな藍だけれど言わないのは慕つてやまない主人だから。

事実藍は何も聞かされていない、紫が語る状況や溢す土産話からある程度察することは出来てそこを元手に話すこともあるにはあるが、紫の考える先と藍の考える先が100%重なる事はほとんどないと言つていい。常に数歩先を歩かれて先で振り向き微笑んでいる主、それを追いかけていくのが藍の現状だ。但し主の方はゆくゆくはそうなつてほしいと考えている節もあり、いつだったかインタビューしてきた天狗に対していかに藍を愛しているか目をかけているかを話していた事もあるくらいだ……残念ながらその天狗記者は愛のある教育の為の鞭ではなくただの折檻、動物虐待としか記載しなかつたようで、その記事を鵜呑みにする輩も少なくはないが。

話が逸れたので戻そう、折檻の被害者からの物言いを少し考えた後でアイギスが領き、それを切つ掛けに話も進んでいくようだ。

「前回の異変では少々危うい状況になりましたので、ただ集まつて騒ぐだけの今回は良い息抜きになると仰られておりますね」

「であればなにより。やたらに永く感じたあの夜は私も楽しむ事が出来ました、西行寺様やレミリア御嬢様と争い、ましてや討たれるなどとは考えておりませんでしたがね……しかしそのおかげでお嬢様や妖夢殿の成長を感じ取れるいい夜にもなりました」

「憎からず思う者達に滅ぼされて尚楽しかったと言われるか。やはり貴女も読みにくいな」

「何方と比べられているのかは問いませんが私は単純ですよ？ 幼き頃より見守ってきた子の成長を目で見体感出来るなど滅多になきこと。いつまでも子供だと思つていた者達に抜かれ、越されていく瞬間を味わうのも存外に楽しいものです」

沈まない月が登り続けたあの夜、永夜異変と呼ばれるようになったあの頃を思い出すアイギス、さも楽しかったお戯れを語るかのよう叙述べ、その目になにかの気持ちをかめる。

「それは…そうですね、あの子も無事にやり遂げてくれましたし、わからなくもない」

わからなくもないでしょう？ そうした思いが籠もる視線をアイギスが投げかけると、藍も数拍置いた後で同意の返事をしてみせた。

藍と最後に交わした会話こそ交渉となってしまったがああ場での事は互いに納得済みだ、捕らえた者と預かっていた者、二人共に大事に想う者らは正しく人質の交換として纏まっていて、あれについてアイギスが蟠るなどはない。そうして藍も、結果はともかく経過としては子守りをする約束し橙の事を見てくれていたアイギスに対して憎むような感情はない、寧ろ読みにくい相手を信用しすぎた己に否があると思えるくらいで、溝となることもないようであった。

あの夜は参りました、少しだけ苦みの薫る表情で話し、橙についての礼も述べる藍。話題と共に頭を下げる側が変わると更に話が進んでいく。

「そのお嬢様ですが彼女にも鬼からの招待状が届いているようですよ、残念ながら楽しんでの参加となつてはいないようすがね」

頭は上げたが少しだけ目を伏せて、笑みに僅かな怪しさを含ませた藍が楽しめてはいないという吸血鬼の表情を皮肉るような顔をアイギスに見せつけ、その手を流す。形とした招待状などはない、萃香が能力を用いて萃めているだけなのだから当然だ。けれど藍は敢えて仕草をしてみせた。

蠟で封じられた手紙を開封するようにゆっくりと手元を動かして、大事な書状を開くが如き仕草を取りアイギスの興味を惹いてみせる。これから紫が誘いに向かう先がその屋敷だと知っていて、それに連なる命も課せられているから、ここぞとばかりに気を引いていく。

「何か懸念すべき事でも？…私が掘り起こした魔力は私の死と共に効力を失ったはず、であれば鬼を相手にしたパーティーでも遅れを取る事などないように考えられますが」

わざとらしい誘いにアイギスが乗り問うていく。

質問内容は現在のお嬢様について。

散り際には自我を取り戻していた黒羊、彼女が最後に見た光景は片膝立ちのレミアアの姿で、あの争いでレミアアの魔力は確かに掘り返されていった。アイギスの能力により真つ向から綺麗にくり抜かれて失いはしたがその効果はあの場でのことだけ、完全になかった事とされたソレはアイギスの消滅と共に効果がなくなったはずだった。

それでも後々まで引きずってしまったのはレミアアがそうと知らなかったから、それだけのはずであった。自身の力が戻っている事に気が付かないなどよほどの間抜けくらいと思えるが、あの晩から暫くの間レミアアは呆けていたし、己のことよりも考えるべきもの、考えなければならぬことと対面していた為致し方なかった。それに、永く過ごし共に見合ってきた相手、死ぬはずなどないと考えていたアイギスが眼前より消えていく光景はレミアアの中では月のそれよりも大きな異変となり、大きなショックでもあったのだ。

「今は魔力も戻っていますね、誘い自体には気乗りしているようで従えるメイドや幽々子様を相手にダンスも踊っています……リハビリに逸りすぎたのか、少々の疲れも伺えますがね」

「それは致し方ないのでしょね、あの鬼や西行寺様を相手に踊っておられるのでしょうか？」

「踊り疲れているわけでもなく……私が見る限りですが心を配る事に疲れている様子で、聞き及んでいる話であればお伝えするのも吝かではないのですが……」

話す最中に雰囲気は逆転していく二人。

穏やかに聞き入っていたアイギスは少しずつ苦々しく、けれど苦しさよりも何か別の物が混じった笑みに。藍は主と組んでからかつてくることが多い相手を逆にからかえることが喜ばしいような、そんな表情へと変わっていく。吝かではないから続く藍のお話、それは永遠に幼い赤い月よりも更に幼く部分的に赤くしてしまっている者が

、姿を消してしまった者を探そうと奮闘しているというお話であった。

## 第七十四話 ポジティブフェイス

無機質な明るさ湛える現世の灯りの下、語り合う狐と羊の化け物。彼女たちが話し込み、別れを迎えた頃、話題にされた相手の内の一人も同じく月下の中にいた。

自身の根城である真つ赤なお屋敷に似合う姿、白に近い淡いピンク色のドレスを鮮血で真つ赤に染めてしまった館の主は破れた被膜が目立つ翼を弱々しく羽ばたかせ、見上げる天の星に向かってやる瀬のない表情を見せているようだが……

「お戻りですか?」

何かを憂う顔付きの主にかかる声。

背後より届いたその声と不意に現れた誰かの気配を感じ取ったレミアがゆつくりと振り返る。

「一先ずは、な」

腕組みしたまま空を望んでいた主に話しかけたのは彼女に仕える忠実なメイド。

その手には紅い悪魔の二つ名通りになっている主人が召し替える為のドレスと月光を鈍く反射させる銀の懐中時計。この屋敷ではよく見られる立ち姿だが、太腿に備えているはずの銀のナイフの残弾は空っぽでヘッドドレスやエプロンの端にはなにかと争ったような千切れた形跡が見られる、仕える相手に見せるには少々乱れた出で立ちだ。

「もう一人の相手をしてもらったようだな……日に日に癩癩が酷くなってきた困ったものだ」

ふわり浮かんでくるりと回り、傍に控える咲夜に寄り添うとレミアアは鼻を鳴らす。

小さな鼻で嗅ぎ分けたのは主からの労いを受け頭を垂れて返す従者の衣服に残った少しの血の匂いと、派手に暴れ散らかした様が香る身内の魔力。夜空から舞い戻った主と同様に、迎えに出たこの従者も今の今までもう一人の主と戯れていたようで、二人の争う音響を遠くに聞いていたレミアは困りものだと弱々しい息を吐いた。

「そうですね。美鈴も日を追うにつれて遠くまで探しに出るようになつたみたいですし」

そんなレミリアに合わせるよう、昨夜も小さな咳払いをしてから返事を済ませる。

床を眺めて答えているが、望む先は自分がばら撒いたナイフが無数に突き刺さっているお屋敷の玄関とそこへ続く荒れたホールウェイだろうか。それとも玄関よりもずっと深く、ホールよりも手酷く散らかっている地下の部屋だろうか。

「今日の家出はこれにてお終いとしていただきたいですね」

「そうだな、可愛い妹に言うのは癪だがあまり暴れられてはそのうちに歯止めが利かなくなりそうで、そうなってしまったら……」

咲夜の手には余るだろうな、続いたメイドの語りにそう返すお嬢様。

明るい月夜に在るといふのにその声色は暗く、どこか疲弊しているようにも聞こえる。

胸を張る立ち姿はいつもと変わらない雰囲気だがその内側は人目を盗んでは抜け出して誰かを探しに出ようとする妹が心配でたまらず、そんな心を隠すために空気を回して、いつも以上に背を正しているようだ。

「怪しい素振りを見かけたらまたお願いするわ」

「言われずとも」

咲夜自身が時間稼ぎは得意だと自負しているくらいだ、この主命は問題なくこなせるはず、そんな思いを秘めた顔で頷き答えるメイド長。その返事から一呼吸おいて、顔を見上げてくるレミリアに向かつて瞬きと目配せまでを済ませる。そうしてレミリアがその視線を当然と受け入れて両腕を持ち上げると、待っていましたと始まるお召し替え。

「隠れ方が日に日に上手になってきて困りますわ……美鈴も今日のような月夜には本当に苦労しているみたいですし、見つけられないまま雨にでも降られたらどうしようかと気を揉んでいます」

「パチエの召喚が成功してくればこうならず済むのだから……」

苦い笑顔で話す門番を思い出しながらテキパキと着付けていくメイド、なされるがままの主。

用意された御召物は見慣れた物は替えがなくなったのか着ていたドレスとはちがう赤いドレス、肩や胸元が露出したものへと袖を通すレミリアが腰の飾りである大きなリボンを結ぼうと少し屈んでいる咲夜の頭の手をおいて呟く。

求める相手が姿を消してからほぼ毎日起きている吸血鬼姉妹の喧嘩、必ず連れ戻すから待てと言いつつ含める姉にくっつかかり力業で出かけようとする妹の派手な争いは求める相手がいなくなってしまうから起きるようになり、今では日課と呼んでいくくらい頻繁になってしまった。当初は姉の言うことを聞いておとなしくしていた妹ではあったが何度繰り返しても成功しないアイギスの召喚にしばれを切らしたのか、日を重ねる毎にその激しさを増している。

純粋な身体能力で押さえ込むレミリアや、依頼があれば屋敷の周囲に雨を降らせるパチュリー、姉の隙を突いて飛び去るフランドールの背を追いかけどうにか説得して連れ帰ってくる美鈴の活躍により今はまだ目の届く範囲にしか出られていないフランドールであったが、行き先を定めずに飛んでいく彼女を追う美鈴はそれなりにこたえているらしく、毎日食事を届けてくれる咲夜に愚痴が混じったぼやきの一つや二つを吐くようになっていく。

「パチュリー様は努力されていますわ」

「知っているさ、パチエは私達のために色々試してくれているよ。最近では忍び込んだ鼠の相手もしてくれていると聞くと感謝しているわ」

賑やいでいる此度の宴を探る傍らで、アイギスの再召喚についても動き続けている魔女について語る主従。お互いに似た思いを含み語ってはいるけれど腑に落ちてはいない、なにか考えているようなそんな表情を月に見せつける彼女達。

「けれど、ね。こころも毎回進展がないと愚痴の一つも言いたくなるじゃない……気分転換のつもりでパーティーに招かれてもみただけど誰も会っていないというし……本当に、どこに行ってしまったの

か」

「ご本人には言わないでくださいね、また猫根性を叩き直すなんて言われたくはありませんし」

着替えの終わりを皮切りに再度始まる主従の会話。

整えられた新たな出で立ちでパーティーの主役にも成り得るレミアがどこに行つてしまったのかと落胆混じりの息を吐くと、側に控える咲夜もソレに合わせ、ひそめた声でポツリ呟いた。

気がつくと誰ともなく集まってそこに違和感も感じないままに酒を飲み語らう。

その日で変わる顔もあれば新たに増える顔もある、それでも気にせず皆で酒盛り。

数日前から賑わいでいる此度の異変を一言で済ませるならばこうなるが、中には小さな違和感に気がついてこの騒ぎは異変だと、何かがおかしいと行動を起こす者達もいる。この屋敷の主やメイドもその気がついた者達に含まれていて、何かと忙しい合間を縫い異変の元凶を探していたりする……のだが、そうした動きは他の者の中にもあり、例えば仕える主にそのかさかれてこの異変に対面した庭師は向かう先で出会う相手と少々語らい、もとい斬つてわかろうと考えアチラコチラで辻斬り騒ぎを起こしているし、半人半霊に斬りかかられた紅白の異変解決者も既に神社を経ち魔法の森を中心に犯人探しを始めていて、その森に住んでいる別の人間も同じタイミングで動き始めていたようだが……

「異変の調査を御題目にあの黒白鼠がまた盗みに来ているなんてきくけど、その言いつぷりでは退治できてはいないようね」

「お恥ずかしながら逃げ足が早くて。でも盗難被害は出ておりません、散らかつて困るといってお叱りは受けておりますけど」

「屋敷だけでなく図書館まで掃除するようになったのか、うちのメイドは優秀だな」

「茶化さないでください……どこか別の場所で過ごされているというのがパチュリー様の見解ですが、心当たりは？」

「あつたら既に顔を出してるわ……別の場所ね、冥界や幻想郷で見か



けたという話も聞かないし、そろそろ地底にも足を運んでみるべきか」

「地底、アイギス様のお住まいがあるという地ですね。大丈夫なんでしょうか、地上と地底には取り決めがあるようですが」

「互いに干渉しないんだったか。なに、友人に会いに行くだけで不可侵云々騒ぐようなら纏めて相手をしてやるだけだ」

物言いに似合うよう大袈裟に羽ばたくレミリアの翼。

バサリと夜風をなびかせると、傍で佇む咲夜の髪が揺れた。

「ではその時には妹様の手を引いて向かわれるのがよろしいと思いますわ」

「それもいいのかもしれないな」

揺れるお下げを抑えた返事に対しレミリアが言い切る。

その気があるのかどうかは別として、はつきりと。

流れに任せて言い返しただけに見えるがそうではない、以前のレミリアであればこの場のお話だけで済ませて変わらず一人で行動していただろう、だが今はそうではなかった。

「……そうする前に見つけてみせるさ」

隣のメイドにも聞き取れないほどの小さな声は大きな決意だった。

泣き腫らして眠る妹の為の呟き、考えなしに飛び出してしまう妹の為の決意。

だが、それは誰に聞かれることもないまま夜空の闇に吸われて消えた。

そうして静かな決意を新たにしたレミリアが頷くと、咲夜も同様にコクリ、頷く。

「しかしあのパチエが出掛けるなんて言い出すとはな」

「やんごとなき気晴らしの用事で出かける事にしたから留守を頼むなどとも言われておりますし、なにかお考えがあつてのことでしょうね」

話し合いながら揃って小さな溜息まで吐く二人。

先程から落胆の息に忙しいのは二人共忙しさにかまけて色々と疎かにしてしまう自分が少しだけ嫌になっているからだろう、レミリアは主催の見えない宴に繰り出し出会う相手と争いながら求める相手

の影を追っているが成果はなく、咲夜は咲夜で独自に異変の調べ物をしながら毎日の喧嘩の始末もしている、お互いゆつくりと体を休める時間がない状況にあり、愚痴や溜息が重なっても致し方ない。

「お嬢様、パチュリー様に負担をかけ続けては——」

「言われずともわかつているさ……この異変についてかアイギスについてか、それとも両方についてか。私にはわからないけれど、出かけるというならパチエに任せただけよ」

咲夜の物言いに被せるレミリアがいつの間にか現していた手元の天球儀、運命を映すというソレを眺めて語る。今しがた帰ってきたばかりのレミリアだが、乱れた衣服を整えながら主命を済ませると再度外出するようだ。彼女も彼女なりにアイギスの足取りを追うために出ているようだったが、これからの外出は黒羊に関わるものではなく自身のプライドに係る物事である。

これから向かうのは受け取るだけになっている生意気な招待状の差出人のもと。今までは怪しいところを虱潰しに飛び回っていたレミリアではあるが、一度出向いた冥界よみで聞いた話を基としてまた出掛ける算段らしい。

余興には飽いた。

だからもう終わりにする。

余計なことを気にせず妹のことに注目できるようにしたい。

妹思いな姉としての考えがそれである。

そして、屋敷の魔女のほうも鼠を狩る猫であるべきな咲夜に少しの八つ当たりをするくらいには煮え切らない様子だが、結った金髪を揺らす黒白の盗人、図書館の書物をどうにか盗み、出来るならば図書館の主の魔法すら盗んでやろうと画策しているツートンカラーの魔法使いマジシャンを追い出しながらの研究に限界を迎えてしまったらしく、内に籠もって進展しないならたまには外に出てみようという考えでいるようだ。

探されている黒羊本人は比較的ゆるりと、食事やその他に困っているがそれなりにまったり過ごしているというのに探す側は忙しいとは、まるで迷い子のソレそのままである。

「さて、私もまた出掛けてくる。遅くなるつもりはないがフランになにかあったら、その時はまたお願いするわ」

「畏まりました、次はどちらへ？」

「ちよつと博麗神社まで、得体の知れない奴に会いにね」

「それは、あの胡散臭い妖怪に会いに？」

「半分はね、冥界の幽霊は何かに気がついていない様子だったし、あれと仲の良い八雲紫がこの異変を起こした可能性もなくはないと思うが……なんにせよ招待されるだけでも飽きたし今度は私から出向いてみるのよ。あまり遅くなるつもりもないからいつでもお茶を楽しめるように支度は済ませておいて、カップは四つでいい」

「畏まりました、お戻りに合わせてご用意致しますわ」

一つは屋敷の主、もう一つは大事な妹。

三つ目は出掛けるという主の友人。

そして四つ目は今はいないが連れてくる相手のもの。

そうした含みを持たせて紅魔の当主が宙に浮かぶ。

ばさりと開いた白い翼を一度二度、大袈裟にはためかせてすぐに飛び去っていったレミリア。彼女から生じた風圧に揺れるおさげを抑えて見送った咲夜も主の姿が闇夜に消えた後、大きな時計塔を一瞥し、時刻の確認を済ませてから音もなく姿を消していった。

く少女移動中く

夜に生きる者達が忙しく生きる夜。

消えてしまった者を求め、自ら彷徨い歩こうとする妹に振り回されて特に忙しいのが紅魔館であり、その地下に広がる大図書館も忙しい様子だ。メイドの能力により際限なく広がっていく書の空間を掃除する為に上下左右と動き回っている妖精メイドも忙しいが、近頃はそれ以上に慌ただしく過ごす者がいて、彼女は今大きな書簡の前にはいた。

何冊も重なった書籍を両手で抱え、やる気のない表情で棚のあちらこちらへしまっていく彼女。

屋敷の引越騒ぎで起こした不手際の罰として幻想郷の管理人から外出禁止を言い渡された悪魔は今日も変わらず暇と本を重ね続

けていて、秘書に近い見た目とは真逆な態度で過ごしていた。

「嫌な予感がしますねえ」

ピクリ、頭部から生やす羽を揺らして独り言。

それからほぼ止まっていた作業の手を完全に止めて、小悪魔がある一点を注視する。

見つめるは大図書館の床、その下より流れ出てくる大きな魔力。再度の家出のためその力を抑えに抑えた吸血鬼から漏れ出す魔の波動を小悪魔は感じとっていた。

「パチュリーは……いないの？」

小悪魔の視界にひよこつと出てきた幼子の頭、その口が僅かに開き思ったままを声にした。

自室へと続く下り階段から顔だけを覗かせて辺りを見回すのはフランドール、いつもいつも邪魔してくる面倒な姉の魔力が高く遠い天井の更の上、紅魔の屋上から離れたことに気がつくのと近くの本棚まで移動し、身を隠して周到に周囲を伺う。

「ここにいないなんて珍しいけど、チャンスね」

彼女もひっそり呟いて進んでいく。

満月までもう間もなく、そのせいで意識せずとも膨れ上がってしまうその力を飲み込むように口を嚙んで本棚の合間を行くが、並ぶ棚をいくつか過ぎたタイミングで近くにいた誰かさんと視線が重なってしまった。

「あっー」

思わず声を上げてしまったフランドールが一足跳びで駆ける、瞬間に詰まる間合い。

「ん？ 妹様？ どうされたんですか？ そんな真剣な——」

とうに気づいていたはずだろうに、なに食わぬ顔で、今まさに気が付いたと話しかける小悪魔だったが、そんな声はフランドールに届かず。勢いに任せて飛び掛かった妹はその手で小悪魔の口を塞ぎ、勢いそのままに後ろへ押し倒した。頭から押さえ込まれて床に押しつけられた性悪悪魔からふぐうと一言、大した痛みなどないのにわざとらしい声が聞こえる。

「……い、妹様、ちよつと……息が」

押し倒された小悪魔がなにか言っているがフランドールはそんなことを気にしない、今気にするべきは他にあるからだ。注意すべきは己のお出かけを毎度邪魔してくる者、少し前に争い返されたメイド長か、毎回毎回水の結界でもって行動を封じてくるパチュリーか、明確な相手はともかくとして、浅い演技が見え見えな小悪魔の声は届かなかった。

「静かにして、じゃないとまた見つかつちゃう」

口を塞ぐ手の力が強まる。

どんなことも関係ない知らない。

そう言わんばかりにフランドールが力を込める、その膂力は小悪魔の顔面を握り潰して物理的に静められそうなのだが、締め上げられる襟元が意識を落とすきる前に小悪魔がむりくり払うと、どうにかその手を除けることができたようだ。

「そ、そんなに慌てないで……心配されなくたって大丈夫ですよ妹様、私は騒ぎません。勿論告げ口したりもしませんよ」

強引に取り払われ仰け反ったフランドールへ手を伸ばし、自身の腹にその体を押し付ける司書。強かに抱きしめる形になるとそのまま、慈愛を感じる声色で語りかける。

「……本当?」

「本当ですとも!!」

パチュリーがいたら一緒にあって邪魔してくるのに、留守を任されている咲夜や監視の目だけは厳しい美鈴ならばここはどうにかしてでも私を止めてくるのにと、予想していなかった優しい振る舞いに毒気を抜かれたのか、きよとんとした顔でフランドールが問い掛けたるも、本当です! と、ゆっくりだが小悪魔は力強く応じた。

「信じて……いいの?」

言葉だけ、態度だけでは疑惑の影を拭いきれないフランドールが再度問いかける。

家族の目を欺く為に先んじて外へ飛ばした己の分身は一人目はレミリアに撃墜されて怒り、もう一人は咲夜の銀のナイフで貫かれて泣

いた。残る三人目の分身はナイフの回収に忙しい咲夜の邪魔をしなから門を抜け、美鈴との追いかけてっことを楽しんでいるはず。

そして、そのような争いの音はこの大図書館にも響いていたはずで、今回も当然邪魔してくるはず、どうせ邪魔になるのなら先に私から仕掛けて潰してしまおう、苦手な水流をけしかけてくるパチュリーがいないうちに。そんな自身の案に乗り強気でしかけたのだ、おいそれと逃がすことは出来ないはず、そのはずだったが……フランドールは素直に小悪魔の言葉を聞き入れた。

「……痛くしちゃってごめんね？」

「いいんです、いいんですよ妹様」

抱かれ、髪を撫でられて。宥められた子猫のように一転して落ち着く悪魔の妹。

小悪魔にこうまで素直な姿を晒すのは、荒々しい感情はレミリアに潰され、破壊を楽しむ心は今美鈴の元にいる事と、手出しはしないと切り切る小悪魔の姿勢を信じたからだろう。

現していたやる気は削がれ、見た目相応の顔に戻ったフランドールは小悪魔に体を預けた。

「でも黙って逃しちゃうとお姉様にも怒られちゃうよ？」

「怒られても構いませんよ、レミリアお嬢様のやり方には私もね……少しだけ思うところがあつたりしますし」

平静を取り戻しゆっくりとした口調で語る幼子と、その頬に手を添える侍女。

そうやって視線を合わせ、年の離れた姉が妹を見るような形で口にするのは性悪女の狡い思惑。

「レミリアお嬢様やパチュリー様が頑張っているのは私も知ってますけどね、いつも妹様だけ蚊帳の外でお話が進んでしまうのはちよつと、面白くないですよね。お二人とも妹様の為にアイツを呼び戻そうとしているのはわかるんです、わかるんですけどね……もう少しお話に混ぜてあげてもって思うことがあるんですよ。仮に話し合いが無理だとしてもお嬢様達のお手伝いを妹様にしてもらおうっていうのもアリなんじゃないかなって思うこともあつて……だって一番に会

いたいって思ってるのはきつと妹様なんだと思うんですよ、だから私は妹様の事を応援したいんです」

抑揚は抑えめだが力強い、そんな口調でとうとうと語る小悪魔にフランドールはただ頷く。姉やその友人は私を思つて色々と考えて試してくれている、そのくらいのはことはフランドールも理解してしばらくは任せるだけでもいられた。だが何の進展もないままに月日が過ぎていくときすがに考えも変わり、お姉様達だけでどうもできないなら私もなにか、あの二人ではできないことしないようなことを探して試してみようというのが最近の家出騒ぎの発端である。

レミリア達にしてみれば我慢の限界を迎えて飛び出しているとか見られないのかもしれないが、今までにもそれなりの我慢に耐えて暮らしてきたフランドールの籬たがはこの程度で外れなくなっている……はずであるが、あちらこちら東へ西へ奔走している姉にはそのままで話し合う時間も、理解する余裕もなく、皆の目を盗んで抜け出そうとする妹を止めるだけで手一杯となっている。

互いに相手を思う心があるのならもう少し言葉を重ねてもと考えられなくもないが、そういつた触れ合い方、強引に引き止めて制する触れ合い方で数百年を過ごしてきた姉妹には歩み寄ることに相応の時間が必要なようだ。

「それにですよ、アイギス嫌味な羊だつて妹様が頑張つたつてわかれば喜ぶはずです」

「そう!? そう思う!?!」

「勿論ですとも……あの女とは私も長い付き合いになりますけど、アイツが誰かを大事だなんて言ったの一度だつて聞いたことなかったくらいなんですからね」

両手でフランドールの頬を抑え、視線を重ねてニコリ。

言い切つた小悪魔が優しい笑顔を浮かべると、負けなくらいにフランドールの顔も輝いた。

ついさつきまでは邪魔者だった相手が実は自分の味方でした、そう言われて素直に頷く者は少ないと思われるが求める話し相手は求める者と同じ種族・今は肉体もアイギスの角を媒介としているから余計

に似通って見えてしまうのだろう、そんな者に応援しているとまで言われれば子供は悩むことなく喜ぶもので、重ねて言えばここにいるフランドールは先に敗れた『怒り』や『悲しみ』といった感情は鳴りを潜めている状態であり『喜ばしい』気持ちが強くと出ているのだ、コロツと騙されてしまったも仕方なかった。

対して笑顔を崩さない小悪魔は、さも解っています私は貴女の味方なんですと言う素振りです話しかけていて、そこにはあからさまな怪しさすら感じられるがそれもそのはずだ、言うだけ言った言葉の大半はその場しのぎなのだから。

頻繁に出かけるレミリアは帰宅する度に屋敷で起きた出来事を耳に入れて、今日もフランドールが家出を試みて阻止されたことを聞き入れ考えの内に入れている、だが異変に誘われて忙しく過ごしている彼女は聞くだけ、ただ「それだけ」で終わってしまうことが多いのだ。

近頃ではなにか事が起きた際には姉妹で顔を合わせ、姉が妹を嗜める、宥める姿も見られるようになってきたのだがそれは妹が落ち着いた後の出来事で、暴れまわっている妹を追いかけて抑えたり散らかってしまった屋敷や図書館内を掃除してまわるのはあのメイド長やこの司書の役割となっている、それが小悪魔の不満なのだった。

咲夜にしてみれば、フランドールが荒れて屋敷が散らかったとしてもいつもの仕事が増えた程度で時を止めて作業することに変わりもなく、追加の家事が増えただけ、手間はかかるが文句を言うくらいで済んでいる。しかし小悪魔からすれば随分と勝手が変わってしまう。仕える魔女があれこれ没頭しているおかげで普段は遠巻きに覗いてはちよつかいを出す程度で済んでいる盗人の相手も自分がさせられ、そのうえ外に出たい次女の相手もしなければならぬ状況に陥っていて、書庫の侍女一人では最早手が足りないといった状態なのだ。

いつでも手抜きがしたい楽をしたいと考えてばかりのこの悪魔司書にしてみれば、相対すれば確実に怪我をするとわかっていながらフランドールの相手をしなければならぬ事態は間違いない彼女の不平不満となるのだろう。



「そもそもですよ、私は妹様の味方なんです」

そこまで言って小悪魔が黙る、優しい笑みはそのまま。

頬に添えていた手を自身の口元に寄せる小悪魔、そっと立てた人差し指にフランドールが目線をとられると今日一番の笑顔を浮かべてみせた。

「今まではパチュリー様に言われて仕方なく引き止めていました。でもそのパチュリー様もお出かけされてますし、私には本の整理しか命じていかなかったので他を見逃すこともできちゃうんですよ」

一瞬の間を置いてから、立てていた人差し指を己の唇からフランドールの唇へ、静かに動かし触れさせる。

だから内緒なんです、そう言いたい、見せたい素振りと言口の小悪魔。その発言に向かってフランドールが何かを言おうとするが添えられた指に邪魔をされ思うように発言できなかった：：それから数秒後だろうか、緩い動きで小悪魔のが動きフランドールの脇へ、そのまま幼子を立ち上がらせた。

「……だから妹様のことはこのまま黙って見送っちゃうつもりです」

穏やかさの後ろに隠した『見て見ぬ振りをするから私のことも見逃せ・早く出ていってくれ』という下種な思いは表さぬまま、小悪魔が同意を求めるように首を傾げてフランドールの動きを待つと、それに呼応するように支えられていた幼子晴れ晴れした顔を持ち上げた。

「……もしも怒られちゃったら言ってるね」

私が仕返ししてあげるから！

フランドールの高い声が書庫内に響き渡り、同時に七色の輝きが遠い天井に向かって伸びた。

向かう先は屋敷の外。

行き先の見当などわからないがそれでも外へ。姉が心に決めた決意など知らぬ妹は、無事に送り出すことに成功した小悪魔の含み笑いを背に受けながら、七色の羽を輝かせて飛び出した。